茨城県岩間町

島屋敷遺跡

SHIMAYASHIKI SITE

浄化センター建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

島屋敷遺跡発掘調査会
岩間町教育委員会

題　字　千 種　重 樹　（茨城県埋蔵文化財指導員・調査団長）

茨城県岩間町

島屋敷遺跡

原色図版第一

島屋敷遺跡出土遺物

原色図版第二

島屋敷遺跡出土遺物

原色図版第三

島屋敷遺跡出土遺物

序　　文

本町では現在，21世紀初頭を目標とした「第４次岩間町総合計画」に基づき，テーマを「緑と活力の共生するまち　岩間」と定め、快適で安全な，住みよさの実感できるまちをめざして各種事業を展開しています。

中でも、重点施策として水質保全と生活環境の改善に向けて公共下水道事業を継続的に進めていますが，この度，浄化センターの建設予定地内に周知遺跡（島屋敷遺跡）が存在することから，その造成工事前に遺跡の発掘調査を実施し，記録保存を図ることになりました。

調査は「島屋敷遺跡発掘調査会」に委託し，平成９年４月から５ヵ月にわたり作業が進められ，その結果，古き時代の生活を彷彿させる幾多の遺構や遺物が発見され，ここに，その成果をまとめた報告書を発刊できますことは，喜ばしい限りです。

また，私たちの祖先が残してくれた貴重な埋蔵文化財を目の当たりに見た時，郷土の歴史の一端を解明し，よりよき未来を創造するためにも，古代からのメッセージを正しく受けとめ，後世に永く保存し活用していく必要性と責務を痛感するものであります。

最後に，発掘調査及び報告書作成にあたり，調査団長としてのご尽力，ご指導をいただきました千種重樹先生をはじめ，調査員，作業員の皆様のご労苦に対し深く感謝申し上げます。

平成10年６月

岩間町長　柴　山　　弘

発刊によせて

西に愛宕・難台，北に館岸の山々を望み，古い歴史と伝統をもつ私たちの町，岩間町には数多くの遺跡や古墳が存在しています。

これは古くからの人々が居住していた証であり，これらの遺跡や古墳は歴史・文化等の学術研究の貴重な資料であり後世に伝えるため岩間町は埋蔵文化財に指定して長く保存してきました。

しかし，時代の進展に伴い町も都市化が進み文化的な生活が求められている現在，埋蔵文化財の一ヵ所である土師地内の「島屋敷」に町の開発事業の一事業として公共下水道浄化センターを建設することになりました。

そのため，町教育委員会は遺跡の重要性を考え，文化財保護法の規則に従い地権者の協力をいただき，平成８年度に試掘調査を行った結果，古代の遺構及び遺物を確認いたしました。

平成９年４月に「島屋敷遺跡発掘調査会」を発足し，８月までの５か月をかけて14,000㎡の面積を本格的に発掘調査を行いましてこの度，「島屋敷遺跡調査報告書」ができ上がりました。今回の発掘調査では古墳時代から中世期時代にかけての集落跡である竪穴住居跡や地下式遺構，食糧を貯蔵したと推察できる土壙などの遺構が多数検出されたほか，遺物では甕形土器，壺形土器，坏形土器や土師器片など数多く出土いたしました。

この発掘によって貴重な遺構や遺物が多数出土しましたことは岩間町の歴史に新たな一ページを加えることとなり，古代歴史解明に大きな前進であると確信いたします。

また，この調査により文化財に対する認識が一層深まり郷土を愛する心を培う上で貴重な資料になると思います。

今後は，今回の調査で発掘された貴重な遺物等については出来るだけ復元し公民館等に展示し，後世に伝承するとともに文化の高い町づくりを進めていきたいと願うものです。

最後になりましたが今回の発掘調査及び整理にあたって，茨城県教育庁文化課及び水戸教育事務所の御指導と発掘調査から報告書作成にあたられた主任調査員の千種重樹先生をはじめ調査員の方々又，真摯に積極的に作業に従事された方々，そして御協力をいただきました関係各位に対しまして心から感謝申し上げます。

平成10年６月

岩間町教育委員会教育長　小松﨑　道　雄

例　　言

1　本書は，茨城県西茨城郡岩間町大字土師字沼具弥141外に所在する島屋敷遺跡の記録保存のための埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，岩間町公共下水道浄化センター建設に伴うものである。

3　発掘調査は，平成９年４月11日より平成９年８月29日まで行った。

4　発掘調査の対象面積は，開発予定面積約40000㎡のうち，緑地帯および農道を除く約14000㎡である。

5　発掘調査は，千種重樹（茨城県埋蔵文化財指導員）を担当者とし，調査員に水谷正・飯島栄子を加え，地元作業員25名の協力を受けて実施した。

6　発掘調査は，可能なかぎり原位置法を採用した。

7　本書に収録した遺構・遺物の写真は，千種重樹が撮影したものを使用した。

8　遺物の整理および報告書の作成作業は，調査終了後より平成10年５月29日まで行った。

9　整理作業は，主として下記の分担で行った。

千種　重樹　　遺構図整理，土器・石器実測図トレース，写真図版作成，土器接合復元，本文執筆，総合レイアウト.

水谷　　正　　接合資料抽出，土器接合復元.

飯島　栄子　　土器拓影図，土器・石器実測図.

田村みどり　　遺構図およびその他の図面のトレース，記号・番号の貼付，完成図面の縮尺割付，レイアウト.

10　出土遺物は岩間町教育委員会が一括保管している。

実　測　図　凡　例

1　出土遺物の種類は次の記号で区別した。

◉　縄文土器　　○　須恵器　　●　土師器・土製品　△　石器・石製品　▲　自然石　□　鉄製品

2　遺物実測図の断面を二重線にしたのは土師器・土師質土器，墨で塗りつぶしたのは須恵器をあらわし，内黒土器の断面には網点を施した。

本　文　目　次

原色図版
序　　文　　岩　間　町　長　　柴　山　　弘
発刊に寄せて　　岩間町教育委員会教育長　　小松﨑　道　雄
例　　言
本文目次
挿図目次
表 目 次
図版目次
第 一 章　遺跡の位置と自然環境……1
第 二 章　歴史的環境……3
第 三 章　発掘調査にいたる経緯……5
第 四 章　調査の概要……6
第 五 章　竪穴住居址の調査……15
　　第一号住居址～第五一号住居址
第 六 章　竪穴状遺構の調査……146
　　第一号竪穴状遺構～第一〇〇号竪穴状遺構
第 七 章　土壙の調査……173
第 八 章　土壙墓の調査……193
　　第一号土壙墓～第一二号土壙墓
第 九 章　地下式殯穸壙の調査……197
　　第一号殯穸壙～第五号殯穸壙
第一〇章　井戸址の調査……202
　　第一号井戸址～第二三号井戸址
第一一章　掘立柱建物遺構の調査……217
第一二章　溝状遺構の調査……218
　　第一号溝状遺構～第一四号溝状遺構
第一三章　ま　と　め……228
島屋敷遺跡発掘調査会役員名簿・発掘調査作業従事者・整理並に報告書作成従事者・謝辞……230
島屋敷遺跡発掘調査参加感想文……231

挿　図　目　次

第　一　図　遺跡位置図，周辺遺跡分布図……2
第　二　図　発掘調査区設定図……7～8
第　三　図　第一調査区遺構分布図……9～10
第　四　図　第二調査区遺構分布図……11～12
第　五　図　第三(上段)，第四(中段)，第五(下段)調査区遺構分布図……13～14
第　六　図　第一号住居址実測図，遺物出土状態図……16
第　七　図　第一号住居址カマド実測図……17
第　八　図　第二号(上)，第三号(下)，第四号(中)住居址実測図，遺物出土状態図……19
第　九　図　第二号住居址カマド実測図……20
第一〇図　第五号住居址実測図，遺物出土状態図……22
第一一図　第五号住居址カマド実測図……23
第一二図　第六号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……25
第一三図　第七号住居址実測図，遺物出土状態図……27
第一四図　第一・二・五・六・七号住居址出土遺物実測図……28
第一五図　第八号住居址実測図，遺物出土状態図……30
第一六図　第八号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……31
第一七図　第八号住居址柱穴半截発掘断面図……32
第一八図　第九号住居址実測図，遺物出土状態図……33
第一九図　第九号住居址カマド実測図……34
第二〇図　第七・八・九号住居址出土遺物実測図……35
第二一図　第一〇号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……37
第二二図　第一〇号住居址出土遺物実測図(一)……38
第二三図　第一〇号住居址出土遺物実測図(二)・第一二号住居址出土遺物実測図(下段)……39
第二四図　第一一号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……41
第二五図　第一一号住居址出土遺物実測図……42
第二六図　第一二号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……44
第二七図　第一三号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……46
第二八図　第一四号住居址実測図，遺物出土状態図……47
第二九図　第一二号(上段)，第一三号（中段)，第一四号（下段）住居址出土遺物実測図……48
第三〇図　第一五号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……50
第三一図　第一六号住居址実測図，遺物出土状態図……51
第三二図　第一六号住居址出土遺物実測図……53
第三三図　第一七号住居址実測図，遺物出土状態図……53
第三四図　第一七号住居址カマド実測図……54
第三五図　第一八号住居址実測図，遺物出土状態図……56
第三六図　第一八号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……57

第三七図　第一五・一六・一七・一八号住居址出土遺物実測図……59
第三八図　第一九号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……60
第三九図　第一九号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……61
第四〇図　第二〇号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……63
第四一図　第一九号(上段)，第二〇号(下段)住居址出土遺物実測図……64
第四二図　第二一号住居址実測図，遺物出土状態図……65
第四三図　第二一号住居址炉址実測図……66
第四四図　第二三号住居址実測図，遺物出土状態図……67
第四五図　第二三号住居址カマド実測図……68
第四六図　第二四号住居址実測図，遺物出土状態図……70
第四七図　第二四号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……71
第四八図　第二五号住居址実測図，遺物出土状態図……73
第四九図　第二七号住居址実測図，遺物出土状態図……74
第五〇図　第二七号住居址カマド実測図……75
第五一図　第二七号住居址出土遺物実測図……77
第五二図　第二八号住居址実測図，遺物出土状態図……78
第五三図　第二九号住居址実測図，遺物出土状態図……79
第五四図　第三一号住居址実測図，遺物出土状態図……81
第五五図　第三一号住居址カマド実測図……82
第五六図　第三二号住居址実測図，遺物出土状態図……83
第五七図　第三二号住居址カマド実測図……84
第五八図　第三三号住居址実測図，遺物出土状態図……86
第五九図　第三四号住居址実測図，遺物出土状態図……88
第六〇図　第三四号住居址出土遺物実測図……90
第六一図　第三五号住居址実測図，遺物出土状態図……91
第六二図　第三六号住居址実測図，遺物出土状態図……92
第六三図　第三六号住居址カマド実測図……94
第六四図　第三七号住居址実測図，遺物出土状態図……95
第六五図　第三七号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……96
第六六図　第三八号住居址実測図，遺物出土状態図……97
第六七図　第三九号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……98
第六八図　第四一号住居址実測図，遺物出土状態図……99
第六九図　第四三号住居址実測図，遺物出土状態図……101
第七〇図　第四三号住居址カマド実測図……102
第七一図　第四四号住居址実測図，遺物出土状態図……103
第七二図　第四四号住居址カマド実測図……104
第七三図　第四六号（左），第四七号（右）住居址実測図，遺物出土状態図……106
第七四図　第四八号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……107

第七五図　第四八号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……108
第七六図　第四八号住居址出土遺物実測図……109
第七七図　第四九号住居址実測図，遺物出土状態図……110
第七八図　第四九号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……112
第七九図　第四九号住居址出土遺物実測図……113
第八〇図　第五〇号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……114
第八一図　第五〇号住居址付属土壙実測図，遺物出土状態図……115
第八二図　第五〇号住居址カマド実測図……116
第八二図　第五〇号住居址出土遺物実測図（一）……117
第八三図　第五〇号住居址出土遺物実測図（二）……118
第八四図　第五一号住居址実測図，遺物出土状態図……120
第八五図　第二二号住居址実測図，遺物出土状態図……123
第八六図　第二二号住居址第一号カマド実測図……124
第八七図　第二二号住居址第二号カマド実測図，遺物出土状態図……125
第八八図　第二六号住居址実測図，遺物出土状態図……126
第八九図　第二六号住居址カマド実測図……127
第九〇図　第二二・二三・二四・二五・二六号住居址出土遺物実測図……128
第九一図　第二九・三〇・三一・三二・三三号住居址出土遺物実測図……130
第九二図　第三〇号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図……131
第九三図　第三〇号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……132
第九四図　第四〇号住居址実測図，遺物出土状態図……134
第九五図　第四〇号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……135
第九六図　第三五・三六・三七・三九・四〇号住居址出土遺物実測図……137
第九七図　第四二号住居址実測図，遺物出土状態図……138
第九八図　第四二号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……139
第九九図　第四五号住居址実測図，遺物出土状態図……141
第一〇〇図　第四五号住居址カマド実測図，遺物出土状態図……142
第一〇一図　第四〇・四二・四三・四五・四六号住居址出土遺物実測図……143
第一〇二図　出土遺物実測図（補遺１）第二〇・二四・二七・三一・三四号住居址……144
第一〇三図　出土遺物実測図（補遺２）第二二・四八・四九号住居址……145
第一〇四図　第一・二・三・四・五号竪穴状遺構実測図……152
第一〇五図　第六・七・八・九・一〇号竪穴状遺構実測図……153
第一〇六図　第一一・一二・一三・一四・一五号竪穴状遺構実測図……154
第一〇七図　第一六・一七・一八・一九号竪穴状遺構実測図……155
第一〇八図　第二〇・二一・二二・二三・二四号竪穴状遺構実測図……156
第一〇九図　第二五・二六・二七・二八・二九・三〇・三一・三二号竪穴状遺構実測図……157
第一一〇図　第三三・三四・三五・三六・三七・三八・四〇号竪穴状遺構実測図……158
第一一一図　第三九・四一・四二号竪穴状遺構実測図……159

第一一二図　第四三・四四・四五・四六・四七・四八・四九号竪穴状遺構実測図……160
第一一三図　第五〇・五一号竪穴状遺構実測図……161
第一一四図　第五二・五三・五四・五五・五七・五八・五九号竪穴状遺構実測図……162
第一一五図　第五六・六〇・六一・六二・六三・六四号竪穴状遺構実測図……163
第一一六図　第六五・六六・六七・六八・六九号竪穴状遺構実測図……164
第一一七図　第七〇・七一・七二・七三・七四・七六号竪穴状遺構実測図……165
第一一八図　第七五・七七・七八・七九・八〇・八一・八二号竪穴状遺構実測図……166
第一一九図　第八五・八七・八八・九〇・九一・九二・九三号竪穴状遺構実測図……167
第一二〇図　第九四・九五号竪穴状遺構実測図……168
第一二一図　第九六・九七・九八号竪穴状遺構実測図……169
第一二二図　第九五・九九号竪穴状遺構実測図……170
第一二三図　第一〇〇号竪穴状遺構実測図……171
第一二四図　竪穴状遺構出土遺物実測図……172
第一二五図　第二・三・四・五・六・七号土壙実測図……179
第一二六図　第八・九・一〇・一一・一二号土壙実測図……180
第一二七図　第一三・一四・一五・一六・一七・一八・一九・二〇号土壙実測図……181
第一二八図　第二一・二三・二四・二五・二六号土壙実測図……182
第一二九図　第二七～三九号土壙実測図……183
第一三〇図　第四〇・四一・四三・四四・四五・四六・四七・四八・四九・五〇号土壙実測図……184
第一三一図　第五一～五五号，第五八～六三号土壙実測図……185
第一三二図　第六四～七〇号土壙実測図……186
第一三三図　第七一～八二号，第八五号土壙実測図……187
第一三四図　第八六～九七号土壙実測図……188
第一三五図　第九九～一一三号土壙実測図……189
第一三六図　第一一四～一二四号土壙実測図……190
第一三七図　第一二五～一三六号土壙実測図……191
第一三八図　第一三七～一四三号土壙実測図……192
第一三九図　第一・二・三・四・五・六号土壙墓実測図……196
第一四〇図　第七・八・九・一〇・一一・一二号土壙墓実測図……1976
第一四一図　第一号地下式殯穿壙実測図，遺物出土状態図……198
第一四二図　第二号地下式殯穿壙実測図……199
第一四三図　第三号地下式殯穿壙実測図……200
第一四四図　第四号地下式殯穿壙実測図……201
第一四五図　第一号井戸址実測図……203
第一四六図　第一号井戸址出土遺物実測図……204
第一四七図　第三号（左上），第四号（右上），第五号（左下），第六号（右下）井戸址実測図……206
第一四八図　第七号（左上），第八号（右上），第九号（左下），第一〇号（右下）井戸址実測図……208
第一四九図　第一一号（右上），第一二号（下），第一三号（左上）井戸址実測図……210

第一五〇図　第一四号（上），第一五号（左下），第一六号（右下）井戸址実測図……212
第一五一図　第一七号（左上），第一八号（左下），第一九号（右上），第二〇号（右下）井戸址実測図……213
第一五二図　第二一号（左），第二二号（右）井戸址実測図……215
第一五三図　第二三号井戸址実測図……216
第一五四図　第一号掘立柱建物遺構実測図……217
第一五五図　溝状遺構断面図……221
第一五六図　溝状遺構出土遺物実測図……222
第一五七図　出土遺物拓影図（縄文土器・上段，須恵器・下段）〈一〉……223
第一五八図　出土遺物拓影図（縄文土器・須恵器）〈二〉……224
第一五九図　遺構外出土遺物実測図（一）……225
第一六〇図　遺構外出土遺物実測図（二）……226
第一六一図　遺構外出土遺物実測図（三）……227

表　目　次

表１　有孔球形土製器（土玉）計測値……42
表２　第一三号住居址ピット計測値……45
表３　第一七号住居址ピット計測値……52
表４　第三四号住居址ピット計測値……87
表５　第三五号住居址ピット計測値……89
表６　第三六号住居址ピット計測値……92
表７　第五〇号住居址ピット計測値……115
表８　第五一号住居址ピット計測値……120
表９　竪穴状遺構一覧表……149
表10　土壙一覧表……175
表11　第一号掘立柱遺構柱穴計測値……217

図　版　目　次

図版第　一　調査前の遺跡の現状・調査安全祈願祭・第一調査区遺構確認状況

図版第　二　第二調査区遺構確認状況・第三調査区遺構確認状況・第四調査区遺構確認状況

図版第　三　第一号住居址遺物出土状態・第一号住居址全景・第二・三・四号住居址遺物出土状態

図版第　四　第二・三・四号住居址全景，第二号井戸址・第五号住居址遺物出土状態・第六号住居址遺物出土状態

図版第　五　第七号住居址遺物出土状態・第七号住居址出土遺物

図版第　六　第八号住居址遺物出土状態・第八号住居址全景，柱穴半截発掘状況・第八号住居址カマド支脚出土状態

図版第　七　第八号住居址主柱穴半截断面（P1・P2）・第八号住居址主柱穴半截断面（P3・P4）・第九号住居址遺物出土状態

図版第　八　第九号住居址カマド内遺物出土状態・第一〇号住居址遺物出土状態・第一〇号住居址全景

図版第　九　第一〇号住居址出土遺物・第一〇号住居址石製模造品出土状態・第一一号住居址遺物出土状態

図版第一〇　第一一号住居址全景・第一一号住居址球形土錘出土状態・第一二号住居址遺物出土状態

図版第一一　第一二号住居址全景・第一三号住居址遺物出土状態・第一三号住居址全景

図版第一二　第一四号住居址遺物出土状態・第一四号住居址全景・第一五号住居址遺物出土状態

図版第一三　第一五号住居址出土遺物・第一六号住居址遺物出土状態・第一七号住居址遺物出土状態

図版第一四　第一七号住居址遺物出土状態・第一八号住居址全景

図版第一五　第一八号住居址カマド内遺物出土状態・第一九号住居址遺物出土状態・第一九号住居址全景

図版第一六　第一九号住居址カマド内遺物出土状態・第二〇号住居址遺物出土状態・第二〇号住居址全景

図版第一七　第二〇号住居址出土遺物・第二一号住居址遺物出土状態・第二一号住居址全景

図版第一八　第二二号住居址遺物出土状態・第二二号住居址全景・第二二号住居址第二号カマド遺物出土状態

図版第一九　第二二号住居址第一号カマド断面層序・第二三号住居址遺物出土状態・第二三号住居址全景

図版第二〇　第二四号住居址遺物出土状態・第二四号住居址全景・第二四号住居址カマド遺物出土状態

図版第二一　第二五号住居址遺物出土状態・第二五号住居址全景・第二六号住居址遺物出土状態

図版第二二　第二六号住居址全景・第二七号住居址遺物出土状態・第二七号住居址全景

図版第二三　第二七号住居址出土遺物・第二八号住居址遺物出土状態・第二八号住居址全景

図版第二四　第二九号住居址遺物出土状態・第二九号住居址全景・第三〇号住居址遺物出土状態

図版第二五　第三〇号住居址全景・第三〇号住居址出土遺物・第三〇号住居址カマド遺物出土状態

図版第二六　第三一号住居址遺物出土状態・第三一号住居址全景・第三二号住居址遺物出土状態

図版第二七　第三二号住居址全景・第三二号住居址カマド断面・第三三号住居址遺物出土状態

図版第二八　第三三号住居址全景・第三四号住居址出土遺物

図版第二九　第三五号住居址遺物出土状態・第三五号住居址全景・第三六号住居址遺物出土状態

図版第三〇　第三六号住居址全景・第三七号住居址遺物出土状態・第三七号住居址全景

図版第三一　第三八号住居址遺物出土状態・第三八号住居址全景・第三九号住居址遺物出土状態

図版第三二　第三九号住居址全景・第四〇号住居址遺物出土状態・第四〇号住居址全景

図版第三三　第四〇号住居址カマド遺物出土状態・第四一号住居址全景・第四一号住居址遺物出土状態

図版第三四　第四二号住居址遺物出土状態・第四二号住居址カマド遺物出土状態
図版第三五　第四三号住居址全景・第四三号住居址カマド断面・第四四号住居址遺物出土状態
図版第三六　第四五号住居址遺物出土状態・第四六号（左），第四七号（右）住居址全景・第四八号住居址遺物出土状態
図版第三七　第四八号住居址全景・第四八号住居址出土遺物・第四八号住居址カマド遺物出土状態
図版第三八　第四九号住居址遺物出土状態・第四九号住居址全景・第四九号住居址支脚転用カマド遺物出土状態
図版第三九　第四九号住居址カマド被熱袖部の状況・第五〇号住居址遺物出土状態・第五〇号住居址全景
図版第四〇　第五〇号住居址附属土壙遺物出土状態・第五〇号住居址出土遺物・第五一号住居址全景
図版第四一　第四一号竪穴状遺構全景・第四六号竪穴状遺構全景・第四〇号竪穴状遺構全景
図版第四二　第一号地下式殯穸壙全景・第二号地下式殯穸壙全景・第四号地下式殯穸壙全景
図版第四三　第一号井戸址全景・第五号井戸址全景・第一〇号井戸址全景
図版第四四　第一号溝状遺構・第三号溝状遺構
図版第四五　第七号溝状遺構全景・第一〇号溝状遺構全景・第一号掘立柱建物遺構全景
図版第四六　調査風景（第一号住居址）・調査風景（第七号住居址）・調査風景（第二調査区）
図版第四七　町長・議会議員・教育長一行現場見学（第一〇号住居址）・現地説明会風景（一）・現地説明会風景（二）
図版第四八　第一号～第八号住居址出土遺物
図版第四九　第一〇号住居址出土遺物
図版第五〇　第一一号～第一五号住居址出土遺物
図版第五一　第一六号～第二〇号住居址出土遺物
図版第五二　第二〇号住居址出土遺物
図版第五三　第二二号～第二六号住居址出土遺物
図版第五四　第二九号～第三三号住居址出土遺物
図版第五五　第三四号住居址出土遺物
図版第五六　第三六号～第四六号住居址出土遺物
図版第五七　第四八号～第五〇号住居址出土遺物
図版第五八　第四九号～第五〇号住居址出土遺物
図版第五九　第五〇号住居址出土遺物
図版第六〇　竪穴状遺構（上段），溝状遺構（中段），第一号井戸址（下段）出土遺物
図版第六一　石器，石製模造品（石鏃・剣形品・有孔円板・勾玉）・石製紡錘車・砥石
図版第六二　第一一号住居址出土遺物（球形土錘）・鉄製品（刀剣欠損品）・古銭（開元通宝・祥符通宝）
図版第六三　遺構外出土遺物

第　一　章　　遺跡の位置と自然環境

「島屋敷遺跡」は，茨城県西茨城郡岩間町大字土師字沼具弥141番地外に所在する。

涸沼川中流域の右岸台地上に位置する。

岩間町は，県のほぼ中央部に位置し，東は東茨城郡茨城町，東南は同美野里町，南西は新治郡八郷町，北は笠間市と友部町に接する。

町の西北部にかけて，筑波山塊に属する愛宕山・難台山・館岸山の三山が連なり，東方一帯はおおむね平坦な土地が開け，西高東低の地形を呈し，東西に横長の町域を形成している。

難台山を水源とする桜川が，北域を東流して涸沼川に注ぎ，愛宕山を水源とする巴川は，町の南部を東流して北浦に注いでいる。流域の沖積地は肥沃な水田となっている。

中央部を南北にＪＲ常磐線が通り，岩間駅がある。

東部平坦地には，南北に常磐自動車道が通り，押辺には岩間インターチェンジが設けられている。

常磐線岩間駅の西方約２㎞にある町のシンボル的存在の愛宕山は，筑波山塊の東部に位置し，標高257.8ｍである。

地質はおおむねホルンフェルスからなり，風化や浸食に強いため，山襞は小さく，深い谷は発達していない。

山腹はなだらかな斜面で，東斜面は巴川の源流となっている。山頂にはシイ・スギ・カシなどの高木が茂り，北斜面と南斜面とで林相を異にしている。

中腹より山頂にかけて，数千本のヨシノザクラ・ヤマザクラが植えられた県内屈指の桜の名所で，開花期には花見客で殷賑をきわめる。

山頂には愛宕神社があり，火迦具土命を主祭神とし，火防の神としてその名を知られている。

本社裏にある境外社飯綱神社の悪態祭（悪退祭）は，関東奇祭の一に数えられている。

山頂に至る自動車道も整備され，山頂からは関東平野を一望することができる。

岩間駅から愛宕山・難台山・吾国山を経て笠間駅に至る道筋は，格好のハイキングコースになっており，この一帯は県立吾国愛宕自然公園になっている。

八郷町との境界にある標高553ｍの難台山は，筑波山塊の東列の主峰で，山の大部分は花崗岩よりなるが，ホルンフェルスの部分もある。

山容は丸味を帯び，晩・壮年期の地形を形成している。

山頂付近は巨岩・奇岩が露出し，急斜面をなしている。西側には山麓緩斜面が発達しており，山腹まで水田が開けている。北斜面は涸沼川の支流桜川の水源になっている。

山腹付近に県指定史跡の南北朝時代の難台山城跡がある。

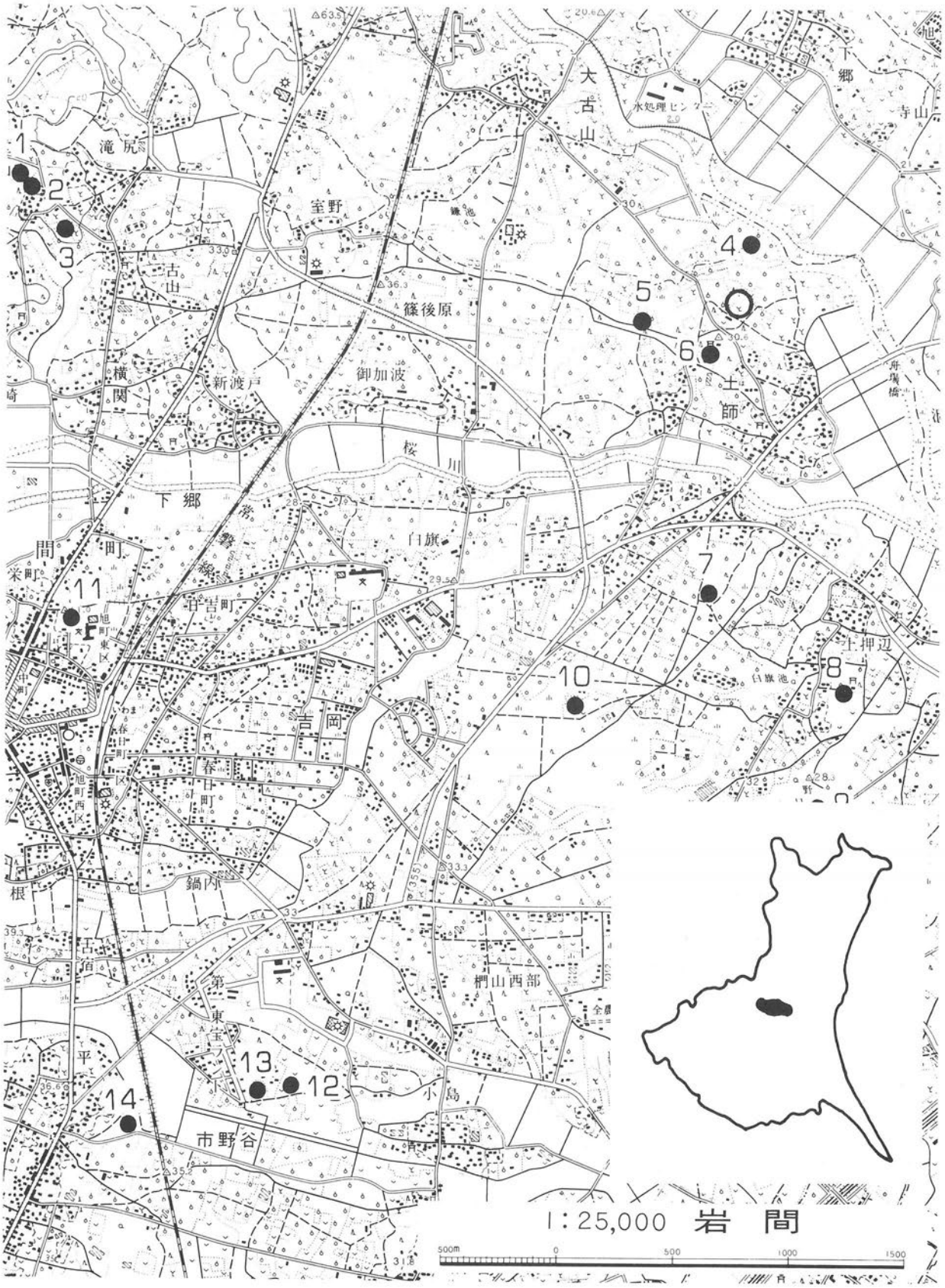
「島屋敷遺跡」の所在する土師地区は，町域の北部にあたり，北と東は南東に流れる涸沼川を境に友部町に接する。涸沼川沿いには水田が広がり，中・西部は平地林や畑地が広がる農業地域である。

中央部を桜川が東流し，東端で涸沼川に注いでいる。

昭和30年に「土師神主」と記された墨書土器が出土した茨城町下土師は，およそ８㎞ほど下流の涸沼川右岸に位置する。

主要地方道水戸岩間線が中央部を北東から南東に通り，途中で県道茨城岩間線が東に分岐する。

塩畑家には県指定文化財の旧宍戸城表門（附宍戸氏家紋）があり，島屋敷遺跡と指呼の間の南西には，高麗神社が鎮座し，その参道両側の山林内には４基の円墳が存在する。



○印　**島屋敷遺跡**　1 堂山Ⅱ遺跡　2 堂山古墳群　3 堂山Ⅰ遺跡　4 上師遺跡　5 上師十三塚遺跡　6 高龍神社古墳群
7 行人遺跡　8 押辺遺跡　9 天神台遺跡　10 鍛冶ヶ谷原遺跡　11 東裏古墳群　12 二子遺跡　13 二子塚古墳群　14 山王塚古墳

第一図　遺跡位置図，周辺遺跡分布図

第二章　歴史的環境

『茨城県遺跡地名表』（茨城県教育委員会・昭和62年）に登載されている岩間町の遺跡数は40を数えるが，誤認による台帳抹消があるため，実存遺跡数は38である。

縄文時代では，下池台･押辺･行人･天神台･御堂台遺跡（押辺），下安居・塚原遺跡（安居），土師・島屋敷遺跡（土師），随光寺・茂沢遺跡（上郷），堂山Ⅰ・堂山Ⅱ遺跡（下郷），仲村・五霊遺跡（泉）の15遺跡がある。

弥生時代の遺跡は少なく，すべて縄文時代の塚原・押辺・随光寺・五霊・堂山Ⅱの５遺跡との複合である。

古墳時代に入ると，愛宕山の東麓台地や涸沼川流域の台地上に古墳が築造される。

前方後円墳１基・円墳５基からなる塚原古墳群（安居）をはじめ，御前塚古墳群（泉・円墳４），高羅神社古墳群（土師・円墳４），花園古墳群（上郷・円墳10），堂山古墳群（下郷・円墳２），東裏古墳群（下郷・石棺４）がそれぞれの円墳群を形成する。

これらの古墳に被葬された首長級の経済力を支えたのは，涸沼川流域の台地上に立地する下安居・塚原（安居），下池台・押辺（押辺），土師・島屋敷（土師），随光寺（上郷），堂山Ⅰ・Ⅱ（下郷）など16遺跡であろう。

律令制下の当町域は常陸国茨城郡に属し，『和名抄』に見える石間郷・安候郷に比定され，それぞれ岩間・安居が遺称地であるといわれている。

安候は古代の交通の要所で駅家が置かれていた。安候駅は常陸国から下野国府方面と陸奥国方面とを結ぶ２本の官道の重要な分岐点であった。

新治郡八郷町と岩間町の境界に位置する標高553ｍの難台山頂付近には，県指定史跡の難台山城跡があり，常総地方における最後の南北朝の合戦が行われている。

「島屋敷遺跡」周辺の遺跡を図示すると第一図のとおりであるが，これらの遺跡を概観してみよう。

1　堂山Ⅱ遺跡　　県番号4621　　町番号37　　下郷字堂山2222-3　　縄文～平安時代

館岸山の東側，標高約70ｍの山麓に所在する。

遺跡は南斜面の堂山池へと伸びているが，土器片の散布量は少ない。

堂山古墳群と遺跡の一部が重複している。

2　堂山古墳群　　県番号4622　　町番号38　　下郷字堂山2222-2　　古墳時代

館岸山東側山麓，桜川左岸の小支谷台地上に立地する。

堂山池を南に見下す，標高約70ｍの南斜面頂上部に数基の円墳が所在する。

クリ畑内に，墳丘がわずかに認められる２基の円墳が所在する。

他に，耕作中に数基の石棺の出土が伝えられている。

3　堂山Ⅰ遺跡　　県番号4620　　町番号36　　下郷字平1869　　縄文・古墳・奈良・平安時代

館岸山の東側，標高約50～55ｍの山麓に所在する。

桜川と随光寺川の合流点近くからの小支谷を南に望む緩斜面の台地に，多量の土器片が散布している。

県道の南側に，特に遺物の散布量が多い。

4　土師遺跡　　県番号2674　　町番号15　　土師字六万歩12　　縄文・古墳・平安時代

涸沼川右岸の台地上に所在する。

大古山（友部町）に続く標高約30ｍの南斜面の山林中に，縄文土器片・土師器片が見られるが，その量は少ない。周辺の畑地には縄文土器片が散乱している。

この遺跡は，友部町大古山遺跡（376）の続きで，遺跡の中心は大古山の台地であろう。

5　土師十三塚遺跡　　県番号385　　町番号２　　土師字宮脇865外　　中世

高霧神社の奥山台地上に所在する。

もとは山林中の道路沿いに十三の塚が一列に並んでいたが，開拓によって削平され，現存するのは６基である。中には辛うじて塚の痕跡をとどめているものもある。

高さ50㎝，直径60㎝程度の小さいものが多い。

6　高霧神社古墳群　　県番号387　　町番号４　　土師字御宮804外　　古墳時代

常磐線岩間駅の東方約４㎞，涸沼川右岸台地上に所在する。

標高30.6ｍ，高霧神社の境内参道両側の山林内に円墳４基がある。

１号墳　高さ約２ｍ，径約25ｍ。２号墳　高さ約２ｍ，径約25ｍ。３号墳　高さ約２ｍ，径約23ｍ。４号墳　高さ約１ｍ，径約10ｍ。（萩原義照氏実測）

小円墳の４号墳以外は墳頂部に盗掘痕がみられるが，主体部は破壊されていないという。

7　行人（ぎょうや）遺跡　　県番号4611　　町番号27　　押辺字行人2025　　縄文・古墳・奈良・平安時代

標高約26ｍの涸沼川右岸台地上に所在する。

桜川と涸沼川の合流点近くからの支谷が入りこみ，遺跡は支谷の西側台地上に立地する。

支谷を東にみて，遺跡の範囲は南北にのびている。

8　押辺遺跡　　県番号224　　町番号17　　押辺字岡前1945　　縄文～平安時代

涸沼川右岸台地上に所在する。

鹿島神社の周辺一帯で，一部は境内，他は畑である。

縄文土器片・弥生土器片・須恵器片などが散乱している。

9　天神台遺跡　　県番号4612　　町番号28　　押辺字天神台2257　　縄文時代

標高約30ｍの涸沼川右岸台地上に所在する。

野口池東側の畑がエリアで南北にのびている。耕作による縄文土器片の散布が多いが，水田化による湮滅も進行している。

10　鍛治ヶ谷原遺跡　　県番号3166　　町番号23　　土師1267外　　縄文時代

土師の平地林内に所在する製鉄跡で，鉄滓・木炭などが出土している。

11　東裏古墳群　　県番号4623　　町番号39　　下郷字東裏4140　　古墳時代

標高約40ｍの桜川右岸台地上に所在する。古墳群については，明治41年に墳丘が削られたことが伝えられている。現在は岩間第一小学校の敷地内である。

昭和57年８月，岩間第一小学校の校地造成工事中に石棺が出土したため，萩原義照氏によって緊急調査が行われ，４基の石棺が確認されたが，副葬品等は出土しなかった。

出土した石棺の一部は町公民館に保管されているが，報告書は作成されなかったようである。

12の二子遺跡は市野谷字二子塚に所在するが現状は溜池になっている。同地区に所在する二子塚古墳は，高さ4.3ｍ，径23ｍの円墳である。泉字山王塚に所在する14の山王塚古墳は，高さ3.5ｍ，径25ｍの円墳である。

以上のように周辺遺跡を概観してきたが，何といっても「島屋敷遺跡」の所在する「土師」というきわめて古典的な地名には，歴史的・考古学的事象を内包しているように思えるのである。

〔参考・引用資料〕

『茨城県遺跡地名表』　茨城県教育委員会・昭和62年

『茨城県埋蔵文化財包蔵地調査カード』　茨城県水戸教育事務所保管資料

第 三 章　　発堀調査にいたる経緯

岩間町は，昭和30年代の後半頃から専業農家が著しく減少し，兼業化が進んでいる。

そのため，少人数による近代的な効率の良い作業，専業農家の効率経営の安定自立が課題になっている。

一方，企業立地の遅れから，近年首都圏や水戸方面への通勤者が次第に増加しつつあり，市街化が緩やかに進行し，人口も増加傾向にある。

農業が主産業ではあるが，純農村地域から都市近郊型地域へと変貌しようとしている。

人口の増加にともない，都市化の傾向が進展するにつれて，生活環境の整備と改善が行政の課題となってきたことは当然の趨勢といえよう。

岩間町では現在，21世紀初頭を目標とした「第４次岩間町総合計画」に基づき，テーマを「緑と活力の共生するまち　岩間」と定め，快適で安全な，住みよさの実感できるまちをめざして各種事業を展開しており，中でも，重点施策として水質保全と生活環境の改善に向けて，公共下水道事業を継続的に進めているそうであるが，このように豊かで快適なまちづくりをめざしている岩間町にとって，公共下水道浄化センターの建設は不可欠の急務といえよう。

こうした実情をふまえ，このたび土師地区に浄化センターを建設することになった。

しかし，建設予定地には周知遺跡の「島屋敷遺跡」が所在するため，現状保存の不可能な部分について，次善の策として文化財保護法第57条および98条の規定に遵い，記録保存のための発掘調査を実施することになった。

このため，岩間町教育委員会は，茨城県水戸教育事務所生涯学習課に対して，発掘調査に備えて現地予備調査の要請を行った。

これを受けて県埋蔵文化財指導員千種重樹は，平成８年６月６日現地に赴き，関係者と具さに協議した結果，発掘本調査に先立って，発掘調査区の設定と，遺構有無確認調査を兼ねた試掘調査を実施することとした。

千種が調査を担当することになったが，那珂郡大宮町坪井上遺跡の第二次調査中であったため，その終了を待って実施することで合意に達した。

斯くして，平成８年11月12日。地元シルバーセンター会員の協力を受けて試掘調査を開始した。

調査はトレンチ法とし，幅２ｍ，長さ80ｍを２本，幅２ｍ，長さ120ｍを５本，合計７本のトレンチを20ｍ間隔で設定した。

調査の結果は，すべてのトレンチの確認面から遺構プランの一部が現れ，広範囲に遺構の存在することが確定的となった。

試掘調査最終日，平成８年11月22日。関係者を集めて説明会を行い，全面調査の必要性を強調した。

その後，町教育委員会は議会の承認を得て準備を進め，所定の手続きも済ませて「島屋敷遺跡発掘調査会」（小松崎道雄会長）を結成し，調査期間を平成９年４月11日から，平成９年８月29日までと決定した。

平成９年４月11日，関係者一同現場事務所に集合。調査開始に先立って調査会を開催し，規約・会計規定・事業計画・予算などの審議を経た後，時差出勤の地元作業員全員参列の上，町田享之氏が斎主となって調査安全祈願祭を厳修。

直会の後調査を開始し，平成９年８月29日，５区画14000㎡の発掘調査は無事終了し，後述するような遺存状態の良い遺構を多数調査することができた。

第四章　調査の概要

浄化センター建設予定地の総面積は約40000㎡であるが，周縁部は緑地帯として現状保存されるため，実際の調査面積は約14000㎡となった。

建設予定地内には現在使用されている農道が通り，加えて発掘排土は予定地外へは持出せないという制約のため，表土の全面除去が出来ず，５区画に分割することを余儀なくされ，その５区画の合計面積が14000㎡である。

各調査区には５ｍ方眼のグリットを設定した。

グリットは南北方向に縦軸をとり，これに直交する東西方向を横軸とし，縦軸には算用数字，横軸にはアルファベット記号を用いて標記した。

遺構の発掘に当っては，原則として原位置のまま遺物を柱状に残し，出土地点，床上レベルまたは確認面からのレベル，表裏関係，種類などを記録した後に収納する方法をとった。

また，完形品や大形破片については，出来得る限り実測図にその形を記録することにつとめた。

カマドの調査に当っては，左右の両袖・煙出し部を検出し，カマドの構造を把握することに努めた。

井戸状遺構の調査は，大部分が確認面から１ｍ前後で湧水面が現れる。その理由はまとめの章で詳述するが，調査は湧水面が現れた時点で中止することにした。

今回の調査で確認できた遺構は次のようにまとめられる。

古墳時代竪穴住居址45軒，平安時代竪穴住居址６軒，地下式殯穸壙５基，竪穴状遺構100基，土壙143基，井戸状遺構23基，土壙墓または土壙墓と考えられるもの12基，掘立柱建物遺構２棟，溝状遺構14条，木柵列と考えられるもの８列となる。

これらの遺構のうち，確認したものの時間の関係で詳細な調査が出来なかったのが掘立柱建物（第五調査区）１棟と木柵列であるが，遺構分布図には記録した。

特筆に値する遺構としては，第四九号住居址のカマドで，小形甕形土器の支脚転用カマドであろう。

支脚転用小形甕形土器と煮沸用甕形土器が，使用状態のセットのままで出土している。

地下式殯穸壙は５基確認されたが，そのすべてが調査区の最も標高の高い位置に構築されている。

出土遺物の量は収納箱（50×35×22）50箱とダンボール15箱である。

比較的量が少ないのは住居址以外の遺構からは殆んど出土しないためである。

縄文時代の遺物は土器破片と石鏃・石斧である。

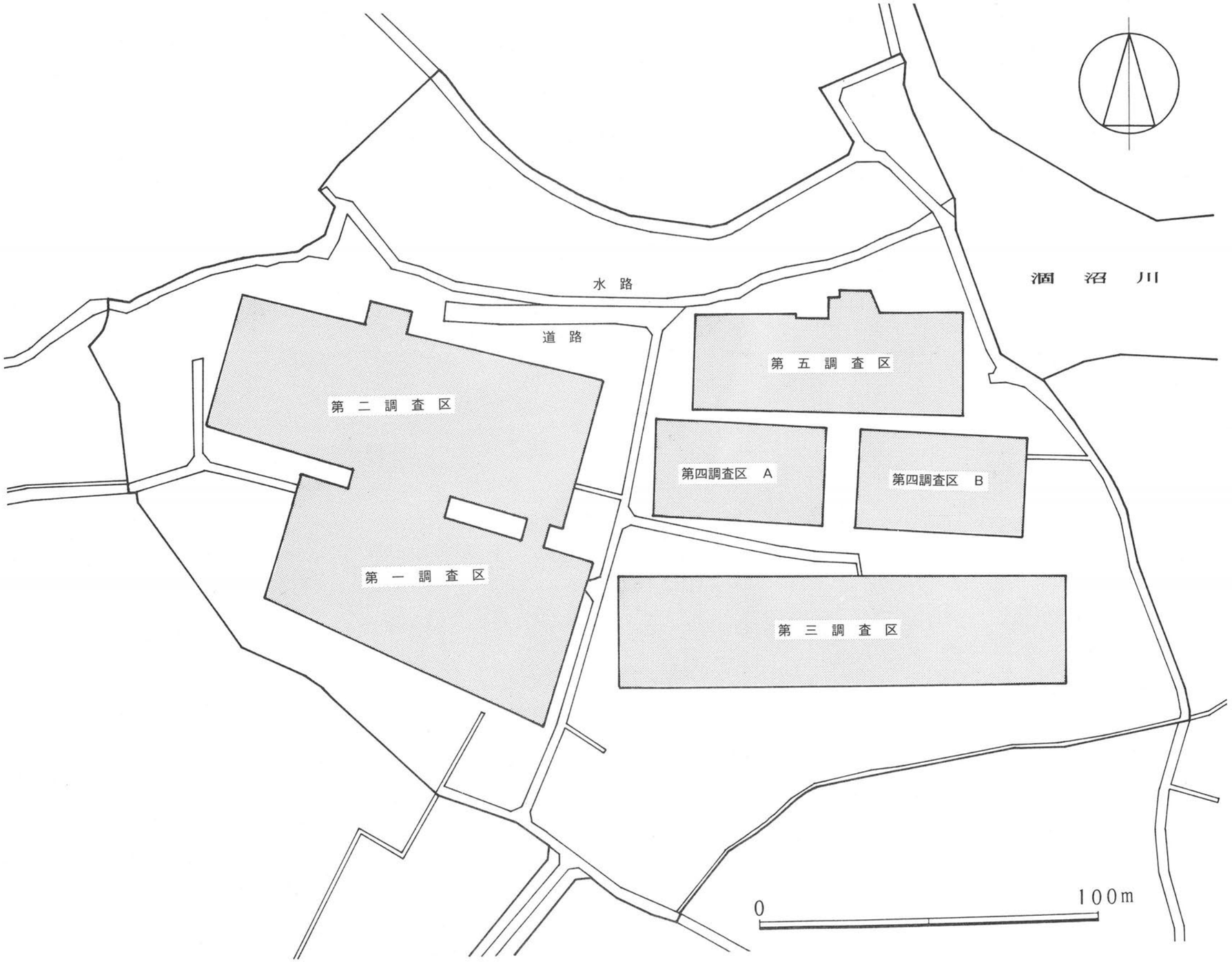
古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺物は，土器では甕形・壺形・坏形・器台形・坩形・鉢形・埦形・底部穿孔・甑形・手捏などがみられる。

中世では内耳土器．土師質土器（カワラケ）がある。

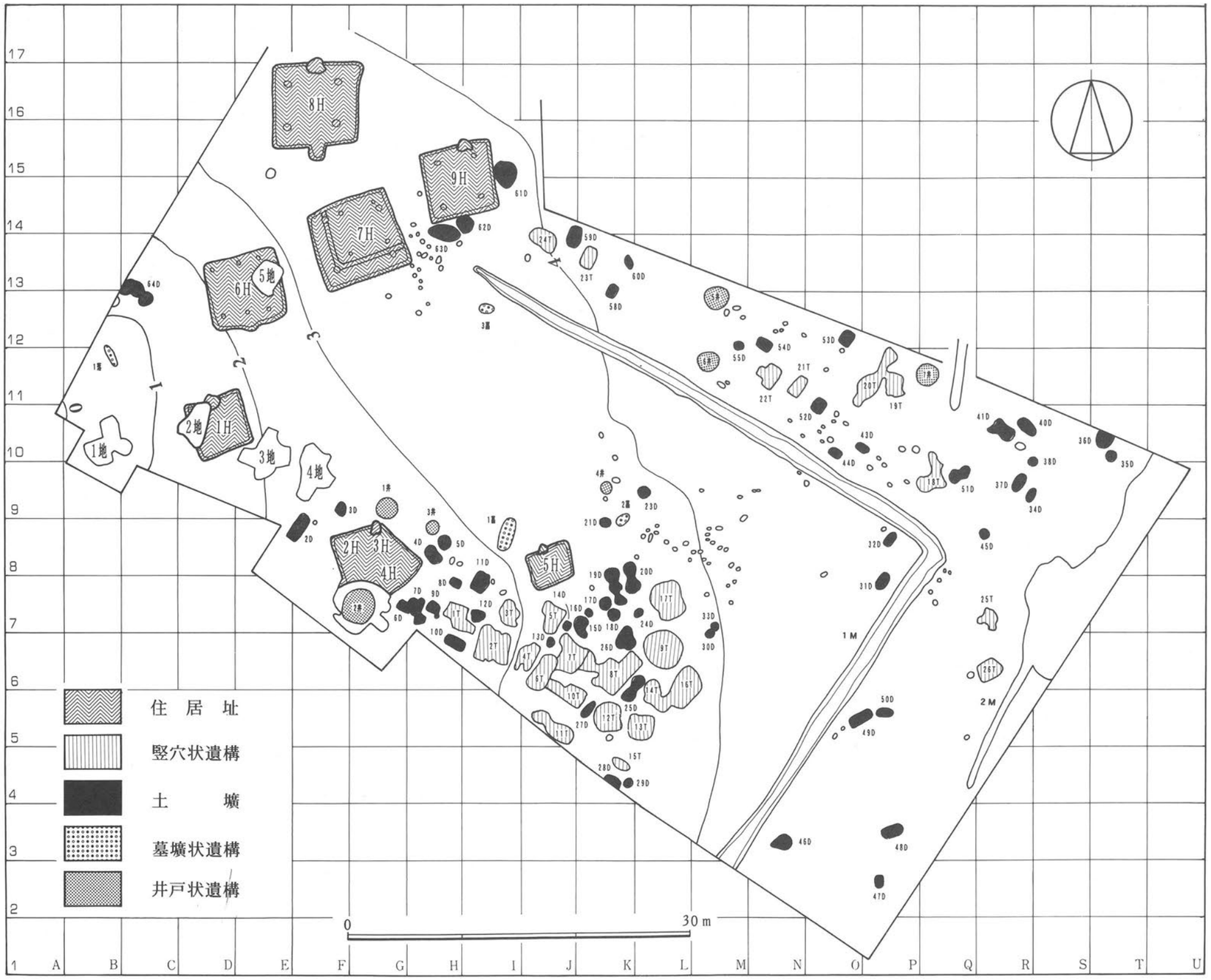
石製品では，紡錘車・砥石・有孔円板・剣形模造品・勾玉が出土している。

土製品では，カマド支脚・球形土錘がある。

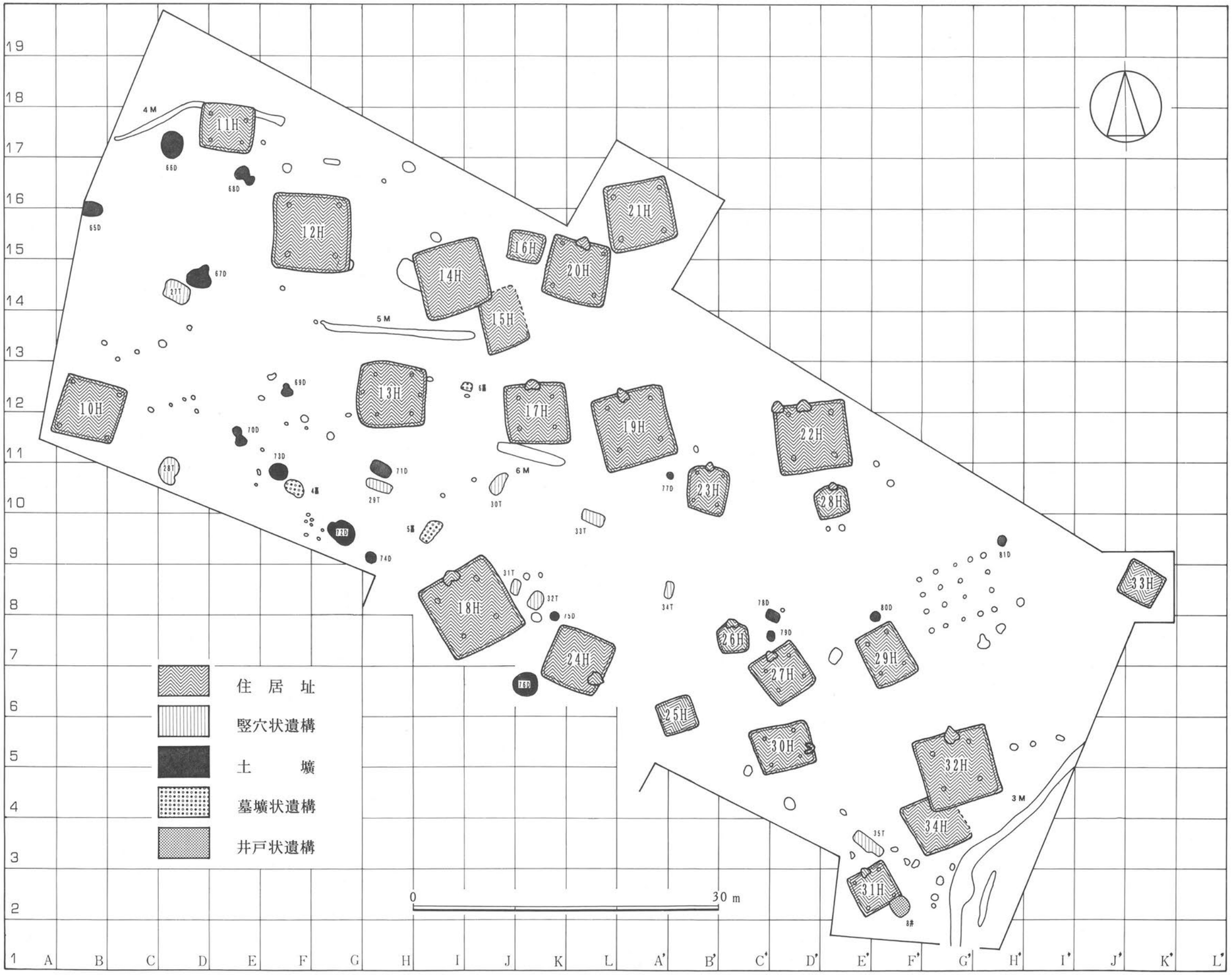
その他では，鉄製品の刀剣，古銭の模鋳銭が出土している。



第二図　発掘調査区設定図



第三図　第一調査区遺構分布図



第四図　第二調査区遺構分布図

第五図　第三（上段），第四（中段），第五（下段）調査区遺構分布図

第 五 章　　竪穴住居址の調査

1　第一号住居址　（第六図・図版第三）

位置および遺存状態　本址は第一調査区の南西部端（C．D－10．11）に位置する。

第二号地下式遺構の構築によって中央部より西側がWコーナー付近まで破壊され，その面積は本址面積の約25％に達し，良好な遺存状態とはいい難い。

規模　平面プランはおおむね方形を呈し，W－X壁間4.7m，Y－Z壁間4.8mを測り面積は約22.6m²である。

主軸線はN－22°－Wを指す。

壁高および壁面　本址が構築されている台地は東側に向って約6°の緩斜面を呈しており，竪穴の壁高も東側に移行するにしたがい浅くなる。

Yコーナー付近の壁高は43cmであるが，X－Zの東壁残存壁高は18cmである。

壁はやや斜めに掘り込まれており，壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

床面　破壊部を除く床面は平坦で硬く踏み固められており，特にカマド周辺はきわめて固い。

ピット　ピットは6個発見された。計測値（単位cm）は次のとおりである。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ
P_1	68	53	65	P_4	52	42	15
P_2	43	40	38	P_5	50	35	37
P_3	45	45	56	P_6	50	21	42

これらのピットのうち位置関係や規模からみて主柱穴の機能をもったものと推察されるのはP_1，P_3，P_6であろう。

P_3の対角線上であるWコーナー付近の破壊部にも主柱穴に相当するピットが存在していたことであろうし，P_2に相対するW－Y壁下中央部付近にもP_2と同規模程度のピットが存在したことが考えられる。

本址は6本柱によって上屋を支えていたものと思われる。

埋没土　竪穴内の埋没土は3層に大別できる。Ⅰ層は黒色土で微量のローム粒子を混入する。Ⅱ層は黒色土をベースとする黒褐色土で，少量のロームブロックとローム粒子を含んでいる。Ⅲ層は暗褐色土で黒色土とローム混合土である。

以上の埋没土の性状が意味するものは，周囲の土砂が流入したいわゆる自然層序ではなく，人為による堆積つまり短時日に土砂を投棄した結果の層序と考えられる。

特にA－Bセクションの中央より左側の層序の在り方は，第二号地下式遺構廃絶後の人為的埋戻しによるものであろう。

カマド　北壁（W－X）の中央部に設けられている。

住居の廃絶後に構築された第二号地下式遺構の掘削の際に，左袖先端部，焚口部および右袖先端部が破壊されている。

袖部を被覆する砂質粘土の範囲は，推定ではあるが東西150cm，南北140cm程度の規模であったと思われる。

袖部・天井部の構築材は砂質粘土によって構成され，他の補強材は使用していない。

構造は，壁内に焚口部と燃焼部を形成し，煙道部は35cmほど壁外へ突出する。

燃焼空間は床面下に10cmほどの皿状の掘り込みを穿ち，長さ60cm，幅40cmを測る。

燃焼部の壁面には赤変がみられ，使用頻度が高かったものと思われるが，カマド内の出土遺物は皆無である。

第六図　第一号住居址実測図，遺物出土状態図

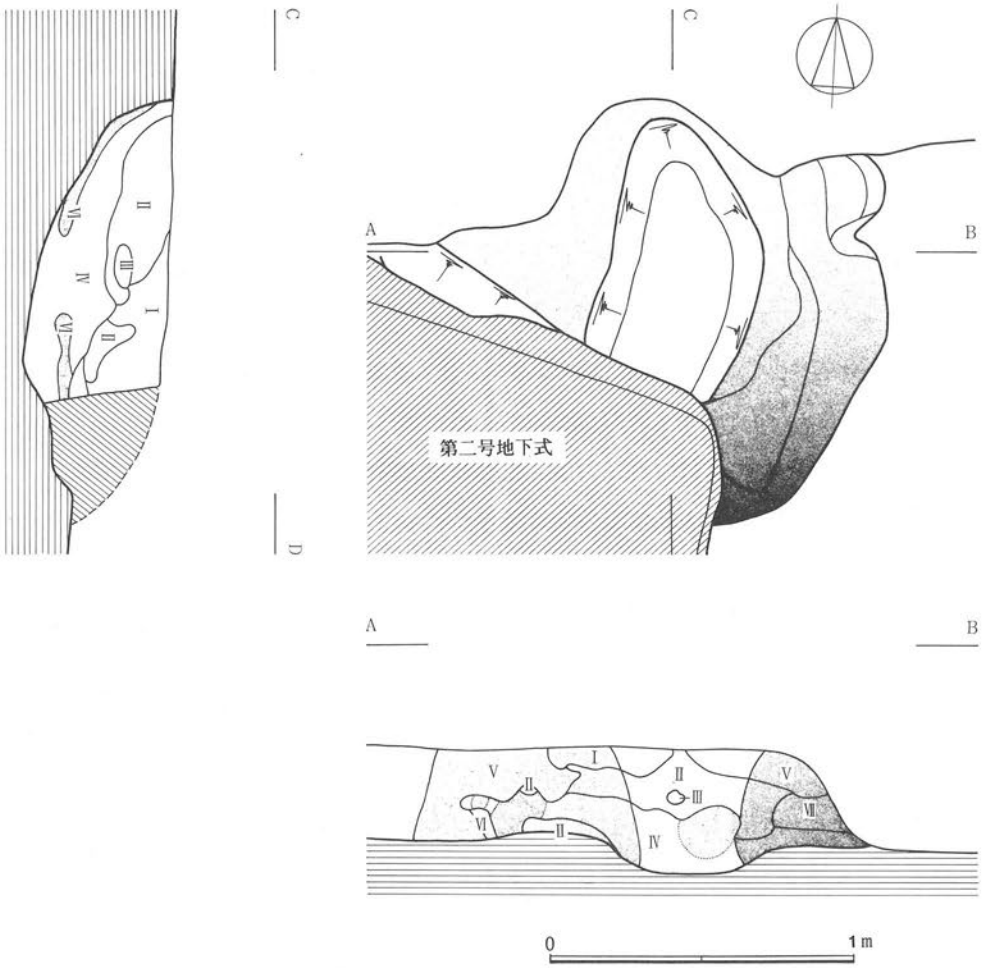
第一号住居址カマド断面層序説明

A－Bセクション

Ⅰ	黄褐色土	黄色砂質土に微量の黒色土粒子が混在する。
Ⅱ	黄色砂質土	焼土小ブロックが点在する。粘性は弱い。
Ⅲ	黒色土	さらさらしていて崩落しやすい。
Ⅳ	赤褐色土	焼土が主体で黄色砂質土・黒色土粒子混入。
Ⅴ	黄褐色土	Ⅰ層より黒色土粒子の混入多く粘性が強い。
Ⅵ	黒色土	Ⅲ層に比し締りがある。
Ⅶ	黒褐色土	黒色土とロームブロックの混合土。

C－Dセクション

Ⅰ～Ⅴ層まではA－Bセクションと共通するが，Ⅵ層は焼土で煉瓦状に固く焼けている。



第七図　第一号住居址カマド実測図

遺物の出土状態

本址の出土遺物総数は224個を数える。内訳は土器破片201個，土製品１個，自然石20個，炭化物２個である。土器破片201個の表裏関係は表105個（52.2％），裏80個（39.8％），立ち16個（8.0％）という比率になる。

出土状態をドットを使った平面分布でみると，破壊を免れた部分に万遍なく分布しており，特に変った傾向を指摘することはできない。

この出土状態をＡ－Ｂセクションに沿った両側１ｍの範囲を，Ａ－Ｂセクシェンに投影した垂直分布の在り方を観察すると，床面直上の遺物は少なく，大部分が中層より上の埋没土中に包含される状態を示し，中央部付近から東側にかけてやや濃密に集中する傾向を看取することができる。

遺物と時期

201個の土器の内訳は土師器198個，須恵器３個である。土製品はカマド支脚であるが収納の際に崩壊してしまった。

土器はいずれも細小破片で有効な資料となり得ず，実測できたのはNo124の土師器坏形土器１個だけである。

資料に乏しく時期の特定は困難であるが，本址の廃絶は古墳時代中期頃と思われる。

第二号住居址（第八図・図版第三～四）

位置および遺存状態　本址は第一調査区の南西部（F.G－8）に位置する。

東側は第三号住居址，南側は第六号住居址と重複しており，遺存状態は悪い。

規模　北壁・西壁が残存するのみで平面形は不明確であるが，構築当時は方形を呈していたものと思われる。

面積も正確に計測し得ないが，約17m²ぐらいはあったろう。主軸線はN－15°－Wを指す。

壁高および壁面　北壁および西壁の壁高は13cm，東壁・南壁は不明である。

残存壁面を観察すると，若干斜めに掘り込まれており，壁面は比較的堅固である。

床面　おおむね平坦であるが，踏み固めたような硬さはない。北壁および西壁下に幅20cm，深さ5cmの周溝がめぐっている。

ピット　ピットは7個発見された。位置関係が不規則で主柱穴を特定するのは困難である。

埋没土　黒色土にローム粒子が混在する暗褐色土の単一層である。

カマド　北壁の東端部コーナーに設けられている。袖部の最大幅は145cm，長さは135cmである。

天井部は崩落しているが，袖部の構築材は黄色砂質粘土によって構成され，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口部・燃焼部・煙道部のすべてが壁内に形成されており，カマドの形式としては未発達の部類に入るだろう。

燃焼空間は床面を最深部で12cmほど掘りくぼめ，長さ1.0m，幅50cmを測る。

A－Bセクションで層序を観察すると，両袖間にはⅠの赤褐色土が充満し，両袖に沿って焼土が堆積する。

遺物の出土状態　本址の出土遺物はわずかに5個である。内訳は土師器片3個，須恵器片1個，石製品の紡錘車1個である。平面分布の状態はまばらに散在する。

本址は3軒の重複関係の中で最も古い時期と思われるが，廃絶は古墳時代中期ごろと思われる。

3　第三号住居址　（第八図・図版第三～四）

位置及び遺存状態　本址は第一調査区の南西部（F.G－8）に位置する。

第八図X－Yを結ぶ線の西側全面は，第二号住居址と第四号住居址の重複切り合いによって破壊を受けており，遺存状態は悪いといわざるを得ない。

規模　不明である。残存部の面積は約9.8m²である。

壁高および壁面　残存する東壁の壁高は14cmで壁面はやや斜めに掘り込まれており，崩壊は認められない。

床面　若干の凹凸はあるがおおむね平坦である。踏り固められた痕跡はみられない。

ピット　3個のピットを発見したが，位置関係からみて柱穴とするには無理がある。

埋没土　黒色土の単一層で，層序の変化を示すような区分線は引き難い。

遺物の出土状態　本址の出土遺物は16個である。内訳は土師器片13個，自然石3個である。

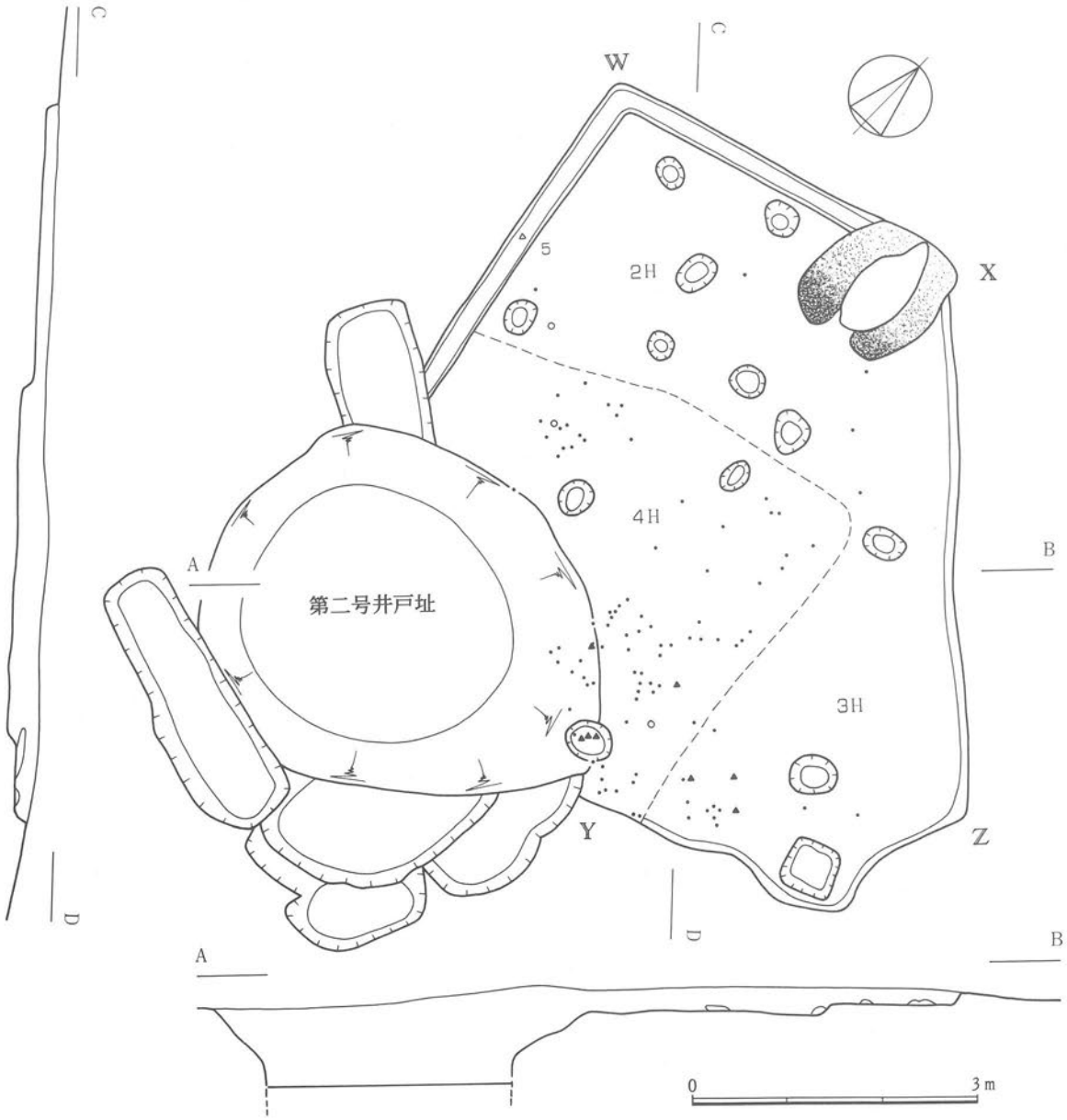
平面分布の在り方は，P_{11}・P_{12}付近に集中する。

土器はすべて細小破片であるが，鬼高式坏形土器が認められるので，本址の廃絶時期は古墳時代後期初頭と考えられる。

4　第四号住居址　（第八図・図版第三～四）

位置および遺存状態　本址は第1調査区の南西部（F.G－8）に位置する。

北側は第二号住居址と，東側は第三号住居址と重複し，さらに南西部は第二号井戸址の掘削によって大きく



第八図　第二号（上），第三号（下），第四号（中）住居址実測図，遺物出土状態図

破壊を受けており，遺存状態は良くない。

規模　不明である。床面の切り合いの状況から想定し得る面積は約18m²ほどであったろうか。

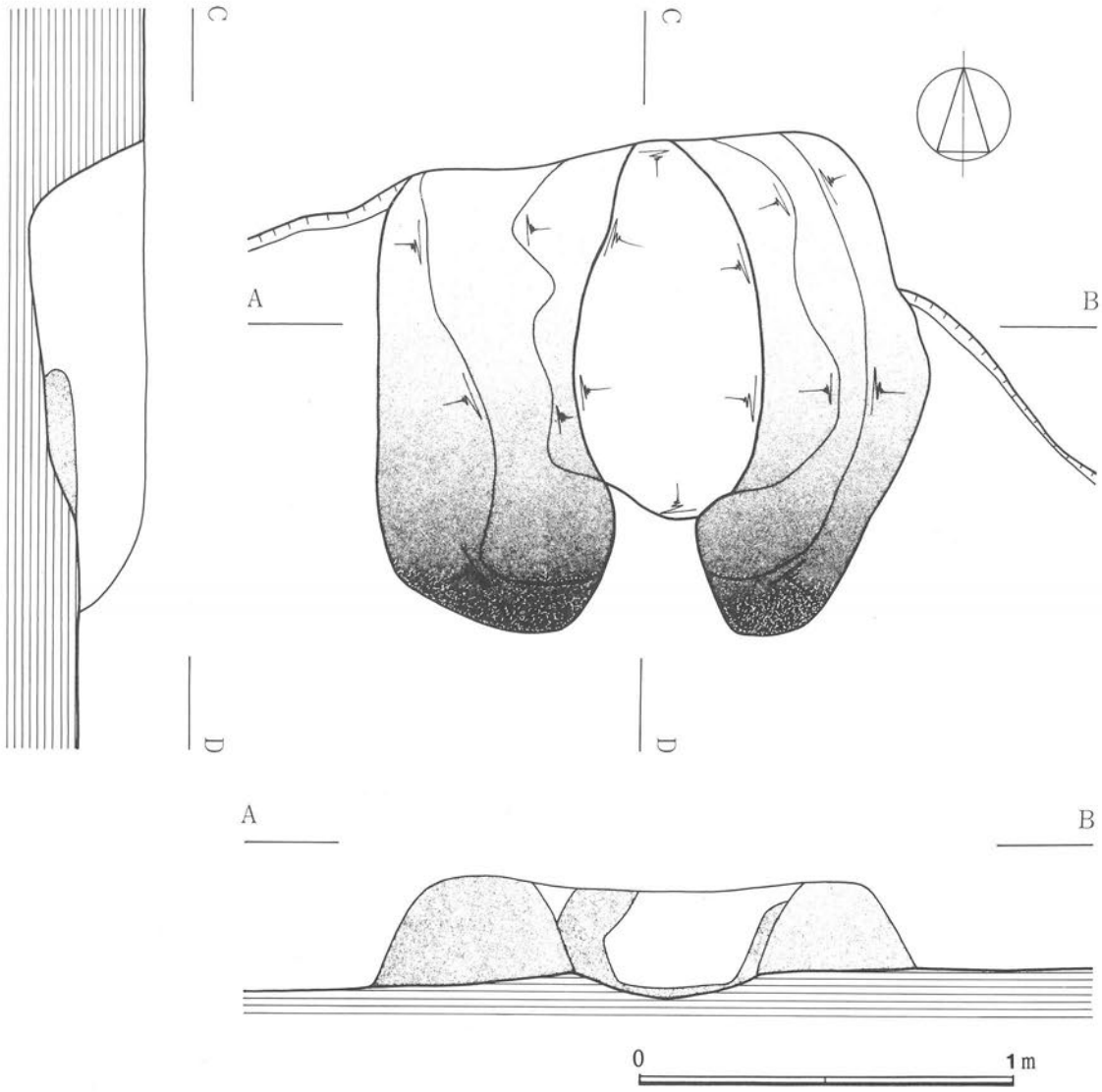
壁高および壁面　辛うじて計測できる周壁の残存部はY付近のごく一部でほぼ垂直に掘り込まれており，壁高は9㎝と浅い。壁面は堅固ではないが崩落は認められない。

床面　かなりの凹凸があり平坦ではない。踏み固めたような硬さはない。

第二号井戸址の発掘と同時進行で調査を進めた結果，確認面下1mで水面が現れ（図版第四），調査期間中この水位が低くなることがなかったので本址の調査には細心の注意をはらった。

ピット　3個のピットを発見した。41～63㎝の深さはあるが位置関係が不規則で柱穴とするには無理がある。

埋没土　黒色土にローム粒子を混入する黒褐色土の単一層である。人為的埋戻しであることは言を俟たない。



第九図　第二号住居址カマド実測図

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は88個である。内訳は土師器片81個，須恵器片２個，自然石５個となる。

ドットによる平面分布の在り方を観察すると，西壁際に空白部分があるものの残存部全面に分布しており，特にP_{10}の北西部とP_{13}周辺部に集中する傾向を指摘することができる。

本址の土器片も細小破片が多く有効資料に乏しいが，口縁部の直立する坏形土器片や胴部下位にゆるい稜をもつ坏形土器片など鬼高Ⅲ式に比定し得る土師器が認められるところから，本址の廃絶は古墳時代後期７世紀中葉頃と考えられる。

5　第5号住居址　（第一〇図・図版第四）

位置および遺存状態　本址は第一調査区南西中央部（Ｉ．Ｊ－８）に位置する。

西壁（Ｗ－Ｚ）中央部に攪乱穴があるが，壁面および竪穴を損壊するほどのものではなく，遺存状態はおおむね良好といえるだろう。

形状および規模　平面プランは隅丸方形を呈し，Ｗ－Ｙ壁間4.0ｍ，Ｘ－Ｙ壁間3.5ｍを測り，面積は約14.0㎡である。北壁中央部にカマドを設けている。主軸線はＮ－14°－Ｗを指す。

壁高および壁面　周壁の遺存状態は比較的良好であるが，東側へ４°ほど傾斜する緩斜面上に構築されているため，西壁に比して東壁の壁高はやや浅くなる。

北壁カマド付近で20㎝，西壁中央部で32㎝，南壁中央部で24㎝，東壁中央部13㎝である。

壁はわずかに斜めに掘り込まれており，堅固である。

床面　若干の凹凸があり平坦とはいえない。カマド部と南壁を除く周壁下には幅15㎝の浅い周溝が回っている。

南壁側の一部を除いて厚さ10㎝ほどの貼床が施されている。貼床の材料は黒色土・ローム・粘土の混合土である。

床面は全体に硬く踏み固められている。

ピット　ピットは６個発見されたが，位置関係や規模から判断すると次の４個が柱穴の機能を果していたものと思われる。計測値は次のとおりである。(単位㎝)。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ
P_1	32	30	35	P_3	35	33	35
P_2	32	28	30	P_4	35	34	30

埋没土　本址の埋没土は２層に大別できる。Ｉは黒色土とロームの均一な混合土，Ⅱはローム粒子がベースで黒色土を含む明褐色土である。５×５㎝程度のロームブロックも点在する。

この埋没土の性状は周囲の土砂の自然流入ではなく人為によるものである。

カマド　北壁（Ｘ－Ｙ）の中央部に設けられている。

袖部の最大幅は158㎝，煙道部先端から焚口部までの長さは135㎝を測る。

天井部は崩落しているが，袖部の構築材は砂質黄色粘土と黒色土を固めた材料によって強固に構成され，他の補強材は全く使用していない。

構造は壁内に燃焼部と焚口部を形成し，煙道部は60㎝ほど壁外へ突出して立ち上がる。

燃焼空間は床面を最深部で18㎝ほど皿状に掘りくぼめ，その幅は70㎝を測る。

両袖の壁面は火熱を受けて赤変しているが，カマド内の出土遺物は皆無である。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は58個である。内訳は土師器片39個，須恵器片15個，石製品１個，古銭２枚，自然石１個である。

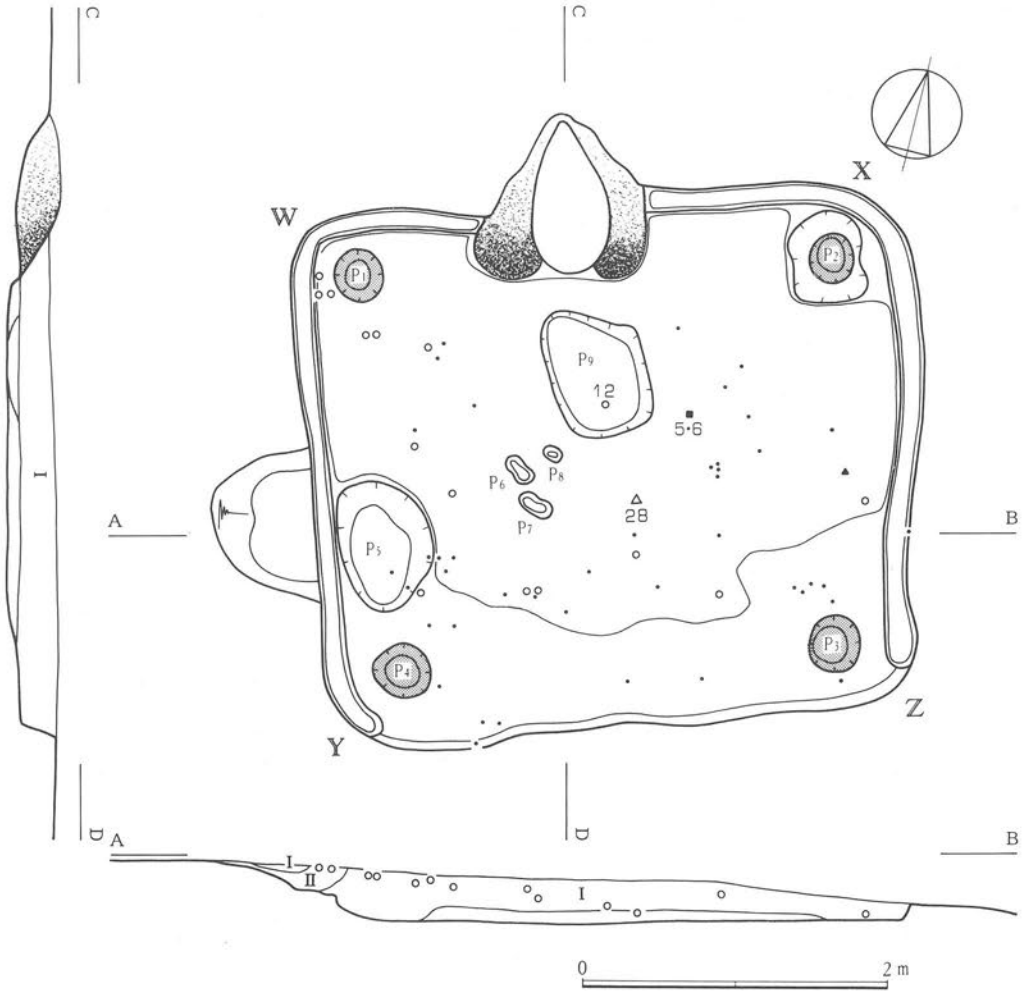
出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，Ｘコーナー付近に空白部分があるものの，竪穴全面から疎らではあるが出土している状態を看取することができる。

土器片の器種は土師器では坏形土器・甕形土器である。

遺物と時期　土器片は細小破片で実測を行わなかったのでここでは石製品と古銭について記述する。

28は勾玉の石製模造品で滑石製の完形品である。

平面形は湾曲の強い整った形をしており断面は扁平である。腹部には小さな稜を残しており丁寧な造りといえるだろう。小円孔は通常１孔を穿つものであるが，ａ面の腹部には一度あけかけた孔を途中で中止したと思



第一〇図　第五号住居址実測図，遺物出土状態図

われる浅い盲孔が残っている。

5・6は古銭で5は開元通寶，6は摩滅しているが祥符通寶のようである。

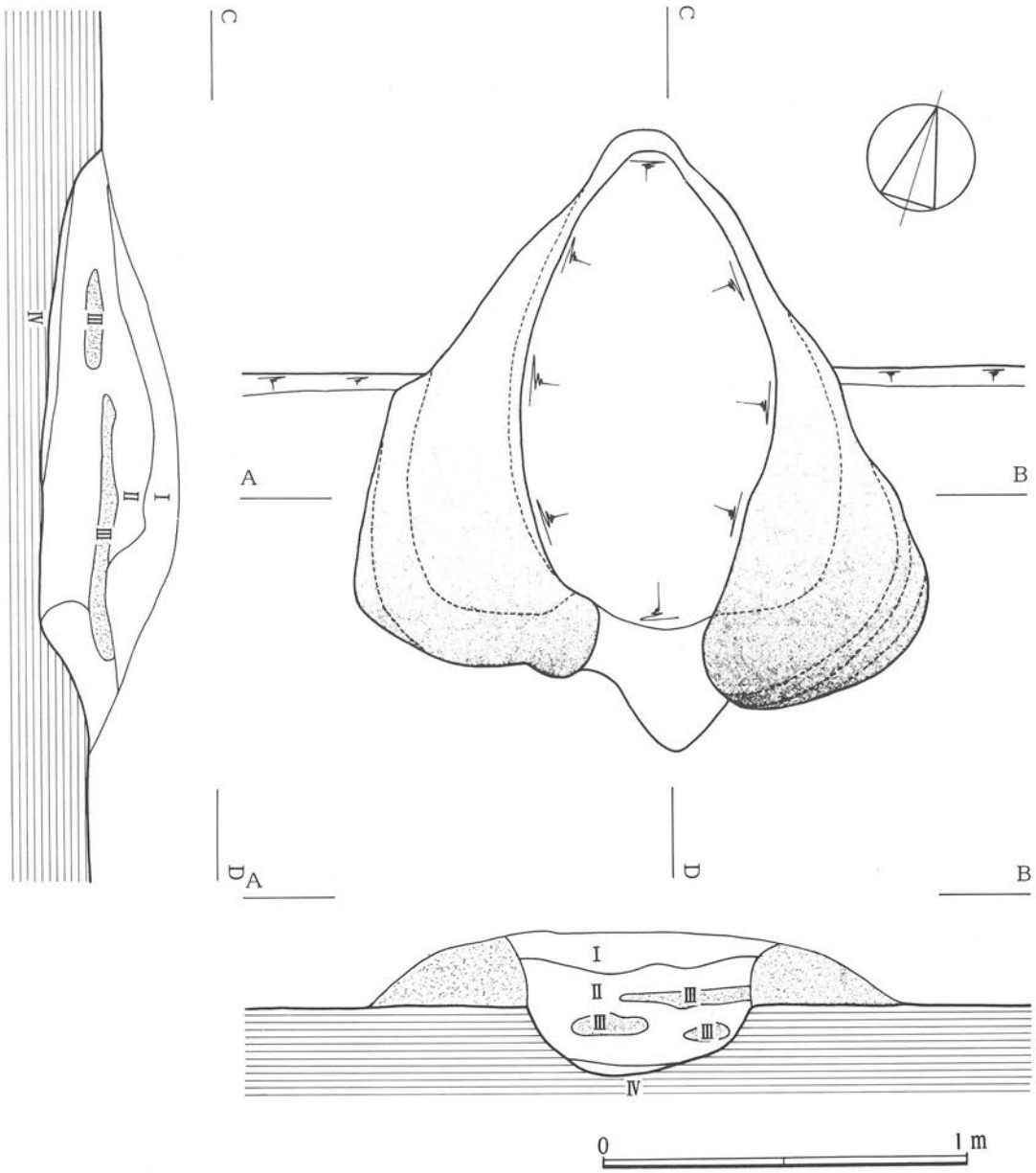
開元通寶は銅製で唐の武徳4年（621）に鋳造され，祥符通寶も銅製で北宋の大中祥符2年（1009）に鋳造された渡来銭であるというのが古銭研究家の見解である。

渡来銭は遣唐使・遣隋使などが中国より持ち帰ったのが始まりと思われ，その多くは平安末期より鎌倉・室町時代にかけて，幕府または民間貿易によって輸入された貨幣であるという。

皇朝銭の鋳銭停止以後，寛文10年（1670）渡来銭使用禁止令までの長い間，我が国の通貨として広く使用されていた。

その中には唐・北宋・南宋・明などの時代の貨幣が多くみられるという。出土品は模鋳品のようである。

本址廃絶の時期は6世紀中葉頃と思われるが，本址と古銭との関係は明確にできない。



第一一図　第五号住居址カマド実測図

第５号住居址カマド断面層序説明（Ａ－Ｂセクション）

Ⅰ　暗赤褐色土　黒色土粒子が主体で焼土粒子・炭化物粒子を含む。

Ⅱ　赤褐色土　焼土粒子がベースで黒色土粒子・炭化物小片を混入する。

Ⅲ　焼　土　焼土の帯状の層。煉瓦状ほど固くはない。

Ⅳ　黒褐色土　黒色土にローム粒子・炭化物粒子を含む。

※Ｃ－Ｄセクションも共通

6　第六号住居址　（第一二図・図版第四）

位置および遺存状態　本址は第一調査区の西端部（D－13）に位置する。

本址の大部分は東側へ7°ほど傾斜する緩斜面上に構築されているが，東壁（X－Z）と思われるあたりから20°の傾斜に変り，遺構確認作業の時点で削平しすぎたのかもしれないが，東壁は存在しない。

また，東壁中央部の内側には第五号地下式遺構が構築されており，全体として望ましい遺存状態とはいえない。

形状および規模　東壁が欠損しているので推定ではあるが平面プランは方形を呈していたように思われる。

W－X壁間6.7m（推定），W－Y壁間6.5mを測り，面積は約43.5m²前後の大形竪穴であったと考えられる。

主軸線の方向はN－12°－Wを指す。

壁高および壁面

東壁以外の周壁は比較的良好な状態で残存する。西壁の壁高は43cmを測るが東側へ移行するにしたがい除々に低くなって，東壁は全く確認することができない。しかし，傾斜角20°の斜面上に立地するためにはより強固な壁が必要不可決であることは自明の理であろう。

改めて竪穴の東壁部を観察すると，そこには掘り込み壁に代り得る堅固な壁が築かれている。それは黒色土と青色粘土と焼土とを混合して非常に固く盛り上げ，幅99cm，高さ23～25cmの恰も土塁状の壁と思われる盛土が施されている。

当初はXコーナーからZコーナーにかけてコの字状に築かれていたものと考えられるが，中間部は地下式遺構の掘削によって破壊されたものであろう。

この盛土を東壁の代りと見做すことはできないだろうか。

床面　わずかに東側へ傾斜するがおおむね平坦で全面が硬く踏み固められている。しかし、東壁の中央部から西側にかけての床面は地下式遺構の掘削によって半円形状に破壊されている。

ピット　8個のピットが発見されたが主柱穴の役割を果したのは次の6個であろう。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P_1	50	40	40	P_4	44	40	50
P_2	38	38	41	P_5	42	28	42
P_3	38	36	56	P_6	52	41	39

南壁中央部のP_8は出入口の施設に伴うピットであろう。

埋没土　竪穴内の埋没土の層序をA－Bセクションによって観察すると，6層に区分することができる。

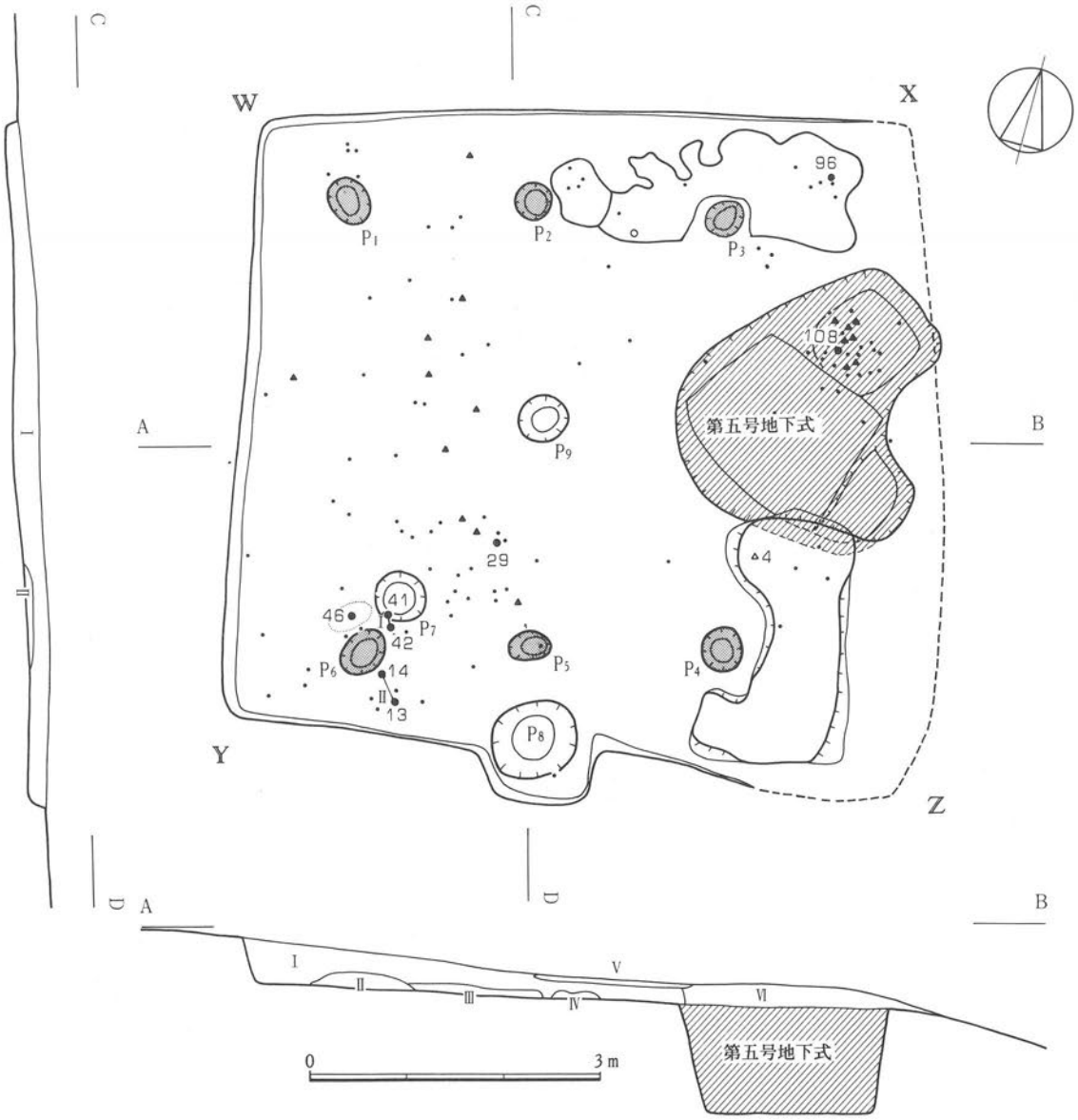
Ⅰ層は黒褐色土，Ⅱ層は赤褐色土で焼土粒子を多量に含み，粘土小ブロックが散在する。Ⅲ層はロームが主体で黒色土粒子を混入する褐色土，Ⅳ層は明褐色土，Ⅴ層は黒色土がベースでローム粒子・ローム小ブロックが点在する暗褐色土，Ⅵ層は黒色土で脆弱気味，さらさらしていて崩れやすい。

この層序と性状は人為層序であることは多言を要しない。

遺物の出土状態　本址の遺物総数は133個である。内訳は土師器113個，須恵器1個，土製品1個，石製品1個，自然石17個となる。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，中軸線の西側にまとまって分布し，特にYコーナーのP_6・P_7周辺に集中している。また東壁側の中央よりやや北寄りの限られた部分に際立って集中している。

遺物と時期　土器の器種は土師器では坏形土器・甕形土器・高坏など，須恵器は1片のみで坏形土器の体部破片である。



第一二図　第六号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

41・42　接合資料１　坏形土器（第一四図）丸底で体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部に至る。

13・14　接合資料２　坏形土器（第一四図）平底で体部は内弯して立ち上がり，口縁部との境に明瞭な稜を有し，口縁部はわずかに外反する。

96　坏形土器（第一四図）丸底で体部は内弯して立ち上がり，口縁部は直立気味となる。

46　甕形土器（第一四図）平底で胴中央部に最大径を持つ。頸部から口縁部にかけて丸味をもって外反する。口径19.0cm，胴部最大径27.5，器高32.0cm。

108　高坏（第一四図）脚部欠損坏底部に段をもち内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

29　有孔球形土製品（第一四図）いわゆる土玉。中央部3.5cm，重量40.0グラム。

4　石製品（第一四図）砥石。現存長12.0cm，中央部幅2.6，両面平滑。Ｂ面下端部に小円孔を穿とうとして中止したと思われる盲孔が残る。本址の廃絶は古墳時代中期であろう。

7　第七号住居址　（第一三図・図版第五）

位置および遺存状態　本址は第一調査区の北東部（F－13～14）に位置する。

斜面から平坦面に移行する境に構築されており，遺構確認時に東側は削平しすぎたのかもしれないがプランは確認することができた。竪穴自体には破壊の痕跡は認められない。

形状および規模　平面形状は方形を呈し，北壁W－X間7.0m，東壁X－Z間7.4mを測り，面積約51.8m²を有する大型竪穴である。さらにこの竪穴内にXコーナーを基点としたもう一軒の住居址が存在する。

北壁と東壁が同一線上にある完全重複の竪穴で，このことは建直しか建増しが行われたことを物語っている。

改築前を7H－Aとし改築後を7H－Bとして，7H－Aの面積を計算すると約36.0m²を保有するので，通常では大型竪穴の範疇である。

関野克氏の竪穴住居址居住人数算定公式によれば7H－Aが11人，7H－Bは17人の家族が同居できたことになる。急激な家族増が発生したのであろうか。あるいは北壁中央部に焼土塊が残存することから考えると，集会所的な性格を持つ竪穴かもしれない。本址は全調査区の中で最大規模の竪穴である。主軸線はN－18°－W。

壁高および壁面　残存壁高は低く，もっとも高い周壁でも西壁とYコーナー付近の24cmである。東側へ移行するにしたがい低くなり，東壁は辛うじて確認できる程度である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており，残存部の壁面は堅固である。

床面　多少の凹凸はあるが，A・B両址とも同一床面でおおむね平坦である。床面は硬く踏み固められている。

7H－Aは北壁・西壁・南壁・東壁南東部に周溝がめぐっている。

北壁中央部に長径90cm，短径65cm，厚さ6cmの楕円形状の焼土塊が存在する。

ピット　21個のピットが発見されたが，7H－Aと7H－Bの主柱穴は，位置関係や規模などから明確に識別することができた。次のピットがA・B両址の主柱穴である。

		長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
7H－A	P_2	36	32	72	P_{12}	38	34	66
	P_3	34	32	68	P_{15}	40	34	73
7H－B	P_1	58	52	77	P_{17}	48	38	69
	P_5	58	44	80	P_{21}	44	44	76

XコーナーP_4（深さ54m）とZコーナーP_{18}（深さ58cm）は貯蔵穴であろう。

埋没土　黒褐色土の単一層でやや粘性がある。ローム小ブロック・粘土小ブロックを含む。

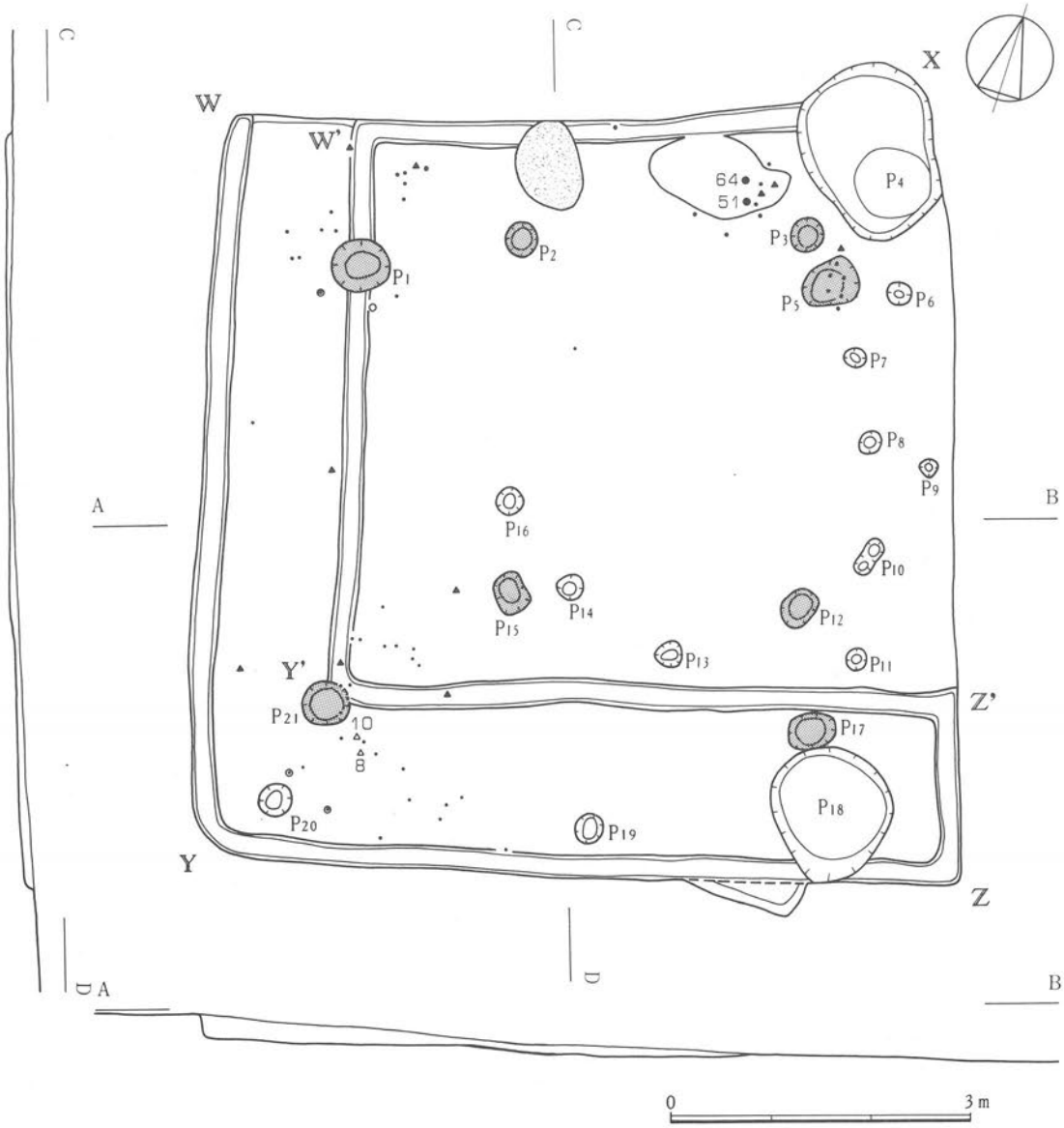
遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は67個である。内訳は縄文土器片3個，土師器51個，須恵器1個，石器2個，自然石10個である。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，W・X・Yの各コーナー付近に偏在する傾向がみられ，全体としては空白部分が多く，竪穴中央部から南東のZコーナーにかけては全く出土しない。

遺物と時期　縄文土器の3片は摩滅の著しい小破片で器種を特定することはできない。縄文土器片は紛れ込んだものであろう。

土師器では実測図資料以外に坏形土器の口辺部・体部破片，甕形土器の胴部破片などが認められる。

須恵器は甕形土器の胴部破片である。



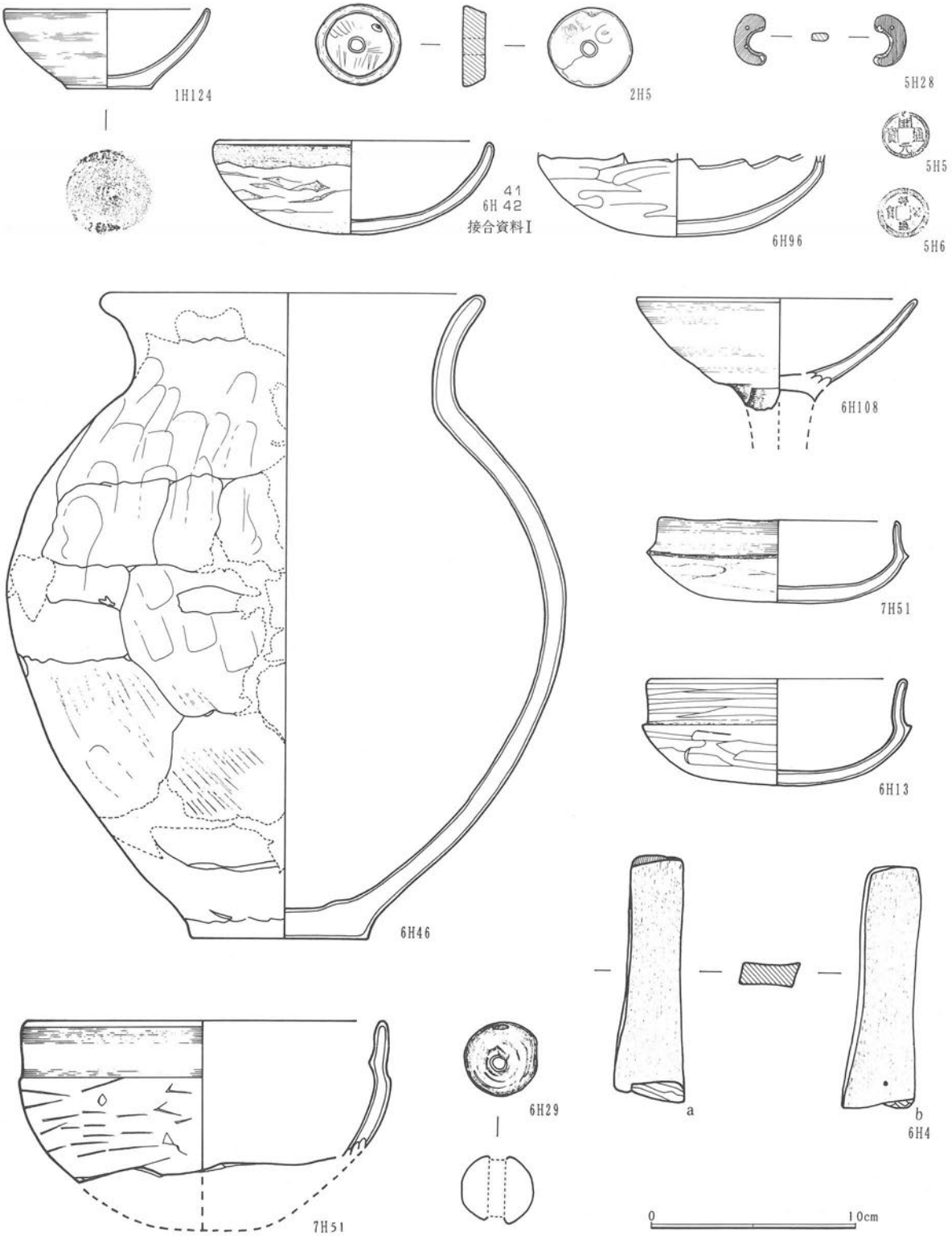
第一三図　第七号住居址実測図，遺物出土状態図

51　　椀形土器（第一四図）底部欠損の土師器。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に低い稜を持ってわずかに外反しながら口縁部にいたる。

8・10　打製石斧（第二〇図）縦長の剝片を素材としており，10の撥形は両面調整が施されている。

縄文時代の所産である。

本址の廃絶は古墳時代中期と思われる。



第一四図　第一・二・五・六・七号住居址出土遺物実測図

8　第八号住居址　（第一五図・図版第六）

位置および遺存状態　本址は第一調査区の北東部（E～F－16）に位置する。遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形状はW・Xコーナーがやや隅丸気味ではあるが，方形と見做してよいだろう。北壁W－X間8.0m，東壁X－Z間7.3mを測り，面積約61.6m²を有する大型竪穴である。

主軸線はほぼ真北を指す。北壁中央部にカマドが設けられている。

壁高および壁面　遺存壁高は低く北壁カマド付近で12cm，東壁中央部13cm，南壁中央部18cm，西壁中央部10cmである。周壁はやや斜めに掘り込まれており，崩落は認められないが堅固とはいい難い。

床面　平坦である。全面にわたり硬く踏み固められている。

ピット　8個のピットが発見されたが主柱穴はP_1・P_2・P_3・P_4の4個である。本址の場合柱穴の正確な情報を得るため半截発掘を試みた。その結果は第一七図および図版第七のとおりである。

第一七図の断面層序説明は，各ピットとも共通の基本的性状をもつ層なので共通の番号で説明した。

P_5・P_6・P_8は深さが8～13cmで性格は不明である。

南壁中央部のP_7は深さが74cmあり，竪穴出入口の施設に伴うピットであろう。

埋没土　竪穴内の埋没土は黒褐色土の単一層であるが，東側はロームブロックが混在する。

カマド　北壁中央部に設けられている。袖部の最大幅は136cmでその構築材は黄褐色粘土とロームを練り固めた材料で構成され，他の補強材は使用していない。

構造は焚口部・燃焼部・煙道部のすべてが壁内に設けられている。

燃焼空間は床面を7cmほど掘りくぼめて形成し，焚口部から煙道部までの長さは105cm，幅は62cmである。

煙道部の先端はゆるやかに傾斜して壁外へ立ち上がる。両袖の壁面は赤変して硬化しており，燃焼部の中央に土製支脚が遺存していた。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は竪穴内が75個，カマド内6個の計81個である。

内訳は竪穴内が土師器70個，自然石5個，カマド内は土師器5個，土製支脚1個となる。

竪穴内の出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，中央部より北側にまとまっている。

遺物と時期　本址の出土遺物のうち土製支脚と自然石を除けばすべて土師器であるが，大部分は小破片で有効資料が少ない。

22　　坏形土器（第二〇図）口辺部～口縁部一部欠損。丸底で体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜をもち口辺部は外反して口縁部にいたる。

K　　カマド内出土の土製支脚（第二〇図）長さ14.3cm，径6.9cm，重量920.7グラム。

本址は時期特定の資料に乏しいが，古墳時代中期の住居址であろうと考えられる。

9　第九号住居址　（第一八図・図版第七）

位置および遺存状態　本址は第一調査区北東部（H－15）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱もなく遺存状態は良好である。

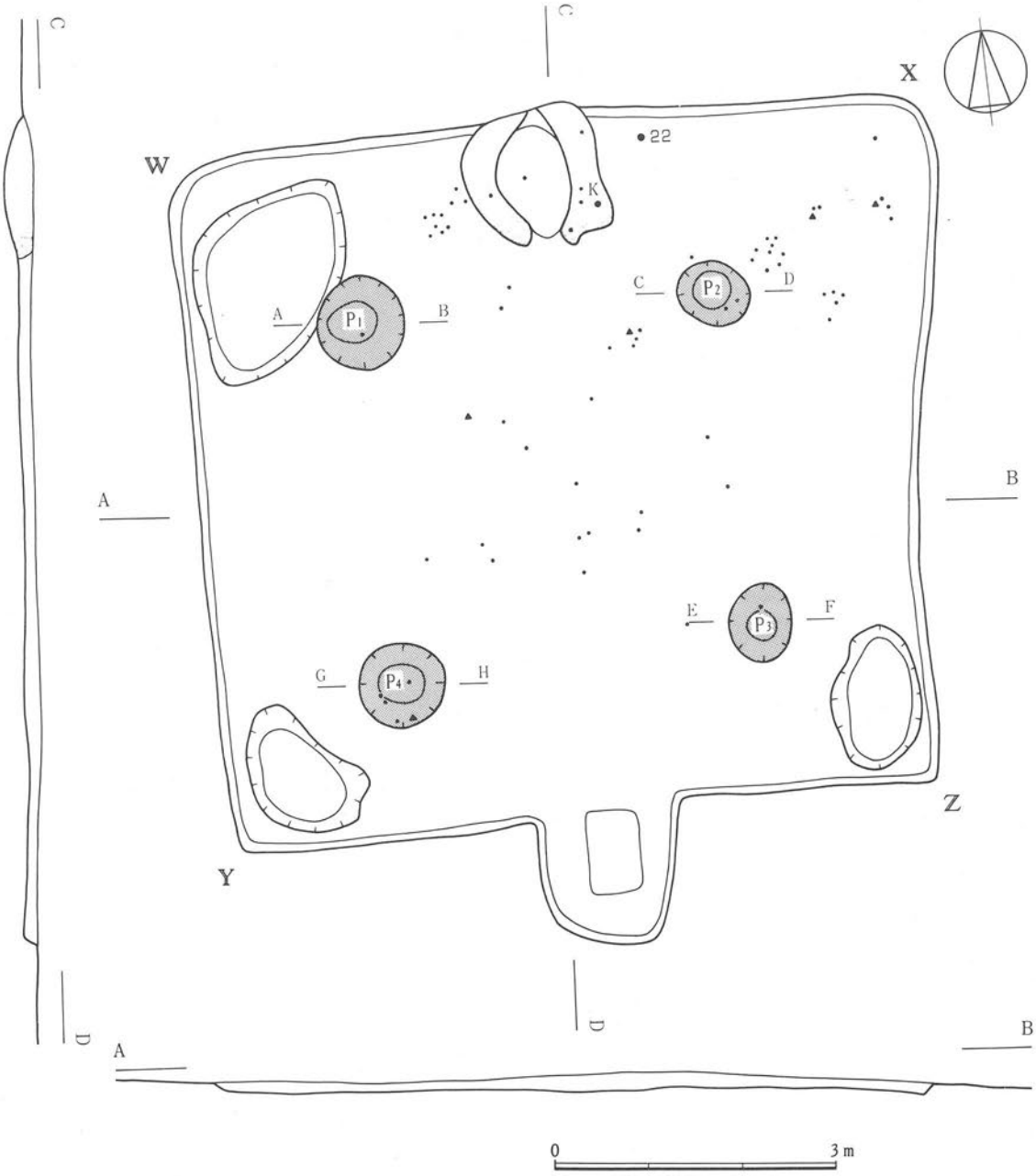
形状および規模　平面プランは方形を呈し，北壁W－X間4.3m，東壁X－Z間4.1mを測り，面積約17.6m²の小形竪穴である。北壁の中央よりやや東寄りの位置にカマドを設けている。主軸線はN－10°－Wを指向する。

壁高および壁面　遺構確認作業は削平しすぎないように慎重に行ったけれども，完掘してみると壁が低い。

黒色土を壁に利用していた可能性も考えられる。

遺存する壁高は東壁10.0cm，西壁9.0cm，南壁8.0cm，北壁12.0cmである。

周壁はほぼ垂直に掘り込まれており，堅固とはいえないが崩落の痕跡は認められない。



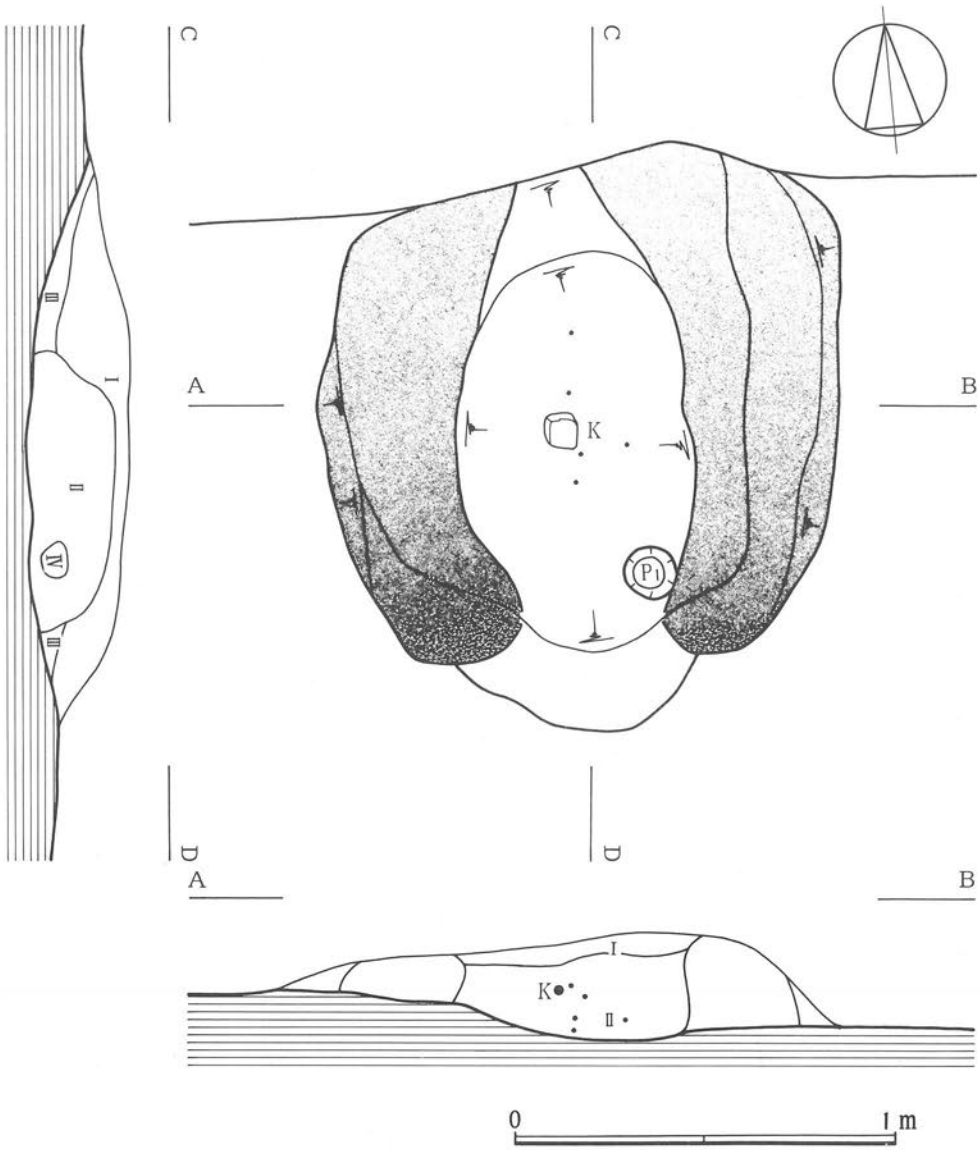
第一五図　第八号住居址実測図，遺物出土状態図

床面　若干の凹凸はあるがおおむね平坦である。中心部とカマドの前面は硬く踏み固められている。西壁の中央部に長さ130cm，幅35～50cm，厚さ9.0cmの焼土塊が存在する。

ピット　6個のピットが発見されたが，位置関係や規模からみて主柱穴の機能を果したのは次の4個である。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P 1	43	30	69	P 3	47	33	63
P 2	33	26	66	P 6	45	43	60

Zコーナーの P 4 は深さが76cmあり，貯蔵穴であろう。



第一六図　第八号住居址カマド実測図，遺物出土状態図

第八号住居址カマド断面層序説明

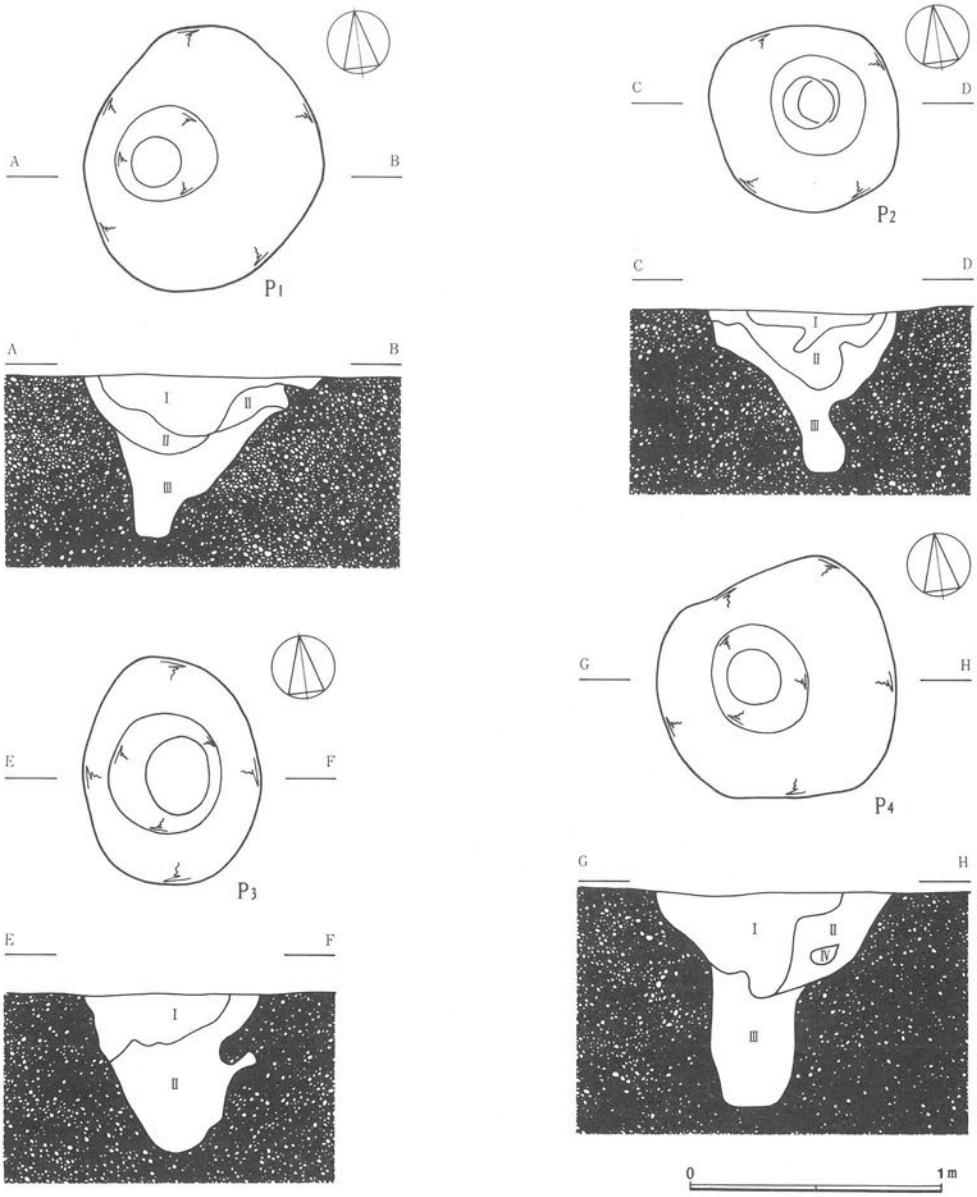
（層序番号はA－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ層　暗褐色土　　黒色土がベースで焼土粒子・ローム粒子少量混入。

Ⅱ層　暗赤褐色土　焼土粒子・炭化物細片・炭火物粒子多量。

Ⅲ層　赤褐色土　　焼土粒子とロームの混合土。

Ⅳ層　焼土ブロック　煉瓦状ブロック。



第一七図　第八号住居址柱穴半截発掘断面図

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P 1	115	94	65	P 3	90	70	63
P 2	75	74	63	P 4	95	95	85

層序説明（層序番号は各ピット共通）

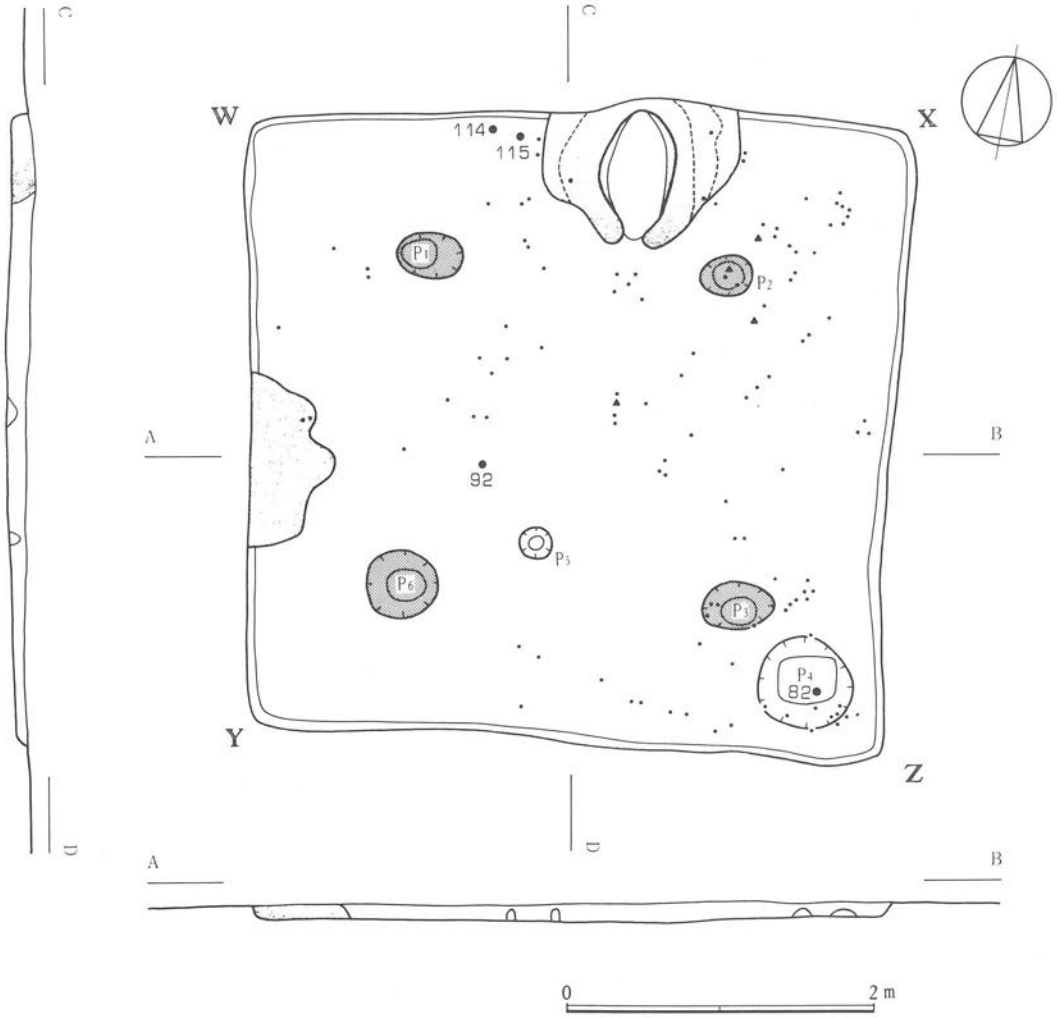
Ⅰ層　黒褐色土　黒色土がベースできわめて少量のローム粒子・ローム小ブロックを含む。固く締っている。

Ⅱ層　暗褐色土　ローム粒子の混入が多くなり，Ⅰ層よりやや色相が明るくなる。

Ⅲ層　褐色土　ロームと黒色土の混合土。

Ⅳ層　ロームブロック

この埋没土の層序と性状は，柱撤去後の人為埋戻しの様相を如実に物語っている。



第一八図　第九号住居址実測図，遺物出土状態図

埋没土　本址の埋没土は黒色土にローム粒子を含む黒褐色土の単一層であるが，西壁際の中央部には焼土塊が残存し，埋没土中にはロームブロックや焼土ブロックが点在する。

カマド　北壁の中央部よりやや東寄りの位置に設けられている。袖部の最大幅は170cmを測る。

天井部は崩落しているが，両袖の構築材は黄褐色砂質粘土とロームを練り固めた材料で構成され，他の補強材は一切使用していない。

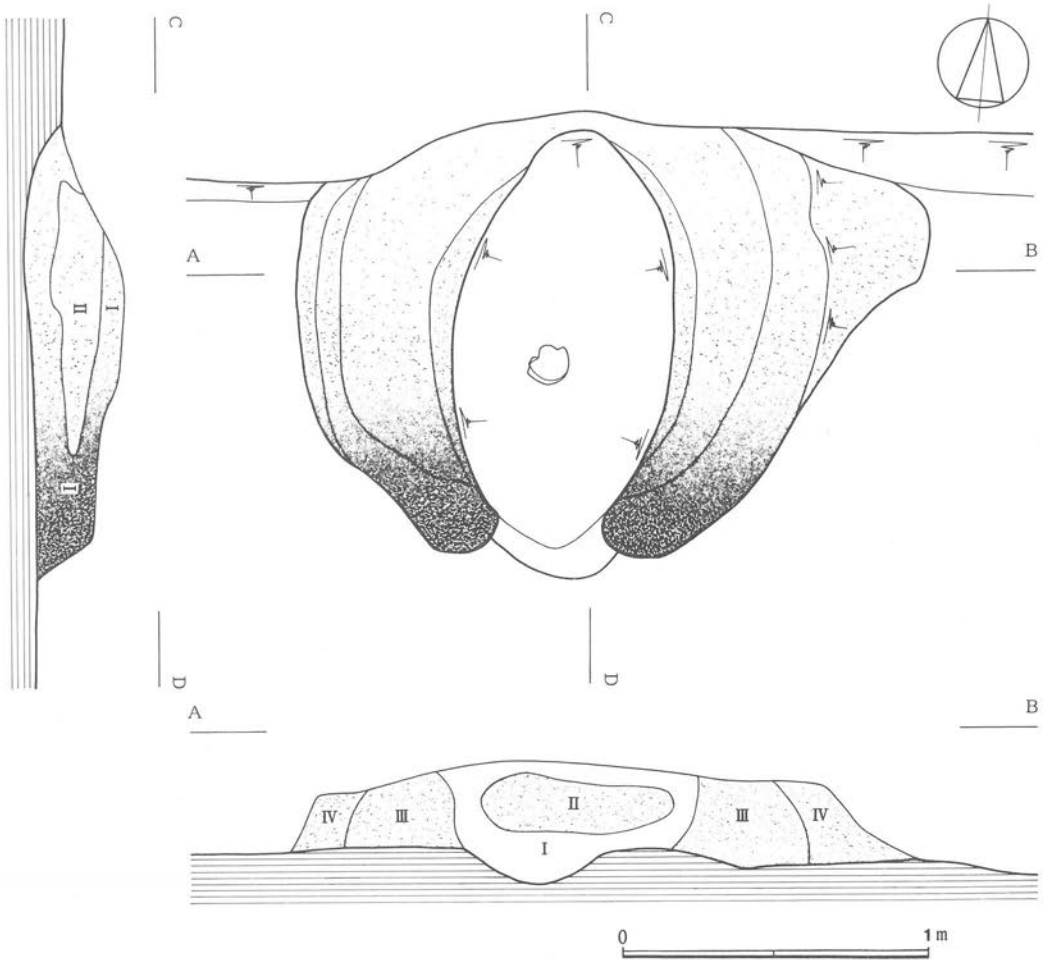
構造は，焚口部・燃焼部・煙道部のすべてが壁内に設けられており，煙道部の先端が極くわずかに壁外へ突き出る程度である。燃焼空間は床面を10cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部までの長さは135cm，幅は72cmである。煙道部先端はゆるやかに傾斜してわずかに壁外へ立ち上がる。

両袖の壁面は赤変して硬化しており，燃焼部の中央付近から土師器坏形土器が出土した。

遺物の出土状態　本址の出土遺物は竪穴内119個，カマド内４個の合計123個である。

内訳は，竪穴内が土師器115個，自然石４個，カマド内は土師器４個となる。

竪穴内の出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，おおむね全面に分布しているが敢えて言及すれば，西壁側は少なく中央より東側に濃密に出土する傾向がみられる。



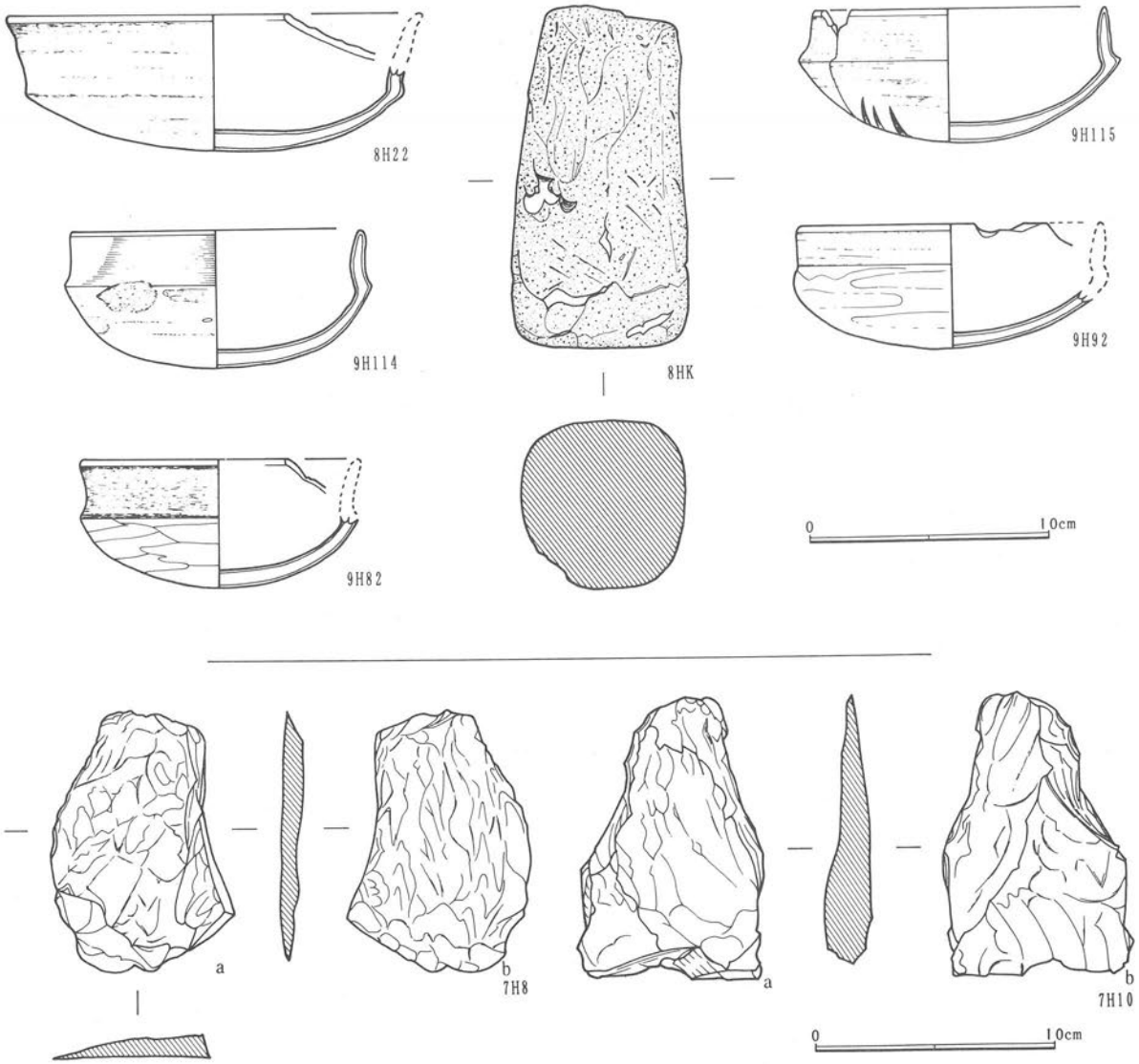
第一九図　第九号住居址カマド実測図

第九号住居址カマド断面層序説明

（層序番号はA－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ層　暗褐色土　黒色土粒子多量。焼土ブロック混在。粘土小ブロック少量混入。

Ⅱ層　赤褐色土　焼土粒子および焼土ブロック多量。黄色砂質粘土小ブロック少量。黒色土粒子・炭化物粒子微量混入。



第二〇図　第七・八・九号住居址出土遺物実測図

遺物と時期　図版第七に示したとおり，出土土器の大部分は土師器坏形土器の体部小破片であるが，その中から次の4個を実側資料として抽出することができた。

82　土師器坏形土器（第二〇図）口辺部一部欠損。丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境にゆるやかな稜をもち口辺部は外反して口縁部にいたる。

92　土師器坏形土器（第二〇図）体部上位～口縁部一部欠損。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境ににぶい稜をもち，直立気味にゆるやかに外反して口縁部にいたる。

114　土師器坏形土器（第二〇図）丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に明瞭な稜をもち，口辺部は外反して口縁部にいたる。

115　土師器坏形土器（第二〇図）口縁部一部欠損。丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に鋭い稜をもち，口辺部は外反して口縁部にいたる。

本址廃絶の時期は古墳時代後期と考えられる。

10　第一〇号住居址　（第二一図・図版第八）

位置および遺存状態　本址は第二調査区の南西隅（A～B－12）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱もなく遺構確認は容易であった。遺存状態は良好である。

形状および規模　平面プランは方形を呈し，東壁Y－Z間5.7m，西壁W－X間5.7m，南壁W－Y間5.8m，北壁X－Z間5.8mを計測し，面積約33.1m²を有する大形竪穴で，ほぼ正方形に近い。主軸線N－17°－E。

壁高および壁面　本址の周壁は良好な状態で遺存しており，その壁高は東壁21cm，西壁10cm，南壁23cm，北壁13cmである。

壁は若干斜めに掘り込まれており，崩落の痕跡は全く認められない。

床面　床面全体が平坦で硬く踏み固められている。

ピット　ピットは5個発見されたが，位置関係や規模からみて主柱穴の役割を果したのは次の4個である。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P_1	44	38	58	P_4	51	50	63
P_2	35	35	57	P_5	46	45	55

埋没土　本址の埋没土は黒色土にローム粒子を多量に混入する暗褐色土の単一層である。北壁際にはロームブロックが認められ，床面直上部はローム粒子の混入がやや多くなるが，区分線は引き難い。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は206個を数える。

内訳は土師器175個，須恵器2個，石製品2個，自然石27個となる。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，竪穴内から万遍なく出土しているとはいうものの，北壁側は少なく南壁側の集中する傾向を指摘することができる。

特に南東のYコーナー付近には完形品や復元可能品がまとまって出土しており，時期特定には有効な資料となった。

また，接合資料Iの接合線の在り方は，廃絶時における土器の一括投棄の方向性を示唆するものであろう。

遺物と時期　出土した土器の器種を分類すると，土師器では甕形土器・坏形土器・椀形土器・鉢形土器・坩形土器・高坏形土器などがあり，須恵器は坏形土器である。

石製品は模造品で剣形品と有孔円板である。

接合資料I　28・167・168　土師器小形椀形土器（第二三図）口縁部一部欠損

丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境にかすかな稜をもち，口辺部は内傾気味で口縁部は外反する。

4　土師器小形椀形土器（第二二図）準完形品

丸底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたり外反する。

1　土師器甕形土器（第二二図）準完形品

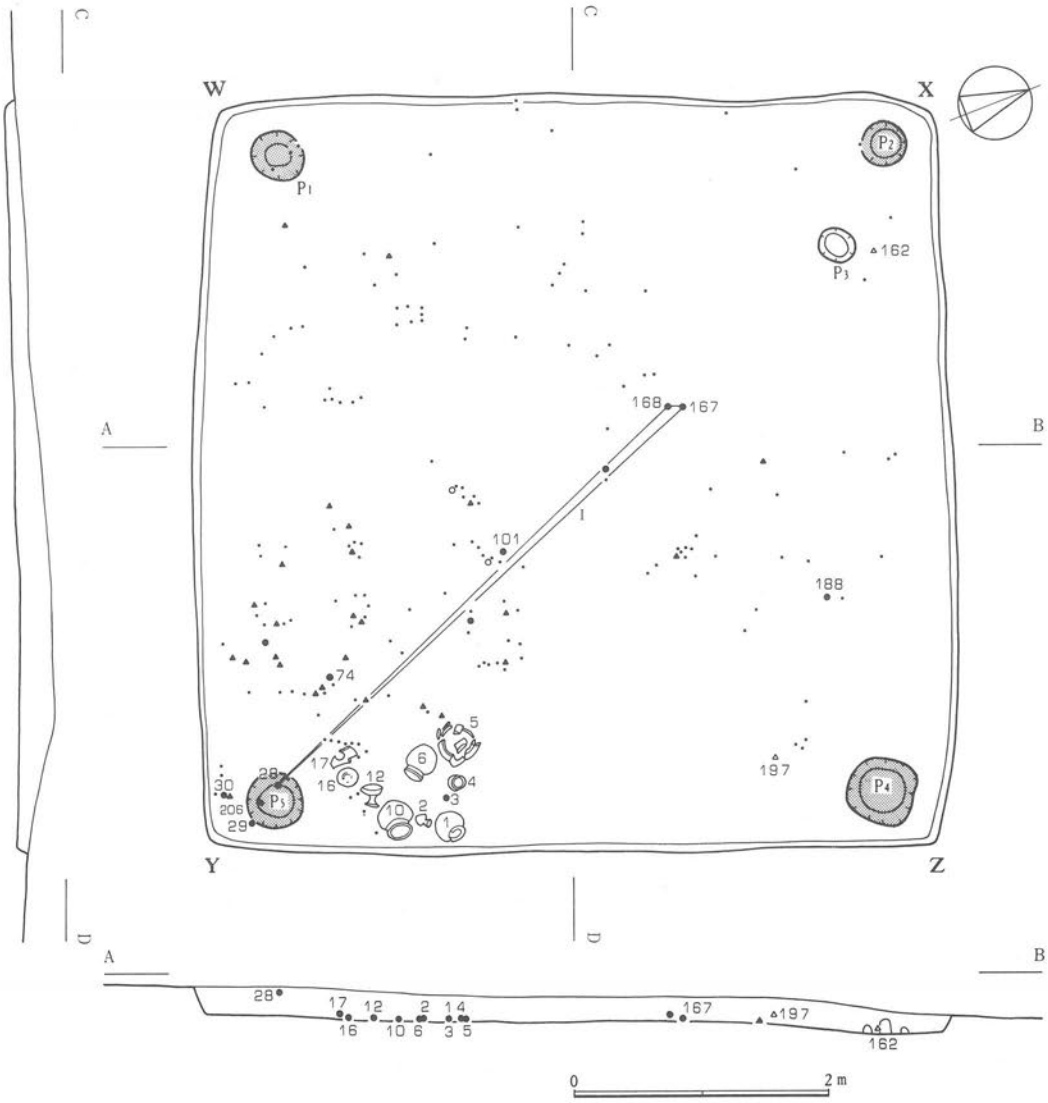
底部突出平底，胴部は内弯して立ち上がり，頸部から「く」の字状に外反して口縁部にいたる。口径16.0cm，胴部最大径を中位にもち22.7cm，器高25.2cm。

6　土師器甕形土器（第二二図）接合複元品

平底。胴部は内弯して立ち上がり，頸部から「く」の字状に外反して口縁部にいたる。口径18.2cm，胴部最大径を中位にもち23.0cm，器高26.6cm。

17　土師器甕形土器（第二二図）胴部上位より上部の大形破片。

胴部は内弯して立ち上がり，頸部より「く」の字状に外反して口縁部に至る。口径14.8cm。



第二一図　第一〇号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

10　土師器甕形土器（第二三図）完形品

丸底。胴部は内弯して立ち上がり，頸部から「く」の字状に外反して口縁部にいたる。

口径16.8cm，胴部最大径を中位にもち23.5cm，器高27.5cm。

29　土師器坏形土器（第二二図）口辺部一部欠損

上げ底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたり外反する。

188　土師器坏形土器（第二二図）完形品

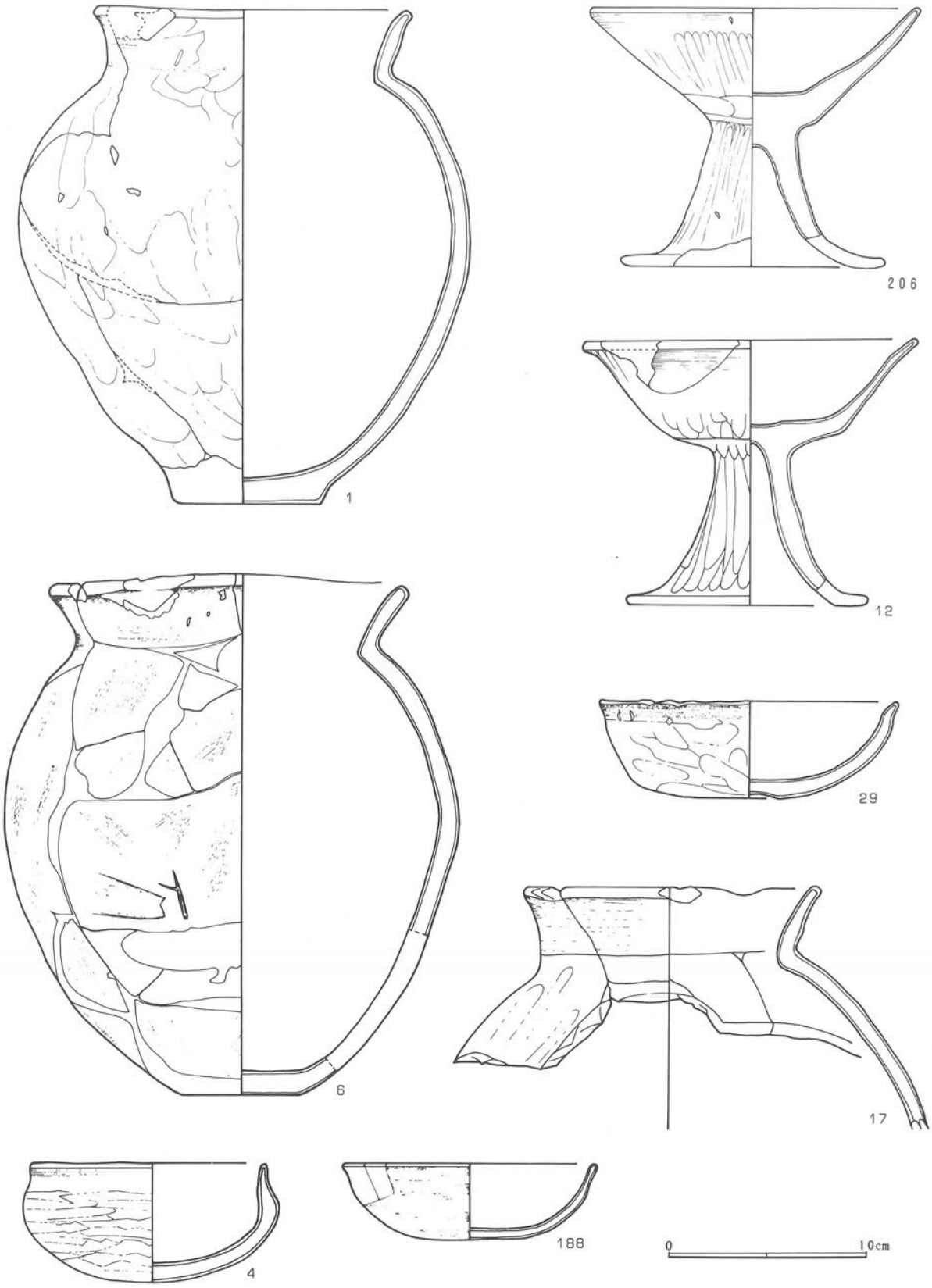
平底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部はわずかに外反して口縁部にいたる。

101　須恵器坏形土器（二三図）約50％欠損

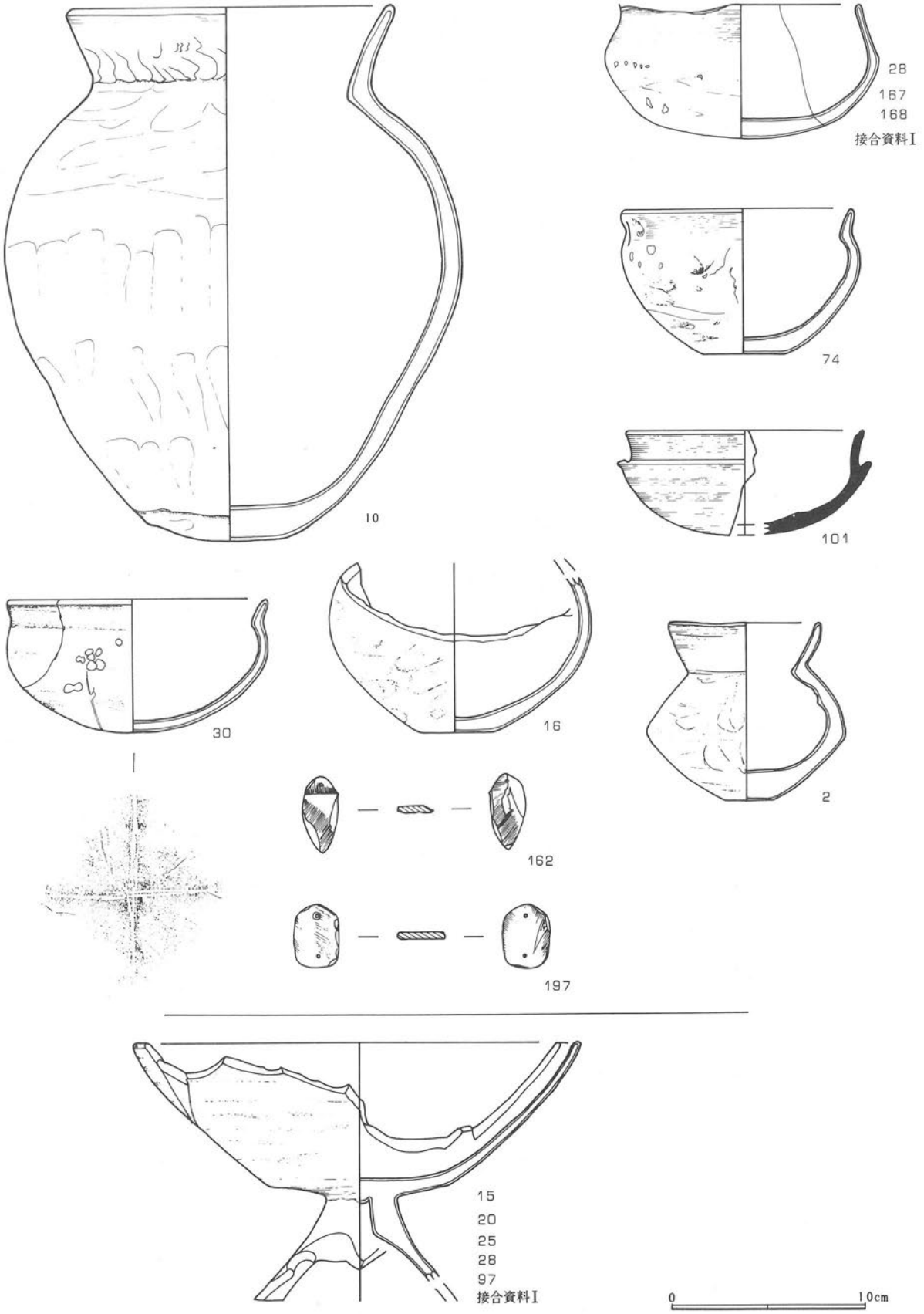
丸底。胴部は内弯して立ち上がり，最大径を上位にもつ。口辺部は外傾して口縁部が開く。

30　土師器小形鉢形土器（第二三図）約40％欠損

丸底。胴部は内弯して立ち上がり，最大径を上位にもつ。口辺部は外傾して口縁部が開く。



第二二図　第一〇号住居址出土遺物実測図（一）



第二三図　第一〇号住居址出土遺物実測図（二）・第一二号住居址出土遺物実測図（下段）

74　　土師器小形鉢形土器（第二三図）完形品

平底。胴部は内弯して立ち上がり，最大径を上位にもつ。口辺部は外反して口縁部にいたる。

2　　土師器坩形土器（第二二図）接合復元品

平底。胴部は中位が強く張り球形状を呈する。口辺部は内弯気味に開いて口縁部にいたる。

12　　土師器高坏形土器（第二二図）接合復元品

脚部は円筒状で裾部は「ハ」の字状に大きく開き，末端は外反する。

坏部は下位に稜をもち，外傾して開き口縁部がさらに外反する。

206　　土師器高坏形土器（第二二図）接合復元品

脚部は円筒状で裾部は「ハ」の字状に大きく開き，末端は外反する。

坏部は底部に稜をもち，直線的に外傾して開き，口縁部にいたる。

162　　石製模造品〈剣形品〉（第二三図）完形品

剣形品は，通常，その型態的特徴によってⅠ～Ⅲ類に大別されているが，本品は，両面の鎬が省略されて，断面が板状に扁平なⅢ類の範疇に入るだろう。

長径39㎜，短径19㎜，厚さ４㎜，重量4.5グラム，素材滑石。

197　　石製模造品〈有孔円板〉（第二三図）完形品

有孔円板は，通常，その形状によってⅠ～Ⅱ類に分類されているが，本品は，その形状が長方形を呈し，ほぼ対称的に２孔を有する第Ⅱ類６種の仲間になるだろう。

長径33㎜，短径23㎜，厚さ3.7㎜，重量６グラム，素材滑石。

本址廃絶の時期は古墳時代前期末葉と考えられる。

11　第一一号住居址　（第二四図・図版第九）

位置および遺存状態　本址は第二調査区の北西隅（D～E－17～18）に位置する。

北側へ５°傾斜する緩斜面に構築されており，北壁に相当するW－X間には浅い溝が走っており，北壁の確認はできない。幸いにして溝は壁に沿って掘られているので平面形状の確認はできた。遺存状態はおおむね良好である。

形状および規模　平面プランは隅丸方形を呈し，北壁W－X間5.3ｍ（推定），東壁4.6ｍを測り，面積約24.4㎡の中形竪穴である。主軸線はN－7°－Eを指向する。

壁高および壁面　北壁以外の周壁は低いけれども遺存している。東壁21㎝，西壁14㎝，南壁18㎝の壁高である。壁はやや斜めに掘り込まれており，崩落の形跡は認められない。

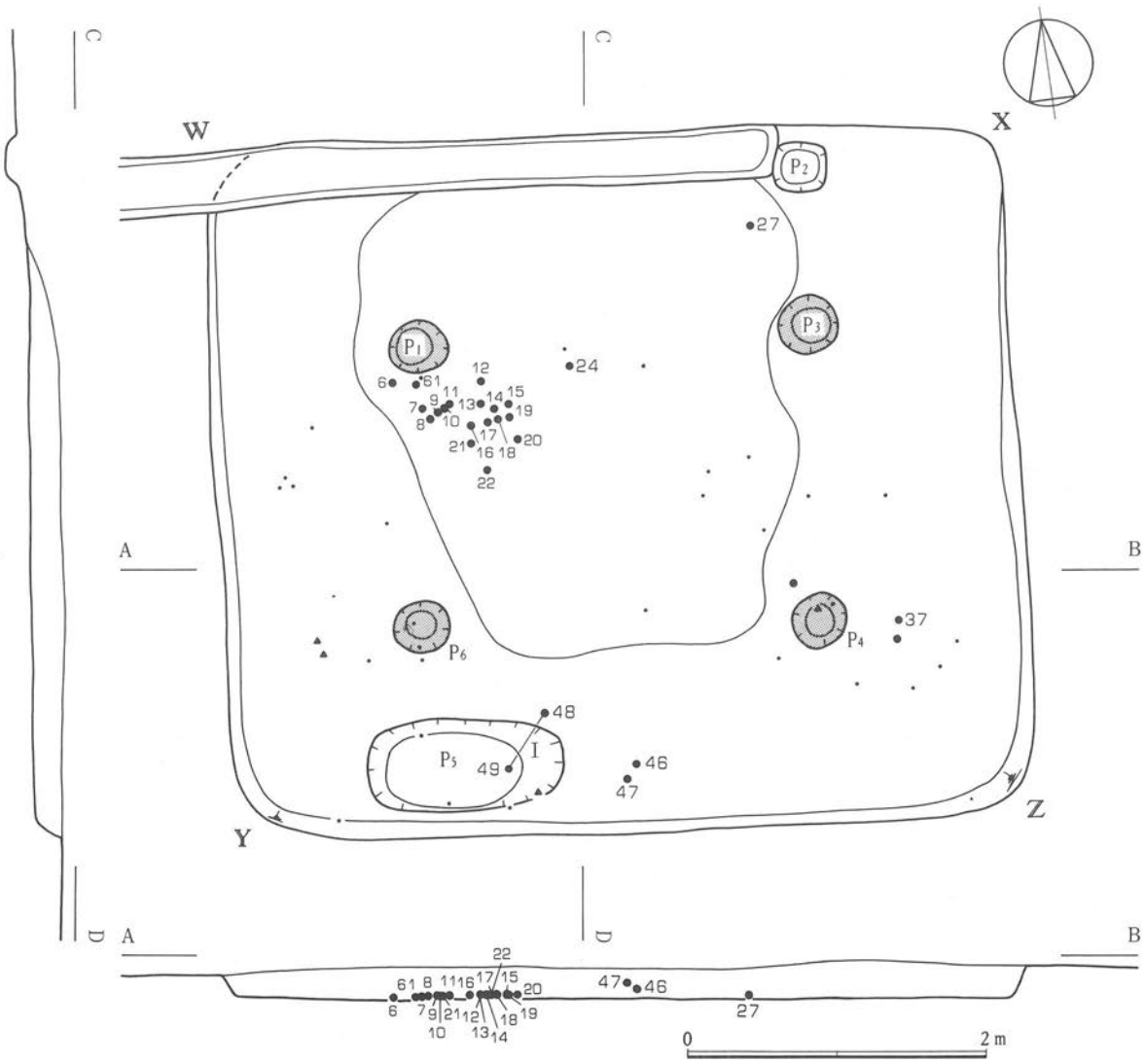
床面　埋没土観察の断面図には明確に現れてはいないが，本址の床面は中央部が高いなだらかな凸字状を呈する。その中央部はロームを踏み固めて土間状の硬さになっている。

周辺の床面は，小円礫まじりの黄色砂質土を多量に混入するロームで，踏み固めたような形跡は確認できないが，移植鏝が突き通らないほどの硬さである。このような床面の竪穴は本址だけである。

ピット　ピットは６個発見されたが，位置関係や規模からみて主柱穴の機能を果したのは次の４個である。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位㎝）
P_1	40	34	40	P_4	38	37	57
P_3	40	38	45	P_6	40	34	48

南壁際のP_5は深さが13㎝で，青白色砂質土が埋没していたが性格は不明である。



第二四図　第一一号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

埋没土　黒色土とローム粒子が均一に混合した暗褐色土の単一層で，小円礫が混在する。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は61個である。内訳は土師器37個，土製品21個，自然石３個となる。

ドットを使った平面分布の在り方を観察すると，土器は全面から疎らに出土しているが，Wコーナー方向のP₁付近からは，20個を数える有孔球形土製品，いわゆる土玉がまとまって出土している。

遺物と時期　出土した土器片の大部分は小破片で器種の特定にいたらないものが多い。

接合資料Ⅰ　48・49　土師器埦形土器（第二五図）

平底。体部は外傾気味に立ち上がり，上位はゆるやかに内弯しながら口縁部にいたる。

24　土師器埦形土器（第二五図）約40％欠損

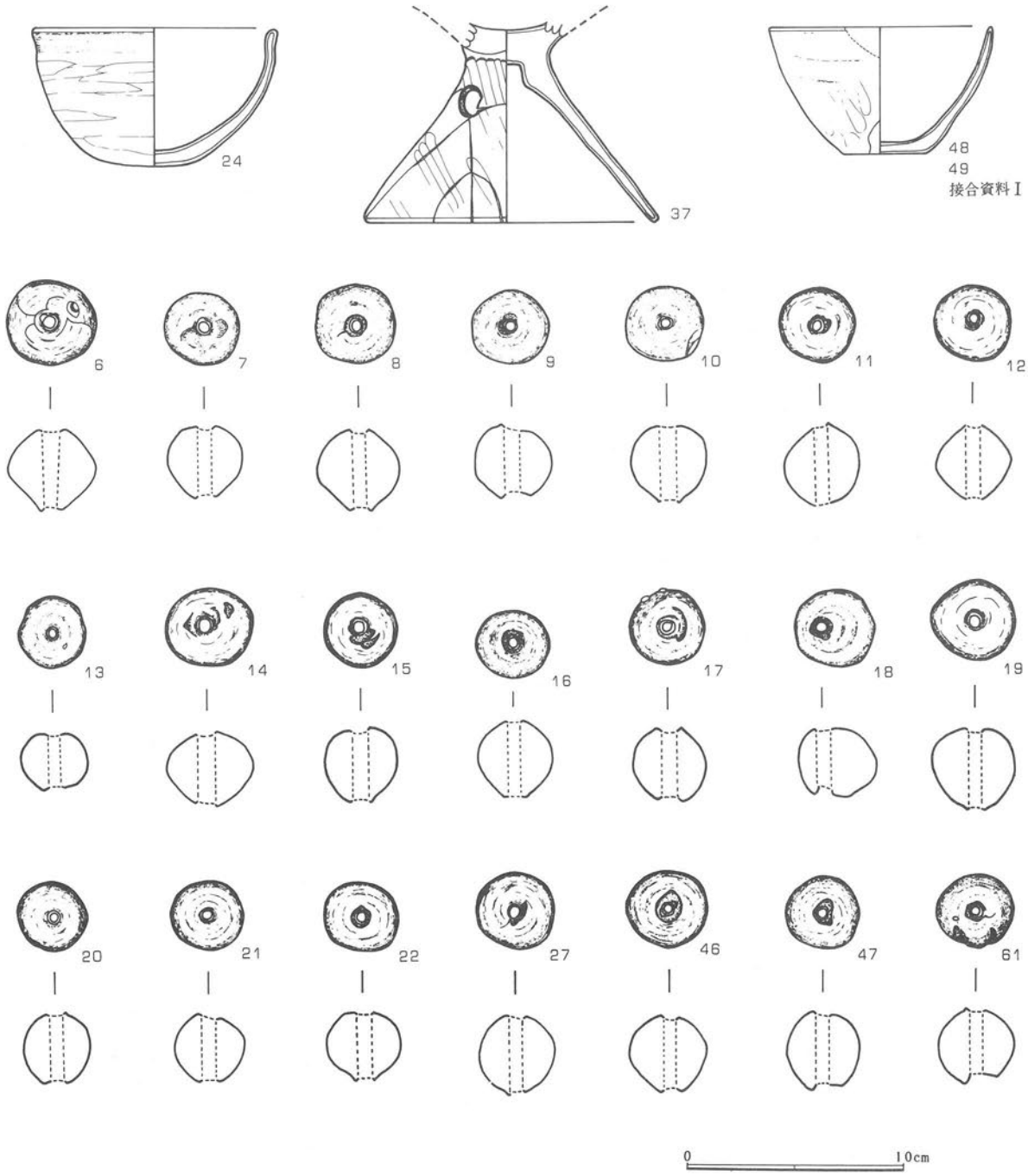
平底。底部から内弯して立ち上がり，口辺部は直立気味になって口縁部にいたる。

37　土師器器台形土器（第二五図）脚部のみ

脚部は「ハ」の字状に大きく開き，そのまま裾部にいたる。脚部上位に３孔が穿たれている。

6～22・27・46・47・61（第二五図）この21個は，土玉あるいは球形土錘とよばれる漁労用の土製品である。

本址廃絶の時期は古墳時代前期末葉と思われる。



第二五図　第一一号住居址出土遺物実測図

表1　有孔球形土製品（土玉）計測値　　単位　最大径：mm　重量：g

番号	最大径	重量	備　考	番号	最大径	重量	備　考	番号	最大径	重量	備　考	番号	最大径	重量	備　考
6	42	56		12	35	36		18	37	42		46	37	43	
7	34	40		13	32	30		19	38	50		47	34	40	孔部摩滅
8	37	48		14	40	43		20	33	33		61	35	38	孔部摩滅
9	36	40	孔部摩滅	15	34	36		21	33	32					
10	35	40		16	34	36		22	34	32					
11	35	40		17	34	37		27	36	46					

12　第一二号住居址　（第二六図・図版第一〇）

位置および遺存状態　本址は第二調査区の北西部（F－15～16）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱もなく遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形はほぼ方形を呈する。南壁Y－Z間7.5m，北壁W－X間7.5m，東壁6.9m，西壁7.1mを測り，面積約55.5m²の大形竪穴である。主軸線はN－6°－Eを指向する。

壁高および壁面　本址の周壁の遺存状態は良好である。壁高は，東壁16cm，西壁28cm，南壁30cm，北壁20cmを測る。

周壁はすべて斜めに掘り込まれており，壁面は堅固で崩落の痕跡は全く認められない。

床面　細かい凹凸はあるがおおむね平坦で，全面にわたり土間状に硬く踏み固められている。

ピット　15個のピットが発見されたが，位置関係や規模からみて主柱穴の機能を果したのは次の4個である。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P_1	38	36	49	P_9	70	40	51
P_5	64	37	51	P_{13}	80	50	50

古墳時代の竪穴住居は4本柱が主流であるとはいえ，本址のように面積が55m²もある住居では，4本柱で屋根の荷重を支えなければならないという構造力学上からも，主柱にかかる負担を軽くする必要があるだろう。

P_6・P_8・P_{14}などはその補助柱穴の役割りをしたものと考えられる。

埋没土　黒色土にローム粒子を混入する黒褐色土である。層序を区分するような性状の変化は見当らない。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は186個である。内訳は土師器176個，土製品1個，自然石9個である。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，周壁際は疎らであるがほぼ全面から万遍なく出土している。特に中央部付近は濃密なまとまりをみせている。

また，接合線の在り方は，土器番号97を基点としてZコーナー方向に放射状に展開している状況は，投棄された土器が割れて飛散した状態を示すもので，このことは，住居廃絶後にWコーナーからZコーナーに向って一括投棄した土器投棄の方向性を示唆するものであろう。

遺物と時期　埦形土器・坩形土器・高坏形土器・器台形土器のほかに破片から器種が窺えるものとしては坏形土器・甕形土器などがある。

接合資料Ⅰ　15・20・25・28・97　土師器高坏形土器（第二三図）脚部中位～坏部

脚部中位～裾部欠損。坏部も欠損約50％。脚部は緩やかに外反して開く。脚部中位に3孔あり。坏部は底部に稜をもち，内弯気味に立ち上がりそのまま口縁部にいたる。

114　土師器埦形土器（第二九図）準完形品

平底・体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

144　土師器坩形土器（第二九図）半完形品

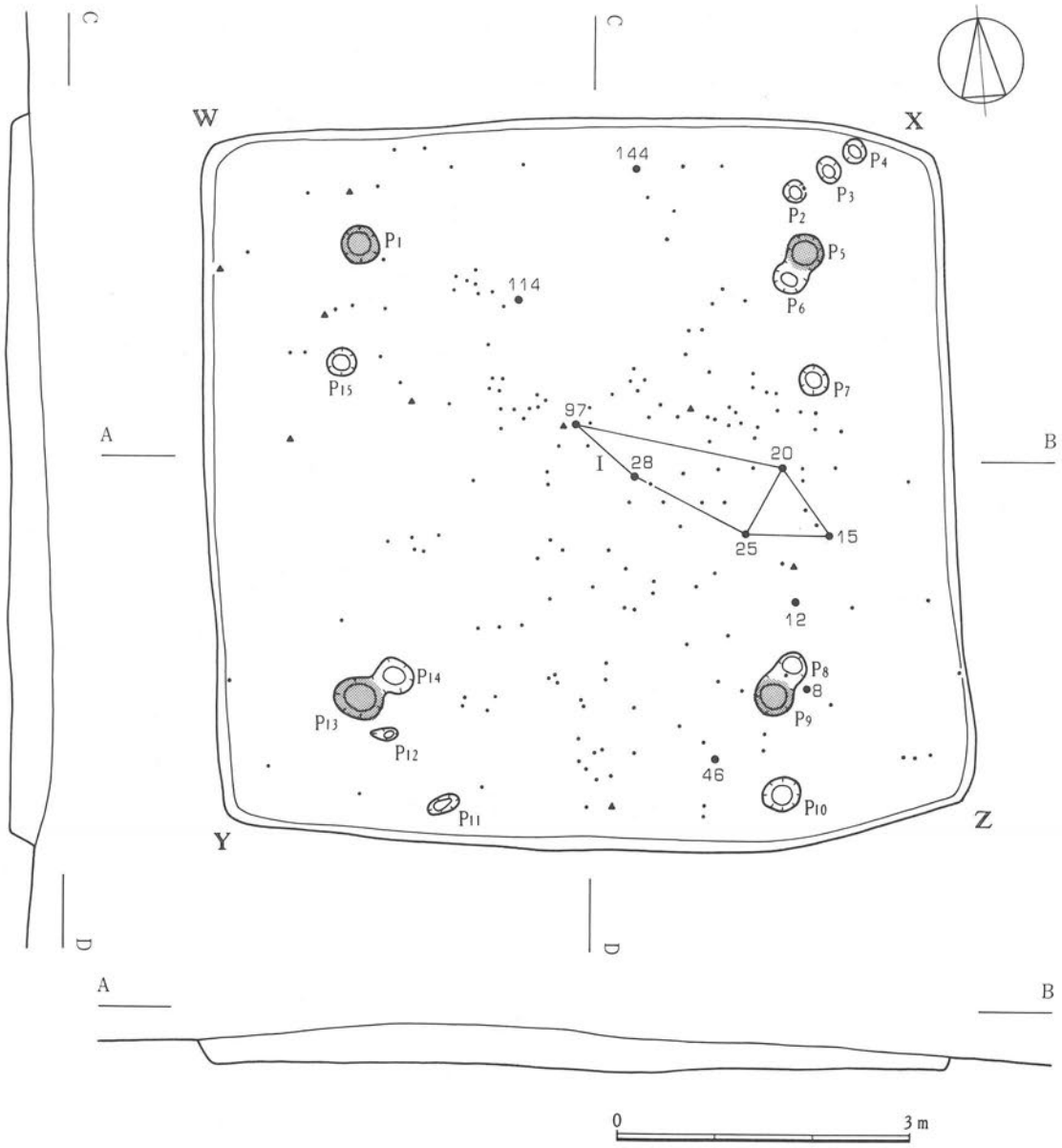
平底。体部は内弯して立ち上がり口辺部との境はくびれる。口辺部は内弯気味に大きく開き口縁部にいたる。口辺部の高さは体部の1.5倍を有する。

8　土師器器台形土器（第二九図）脚部

脚部は「ハ」の字状に大きく開き，外反気味に裾部にいたる。脚部中位に3孔を穿つ。

46　土製品＜有孔球形土製品＞（第二九図）完形品　最大径34mm，重量29グラム。

本址廃絶の時期は古墳時代前期末葉と考えられる。



第二六図　第一二号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

13　第一三号住居址　（第二七図・図版第一一）

位置および遺存状態　本址は第二調査区北西中央部（G～H－12）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱もなく遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は隅丸長方形に近似する形状を呈する。東壁X－Z間5.2m，西壁5.2m，南壁Y－Z間6.2m，北壁W－X間6.4mを測り，面積約32.8m²の大形竪穴である。主軸線はN－4°－Eを指向する。

床面の中央よりやや北寄りの位置に地床炉址が残存する。

壁高および壁面　本址の周壁の遺存状態は良好である。壁高の計測値は，東壁20cm，西壁30cm，南壁32cm，北壁30cmという高さになる。

周壁はやや斜めに掘り込まれており，壁面は堅固で崩落の形跡は全く認められない。

床面　多少の凹凸はあるがおおむね平坦で，周壁際にいたるまで土間状に硬く踏み固められている。

床面中央よりやや北寄りの位置に炉址が検出された。

ピット　37個のピットが発見された。計測値は下表のとおりである。

表２　第一三号住居址ピット計測値　　（単位cm）

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P_1	30	24	11	P_{11}	22	16	16	P_{21}	31	23	27	P_{31}	27	19	15
P_2	28	24	17	P_{12}	26	24	24	P_{22}	20	17	14	P_{32}	18	17	15
P_3	42	24	23	P_{13}	28	24	31	P_{23}	30	26	15	P_{33}	31	23	17
P_4	24	22	9	P_{14}	18	16	8	P_{24}	30	28	30	● P_{34}	40	37	59
● P_5	38	30	67	P_{15}	24	24	21	● P_{25}	36	26	29	P_{35}	54	44	13
P_6	50	20	31	● P_{16}	40	34	65	P_{26}	21	19	8	P_{36}	27	26	20
P_7	24	21	10	P_{17}	26	22	18	P_{27}	25	18	11	● P_{37}	37	35	31
P_8	33	22	19	P_{18}	19	18	22	P_{28}	23	19	10				
P_9	30	23	23	P_{19}	46	15	26	P_{29}	70	54	39				
P_{10}	22	18	11	P_{20}	23	21	12	● P_{30}	38	38	70				

これらのピットのうち位置関係や規模などをみるとP_5・P_{16}・P_{25}・P_{30}・P_{34}・P_{37}の６個が主柱穴のように思われる。また北壁際に連なるピット群は，壁面保護の処置柱穴かもしれない。

炉址　床面の中央よりやや北寄りの位置から炉址を検出した。南北方向に長軸を持ち，長径140cm，短径88cmの楕円形状を呈する。床面を12cmほど皿状に掘り窪めて燃焼部を形成した地床炉である。

焼土ブロック・焼土粒子を多量に含む赤褐色土が充満している。遺物は出土しない。

埋没土　本址の埋没土は，黒色土にローム粒子を混入する黒褐色土の単一層であり，強いて区分線を引くような層序の変化は認められない。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は150個である。内訳は土師器143個，土製品４個，自然石３個である。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，A－Bセクションより南側に偏在する傾向がみられる。

東壁際のZコーナー付近からは接合資料が１例出土し，西壁寄りの床面直上から４個の球形土錘が出土した。

遺物と時期　埦形土器・坩形土器・器台形土器・手捏土器のほかに，破片から器種が窺えるものとしては，坏形土器・甕形土器などがある。

接合資料Ⅰ　１・２・３・５　土師器器台形土器（第二九図）欠損品

脚部上位は緩やかに外反して開き，下位は内弯気味で裾部にいたる。坏部は外傾して口縁部にいたる脚部中位に３孔。器受部中央に１孔。

15　土師器埦形土器（第二九図）欠損品

平底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたり軽く外反する。

105　土師器坩形土器（第二九図）欠損品

底部やや上げ底。体部は内弯し，口辺部との境に明瞭なくびれがある。

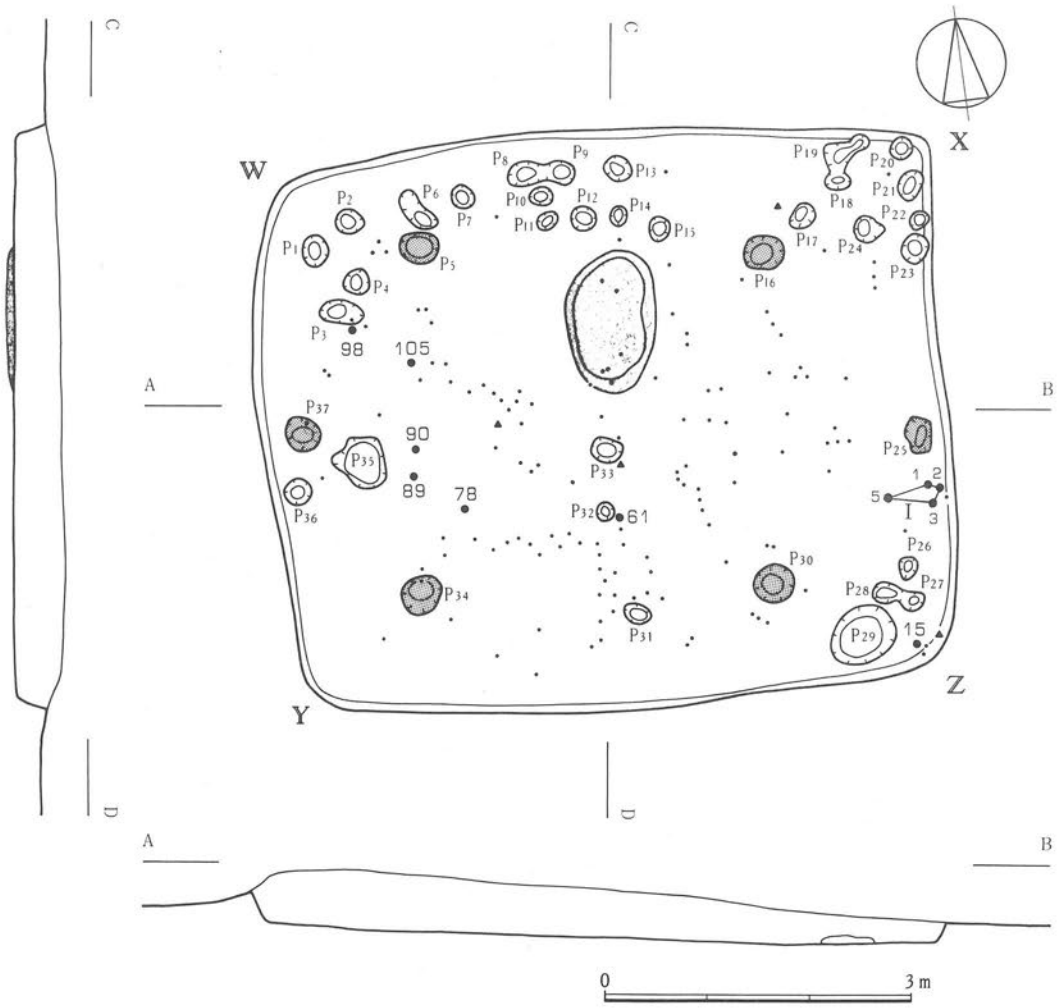
口辺部は内弯気味に立ち上がり，口縁部にいたる

98　土師器手捏土器（第二九図）完形品

平底，体部は外傾して立ち上がり，口縁部は直立する。体部外面に指頭圧痕あり。内面横ナデ。

61・78・89・90　有孔球形土製品（第二九図）土玉あるいは球形土錘と呼ばれる漁労用具。

本址廃絶の時期は古墳時代前期であろう。



第二七図　第一三号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

14　第一四号住居址　（第二八図・図版第一二）

位置および遺存状態　本址は第二調査区の中央部北寄り（H～I－14～15）に位置する。

平坦部に構築されているが，試掘調査のトレンチを設定した場所に該当し，その際に削平しすぎたため，一部の床面を露呈してしまった。北西隅のXコーナーには壁高の中段までの撹乱穴があり，南東隅のYコーナーは僅かに第一五号住居址と重複している。したがって遺存状態は良好とはいえない。

形状および規模　平面形状は方形を呈する。東壁長6.6m，西壁長6.5m，南壁長6.6m，北壁長6.6mを測り，面積約43.6m²を有する大形竪穴である。主軸線はN－15°－Wを指す。

壁高および壁面　残存壁のもっとも高い部分はWコーナーの34cm，対角線上のZコーナーは27cmを測る。

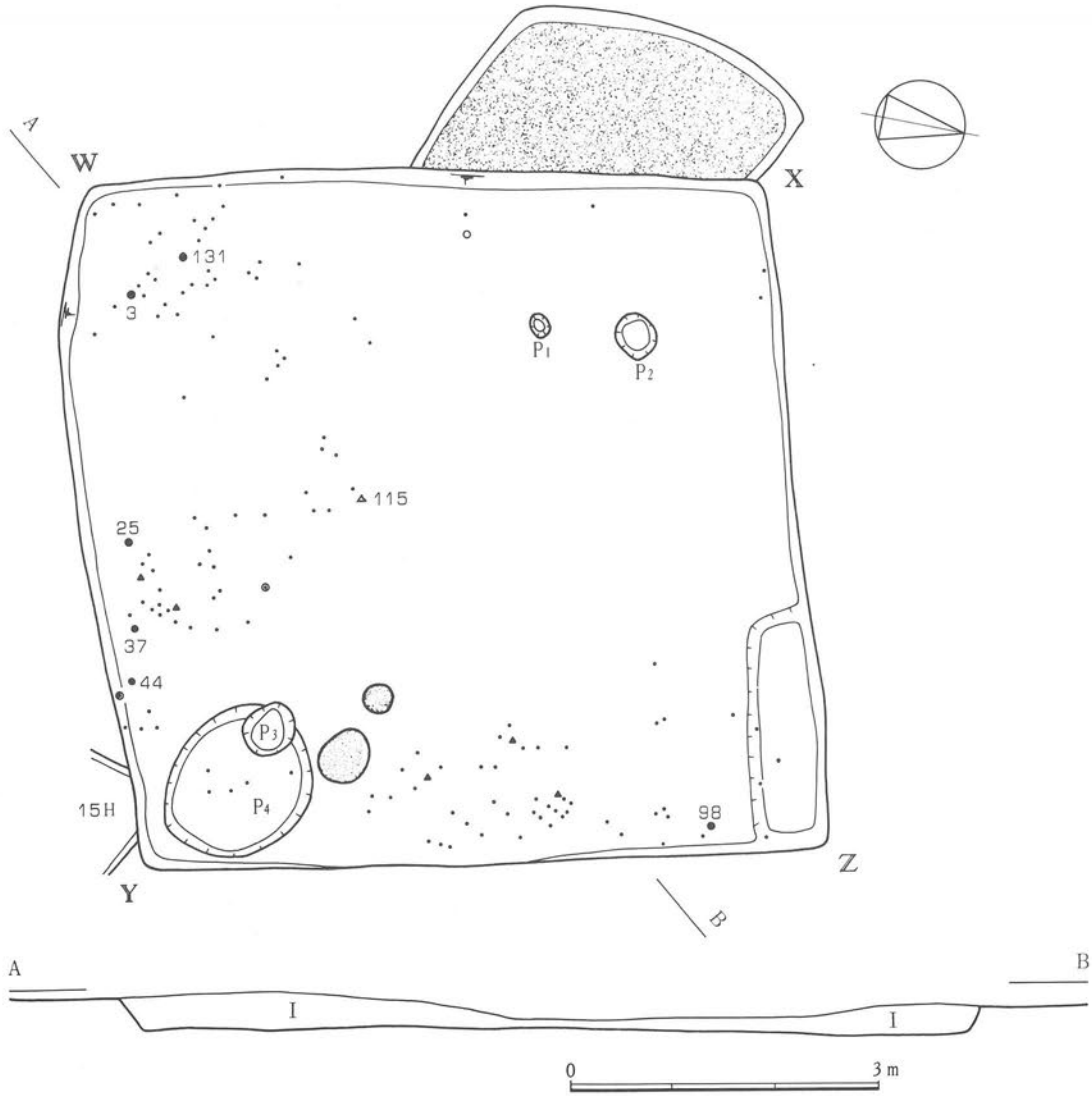
壁はやや斜めに掘り込まれており，残存壁面は堅牢である。

床面　若干の凹凸が認められる。一日陽光に曝すと亀裂を生ずる程硬く踏み固められている。

ピット　4個のピットを検出したが，柱穴と見做すことができるのはP₂・P₃の2個だけである。

埋没土　本址の埋没土は，黒色土にローム粒子と黄色砂質を混入する暗褐色土のI層で，区分線は引けない。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は145個である。内訳は，縄文土器2個，土師器136個，須恵器1個，石製品1個，自然石5個となる。平面分布の状態は南壁と東壁側に集中する。



第二八図　第一四号住居址実測図，遺物出土状態図

遺物と時期　特定できる器種としては，坏形土器・壺形土器・埦形土器などがある。縄文土器は深鉢形の胴部破片と思われる。須恵器は坏形土器の体部破片である。

3　土師器坏形土器（第二九図）欠損品。上げ底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

25　土師器坏形土器（第二九図）準完形品。平底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

37　土師器坏形土器（第二九図）欠損品。平底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

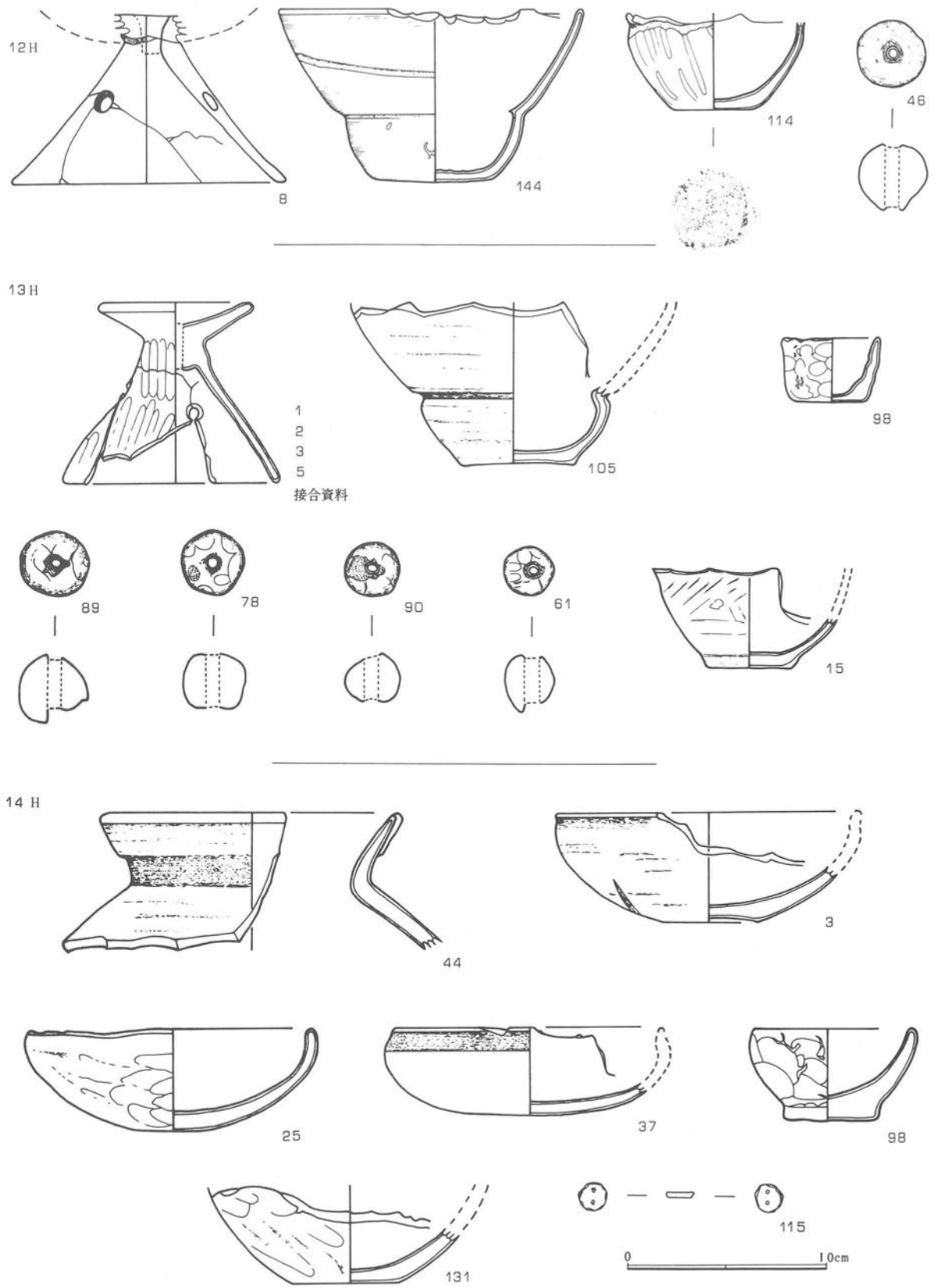
44　土師器壺形土器（第二九図）頸部～口縁部破片。複合口縁の破片である。

98　土師器小形埦形土器（第二九図）準完形品。平底。体部は緩やかに内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

131　土師器埦形土器（第二九図）体部下位～底部。平底。体部は内弯して立ち上がる。

115　石製模造品〈有孔円板〉（第二九図）完形品。

有孔円板については，第一〇号住居址で詳述したが，本品は形状がほぼ円形（不整形も含む）を呈し，略対称的に２孔を有する第Ｉ類ｂ種の仲間になるだろう。



第二九図　第一二号（上段），第一三号（中段），第一四号（下段）住居址出土遺物実測図

長経14.0㎜，短径13.5㎜，重量1.0グラム，素材は滑石である。

本址の廃絶は古墳時代中期と考えられる。

15　第一五号住居址　（第三〇図・図版第一三）

位置および遺存状態　本址は第二調査区の中央部北寄り（Ｊ－14）に位置する。

本址は，北西のＷコーナーと南東のＺコーナーを結ぶ対角線を境として，西側と南側は平坦面，北側と東側は15°の斜面に構築されており，平坦面の部分は遺存していたが，斜面の部分は今回の調査以前に湮滅していたと思われる形跡がある。したがって遺存面積は60％程度であろう。Ｗコーナーは第一四号住居址と重複する。

形状および規模　構築当時は長方形を呈していたものと考えられるが，残存部の平面形は三角形状を呈する。

残存する辺長によって当時の規模を推計すると18m²前後の小形竪穴であったと推考する。

残存部の規模は約12m²である。主軸線はＮ－11°－Ｗを指向する。

壁高および壁面　西壁と南壁は残存しており，Ｙコーナー付近の壁高は27cmである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれている部分が多く，壁面は固く締っている。

床面　残存部の床面はおおむね平坦で，硬く踏み固められている。

ピット　検出されない。

埋没土　ロームブロックを少量混入する暗褐色土の単一層である。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は32個ですべて土師器である。

平面分布の状態は，残存部の全面から疎らに出土しており，特に変った傾向は指摘できない。

遺物と時期　特定できる器種としては，坏形土器・甕形土器・鉢形土器・甑形土器などがある。

接合資料Ｉ　24・19・9・26　土師器鉢形土器（第三七図）

上げ底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部は急激に内傾して口縁部にいたる。

12　土師器甕形土器（図版第五〇）欠損品

丸底に近い平底。胴部は内弯して立ち上がり，頸部から「く」の字状に外反して口縁部にいたる。

胴部最大径を中位にもつ。

13　土師器甑形土器（第三七図）破面接合復元品

無底式。胴部は内弯気味に鉢形状に開いて立ち上がり，口縁部はゆるく外反する。

口径31.0cm，器高22.2cm。

本址は古墳時代中期の住居址であろう。

16　第一六号住居址　（第三一図・図版第一三）

位置および遺存状態　本址は，第二調査区の中央部北西寄り（Ｊ－15）に位置する。

遺存状態はおおむね良好である。

形状および規模　平面形は隅丸方形を呈する。周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間3.0m，西壁Ｗ－Ｙ間2.9m，南壁Ｙ－Ｚ間2.9m，北壁3.4mを測り，面積約9.5m²の小形竪穴である。主軸線はＮ－9°－Ｗを指向する。

壁高および壁面　周壁の壁高は，東壁22cm，西壁15cm，南壁12cm，北壁5cmである。

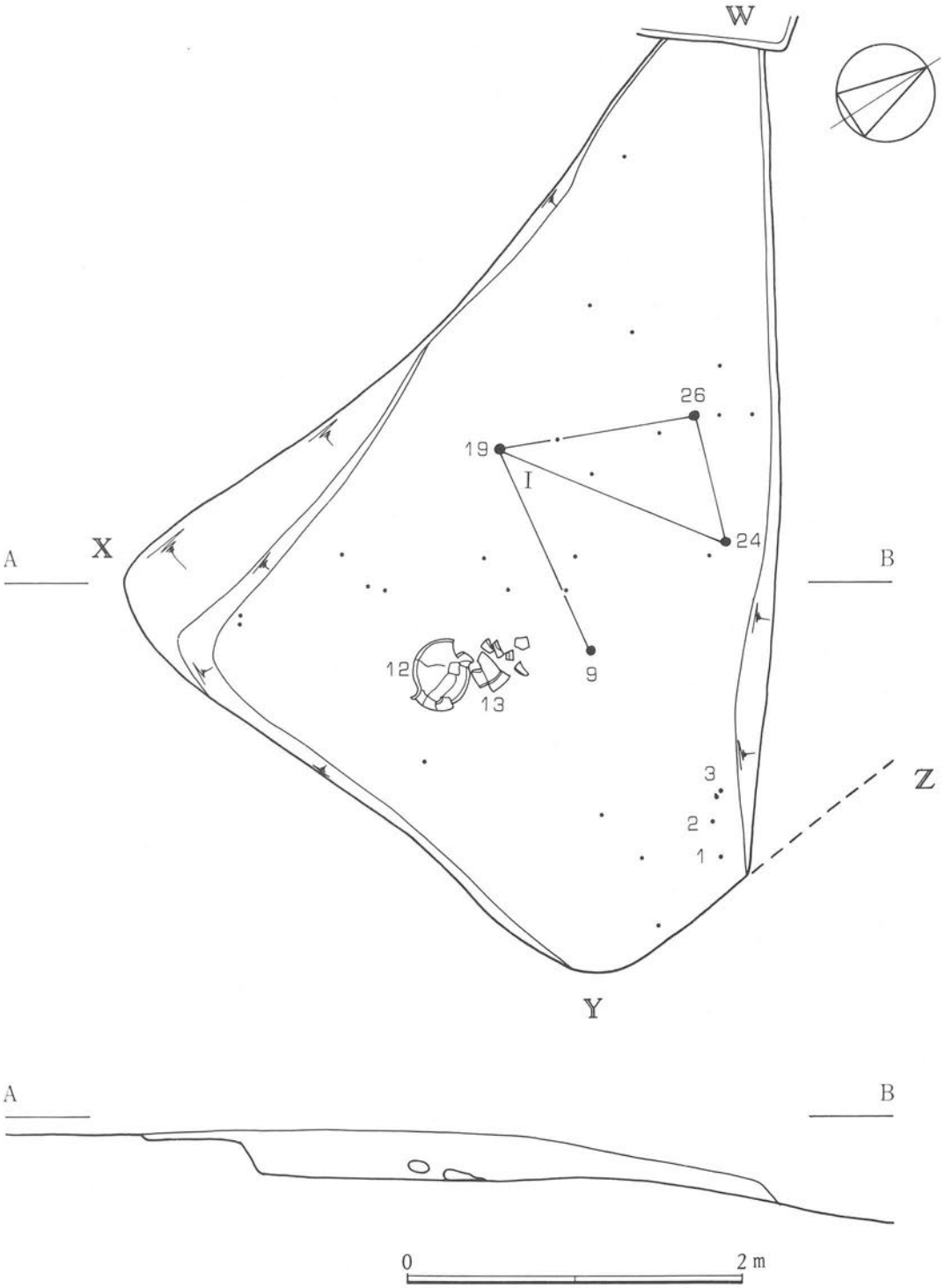
壁は若干斜めに掘り込まれており，崩落の痕跡は認められない。

床面　床面の状態はおおむね平坦で，硬く踏み固められている。

ピット　床面を精査したがピットは発見できなかった。また，壁外にも検出されなかった。

埋没土　本址の埋没土は２層に区分することができる。Ｉ層はローム粒子とローム小ブロックを混入する暗褐色土，Ⅱ層はローム粒子を多量に混入する明褐色土である。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は44個である。

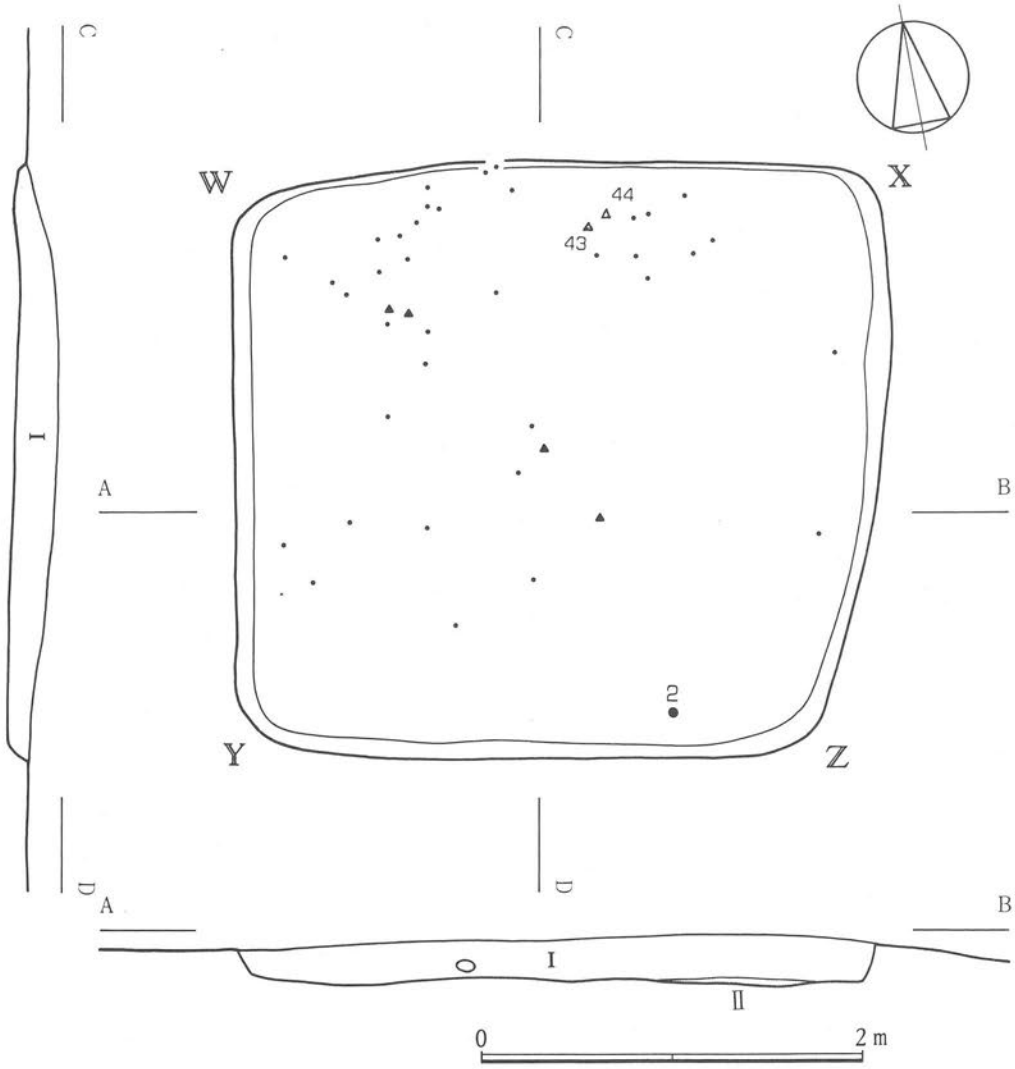


第三〇図　第一五号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

内訳は，土師器38個，石製品２個，自然石４個となる。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，南壁側と東壁側に空白があり，北壁側のWコーナー付近にまとまっている。

土器の中で唯一の実測資料となった甕形土器は，南壁際のＺコーナー寄りの地点から出土し，石製品の勾玉と有孔円板は，北壁際の中央部付近から出土している。



第三一図　第一六号住居址実測図，遺物出土状態図

遺物と時期　本址の出土土器のうち，器種を特定できるのは甕形土器と坏形土器である。

2　土師器甕形土器（第三七図）半完形品，底部欠損

底部欠損。胴部は球状に内弯して立ち上がり，頸部はくびれ，外反して口縁にいたる。

口径18.0cm，胴部中位に最大径をもち20.0cm。

43　勾玉（第三二図）完形品

平面形はすっきりした「C」字形をしており，頭部に小円孔１孔を穿つ。

44　有孔円板〈石製模造品〉（第三二図）一部欠損　単孔円板

本品は，形状が略円形（不整形も含む）を呈し，中央ではなく偏在した位置に１孔を有する第Ⅰ類ａ種の仲間になるだろう。重量５グラム。

本址の廃絶は古墳時代前期末葉と思われる。

17　第一七号住居址　（第三三図・図版第一三）

位置および遺存状態　本址は第二調査区の中央部（J～K－12）に位置する。

平坦面に構築されており，竪穴の南東隅Yコーナーを斜めに掠めて第6号溝が走り，南東隅のZコーナーには小撹乱穴があるが，影響は極めて軽微で，遺存状態はおおむね良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁X－Z間6.0m，西壁W－Y間6.0m，南壁Y－Z間6.0m，北壁W－X間6.0mで典型的な方形竪穴である。面積は36.0m²を有し大形竪穴の範疇である。主軸線はN－16°を指向する。

壁高および壁面　周壁は良好な状態で遺存しており，壁高は，東壁30cm，西壁36cm，南壁32cm，北壁44cmを測る。壁はわずかに斜めに掘りこまれており，各辺の壁面はいずれも堅牢で，崩落の痕跡は全く認められない。

床面　若干の凹凸はあるがおおむね平坦である。床面全体が硬く踏み固められている。

ピット　26個のピットが発見された。計測値は下表のとおりである。

表3　　第一七号住居址ピット計測値　　（単位）

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	34	32	25	P8	30	20	30	P15	37	28	21	P22	37	34	31
P2	39	36	39	●P9	36	32	55	P16	21	25	12	P23	45	38	11
P3	165	76	30	P10	64	54	28	P17	22	20	21	●P24	49	40	58
P4	20	17	16	P11	34	32	19	P18	19	17	21	P25	35	32	28
●P5	40	34	59	P12	30	30	17	●P19	50	42	57	P26	30	30	31
P6	22	20	23	P13	20	18	10	P20	32	25	18				
P7	21	21	36	P14	28	14	13	P21	50	38	28				

これらのピットのうち，位置関係や規模などから主柱穴としての機能を果したのはP5・P9・P19・P24の4個であろう。加之，補助柱穴のあることは言を俟たない。

埋没土　本址の埋没土は，ローム粒子とローム小ブロックを混入する暗褐色土の単一層である。床面直上付近は若干ローム粒子の混入が多くなるが，区分線を必要とするほどの明確な層序の変化ではない。

カマド　北壁の中央に設けられている。袖部を被覆する砂質粘土の最大幅は280cmを測る。

天井部は破壊されているが，両袖の構築材は黄褐色砂質粘土とロームを練り固めた材料で構成され，他の補強材は一切使用していない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部は壁外へ突出させている。燃焼空間は15cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは160cm，幅は80cmである。煙道部先端は急角度で壁外へ立ち上がる。

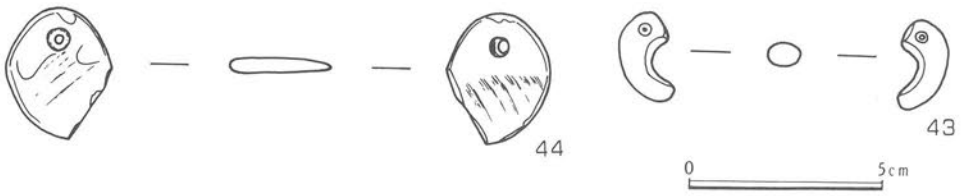
両袖の壁面は火熱を受けて赤変しており，燃焼部は硬化している。燃焼部中央付近から土師器坏形土器1個が出土した。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は170個である。

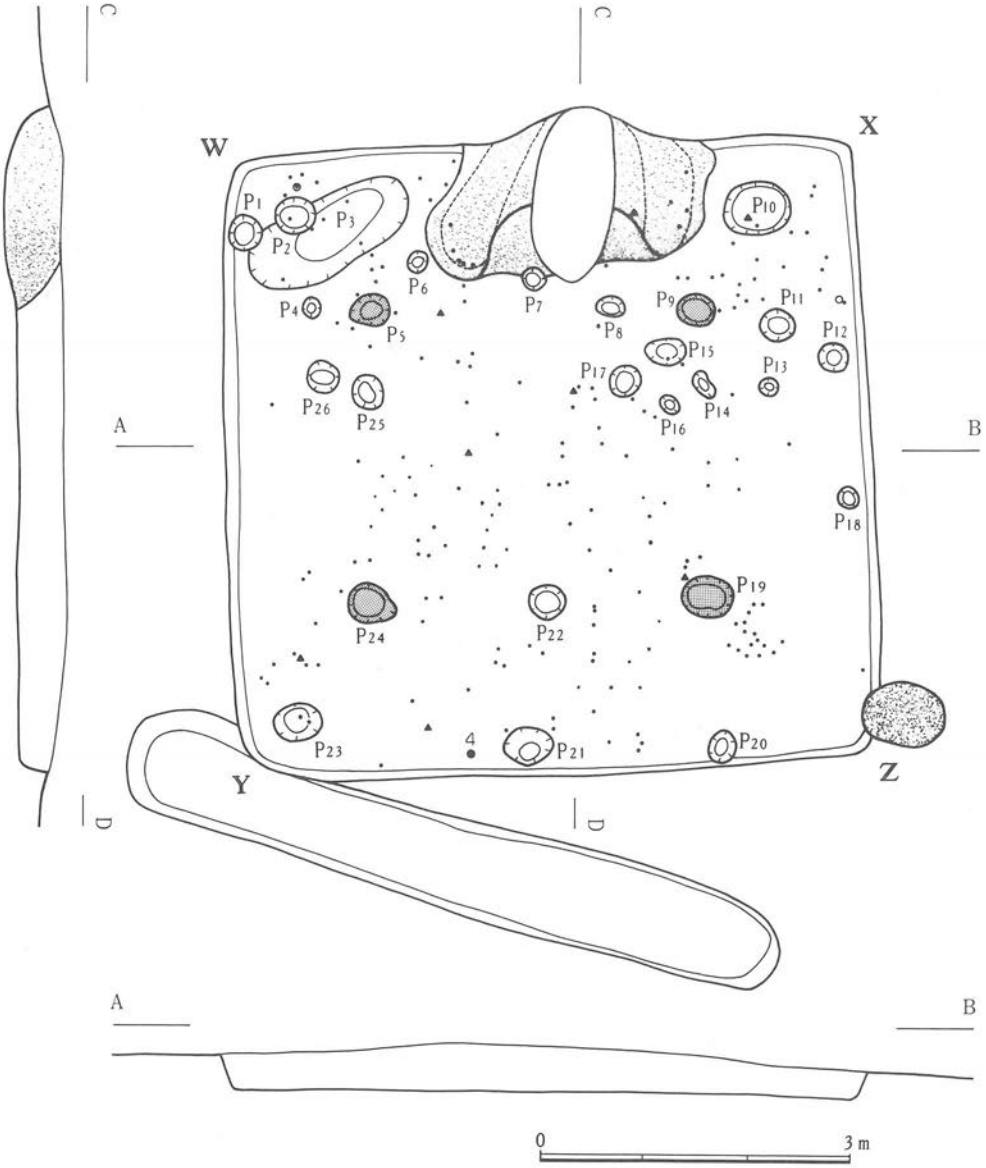
内訳は縄文土器片1個，須恵器1個，土師器160個，自然石8個となる。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，竪穴内の全面から万遍なく出土している。

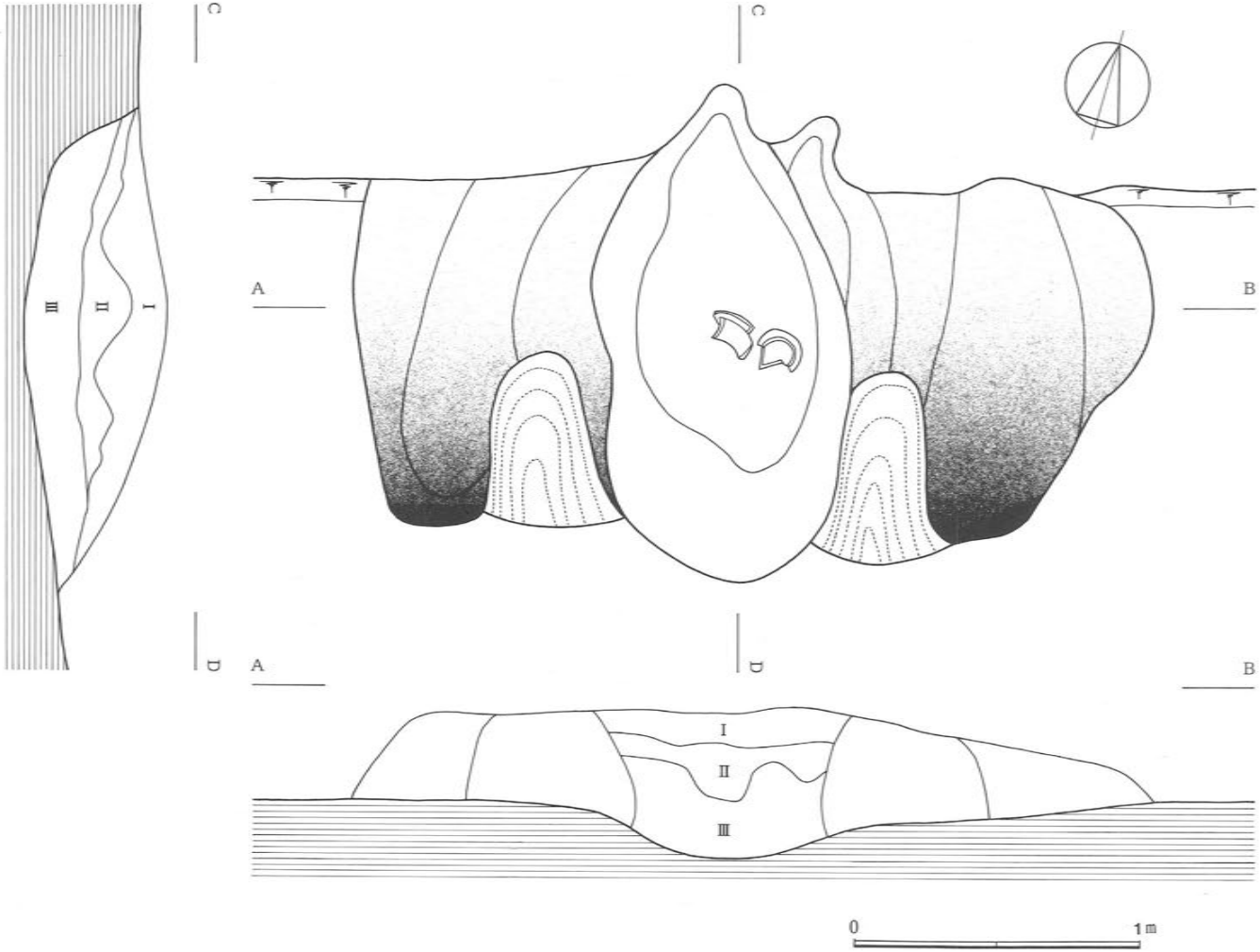
遺物と時期　本址の出土土器は，実測資料の1個以外は悉く破砕細小破片である。辛うじて器種を窺えるのは坏形土器と甕形土器ぐらいである。実測資料4は，土師器坏形土器で，体部と口辺部との境に明瞭な稜を持っている。本址は，時期特定の資料には乏しいが，古墳時代の廃絶と思われる。



第三二図　第一六号住居址出土遺物実測図



第三三図　第一七号住居址実測図，遺物出土状態図



第三四図　第一七号住居址カマド実測図

第一七号住居址カマド断面層序説明　（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黄褐色土　粘性の強い砂質土，青白色粘土も点在する。

Ⅱ　暗赤褐色土　焼土粒子・炭化物細片・炭化物粒子を多量に含む。

Ⅲ　明赤褐色土　焼土層に近い性状で，微量の炭化物粒子が混在する。

18　第一八号住居址　（第三五図・図版第一四）

位置および遺存状態　本址は第二調査区の中央部南側（Ｉ～Ｊ－８～９）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱もなく遺存状態はまことに良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間7.9ｍ，南壁Ｙ－Ｚ間8.1ｍ，西壁Ｗ－Ｙ間7.9ｍ，北壁Ｗ－Ｘ間7.8ｍを測り，面積約62.4㎡を有する大形竪穴である。北壁中央部にカマドを設けている。主軸線はＮ－27°－Ｗを指す。

壁高および壁面　周壁は良好な状態で遺存しており，壁高は，東壁13㎝，西壁20㎝，南壁20㎝，北壁22㎝で，壁はわずかに斜めに掘り込まれており，各辺の壁面には崩落の痕跡は認められず堅固である。

床面　幾分の凹凸はあるがおおむね平坦である。床面全体が土間状に硬く踏み固められている。

ピット　11個のピットが発見されたが，位置関係や規模などから判断すると，主柱穴としての機能を果したのは次の４個であろう。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位㎝）
P_1	60	47	70	P_5	58	58	81
P_3	65	46	68	P_{11}	47	42	71

Ｚコーナー寄りのP_6・P_7は貯蔵穴かもしれない。

埋没土　本址の埋没土の性状は，ローム小ブロックが点在する黒褐色土の単一層で，強いて区分線を引かなければならないような層序の変化は全く認められない。

カマド　北壁の中央に設けられている。袖部を被覆する粘性褐色土の最大幅は212㎝を測る。

天井部の陥没痕は確認できないので、住居廃絶に伴うカマドの破壊行為があったのではないかと考えられるが，両袖は，黄色粘土と青白色粘土で構築され，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口と燃焼部を壁内に設け，煙道部の煙出し口はわずかに壁外へ突出させている。

燃焼空間は床面を13㎝ほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは115㎝，幅は55㎝である。

煙道部煙出し口は舟の舳状に壁外へ立ち上がる。

両袖の壁面は被熱による赤変がみられるが、強い硬化はしていない。

燃焼部中央より土師器坏形土器が出土した。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は251個を数える。

内訳は，土師器244個，須恵器３個，自然石１個となる。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，竪穴内の全面から万遍なく出土しているが，西壁側にやや空白部分が多い。西壁際の113・115・116は炭化物（木炭片）である。

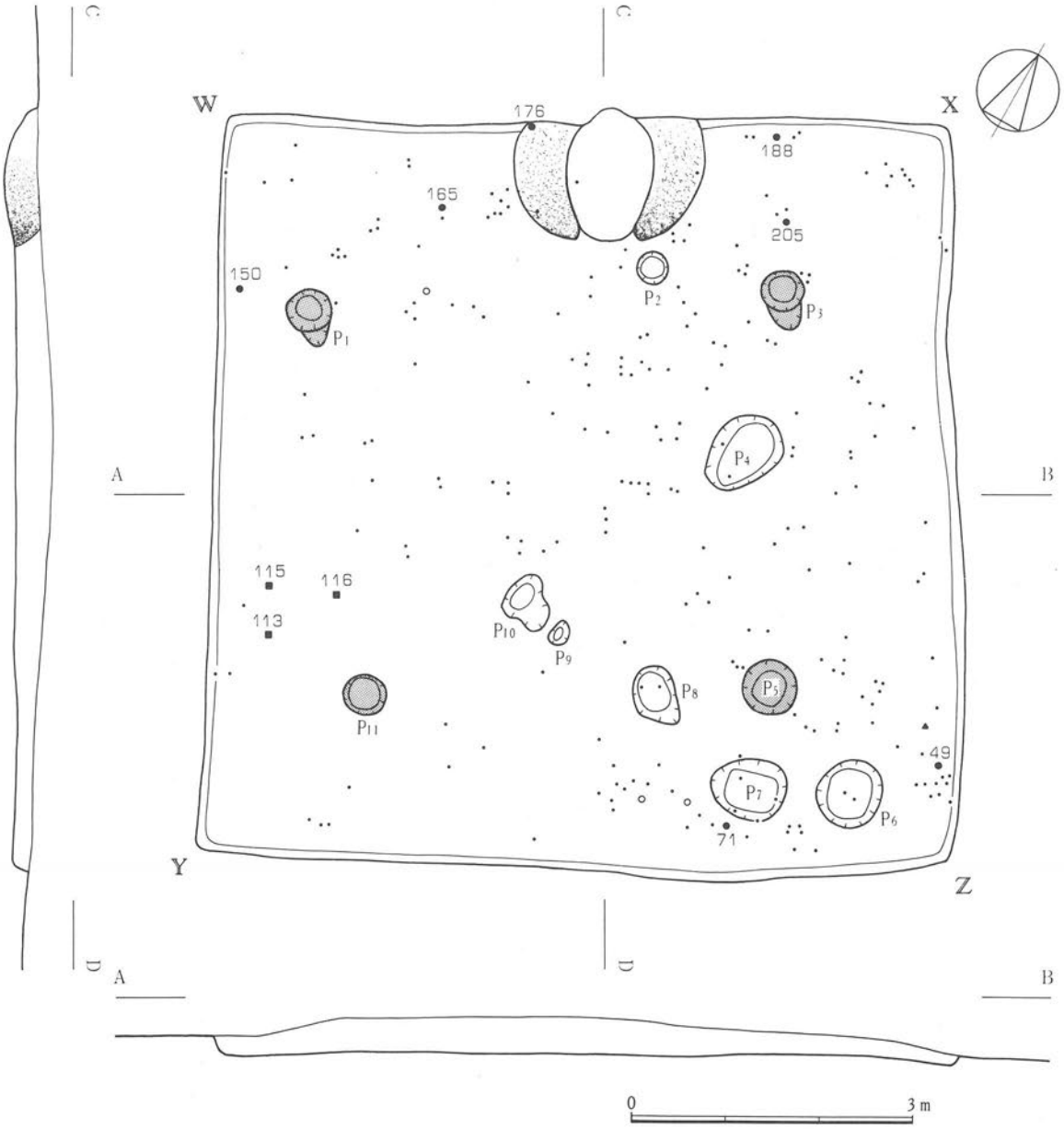
遺物と時期　本址の出土土器のうち特定できる器種は，坏形土器・埦形土器・坩形土器で，破片から窺える器種には甕形土器がある。

49　土師器坏形土器（第三七図）欠損品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部は外傾して口縁部にいたる。

71　土師器坏形土器（第三七図）完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に明瞭な稜を持つ。口辺部は外反して口縁部にいたる。

150　土師器坏形土器（第三七図）完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境ににぶい稜を持ち，口辺部は外傾気味で口縁部にいたる。

165　土師器坏形土器（第三七図）口辺部欠損　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持つ。



第三五図　第一八号住居址実測図，遺物出土状態図

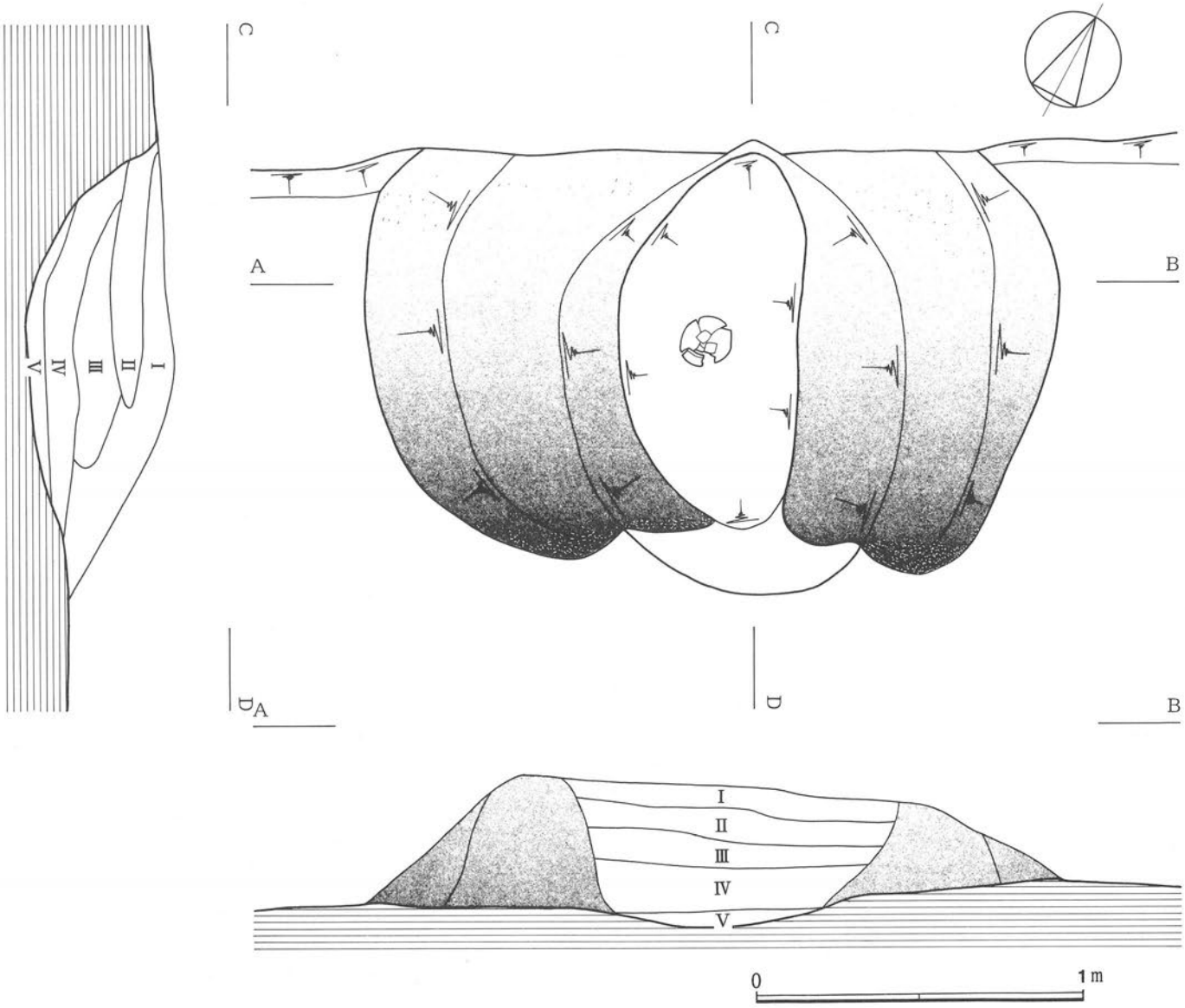
口辺部は外反気味に立ち上がり口縁部にいたる。

176　土師器坏形土器（第三七図）完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に微小な稜を持ち，口辺部は大きく外反して口縁部にいたる。

188　土師器坏形土器（第三七図）底部欠損　胴部は内弯して立ち上がり，口辺部は外傾して口縁部にいたる。

205　土師器坩形土器（第三七図）胴部中位～底部欠損　胴部は内弯して立ち上がり，頸部は「く」の字状になって口辺部は外傾し，中位から直立気味に口縁部にいたる。

本址の廃絶の時期は古墳時代初頭と考えられる。



第三六図　第一八号住居址カマド実測図，遺物出土状態図

第一八号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黄褐色粘土　粘性があり固くしまっている。

Ⅱ　黒褐色土　　黄褐色粘土と黒色土の混合土。

Ⅲ　焼　土　　焼土粒子と焼土ブロックのみの層である。

Ⅳ　赤褐色土　　焼土粒子，炭化物粒子を多量に含む。

Ⅴ　煉瓦状ローム　被熱して硬化したローム。

カマド内出土土器

K－1　土師器坏形土器（第三七図）準完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部は直立気味になって口縁部にいたる。

K－2　土師器坏形土器（第三七図）底部欠損。口辺部一部欠損。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に強く張り出した稜を持ち，口辺部は外傾して口縁部にいたる。

19　第一九号住居址　（第三八図・図版第一五）

位置および遺存状態　本址は第二調査区の中央部（L～A'－11～12）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱も受けておらず，遺存状態に関しては問題はない。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁X－Z間7.0m，西壁W－Y間7.1m，南壁Y－Z間7.1m，北壁W－X間7.0mを測り，面積約49.7m²を有する大形竪穴である。北壁中央部にカマドを設けている。主軸線はN－14°－Wを指す。

壁高および壁面　東壁はやや低いが，周壁は良好な状態で遺存しており，壁高は，東壁14cm，西壁36cm，南壁36cm，北壁45cmで，壁はわずかに斜めに掘り込まれており，壁面は堅牢で崩落の痕跡は認められない。

床面　平坦で硬く踏み固められている。

ピット　9個のピットが発見されたが，位置関係や規模などから判断して，次の4個が主柱穴であろう。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P_2	68	65	65	P_8	64	54	72
P_4	56	48	71	P_9	62	58	68

ZコーナーのP_7は貯蔵穴であろう。

埋没土　本址の埋没土は，C－Dセクションによると3層に区分することができる。

Ⅰ層は，ローム粒子と焼土粒子を混入する褐色土，Ⅱ層は黒色土粒子が多量で焼土粒子を含む暗褐色土，Ⅲ層は焼土粒子・焼土ブロックを多量に含む明褐色土である。

A－Bセクションでは，暗褐色土の層中に帯状の焼土層が介在する。

カマド　北壁の中央に設けられている。

袖部を被覆する粘性暗褐色土の最大幅は152cmを測る。

天井部は破壊されているが，両袖は黄褐色粘土で構築され，補強材は使用されていない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部の煙出し口は20cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を13cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは125cm，幅は62cmである。煙道部煙出し口は外傾して壁外へ立ち上がる。

両袖の壁面は火熱を受けて赤変し，硬化している。燃焼部中央より土製支脚が横位の状態で出土した。

遺物の出土状態　本址の遺物総数は152個である。

内訳は，土師器146個，須恵器5個，自然石1個となる。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，おおむね全面に散在しており，特に変った傾向は指摘できない。接合資料1例を抽出した。

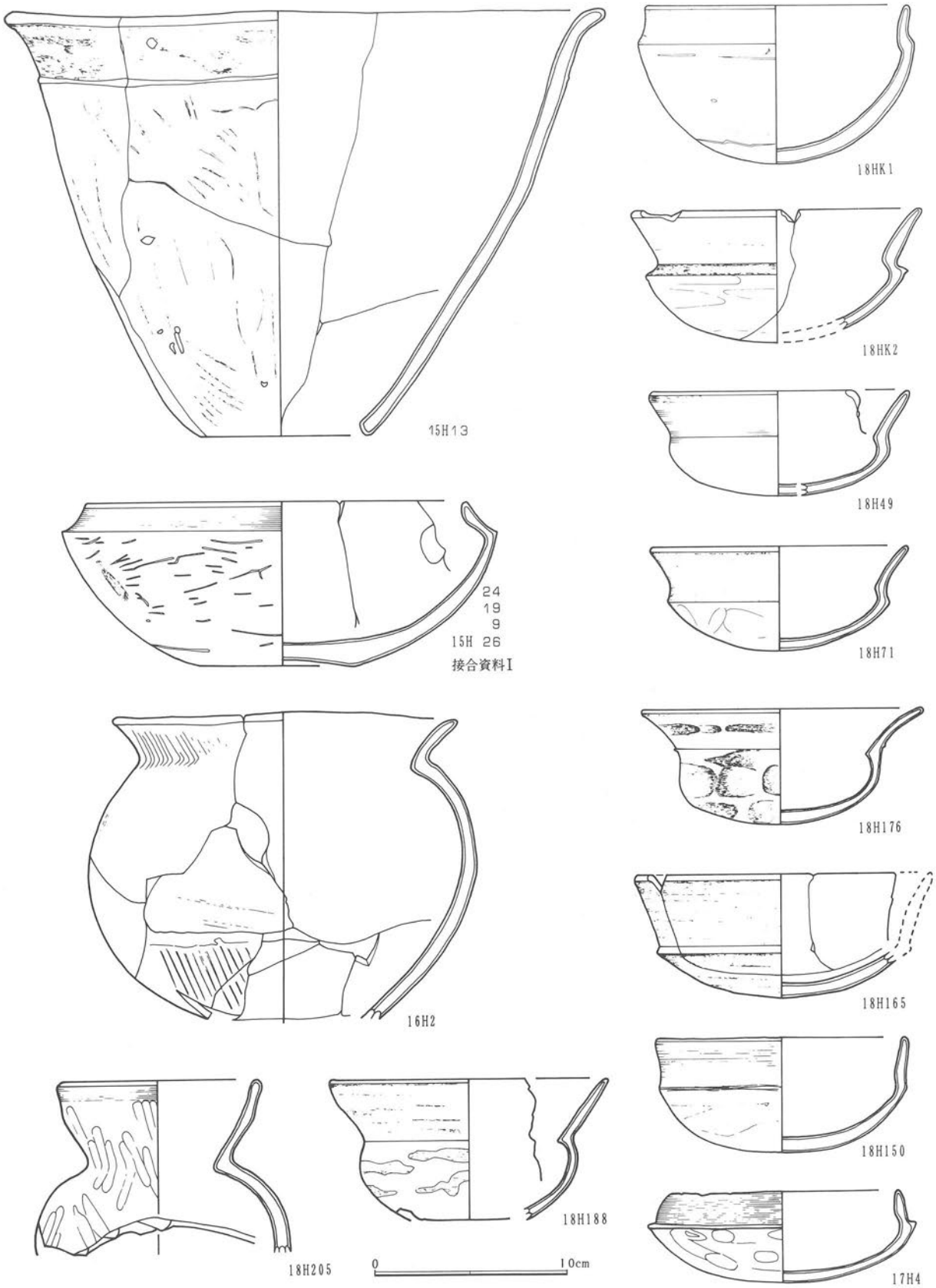
遺物と時期　本址の出土土器のうち特定できる器種は，土師器では坏形土器・甕形土器，須恵器では坏形土器・甕形土器などである。

接合資料Ⅰ　土師器坏形土器（第四一図）底部欠損。体部は内弯して立ち上がり，口辺部は大きく外反して口縁部にいたる。

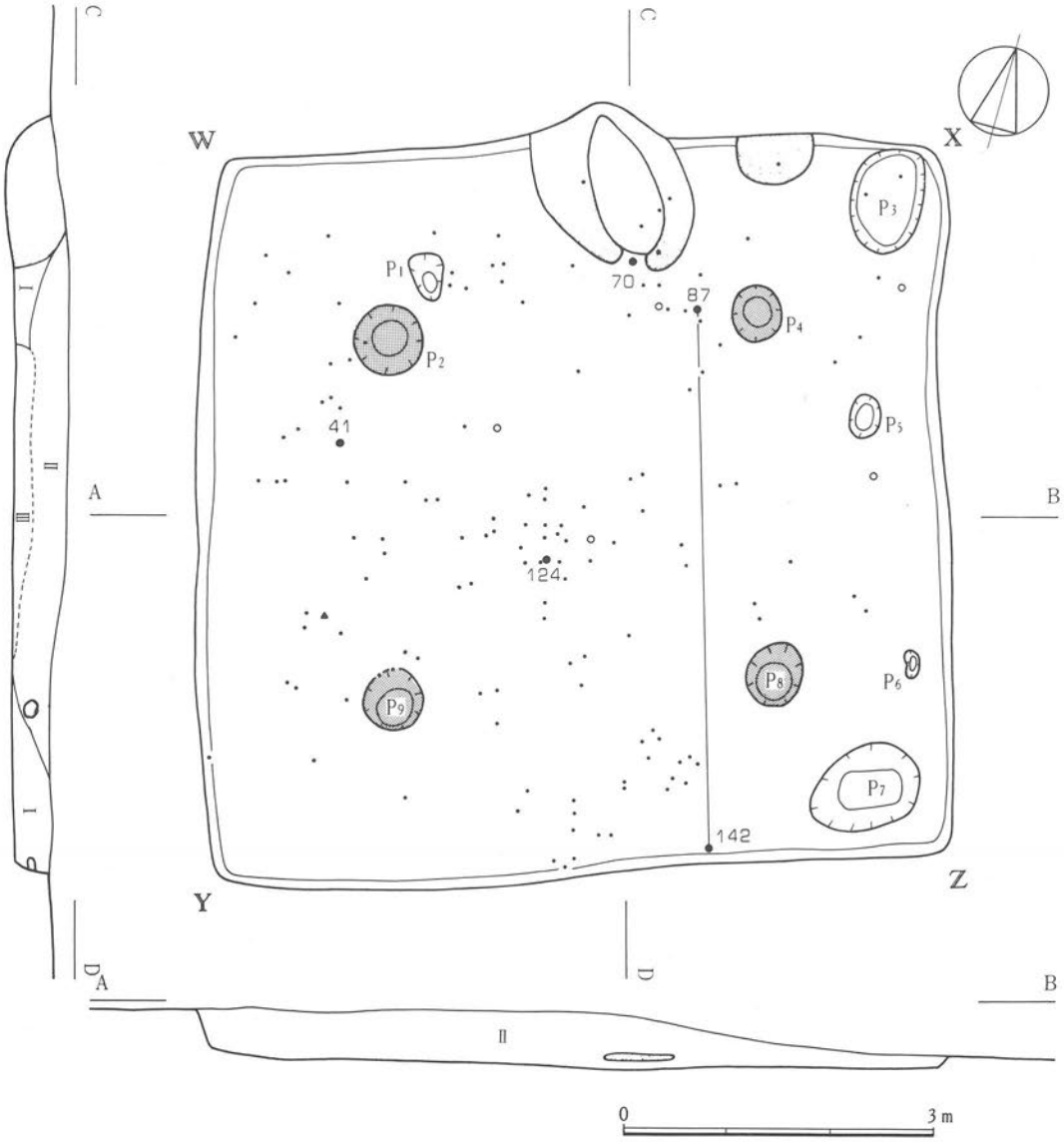
41　土師器坏形土器（第四一図）完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部は直立気味になって口縁部にいたる。

70　土師器坏形土器（第四一図）完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に明瞭で鋭い稜を持つ。口辺部は大きく外反して口縁部にいたる。

124　土師器坏形土器（第四一図）完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持つ。



第三七図　第一五・一六・一七・一八号住居址出土遺物実測図



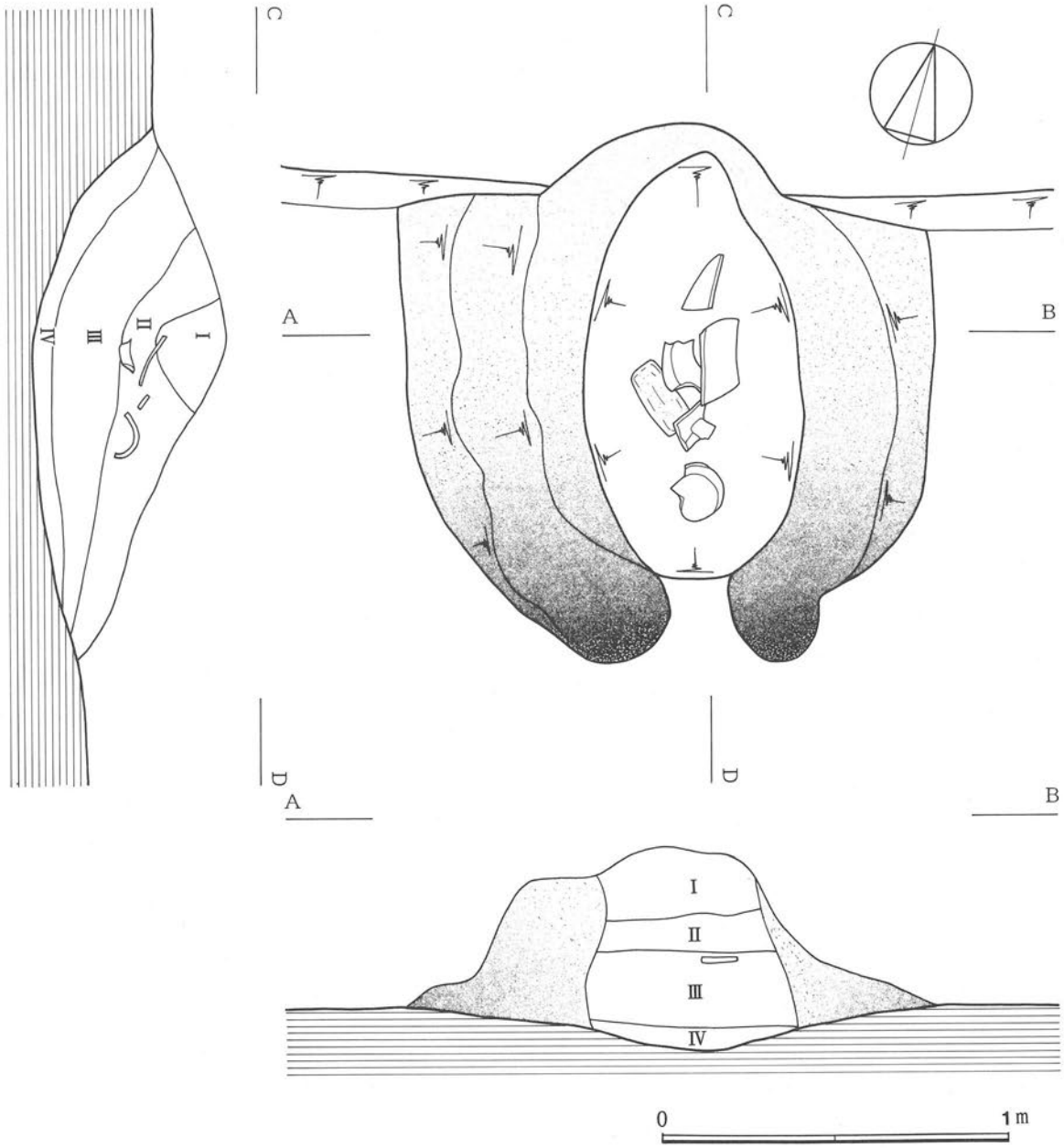
第三八図　第一九号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

口辺部は内傾して口縁部にいたる。

土製支脚（第四一図）カマド燃焼部中央より横位の状態で出土。

長さ13.0cm，中位部径6.8cm，重量890.5グラム。

本址の時期は古墳時代後期に比定されるだろう。



第三九図　第一九号住居址カマド実測図，遺物出土状態図

第一九号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黄褐色粘土　粘性があり固い。

Ⅱ　焼　土　　層全体が焼土で占められている。

Ⅲ　赤褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子を多量に含む。

Ⅳ　暗赤褐色土　Ⅲ層よりさらに炭化物粒子・炭化物小片が多くなる。

20　第二〇号住居址　（第四〇図・図版第一七）

位置及び遺存状態　本址は第二調査区の中央部北側（K－14～15）に位置する。

平坦面に構築されており，竪穴の北東隅Xコーナーが第二一号住居址の南西隅Yコーナーと接しているが，重複切り合いにまでは至らず，この部分以外は破壊も撹乱もないので，遺存状態は概して良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁X－Z間6.0m，西壁W－Y間6.0m，南壁Y－Z6.2m，北壁W－X間6.1mを測り，面積約36.5m²を有する大形竪穴である。北壁中央部にカマドを設けている。主軸線はN－19°－Eを指す。

壁高および壁面　周壁はおおむね良好な状態で残存している。壁高は，東壁29cm，西壁18cm，南壁18cm，北壁18cmで，壁は若干斜めに掘り込まれており，壁面は特に堅固ではないが脆弱さはない。

床面　平坦である。床面全体が硬く踏み固められている。北壁際のXコーナー寄りと，南壁中央寄りの床面に焼土塊がある。

ピット　6個のピットを検出したが，位置関係や規模などから判断して，次の4個が主柱穴であろう。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P_1	48	35	71	P_4	40	40	70
P_2	45	45	80	P_6	52	38	75

埋没土　本址の埋没土は，ローム粒子を混入する暗褐色土の単一層である。床面直上付近はローム粒子の混入がやや多くなるが，区分線を入れるほどの変化ではない。

カマド　北壁の中央に設けられている。袖部の最大幅90cm，床面を掘り窪めずに燃焼空間を形成し，焚口部から煙道部煙出し口までの長さ73.0cm，幅は47.0cmである。　燃焼部の側壁には赤変がみられず，埋没土も黒褐色でほとんど焼土粒子が含まれていないことから推考すると，このカマドの使用頻度は低かったものと思われる。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は157個である。

内訳は，縄文土器5個，土師器149個，自然石3個となる。縄文土器片は紛れ込んだものであろう。

出土状態をドット・マップによって観察すると，Wコーナー付近に空白が目立つけれども，全体としては疎らに分布しており，特に変った傾向は指摘できない。接合資料は1例が抽出できた。

遺物と時期　特定できる器種は，坏形土器，甕形土器である。

接合資料1　49・51　土師器甕形土器（第四一図）口径13.8cm，胴部最大径中位18.7cm，器高18.3cm。
胴部は内弯して立ち上がり，球形胴で頸部はくびれ，口辺部は外反して口縁部にいたる。

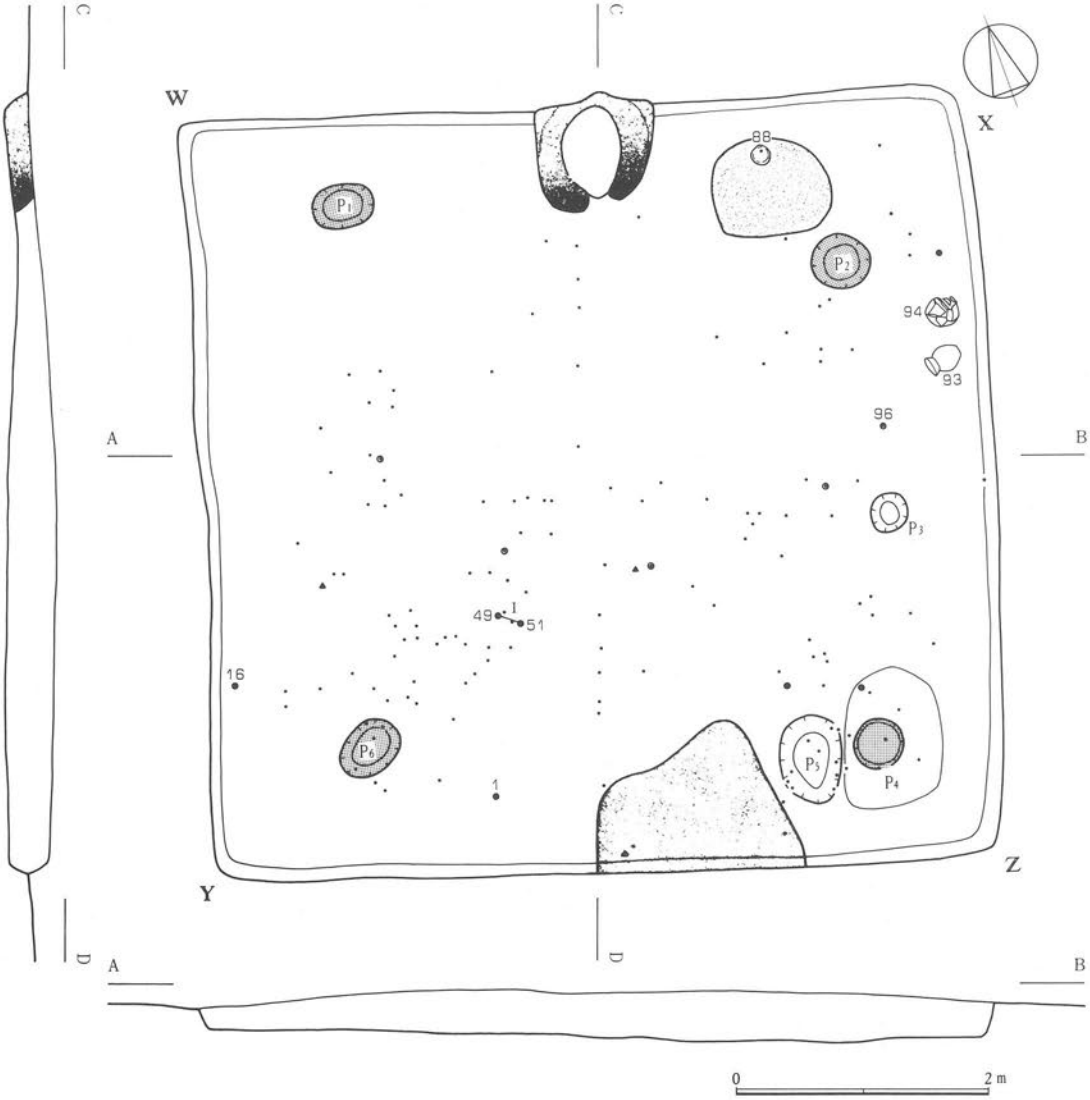
88　土師器坏形土器（第四一図）準完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，口縁部は直立する。

1　土師器甕形土器（第四一図）約40％欠損　平底。胴部は内弯して立ち上がり，口辺部は外反して口縁部にいたる。口径14.5cm，胴部最大径中位17.5cm，器高20.5cm。

93　土師器甕形土器（第一〇二図）約30％欠損　平底。胴部は内弯して立ち上がり，口辺部は外反して口縁部にいたる。口径16.8cm，胴部最大径中位22.9cm，器高24.5cm。

94　土師器甕形土器（第四一図）胴部上位～口縁部の部分欠損
突出した丸底に近い平底。胴部は内弯して立ち上がり，球形胴を呈し，口辺部はやや外反して口縁部にいたる。口径20.0cm，胴部最大径中位26.5cm，器高29.3cm。

本址の廃絶は古墳時代中期頃と思われる。



第四〇図　第二〇号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

20　第二一号住居址

位置及び遺存状態　本址は，第二調査区の中央部北端（L～A′－16）に位置する。

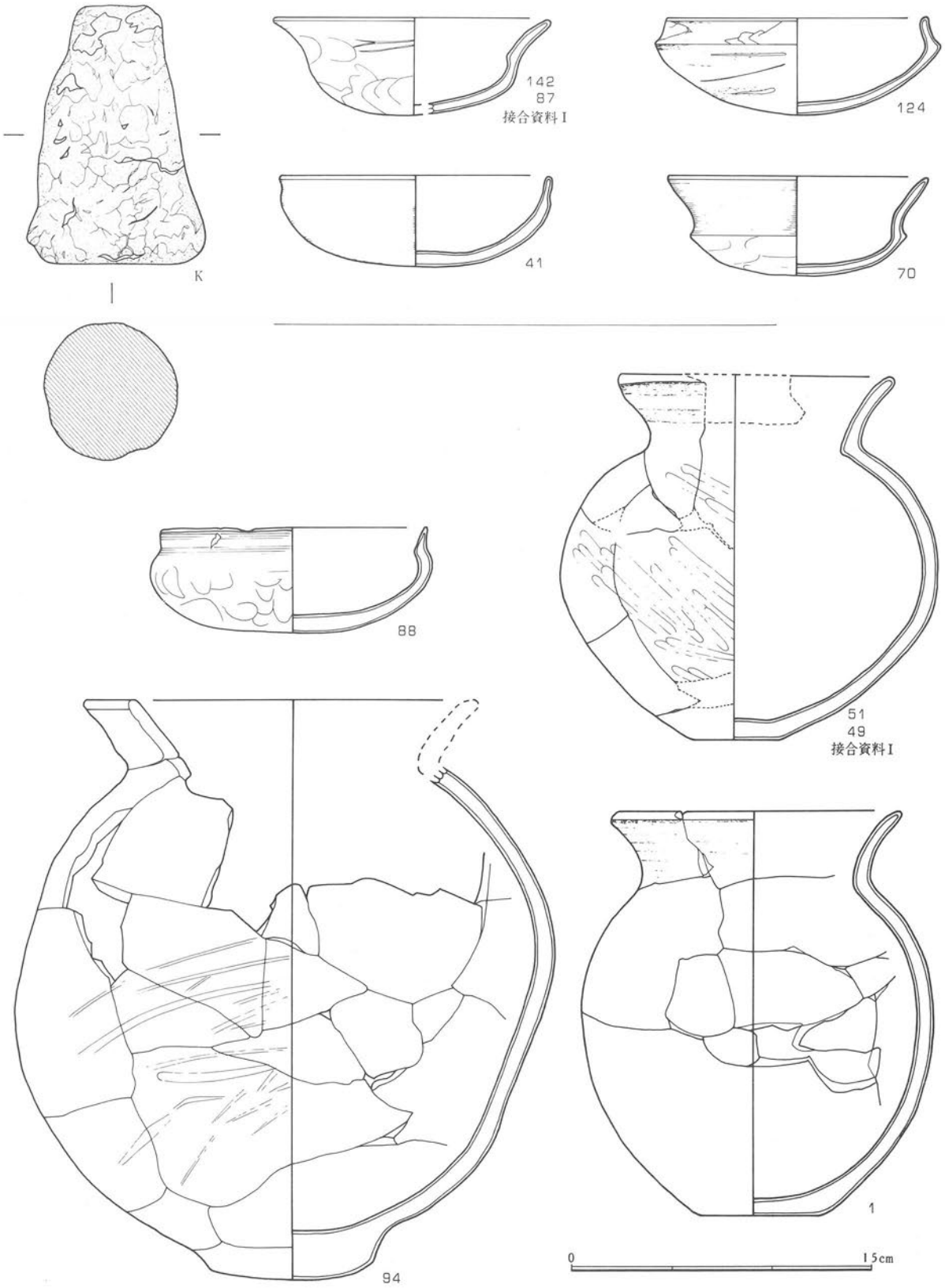
平坦部に構築されており，本址の南東隅Yコーナーが第二〇号住居址の北東隅Zコーナーと接しているが，重複切ひ合いにまでは至らず，遺存状態はおおむね良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

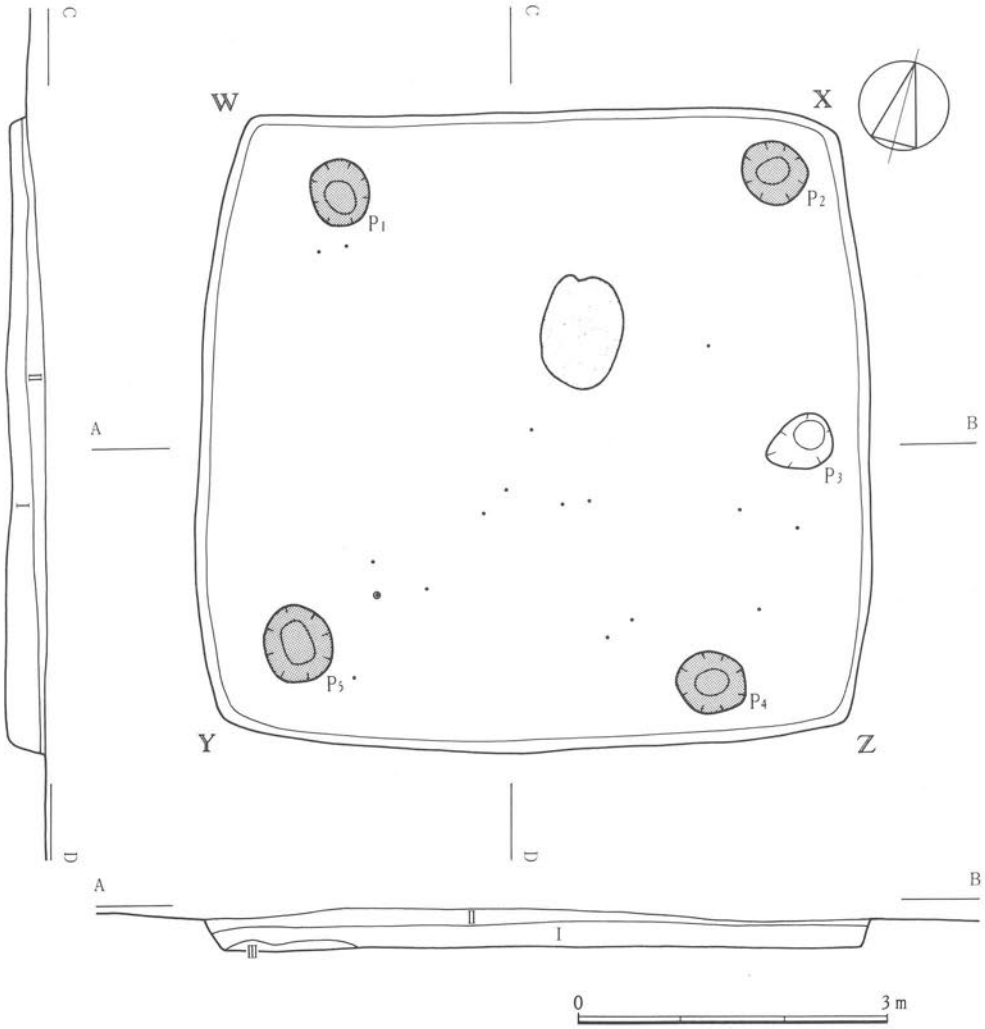
周壁の辺長は，東壁X－Z間5.9m，西壁W－Y間6.0m，南壁Y－Z6.1m，北壁W－X間5.7mを測り，面積約34.8m²を有する大形竪穴である。中央部北寄りに地床炉址がある。主軸線はN－14°－Wを指向する。

壁高および壁面　周壁はおおむね良好な状態で残存している。壁高は，東壁28cm，西壁30cm，南壁38cm，北壁はやや低く18cmである。壁はわずかに斜めに掘り込まれており，壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

床面　平坦で床面全体が土間状に硬く踏み固められている。中央部北寄りの床面に地床炉址がある。



第四一図　第一九号（上段），第二〇号（下段）住居址出土遺物実測図



第四二図　第二一号住居址実測図，遺物出土状態図

ピット　ピットは5個検出したが，位置関係や規模などから判断して，次の4個が主柱穴であろう。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P 1	66	56	67	P 4	70	60	68
P 2	64	58	34	P 5	74	60	32

埋没土　本址の埋没土はの性状は3層に大別することができる。

Ⅰ　黒褐色土　黒色がベースで，ローム粒子を混入する。固く締っている。

Ⅱ　暗褐色土　Ⅰ層よりローム粒子の混入が多く，一際固く締っている。焼土粒子・炭化物小片を散見する。

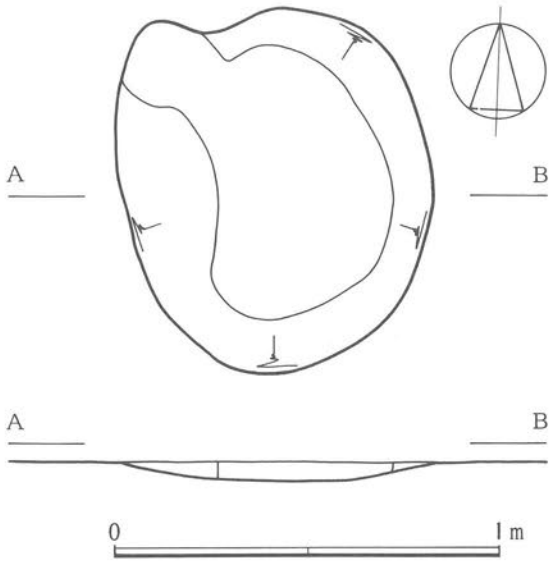
Ⅲ　明褐色土　ロームが主体で黒色土粒子を少量混入する。

炉址　床面の中央部北寄りの位置から炉址を検出した。南北方向に長軸を持ち，長径110cm，短径78.0cmの楕円形状を呈する平面形である。（第四三図）

床面を5cmほど皿状に掘り窪めて燃焼部を形成した地床炉である。

焼土の範囲は，南北70.0cm，東西45.0cmで，焼土粒子・炭化物小片を多量に含む赤褐色土で，層の厚さは5cm，その下は被熱した硬いローム層へと移行する。

遺物は出土しない。



第四三図　第二一号住居址炉址実測図

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は17個である。

ドット・マップで平面分布の状態を観察すると，非常にまばらに分布している。

出土遺物の内訳は，縄文土器１個，土師器16個となるが，縄文土器片は紛れ込んだものであろう。

出土遺物のすべてが小破片で器種の特定が困難であるが，幸うじて器種を窺えるものに，甕形土器の底部破片，坏形土器の体部破片などがある。

本址の廃絶の時期は，竪穴の規模からみて古墳時代前期と考えられる。

22　**第二三号住居址**　（第四四図・図版第一九）

位置および遺存状態　本址は第二調査区の中央部南東寄り（B'－10）に位置する。

平坦部に構築されており，破壊も撹乱もなく，竪穴自体の遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間4.4ｍ，西壁Ｗ－Ｙ間4.5ｍ，南壁Ｙ－Ｚ間3.9ｍ，北壁Ｗ－Ｘ間4.1ｍを測り，面積約18.0㎡の小形竪穴である。北壁中央部にはカマドを設けている。主軸線はＮ－14°－Ｅを指向する。

壁高および壁面　周壁は良好な状態で残存している。壁高は，東壁20.0㎝，南壁25.0㎝，北壁24㎝である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており，壁面の崩落は認められない。

床面　平坦で床面全体が土間状に硬く踏み固められている。東壁際Ｚコーナー寄りに長径115㎝，短径75.0㎝の楕円形状の焼土塊が残存する。

ピット　４個のピットを検出した。この４個が主柱穴であることは多言を要しない。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位㎝）
P_1	52	30	48	P_3	30	30	57
P_2	25	25	60	P_4	40	30	46

埋没土　Ａ－Ｂ・Ｃ－Ｄ両セクションによって本址の埋没土の性状を観察すると，３層に区分することができる。埋没土の性状は両セクション共通である。

Ⅰ　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を混入し固く締っている。

Ⅱ　暗褐色土　床面に近くなるほど漸移的ではあるが，ローム粒子の混入が多くなる。

Ⅲ　褐色土　少量の黒色土粒子が混在する。

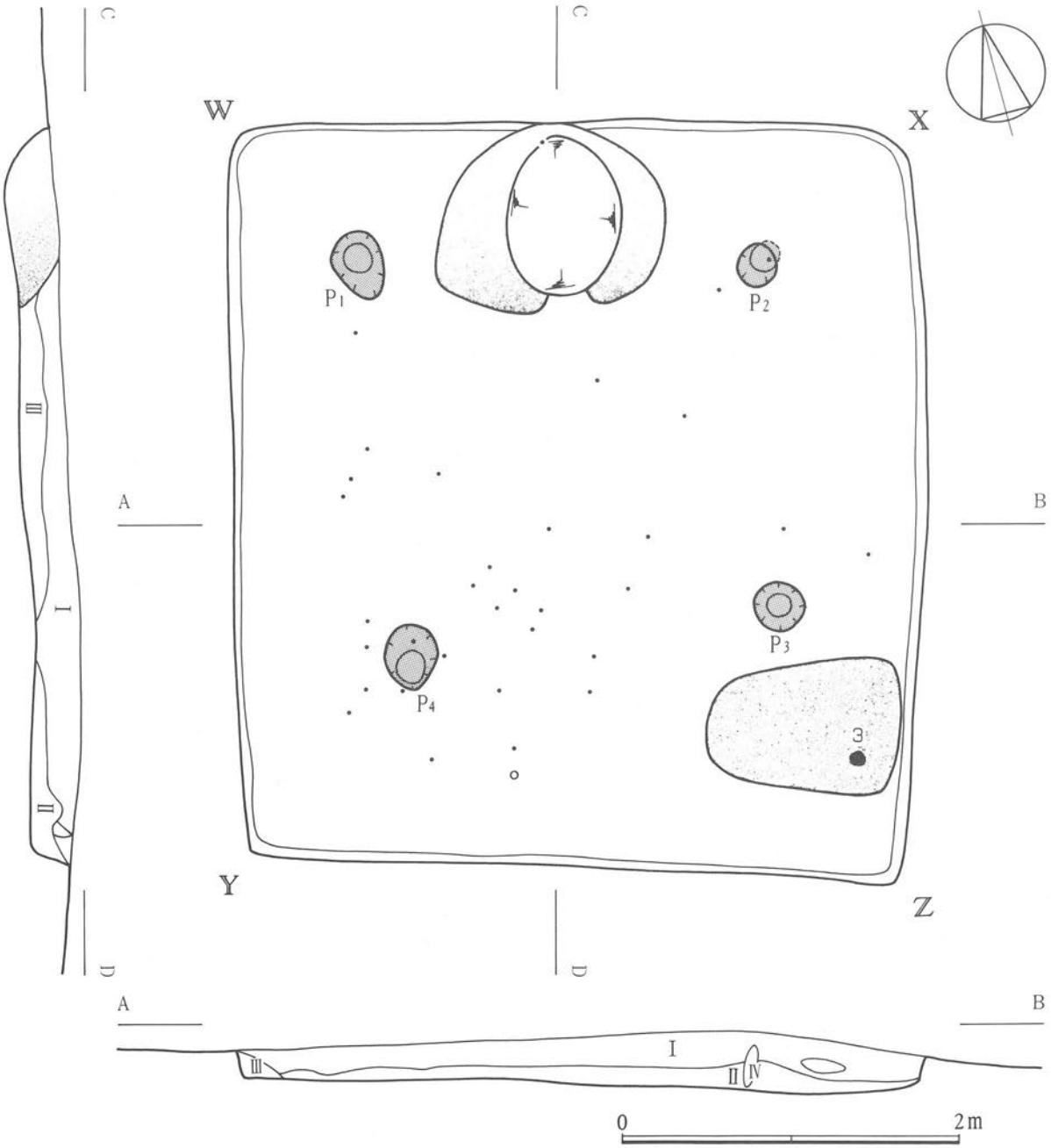
Ⅳ　黄褐色土　黄色味の強い脆弱なブロック。

この層序の在り方は人為による埋戻しであろう。

カマド　北壁の中央に設けられている。

袖部を被覆する粘性褐色土の最大幅は168㎝を測る。

天井部は竪穴廃絶時に破壊されたものと思われるが，両袖は黄褐色粘土で固く構築され，他の補強材は一切使用していない。



第四四図　第二三号住居址実測図，遺物出土状態図

構造は，焚口部，燃焼部・煙道部のすべてを壁内に設け，床面をわずかに掘り窪めて燃焼空間を形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは110cm，幅は70cmである。煙出し口は外傾して立ち上がる。

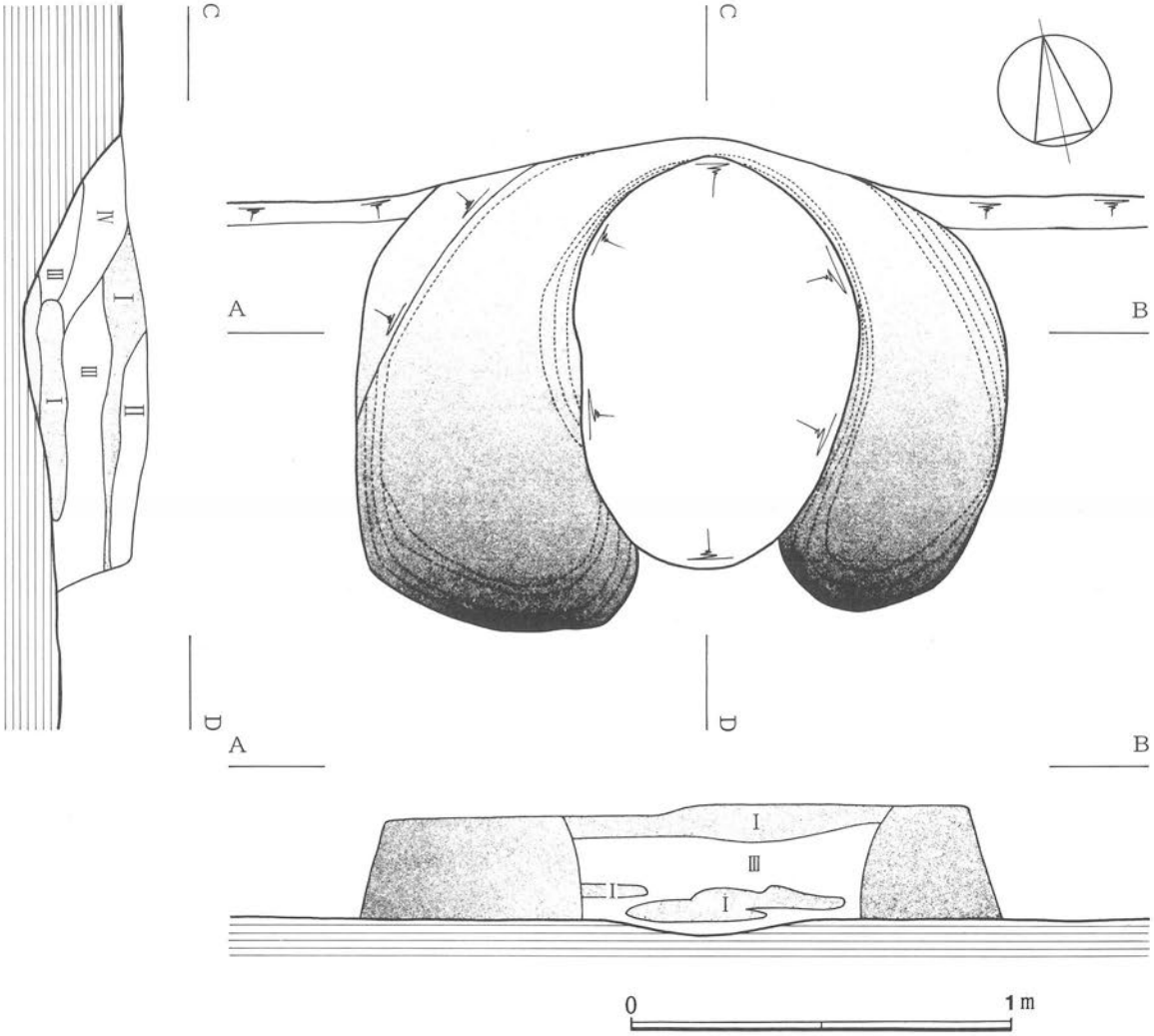
燃焼部には焼土が堆積しており，使用頻度は高かったかもしれない。

遺物の出土状態と時期　本址の出土遺物総数は35個である。内訳は土師器34個，須恵器１個となる。

ドット・マップによって平面分布の状態を観察すると，周壁は皆無に近く，中央部付近に疎らに散在する。

器種を特定できたのは３の土師器小形甕形土器（第九〇図）で，平底。胴部は内弯して立ち上がり，口辺部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口径16.0cm，胴部最大径中位16.5cm，器高14.0cm。

資料には乏しいが，カマドの形態や土器の特徴から，本址の廃絶は古墳時代後期と考えられる。



第四五図　第二三号住居址カマド実測図

第二三号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　焼土層　　層全体が焼土粒子・焼土ブロックで占められている。

Ⅱ　黄褐色土　硬化している。

Ⅲ　黒褐色土　炭化物粒子・炭化物小片が混在する。

Ⅳ　赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子を含む。

23　第二四号住居址　（第四六図・図版第二〇）

位置および遺存状態　本址は，第二調査区の中央部南側（K－7）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱も受けておらず，遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は多少の歪みはあるが方形と見做してよいだろう。

周壁の辺長は，東壁X－Z間5.7m，西壁W－Y間5.8m，南壁Y－Z間5.9m，北壁W－X間5.8mを測り，面積約33.7m²を有する大形の範疇に属する竪穴である。東壁の中央より少しくZコーナー寄りの位置にカマドを設けている。主軸線はN－23°－Eを指向する。

壁高および壁面　周壁は良好な状態で残存している。壁高は，東壁23cm，西壁33cm，南壁40cm，北壁30cmである。壁面は堅硬で崩落の痕跡は全く認められない。

床面　平坦である。床面全体が土間状に硬く踏固められている。

ピット　床面を精査したが，検出できたピットは3個である。壁外にも検出できなかった。

2本主柱穴の竪穴がないわけではないが，偏在すぎて疑問の残るピットである。

埋没土　竪穴内の埋没土の性状は3層に区分することができる。

Ⅰ　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を混入する。

Ⅱ　暗褐色土　Ⅰ層よりローム粒子の混入が多い。

Ⅲ　明褐色土　ロームブロックを多量に含む。

カマド　本址のカマドは，東壁の中央よりややZコーナー寄りに設けられている。

袖部を被覆する黄褐色砂質粘土の最大幅は126cmである。

天井部は残存していないが，両袖は黄褐色粘土で固く構築され，他の補強材は一切使われていない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部の煙出し口は15cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を8cmばかり掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは110cm，幅は48cmである。

煙道部煙出し口は，舟の舳状に外傾して立ち上がる。

両袖の燃焼部壁面と煙道部は，火熱を受けて煉瓦状に硬化している。

燃焼部から土師器甕形土器片と自然石が出土した。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は89個である。

内訳は，縄文土器2個，土師器72個，須恵器2個，石製品2個，自然石11個となる。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，おおむね万遍なく出土している状態を看取できる。

南壁のYコーナー付近の壁面には自然石が集中して出土している。

縄文土器片は，深鉢形土器の胴部破片であろうと思われるが，おそらく紛れ込んだものではないかと考えられる。

遺物と時期　資料として抽出できた器種は坏形土器・甕形土器である。

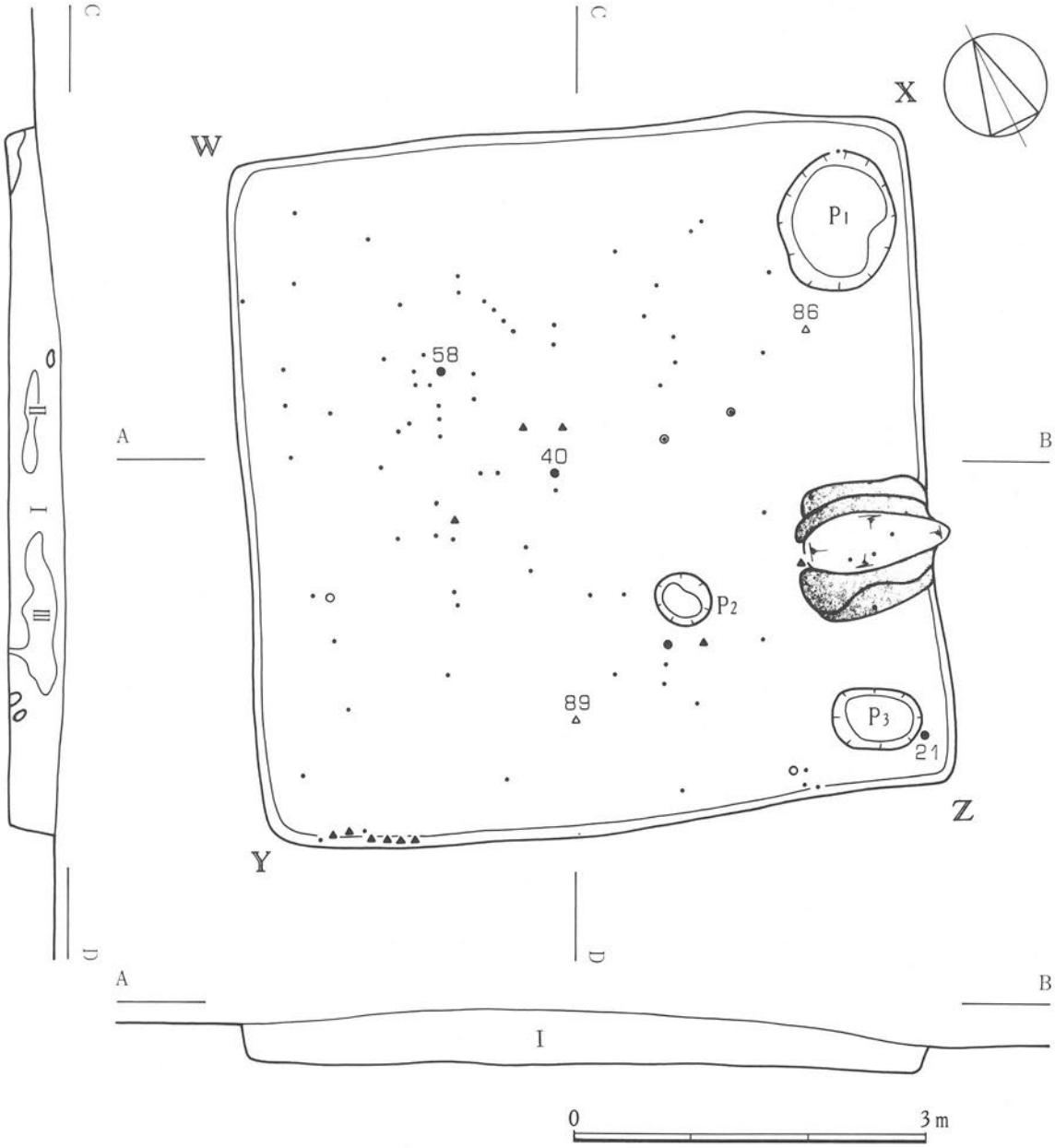
58　土師器坏形土器（第九〇図）約50％欠損

平底に近い丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に明瞭な稜を持ち，大きく外反して口縁部にいたる。

40　土師器甕形土器（第一〇二図）胴部中位から上部の破片

胴部は直立に近い内弯気味に立ち上がり，頸部はくびれて口辺部は外傾して口縁部にいたる。

最大径が口径のようである。長胴形の可能性がある。



第四六図　第二四号住居址実測図，遺物出土状態図

21　土師器甑形土器（第一〇二図）　胴部中位より下部

無底式。胴部は内弯しながら大きく開いて立ち上がる。

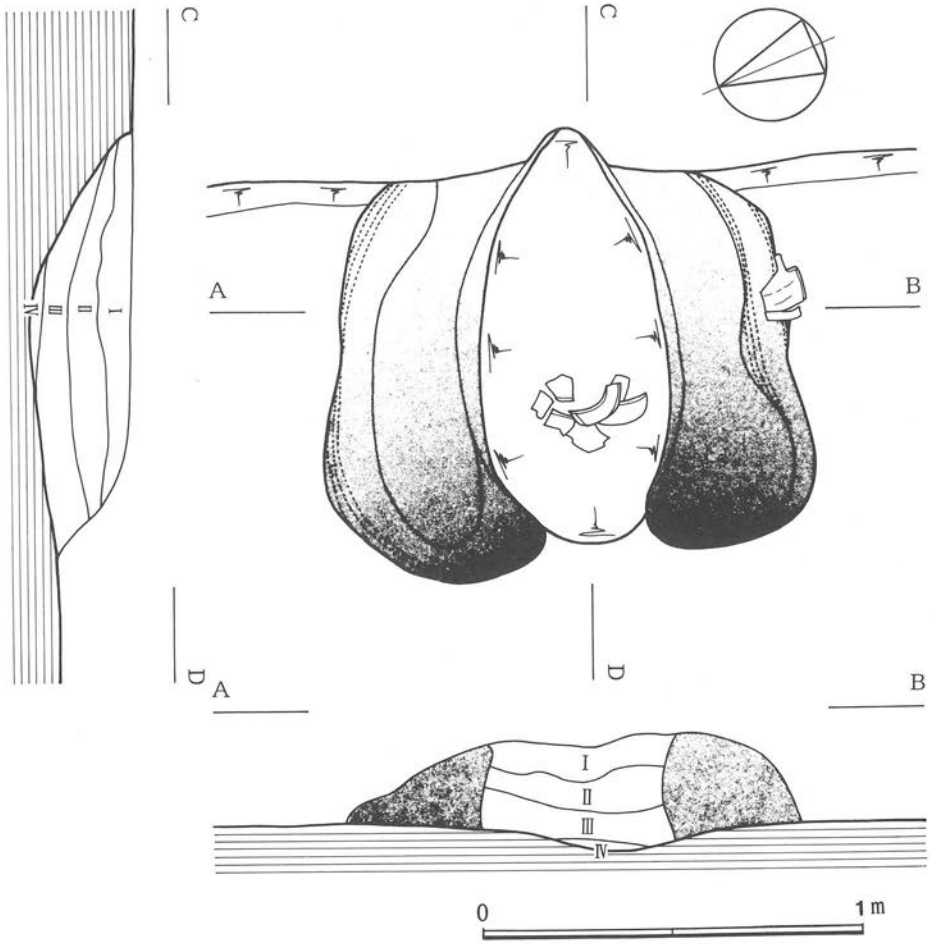
86　砥石。欠損品。現存長5.3cm，断面形は長方形。各面に使用痕あり平滑。上端部に小円孔を穿つ。

重量68.0グラム。（第九〇図）

89　有孔石錘（第九〇図）完形品　長さ9.7cm，幅4.0cm，厚さ0.7cm，上部中央に１孔を穿つ。

重量56.0グラム。形態からみて硬王製大珠の模造品であったことも考えられる。

本址の廃絶の時期は古墳時代後期であろう。



第四七図　第二四号住居址カマド実測図，遺物出土状態図

第二四号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黄褐色粘性土　青白色粘土も点在する。固く締っている。

Ⅱ　暗褐色土　　ローム粒子・炭化物粒子を含む。

Ⅲ　赤褐色土　　焼土粒子・焼土ブロックがベースで炭化物細片も混入する。

Ⅳ　暗赤褐色土　焼土粒子・炭化物粒子を含む。

24　第二五号住居址　（第四八図・図版第二一）

位置および遺存状態　本址は，第二調査区の南西部（A'－6）に位置する。

平坦面に構築されているが，南壁が辛うじて確認できる程度の状態で，遺存状態は好ましくない。

形状および規模　原形はおそらく長方形を呈していたであろう。

周壁の辺長は，東壁X－Z間3.0m（推定），西壁W－Y間2.8m，南壁Y－Z間3.7m（推定），北壁W－X間3.7mを測り，面積約10.8m²ほどの小形竪穴である。主軸線はN－20°－Wを指向する。

壁高および壁面　東壁11cm，南壁0cm，西壁10cm，北壁14cmの壁高で，壁は若干斜めに掘り込んでおり崩落は認められない。

床面　凹凸は認められず平坦である。床面は全体が硬く踏み固められている。

ピット　床面を精査したが検出できなかった。壁外も同様である。

埋没土　竪穴内の埋没土の性状は2層に区分することができる。

Ⅰ　暗褐色土　黒色土がベースで，ローム粒子・ローム小ブロックが混在する。

Ⅱ　褐色土　　黒色土とロームの均等な混合土。

遺物の出土状態と時期　本址の出土遺物はわずかに土師器の2個のみである。

実測資料2は土師器坏形土器（第九〇図）で，上げ底。体部は内弯して立ちがり，そのまま口縁部に至る。

資料に乏しく速断はできないが，本址廃絶の時期は，古墳時代前期ではないかと考えられる。

25　第二七号住居址

位置および遺存状態　本址は，第二調査区の南西部（C'－7）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱も受けておらず，遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁X－Z間5.0m，西壁W－Y間4.8m，南壁Y－Z間4.7m，北壁W－X間5.1mを測り，面積約24.0m²を有する中形竪穴である。北壁中央にカマドを設けている。主軸線はN－31°－Wを指向する。

壁高および壁面　周壁は良好な状態で残存しており，壁高は，東壁30cm，西壁17cm，南壁20cm，北壁30cmを計測する。壁はやや斜めに掘り込まれており，各壁面は堅牢で崩落の痕跡は全く認められない。

床面　平坦で，床面全体が土間状に硬く踏み固められている。

ピット　7個のピットを検出したが，主柱穴の機能を果したのは次の4個であろう。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P_1	42	37	70	P_3	40	40	73
P_2	36	34	71	P_7	46	43	70

ZコーナーのP_4は貯蔵穴であろう。

埋没土　竪穴内の埋没土の性状は3層に区分することができる。

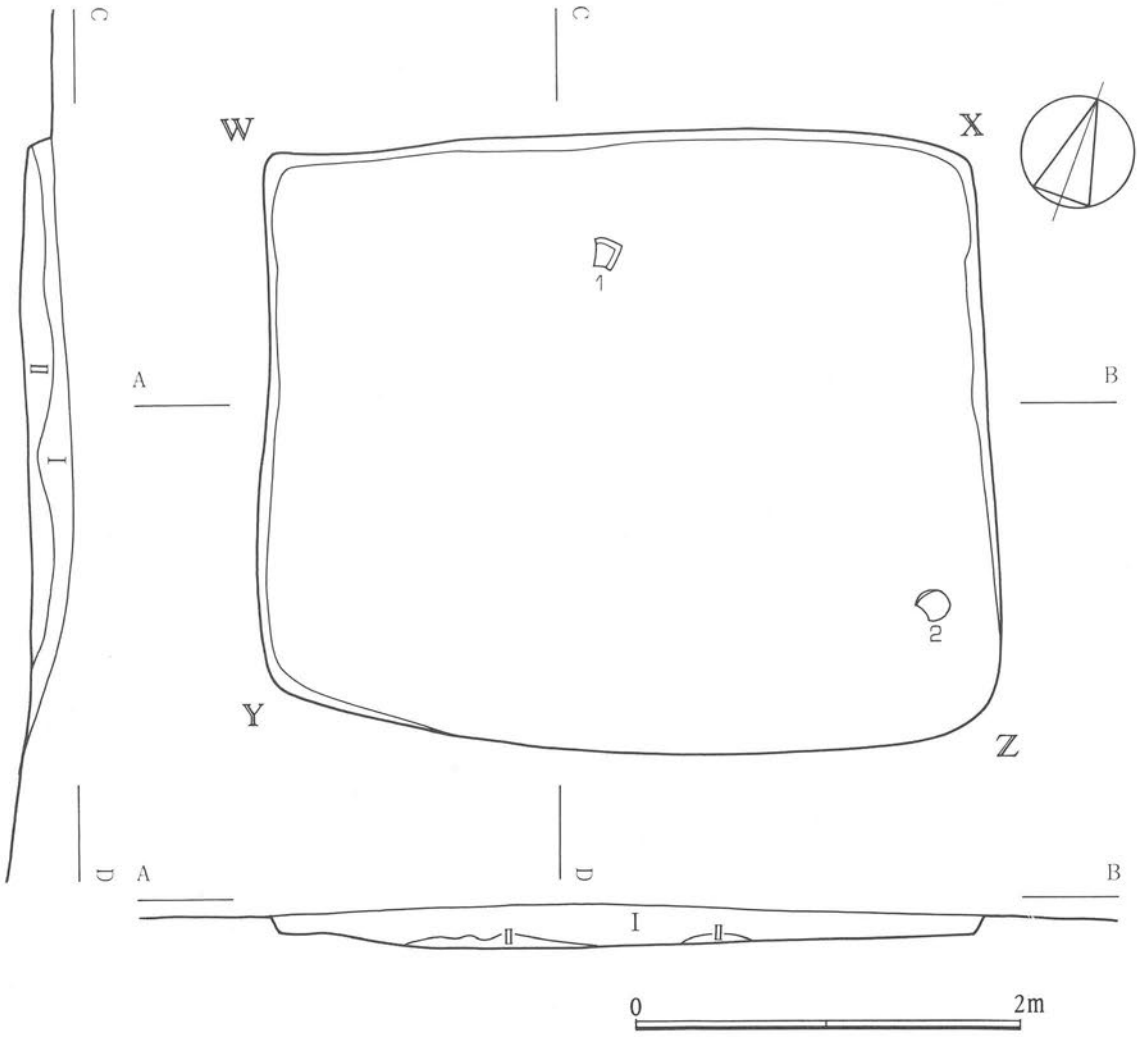
Ⅰ　黒褐色土　黒色土がベースでローム粒子が混入する。

Ⅱ　暗褐色土　Ⅰ層よりもローム粒子の混入が多くなり，カマド前面部は粘土・焼土粒子・炭化物粒子が含まれる。

Ⅲ　明褐色土　ロームがベースで，黒色土粒子が若干含まれる。

カマド　本址のカマドは北壁のほぼ中央に設けられている。

袖部を被覆する暗褐色粘性土の最大幅は150cmである。



第四八図　第二五号住居址実測図，遺物出土状態図

天井部は破壊されていて残存しないが，両袖は黄褐色粘土で固く構築され，他の補強材は一切使っていない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部の煙出し口は30cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を12cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは120cm，幅は63cmである。煙道部煙出し口は外傾して壁外へ立ち上がる。

両袖の燃焼部壁面と煙道部は，被熱によって赤変しているが硬さはない。

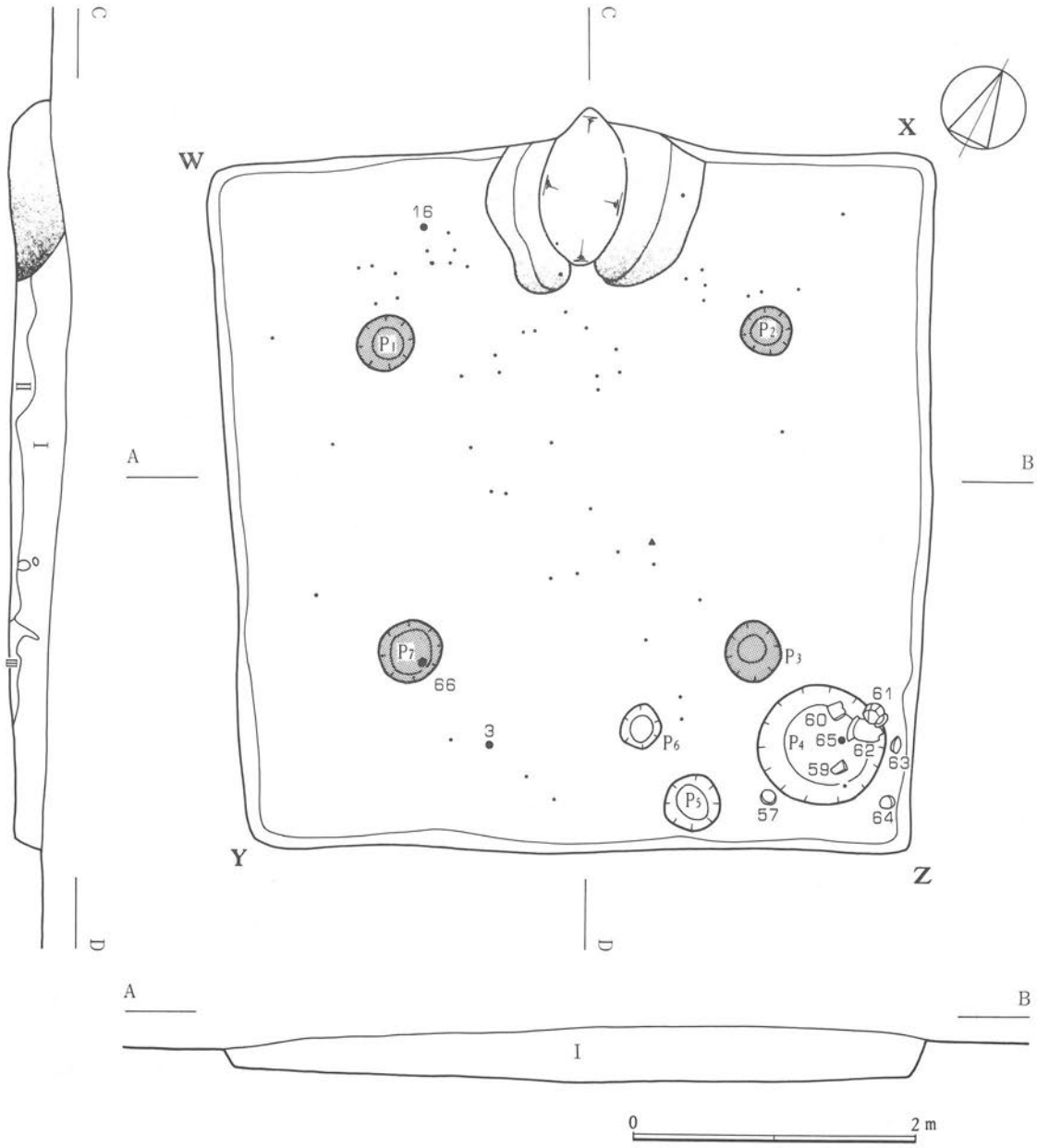
焚口部に近い燃焼部から土師器甕形土器片が出土した。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は66個である。内訳は，土師器65個，自然石１個となる。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，ドットの在り方がＺコーナーを基点としてＷコーナーの方向へ扇形状に展開している状況を把握することができる。つまりこのことは，住居廃絶後に行われた土器の一括投棄の方向性を示唆するものであろう。

遺物と時期　資料として抽出できた器種は，坏形土器・甕形土器・甑形土器である。

３　土師器坏形土器（第五一図）口辺部一部欠損　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜をもち，やや内傾気味に口縁部にいたる。



第四九図　第二七号住居址実測図，遺物出土状態図

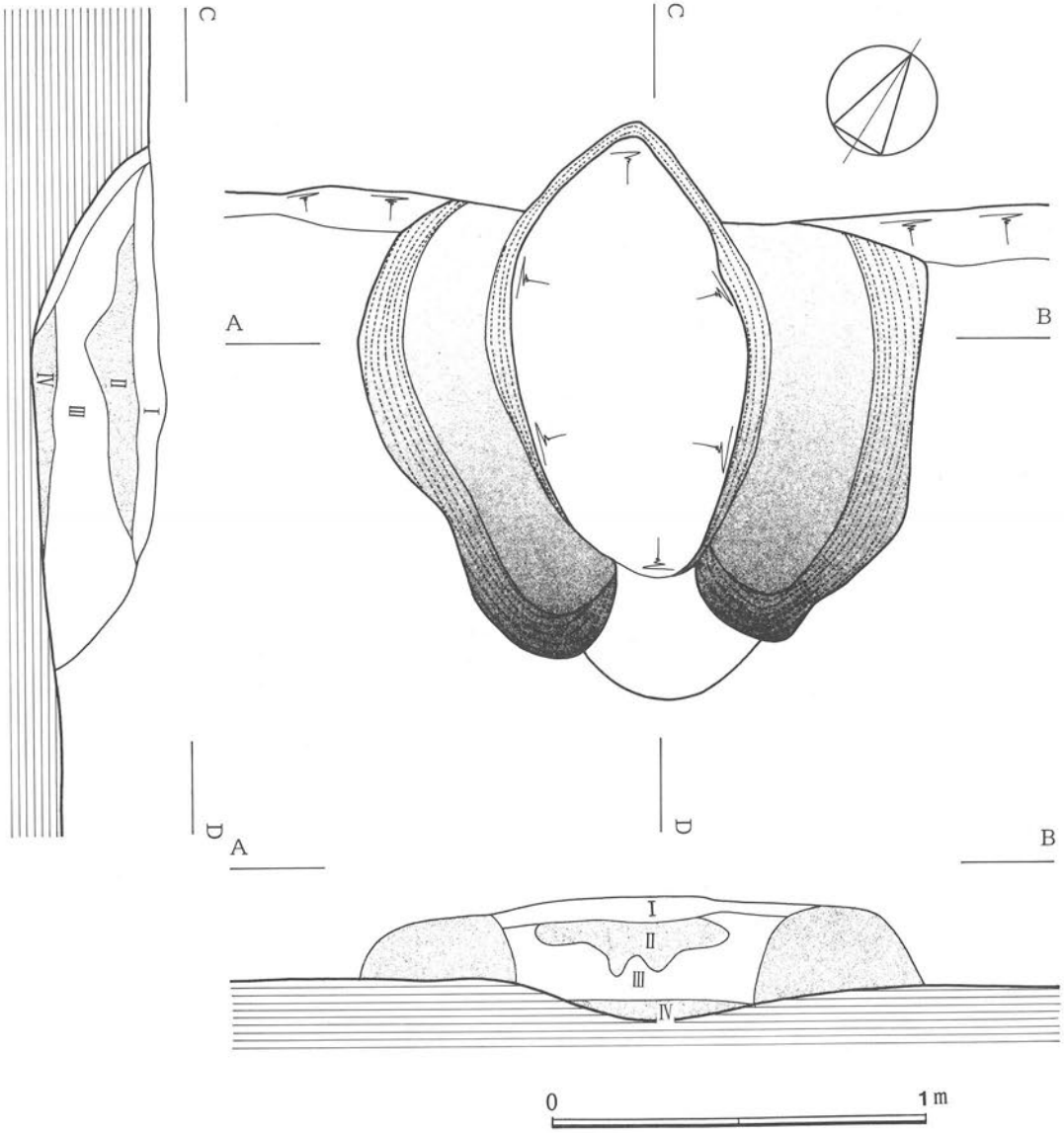
57　土師器坏形土器（第五一図）口辺部一部欠損　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に緩やかな稜を持ち，ほぼ直立気味に口縁部にいたる。

63　土師器坏形土器（第五一図）口辺部一部欠損　平底に近い丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持ち，口辺部は外反して口縁部にいたる。

64　土師器坏形土器（第五一図）準完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持つ。口辺部は直立して口縁部にいたる。

66　土師器坏形土器（第五一図）口辺部一部欠損　平底に近い丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持つ。口辺部は外反して口縁部にいたる。

61　土師器甕形土器（第五一図）砕破接合復元品　平底。胴部は内弯して立ち上がり，頸部から緩やかに外反して口縁部にいたる。胴部最大径は中位よりやや上部に持ち16.3cm，口径15,5cm，器高16.0cm。



第五〇図　第二七号住居址カマド実測図

第二七号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色土　　粘性があり固い。黄褐色粘土・ロームブロックも混在する。

Ⅱ　焼　土　　焼土粒子と焼土ブロックが主体で，微量の炭化物も含まれる。

Ⅲ　暗赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロック・炭化物の混合土。

Ⅳ　赤褐色土　　Ⅲ層に比して色調が明るくなる。性状はⅢ層とほとんど変らない。

65　土師器甕形土器（第五一図）完形品　平底。胴部は内弯して立ち上がり，頸部から緩やかに外反して口縁部にいたる。口径12.4cm，胴部最大径を上位に持ち15.3cm，器高23.0cmで長胴形を呈する。

16　土師器甕形土器（第一〇二図）胴部下位～底部　平底。胴部は内弯して立ち上がる。

60　土師器甑形土器（第五一図）準完形品　無底式長胴形。胴部は内弯して立ち上がり，中位より上部は直立気味に立ち上がり，口縁部でわずかに外傾する。胴部中位に把手が付いている。
最大径は口径で21.2cm，器高24.2cm。

62　土師器甑形土器（第五一図）完形品　無底式長胴形。胴部は内弯して立ち上がり，中位より上部はほぼ直立気味に立ち上がり，口縁部で外傾する。胴部中位に把手が付いている。
最大径は口径で20.8cm，器高25.0cm。

本址の廃絶の時期は，古墳時代後期であろう。

26　**第二八号住居址**　（第五二図・図版第二三）

位置および遺存状態　本址は，第二調査区の東部北寄り（D'－10）に位置する。

平坦面に構築されており，竪穴自体の遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁X－Z間3.0m，西壁W－Y間2.9m，南壁Y－Z間3.2m，北壁W－X間3.4mを測り，面積約9.9m²の小形竪穴である。北壁の中央部にカマドを設けている。主軸線はN－6°－Wを指向する。

壁高および壁面　東壁14cm，西壁14cm，南壁14cm，北壁15cmの壁高で，壁は斜めに掘り込んでおり，堅牢さはないが崩落の形跡は認められない。

床面　平坦で硬く踏み固められている。A－Bセクションの東側床面に，長径150cm，短径90.0cm，深さ13cmの土壙状の落ち込みがあるが性格は不明である。後世のもので竪穴に伴うものではないようである。

ピット　4個のピットを検出した。いずれも主柱穴である。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P_1	25	24	30	P_3	23	23	35
P_2	24	22	31	P_4	26	25	36

埋没土　竪穴内の埋没土の性状は3層に区分することができる。

Ⅰ　黒褐色土　黒色土がベースで，ローム粒子・ローム小ブロックを少量混入する。

Ⅱ　褐色土　　ロームが主体で，黒色土粒子を混入する。

Ⅲ　暗褐色土　黒色土・大小のロームブロックの混合で撹乱状の性状。

カマド　北壁の中央に設けられている。

袖部を被覆する暗褐色粘性土の最大幅は110cmである。

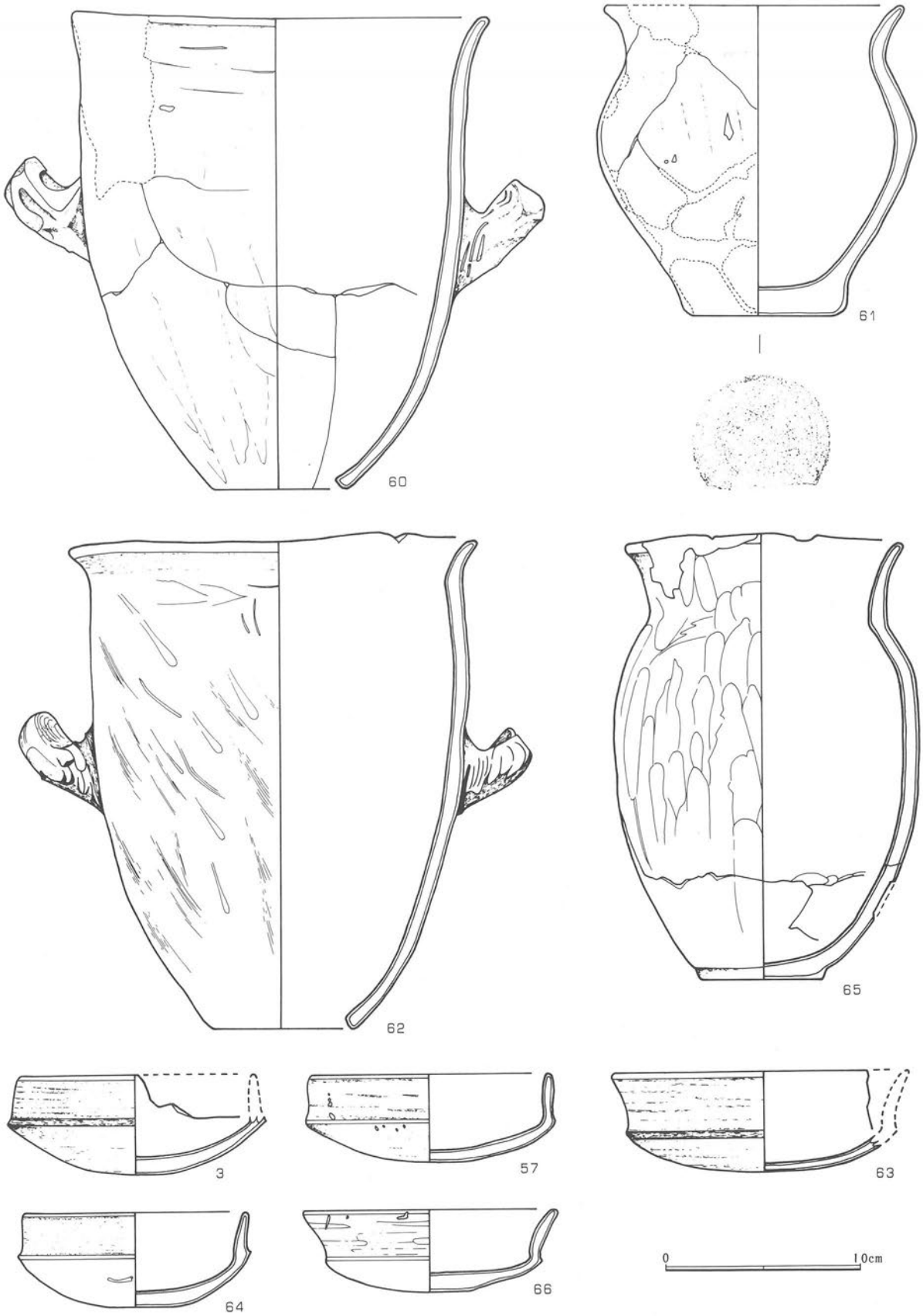
天井部は残存していないが，両袖は黄褐色粘土で構築され，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口部は壁内，燃焼部は壁内と壁外に跨り，煙道部と煙出し口は大きく壁外に突出させている。

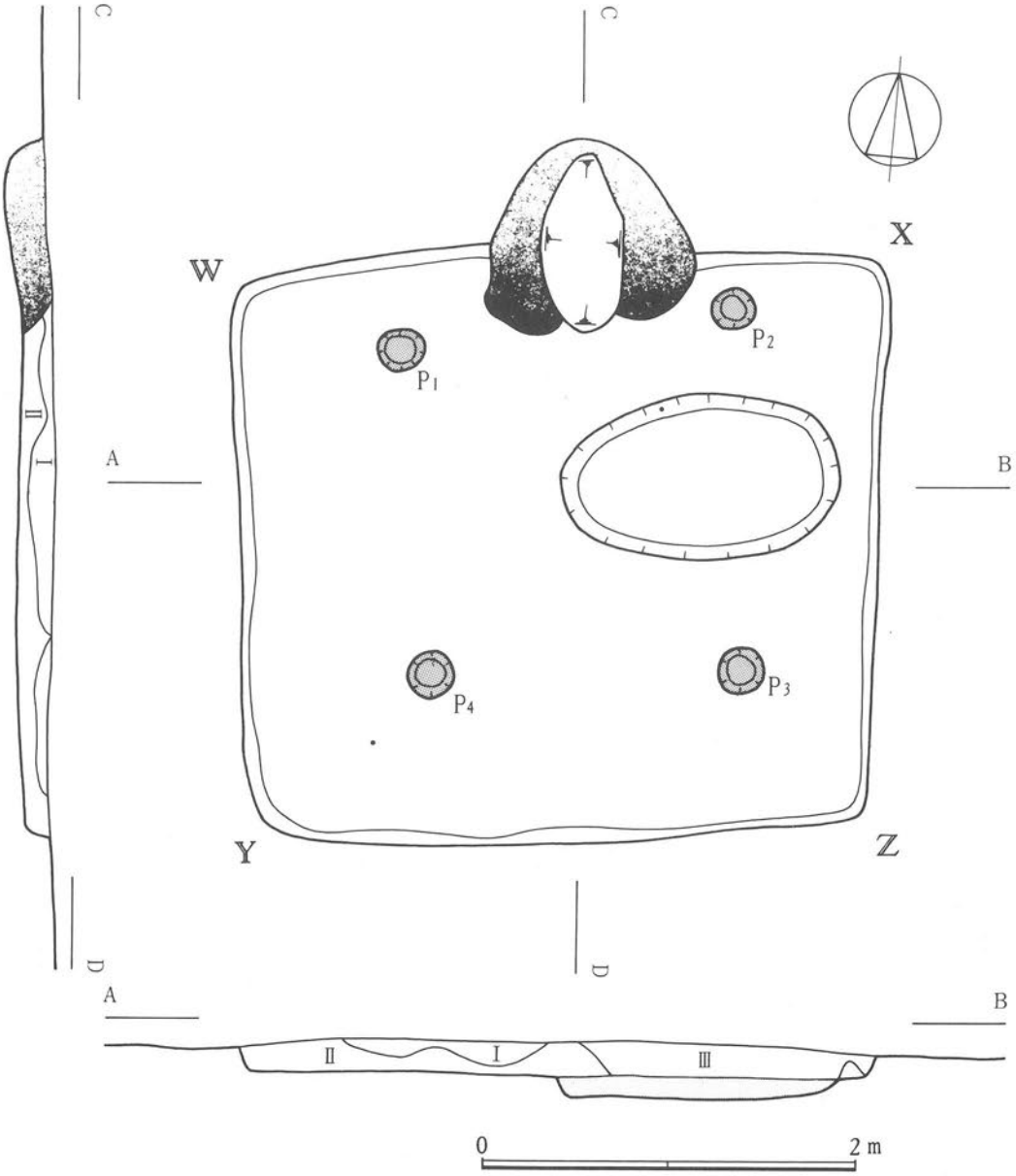
焚口部から煙道部先端までの長さは100cm，燃焼部の幅は45cmである。

燃焼空間は，床面を10cmほど掘り窪めて形成している。断面に現れた層序を観察すると，焼土は全く認められず，黒褐色土のみが充満しているので余り利用されなかったのかもしれない。

遺物と時期　本址の出土遺物は土師器小片2個のみである。竪穴やカマドの形態からみて本址の廃絶の時期は，古墳時代後期頃と考えられる。本址は，構築後間もなく完全引越しが行われたかもしれない。



第五一図　第二七号住居址出土遺物実測図



第五二図　第二八号住居址実測図，遺物出土状態図

27　第二九号住居址

位置および遺存状態　本址は，第二調査区の東部（E'－7）に位置し，遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は長方形を呈する。長軸は南北方向である。

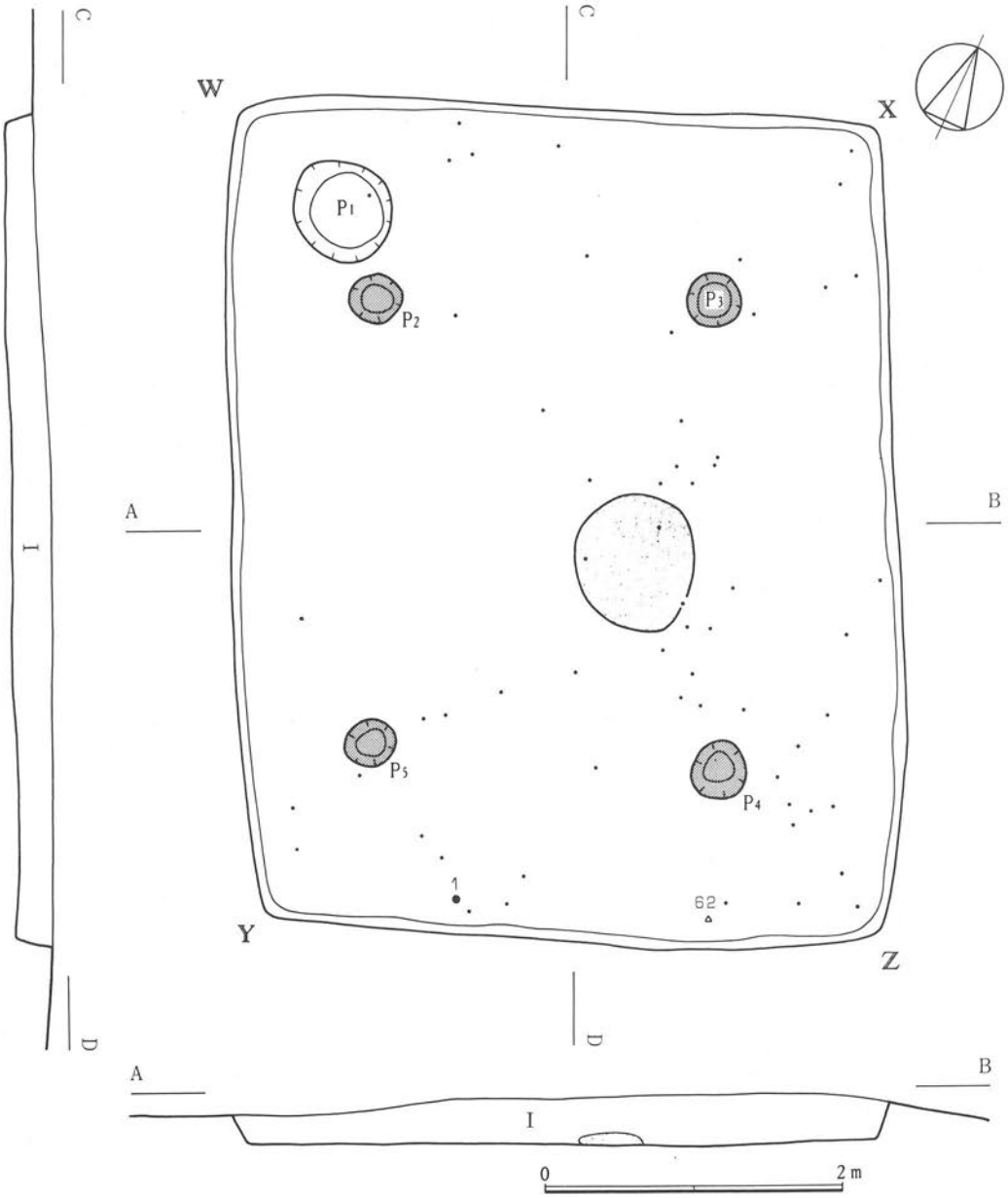
周壁の辺長は，東壁X－Z間5.5m，西壁W－Y間5.5m，南壁Y－Z間4.2m，北壁W－X間4.3mを測り，面積約23.4m²の中形竪穴である。竪穴中央部よりやや東側に地床炉を設けている。主軸線はN－26°－W。

壁高および壁面　周壁の壁高は，東壁25cm，西壁20cm，南壁25cm，北壁19cmを計測する。壁は若干斜めに掘り込まれており，壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

床面　平坦で全体が硬く踏み固められている。中央部よりやや東側に地床炉を設けている。

埋没土　本址の埋没土の性状は，ローム粒子を多量に混入する暗褐色土の単一層である。

A－Bセクションの東側，炉址の直上部には焼土粒子が多い。



第五三図　第二九号住居址実測図，遺物出土状態図

ピット　5個のピットを検出したが，次の4個が主柱穴である。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P 2	36	34	40	P 4	40	38	39
P 3	36	36	39	P 5	35	30	37

炉址　焼土の範囲は，長径95cm，短形80cmの不整円形である。床面を7cmほど掘り窪めた地床炉である。

焼土粒子・焼土ブロック・炭化物小片が堆積している。燃焼部底面は赤変硬化している。出土遺物なし。

遺物と時期　本址の遺物総数は62個である。内訳はすべて土師器である。

ドット・マップによる平面分布の在り方は，空白部分の多い疎らな出土状態である。

資料1は，土師器坏形土器（第九一図）準完形品である。丸底で体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたり，口縁部はわずかに外傾する。本址廃絶の時期は，古墳時代中期であろう。

28　第三一号住居址　（第五四図・図版第二六）

位置と遺存状態　本址は，第二調査区の南西隅（E'－２～３）に位置する。

平坦面に構築されているが，竪穴の南東隅Ｚコーナーの南壁は，第八号井戸址の掘削によって破壊されている。この部分以外の遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間4.3ｍ，西壁Ｗ－Ｙ間4.1ｍ，南壁Ｙ－Ｚ間4.5ｍ，北壁Ｗ－Ｘ間4.2ｍを測り，面積約18.1㎡の小形竪穴である。北壁中央部にカマドを設けている，主軸線はＮ－23°－Ｗを指向する。

壁高および壁面　井戸址の掘削による破壊部以外の周壁は，良好な状態で残存している。

壁高は，東壁18㎝，西壁22㎝，南壁20㎝，北壁20㎝である。

壁はやや斜めに振り込まれており，各壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

床面　わずかな凹凸はあるがおおむね平坦である。床面全体は硬く踏み固められているが，特に中央部は粘土・ローム・黒色土の混合土によって，非常に硬く土間状に固められている。

Ｚコーナーの一部が破壊されていることは前述のとおりである。

ピット　４個のピットを検出した。この４個はすべて主柱穴の機能を果たしているだろう。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位㎝）
P_1	40	35	60	P_3	28	27	63
P_2	33	33	56	P_4	29	25	60

埋没土　本址竪穴内の埋没土の性状は，ローム小・中ブロックや粘土ブロックを混入する暗褐色土の単一層である。カマド前面部には焼土粒子・粘土小ブロックの混入もみられるが，区分線を入れるほどの層序変化とはいえない。

カマド　北壁の中央部に設けられている。

袖部を被覆する黄褐色粘性土の最大幅は145㎝である。

天井部は廃絶時に破壊されたものと思われるが，両袖は黄褐色粘土と青白色粘土の混合土によって強固に構築されており，他の補強材は一切使用していない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部煙出しは20㎝ほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を12㎝ほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは90.0㎝，幅は60.0㎝である。壁面は火熱によって赤変しているが，煉瓦状の硬さはない。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は15と僅少である。

内訳は，土師器12個，須恵器２個，自然石１個となる。

出土状態はきわめて疎らであるが，P_1 の中層から甕形土器片が出土している。

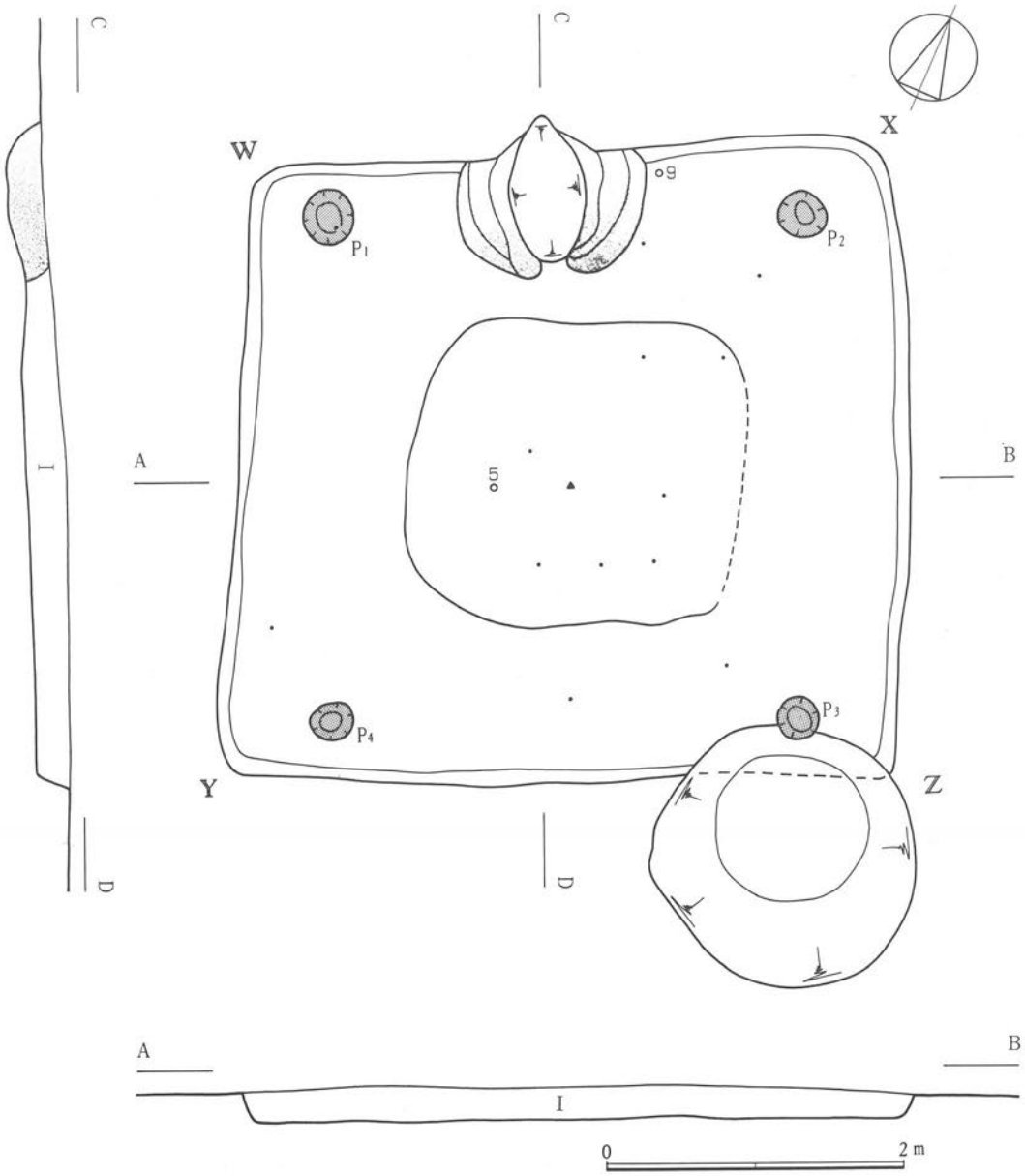
遺物と時期　資料として抽出できた器種は坏形土器と甕形土器である。

5　須恵器坏形土器（第九一図）復元品　平底。体部は直線状に外傾して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

9　須恵器坏形土器（第九一図）約50％欠損　平底。体部は外傾して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

P_1　土師器甕形土器（一〇二図）胴部中位～口縁部破片　胴部は内弯して立ち上がり，頸部でくびれて外反して口縁部にいたる。

本址も資料に乏しいが，鬼高Ⅱ式と思われる坏片があるので，古墳時代後期の廃絶と考えられる。



第五四図　第三一号住居址実測図，遺物出土状態図

29　第三二号住居址　（第五六図・図版第二六）

位置および遺存状態　本址は，第二調査区の南西部（F′～G′－５～６）に位値する。

平坦面に構築されているが，竪穴の南西部（Ｙコーナー）は第三四号住居址と重複している。しかし，原形は明確に捉えることができる程度の切り合いなので，本址にとっては然したる影響はない。

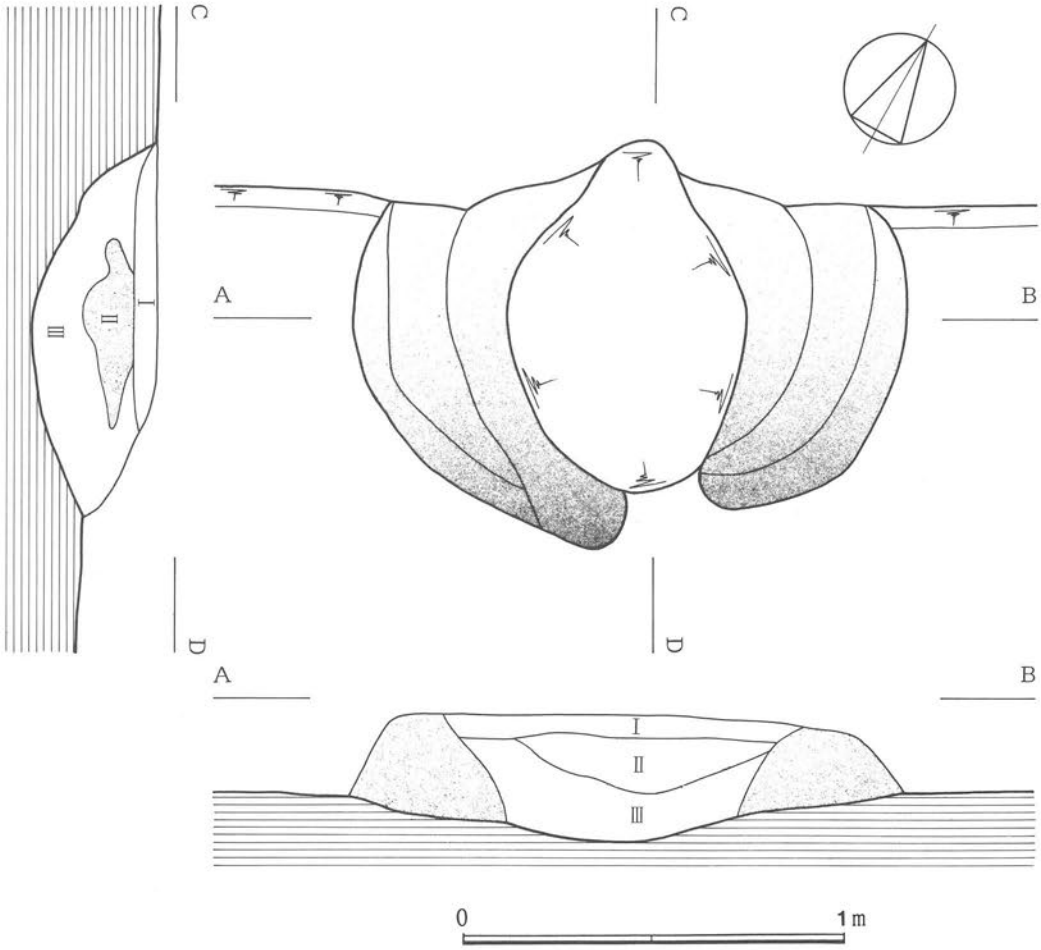
この部分以外の遺存状態には問題はない。新旧関係は本址の方が旧い。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間7.0ｍ，西壁Ｗ－Ｙ間7.2ｍ，南壁Ｙ－Ｚ間7.2ｍ，北壁Ｗ－Ｘ間7.4ｍを測り，面積約51.8㎡を有する大形竪穴である。北壁の中央にはカマドを設けている。周壁下には周溝が一巡する。

主軸線はＮ－15°－Ｗを指向する。

床面の中央部に2.2×2.2ｍ，深さ29㎝の窪みがある。



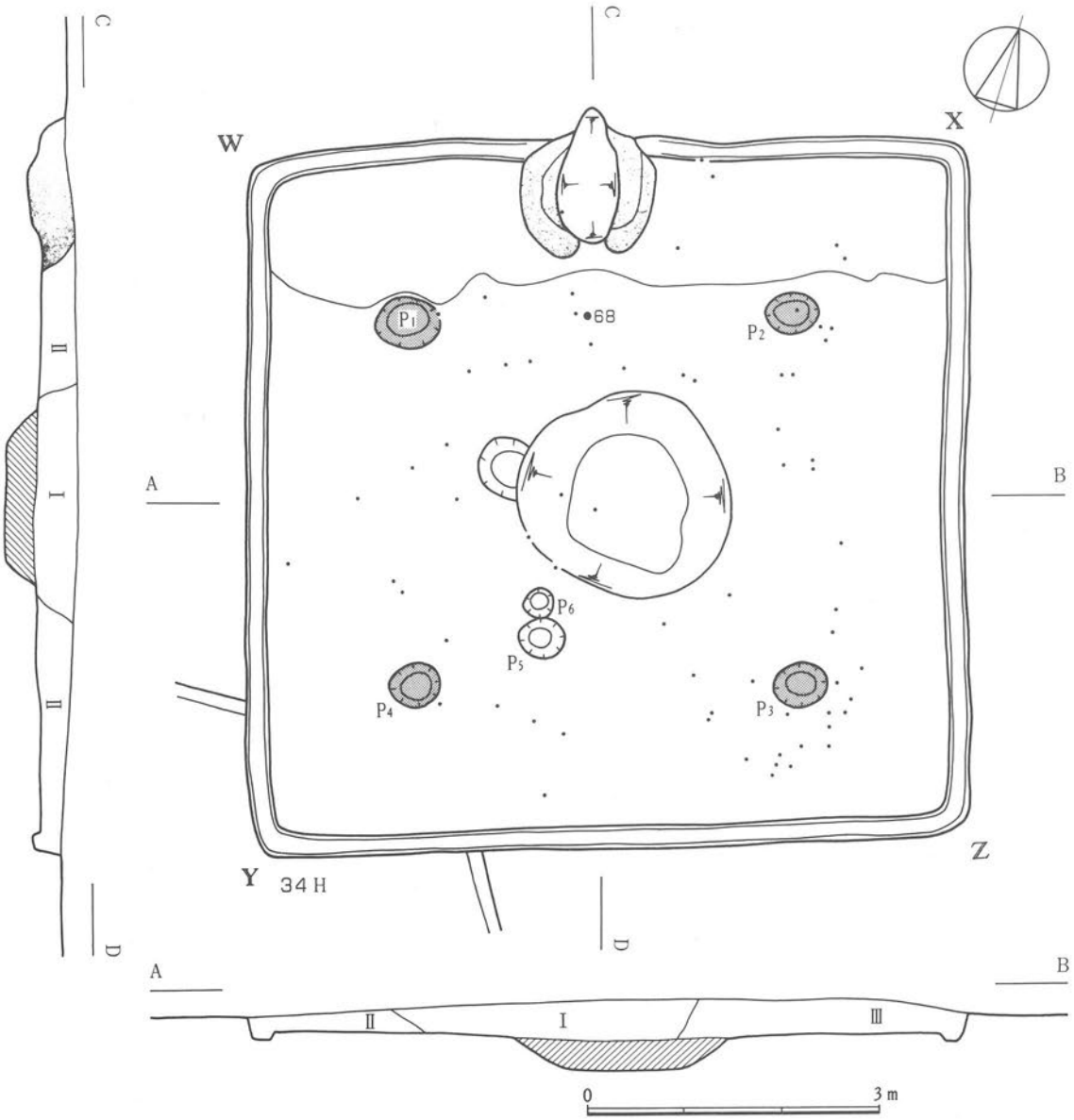
第五五図　第三一号住居址カマド実測図

第三一号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色土　焼土ブロック・黄褐色粘土ブロックを含む。

Ⅱ　赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロックが主体で，炭化物小片も混入する。

Ⅲ　暗褐色土　粘土ブロック・焼土粒子を少量含む。



第五六図　第三二号住居址実測図，遺物出土状態図

壁高および壁面　Yコーナー以外の周壁は，良好な状態で残存している。

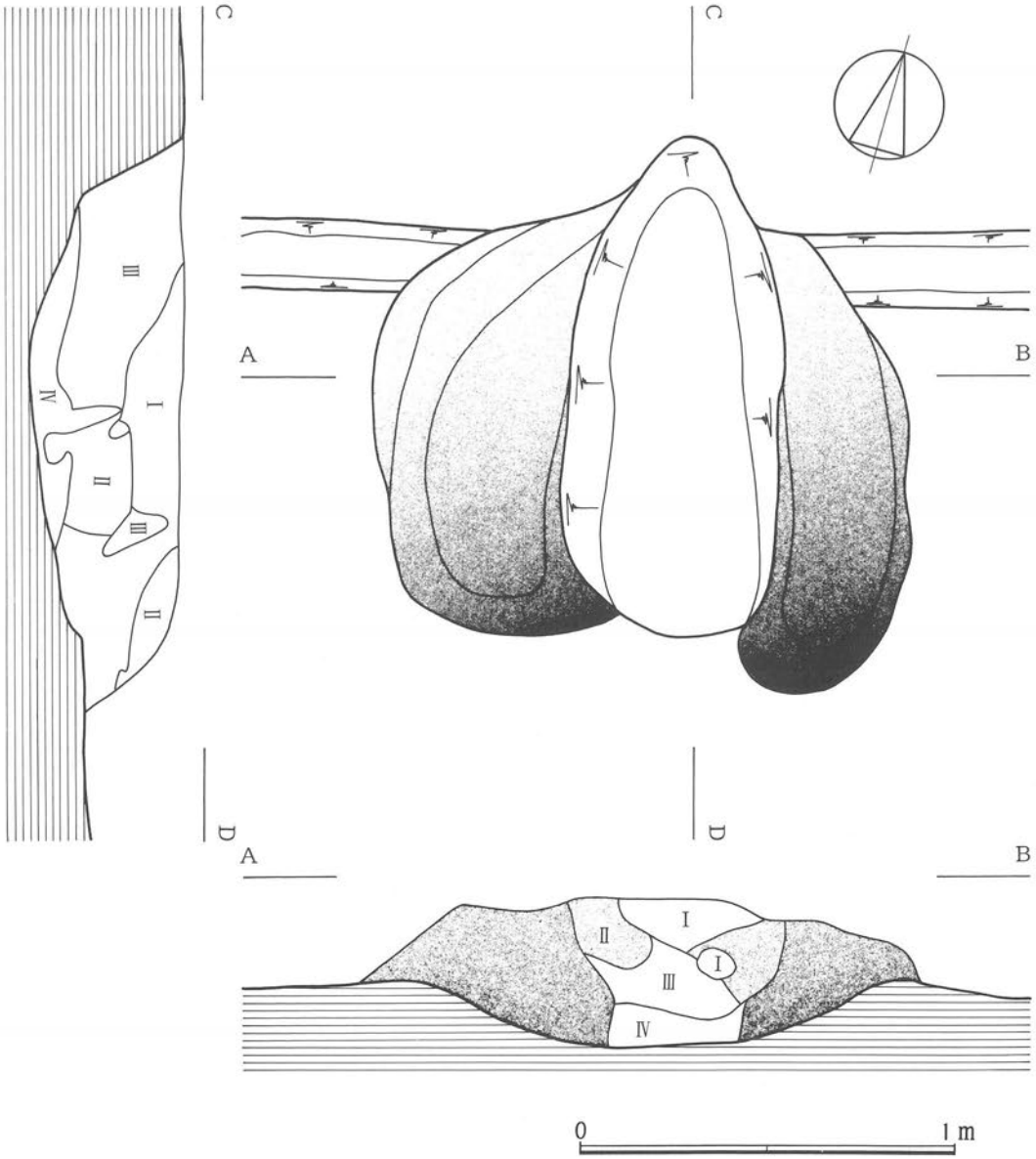
壁高は，東壁20cm，西壁17cm，南壁20cm，北壁20cmである。

壁はやや斜めに掘り込まれており，壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

床面　中央部の窪み以外の床面は，平坦で硬く踏み固められている。特にカマド前面部とその両側は，北壁際まで粘土とロームの混合土によって非常に硬くなっている。周溝の断面はU字状で幅20cm，深さ10cmである。中央部の窪みは埋没土の性状から本址に附属するものと思われる。

ピット　7個のピットが検出されたが，位置関係・規模からみて主柱穴の機能を果したのは次の4個であろう。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ	(単位cm)
P 1	60	50	69	P 3	52	46	72	
P 2	50	40	72	P 4	50	44	70	



第五七図　第三二号住居址カマド実測図

第三二号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色土　粘土と黒色土の混合土。焼土粒子・焼土中ブロック・炭化物粒子も微量ではあるが散在する。

Ⅱ　焼　土　焼土粒子と焼土ブロックが大部分を占める。炭化物粒子も少量点在する。

Ⅲ　赤褐色土　黒色土・焼土粒子多量。

Ⅳ　褐色土　ロームが主体で，微量の焼土粒子を混入する。

埋没土　竪穴内の埋没土の性状は３層に大別することができる。

Ⅰ　黒褐色土　黒色土がベースで少量のローム粒子を含む。固く締っている。

Ⅱ　褐色土　　ロームが主体で黒色土粒子を含む。

Ⅲ　明褐色土　ローム粒子・ローム小中ブロックを多量に含む。

カマド　北壁の中央に設けられている。

袖部を被覆する黄褐色粘土の最大幅は140cmである。

天井部は残存しないが，両袖は黄褐色粘土によって固く構築されており，他の補強材は一切使用していない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部煙出し口は25cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を15cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは135cm，燃焼部の幅は55cmである。両袖の燃焼部壁面は被熱によって赤変し硬化している。出土遺物はない。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は69個で，すべて土師器である。

ドット・マップによって平面分布の状態を観察すると，周壁際に空白が多く，中央周辺部にややまとまっている。

出土状態については，特別な傾向を指摘することはできない。

遺物と時期　出土遺物のうち，器形が整っていて実測資料に抽出できたのは坏形土器１個だけである。

68　土師器坏形土器（第九一図）完形品　平底に近い丸底。

体部は内弯して立ち上がり，口辺部は外反し，口縁部は外傾する。

極小破片ばかりで時期特定には困惑したが，本址の廃絶は古墳時代後期頃と考えられる。

30　**第三三号住居址**　（第五八図・図版第二七）

位置および遺存状態　本址は，第二調査区の南東隅（Ｊ′－８～９）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱もなく竪穴自体の遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は隅丸方形に近似する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間3.5ｍ，西壁Ｗ－Ｙ間3.7ｍ，南壁Ｙ－Ｚ間3.7ｍ，北壁Ｗ－Ｘ間4.0ｍを測り，面積約13.7㎡の小形竪穴である。中央部やや西寄りの位置に地床炉を設けている。主軸線はＮ－35°－Ｅ。

壁高および壁面　周壁は，おおむね良好な状態で残存している。

壁高は，東壁24cm，西壁は低く10cm，南壁19cm，北壁25cmである。

壁はやや斜めに掘り込まれており，堅牢ではないが崩落の痕跡はない。

床面　全体として観察すればおおむね平坦であるが，部分的には漣状の凹凸がある。

床面は硬く踏み固められている。

ピット　３個のピットを検出したが，主柱穴とするには無理があるのではないだろうか。

埋没土　竪穴内の埋没土は２層に区分することができる。

Ⅰ　暗褐色土　黒色土にローム粒子が多量に混入する。炉址の直上部は焼土粒子が多い。

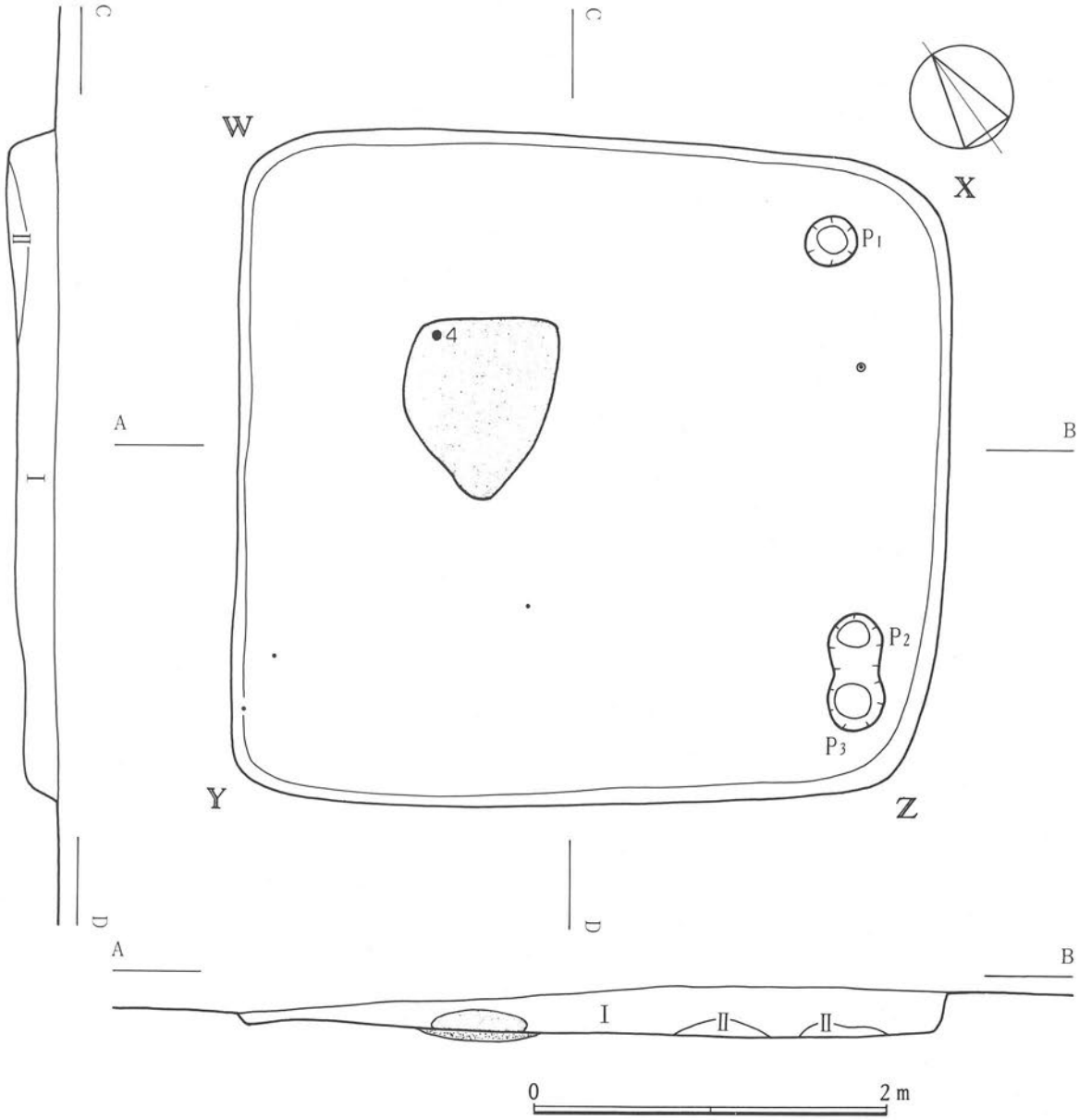
Ⅱ　明褐色土　ロームがベースで黒色土粒子をわずかに含む。

炉址　中央部のやや西側に設けてあり，長径50cm，短径43cmの不整形を呈する。床面を７cmほど掘り窪めて燃焼部を形成している。焼土の堆積はわずかに２cmほどである。

遺物と時期　本址の出土遺物は５個に過ぎない。資料に抽出したのは手捏土器１個である。

4　土師器手捏土器（第九一図）完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

口縁部はつまみによる指頭圧痕がある。本址廃絶の時期は古墳時代前期であろう。



第五八図　第三三号住居址実測図，遺物出土状態図

31　第三四号住居址

位置および遺存状態　本址は，第二調査区の南西部（F′－4）に位置する。

北側へ3°ほど傾斜する緩斜面に構築されている。北東部Xコーナーの一角は，第三二号住居址と重複しており，この部分は毀傷を受けている。

形状および規模　平面形は菱形状の不整長方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁X－Z間4.0m（推定），西壁W－Y間5.0m，南壁Y－Z間3.9m，北壁W－X間4.2mを測り，推定面積約15.5m²の小型竪穴である。主軸線はN－18°－Wを指向する。

壁高および壁面　残存する周壁は，まずまずの遺存状態である。

壁高は，東壁13cm，西壁20cm，南壁23cm，北壁4cmである。

壁は斜めに掘り込まれており，壁面は堅硬ではないが，崩落の痕跡は認められない。

床面　全体として観ればおおむね平坦であるが，断面図に現れない部分に若干の凹凸がある。

ピット　9個のピットを検出することができた。

表4　第三四号住居ピット計測値　　(単位cm)

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P_1	15	13	7	P_4	13	13	5	● P_7	23	23	70
P_2	15	13	7	● P_5	30	25	31	P_8	88	80	60
P_3	17	15	8	P_6	23	22	8	● P_9	20	19	38

9個のピットのうち，貯蔵穴のP_8を除いて主柱穴としての数値的な要件を具備しているのはP_5・P_7・P_9の3個であろう。しかし，3本柱住居址がないわけではないが，本址の場合は3個の位置関係が不規則なので，遽には断定しかねる局面がある。

埋没土　竪穴内の埋没土の性質は，ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を混入する黒褐色土の単一層である。A－Bセクションの中にはロームの中・大ブロックが点在する。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は41個である。

内訳は，縄文土器2個，土師器36個，石製品1個，自然石2個となる。また，大小長短様々な形状の炭化材が，かなり広範囲に散乱状態で出土している。

遺物の出土状態をドット・マップによって観察すると，ひとつの特徴を指摘することができる。それは，土器の大部分がZコーナーのP_8周辺に集中していることである。加之，完形品の多いことは本址廃絶の背景とかかわりがありそうである。

遺物と時期　資料として抽出できた器種は，坏形土器・甕形土器・壺形土器である。

2　土師器壺形土器（第六〇図）頚部より上部欠損。平底に近い丸底。胴部は内弯して立ち上がり球形状を呈する。胴部最大径を下位に持つ。

3　土師器坏形土器（第六〇図）完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持ち，外反して口縁部にいたる。

4　土師器坏形土器（第六〇図）完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，口縁部はゆるやかに外傾する。

5　土師器坏形土器（第六〇図）完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，口縁部はゆるやかに外傾する。

6　土師器坏形土器（第六〇図）準完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

8　土師器坏形土器（第六〇図）完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

9　土師器坏形土器（第六〇図）完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

11　土師器坏形土器（第六〇図）完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部はさらに内弯を強めて口縁部にいたる。

35　土師器坏形土器（第六〇図）口辺部一部欠損　平底に近い丸底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

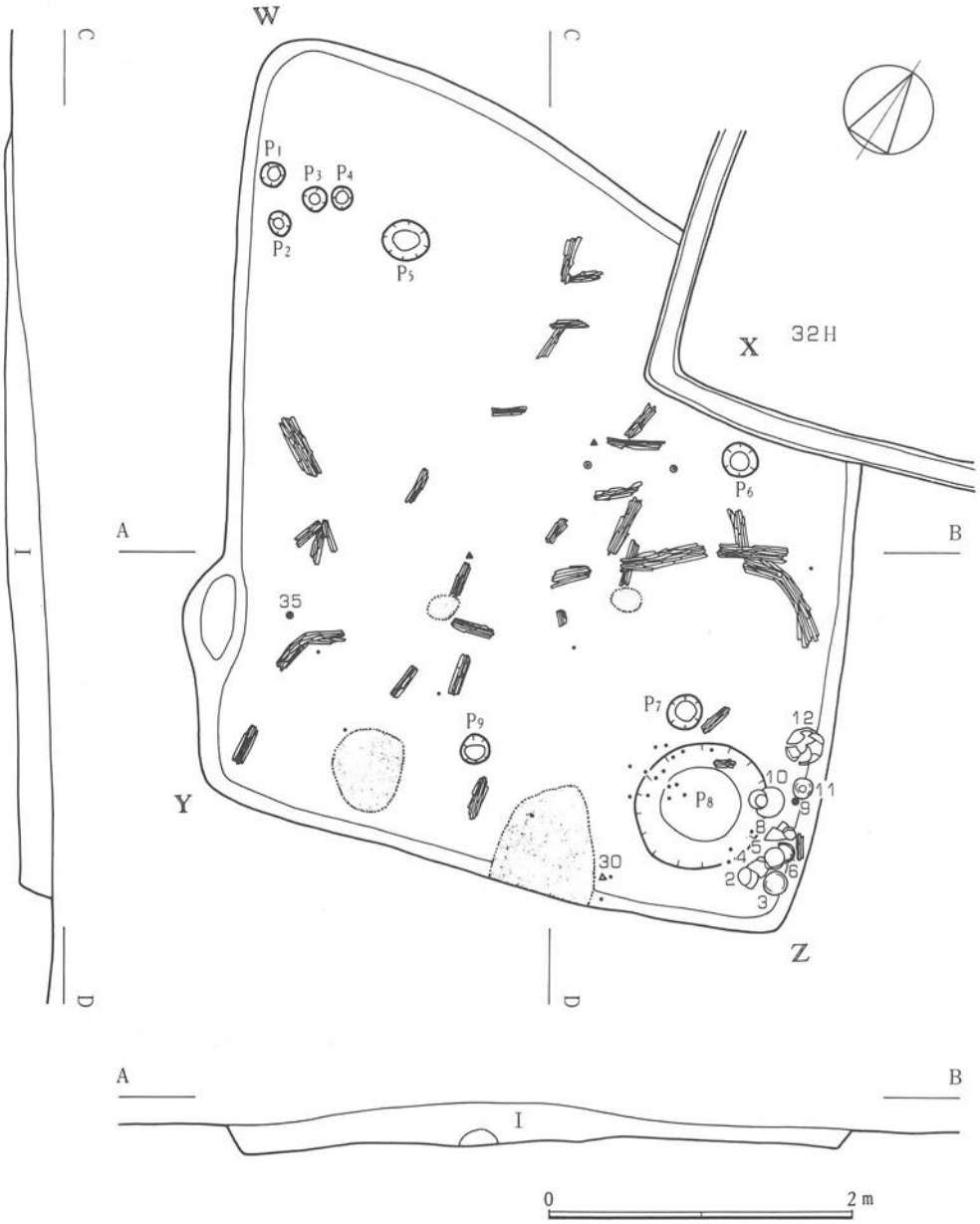
10　土師器甕形土器（第六〇図）準完形品　口縁部一部欠損　平底。胴部は内弯して立ち上がり，頚部はくびれ，口辺部は外傾して口縁部にいたる。

胴部最大径は中位に持ち19.8cm，口径16.0cm，器高20.2cm。

12　土師器甕形土器（第一〇二図）胴　中位～底部。上げ底。胴部は内弯して立ち上がる。

30　石製紡錘車（第六〇図）完形品　径49mm，厚さ10mm，重量34グラム。

b面には，細い線によって4分割された各区画に，線刻による模様が刻まれている。



第五九図　第三四号住居址実測図，遺物出土状態図

なお，資料６の底部には木葉痕がある。

本址は，炭化材が多量に出土したことを考えると，廃絶の直接の動機は火災による家屋の焼失のように思われる。

貯蔵穴の周辺に完形品が多いのは，周章狼狽して土器を整理する暇もなかったことを物語っているのではないだろうか。本址廃絶の時期は古墳時代中期ごろと想定される。

32　第三五号住居址　（第六一図・図版第二九）

位置および遺存状態　本址は，第三調査区の西部端（Ｃ－７）に位置する。

平坦面に構築されているが，西壁Ｙコーナー寄りに壁高29cmに対して深さ９cmの土壙状遺構が，また南壁Ｚコーナー寄りに壁高25cmに対して深さ16cmの土壙状遺構が部分的ではあるが竪穴を傷つけており，良好な遺存

状態とは言い難い。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁X－Z間4.9m，西壁W－Y間4.8m，北壁W－X間4.9mを測り，面積約23.5m²の中形竪穴である。主軸線はN－27°－Wを指向する。

壁高および壁面　残存する周壁の遺存状態はおおむね良好である。

壁高は，東壁20cm，西壁29cm，南壁25cm，北壁28cmである。

壁はやや斜めに掘り込まれており，壁面は堅固である。

床面　凹凸はあるが硬く踏み固められている。南東部を除いて周溝が回る。幅15cm，深さ7cm。

東壁際Zコーナー寄りに長径85cm，短径80cm，厚さ5～8cmの焼土塊が円形状に堆積する。

また，南壁際の中央よりやや東寄りの位置には，長径140cm，短径80cm，厚さ3～12cmの青白色粘土塊が不整楕円形状に存在する。

ピット　18個のピットを検出した。計測値は下表のとおりである。

表5　第三五号住居址ピット計測値　　(単位cm)

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P_1	28	23	20	P_6	15	15	8	P_{11}	27	27	80	P_{16}	23	18	8
● P_2	40	37	65	P_7	23	22	19	P_{12}	16	15	10	P_{17}	34	27	20
P_3	19	17	10	P_8	16	14	9	● P_{13}	30	26	75	P_{18}	20	18	11
P_4	30	25	20	P_9	40	40	40	P_{14}	20	18	21				
● P_5	43	38	65	P_{10}	80	70	45	● P_{15}	35	32	65				

これらのピットのうち，位置関係や規模などを検討すると，P_2・P_5・P_{13}・P_{15}の4個が主柱穴の機能を果したものと思われる。補助的なピットとしてはP_1・P_4・P_7・P_9・P_{11}などが考えられる。

埋没土　本址の埋没土の性状は2層に区分することができる。

Ⅰ　暗褐色土　黒色土がベースでローム粒子を多量に混入し，焼土小ブロックが少量点在する。

Ⅱ　明褐色土　ロームが主体で黒色土粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量混入する。

この性状は人為層序である。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は56個である。

内訳は，土師器53個，石製品2個，鉄製品1個となる。

出土状態をドットを使った平面分布で観察すると，空白部の多い疎らな出土状態であるが，Zコーナー付近に集中する傾向がみられる。

遺物と時期　出土遺物のうち器種の確認できたものは坏形土器と甕形土器である。

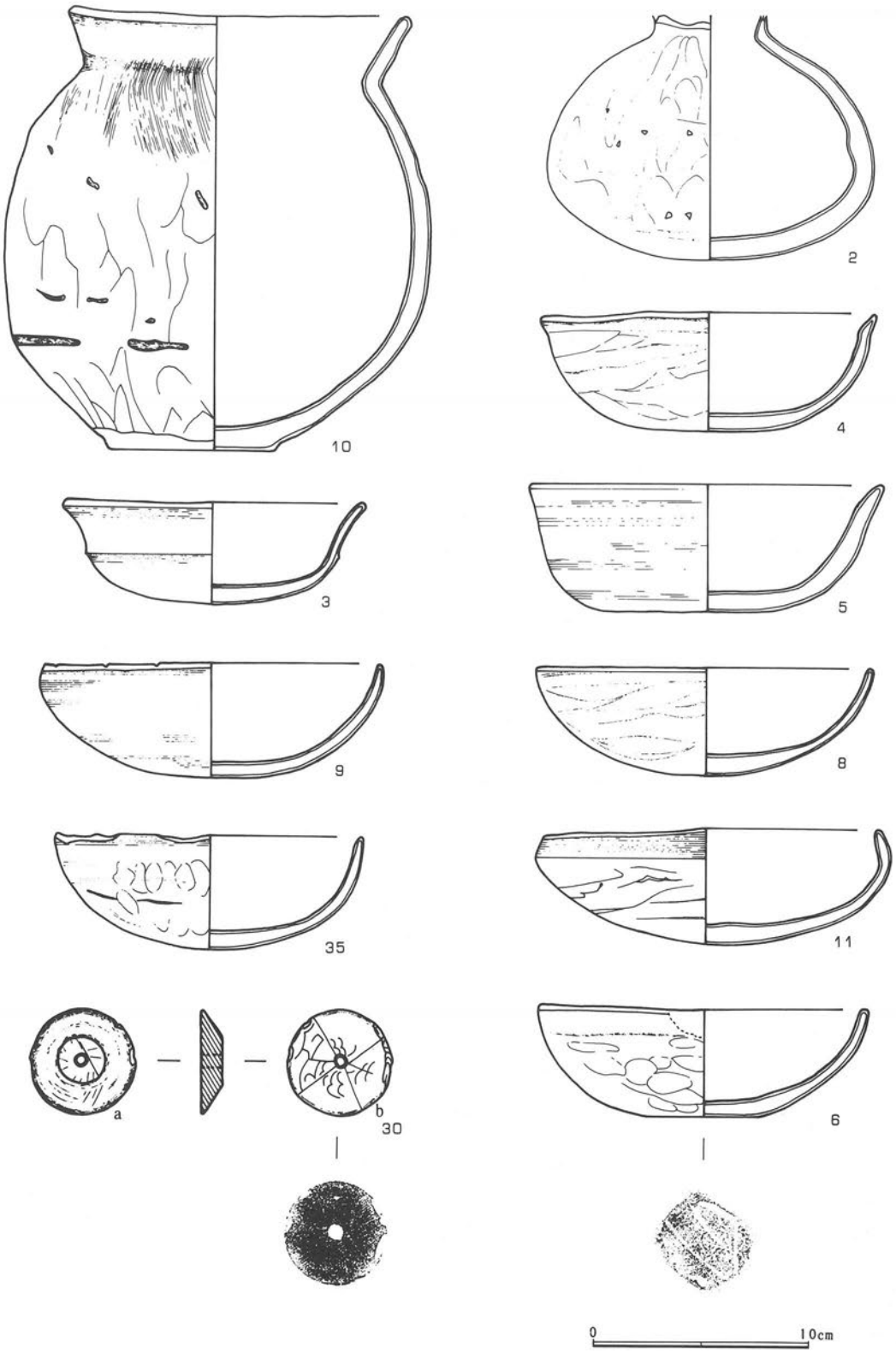
完形品はなくいずれも破片であるが，甕形土器の胴部破片に細かい刷毛目状の整形痕があることや，内面に鋭い稜を持つ坏形土器破片などが見られることから，和泉期に比定し得ることができると考えられる。

16　刀剣〈鉄製品〉(第九六図) 欠損品　現存長25cm，

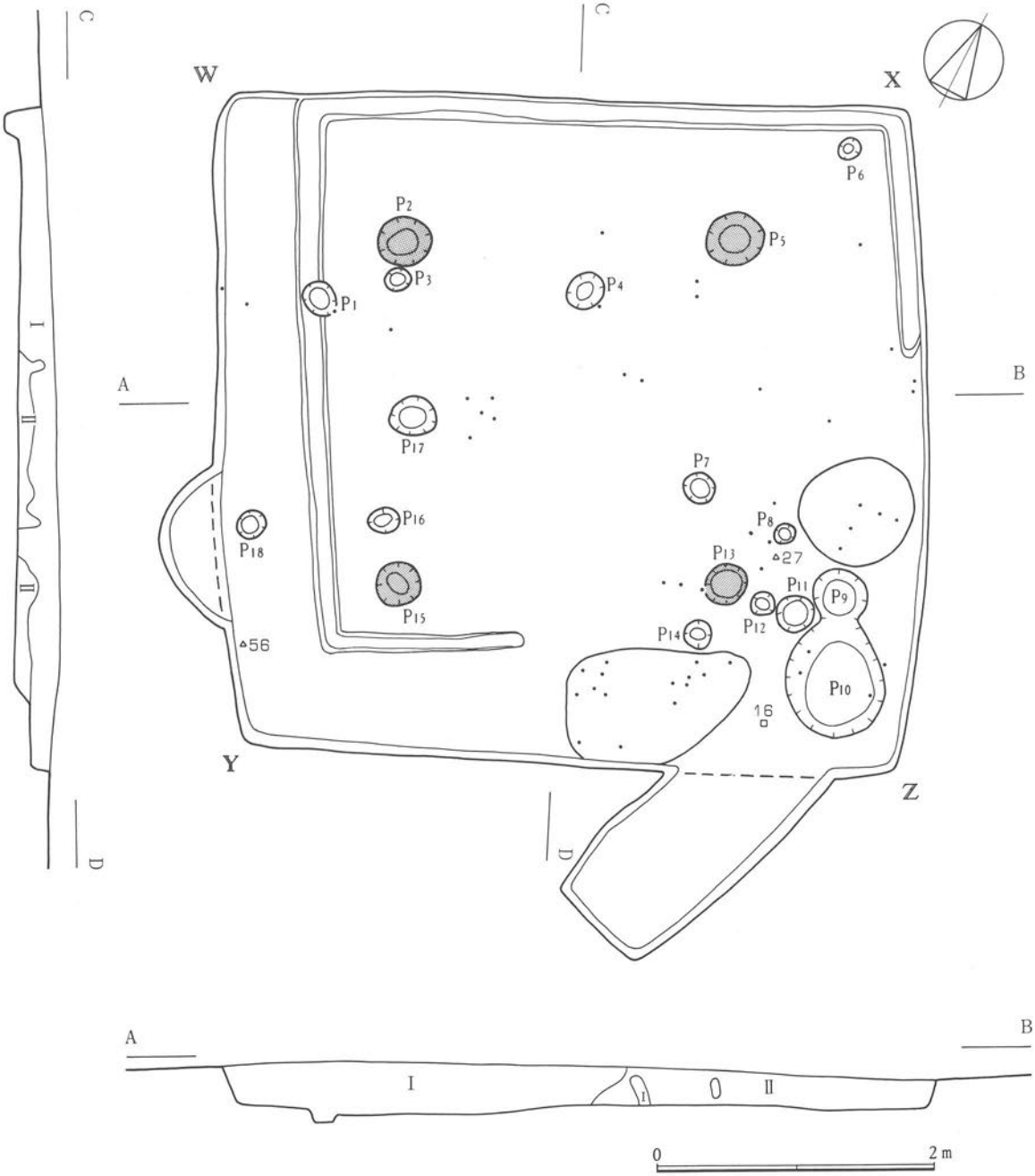
27　砥石〈石製品〉(第九六図) 欠損品　現存長5.5cm，断面は台形に近い長方形，厚さ18mm，重量66g。

56　紡錘車〈石製品〉(第九六図) 完形品　径46mm，断面台形，厚さ13mm，重量42g。

本址の廃絶の時期は，古墳時代中期ごろと考えられる。



第六〇図　第三四号住居址出土遺物実測図



第六一図　第三五号住居址実測図，遺物出土状態図

33　第三六号住居址

位置および遺存状態　本址は第三調査区の中央部南寄り（K～L－3～4）に位置する。

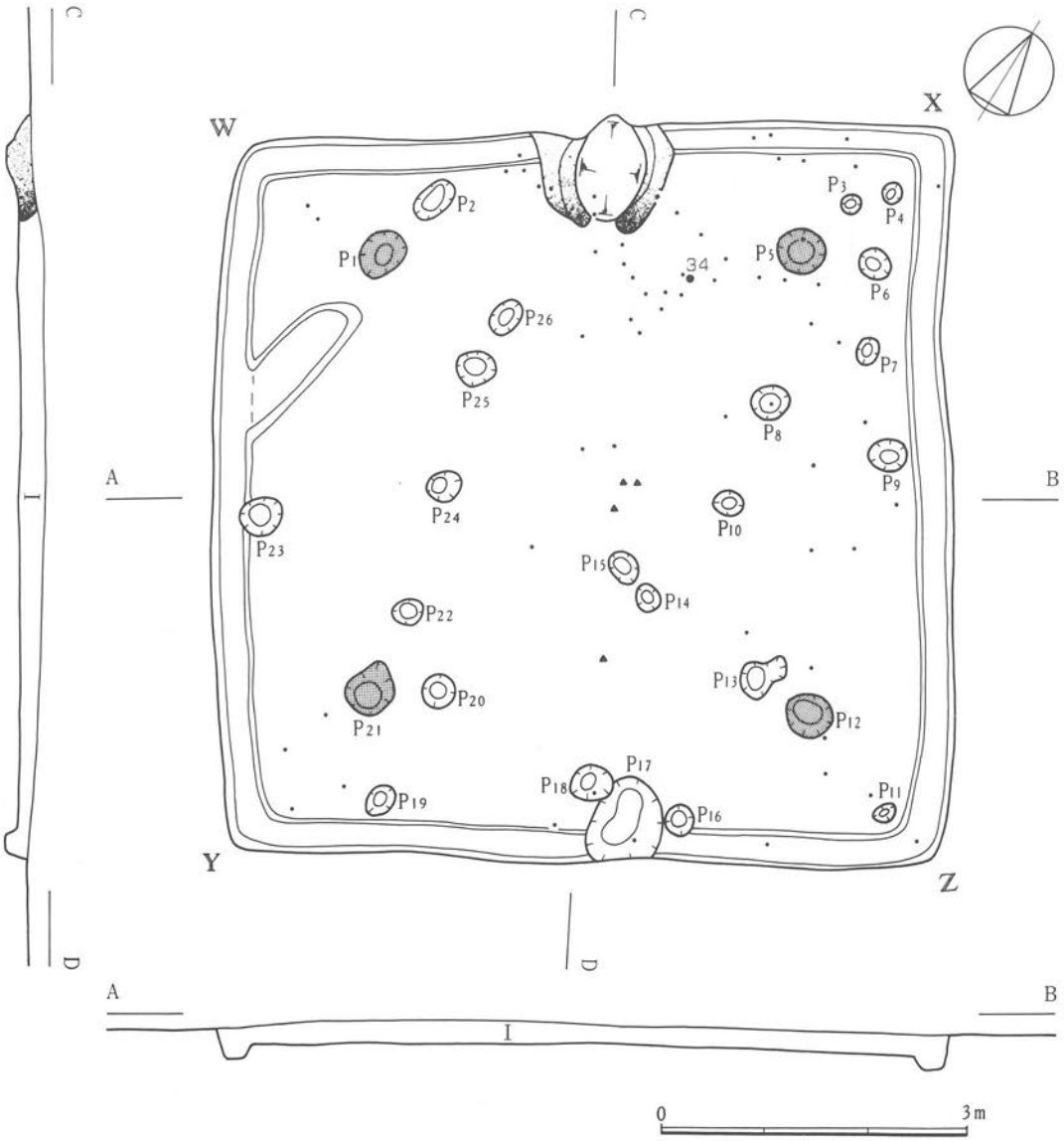
平坦面に構築されており，竪穴に対しては破壊も撹乱もなく遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁X－Z間7.3m，西壁W－Y間7.0m，南壁Y－Z間7.0m，北壁W－X間7.0mを測り，面積約49.7m²を有する大形竪穴である。北壁中央部にはカマドを設けている。主軸線の方向はN－27°－W。

壁高および壁面　周壁の遺存状態は良好である。壁高は，東壁22cm，西壁19cm，南壁12cm，北壁18cmである。

周壁下には，幅25cm，深さ12cmの周溝が一巡する。周壁はやや斜めに掘り込まれており堅固である。



第六二図　第三六号住居址実測図，遺物出土状態図

床面　おおむね平坦で硬く踏み固められている。西壁際に深さ13cmの掘り込みがある。

ピット　26個のピットを検出した。計測値は下表のとおりである。

表6　第三六号住居址ピット計測値　　(単位cm)

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
● P 1	50	30	47	P 8	37	34	40	P 15	33	24	41	P 22	27	20	15
P 2	42	30	27	P 9	38	33	29	P 16	31	28	21	P 23	41	37	27
P 3	17	17	13	P 10	28	25	21	P 17	85	70	31	P 24	33	33	18
P 4	20	20	9	P 11	19	15	11	P 18	40	35	29	P 25	38	35	33
● P 5	47	45	48	● P 12	47	45	50	P 19	33	27	25	P 26	38	24	30
P 6	33	25	30	P 13	48	35	21	P 20	32	30	40				
P 7	27	20	26	P 14	27	23	39	● P 21	54	48	48				

以上のピットのうち，主柱穴としての役割を果したのはP_1・P_5・P_{12}・P_{21}の４個であろう。

補助柱穴が存在することは言を俟たない。P_{17}は出入口施設に伴うピットであろう。

埋没土　竪穴内の埋没土の性状は暗褐色土の単一層である。カマド前面部付近は粘土小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子が含まれるが，区分線を引くほどの明瞭な層序の変化とはいえない。

カマド　北壁のほぼ中央部に設けられている。

袖部を被覆する黄褐色粘土の最大幅は145cmである。

天井部は残存しないが，両袖は黄褐色粘土によって強固に構築されており，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部煙出し口は20cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を10cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは102cm，燃焼部の幅は30cmである。両袖の燃焼部壁面は若干赤変している程度である。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は66個である。

内訳は，土師器61個，土製品１個，自然石４個となる。

ドットを使った平面分布の状態を観察すると，極めて疎らに散在するが，敢えて言及すればカマド前面部からＸコーナー付近にややまとまりをみせている。

遺物と時期　本址の出土遺物はすべて破片である。

坏形土器片の多くは硬質で赤褐色を呈しており，口縁部が外反して体部にかけて強く丸く張り出しているものや，小形甕形土器の胴部破片が球形を呈しているものがあり，これらは鬼高Ⅱ式に比定できると思われる。

34は土製支脚で，長さ17.2cm，中位径5.8cm，重量980グラム。

本址の廃絶の時期は古墳時代後期であろう。

34　第三七号住居址　（第六四図・図版第三〇）

位置および遺存状態　本址は，第三調査区の中央部東寄り（B′－４）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱も受けておらず遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形を呈する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間4.4m，西壁Ｗ－Ｙ間4.2m，南壁Ｙ－Ｚ間4.1m，北壁Ｗ－Ｘ間4.2mを測り，面積約18.0m²の小型竪穴である。北壁中央部にはカマドを設けている。主軸線はＮ－30°－Ｗを指向する。

壁高および壁面　周壁の遺存状態は良好で，壁高は，東壁23cm，西壁10cm，南壁20cm，北壁20cmである。

壁は，ほぼ垂直に掘り込まれており，壁面に崩落の痕跡は認められない。

床面　おおむね平坦で硬く踏み固められている。

ピット　５個のピットを検出したが，次の３個が主柱穴である。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P_1	40	35	61	P_2	33	33	60	P_5	55	48	48

本址は，３本柱住居址である。

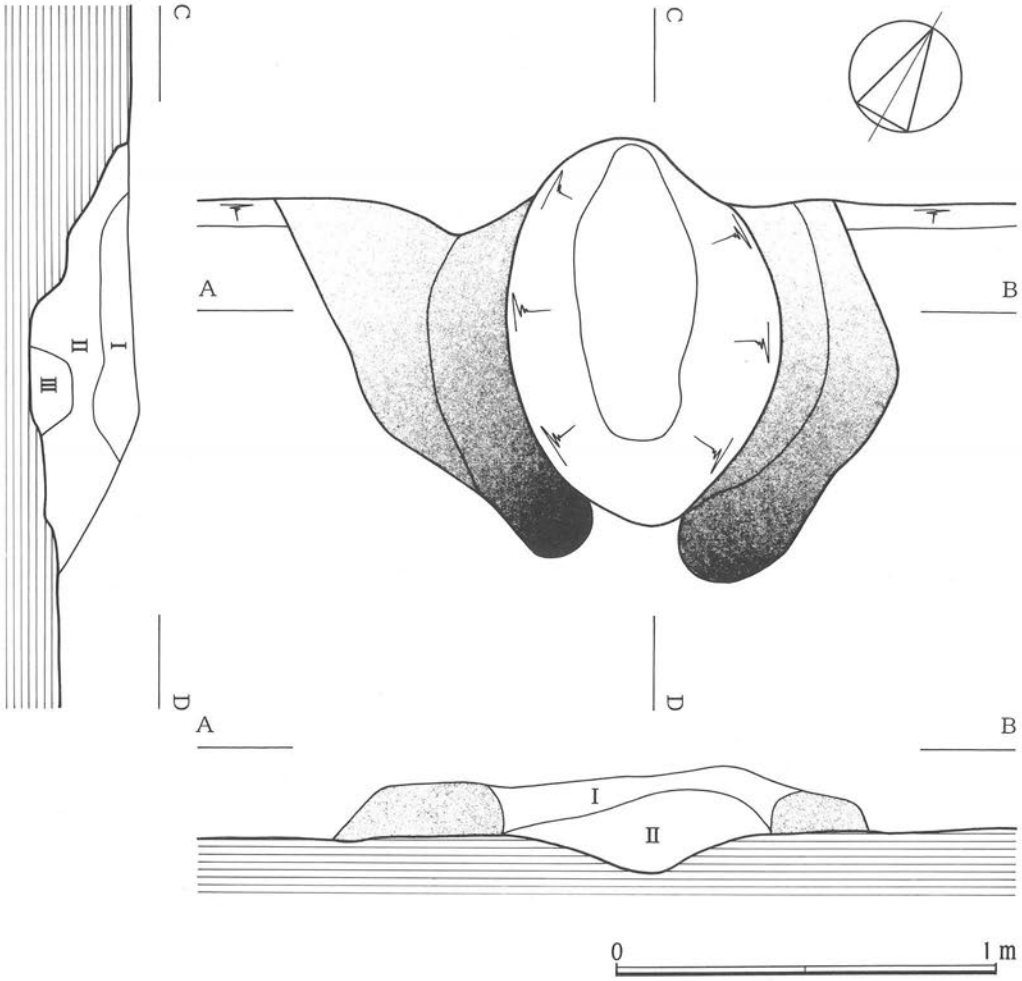
埋没土　竪穴内の埋没土の性状は，２層に区分することができる。

Ⅰ　暗褐色土　黒色土がベースで，ローム粒子・ローム小・中ブロックが混在する。

Ⅱ　褐色土　　褐色粘土ブロック，粘性は弱い。

この性状は，人為層序であることはいうまでもない。

カマド　北壁の中央に設けられている。



第六三図　第三六号住居址カマド実測図

第三六号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　淡褐色土　焼土粒子・ローム粒子の混入が多い。脆弱である。

Ⅱ　暗赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子の混入が多い。

Ⅲ　暗褐色土　粘土ブロックを含み，弱い粘性がある。

袖部を被覆する黄褐色粘性土最大幅は185cmである。

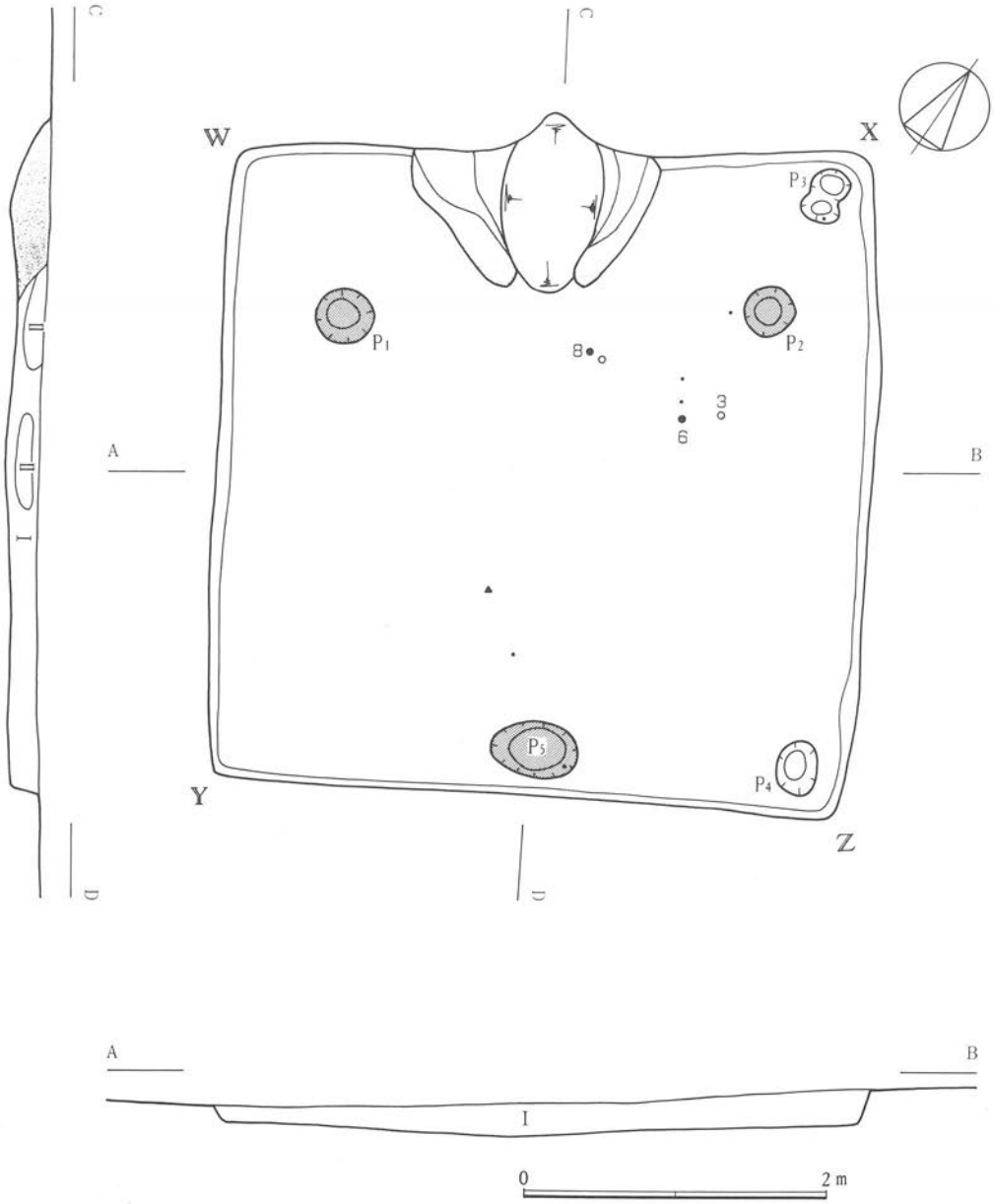
天井部は残存しないが，両袖は黄褐色粘土によって固く構築されており，他の補強材は一切使用していない。

構造は焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部煙出し口は15cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を６cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは120cm，燃焼部の幅は70cmである。両袖の燃焼部壁面の赤変は左側が顕著である。右袖の被覆土上から土師器小形鉢形土器が出土している。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は11個である。

内訳は，土師器８個，須恵器２個，自然石１個となる。



第六四図　第三七号住居址実測図，遺物出土状態図

平面分布状態は極めて疎らである。

遺物と時期

6　土師器甕形土器（第九六図）胴部中位以下欠損

胴部は内弯して立ち上がり，最大径は中位になるだろう。口縁部は鋭く外反する。

8　土師器鉢形土器（第九六図）口縁部一部欠損　平底。

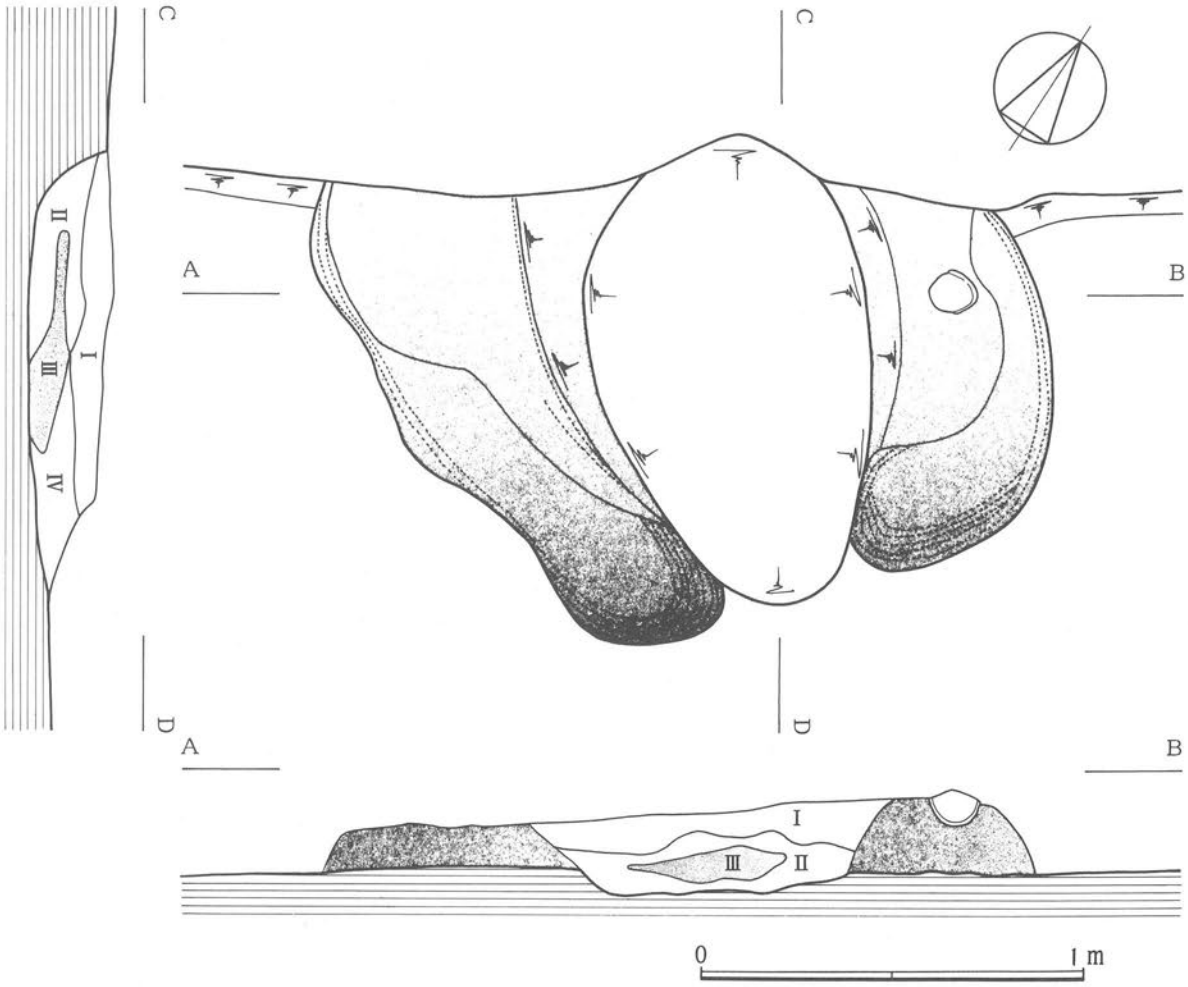
胴部は内弯して立ち上がり，口辺部は軽く外反して直立気味に口縁部にいたる。

3　須恵器壺形土器（第九六図）胴部下位～底部　丸底。胴部は内弯して立ち上がる。

K　土師器鉢型土器（第九六図）約50％欠損　平底。カマド右袖部被覆土上出土。

胴部は内弯して立ち上がり，口縁部は直立気味となる。

本址の廃絶の時期は，古墳時代中期末葉ごろと考えられる。



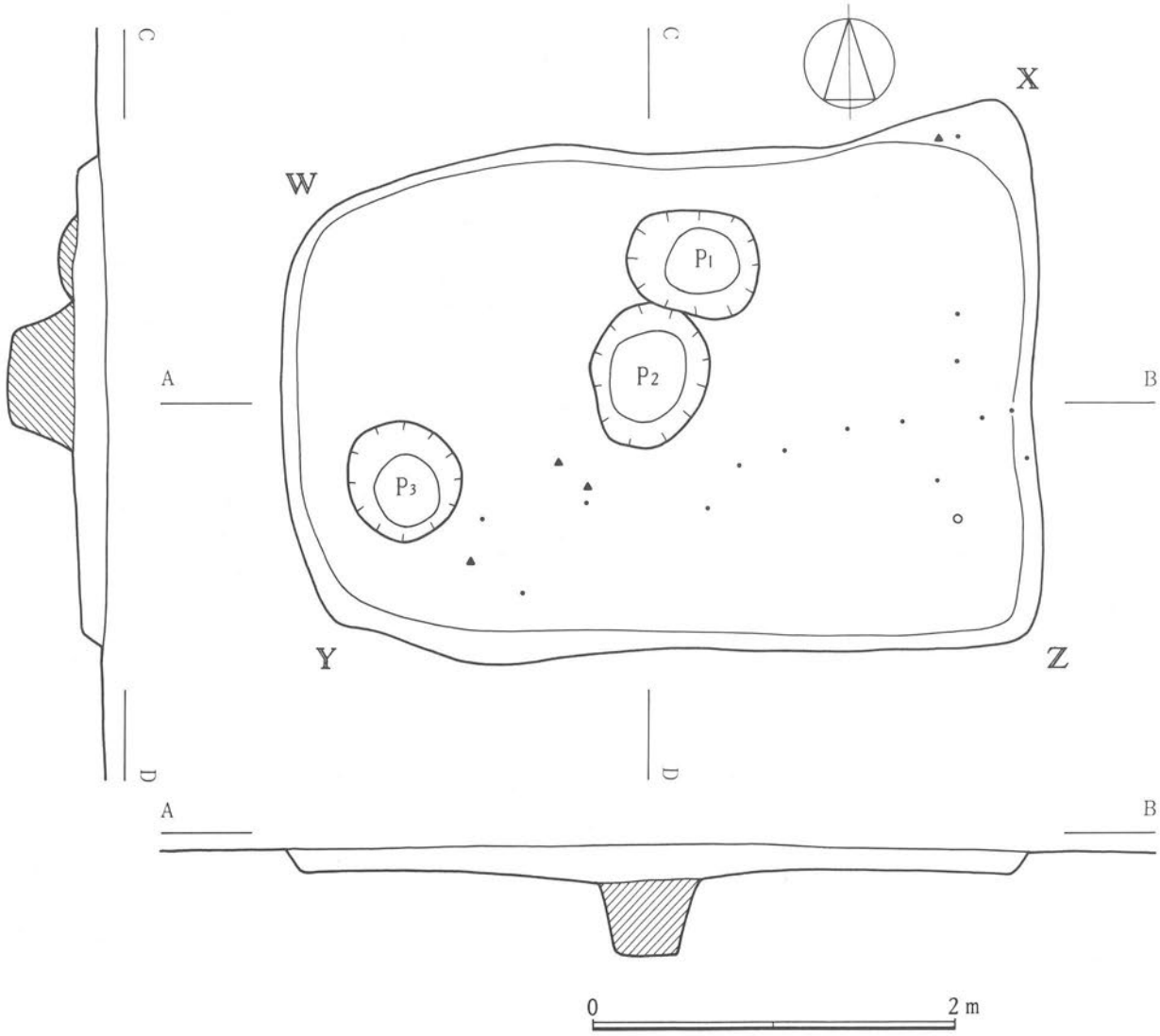
第六五図　第三七号住居址カマド実測図，遺物出土状態図

第三七号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色土　黒色土がベースで，黄褐色粘土ブロックを混入する。

Ⅱ　明褐色土　ローム粒子・焼土粒子を混入する。

Ⅲ　赤褐色土　炭化物粒子・焼土粒子・焼土ブロックの量多し。



第六六図　第三八号住居址実測図，遺物出土状態図

35　第三八号住居址　（第六六図・図版第三一）

本址は，住居址以外の遺構であることも考えられたが，形状からみて住居址として取扱った。第三調査区の中央東寄り（B'－6）に位置し，東側を第九号溝が走る。遺存状態はまずまずである。

平面形は長方形状を呈し，周壁の辺長は，東壁3.0m，西壁2.5m，南壁3.5m，北壁3.5mを測り，面積約9.5m²の小形竪穴で，主軸線はN－6°－Eを指す。壁高は，東壁13cm，西壁13cm，南壁13cm，北壁12cmである。壁面はやや脆弱気味である。床面には凹凸起状があり平坦ではない。

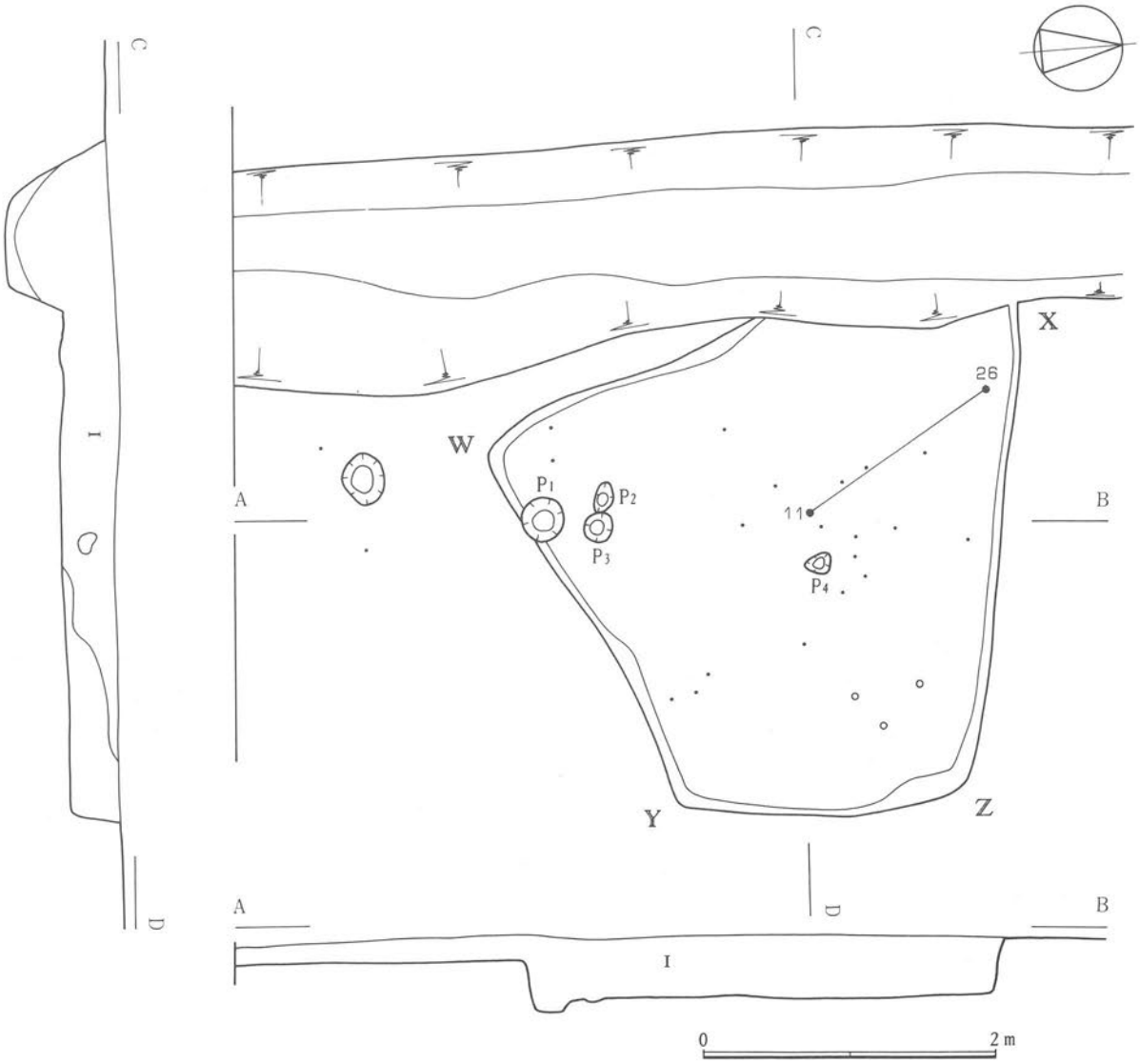
ピットは3個検出したが，位置関係が不規則で，主柱穴とするには無理である。

竪穴内の埋没土の性状は，黒色土をベースにローム粒子を混入する暗褐色土の単一層である。

出土遺物の総数は17個で，その内訳は，土師器12個，須恵器1個，自然石4個となる。

出土状態をドット・マップによって観察すると，その在り方は極めて疎らで空白部が多い。

甕形土器の底部破片や須恵器坏形土器の底部破片，さらに土師器坏形土器の口縁部破片が出土したものの，時期の特定には至らなかった。



第六七図　第三九号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

36　第三九号住居址　（第六七図・図版第三一）

本址は，第三調査区の東部（C'～D'－３）に位置する。住居址以外の遺構である可能性もあるが，遺物の出土状態をみて住居址として取扱った。西側は第九号溝の掘削によって大きく破壊され，残存面積は約10.0㎡ほどである。主軸線はN－6°－Eを指向する。平面形は不整形である。

壁高は，東壁33㎝，南壁40㎝，北壁40㎝を測る。壁は若干斜めに掘り込まれており，壁面は堅固である。

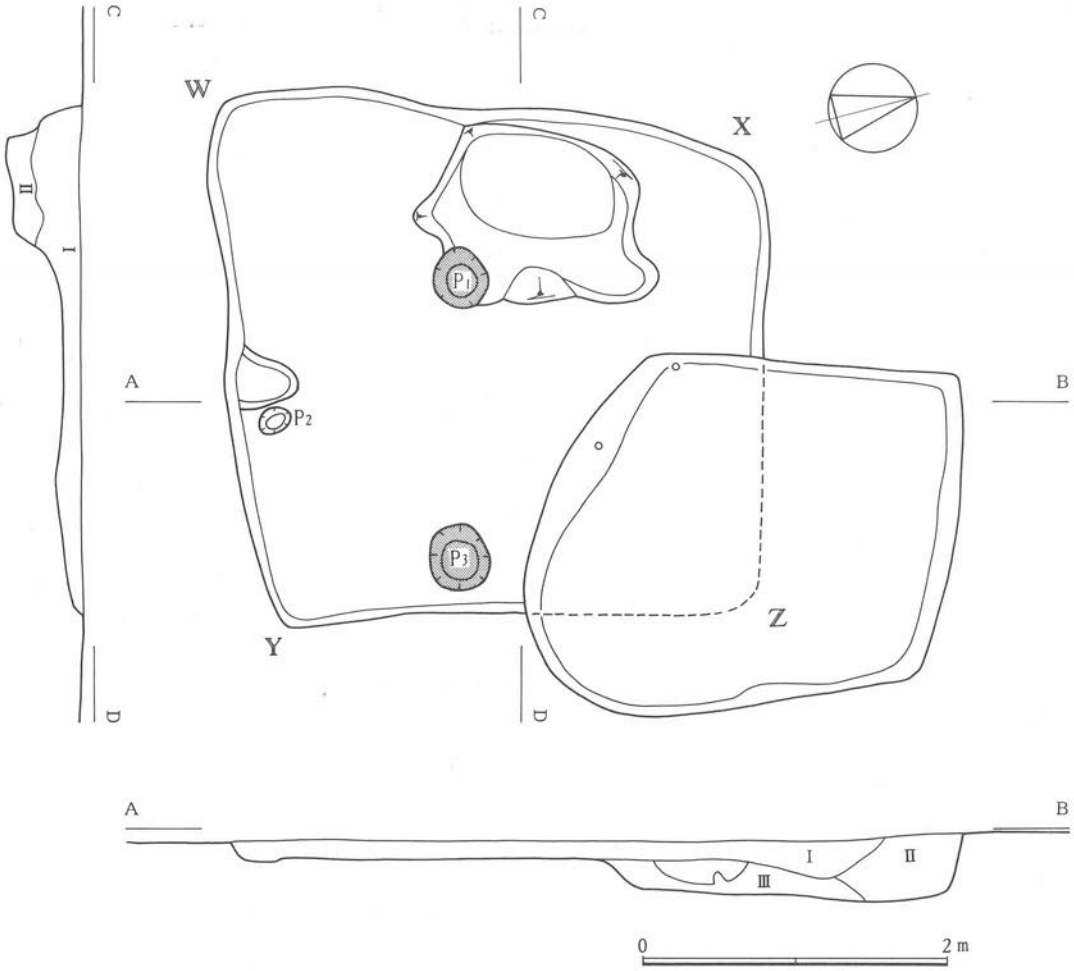
床面には起状があり平坦とはいえない。

ピットは４個を検出したが，深さ７～９㎝が３個，27㎝が１個で，位置関係をみると主柱穴とはいい難い。

埋没土の性状は，黒色土に砂質ローム粒子を多量に混入する暗褐色土の単一層である。

出土遺物の総数は26個で，内訳は，土師器23個，須恵器３個となる。出土状態は疎らであるが，Xコーナー付近から南方に向って一括投棄したと思われる展開を示している。接合資料１例を抽出した。

接合資料Ⅰ　26・11　土師器高坏形土器（第九六図）脚部は円筒状で，裾部は「ハ」の字状に開き，末端はわずかに外反する。坏部は中位に稜を持ち，外傾して口縁部にいたる。本址は古墳時代前期の竪穴であろう。



第六八図　第四一号住居址実測図，遺物出土状態図

37　第四一号住居址　（第六八図・図版第三三）

位置および遺存状態　本址は，第三調査区の東端部（H'～I'－4～5）に位置する。平坦部に構築されているが，北東部の一角は竪穴状遺構と重複しており，良好な遺存状態とはいえない。重複関係は本址が新しい。

形状および規模　平坦部は不整方形を呈する。周壁の辺長は，東壁Y－Z間推定3.1m，西壁W－X間3.5m，南壁W－Z間3.5m，北壁X－Z間推定3.0mを測り，面積10.5m²の小型竪穴である。主軸線N－13°－E。

壁高および壁面　残存周壁はおおむね良好な遺存状態で，壁高は，東壁10cm，西壁25cm，南壁13cm，北壁15cmである。壁はやや斜めに掘り込まれており，堅固で崩落の痕跡は認められない。

床面　西壁際の中央部に100×65cm，最大深度35cmの性格不明の掘り込みがあるが，他の床面は，わずかな凹凸はあるけれども，おおむね平坦である。床面は全体が硬く踏み固められている。

ピット　3個のピットを検出したが，径35～55cm，深さ33～40cmのP₁・P₃が主柱穴で，2本柱竪穴であろう。

埋没土　埋没土の性状は3層に大別される。I層は，ローム粒子と黒色土の混合土の中に焼土小ブロックが点在する暗褐色土。II層は，粘性を帯びたロームブロックと焼土粒子が散在する黒褐色土。III層は明褐色土。

遺物と時期　本址の出土遺物総数は12個で，内訳は，土師器10個，須恵器2個である。

出土状態はまことに疎らである。土師器甕形土器の胴部片などが認められるが，本址の廃絶の時期は古墳時代前期末葉ごろと考えられる。

38　第四三号住居址　（第六九図・図版第三四）

位置および遺存状態　本址は第四Ｂ調査区の中央部（Ｄ'－３～４）に位置する。

平坦面に構築されている。北壁のカマド付近に土壙状遺構が存在していて，北壁のごく一部を損壊しているが，その程度は軽微である。また，南西隅のＹコーナーには床面下21cmの深さのピットがあるが，これも本址附随のものである。したがって，本址の遺存状態はおおむね良好といえるだろう。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間6.5ｍ，西壁Ｗ－Ｙ間6.5ｍ，南壁Ｙ－Ｚ間6.5ｍ，北壁Ｗ－Ｘ間6.2ｍを測り，面積約41.5㎡を有するの大型竪穴である。北壁中央部にカマドを設けている。主軸線はＮ－23°－Ｗを指す。

壁高および壁面　損壊部以外の周壁の遺存状態は良好である。壁高は，東壁18cm，西壁27cm，南壁35cm，北壁25cmである。壁はやや斜めに掘り込まれており，壁面は堅硬で崩落の痕跡は全く認められない。

床面　全面平坦で硬く踏み固められている。特にカマド前面部は土間状の硬さである。

ピット　７個のピットを検出したが，次の５個が主柱穴であろう。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P_1	35	34	49	P_4	40	40	39	P_6	40	40	37
P_2	36	35	35	P_5	38	38	20				

P_7 は貯蔵穴であろう。

埋没土　竪穴内の埋没土の性状は３層に区分することができる。

Ⅰ　暗褐色土　黒色土がベースでローム粒子を混入し，焼土粒子・ローム小ブロックも含む。

Ⅱ　褐色土　ロームが主体で黒色土を混入する。

Ⅲ　明褐色土　ロームがベースで微量の焼土粒子を混入する。

カマド　北壁の中央よりやや東寄りの位置に設けられている。

袖部を被覆する黄褐色粘性土の最大幅は206cmを測る。

天井部は残存しないが，両袖は黄褐色粘性土を用いて強固に構築されており，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部煙出し口は40cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を13cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは200cm，燃焼部の袖は50cmである。

両袖の燃焼部壁面は赤変硬化が顕著である。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は44個である。

内訳は，縄文土器片１個，土師器41個，須恵器１個，石製品１個となる。縄文土器片は紛れ込みであろう。

ドットを使った平面分布状態を観察すると，疎らではあるが全面に分布している。

遺物と時期　出土遺物のうち器種を確認したのは坏形土器と甕形土器である。

10　土師器坏形土器（第一〇一図）口縁部一部欠損　丸底。

体部は内弯して立ち上がり，口辺部はやや内弯を強めて口縁部にいたる。

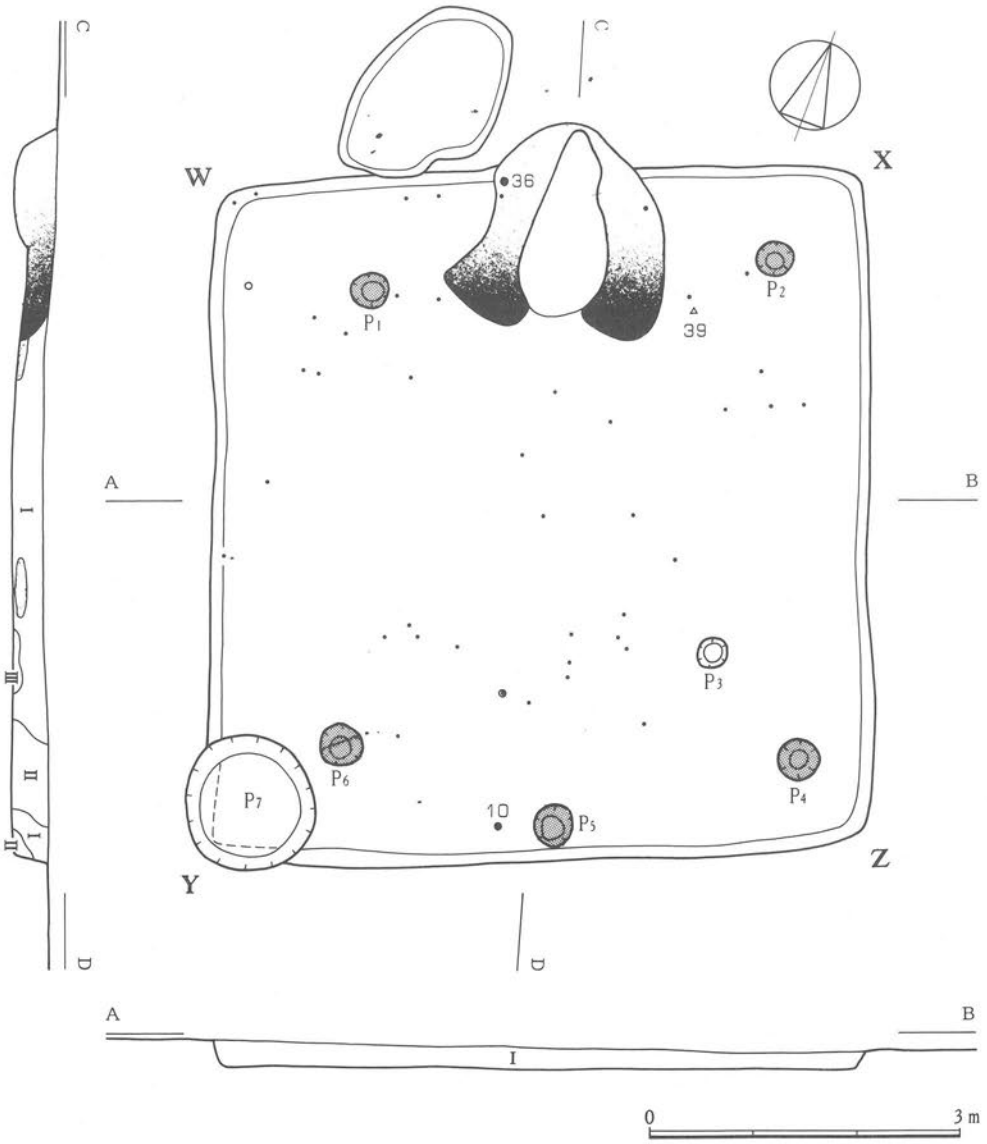
36　土師器甕形土器（第一〇一図）胴部中位～口縁部片

胴部は内弯して立ち上がり，口辺部は外傾して口縁部にいたる。

39　紡錘車＜石製品＞（第一〇一図）完形品

径44mm，断面形は台形。厚さ23mm，重量54ｇ。

本址の廃絶の時期は，古墳時代後期と思われる。



第六九図　第四三号住居址実測図，遺物出土状態図

39　第四四号住居址　（第七一図）

位置および遺存状態　本址は，第四Ｂ調査区の東部（F′～G′－３）に位置する。

平坦面に構築されているが，竪穴状遺構の掘削によって４分の３以上は破壊され，遺存状態は劣悪である。

辛うじて破壊を免かれたのは，カマドと前面部を含む西側の一部分のみである。

形状と規模　残存する部分を手掛りに想定し得る構築当時の平面形は，おそらく方形を呈していたことだろう。

推定面積は９㎡程度であったと思われる。残存床面積はその４分の１ほどである。

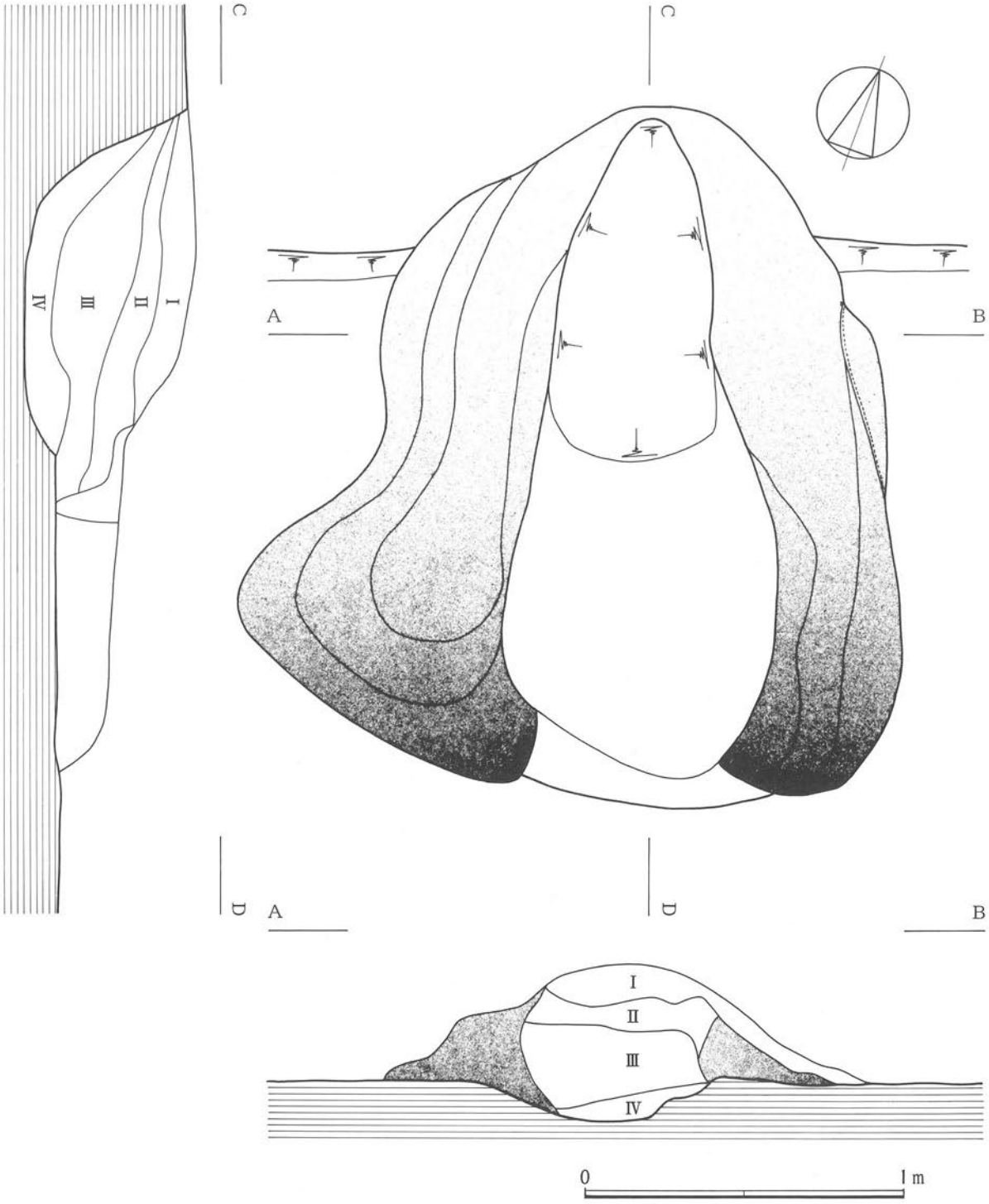
北壁の中央部にはカマドが設けられており残存する。主軸線はN－８°－Eを指向する。

壁高および壁面　残存部の壁高は15㎝で崩落は認められない。

床面　残存する床面は平坦で，硬く踏み固められている。

ピット　全く検出されない。

埋没土　ローム小・中ブロックが全体に混在する暗褐色土である。



第七〇図　第四三号住居址カマド実測図

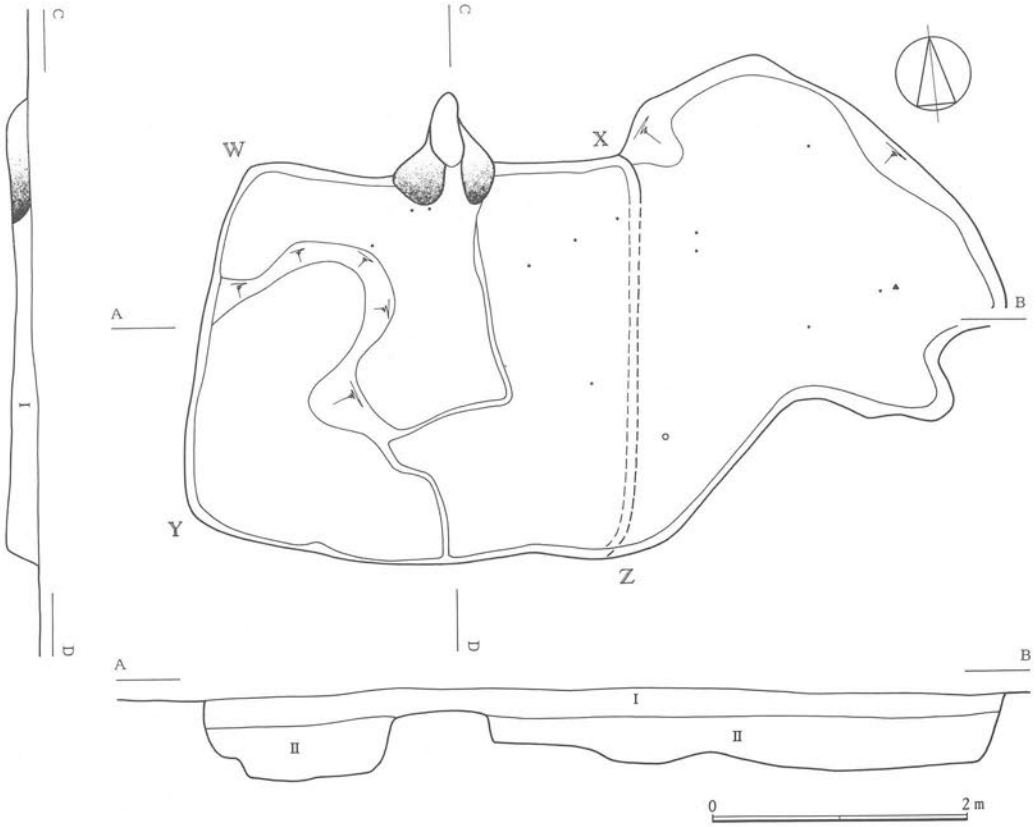
第四三号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色土　黒色土がベースで，焼土粒子・炭化物小片・黄色粘土小ブロック混入。

Ⅱ　褐色土　　黄色粘性ロームが主体で，焼土ブロック，炭化物小片を混入する。

Ⅲ　赤褐色土　煉瓦状の焼土ブロックが多く，粘性ロームが混在する。

Ⅳ　暗褐色土　性状はⅠ層と同様で，焼土粒子が多い。



第七一図　第四四号住居址実測図，遺物出土状態図

カマド　北壁の中央に設けられている。

袖部を被覆する黒褐色土の最大幅は105cmである。

天井は残存しないが，両袖は黄褐色粘土によって堅く構築されており，補強材は使用していない。

構造は，焚口部を壁内に設け，燃焼部と煙道部は80cmほど壁外へ細長く突出させている。

燃焼空間は，床面を５cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは100cm，燃焼部の幅は38cmである。煙道部煙出し口は，ゆるやかに傾斜して壁外へ立ち上がる。

両袖の燃焼部は赤変しているが硬くはない。

遺物と時期　出土遺物の総数は14個で，内訳は，土師器12個，須恵器１個，自然石１個である。

このうち残存床面上の出土はわずかに土師器の３個のみである。土器はすべて小破片である。

本址は，カマドの形態から古墳時代後期の竪穴と考えられる。

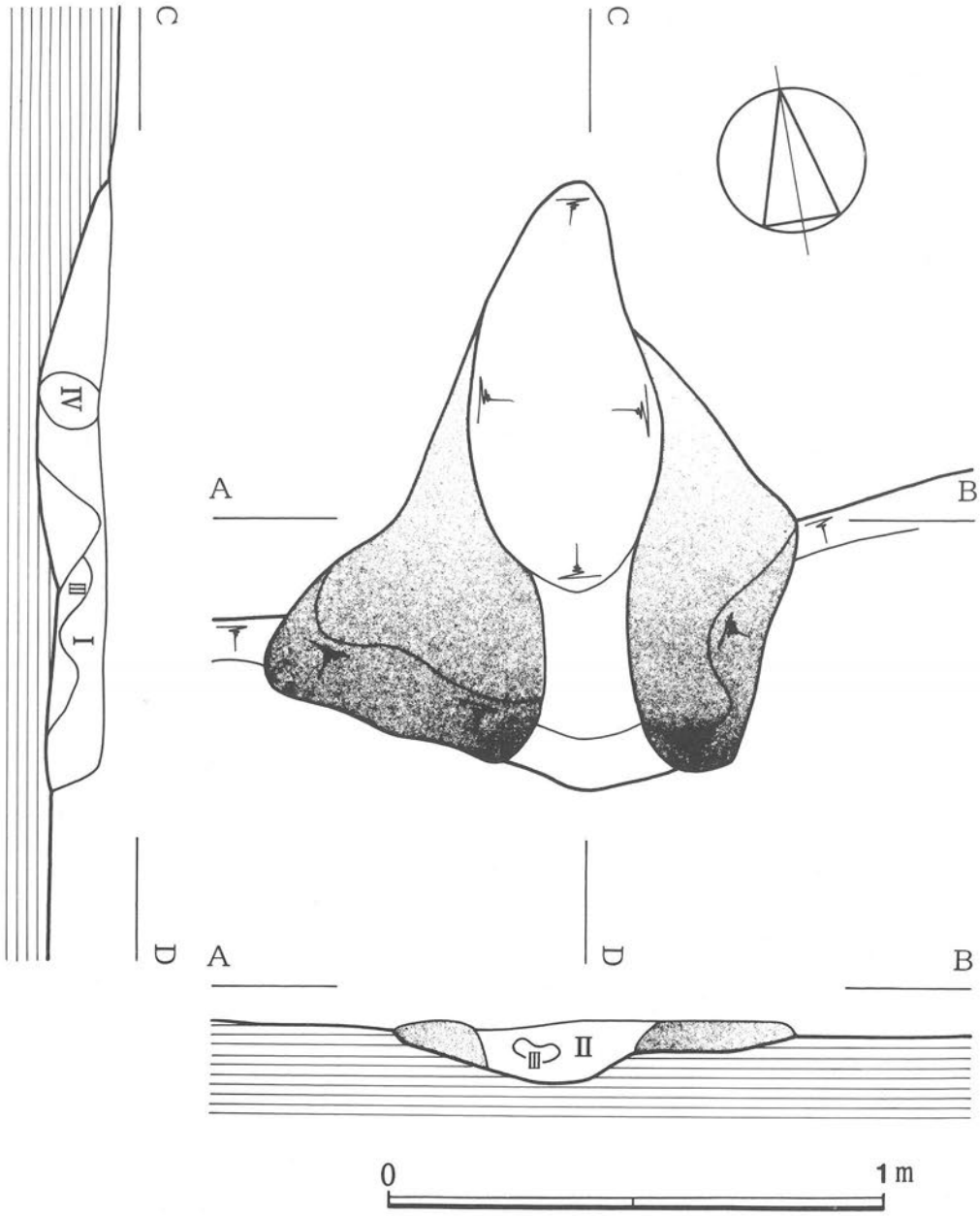
40　第四六号住居址　（第七三図・図版第三六）

位置および遺存状態　本址は，第四Ｂ調査区の西部（A'－２～３）に位置する。

平坦面に構築されているが，東側に隣接する第四七号住居址と重複し，同址を切って構築している。

したがって新旧関係では本址の方が新しい。遺存状態は比較的良好である。

形状および規模　平面形は台形に近い長方形状を呈する。周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間5.4ｍ，西壁Ｗ－Ｙ間5.1ｍ，南壁Ｙ－Ｚ間2.7ｍ，北壁2.1ｍを測り，面積約12.5㎡ほどの小形竪穴である。主軸線はＮ－０°。



第七二図　第四四号住居址カマド実測図

第四四号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色土　黒色土がベースで，焼土粒子を多量に混入する。

Ⅱ　暗褐色土　ローム粒子・粘土ブロック・焼土小ブロックを含む。

Ⅲ　焼　土　　焼土粒子・焼土ブロックの層

Ⅳ　焼土ブロック

壁高および壁面　重複部分を除けば，他の周壁の遺存状態はおおむね良好である。

壁高を計測すると，東壁で11cm，西壁20cm，南壁22cm，北壁16cmである。壁は垂直に近い掘り込みで，壁面は堅固である。

床面　平坦であるが，踏み固めたような硬さはない。

ピット　2個検出したが，位置関係，深さ，規模などを検討すると柱穴とするには無理がある。

埋没土　埋没土の性状は，4層に区分できる。Ⅰは黒褐色土，Ⅱは暗褐色土でローム粒子の混入が多い。Ⅲは褐色土で締りがあり，Ⅳは明褐色土でロームがベースである。

遺物と時期　本址の出土遺物総数は19個である。すべてが土師器の小片であるが1個だけ手捏土器の完形品が出土している。平面分布の状態は中央より北側にまとまりをみせている。

資料19　土師器手捏土器（第一〇一図）完形品　丸底。体部は内弯しかながら立ち上って口縁部にいたる。口径3.5cm，最大径3.6cm，器高2.6cmのミニチュア土器で，外面・内面ともに横ナデ整形，口唇も平らに整形した丁寧な作りである。

時期の特定には資料が乏しいが，古墳時代中期初頭ごろの廃絶と考えられる。

41　第四七号住居址　（第七三図・図版第三六）

本址は，第四B調査区の西部（B'－2～3）に位置する。

平坦部に構築されており，西側は第四六号住居址に隣接し，西壁は切られている。

平面形は不整楕円形状を呈し，長径5.9m，短径4.5m，主軸線はN－0°。

壁高は，東壁で22cmを測る。壁はやや斜めに掘り込んでおり，壁面は脆弱気味である。

床面はおおむね平坦である。Xコーナー付近には長径100cm，短径60cm，厚さ5～7cmの焼土塊が存在する。

ピットは7個検出した。しかし，不規則な位置関係で柱穴とするには無理がある。

埋没土は3層に区分される。Ⅰは黒褐色土で，焼土粒子・ローム粒子を混入する。Ⅱは暗褐色土で，焼土粒子・炭化物粒子を少量混入する。Ⅲは褐色土で，ロームが主体で黒色土を混入する。

本址の出土遺物は3個である。時期特定は困難であるが，第四六号住居址より古い古墳時代前期終末頃の竪穴であろうと思われる。

42　第四八号住居址　（第七四図・図版第三六）

位置および遺存状態　本址は，第五調査区の西端部（B－4～5）に位置する。

平坦部に構築されており，破壊も撹乱もなく遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形はほぼ方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁X－Z間6.2m，西壁W－Y間5.6m，南壁Y－Z間6.5m，北壁W－X間6.0mを測り，面積約37.2m²を有する大形竪穴である。北壁中央よりやや東寄りの位置にカマドを設けている。

主軸線はN－16°－Wを指向する。

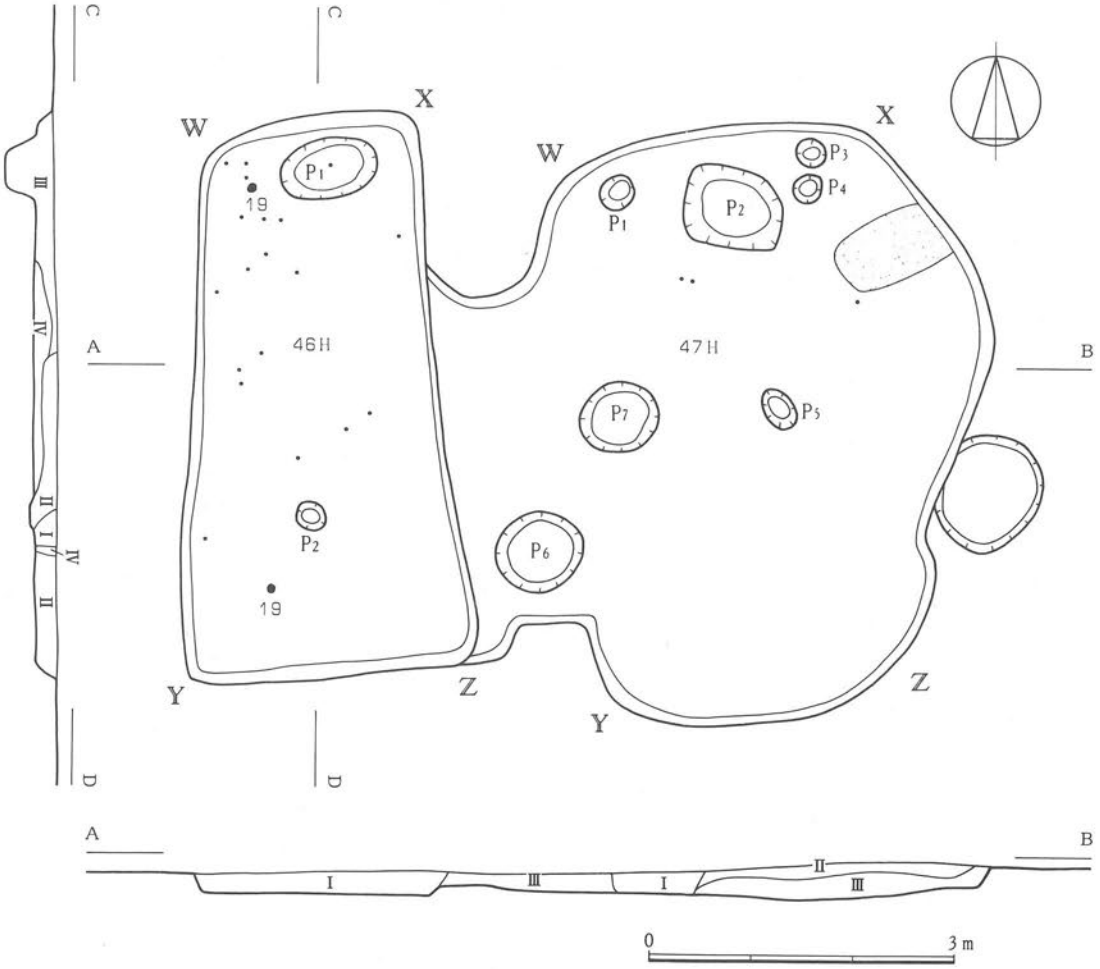
壁高および壁面　周壁の遺存状態は良好である。壁高は，東壁14cm，西壁15cm，南壁15cm，北壁15cmである。

壁はやや斜めに掘り込まれており，壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

床面　若干の起状はあるが，おおむね平坦である。床面全体が硬く踏み固められている。

ピット　7個のピットを検出することができた。

位置関係・規模などを検討すると，次の4個が主柱穴の機能を果たしていたように思われる。



第七三図　第四六号（左），第四七号（右）住居址実測図，遺物出土状態図

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P 1	38	35	68	P 4	48	48	64
P 2	42	40	65	P 7	38	36	67

埋没土　本址の埋没土の性状は，ローム粒子と焼土粒子・炭化物粒子を混入する暗褐色土の単一層である。

カマド　北壁の中央よりやや東側へ寄った位置に設けられている。

袖部を被覆する黒褐色粘性土の最大幅は150cmである。

天井部は残存していないが，両袖は黄褐色粘土を用いて強固に構築されており，補強材は使用していない。構築は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部煙出し口は30cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面をわずか３cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは130cm，燃焼部の幅は70cmである。煙道部煙出し口はゆるやかに傾斜して立ち上がる。

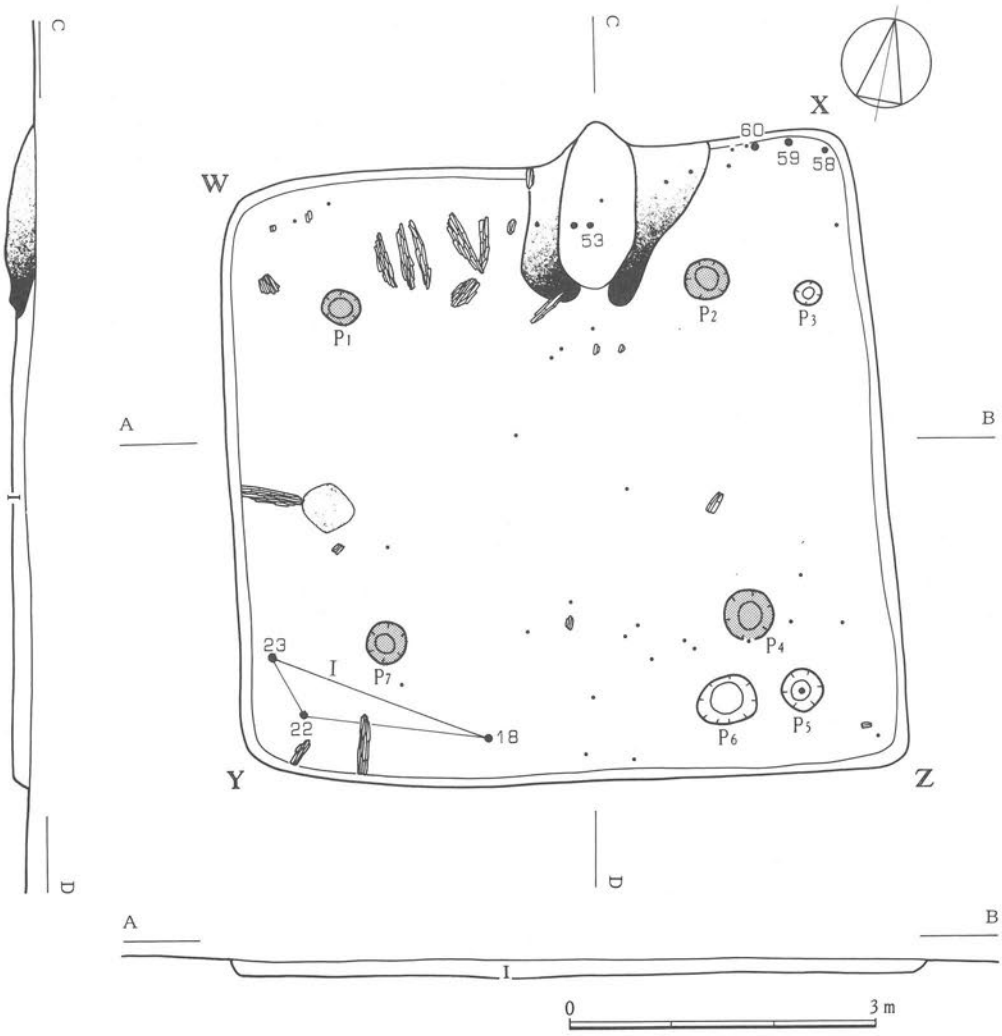
両袖の燃焼部壁面は，火熱を受けて赤変し硬化している。

燃焼部の中央付近より土製支脚が直立位の状態で出土し，その左側には甕形土器が横位の状態で出土した。

遺物の出土状態　本址の出土遺物は61個である。

内訳は，土師器39個，自然石１個，炭化材21個となる。

ドットを使った平面分布の状態を観察すると，空白部分が多いもののほぼ全面から疎らに出土している。



第七四図　第四八号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

炭化材は，カマドの西側に特に多くみられるが，全面に散在している。

遺物と時期　資料として抽出した器種は，坏形土器・甕形土器・椀形土器・鉢形土器・坩形土器・底部穿孔土器などである。

接合資料Ⅰ　18・22・23　土師器椀形土器（第七六図）丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部はかるく外反して口縁部にいたる。

58　土師器坏形土器（第七六図）準完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，外傾して口縁部にいたる。

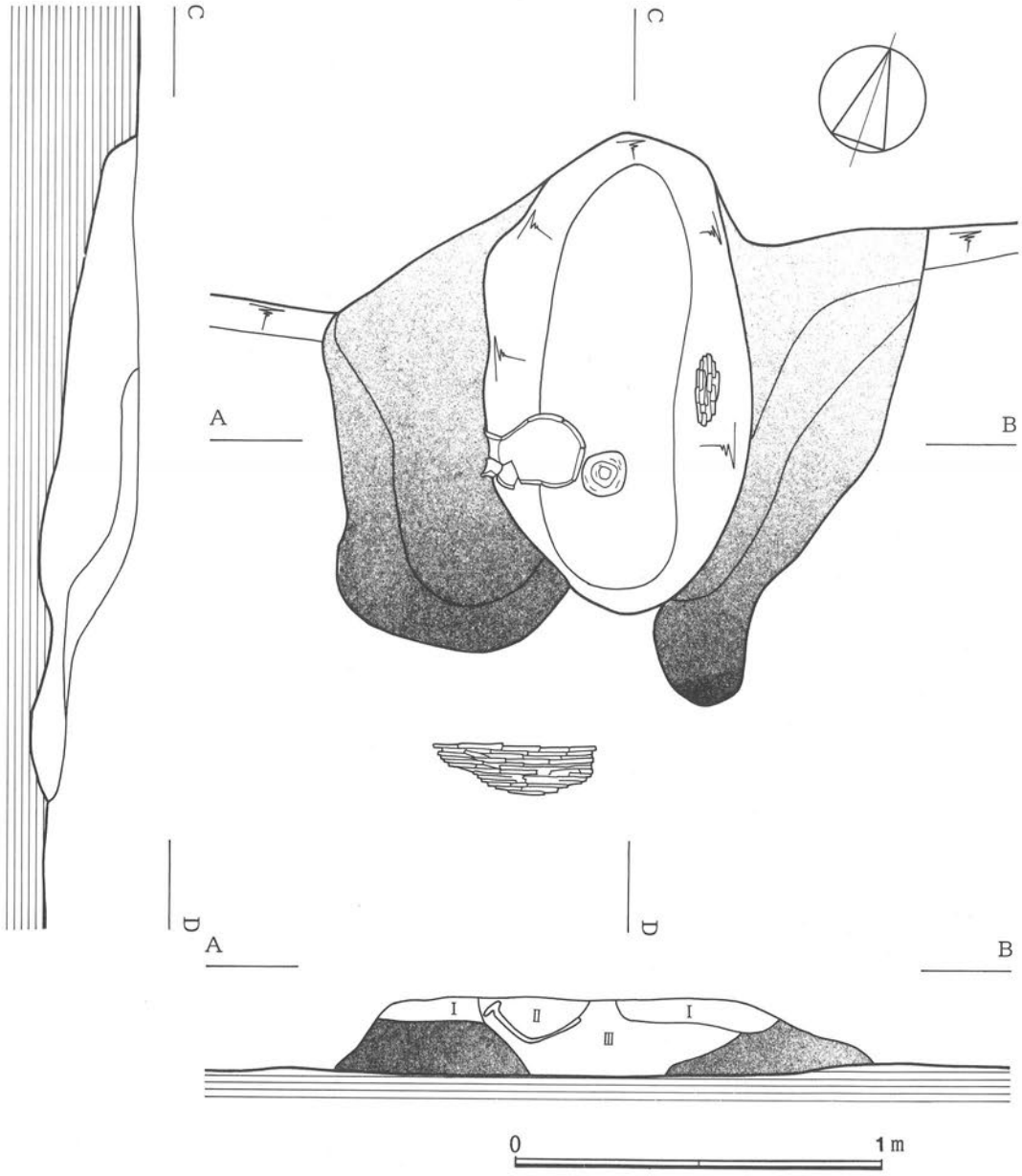
59　土師器坩形土器（第七六図）完形品　丸底。胴部は内弯して立ち上がり球状を呈する。頸部は「く」の字状で外傾して口縁部にいたる。

60　土師器底部穿孔土器（第七六図）準完形品。丸底に近い平底。胴部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。底部中央に1孔を穿つ。

P5　土師器鉢形土佗（第七六図）完形品　平底。胴部は内弯して立ち上がり，口辺部は内傾して口縁部にいたる。ピット内出土。

K　土師器甕形土器（第一〇三図）50％以上欠損　平底。胴部は内弯して立ち上がり，頸部は丸味をもってくびれ，外傾して口縁部にいたる。胴部最大径を中位に持ち24cm，口径22.5cm，器高24.5cm。カマド内。

53　土製支脚（第七六図）約50％以上欠損品　長さ16.2cm，中位径10.0cm，重量521ｇ。カマド内出土。
本址の時期は，古墳時代後期のように思われる。
また，炭化材が多量に出土したことは，焼失家屋の可能性も考えられる。



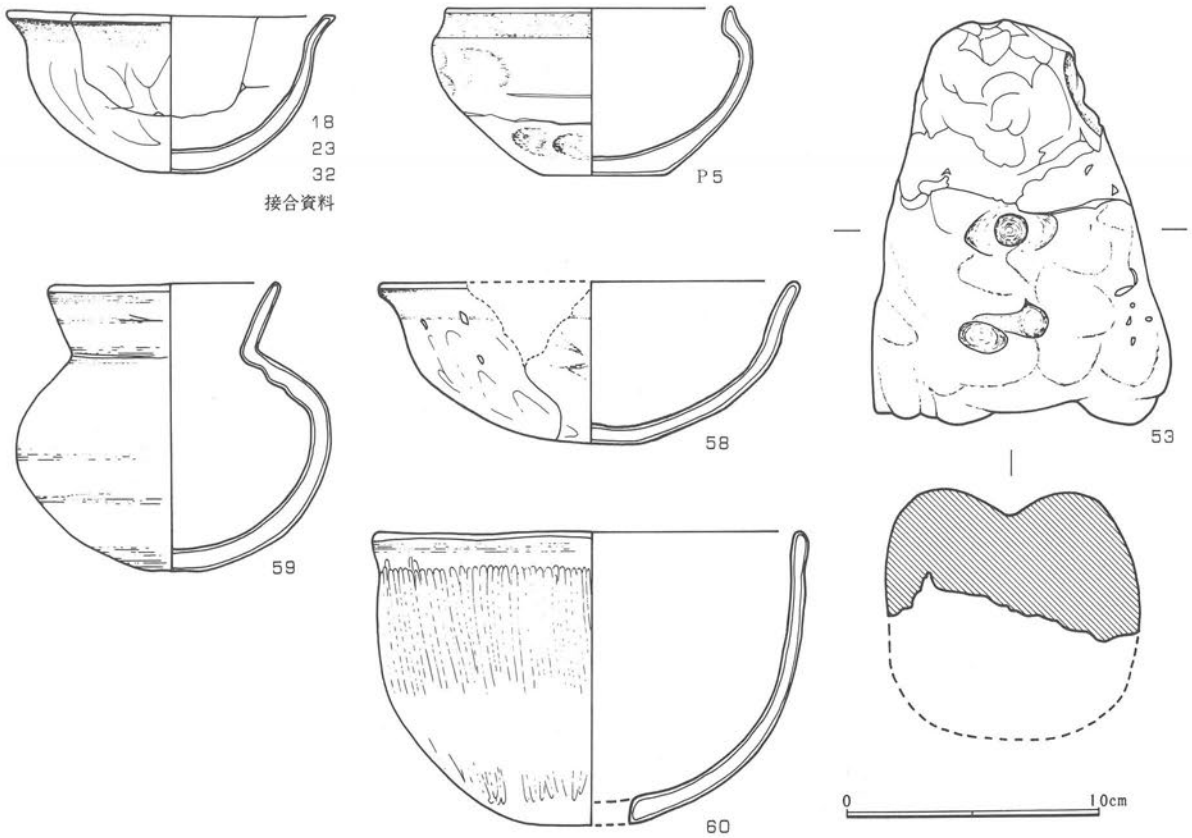
第七五図　第四八号住居址カマド実測図，遺物出土状態図

第四八号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色土　黒色土がベースで，黄褐色粘土ブロック・焼土粒子を混入する。

Ⅱ　暗褐色土　黒色土・焼土粒子・ローム粒子多量。

Ⅲ　赤褐色土　全体に焼土粒子・焼土ブロックが多く，炭化物小片やロームブロックも含んでおり硬化している。



第七六図　第四八号住居址出土遺物実測図

43　第四九号住居址　（第七七図・図版第三八）

位置および遺存状態　本址は，第五調査区の西部（D～E－4～5）に位置する。

平坦面に構築されている。東壁の中央付近に小規模の浅い撹乱穴が存在するだけで，遺存状態は良好である。

形状と規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁X－Z間7.7m，西壁W－Y間7.9m，南壁Y－Z間8.0m，北壁W－X間8.1mを測り，面積約62.5m²を有する大形竪穴である。北壁中央にカマドを設けている。主軸線はN－21°－Wを指向する。

壁高および壁面　周壁は良好な状態で残存している。

壁高は，東壁22cm，西壁，30cm，南壁30cm，北壁40cmである。

壁はわずかに斜めに堀り込まれており，壁面は堅硬で崩落の痕跡は全く認められない。

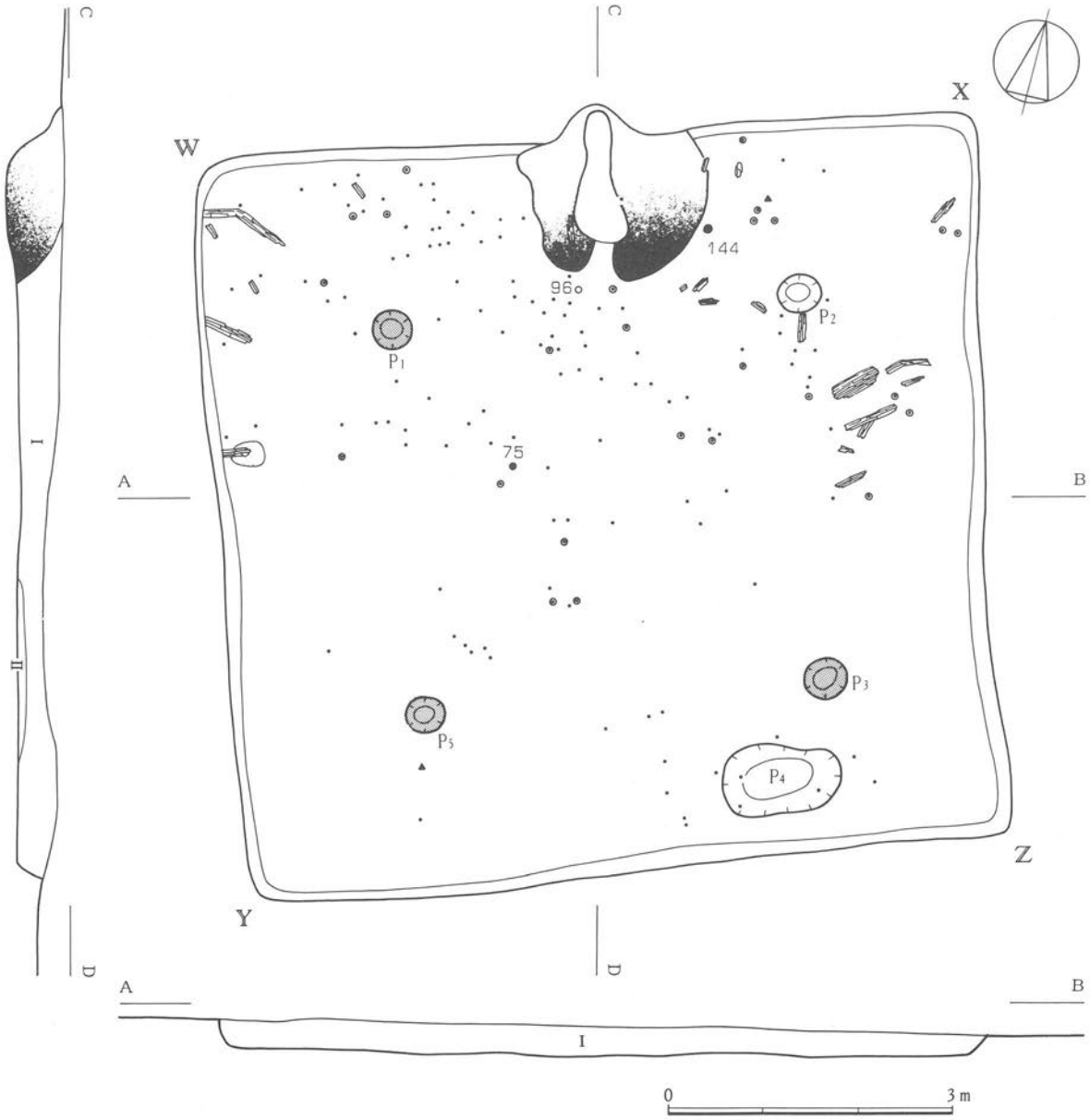
床面　平坦である。全面硬く踏み固めており，特にカマド前面部は土間状の硬さである。

ピット　5個のピットを検出した。このうちP_4は開口部径125×75cm，深さ85cmの貯蔵穴と思われるので，P_4以外の4個が主柱穴である。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位cm）
P_1	42	40	76	P_3	45	40	73
P_2	45	40	80	P_5	42	40	79

埋没土　竪穴内の埋没土の性状は2層に区分することができる。

Ⅰ　暗褐色土がベースで，ローム粒子・黄褐色粘土ブロック・炭化物粒子を混入する。



第七七図　第四九号住居址実測図，遺物出土状態図

Ⅱ　褐色土　ロームがベースで，微量の焼土粒子・炭化物粒子を混入する。

カマド（第七八図・図版第三八～三九）

北壁の中央に設けられている。

両袖を被覆する褐色粘土の最大幅は195cmを測る。

天井部の残存は認められないが，両袖は黄白色粘土によって強固に構築されており，他の補強材は一切使用していない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部と煙出し口は30cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面をわずかに5cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは155cm，燃焼部の幅は50cmである。燃焼部には焼土が充満し，両袖の壁面は赤変して硬くなっている。

煙道部は，40°で立ち上がり，煙出し口はゆるやかに外傾して壁外へ出る。

燃焼部の中央からは，逆位に据えた小形甕形土器Ｋ２の上に，煮沸用甕形土器Ｋ１が乗ったまま焼土に覆われた状態で出土し，さらに，袖部の被覆土を取除いて袖部の本体が現れると，左袖部の袖部から土製支脚Ｋ３が貼り付いたような状態で出土し，右袖部の裾部からは，坏形土器Ｋ４と甑形土器Ｋ５が恰も転落して割れたと思わせる状態で出土した。

また，竪穴内に眼を転ずると，右袖部の裾部に接した位置から煮沸用甕形土器Ｉ44が，カマドの南東方向の2.5ｍの埋没土中層から，もう一個の土製支脚75が出土している。

出土遺物７個のうち，甕形土器Ｉ44は胴部中位～口縁部の破面接合片であるが，小形甕形土器Ｋ１・坏形土器Ｋ４・土製支脚Ｋ３・75はほぼ完形品・甕形土器Ｋ１と甑形土器Ｋ５は，破面接合によって口縁部一部欠損品に復元することができた。

これらのカマド関連の遺物の出土状態を観察すると，深い相関関係にあることが明確になってくる。

① 最初かどうかは不明であるが，土製支脚75を燃焼部に固定して煮沸用甕Ｉ44を乗せた。どうも不安定である。しかし，或る程度の期間は我慢して使っていたらしい。支脚75に赤変した被熱痕があるからである。
やがて甕Ｉ44は転落して割れたものと考えられる。

② そこで安定度の良い支脚に作り替えようと考えた。

③ 安定度を良くするために，底部の径を大きくし，上面を平らにした支脚Ｋ３を作り，支脚75と交換した。
この時点で支脚75は放置された。

④ 安定度は高くなり，甑のセットも楽になった。しばらくはこの使用状態が続いたことだろう。
支脚Ｋ３の赤変被熱痕がそれを証明する。

⑤ そして或る日突然，そこに小形甕形土器があったからなのか，それともさらに安定度の高いものをと考えていたのか，あるいは別の理由があったのかそれは知る由もないが，土製支脚Ｋ３を小形甕形土器Ｋ２に換えてみることを思い付きそれを実行した。

⑥ 小形甕形土器Ｋ２を支脚代りとして逆位に固定したところ，高さも，煮沸用甕の据付け具合いも，燃焼効率もすこぶる調子が良い。

⑦ こうして小形甕形土器Ｋ２は，支脚としての機能を果すことになった。この時点で土製支脚Ｋ３は，左袖部の脇に放置された。

晦渋的な推論を試みたが，このカマドはいわゆる「小形甕形土器の支脚転用カマド」なのである。

しかも，使用状態のままセットで出土したことはまことに僥倖である。

「支脚転用高坏」の報告例はしばしばあるが，支脚転用小形甕形土器と煮沸用甕形土器が，使用状態のセットで出土したという報告例は寡聞にして知らない。

本址のカマドは支脚転用カマドの希有なる例であるということができよう。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は166個である。

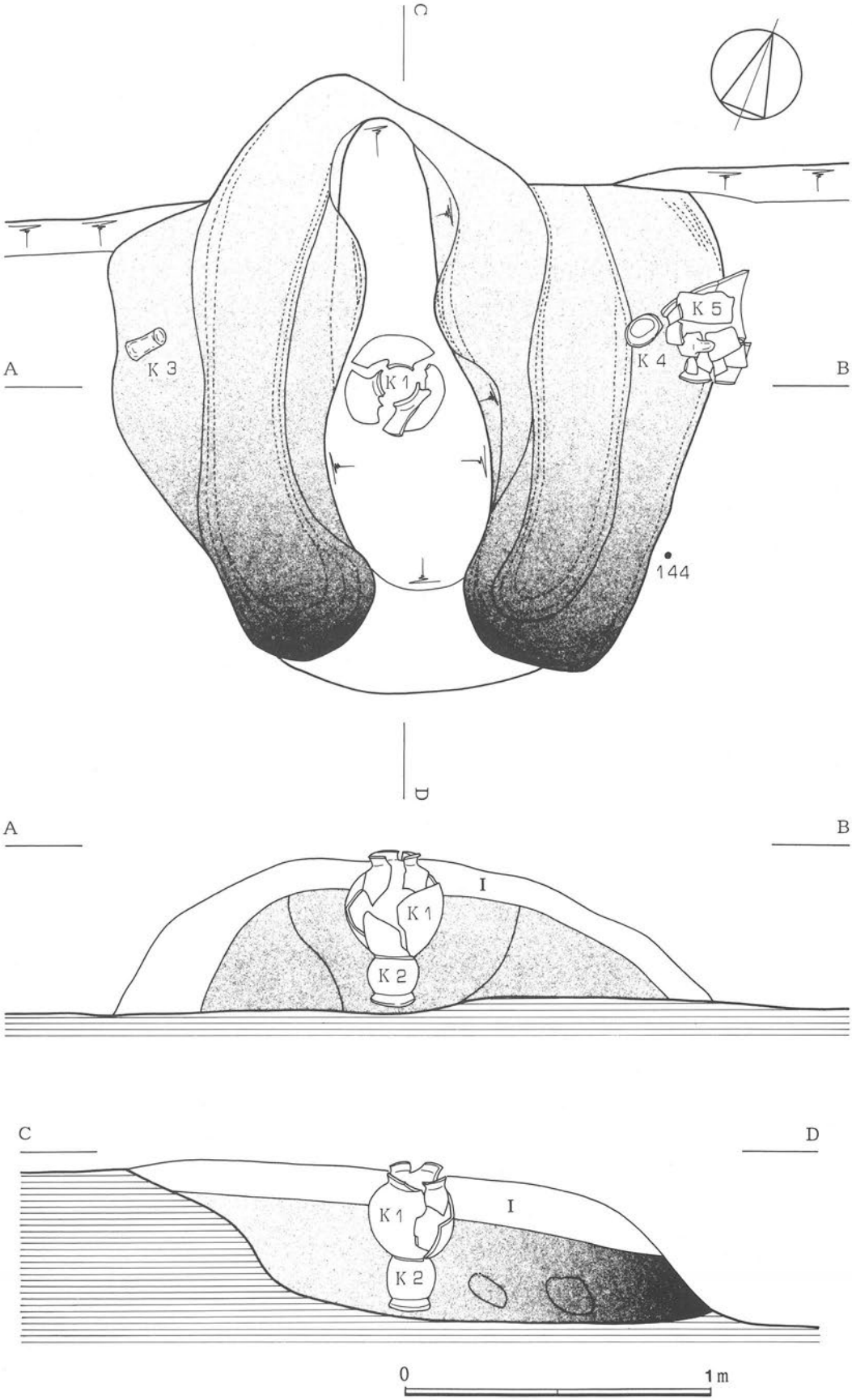
内訳は，縄文土器25個，土師器114個，土製品２個，自然石２個，炭化材22個，須恵器１個である。

ドットを使った平面分布状態を観察すると，Ａ－Ｂセクションを境に大部分の遺物が北側に集中している。

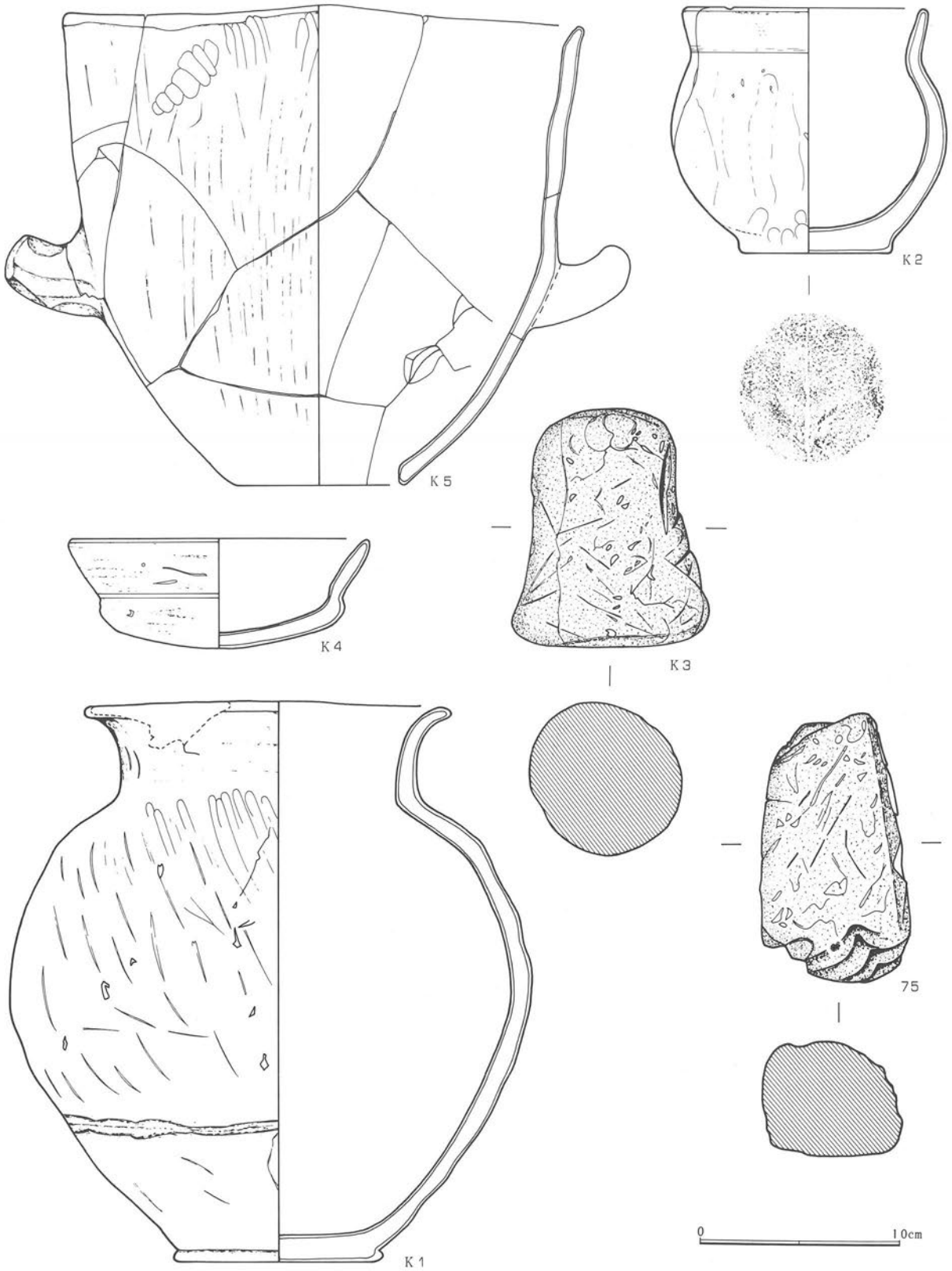
特に炭化材の出土は，南側半分は皆無である。

遺物と時期　資料として抽出できたのはカマド関連の遺物である。縄文土器は細小片で摩滅が著しいが，後期堀之内式土器片のようである。

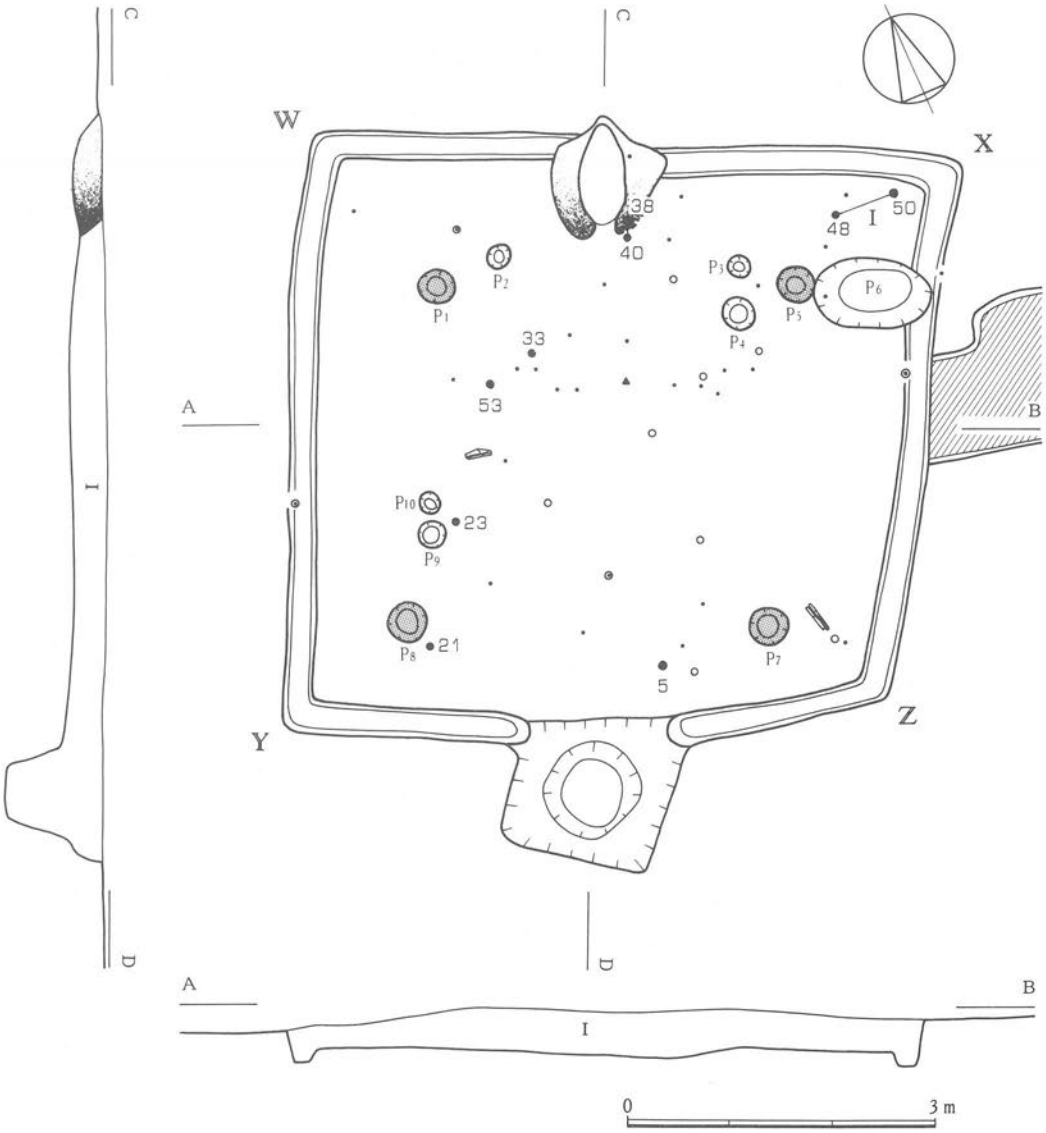
Ｋ１　土師器甕形土器（第七九図）破面接合復元品　平底，胴部は内弯して立ち上がり，最大径を中位に持ち25.3cm，頸部はくびれ，口縁部は外反する。口径18.5cm，器高28.5cm。



第七八図　第四九号住居址カマド実測図，遺物出土状態図



第七九図　第四九号住居址出土遺物実測図



第八〇図　第五〇号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

K 2　土師器小形甕形土器（第七九図）準完形品　平底。胴部は内弯して立ち上がり，最大径を中位に持ち13.7cm，頸部はゆるやかにくびれ，外傾して口縁部に至る。口径12.3cm，器高12.5cm，底部木葉痕。

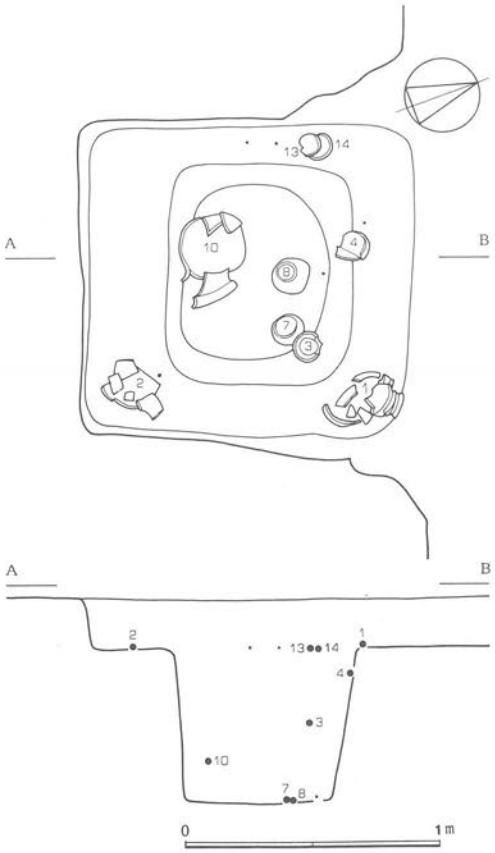
K 4　土師器坏形土器（第七九図）準完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に丸味のある稜をもち，外傾して口縁部にいたる。

I 44　土師器甕形土器（第一〇三図）胴部中位～口縁部接合片　胴部は内弯して立ち上がり，頸部はくびれ，外反して口縁部にいたる。

75　土製支脚（第七九図）底部・上面一部欠損　長さ13.6cm，中位径7.0cm，上面径4.0cm，重量896ｇ。

K 3　土製支脚（第七九図）完形品　長さ12.1cm，底部径9.5cm，中位径7.7cm，上面径8.0cm，重量992ｇ。

本址は焼失家屋と考えられる。その時期は古墳時代後期であろう。



第八一図

第五〇号住居址付属土壙実測図，遺物出土状態図

44　第50号住居址　（第八〇図・図版第三九）

位置および遺存状態　本址は第五調査区の中央部（Ｉ～Ｊ－４～５）に位置する。

平坦面に構築されている。東壁の中央部付近に撹乱穴（土壙）が存在するが，決定的はダメージを受けるものではなく，遺存状態はおおむね良好である。

形状および規模　平面形はほぼ方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間5.4m，西壁Ｗ－Ｙ間5.9m，南壁Ｙ－Ｚ間5.9m，北壁Ｗ－Ｘ間6.2ｍを測り，面積約33.6㎡を有する大形竪穴である。

北壁の中央部にはカマドを設けている。

南壁の中央部には貯蔵穴があり，カマドと貯蔵穴を除く周壁下には周溝が一巡している。

壁高および壁面　周壁の遺存状態は良好で，壁高は，東壁33cm，西壁22cm，南壁25cm，北壁22cmである。

壁はやや斜めに掘り込んでおり，壁面には崩落の痕跡は認められず堅固である。

床面　若干の起伏はあるがおおむね平坦である。

全体に硬く踏み固められており，特にカマド前面部は土間状の硬さである。

ピット　10個のピットを検出することができた。計測値は次のとおりである。

表７　第五〇号住居址ピット計測値　　（単位cm）

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
● P_1	32	32	56	P_4	33	30	15	● P_7	38	38	58	P_{10}	17	17	7
P_2	27	20	10	● P_5	38	38	61	● P_8	38	37	60	－	－	－	－
P_3	21	20	17	P_6	110	70	35	P_9	25	25	9	－	－	－	－

以上のピットのうち，主柱穴としての機能を果したのはP_1・P_5・P_7・P_8の４個であろう。

位置関係もＷ－Ｚ・Ｘ－Ｙコーナーのほぼ対角線上に配置されている。

P_6は性格不明であるが，他のピットは補助柱穴のようである。

埋没土　竪穴内の埋没土の性状は，黒色土とローム粒子の混合土で，炭化物粒子が散在する暗褐色土の単一層である。人為埋没土であることはいうまでもない。

カマド　北壁のほぼ中央部に設けられている。

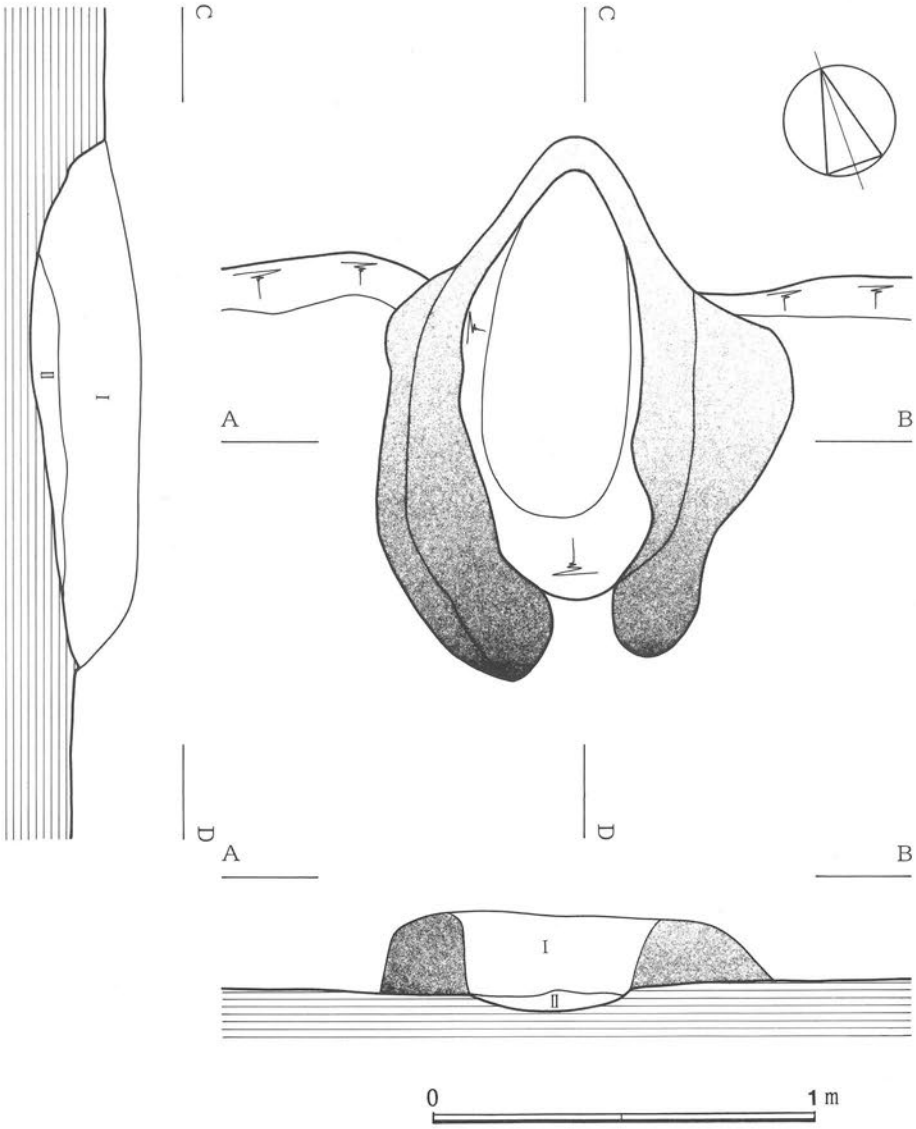
両袖を被覆する黄褐色粘性土の最大幅は105cmである。

天井部は残存しないが，両袖は黄褐色粘土を用いて固く構築されており，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部と煙出し口は40cmほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を10cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは115cm，燃焼部の幅は45cmである。燃焼部両側の袖部壁面は被熱による赤変が見られるが，煉瓦状ほどの硬さはない。

煙道部はゆるやかに外傾し，煙出し口は50°の傾斜角度で壁外へ出る。遺物の出土は皆無である。

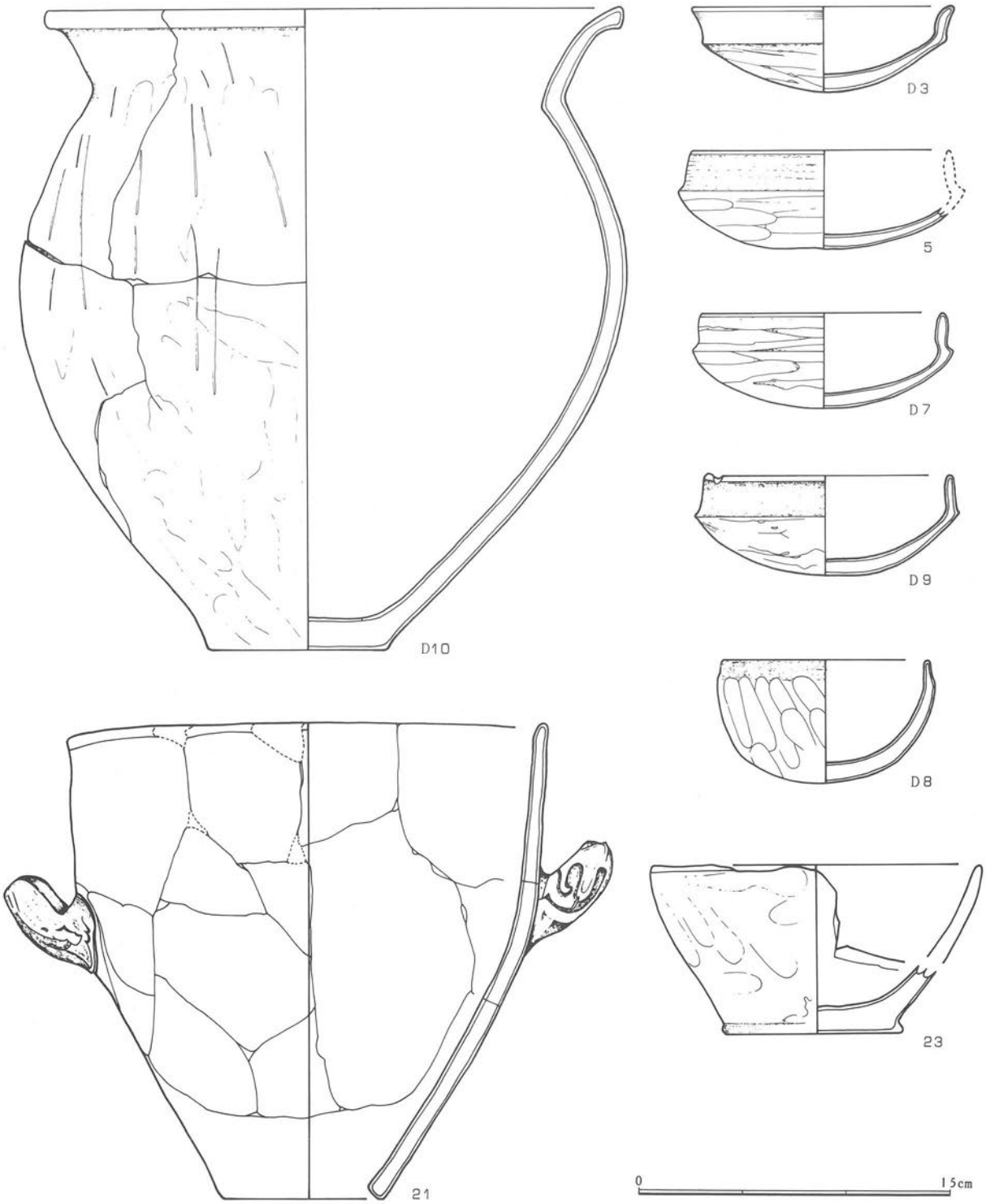


第八二図　第五〇号住居址カマド実測図

第五〇号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色土　やや粘性のある黄褐色土・黒色土粒子・ローム粒子を多量に含み，若干の焼土粒子・焼土小ブロックが点在する。

Ⅱ　赤褐色土　焼土粒子と焼土ブロックが層のベースで，黄褐色粘土小ブロック・炭化物粒子も混在する。
煉瓦状ほどではないが固くしまっている。

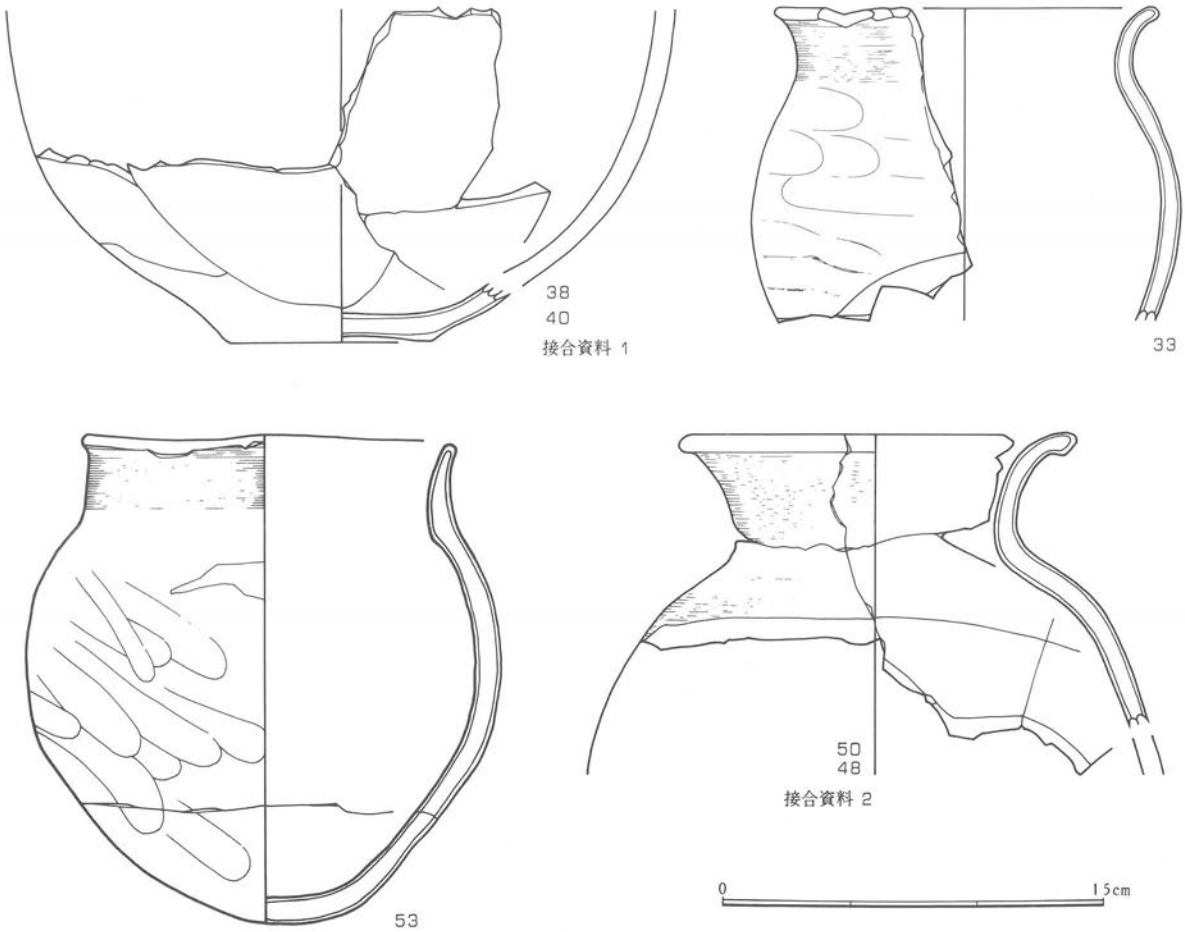


第八二 図　第五〇号住居址出土遺物実測図(一)

貯蔵穴　第五〇号住居址附属の貯蔵穴からは，14個の遺物が出土したので，特にこの項を設けることにした。遺物の出土状態については後述する。

貯蔵穴は，南壁中央部に接する壁外に設けている。位置や形状をみると住居の出入口施設に伴う遺構という見方が有力のように思われるが，貯蔵穴として取扱うこととした。

開口部の平面形は，一辺が120cm前後の方形を呈し，垂直に近い状態で20cmほど掘り下げたところで長方形



第八三図　第五〇号住居址出土遺物実測図(二)

状となり，底面までの深さは80cmで，底面の形状は長径70cm，短径55cm，長軸東西方向の楕円形状を呈する。

完掘時の観察では，壁面は堅固で崩落の痕跡は認められなかった。底面は鹿沼層の直上部に達していたが，固く締っていた。

埋没土の性状は，黒色土とローム粒子の混合土で，夾雑物を一切含まない暗褐色土の単一層である。

遺物の出土状態　本址の出土遺物は，竪穴内53個，貯蔵穴内14個，総計67個である。

内訳は，縄文土器４個，土師器52個，須恵器８個，炭化材２個，自然石１個となる。

ドットを使った平面分布状態を観察すると，全体としては空白部分が多く疎らな出土状態であるが，Ａ－Ｂセクションの北側に比較的まとまっている偏在傾向を看取することができる。

縄文土器片は，埋戻しの際に紛れ込んだものであろう。

貯蔵穴の出土遺物はすべて土師器である。

出土遺物の垂直分布状態を第八一図のＡ－Ｂセクションに投影して観察すると，上層部から底面直上部まで出土していることが歴然とする。

底面上の７は坏形土器，８は埦形土器，下層の10は甕形土器である。

この出土状態は，廃絶時の埋戻しと同時に投棄されたことを物語るものであろう。

貯蔵穴の廃絶が住居の廃絶と同時であることはいうまでもない。

遺物と時期　資料として抽出できた器種は，坏形土器・甕形土器・埦形土器・鉢形土器・甑形土器である。

接合資料Ⅰ　38・40　土師器甕形土器（第八三図）胴部中位～底部　平底。胴部は内弯して立ち上がる。

接合資料Ⅱ　48・50　土師器甕形土器（第八三図）胴部中位～口縁部　胴部は内弯して立ち上がり，頸部はくびれ，口辺部は丸味をもって外反し口縁部にいたる。口縁部も外反する。

5　土師器坏形土器（第八二図）約50％欠損　平底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に明瞭な稜を持つ。口辺部は内傾気味に立ち上がり口縁部にいたる。

23　土師器鉢形土器（第八二図）約40％欠損　平底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。

21　土師器甑形土器（第八二図）同一個体破面接合　無底式。胴部は外傾して内弯気味に立ち上がり，中位に把手が付く。把手より上部はほぼ直立して立ち上がり，口縁部にいたる。口径が最大径で23cm。器高は23.3cmである。

33　土師器甕形土器（第八三図）胴部中位～口縁部片　胴部は内弯して立ち上がり，口辺部はゆるやかに外反して口縁部にいたる。

53　土師器甕形土器（第八三図）準完形品　丸底。胴部は内弯して立ち上がり，最大径を中位に持ち18.5cm。口辺部はゆるやかに外反して口縁部にいたる。口径14.7cm，器高19.4cm。

以上が竪穴内出土の遺物である。以下は貯蔵穴出土の遺物である。

Ｄ３　土師器坏形土器（第八二図）口縁部一部欠損　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持つ。口辺部は内弯して口縁部にいたる。

Ｄ７　土師器坏形土器（第八二図）完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に明瞭な稜を持つ。口辺部は直立して口縁部にいたる。

Ｄ８　土師器埦形土器（第八二図）準完形品　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口縁部はやや内傾する。

Ｄ９　土師器坏形土器（第八二図）口縁部一部欠損　平底に近い丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に明瞭な稜を持つ。口辺部はやや内傾気味に口縁部にいたる。

Ｄ10　土師器甕形土器（第八二図）同一個体破面接合完全復元
平底。胴部は内弯して立ち上がり，中位に最大径を持ち29.3cm。頸部はくびれ，口辺部は外傾し，口縁部は外反する。口径28.0cm，器高31.5cm。

本址の廃絶の時期は，古墳時代後期であろう。

45　第五一号住居址　（第八四図・図版第四〇）

位置および遺存状態　本址は，第五調査区の中央部よりやや東寄り（Ｋ～Ｌ－３～４）に位置する。

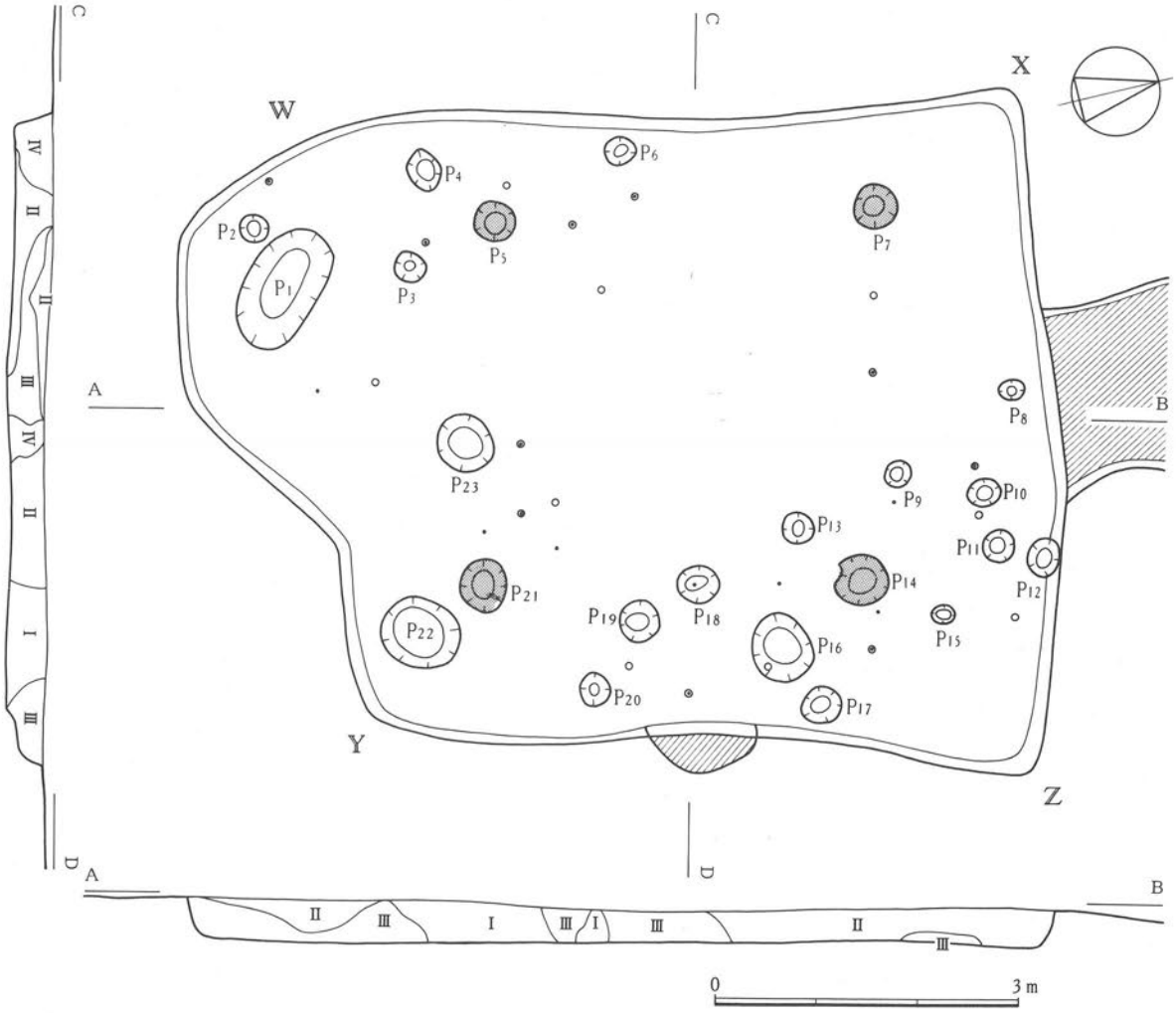
平坦面に構築されているが，北壁中央部と東壁中央部は撹乱によって毀損されている。

形状と規模　平面形は不整方形を呈する。

南壁の張り出し部の床面を精査した結果，構築当時は方形であった形跡が，床面の切り合い痕や，壁のコーナーのカーブの状況から確認することができた。

したがって住居址としての規模は，東壁Ｚ－Ｙ間6.6ｍ，西壁Ｗ－Ｘ間6.0ｍ，南壁Ｗ－Ｙ間6.0ｍ，北壁Ｘ－Ｚ間6.2ｍを測り，面積約38.5㎡の大形竪穴であったと想定される。主軸線はＮ－７°－Ｅを指向する。

壁高および壁面　残存周壁の遺存状態はおおむね良好である。壁高は，東壁35cm，西壁38cm，南壁40cm，北壁37cmを測ることができる。壁の掘り込みは垂直の部分もあるが，概してやや斜めに掘り込まれており，壁面は堅固である。



第八四図　第五一号住居址実測図，遺物出土状態図

床面　固く締ってはいるが，凹凸起伏がある。

ピット　23個のピットを検出した。計測値は次のとおりである。

表８　第五一号住居址ピット計測値　　（単位cm）

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P 1	85	70	27	● P 7	46	43	49	P 13	30	28	13	P 19	40	40	20
P 2	25	25	8	P 8	25	19	7	● P 14	53	50	50	P 20	30	30	9
P 3	27	26	13	P 9	27	25	9	P 15	20	17	6	● P 21	53	46	50
P 4	41	30	11	P 10	33	26	8	P 16	70	60	19	P 22	78	66	18
● P 5	42	42	47	P 11	30	30	9	P 17	40	37	13	P 23	60	53	21
P 6	31	28	9	P 12	37	33	11	P 18	40	36	20				

以上のピットのうち，位置関係･規模などから総合的に判断するとP5･P7･P14･P21が主柱穴になるだろう。

埋没土　本址の埋没土の性状は，４層に区分することができる。

Ⅰ　黒褐色土　黒色土がベースで，わずかにローム粒子を混入する。締りがある。

Ⅱ　暗褐色土　基本的にはⅠ層と同じであるが，ローム粒子の混入が多くなり，色調がやや明るくなる。

Ⅲ　褐色土　　ロームと黒色土の混合土

Ⅳ　明褐色土　ロームがベースで，黒色土粒子が混在する。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は26個で，内訳は縄文土器10個，須恵器９個，土師器７個である。

平面分布の状態は，中央部が全くの空白で，その周囲に点在する状態である。

遺物と時期　資料に乏しいが，古墳時代中期ごろの廃絶であろうと考えられる。

46　**第二二号住居址**　（第八五図・図版第一八）

位置および遺在状態　本址は，第二調査区の南東部（D'－11～12）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱も受けておらず遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間7.7ｍ，西壁Ｗ－Ｙ間7.5ｍ，南壁Ｙ－Ｚ間7.7ｍ，北壁Ｗ－Ｘ間7.7ｍを測り，面積約58.5㎡を有する大形竪穴である。

北壁のほぼ中央部には第一号カマド，北西隅のＷコーナーには第二号カマドを設けている。

東壁下と西壁下には壁溝がある。主軸線はＮ－12°－Ｗを指向する。

壁高および壁面　周壁は良好な状態で遺存している。

壁高は，東壁32㎝，西壁50㎝，南壁34㎝，北壁45㎝である。

壁はやや斜めに掘り込んでおり，壁面は堅硬で崩落の痕跡は全く認められない。

床面　総体的には平坦である。床面全体が硬く踏み固められており，特に２基のカマド前面部は土間状の硬さである。

東壁下の中央部から竪穴の中心部へ向って延びる壁溝状の溝（幅20㎝，深さ５㎝）が１条あり，長さ２ｍで止っている。

また，西壁下の中央よりやや南寄りの位置からも同様の溝が２条，中心部へ向って延びており，長さは1.5ｍで止っている。

南壁中央部には，110×75㎝，厚さ20㎝の青白色粘土塊が存在する。

ピット　６個のピットを検出することができた。主柱穴は次の４個である。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位㎝）
P_1	60	55	73	P_4	90	55	68
P_3	65	48	71	P_6	70	60	70

P_5 は補助柱穴であろう。

埋没土　本址の埋没土の性状は，黒色土をベースとして，ローム粒子・ローム極小ブロック・焼土粒子が混在する固く締った暗褐色土である。

Ｃ－Ｄセクションの南壁際は粘土塊である。

カマド　本址には２基のカマドが付設されているが，２基の間には時間的な隔りがある。第一号が古く，第二号が新しい。

〈第一号カマド〉北壁のほぼ中央部に付設されている。

両袖を被覆する黒褐色粘性土の最大幅は225㎝である。

天井部は残存しないが，両袖は黄褐色粘土によって強固に構築されており，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部と煙出し口は20㎝ほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を８cmほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは150cm，燃焼部の幅は90cmである。燃焼部両側の袖部壁面は被熱によって赤変しており，硬化がみられる。

煙道部は垂直に近い状態で立ち上がり煙出し口は壁外へ出る。出土遺物はない。

〈第二号カマド〉竪穴の北西隅Wコーナーに設けられている。

両袖を被覆する暗褐色粘性土の最大幅は125cmである。

天井部に陥没の形跡が認められないので，住居廃絶時に破壊行為があったものと思われるが，両袖は黄褐色粘土を用いて強固に構築されている。他の補強材は使用していない。

両袖の先端部から扁平な石材が，左袖部からは横位で１個，右袖部からは横位，縦位各１個，計３個の石材が現れたが，これを袖部の補強材とするのは早計であろう。

今泉潔氏の報告によると，カマドは本来両袖の先端をブリッジ状につなぐ部分があって，はじめて機能したものであろうという。群馬県渋川市中筋遺跡では，甕がカマドにかけられた状態で出土し，その甕はカマド構築材で覆われ，固定して使用されていたことが判明したという。支脚と甕の使用方法も固定的で，両者が固定して使用されていたことを示しているという。

これらを固定して使用するには，カマドの構造上，両袖をつなぐブリッジ部分が当然必要になるわけで，本址カマドの石材は，ブリッジ構築材の一部ではないかと思われる。

構造は，焚口部だけを壁内に設け，燃焼部・煙道部・煙出し口は壁外に突出している。

焚口部から煙道部先端までの長さは135cm，燃焼部の幅は45cmである。

燃焼部は特に掘り窪めてはおらず，焚口部から煙出し口までゆるやかな傾斜になっている。

燃焼部には焼土が充満し，両袖の壁面は表面ばかりではなく内部にまで被熱による赤変が及んでおり，使用頻度が高かったことを物語っている。壁面が硬化していることはいうまでもない。

燃焼部からは高台付坏形土器と甕形土器が出土している。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は183個である。

内訳は，土師器169個，須恵器７個，石製品２個，自然石５個となる。

ドットを使った平面分布状態を観察すると，竪穴全体から万遍なく出土しており，特に変った傾向は指摘できない。

遺物と時期　資料として抽出できた器種は，坏形土器・高台付坏形土器である。

4　坏形土器（第九〇図）準完形品　平底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持ち，内傾して口縁部にいたる。

91　坏形土器（第九〇図）約50％欠損　平底に近い丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持ち，直立気味に口縁部にいたる。

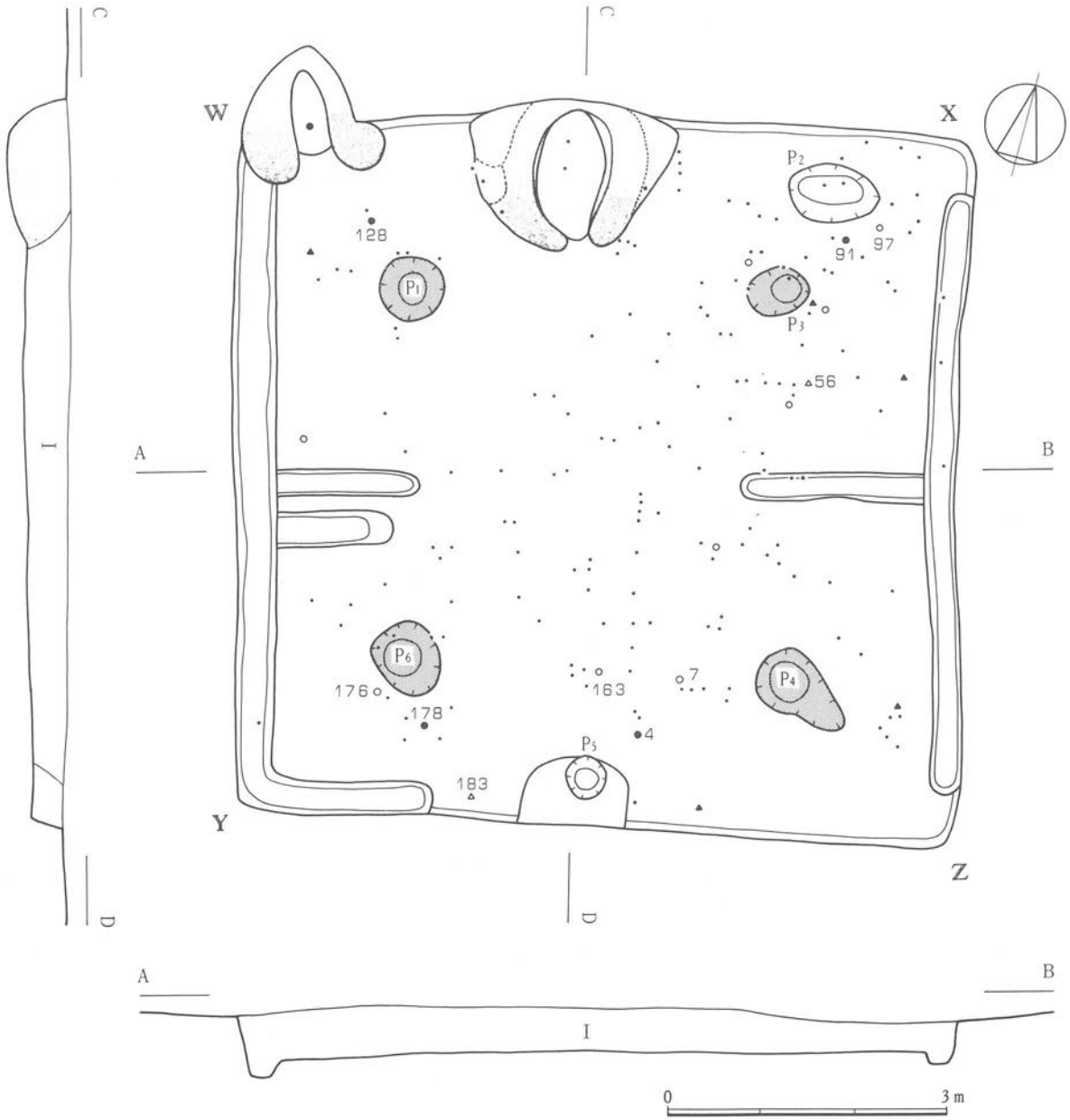
128　坏形土器（第九〇図）口縁部一部欠損　平底。体部は内弯して立ち上がり，そのまま口縁部にいたる。盤状坏に近似する。

178　高台付坏形土器（第一〇三図）底部～脚部片，脚部は「ハ」の字状に開く。底部に「大」の刻字あり。

K　高台付坏形土器（第九〇図）口縁部一部欠損　カマド内出土。脚部は「ハ」の字状に開き，末端はわずかに外反する。坏体部は内弯して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。

56　紡錘車〈石製品〉（第九〇図）完形品。径38mm，断面不整台形，厚さ16mm，重量36ｇ。

183　砥石〈石製品〉（第九〇図）完形品。a面の使用痕は平滑である。長さ19.5cm，幅3.8cm，厚さ1.9cm，重量414ｇ。



第八五図　第二二号住居址実測図，遺物出土状態図

本址の廃絶の時期は，第二号カマドの状況から判断して，最終の廃絶の時期は８世紀末葉か９世紀初頭ごろと考えられる。

47　第二六号住居址　（第八八図・図版第二一）

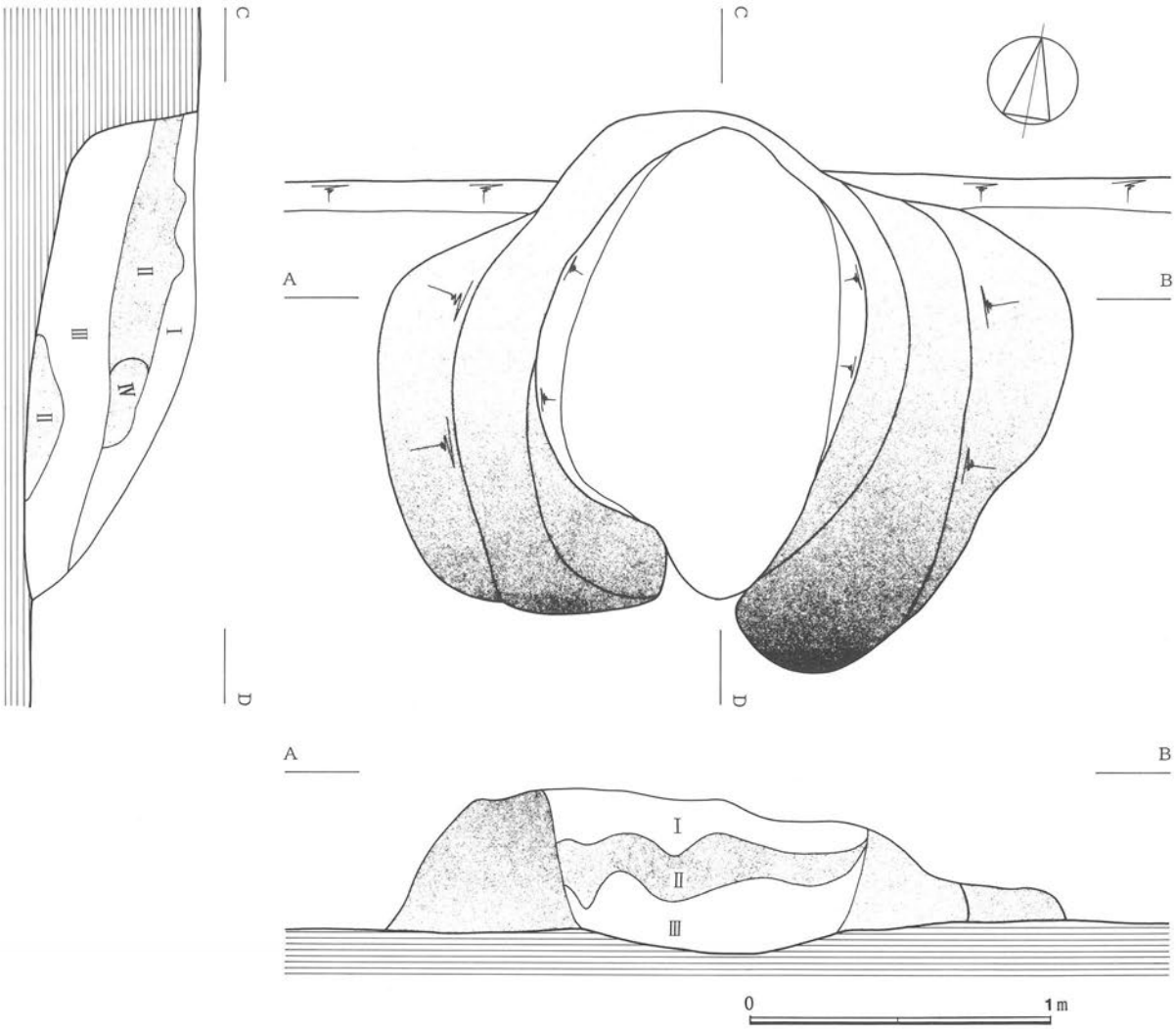
位置および遺存状態　本址は，第二調査区の南東部（B'－７～８）に位置する。

平坦部に構築されており，破壊も撹乱もなく遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は隅丸方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間2.7m，西壁Ｗ－Ｙ間2.7m，南壁Ｙ－Ｚ間2.6m，北壁Ｗ－Ｘ間2.8mを測り，面積約7.3m²ほどの小形竪穴である。北壁の中央部にカマドを設けている。主軸線はＮ－７°－Ｗを指す。

壁高および壁面　西壁は辛うじてプランを確認し得る遺存状態であるが，他の周壁は良好な状態である。



第八六図　第二二号住居址第一号カマド実測図

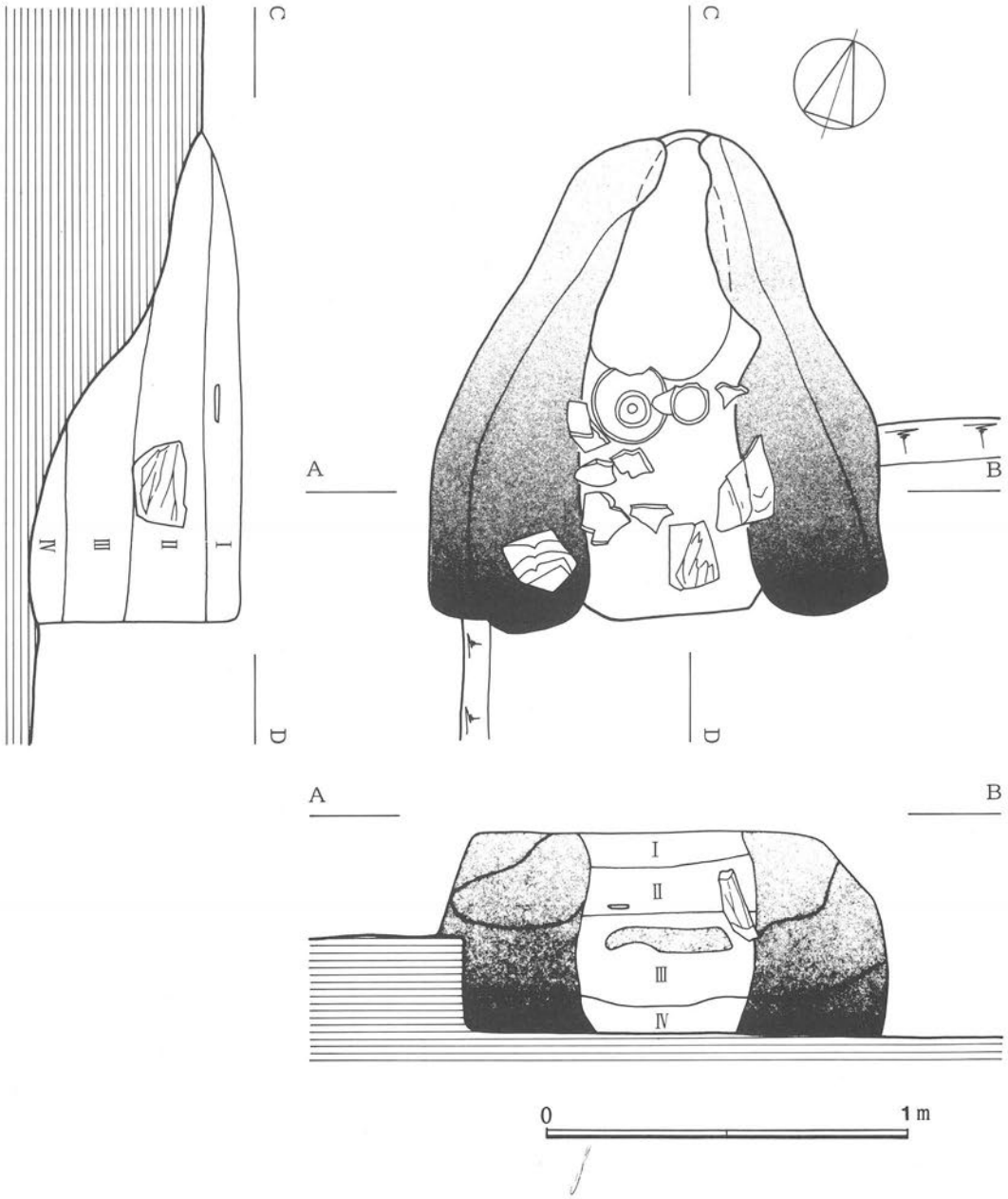
第二二号住居址第一号カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色粘性土　黒色土がベースで，黄色粘土を混入する。

Ⅱ　黒色粘性土　黒色土にローム粒子と黄色粘土が極くわずかに含まれている。

Ⅲ　焼　土　焼土粒子および焼土ブロックが主体で微量のローム小ブロック・黄色粘土小ブロックが点在する。

Ⅳ　赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロックがベースで，黒褐色粘性土・炭化物粒子が含まれている。



第八七図　第二二号住居址第二号カマド実測図，遺物出土状態図

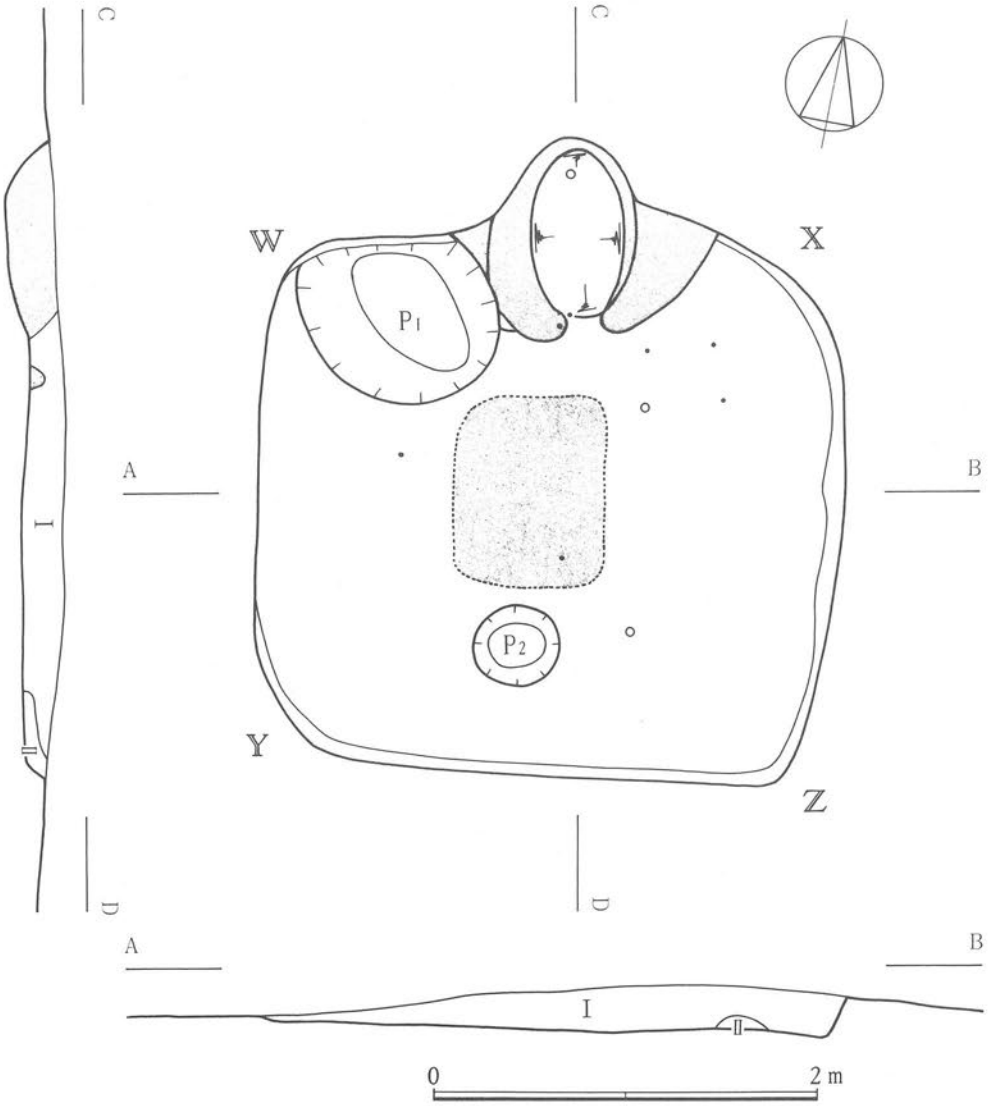
第二二号住居址第二号カマド断面層序説明

Ⅰ　黒褐色粘性土　黒色土がベースで，ローム小ブロック・焼土小ブロックを含み，固く締っている。

Ⅱ　赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロックが主体で，黒褐色粘性土・炭化物小片を多量に含んでいる。

Ⅲ　焼　土　硬化した焼土層である。

Ⅳ　暗褐色土　黒色土粘性土にロームブロックが散在する。



第八八図　第二六号住居址実測図，遺物出土状態図

壁高は，東壁25cm，西壁２～７cm，南壁14cm，北壁16cmである。

周壁はやや斜めに掘り込んでおり，崩落の痕跡は認められない。

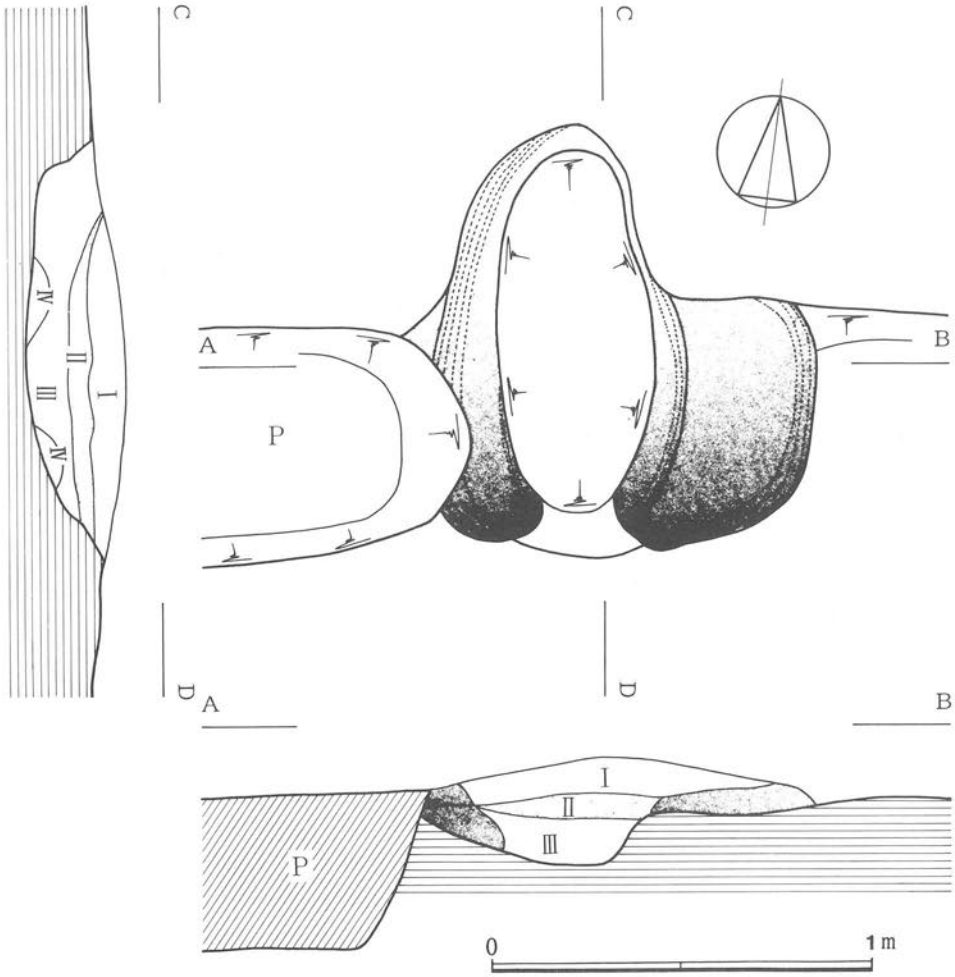
床面　おおむね平坦で，硬く踏み固められている。特に中央部は黄色粘土とロームの混合土によって，土間状の硬さになっている。

ピット　２個のピットを検出した。WコーナーのP_1は長径100cm，短径95cm，深さ37cmであるが，床面からの掘り込みではなく，確認面からの掘り込みで，加之，カマドの左袖部を破壊している。この事象は，本址の主柱穴とは認め難い。南壁寄りのP_2は長径47cm，短径45cm，深さ40cmで，主柱穴としの規模は具備しているが小形竪穴とはいえ１本主柱というのは疑問が残る。

埋没土　埋没土の性状は２層に区分することができる。

Ⅰは，黒色土がベースで，ローム粒子を混入する暗褐色土，Ⅱは，カマド前面部と南壁際に埋没する粘土ブロックである。

この層序の在り方は人為層序であることはいうまでもない。



第八九図　第二六号住居址カマド実測図

第二六号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　暗褐色土　黄色粘土小ブロック・焼土小ブロックを多量に含み，固く締ついている。

Ⅱ　焼　土　焼土粒子・焼土小ブロックが主体で，微量の炭化物粒子が混在する。

Ⅲ　赤褐色土　焼土ブロック・炭化物小片・黄色粘土を多量に含む。

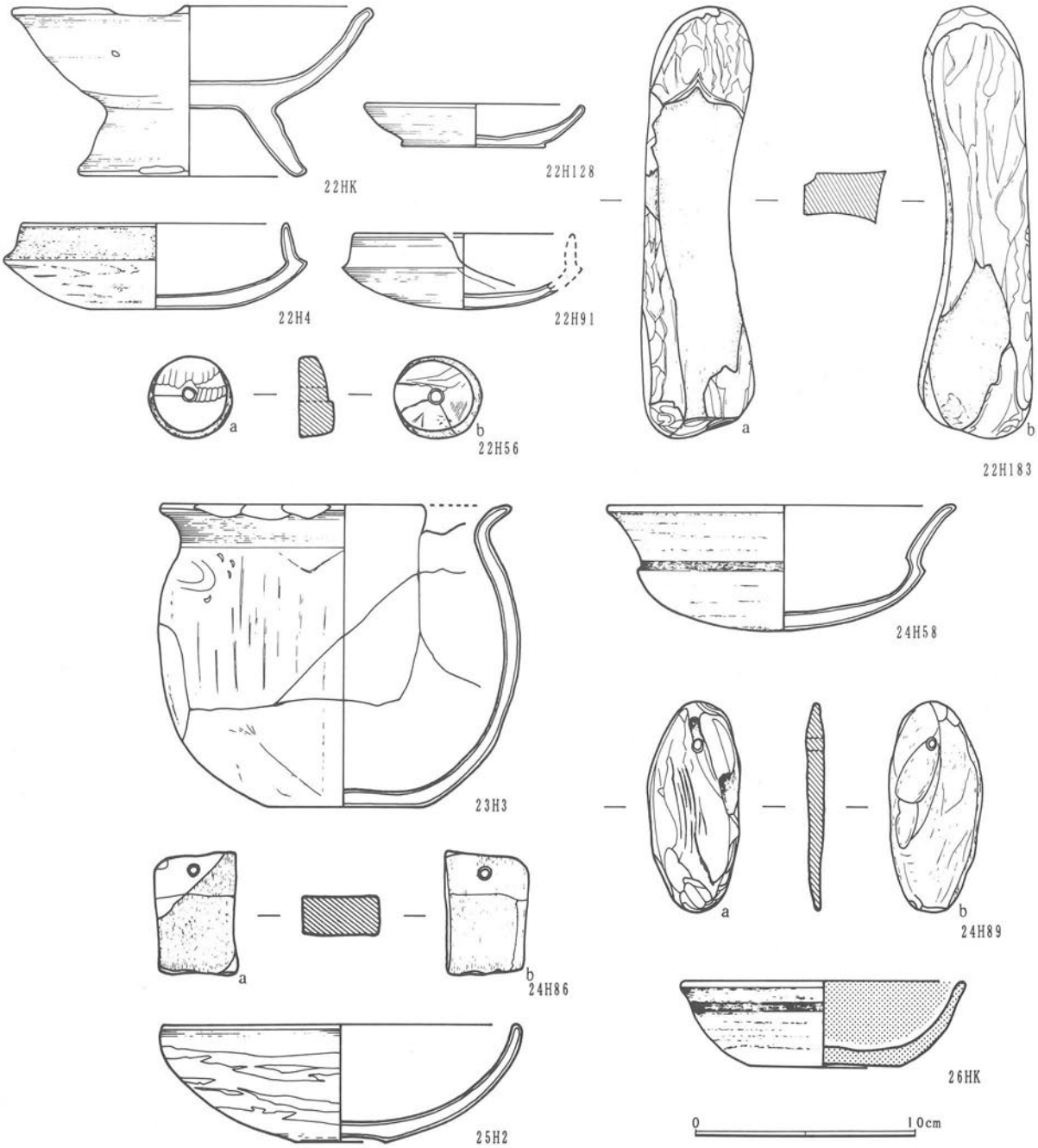
Ⅳ　褐色土　被熱して硬化したローム。

カマド　北壁の中央部に設けられている。

袖部の最大幅は，推定ではあるが120cmはあったと思う。

天井部は残存しないが，両袖は黒褐色粘土によって固く構築されているが，左袖部は住居址廃絶後に掘削したと思われるP₁によって損壊を受けている。構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部と煙出し口は50cmほど壁外へ突出させている。燃焼空間は、床面を15cm掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは95cm，燃焼部の幅は40cmである。燃焼部両面の袖部壁面は，被熱による赤変硬化がみられる。

燃焼部より内面黒色処理の坏形の土器が出土した。



第九〇図　第二二・二三・二四・二五・二六号住居址出土遺物実測図

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数はわずかに10個である。内訳は，土師器７個，須恵器３個となる。

平面分布の状態はきわめて疎らである。

土師器７個のうち内黒土器が２個出土しており，そのうち１個はカマド内の出土である。

遺物と時期　実測資料として抽出できたのは、坏形土器１個だけである。

K　土師器坏形土器（第九〇図）内面黒色処理　約50％欠損

平底．体部は内弯して立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。　資料は乏しいが，住居廃絶と同時に行われたと思われるカマド破壊行為に伴って，カマドに納めたものではないかと考えられる内黒土器の出土により，本址廃絶の時期は９世紀末葉ごろであろう。

48　第三〇号住居址　（第九二図・図版第二四）

位置および遺存状態　本址は，第二調査区南西部（C'－5～6）に位置する。

平坦面に構築されているが，北西隅Ｙコーナーの一角は，浅い土壙と重複している。

この部分以外の遺存状態は良好である。

形状および規模　平面形は方形を呈する。

Ｙコーナーは壁面が残存するので計測に支障はなく，周壁の辺長は，東壁Ｗ－Ｘ間4.3ｍ，西壁Ｙ－Ｚ間は4.3ｍ，南壁Ｘ－Ｚ間4.6ｍ，北壁Ｗ－Ｙ間4.6ｍを測り，面積約19.8㎡の小形竪穴である。

Ｙコーナーの土壙は，東西に長軸を持ち，長径3.0ｍ，短径2.1ｍの楕円形状を呈し，深さは15㎝である。

住居址よりは新しい。住居址の主軸線はＮ－11°－Ｗを指向する。

壁高および壁面　周壁の壁高は，東壁25㎝，西壁27㎝，南壁23㎝，北壁17㎝を測る。

壁は若干斜めに掘り込まれており，壁面は堅牢で崩落の痕跡は認められない。

床面　おおむね平坦である。床面全体が硬く踏み固められているが，特にカマド前面部はロームに青白色粘土を加えて，亀裂を生じるほど土間状に固められている。

ピット　５個のピットを検出したが，主柱穴の機能を果したのは次の４個である。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位㎝）
P_1	30	28	49	P_4	33	33	40
P_2	27	25	50	P_5	27	27	40

ＸコーナーのP_3は100×95㎝×深さ30㎝の規模であるが，貯蔵穴であろう。

カマド　東壁の中央より南寄りの位置に設けられている。

両袖を被覆する黒褐色粘性土の最大幅は130㎝である。

天井部は残存しないが両袖は黄褐色粘土によって強固に構築され，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口部・燃焼部・煙道部のすべてを壁内に設け，焚口部から煙道部先端までの長さは125㎝，燃焼部の幅は45㎝である。

燃焼空間は，床面を10㎝ほど掘り窪めて形成している。

燃焼部両側の袖部壁面は，被熱による赤変がみられるが硬化は顕著ではない。

焚口部から炭化材，燃焼部から土製支脚が出土したが，土製支脚は収納時に崩壊分解してしまった。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は85個である。接合資料の出土地点関係から土壙出土遺物も本址の遺物数に加えることとした。内訳は，土師器77個，須恵器５個，土製品１個，石器１個，炭化材１個となる。

平面分布の状態は，Ｘ・Ｙコーナーを結ぶ対角線の北東側はほとんど空白に近い。

遺物と時期　実測資料として抽出したのは，坏形土器・鉢形土器・甕形土器である。

接合資料Ⅰ　須恵器坏形土器（第九一図）

平底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持ち，直立して口縁部にいたる。

接合資料Ⅱ　須恵器深鉢形土器（九一図）口縁部～底部片

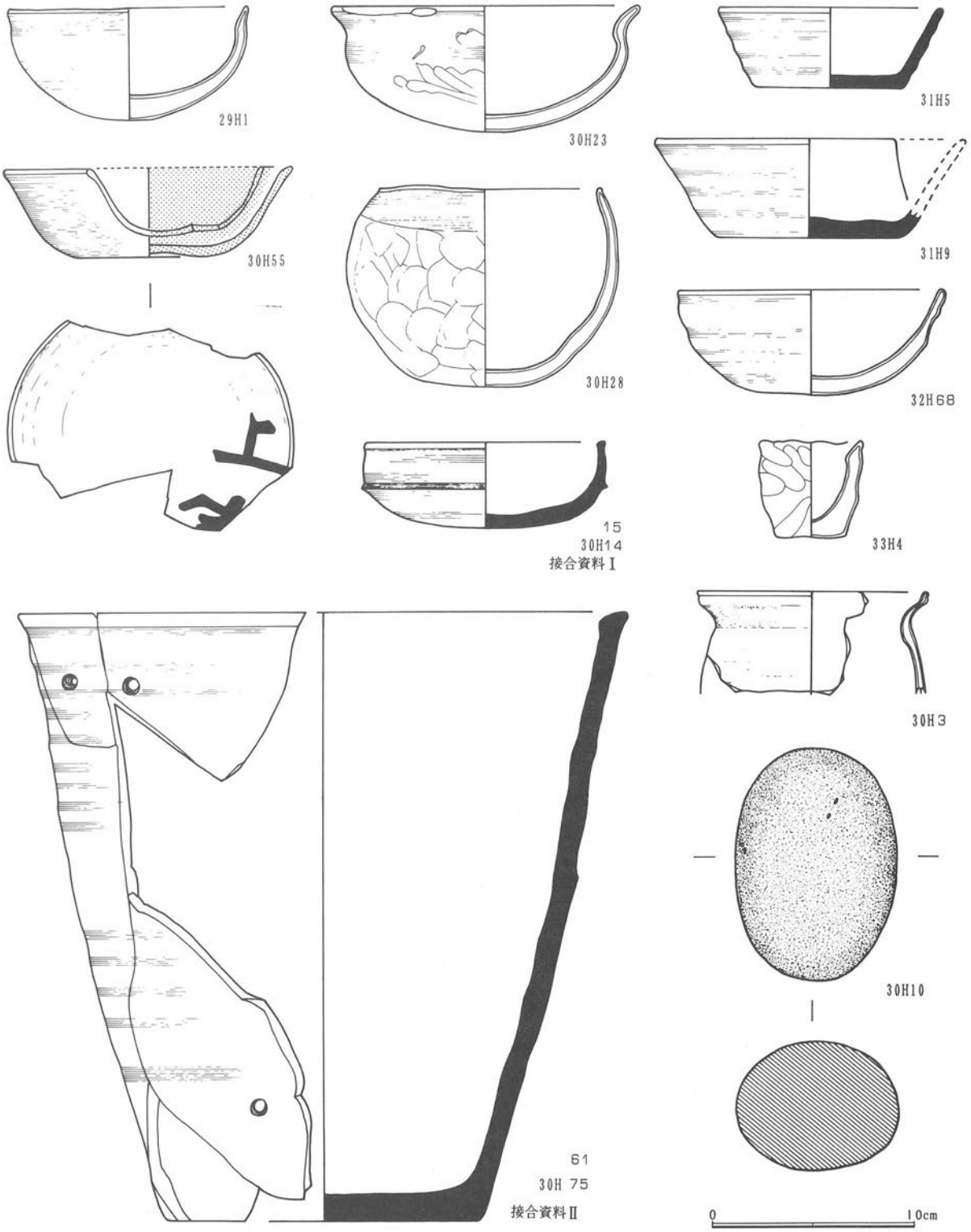
平底。胴部は外傾して直線的に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。

胴部上位に２孔，下位に１孔を穿つ。

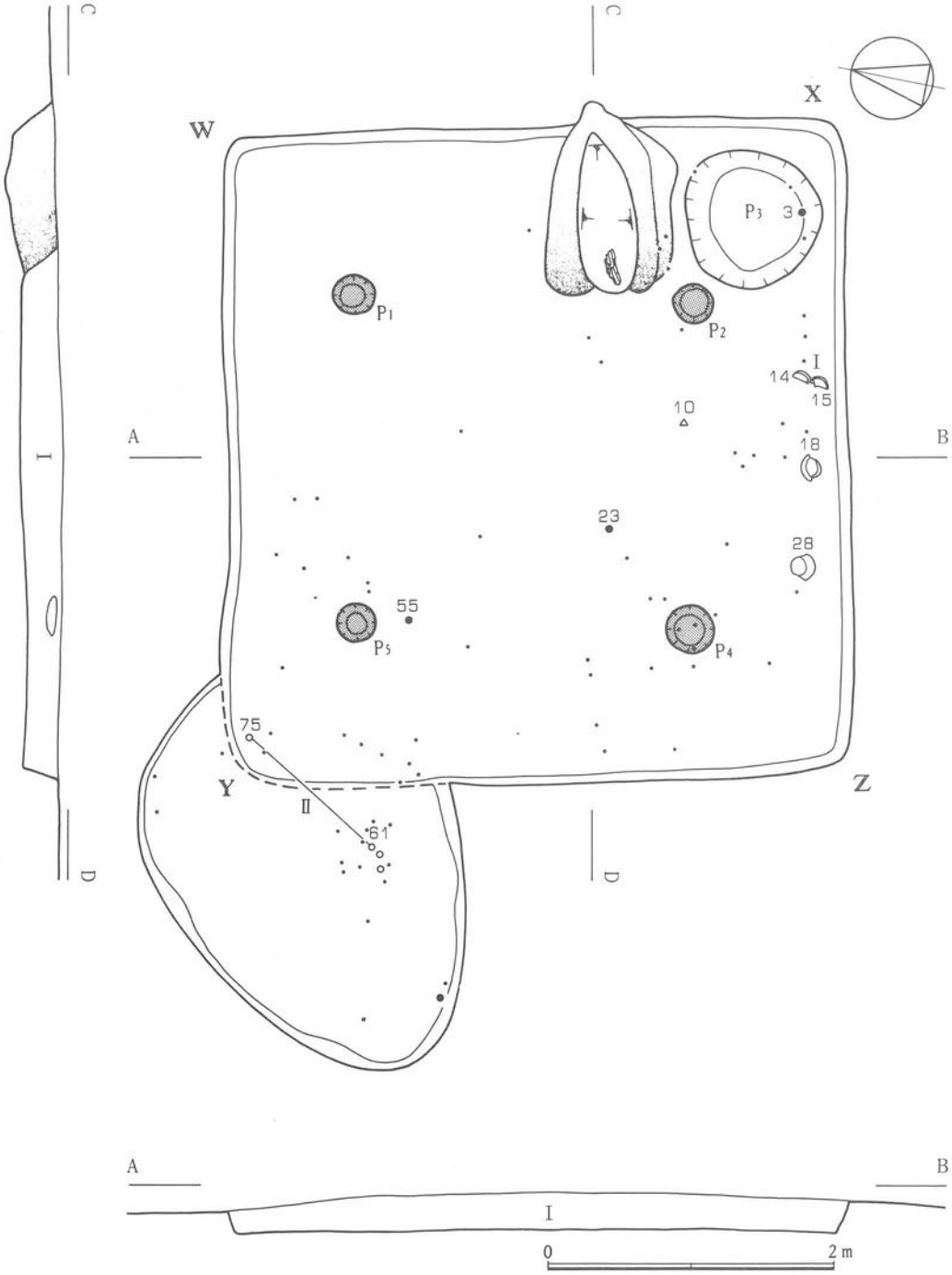
23　土師器坏形土器（第九一図）約50％欠損

丸底。体部は内弯して上ち上がり，口縁部は外反する。

28　土師器鉢形土器（第九一図）完形品



第九一図　第二九・三〇・三一・三二・三三号住居址出土遺物実測図



第九二図　第三〇号住居址実測図，遺物出土状態図，接合関係図

平底。体部は内弯して立ち上がり，球形状を呈する。口縁部はやや直立気味になる。

55　土師器坏形土器（第九一図）口縁部～底部片　内面黒色処理　墨書土器

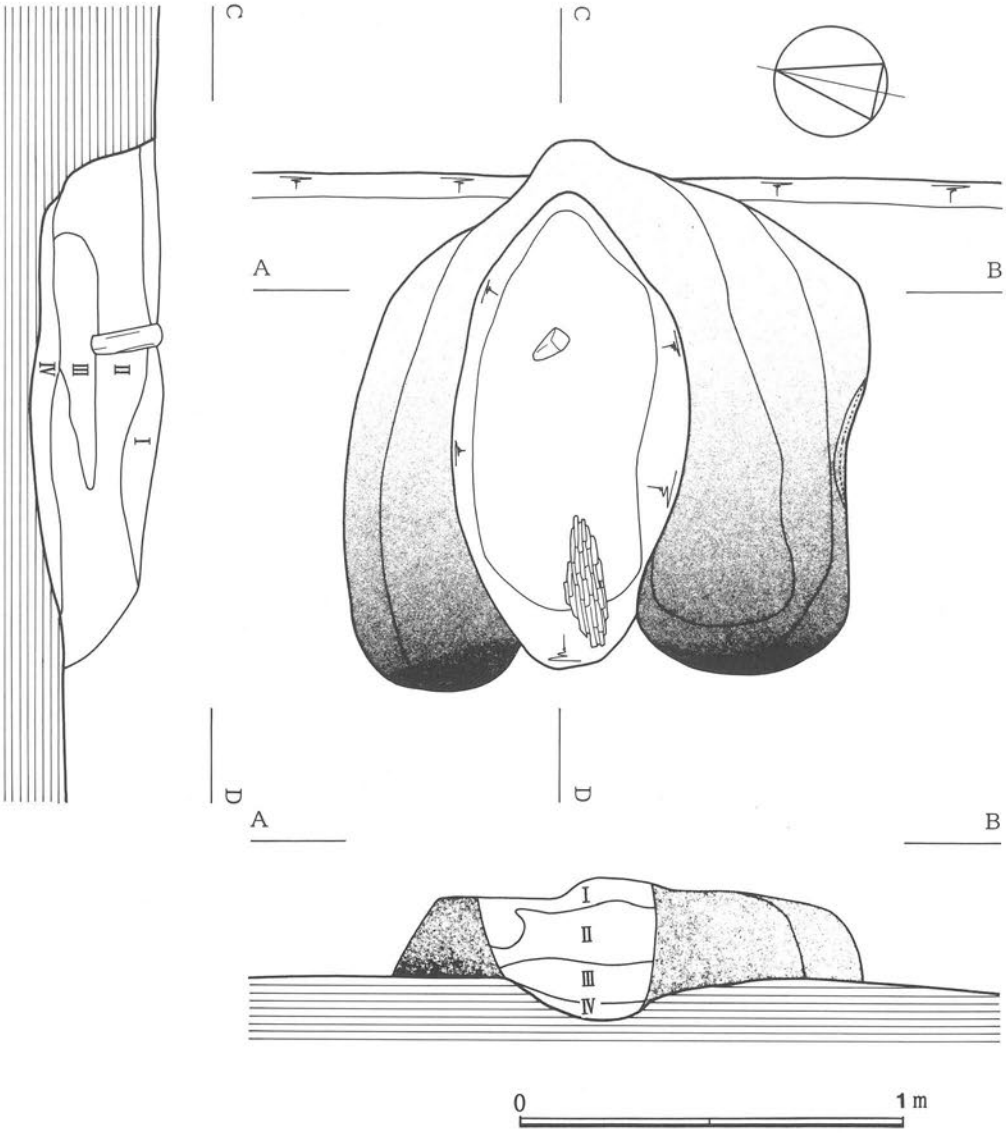
平底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部は外傾気味で口縁部にいたる。

体部外面に「上口」の墨書がある。

3　土師器甕形土器（第九一図）口縁部～胴部上位片　頸部はくびれ，口縁部は外反の後直立する。

10　磨石

本址は出土土器に時差があるが，内黒墨書土器から９世紀末葉ごろと考えられる。



第九三図　第三〇号住居址カマド実測図，遺物出土状態図

第三〇号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色土　粘性があり，焼土小ブロック・炭化物粒子および小片・ローム粒子を含む。

Ⅱ　赤褐色土　焼土粒子・焼土小ブロックが層の主体を占め，炭化物片を多量に混入する。

Ⅲ　暗褐色土　褐色粘性土・炭化物片の混入が多い。

Ⅳ　淡赤褐色土　被熱によって赤変硬化したロームが多い。

49　第四〇号住居址　（第九四図・図版第三二）

位置及び遺存状態　本址は，第三調査区の南西部（G′－３）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱もなく遺存状態は良好である。

形状及び規模　平面形は隅丸方形と見做してよいだろう。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間3.5ｍ，西壁Ｗ－Ｙ間3.6ｍ，南壁Ｙ－Ｚ間3.1ｍ，北壁Ｗ－Ｘ間3.0ｍを測り，面積約10.5㎡の小形竪穴である。

北壁中央部にはカマドを設けている。主軸線はＮ－５°－Ｅを指向する。

壁高および壁面　周壁の遺存状態はおおむね良好である。

壁高は，東壁20㎝，西壁18㎝，南壁23㎝，北壁20㎝を計測する。

壁の掘り込みは，ほぼ垂直の部分，斜めの部分と統一を欠いている。

壁面の状態を観察すると，自然崩落は認められないが，北西隅の一角にピット状の浅い掘り込みがあり，その掘削の際に壁面の下部を刳っている。

床面　凹凸起状があり平坦ではない。床面は硬く締っている。中央部は粘土を固めている。

ピット　ピットの検出は１個だけである。壁外も検索したが確認できなかった。

Ｐ₁は，長径30㎝，短径25㎝，深さ45㎝であるが，小規模竪穴とはいえ，位置からみてこのＰ₁１個だけでは主柱穴の機能を果すことは無理であろう。

埋没土　埋没土の性状は，黒色土とロームの混合土の暗褐色土で，粘土小ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子が混入する。

カマド　北壁の中央部に設けられている。

両袖を被覆する暗褐色粘性土の最大幅は125㎝である。

天井部は残存しないが，両袖は黄褐色粘土によって固く構築され，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部煙出口は25㎝ほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面をわずかに５㎝ほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは105㎝，燃焼部幅は50㎝である。煙出し口は垂直に壁外へ出る。

燃焼部両側の袖部壁面は，被熱による赤変がみられるが，煉瓦状ほどの硬化はしていない。

燃焼部から甕形土器が出土している。また，右袖部際の火床部から角柱状の石材が出土しているが，これは石製支脚であったことが考えられる。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は24個である。

内訳は，土師器21個，須恵器２個，自然石１個となる。

ドットを使った平面分布状態を観察すると，集中や偏在傾向のないきわめて疎らな出土状態である。

総体的には空白部分が多い。

遺物と時期　実測資料として抽出できたのは，坏形土器・甕形土器である。

1　土師器坏形土器（第一〇一図）約30％欠損　内面黒色処理

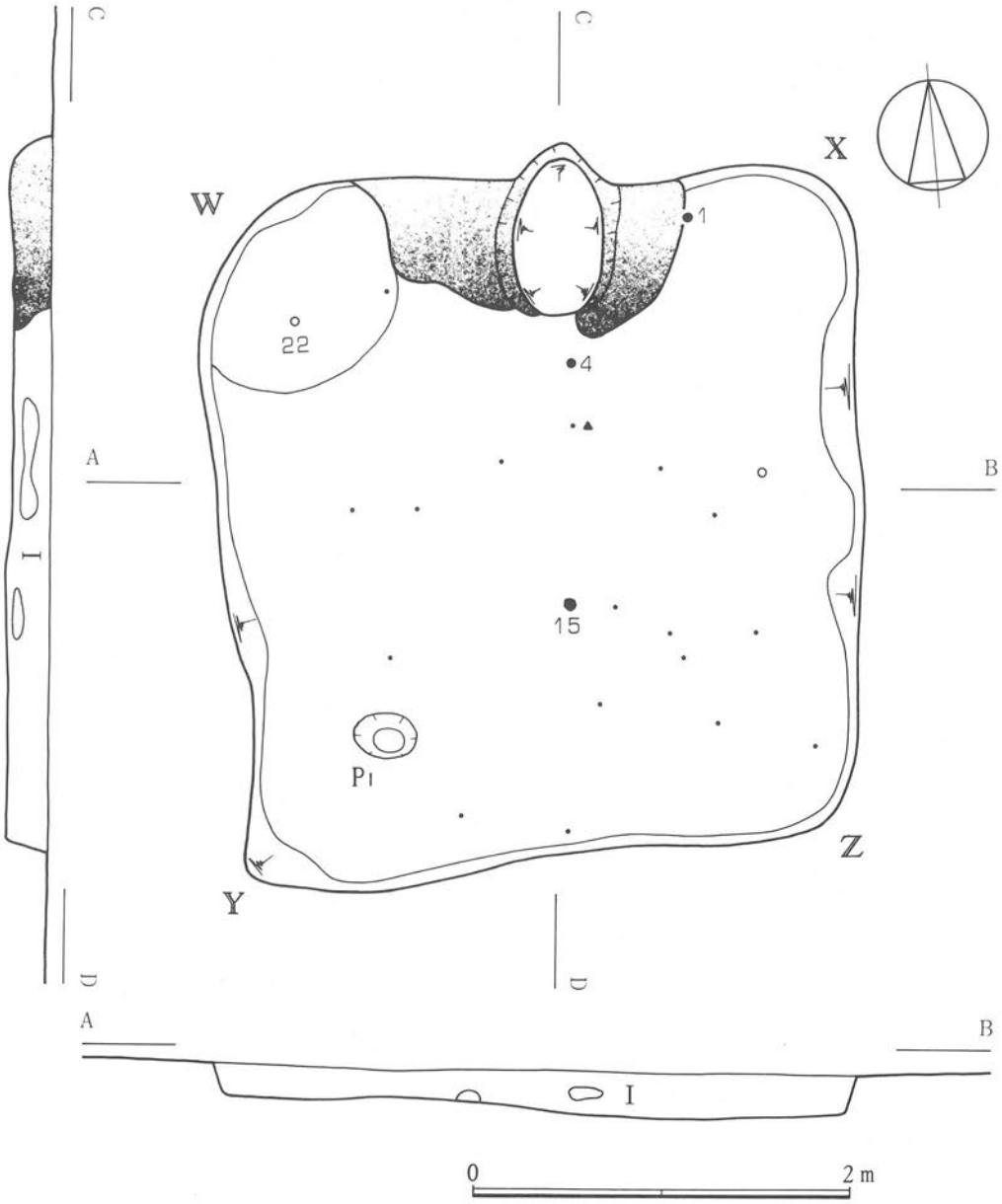
平底。体部は内弯して立ち上がり，口縁部は外傾気味になる。

4　土師器甕形土器（第一〇一図）口縁部～胴部中位片

胴部は内弯して立ち上がり，頸部から「く」の字状になり，口縁部はゆるく外反する。

15　土師器甕形土器（第一〇一図）口縁部～胴部中位片

胴部は内弯して立ち上がり，頸部から「く」の字状になり，口縁部はゆるく外反する。



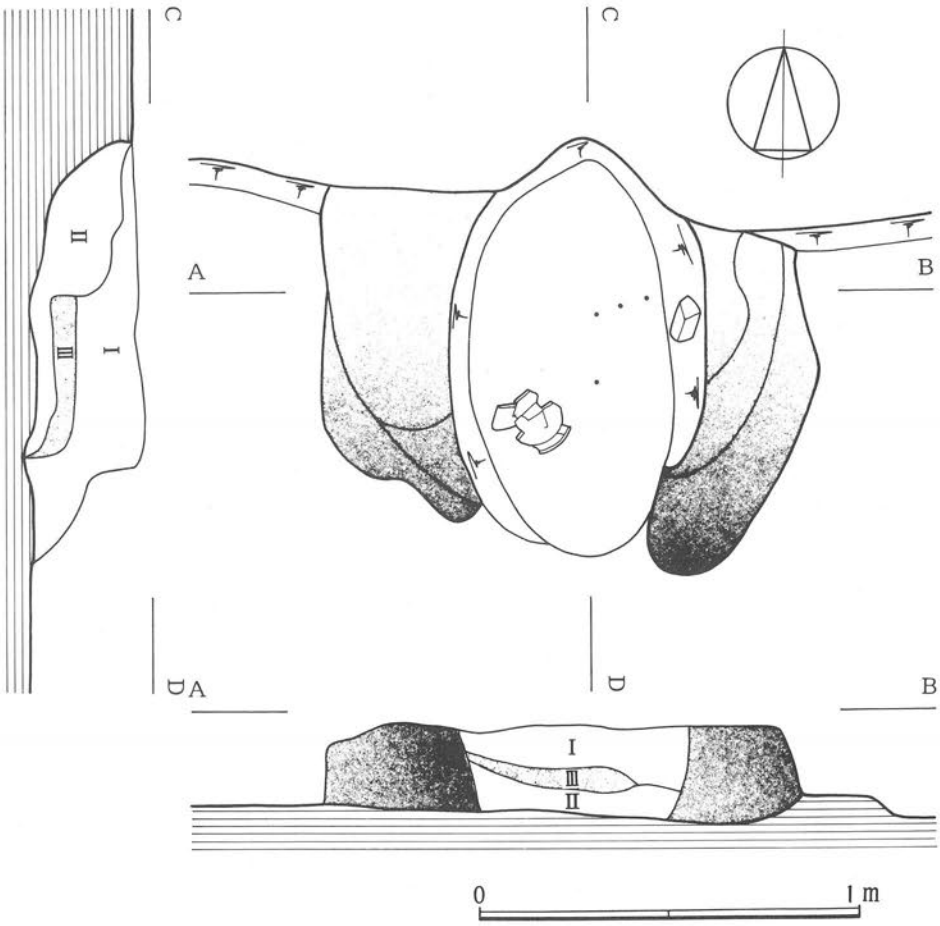
第九四図　第四〇号住居址実測図，遺物出土状態図

K１　土師器甕形土器（第一〇一図）口縁部～胴部中位片　カマド内出土

胴部は内弯して立ち上がり，頸部から丸味を持って外反し，口縁部は直立する。

須恵器は甕形土器の胴部片であろう。

本址の廃絶の時期は，国分期の平安時代と考えられる。



第九五図　第四〇号住居址カマド実測図，遺物出土状態図

第四〇号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　黒褐色土　　黒色土・黄褐色粘土ブロック・焼土小ブロックの混入多し。

Ⅱ　赤褐色土　　焼土粒子・焼土ブロックが主体の層で，赤変した粘土小ブロックや炭化物粒子も混在する。

Ⅲ　暗赤褐色土　性状としてはⅡ層に近似するが，炭化材小片の混入が多くなる。

50　第四二号住居址　（第九七図・図版第三四）

位置及び遺存状態　本址は，第四Ｂ調査区の北西部（Ｇ′－４～５）に位置する。

平坦面に構築されており，破壊も撹乱もなく遺存状態は良好である。

形状及び規模　平面形は隅丸方形を呈する。

周壁の辺長は，東壁Ｘ－Ｚ間3.2ｍ，西壁Ｗ－Ｙ間3.3ｍ，南壁Ｙ－Ｚ間2.7ｍ，北壁Ｗ－Ｘ間2.9ｍを測り，面積約9.1㎡の小形竪穴である。

北壁の中央部にカマドを設けている。主軸線はＮ－10°－Ｅを指向する。

壁高および壁面　周壁の遺存状態は良好である。

壁高は，東壁22㎝，西壁15㎝，南壁17㎝，北壁15㎝を測る。

壁はやや斜めに掘り込まれており，壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

床面　若干の起伏はあるがおおむね平坦である。

床面は，硬く踏み固められている。床面の中央部からＹコーナー寄りに焼土塊が存在する。

ピット　４個のピットを検出した。計測値は次のとおりである。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位㎝）
P_1	70	55	34	P_3	37	36	37
P_2	46	40	20	P_4	110	98	41

P_4 は位置と規模からみて貯蔵穴と思われる。P_1 は性格不明である。

主柱穴としての要件を備えているのはP_2・P_3であるが，位置関係が釈然としない。

埋没土　埋没土の性状は，黒色土とローム粒子の均一な混合土の暗褐色土単一層である。

焼土粒子が散在するが，区分線を入れるほどの層序の変化があるとはいえない。

カマド　北壁の中央に設けられている。

両袖を被覆する暗褐色粘性土の最大幅は130㎝である。

天井部は残存しないが，両袖は黄褐色粘土によって固く構築されており，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口部と燃焼部を壁内に設け，煙道部と煙出し口は45㎝ほど壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を10㎝ほど掘り窪めて形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは120㎝，燃焼部の幅は40㎝である。煙道部と煙出し口はゆるやかな傾斜で壁外へ出る。

燃焼部両側の袖部壁面は，被熱による赤変がみられるが硬さはない。燃焼部から甕形土器が逆位で出土した。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は22個で，内訳は，土師器18個，炭化材４個となる。

ドットを使った平面分布状態を観察すると，Ｗ・Ｚを結ぶ対角線の上面にのみ分布する偏在性を指摘できる。

遺物と時期　実測資料として抽出できたのは，坏形土器・甕形土器である。

18　土師器高台付坏形土器（第一〇一図）約40％欠損　内面黒色処理

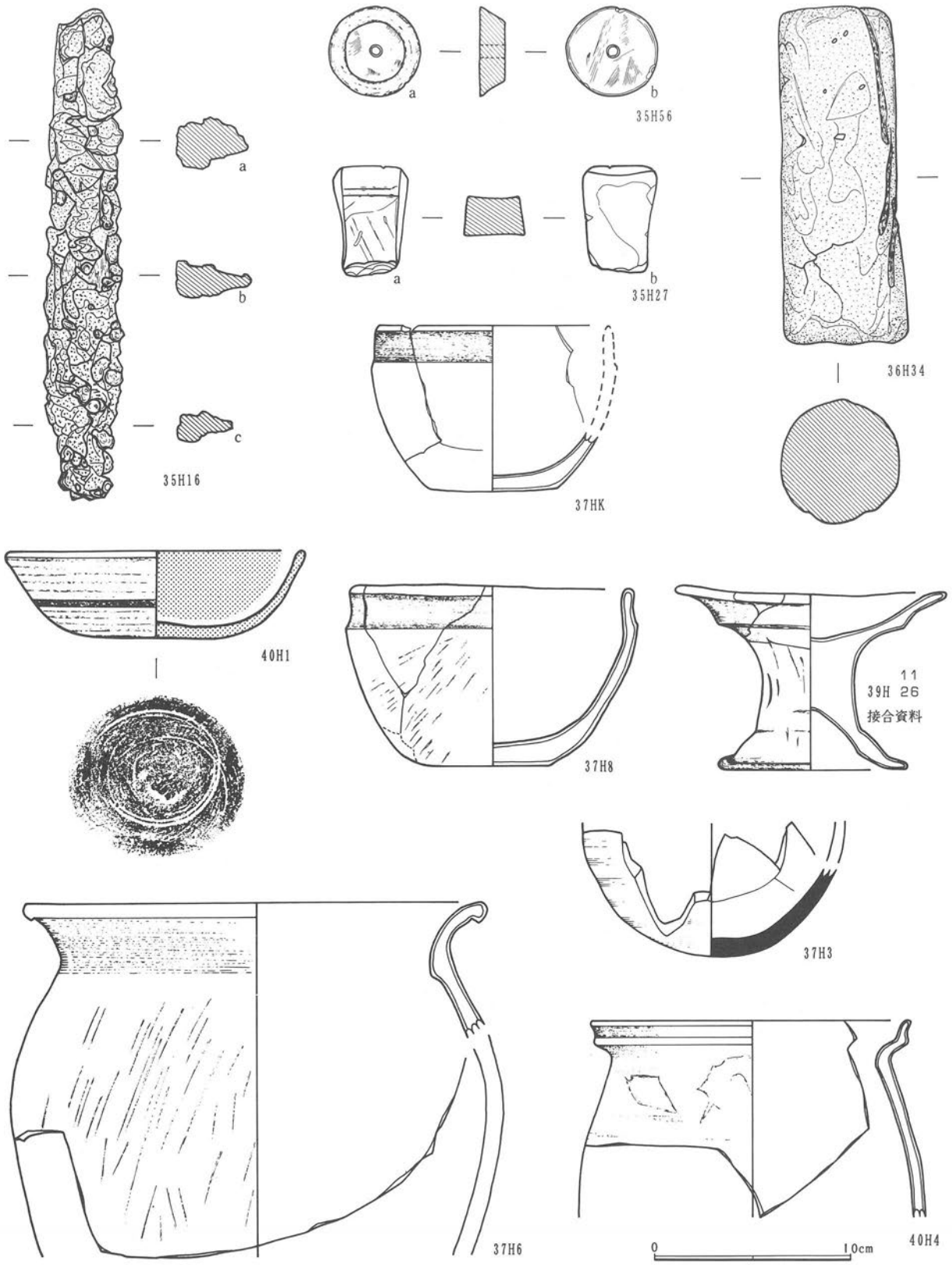
脚部は「ハ」の字状に開き，末端はかるく外反する。坏体部は内弯して立ち上がり，口縁部は外反気味となる。

Ｋ１　土師器甕形土器（第一〇一図）底部欠損

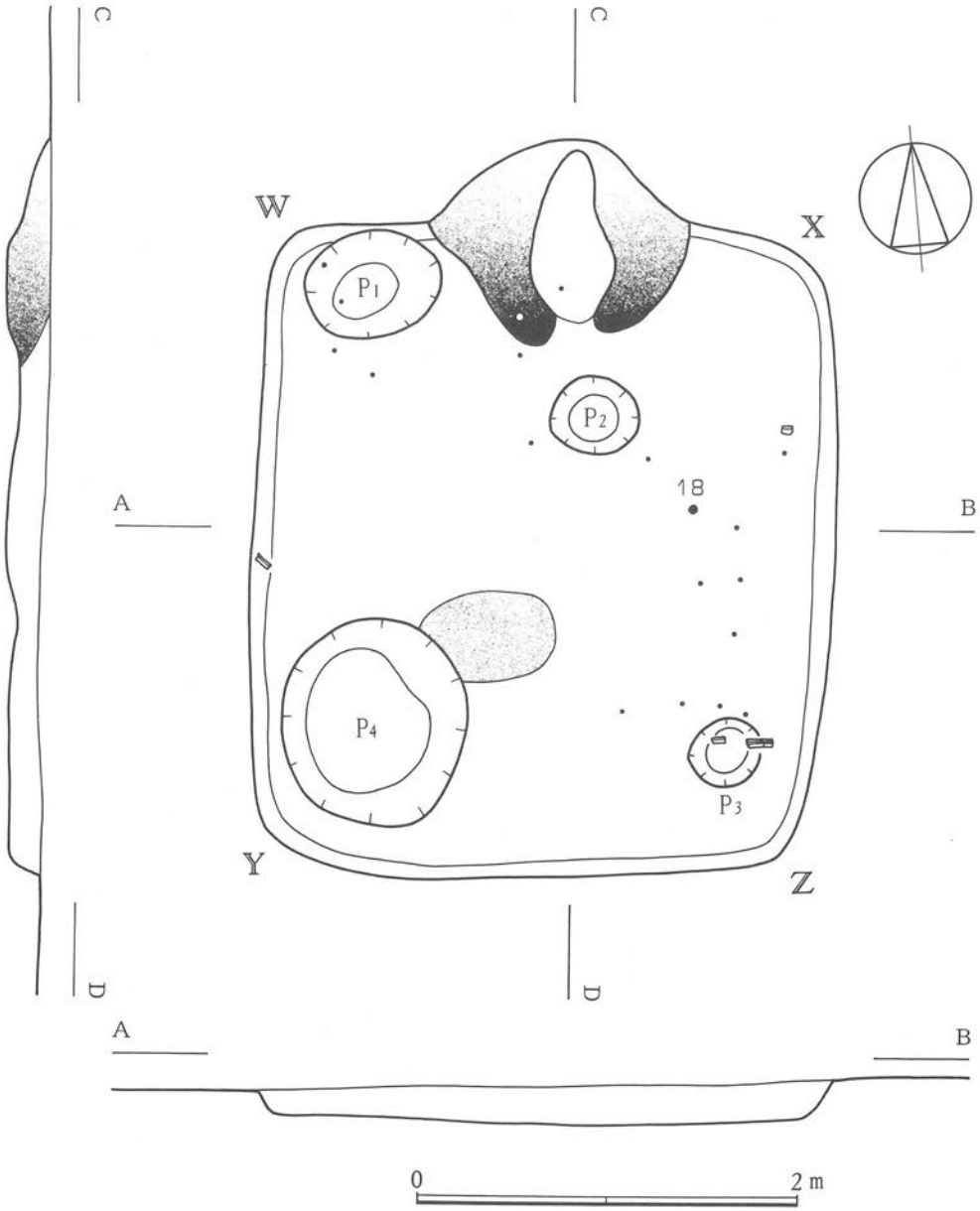
胴部は内弯して立ち上がり，最大径を中位に持ち14.7㎝，頸部から「く」の字状に外反し，口縁部は直立する。

Ｋ２　土師器坏形土器（第一〇一図）約50％欠損　平底。体部は内弯して立ち上がり，口縁部は外傾する。

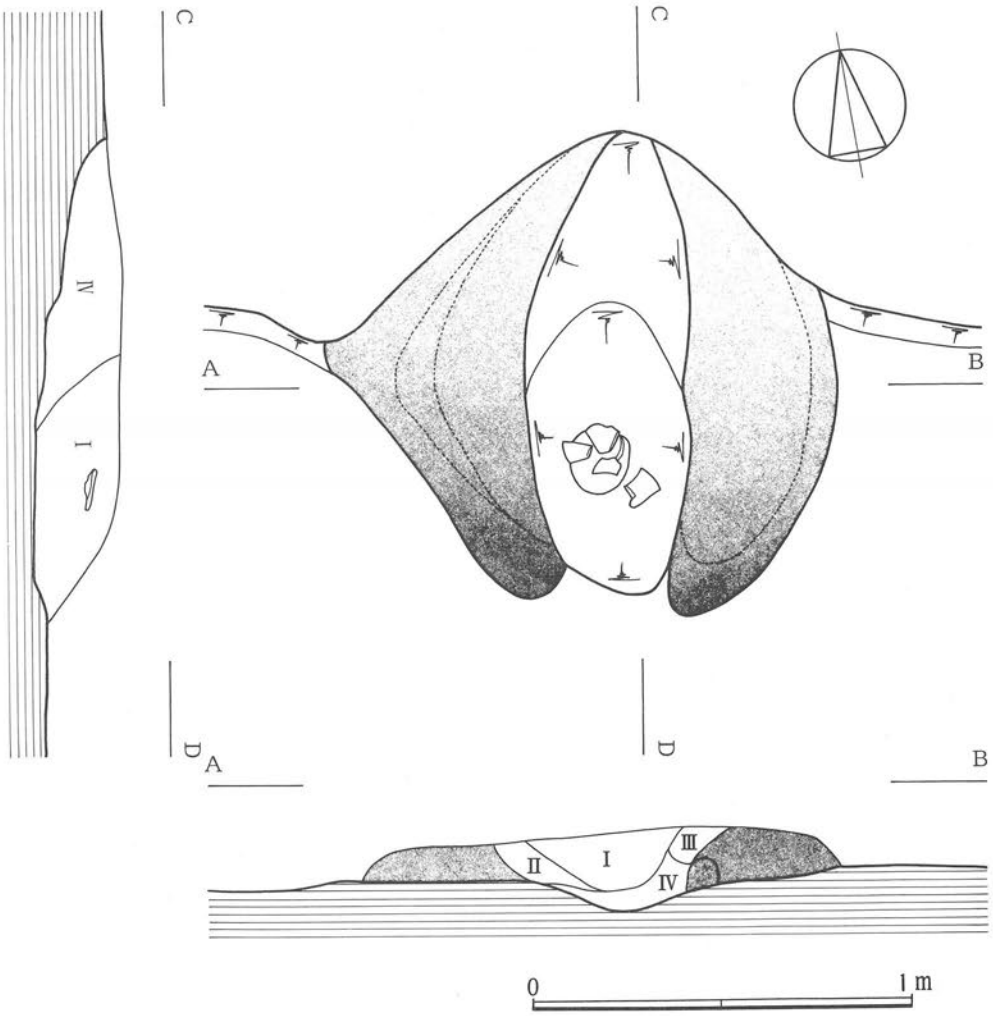
本址の廃絶の時期も第四〇号住居址と同時期ごろと考えられる。



第九六図　第三五・三六・三七・三九・四〇号住居址出土遺物実測図



第九七図　第四二号住居址実測図，遺物出土状態図



第九八図　第四二号住居址カマド実測図，遺物出土状態図

第四二号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

Ⅰ　赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロックがベースで，黒色土粒子・黄褐色粘土小ブロック・炭化物小片を混入する。

Ⅱ　黒褐色土　黒色土が主体で，ローム粒子と黄褐色粘土小ブロックを混入する。固く締っている。

Ⅲ　暗褐色土　性状はⅡ層に近似するが，ローム粒子と黄褐色粘土小ブロックの混入が多く，色調がやや明るい。

Ⅳ　暗赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロック・炭化物小片・赤変したロームブロックが多く固いけれども脆弱で崩れ易い。

51　第四五号住居址　（第九九図・図版第三六）

位置及び遺存状態　本址は，第四Ｂ調査区の北東部（Ｇ′－５）に位置する。

平坦面に構築されているが，北壁は調査区域外に埋没しており，竪穴の全容を調査することできなかった。しかし，確認部分の遺存状態は良好である。

形状及び規模　北壁側は区域外に埋没していてプランは不明であるが，確認した平面形から想定し得る形状は隅丸長方形であろう。確認面積は約10.0㎡ほどで，全体の規模も小形竪穴の範疇であろう。

東壁の中央より南寄りの位置にカマドを設けている。主軸線はＮ－10°－Ｅを指向する。

壁高および壁面　北壁以外の周壁の遺存状態は良好である。

壁高は，東壁15㎝，西壁20㎝，南壁15である。

壁は斜めに掘り込まれており，壁面は堅固で崩落の痕跡は全く認められない。

床面　わずなか凹凸はあるがおおむね平坦である。

床面は，全体が固く踏み固められている。

ピット　３個のピットを検出した。計測値は次のとおりである。

	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ（単位㎝）
P_1	75	70	31	P_3	75	57	30
P_2	70	50	15				

全容が不明なので速断はできないが，３個の位置関係を観る限りでは，主柱穴とすることには無理がある。

埋没土　本址の埋没土の性状は，黒色土とロームの均一な混合土の暗褐色土で，黄褐色粘土小ブロックや焼土小ブロックが点在する。

カマド　東壁の中央より南寄りの位置に設けている。

両袖を被覆する暗褐色粘性土の最大幅は95㎝である。

天井部は，後世の撹乱ではなく，住居廃絶の最終段階で破壊されたものらしく残存しない。

両袖は，黄褐色粘土によって固く構築しており，他の補強材は使用していない。

構造は，焚口部を壁内に設け，燃焼部・煙道部・煙出し口は壁外へ突出させている。

燃焼空間は，床面を５㎝ほど掘り窪めた程度で形成し，焚口部から煙道部先端までの長さは72㎝，燃焼部の幅は35㎝である。煙道部と煙出し口はゆるやかに傾斜して壁外へ出る。

燃焼部両側の壁面は，被熱によって赤変しており，中程度の硬化がみられる。

燃焼部右袖寄りに甕形土器片が出土している。

遺物の出土状態　本址の出土遺物総数は14個で，すべて土師器である。

出土状態はきわめて疎らで散発的である。

遺物と時期　実測資料として抽出できたのは，坏形土器である。

1　土師器坏形土器（第一〇一図）約40％欠損　内面黒色処理

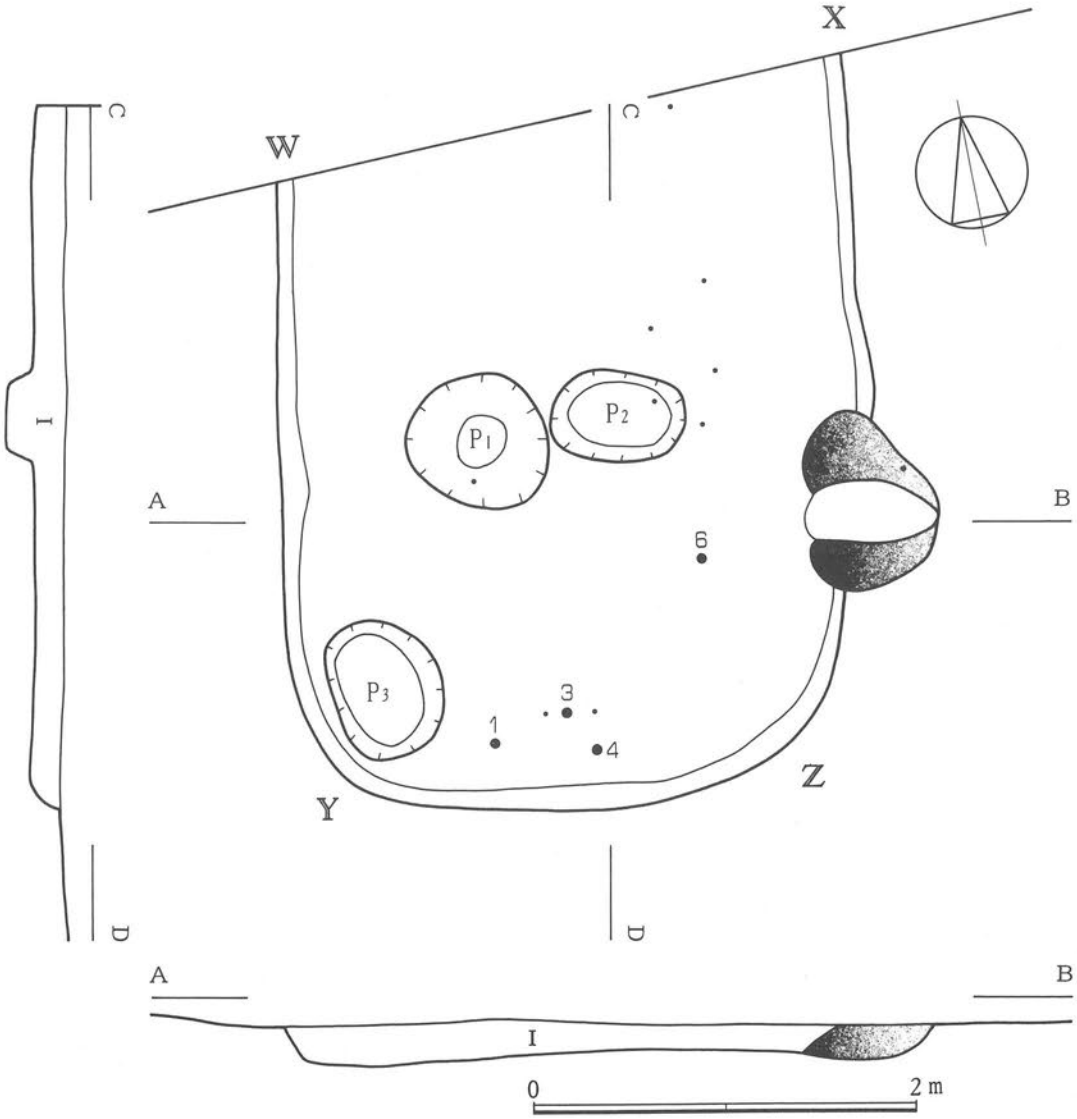
平底。坏体部下位は外反気味に立ち上がり，中位にいたって内弯して立ち上がり口縁部にいたる。口縁部はゆるやかに外反する。

3　土師器高台付坏形土器（第一〇一図）口縁部一部欠損

脚部は「ハ」の字状に開く。坏体部は内弯して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。

4　土師器坏形土器（第一〇一図）体部約30％欠損

平底。体部は内弯して立ち上がり，口縁部はやや外傾する。

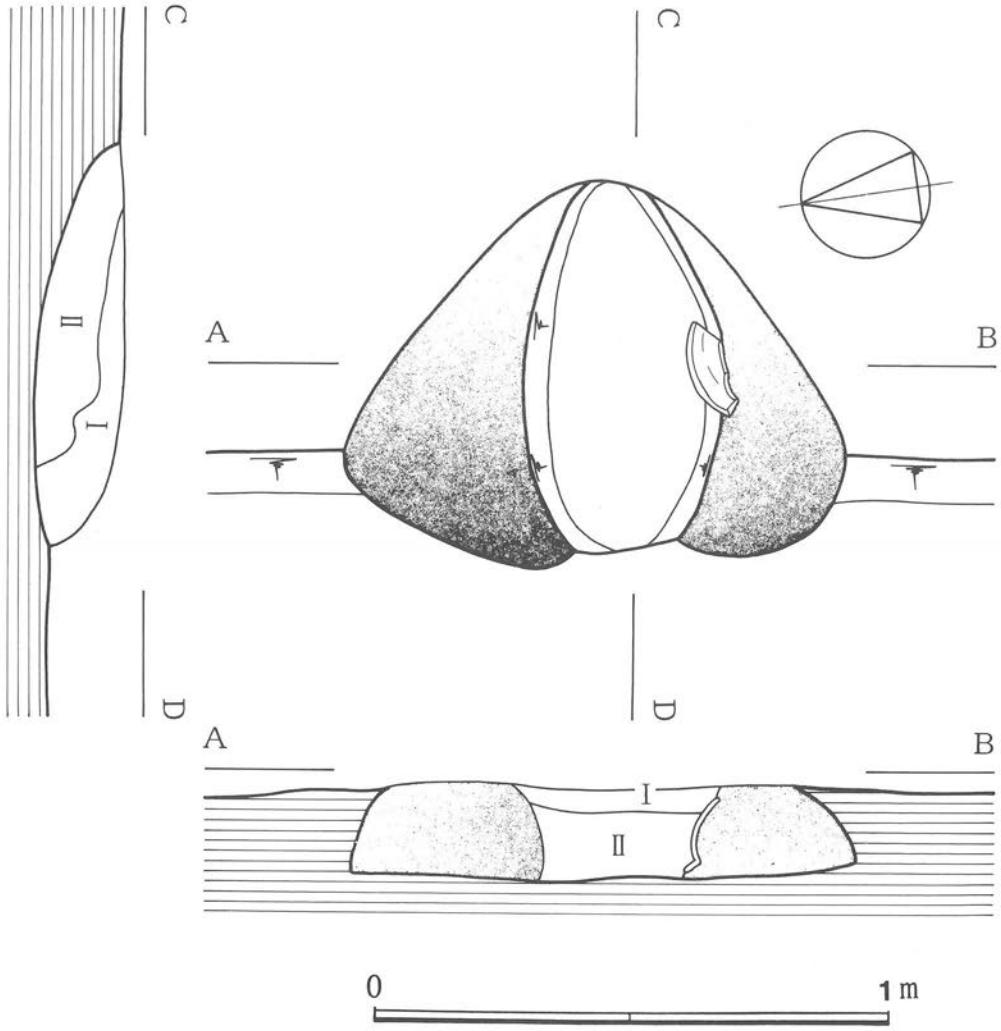


第九九図　第四五号住居址実測図，遺物出土状態図

6　土師器坏形土器（第一〇一図）口縁部一部欠損

平底。回転糸切り。体部は内弯して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。

本址の廃絶の時期も国分期の平安時代と考えられる。



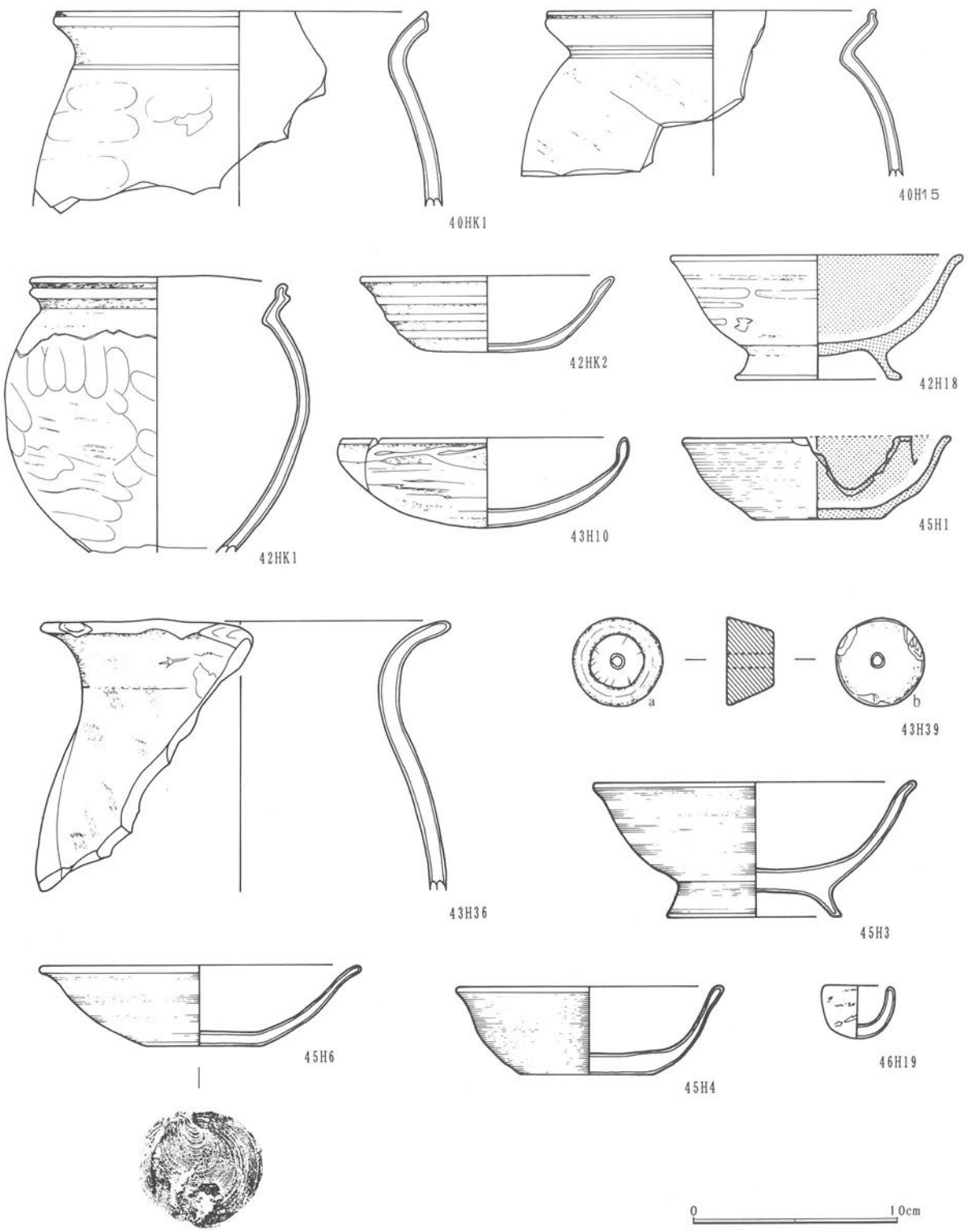
第一〇〇図　第四五号住居址カマド実測図，遺物出土状態図

第四五号住居址カマド断面層序説明（A－B・C－Dセクション共通）

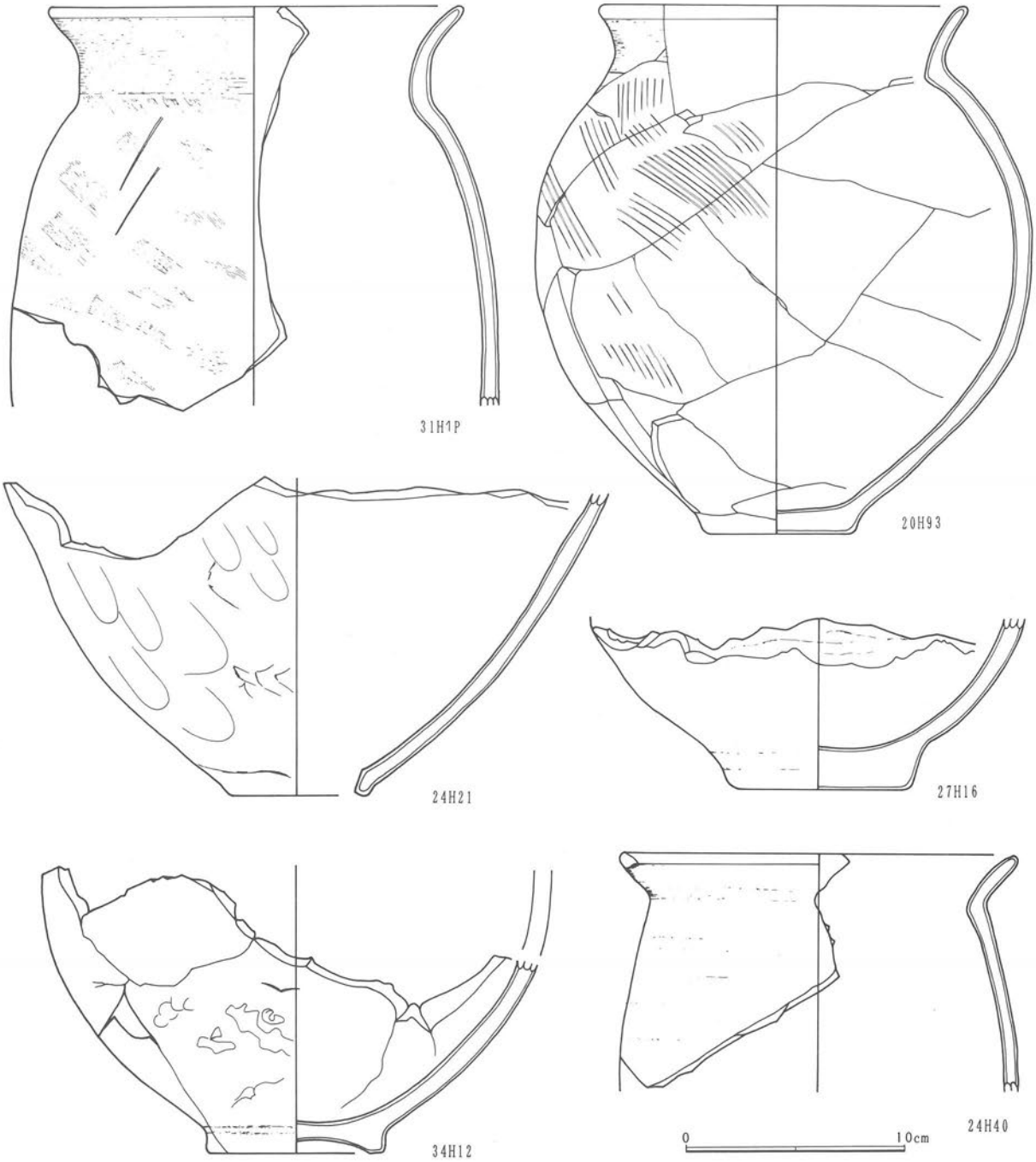
Ⅰ　黒褐色土　黒色土がベースで，ローム粒子・黄褐色粘土小ブロック・炭化物小片を混入する。

Ⅱ　暗赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロックが主体で，赤変したロームブロック・炭化物小片を多量に混入する。

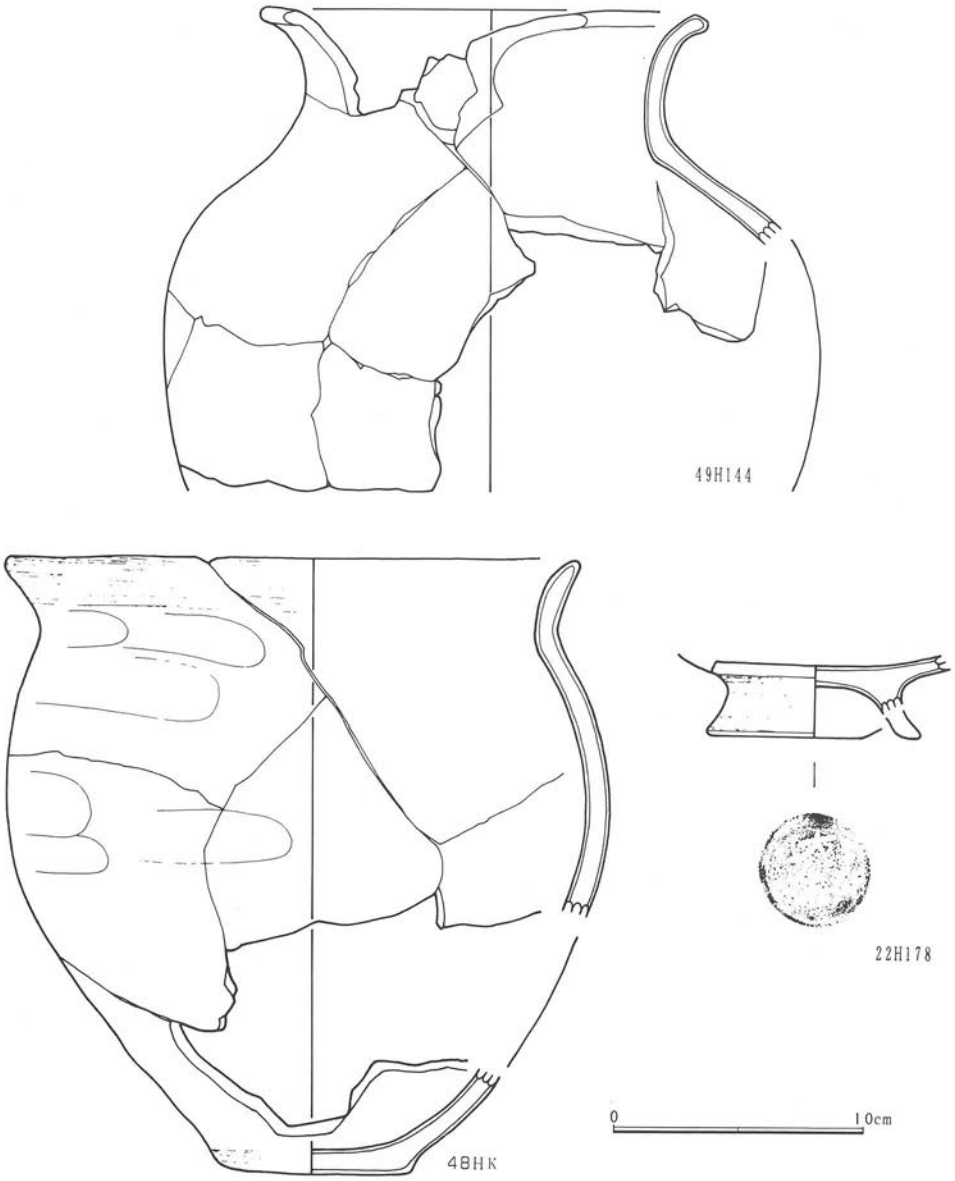
層全体が脆弱で崩れやすい。



第一〇一図　第四〇・四二・四三・四五・四六号住居址出土遺物実測図



第一〇二図　出土遺物実測図（補遺１）第二〇・二四・二七・三一・三四号住居址



第一〇三図　出土遺物実測図（補遺２）
（第二二・四八・四九号住居址）

第六章　竪穴状遺構の調査

本遺跡の竪穴状遺構は，第一調査区26基，第二調査区９基，第三調査区47基，第四Ｂ調査区７基，第五調査区５基の計100基が確認された。

土壙とした方がよいもの，土壙墓と考えられるものも含まれるが，竪穴状として調査を行った。

本章では，遺物の出土した11基について記述し，それ以外は一覧表にまとめることにした。

第四号竪穴状遺構（第一〇四図）

本址は，第一調査区の中央南端部，Ｉ－６～７から確認した。竪穴状遺構の密集区域である。

平面形は不整形を呈するが，本址の本来のプランは楕円形状ではなかったと思われる。

長軸2.87ｍ，短軸1.75ｍで，長軸方向はＮ－28°－Ｅを指向する。

壁は斜めに掘り込まれており，深さは17㎝である。

底面は固く締っているが起状がある。埋没土Ｉは暗褐色土，Ⅱは褐色土，Ⅲは黒褐色土である。

19個の遺物が出土しているが，その出土状態は本来のプランであったろうと思われる楕円形状の範囲内に分布している。遺物はすべて土師器である。

3　土師器高台付坏形土器（第一二四図）脚部欠損。口縁部欠損。坏体部は内弯して立ち上がる。

16　土師器甕形土器（第一二四図）口縁部～胴部下位片。胴部は内弯して立ち上がり，最大径を胴部中位に持つ。口縁部はゆるやかに外反する。

18　土師器甕形土器（第一二四図）口縁部～胴部上位片。胴部は内弯して立ち上がり，頸部のくびれ部に小さな稜を持つ。口縁部は外反する。

19　土師器坏形土器（第一二四図）口縁部一部欠損　丸底。体部は内弯して立ち上がり，口辺部との境に稜を持つ，口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。９世紀初頭ごろの遺構ではないかと考えられる。

第八号竪穴状遺構（第一〇五図）

本址は，第一調査区の中央部南東寄り，Ｊ～Ｋ－６～７から確認した。

平面形は重複しているので不整形であるが，本来のプランは長方形のように思われる。

長軸4.20ｍ，短軸1.65ｍで，長軸方向はＮ－48°－Ｅを指向する。

壁は斜めに掘り込まれており，深さは23㎝である。

底面は固く締っており，おおむね平坦である。南西側に３個のピットが存在する。

埋没土の性状は，Ｉローム粒子を多量に混入する暗褐色土，Ⅱは木根痕である。

出土遺物は３個で，土師器甕形土器の胴部小破片である。

確認面の出土であり，紛れ込んだ可能性も考えられる。本址の時期は不明である。

第三八号竪穴状遺構（第一一〇図）

本址は，第三調査区の北西隅，Ｂ～Ｃ－７から確認した。

東側１ｍに第三五号住居址が存在する。

平面形は楕円形を呈する。

長軸2.47ｍ，短軸1.13ｍで，長軸方向はＮ－45°－Ｅを指向する。

壁は斜めに掘り込まれており，深さは23㎝である。

底面は固く締っており，全体としてては平坦である。

出土遺物は１個で，土師器坏形土器の体部片である。

本址の場合も紛れ込んだ可能性が考えられる。

第五八号竪穴状遺構（第一一四図）

本址は，第三調査区の南西部，Ｇ－３から確認した。南側プランは区域外に埋没している。

平面形は重複していて不整形である。

長軸2.50ｍ，短軸1.30ｍで，長軸方向はＮ－33°－Ｅを指向する。

壁は斜めに掘り込まれており，深さは10cmである。

底面は，硬さはないが平坦である。埋没土は，ロームブロックを多量に含む褐色土である。

出土遺物は１個で，縄文土器片である。深鉢形土器のの口縁部片であろう。後期堀之内式に比定できると思われる。

本址と縄文土器との関係は不明である。

第五九号竪穴状遺構（第一一四図）

本址は，第三調査区の南西部，Ｄ－３～４から確認した。南側プランは区域外に埋没している。

平面形は重複しているため不整形であるが，本来のプランは長方形であることが想定できる。

長軸1.90ｍ，短軸1.35ｍで，長軸方向はＮ－50°－Ｅを指向する。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており，深さは45cmである。

底面は，硬く締っており，平坦である。埋没土は，ロームブロックを多量に混入する撹乱状褐色土である。

出土遺物は13個で，土師器９個と内耳土器４個である。

土師器の９個は坏形土器片と甕形土器片であるが，内耳土器は２例の接合資料となった。

接合資料Ｉ　９・10（第一二四図）内耳土器　底部欠損　体部約40％欠損

体部はわずかに内弯しながら立ち上がる。口辺部との境にくびれを作り，外傾して口縁部にいたる。

体部外面には煤が付着している。耳数不明。

接合資料２　11・12（一二四図）内耳土器　底部欠損　体部約40％欠損

体部はゆるやかに内弯しながら立ち上がり，口辺部との境にはっきりしたくびれを作り，外傾して口縁部にいたる。体部外面には煤が付着している。耳数不明。

出土遺物と埋没土の性状から，中世以降の遺構のように思われる。

第七〇号竪穴状遺構（第一一七図）

本址は，第三調査区の北東部，Ｈ'－５～６から確認した。南側1.5ｍに第四一号住居址が存在する。

平面形は不整形である。

長軸2.70ｍ，短軸2.50ｍで，長軸方向はＮ－20°－Ｅを指向する。

掘り込みは，南側は斜めに，北側は外側へ膨らむ袋状の掘り込みで，深さは103cmである。

底面は硬く締っており，おおむね平坦である。

埋没土の性状は，Ｉローム粒子を混入する暗褐色土，Ⅱローム粒子とロームブロックを多量に混入する黄褐色土，ⅢはⅡ層よりやや黒色土の多い褐色土である。

出土遺物は13個で，すべて内耳土器片であるが，接合はできなかった。
本址は中世以降の遺構であろう。

第九六・九七・九八号竪穴状遺構（第一二一図）

本址は，第五調査区の中央部北側，H～K－6から確認した。南側1mに第五〇号住居址が存在する。

3基が重複しており，全体の平面形は複雑な不整形を呈しているが，深さが同じであることと，3基から出土した遺物に通し番号を付した関係で，3基同時に記述することにした。

想定し得る境界線を引いた各遺構の長軸は第九六号5.00m，第九七号3.70m，第九八号8.00m。短軸3.60m，3.00m，4.36mとなる。長軸方向はN－0°，N－0°，N－5°－Eを指向する。

壁は斜めに掘り込まれており，深さは22～32cmである。

底面は，3基全体で東西方向に11.4mあるが，多少の起状はあるもののおおむね平坦である。

埋没土の性状は，Ⅰ黒褐色土，Ⅱローム・ベースの褐色土，Ⅲは黄色砂質土の多い明褐色土である。

出土遺物は全体で24個で，縄文土器片7個，土師器片17個である。

遺構別に区分すると第九六号13個，第九七号9個，第九八号2個となる。

縄文土器片7個はすべて第九六号からの出土で，後期堀之内式に比定できると思われる。

3基の時期は不明である。

第九九号竪穴状遺構（第一二二図）

本址は，第五調査区の中央部南側，H～I－2から確認した。

平面形は不整形である。

長軸3.75m，短軸3.50m，長軸方向はN－80°－Wを指向する。

壁は斜めに掘り込まれており，深さは22cmである。

底面は硬く締っており，平坦である。底面には3個のピットが存在する。

埋没土の性状は，Ⅰ黒色土とローム粒子の混合土で暗褐色土，Ⅱ褐色土，Ⅲ明褐色土である。

北側の壁際と東側に，厚さ10cmの焼土層が存在する。

出土遺物は，土師器片15個，炭化材1個の計16個である。

土師器片には内黒土器など国分式の土器がみられるので，9世紀末葉ごろの遺構と考えられる。

第一〇〇号竪穴状遺構（第一二三図）

本址は，第五調査区の中央部南側，J～K－2から確認した。北東2mに第五一号住居址が存在する。

平面形は不整形を呈する。

長軸6.40m，短軸5.53m，長軸方向はN－90°－Wを指向する。

壁は斜めに掘り込まれており，深さは36cmである。

底面は硬く締っており，おおむね平坦である。

埋没土の性状は，黒色土にローム粒子を混入する黒褐色土の単一層である。

出土遺物は12個で，内訳は縄文土器片3個，土師器片9個となる。

縄文土器は後期堀之内式，土師器は国分期に比定できそうである。

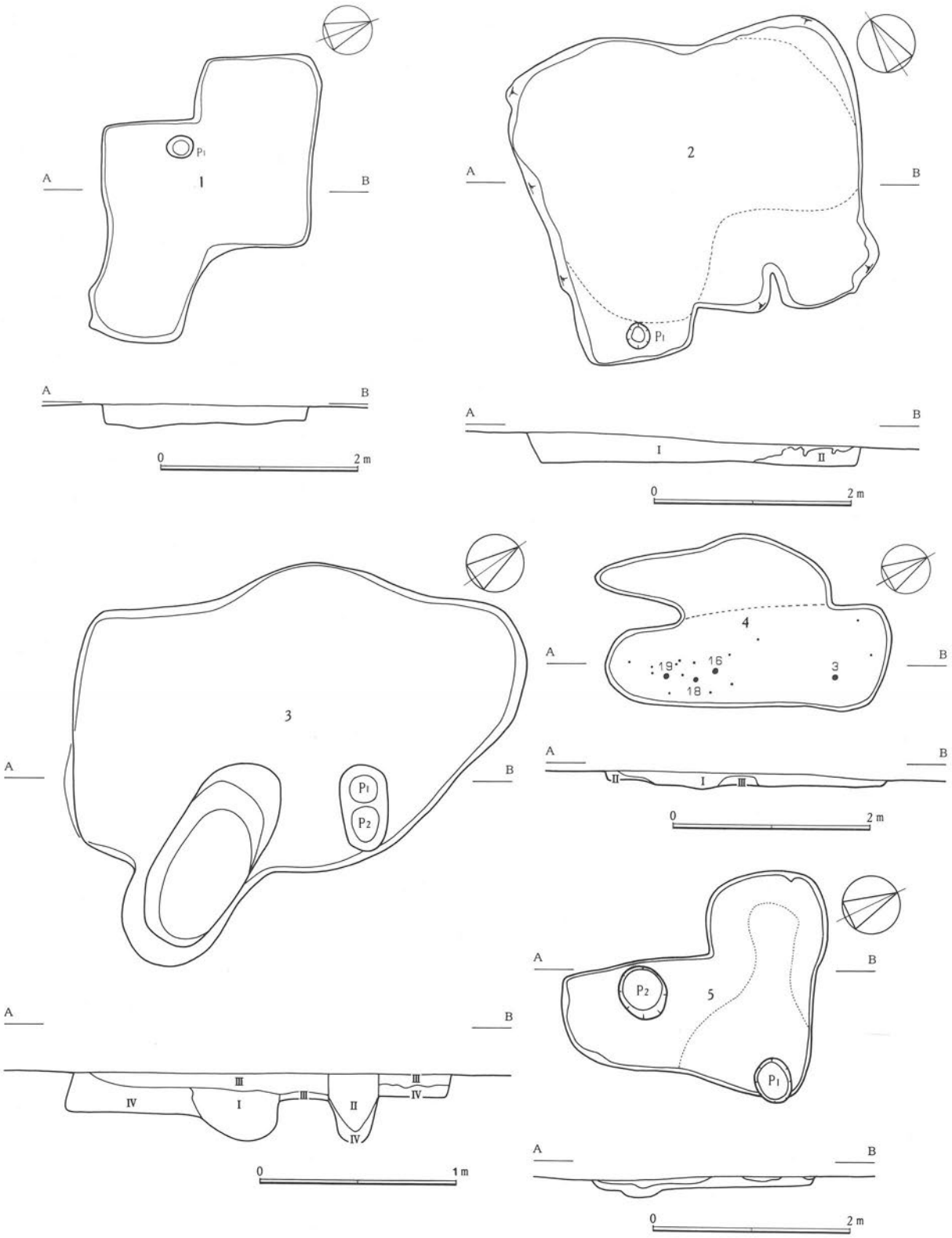
本址の時期は不明である。

表9　　竪穴状遺構一覧表

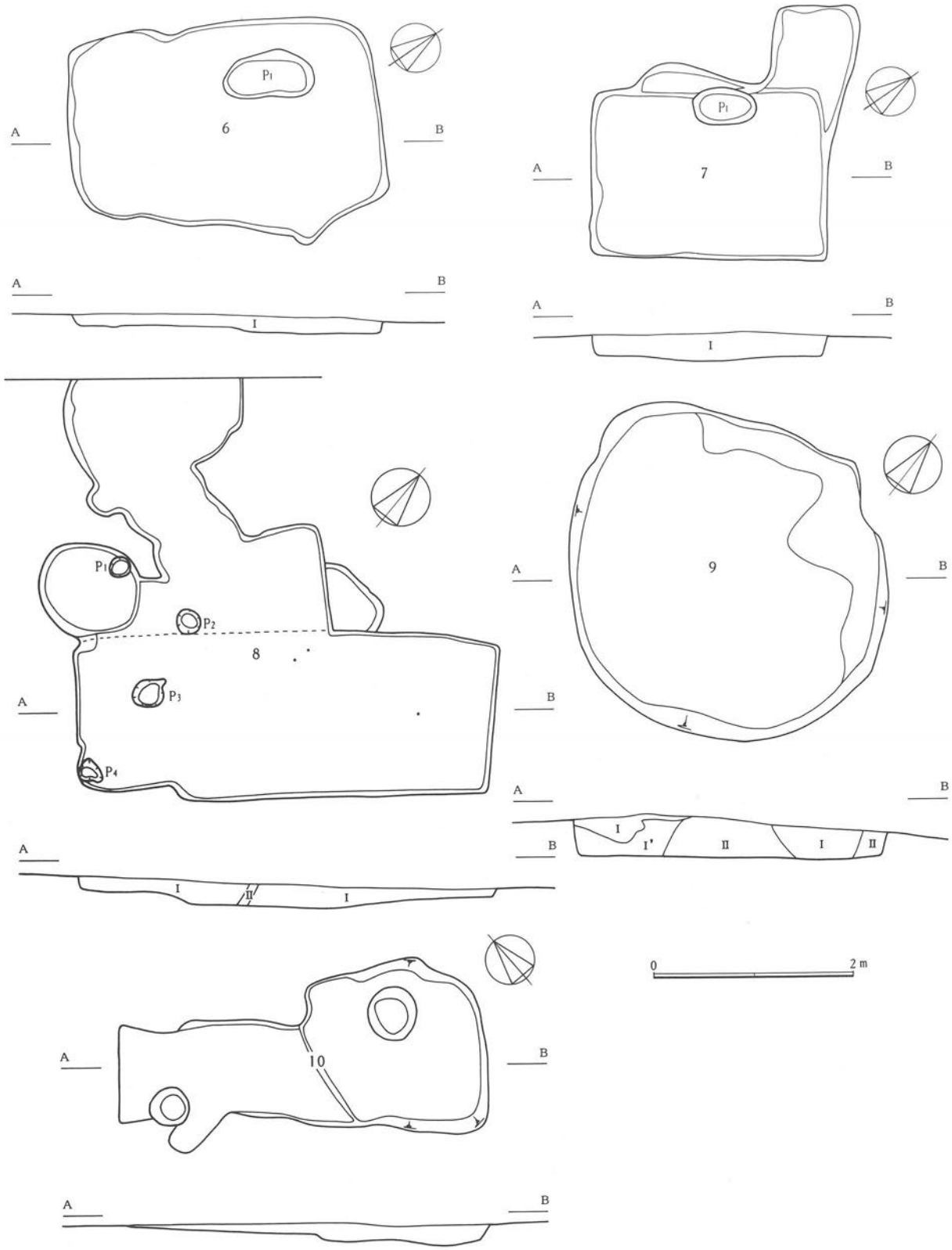
番号	調査区	位置	長軸方向	平面形	規模		底面	備考
					長軸×短軸(m)	深さ(cm)		
一	第一	H-7～8	N-68°-W	長方形	1.95×1.20	24	平坦	ピット1
二	第一	H～I-7	N-0°	不整方形	3.30×2.75	30	平坦	ピット1
三	第一	H～I-7～8	N-9°-E	不整形	2.45×1.50	20	凹凸	ピット3
四	第一	I-6～7	N-28°-E	不整形	2.87×1.75	17	起状	土師器19
五	第一	I～J-7～8	N-21°-E	不整形	1.35×1.05	12	平坦	ピット2
六	第一	I～J-6～7	N-32°-E	不整長方形	3.15×2.05	16	平坦	ピット1
七	第一	J-6～7	N-32°-E	長方形	2.40×1.68	28	平坦	ピット1
八	第一	J～K-6～7	N-48°-E	不整長方形	4.20×1.65	23	平坦	土師器3・ピット4
九	第一	K～L-6～7	N-63°-W	不整円形	3.70×3.35	40	平坦	
一〇	第一	J-6	N-128°-E	不整長方形	3.73×1.65	20	平坦	ピット2
一一	第一	I～J-5～6	N-53°-W	不整形	5.13×1.55	43	平坦	
一二	第一	J～K-5～6	N-43°-E	不整長方形	2.83×1.37	80	舟底状	ピット3
一三	第一	K-5～6	N-46°-W	不整方形	2.00×1.90	25	舟底状	
一四	第一	K～L-6	N-35°-E	不整長方形	2.67×1.60	25	傾斜	ピット2
一五	第一	J～K-4～5	N-105°-E	不整長方形	1.80×1.00	12	平坦	
一六	第一	L-6	N-27°-E	楕円形	4.20×2.30	63	平坦	ピット1
一七	第一	K～L-7～8	N-47°-E	不整円形	3.35×2.73	93	舟底状	ピット1
一八	第一	P-10	N-90°-W	楕円形	2.15×1.00	43	舟底状	
一九	第一	O～P-11～12	N-0°	隅丸方形	2.25×1.65	50	傾斜	ピット1
二〇	第一	O-11～12	N-49°-W	不整円形	2.57×1.44	13	平坦	ピット1
二一	第一	N-11	N-35°-E	隅丸方形	1.93×1.48	15	平坦	
二二	第一	M～N-11～12	N-32°-E	長方形	2.15×1.30	25	平坦	
二三	第一	J～K-13～14	N-30°-E	隅丸長方形	2.00×1.38	15	平坦	
二四	第一	I～J-14	N-50°-W	隅丸長方形	2.50×1.63	15	平坦	
二五	第一	Q-7	N-0°	不整形	1.45×1.05	7	平坦	
二六	第一	Q-6～7	N-53°-E	不整長方形	2.53×2.10	16	平坦	ピット2
二七	第二	C～D-14～15	N-67°-W	不整長方形	2.65×2.20	15	平坦	
二八	第二	C～D-11	N-20°-E	不整楕円形	2.80×1.80	23	平坦	
二九	第二	G～H-10～11	N-60°-W	不整楕円形	2.80×1.07	16	舟底状	ピット1
三〇	第二	I～J-10～11	N-30°-E	隅丸長方形	2.25×1.17	23	平坦	
三一	第二	J-8～9	N-32°-E	長方形	1.62×1.05	18	舟底状	
三二	第二	J～K-8～9	N-30°-E	隅丸長方形	1.88×1.39	18	平坦	
三三	第二	K～L-10	N-28°-W	隅丸方形	3.13×1.60	32	舟底状	
三四	第二	A'-8～9	N-18°-E	隅丸方形	1.64×0.98	14	平坦	
三五	第二	E'-3～4	N-52°-W	不整楕円形	3.55×1.05	14	凹凸	

番号	調査区	位置	長軸方向	平面形	規模		底面	備考
					長軸×短軸(m)	深さ(cm)		
三六	第三	A～B-7	N-15°-E	不整形	3.06×2.05	33	傾斜	
三七	第三	B-7	N-65°-E	不整形	2.70×2.25	18	平坦	
三八	第三	B～C-7	N-45°-E	楕円形	2.47×1.13	23	平坦	
三九	第三	A～B-4～5	N-42°-W	不整長方形	4.30×1.80	60	平坦	
四〇	第三	B～C-4～5	N-45°-E	隅丸長方形	2.70×1.85	63	平坦	ピット2
四一	第三	C～D-5	N-51°-W	長方形	3.42×1.50	30	平坦	ピット1
四二	第三	B-4	N-53°-W	不整長方形	3.10×2.10	53	平坦	ピット5
四三	第三	D-4	N-52°-W	長方形	1.70×1.13	40	平坦	
四四	第三	E-5	N-37°-W	不整長方形	2.00×1.45	55	平坦	ピット3　重複
四五	第三	E～F-5～6	N-52°-E	不整形	4.27×2.35	8	平坦	
四六	第三	E～F-4～5	N-52°-W	長方形	2.85×1.50	45	平坦	ピット1
四七	第三	E～F-4～5	N-50°-E	不整長方形	3.50×1.00	25	平坦	
四八	第三	F～G-4～5	N-48°-W	長方形	2.25×1.00	26	平坦	
四九	第三	H～I-6	N-10°-W	楕円形	2.13×1.18	14	平坦	ピット1
五〇	第三	I～J-6～7	N-0°	楕円形	6.90×3.65	15	起状	ピット26　重複
五一	第三	H～I-3～4	N-40°-E	不整形	3.00×2.38	25	起状	重複
五二	第三	K～L-6	N-80°-E	不整長方形	1.75×1.45	27	平坦	重複
五三	第三	M-5～6	N-82°-W	隅丸長方形	3.25×2.03	18	平坦	重複
五四	第三	M-4	N-10°-W	長方形	3.28×1.27	31	平坦	ピット1
五五	第三	N-4～5	N-85°-W	長方形	1.95×1.38	25	舟底状	
五六	第三	D'-6	N-	不整形			方形	ピット11　部分確認
五七	第三	G～H-3～4	N-78°-W	楕円形	2.36×1.50	13	平坦	ピット1
五八	第三	G-3	N-33°-E	不整形	2.50×1.30	10	起状	部分確認
五九	第三	D-3～4	N-50°-E		1.90×1.35	45	平坦	部分確認
六〇	第三	E～F-3～4	N-40°-E	不整形	3.45×2.57	38	平坦	ピット1
六一	第三	F-3～4	N-40°-W	隅丸方形	2.45×1.27	30	平坦	
六二	第三	N～A'-2～3	N-10°-W	不整形	3.35×2.80	30	平坦	
六三	第三	J-6～7	N-34°-W	隅丸長方形	1.37×0.80	20	平坦	ピット1
六四	第三	J～K-6～7	N-9°-E	不整形	2.00×1.60	82	舟底状	部分確認
六五	第三	F'-5	N-60°-E	不整形	3.75×2.70	130	傾斜	
六六	第三	F'～G'-5～6	N-75°-W	楕円形	3.65×2.83	67	舟底状	ピット2
六七	第三	F'-3～4	N-68°-E	不整形	2.97×2.30	107		
六八	第三	E'～F'-2～3	N-80°-W	楕円形	2.36×1.50	17	舟底状	
六九	第三	G'～H'-4	N-77°-E	不整長方形	2.35×2.12	10	平坦	ピット4
七〇	第三	H'-5～6	N-20°-E	不整形	2.70×2.50	103	起状	
七一	第三	H'～I'-3～4	N-13°-W	不整形	2.15×1.57	65	平坦	

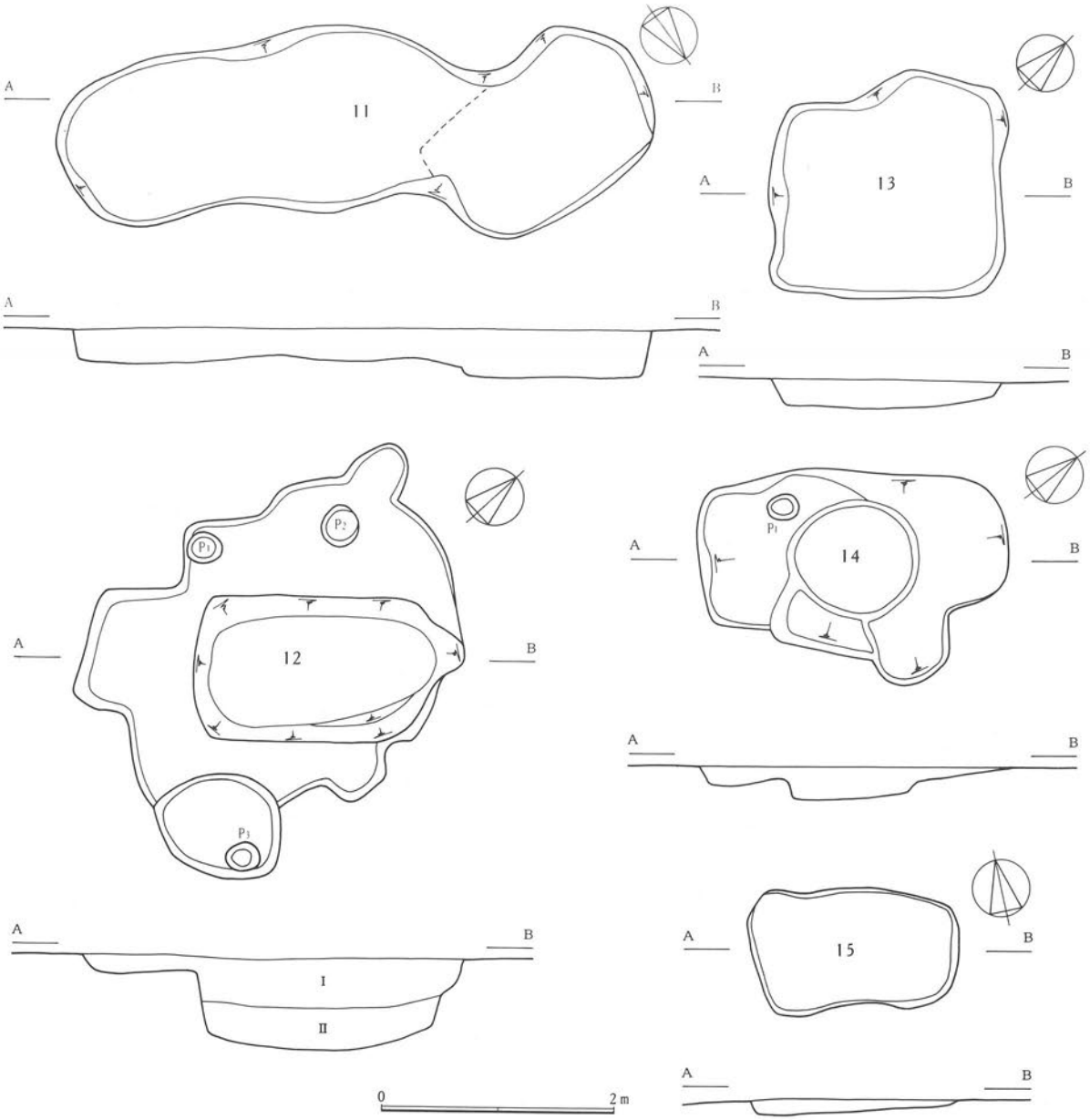
番　号	調査区	位　　置	長軸方向	平面形	規　　模		底　面	備　　考
					長軸×短軸(m)	深さ(cm)		
七二	第　三	I'-4	N-80°-W	不整楕円形	×1.15	33	平　坦	
七三	第　三	H'～I'-2～3	N-90°-W	不　整　形	2.10×1.00	27	凹　凸	重複
七四	第　三	I'-3	N-90°-E	不　整　形	2.80×1.77	20	起　状	ピット2
七五	第　三	I'～J'-3～4	N-80°-W	不　整　形	1.85×1.65	65	平　坦	ピット2
七六	第　三	I'～J'-4	N-20°-W	不　整　形	1.68×1.05	14	起　状	ピット3
七七	第　三	I'～J'-5～6	N-65°-W	不　整　形	4.55×2.35	25	平　坦	重複
七八	第　三	J'～K'-5～6	N-10°-W	不　整　形	2.70×1.30	18	舟底状	ピット1
七九	第　三	J'～K'-3～4	N-70°-W	長　方　形	1.55×0.95	21	平　坦	ピット3
八〇	第　三	J'～K'-3～4	N-71°-W	不　整　形	1.80×1.25	17	舟底状	ピット10
八一	第　三	K'～L'-2～3	N-77°-W	不　整　形	1.43×0.90	13	平　坦	ピット1
八二	第　三	K'～L'-4	N-83°-W	不　整　形	2.85×2.40	75	舟底状	
八三	第四A	A～B-3						第8号墓壙
八四	第四A	B-3						第9号墓壙
八五	第四A	B-1～2	N-0°	楕　円　形	1.47×0.89	27	平　坦	
八六	第四A	C～D-4～5						第12号墓壙
八七	第四A	F～G-3～4	N-78°-E	長　方　形	1.92×0.99	25	平　坦	
八八	第四A	I-2	N-72°-E	楕　円　形	2.90×2.00	10	平　坦	
八九	第四B	C'-3						第11号墓壙
九〇	第四B	E'-4～5	N-70°-W	不　整　形	3.66×2.20	16	傾　斜	ピット1
九一	第四B	F'-4～5	N-54°-W	不　整　形	3.83×2.00	20	平　坦	ピット2
九二	第四B	F'～G'-2～3	N-30°-E	長　方　形	1.63×0.85	20	平　坦	
九三	第四B	G'～H'-1～2	N-0°	不整楕円形	2.80×1.88	45	平　坦	
九四	第四B	I'～J'-4	N-10°-E	不　整　形	5.40×3.80	135	舟底状	重複
九五	第四B	G'～H'-4～5	N-90°-E	不　整　形	4.15×1.95	50	凹　凸	ピット2　焼土2
九六	第　五	I-6	N-0°	不　整　形	5.00×3.60	32	平　坦	重複　土器13
九七	第　五	I～J-6	N-0°	不　整　形	3.70×3.00	30	平　坦	重複　土器9
九八	第　五	J～K-5～6	N-5°-E	不整長方形	8.00×4.36	22	傾　斜	重複　土器2
九九	第　五	H～I-2	N-80°-W	不整円形	3.75×3.50	22	凹　凸	ピット3　土器15
一〇〇	第　五	J～K-2	N-90°-W	不　整　形	6.40×5.53	36	平　坦	土器12



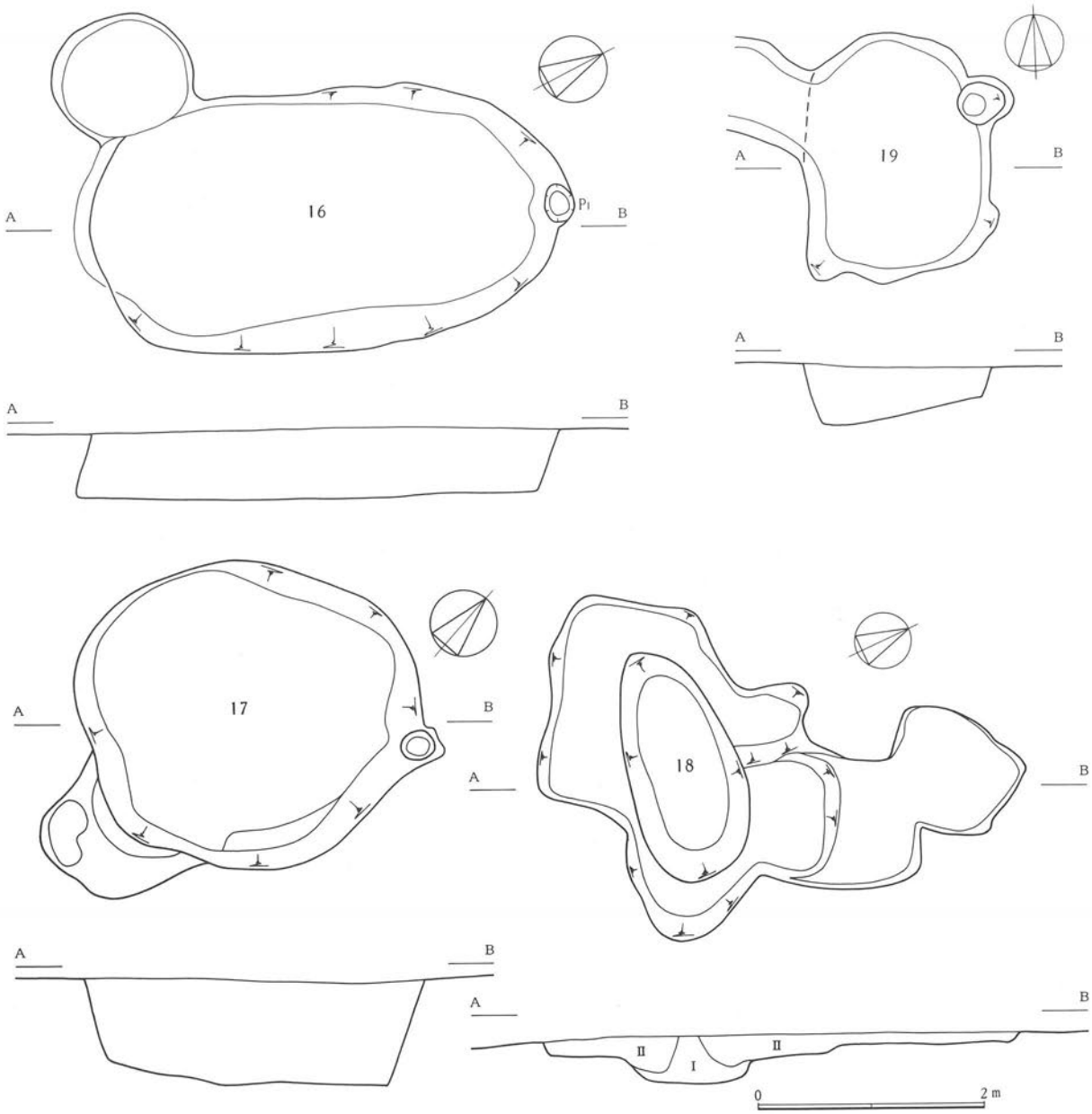
第一〇四図　第一・二・三・四・五号竪穴状遺構実測図



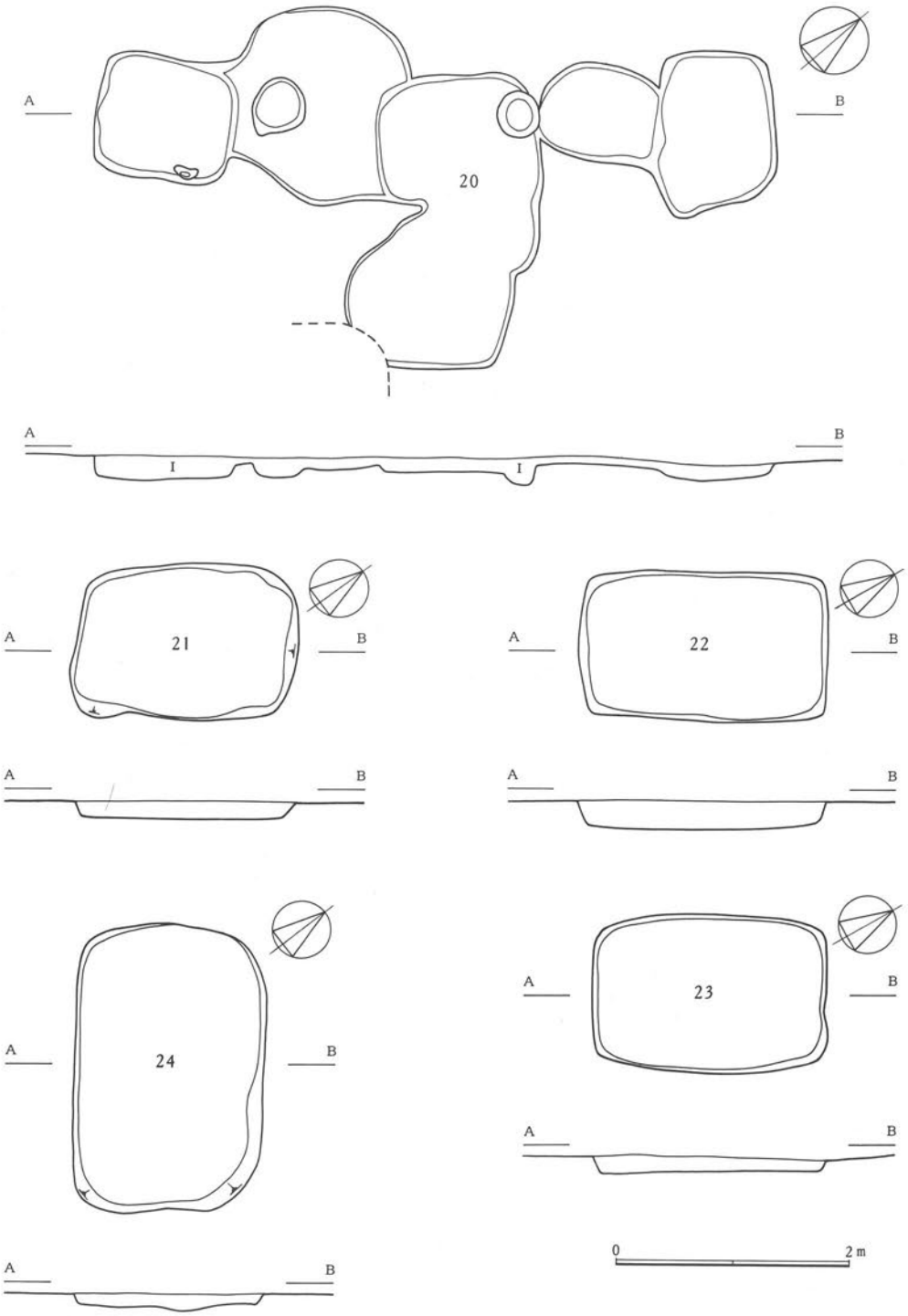
第一〇五図　第六・七・八・九・一〇号竪穴状遺構実測図



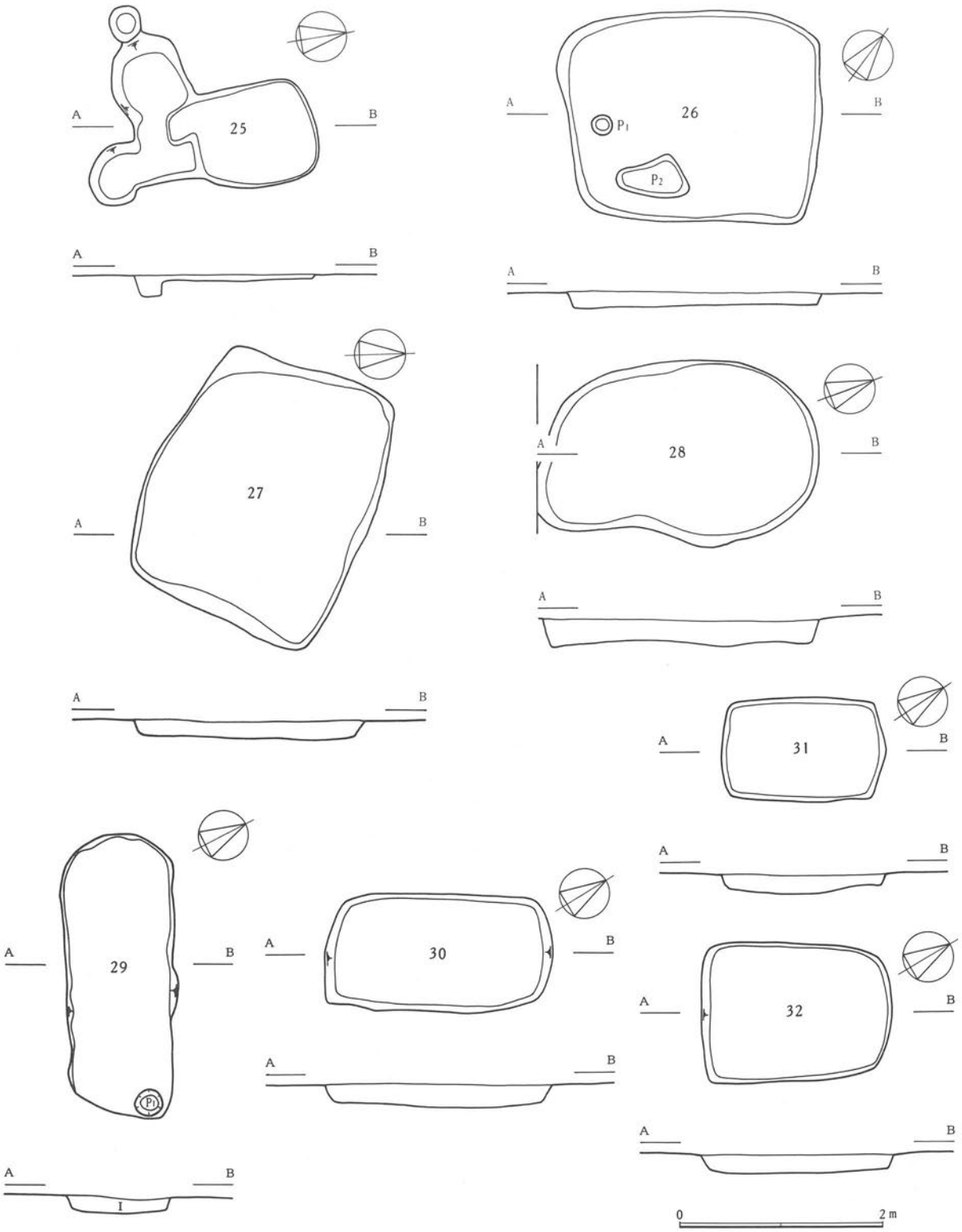
第一〇六図　第一一・一二・一三・一四・一五号竪穴状遺構実測図



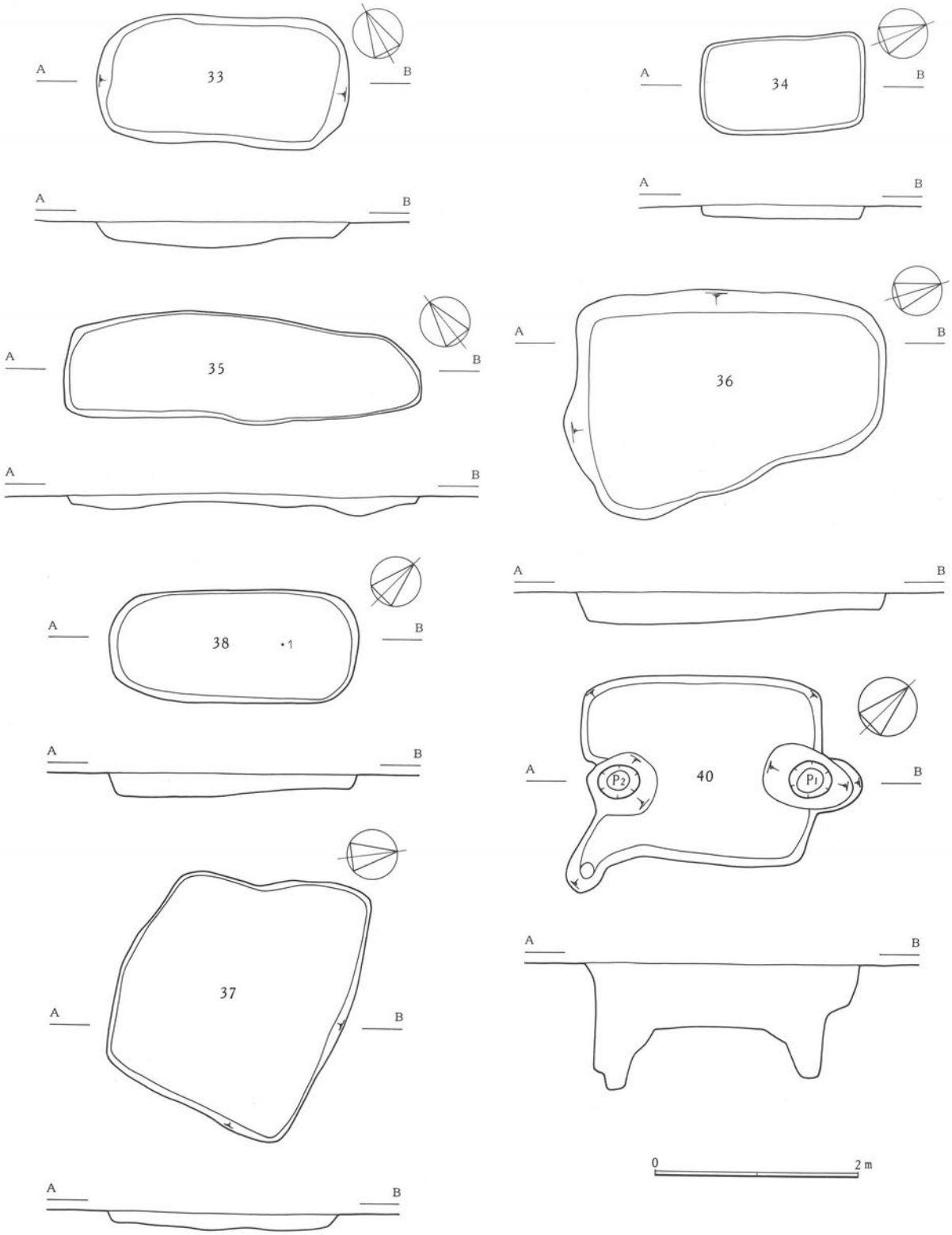
第一〇七図　第一六・一七・一八・一九号竪穴状遺構実測図



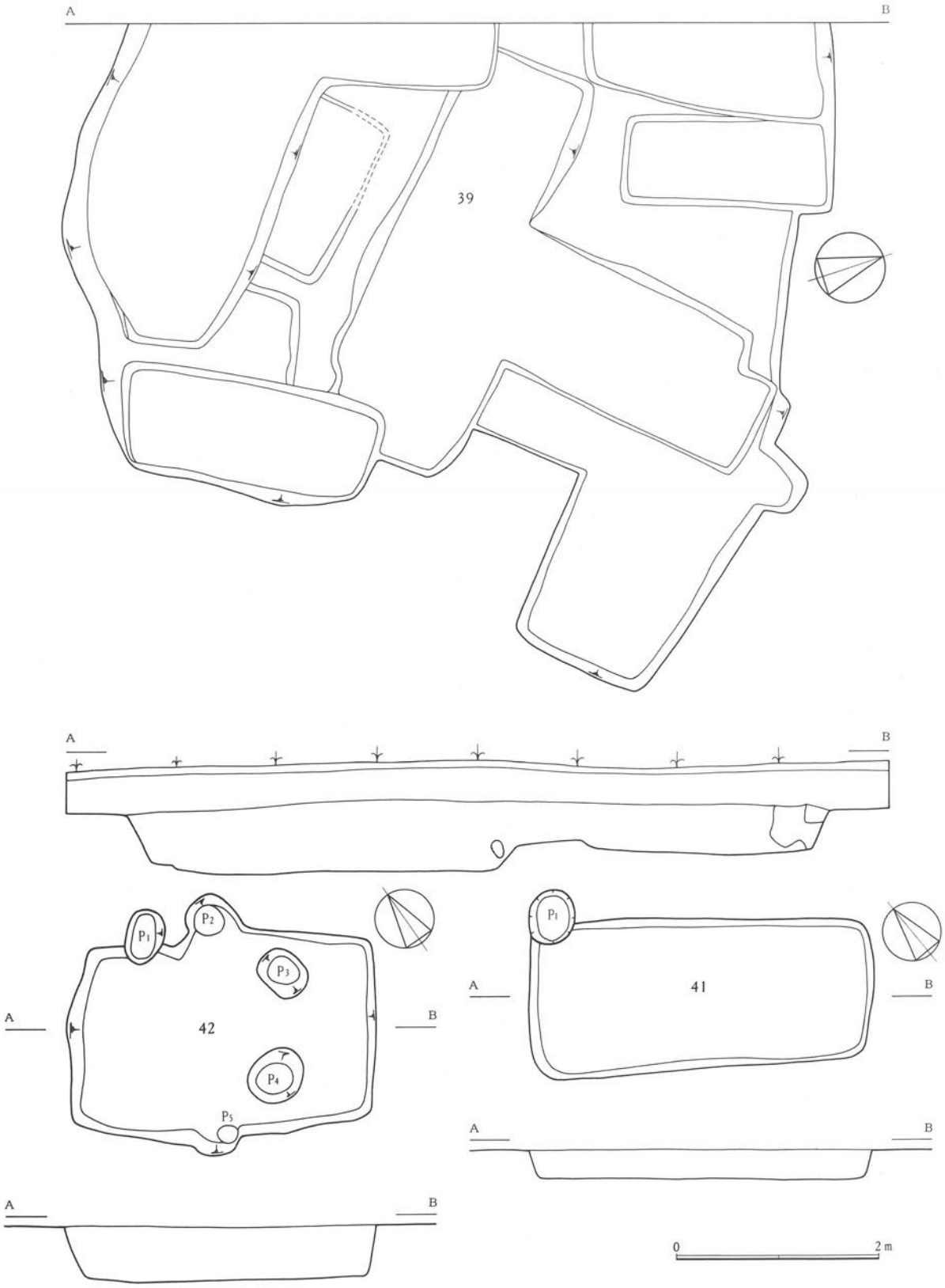
第一〇八図　第二〇・二一・二二・二三・二四号竪穴状遺構実測図



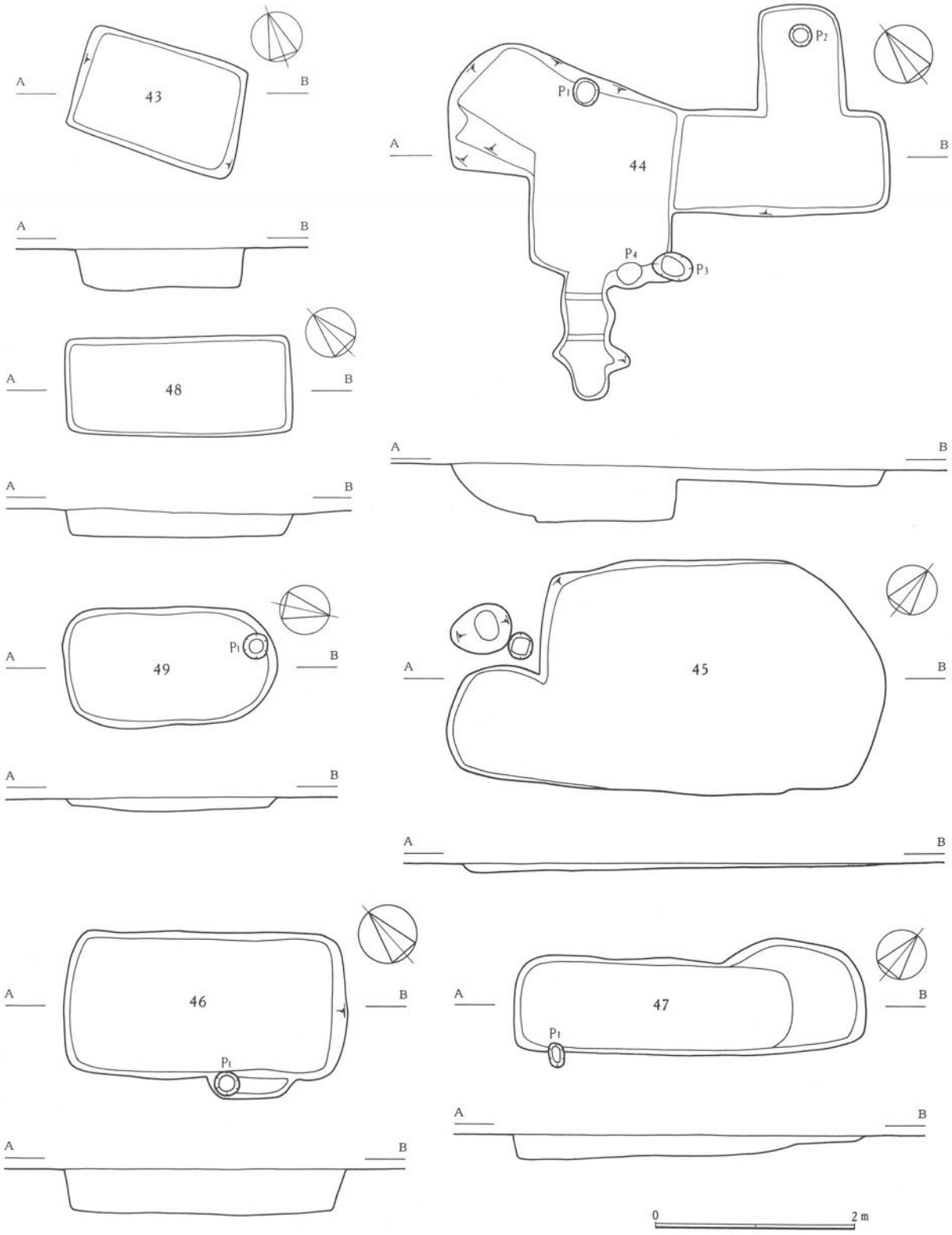
第一〇九図　第二五・二六・二七・二八・二九・三〇・三一・三二号竪穴状遺構実測図



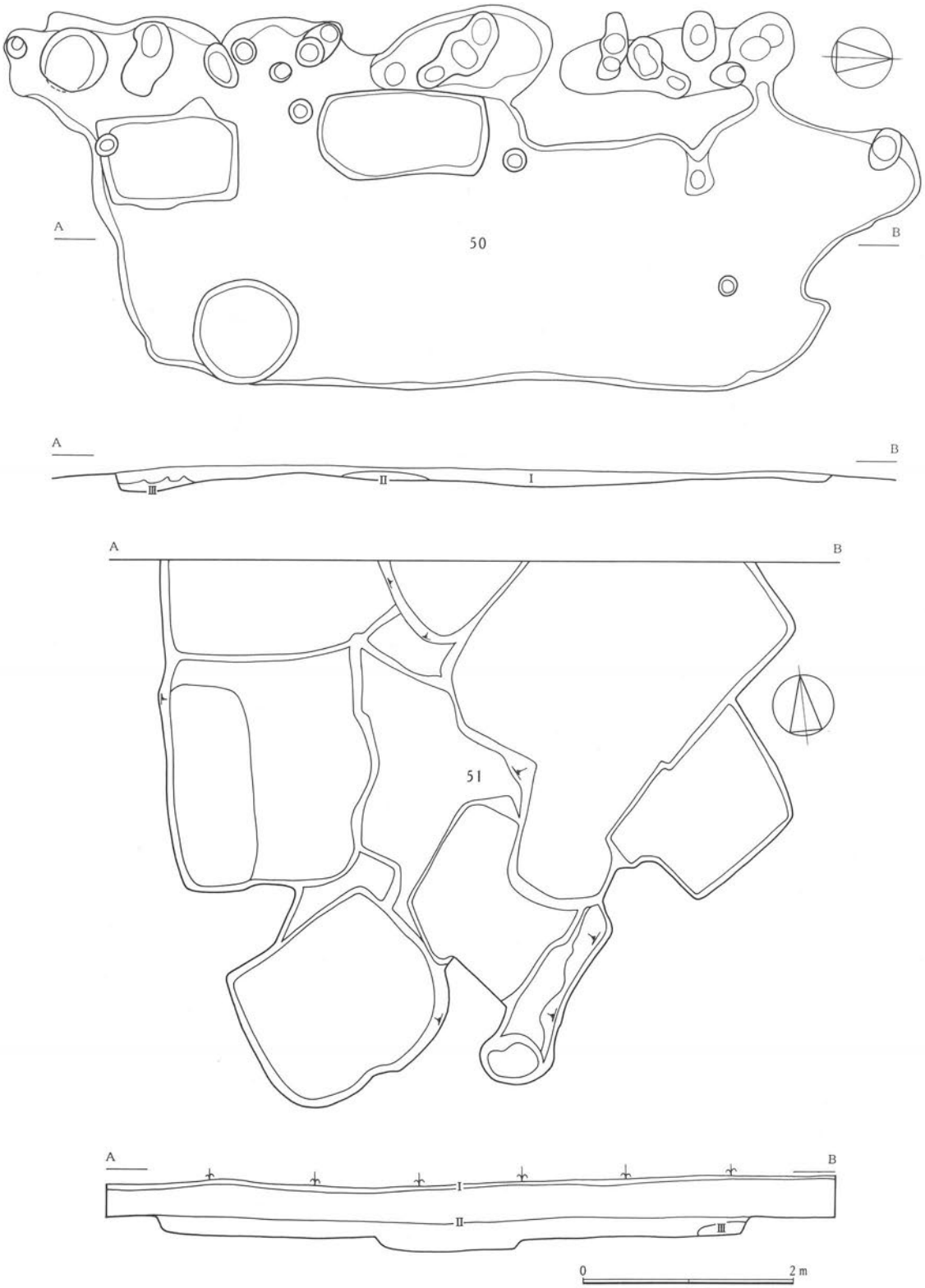
第一一〇図　第三三・三四・三五・三六・三七・三八・三九・四〇号竪穴状遺構実測図



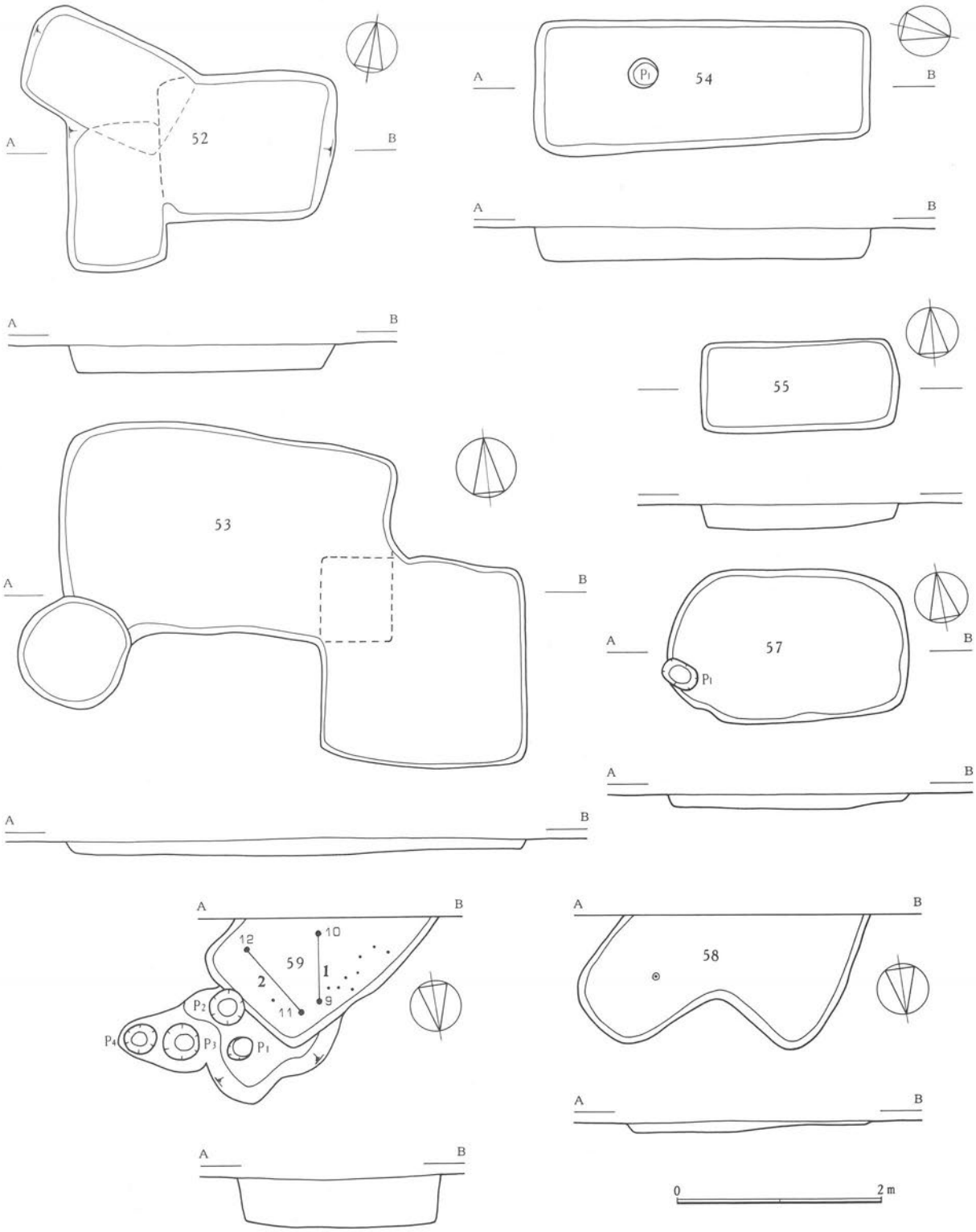
第一一一図　第三九・四一・四二号竪穴状遺構実測図



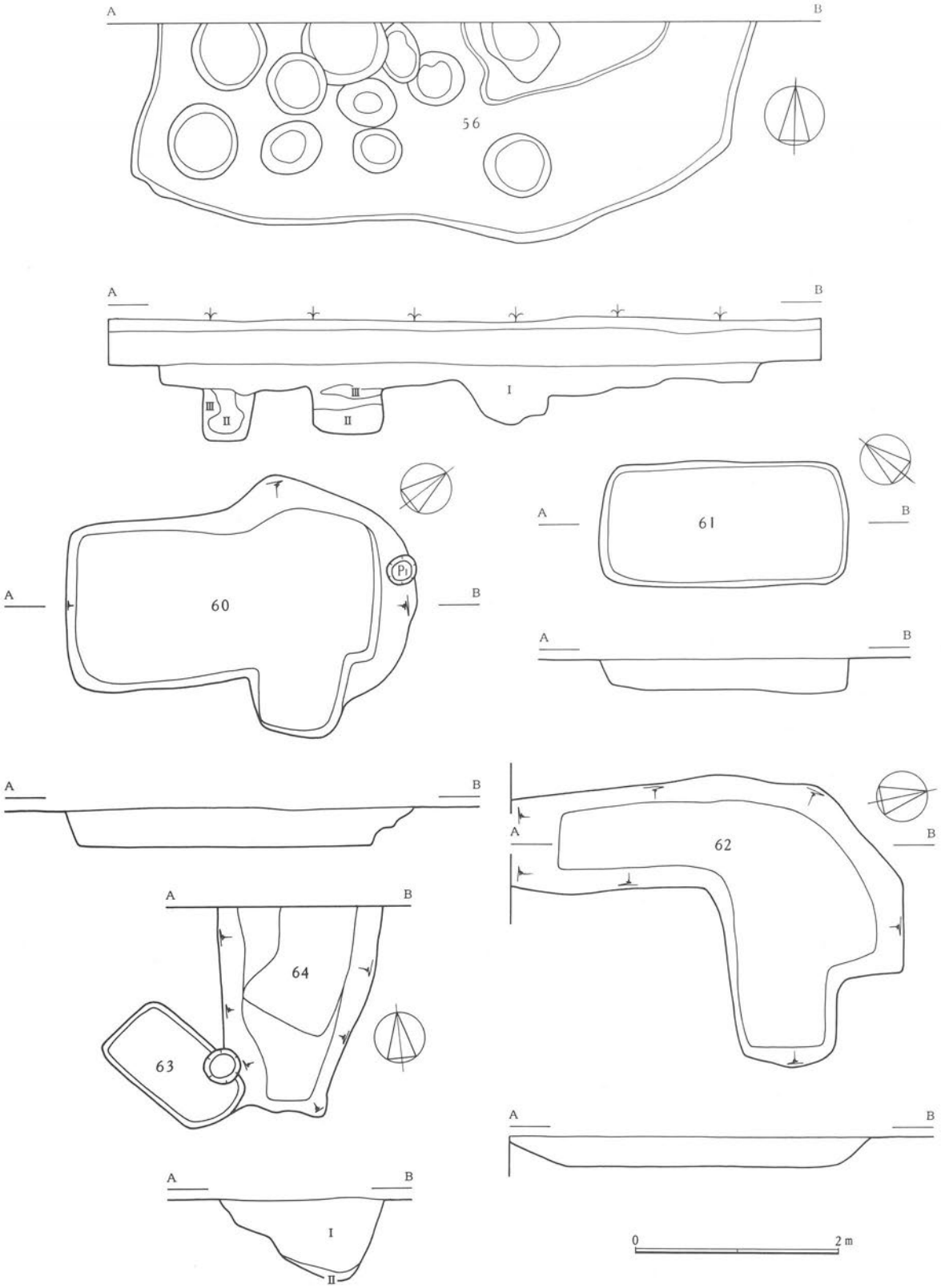
第一一二図　第四三・四四・四五・四六・四七・四八・四九号竪穴状遺構実測図



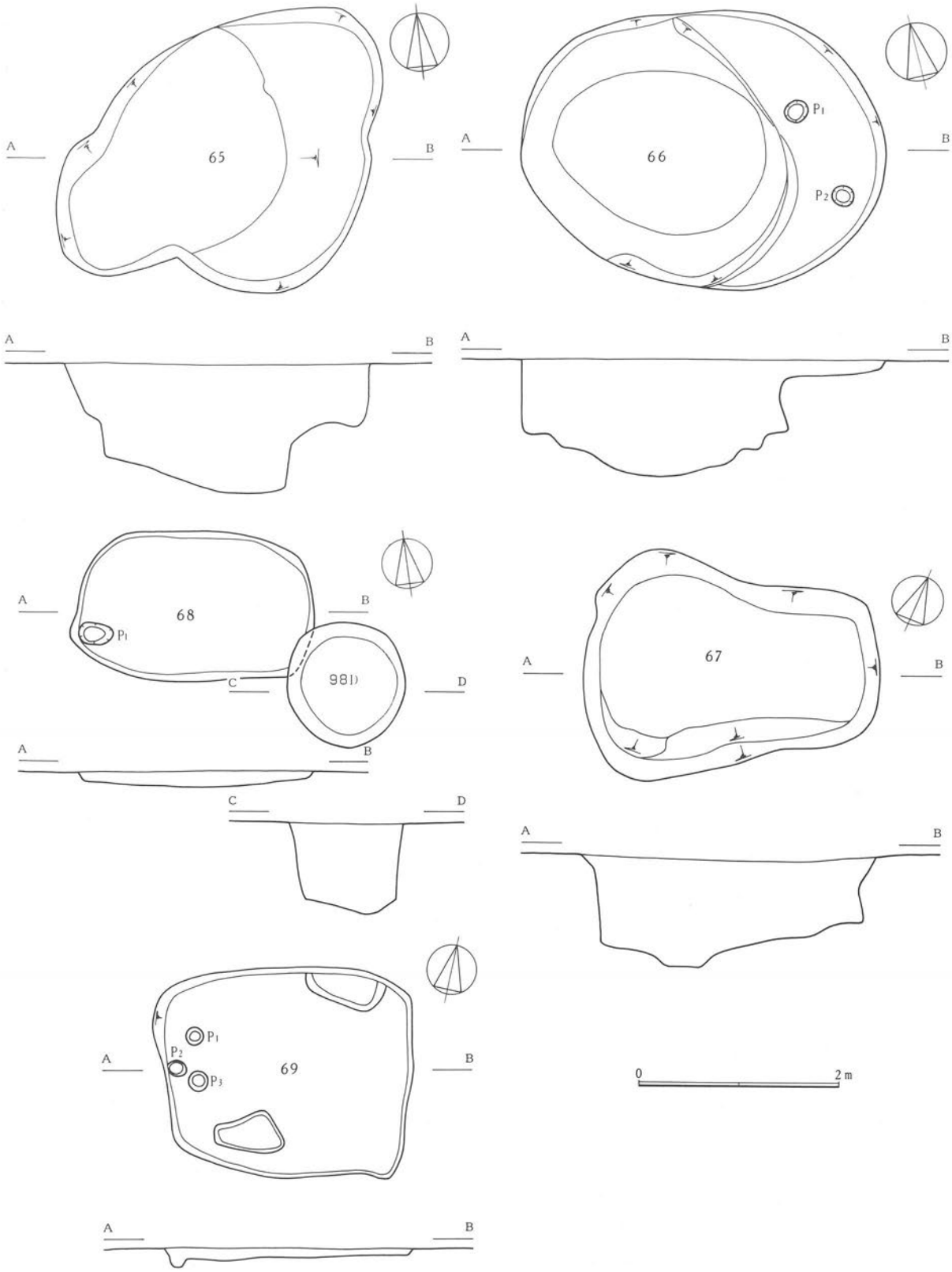
第一一三図　第五〇・五一号竪穴状遺構実測図



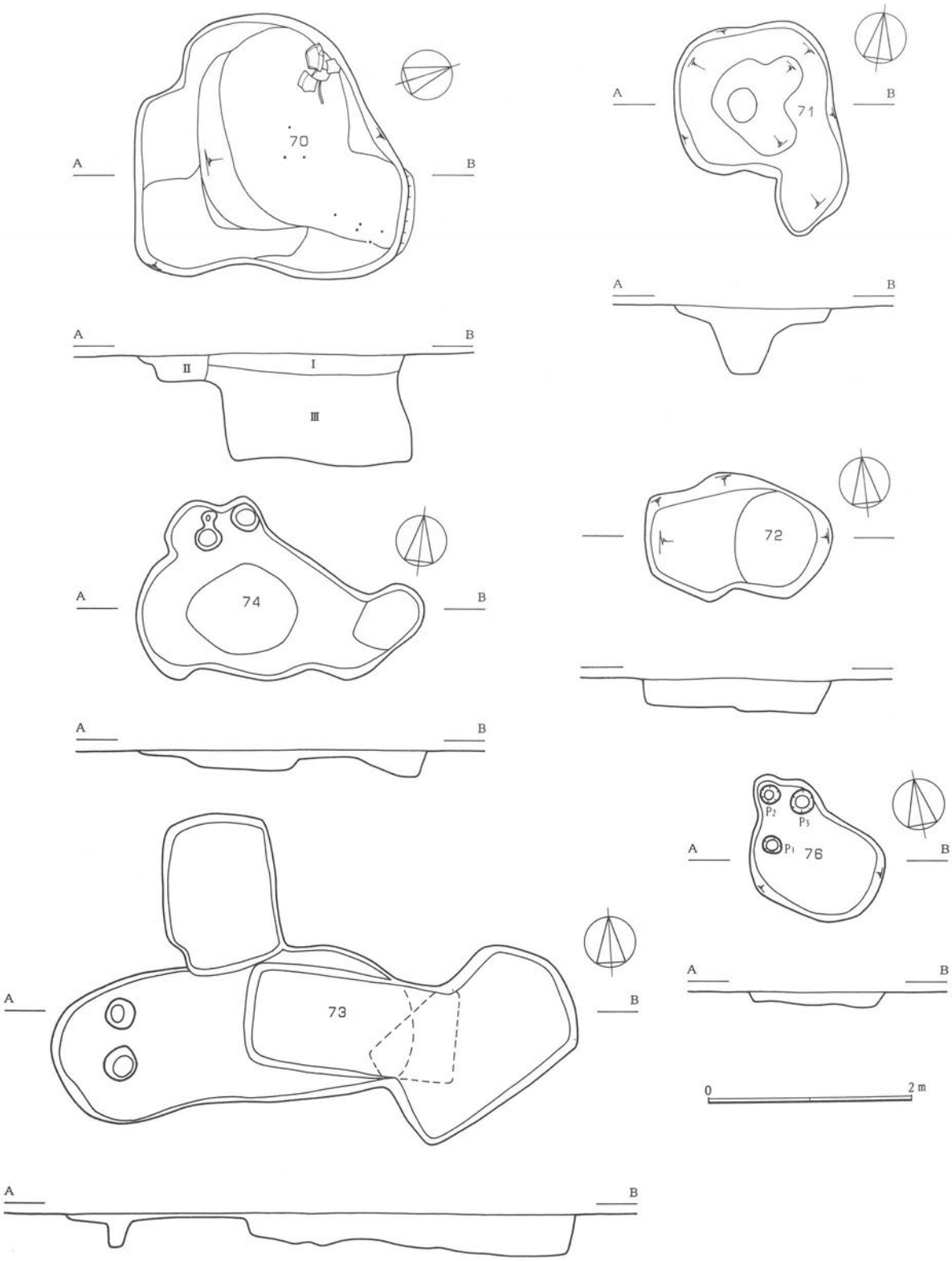
第一一四図　第五二・五三・五四・五五・五七・五八・五九号竪穴状遺構実測図



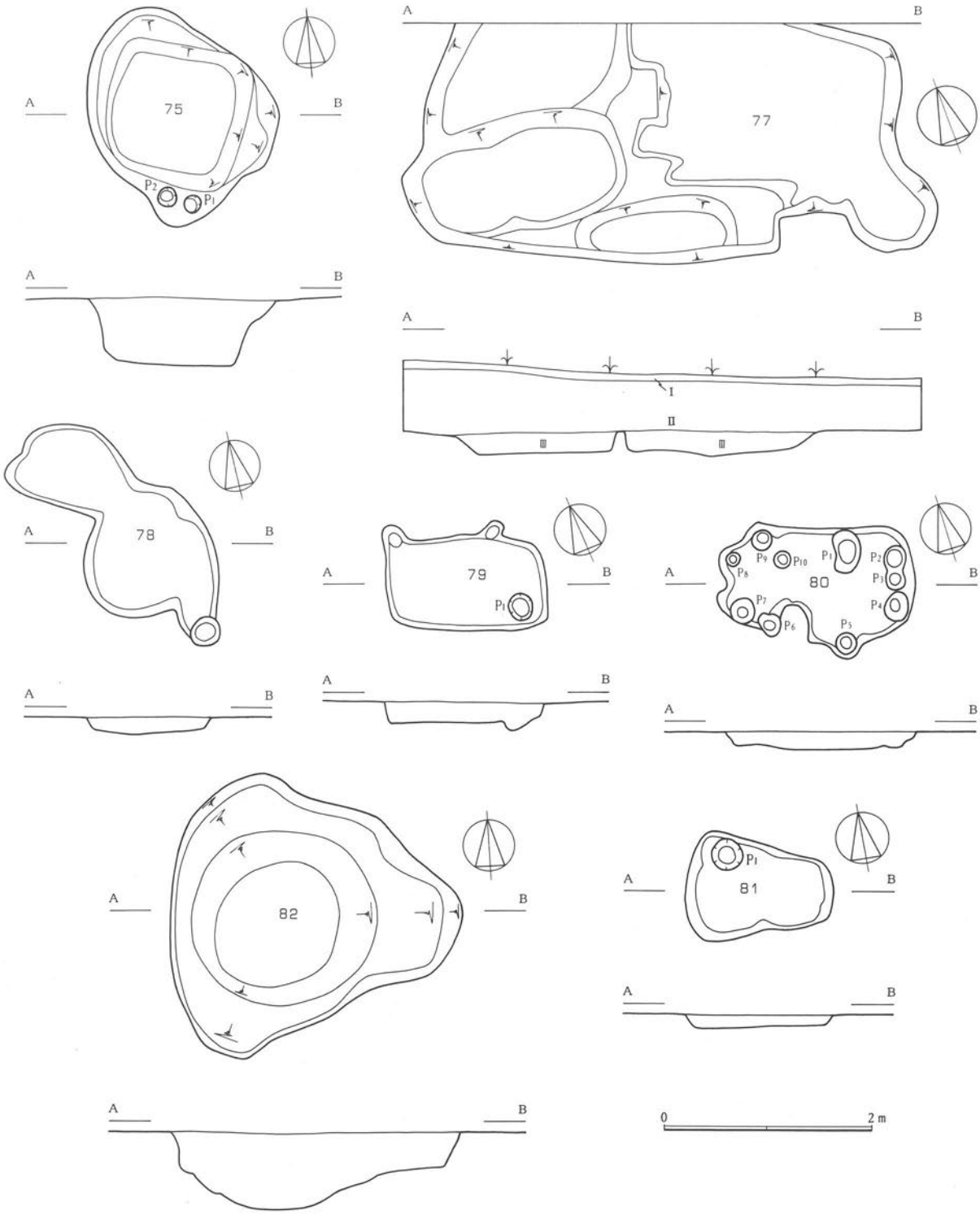
第一一五図　第五六・六〇・六一・六二・六三・六四号竪穴状遺構実測図



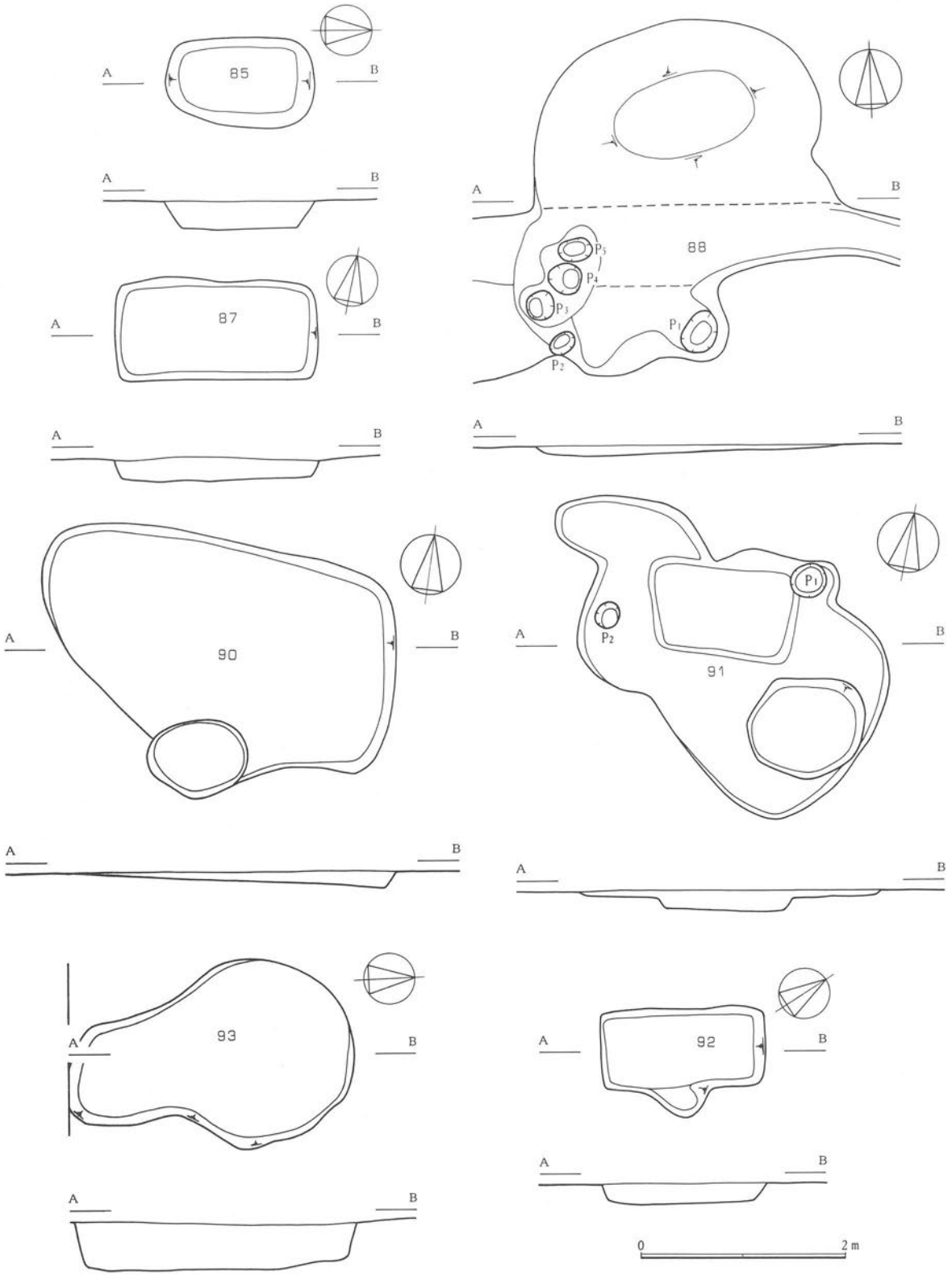
第一一六図　第六五・六六・六七・六八・六九号竪穴状遺構実測図



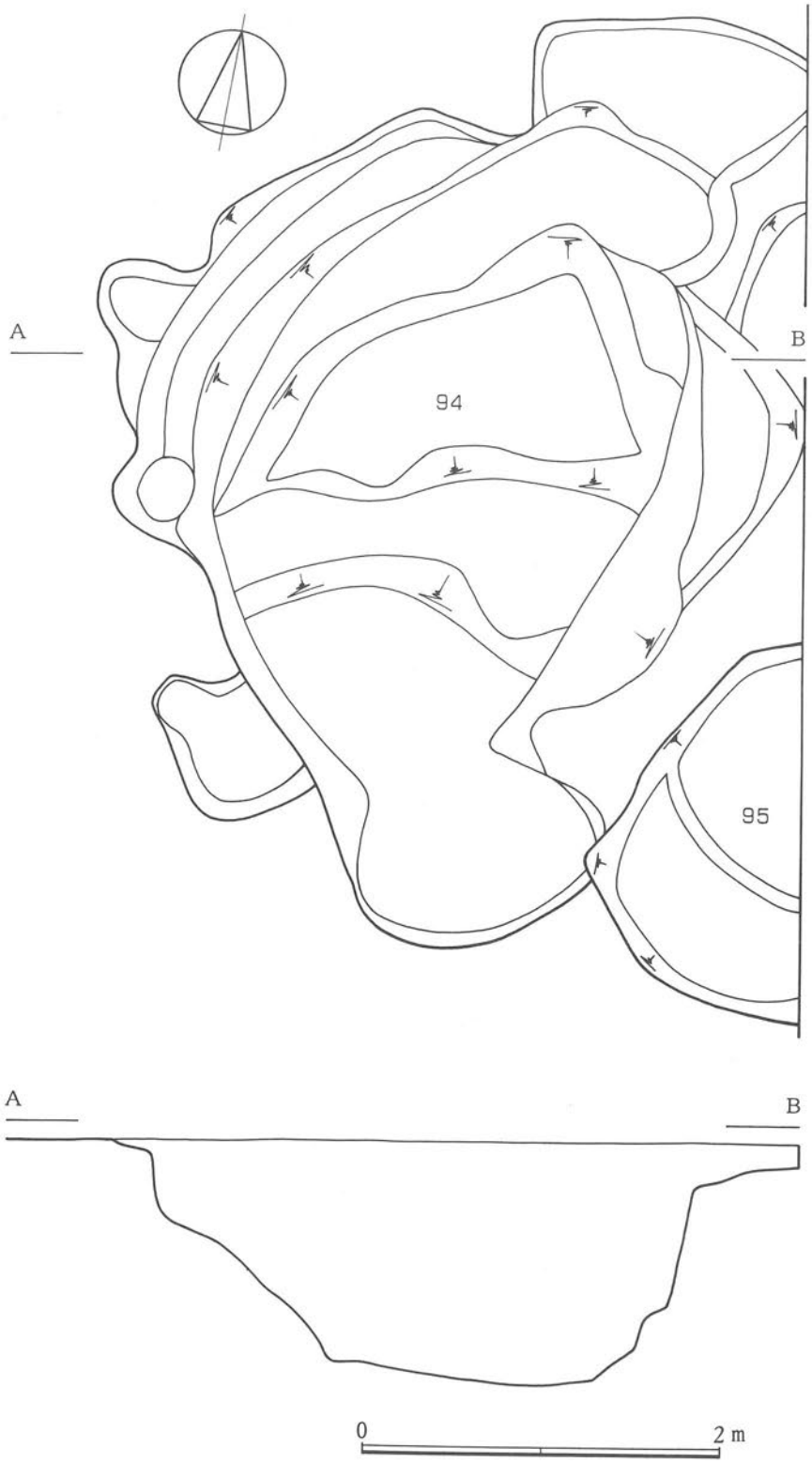
第一一七図　第七〇・七一・七二・七三・七四・七六号竪穴状遺構実測図



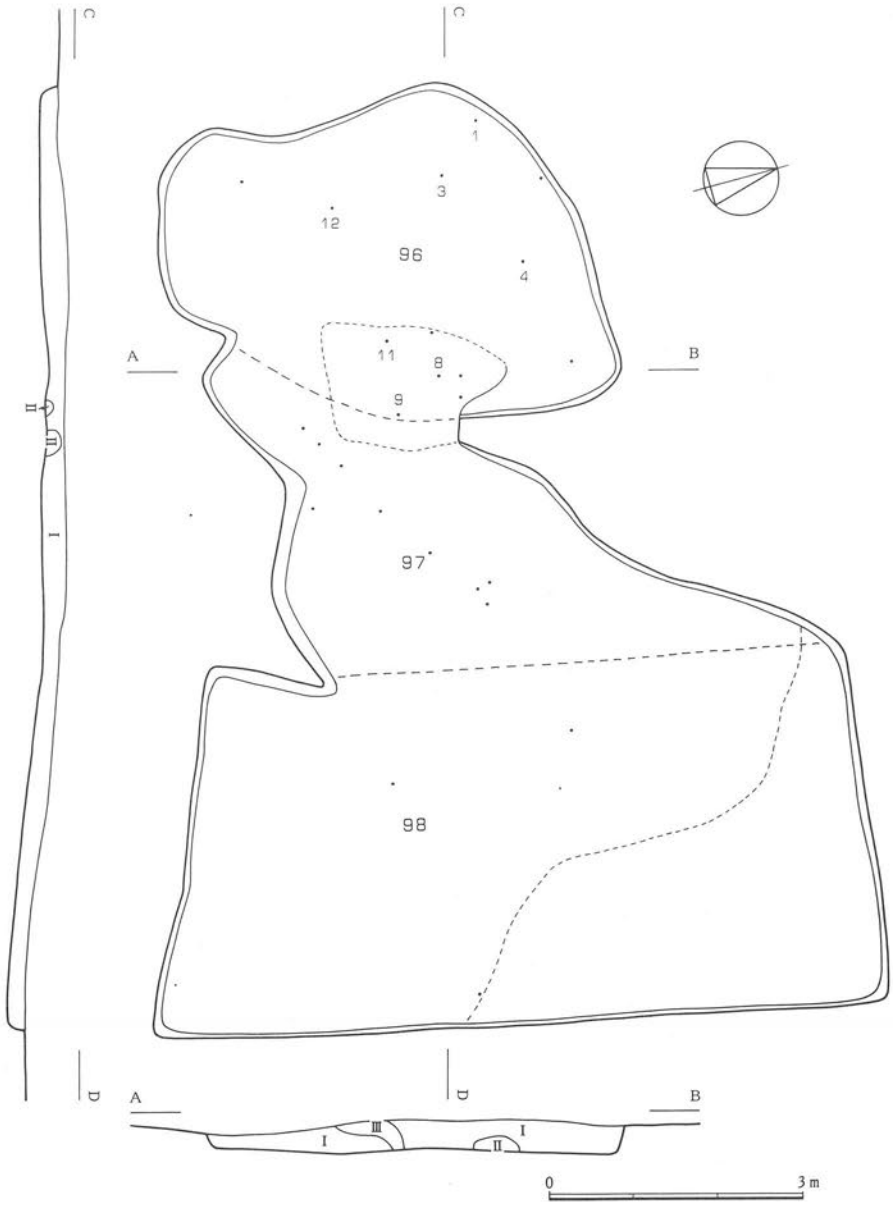
第一一八図　第七五・七六・七七・七八・七九・八〇・八一・八二号竪穴状遺構実測図



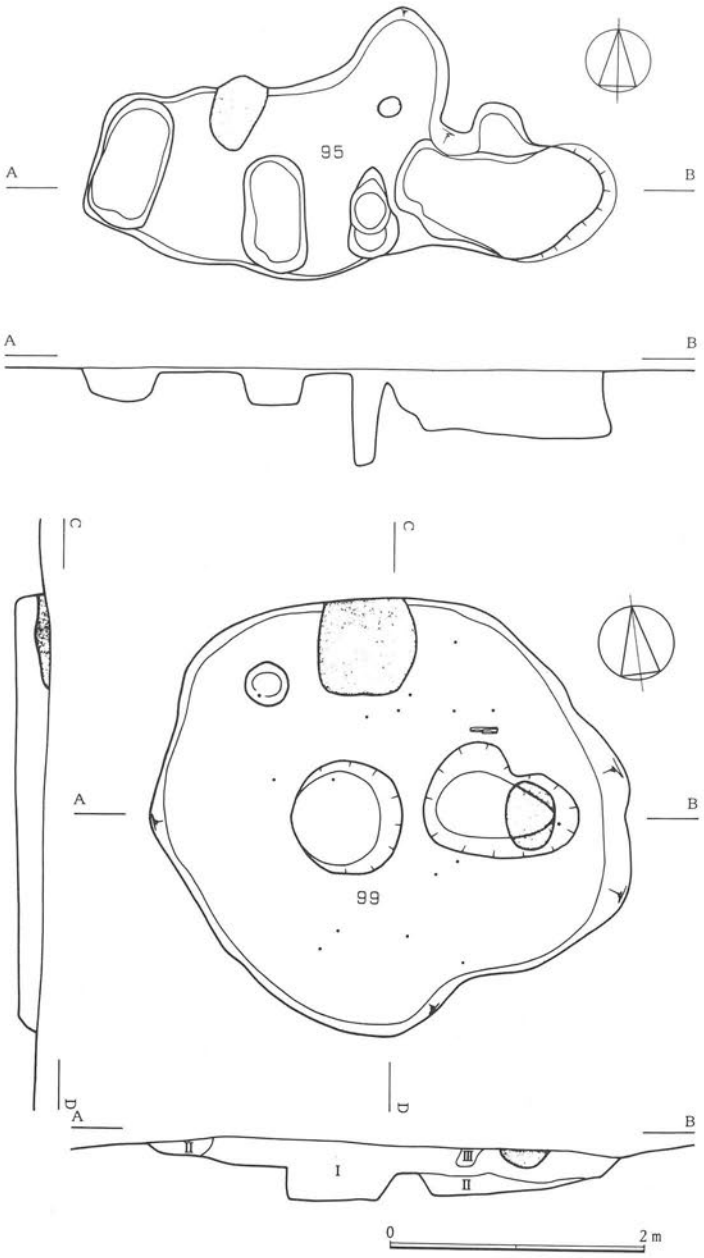
第一一九図　第八五・八六・八七・八八・九〇・九一・九二・九三号竪穴状遺構実測図



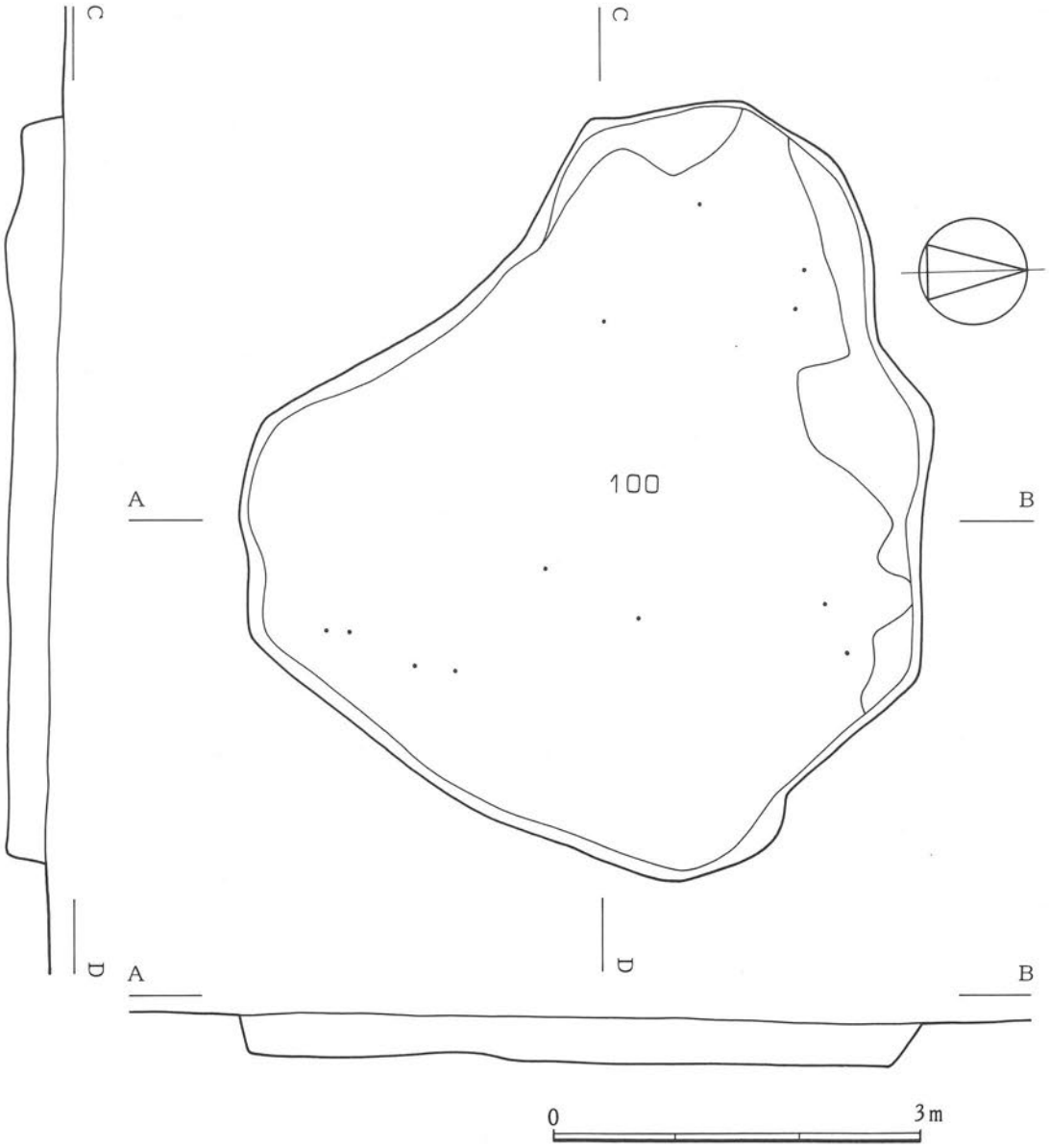
第一二〇図　第九四・九五'号竪穴状遺構実測図



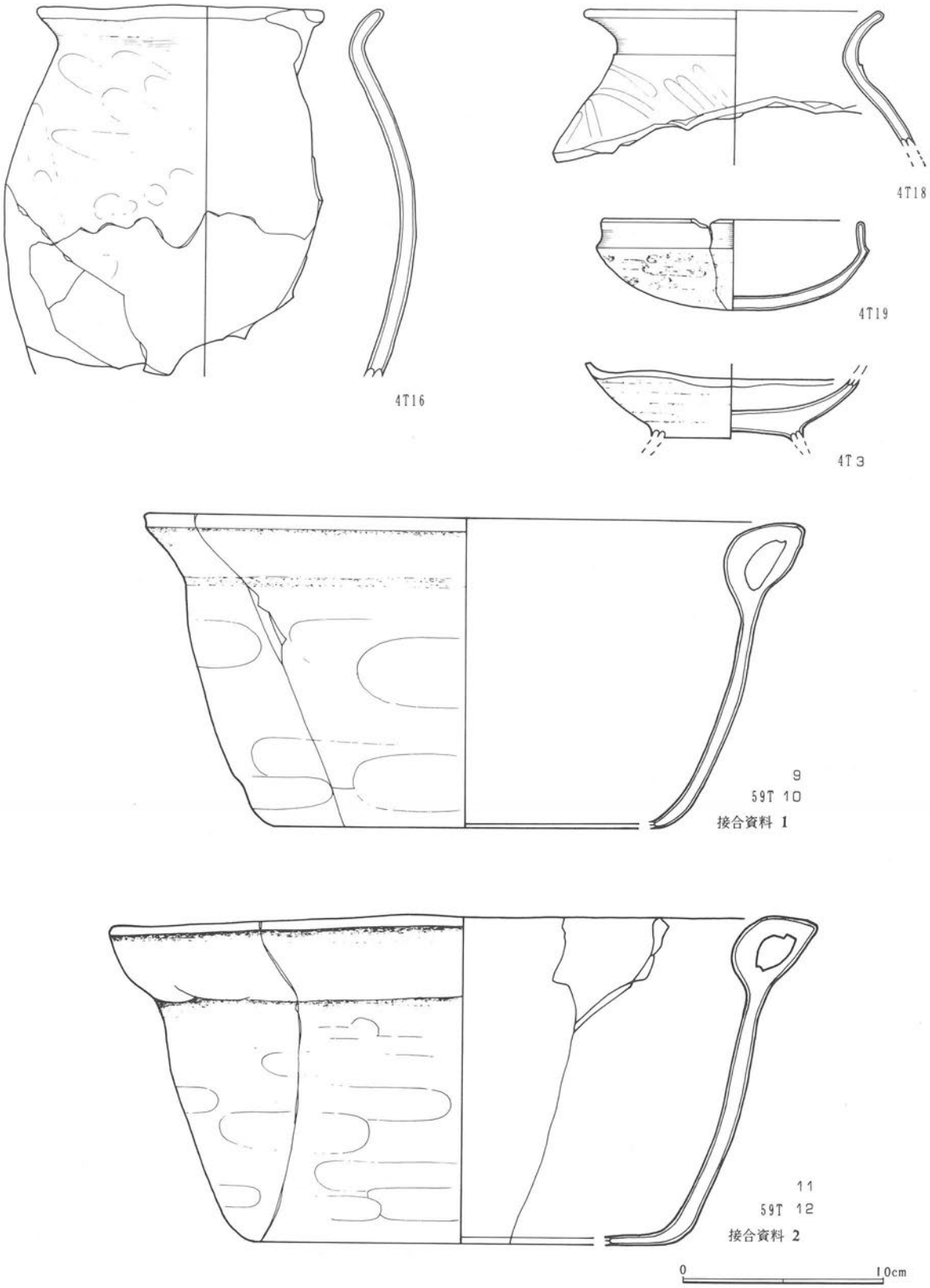
第一二一図　第九六・九七・九八号竪穴状遺構実測図



第一二二図　第九五・九九号竪穴状遺構実測図



第一二三図　第一〇〇号竪穴状遺構実測図



第一二四図　竪穴状遺構出土遺物実測図

第七章　土壙の調査

本遺跡の土壙は，第一調査区64基，第二調査区17基，第三調査区20基，第四Ａ調査区12基，第四Ｂ調査区24基，第五調査区６基の計143基が確認された。

これらの中には，調査の過程で井戸状遺構や土壙墓の可能性のある土壙に改められたものもある。

確認された土壙の大部分は出土遺物がなく，時期の特定や性格の把握が困難である。

本章では，遺物の出土した土壙を記述し，出土遺物のない土壙は一覧表にまとめることにした。

また，出土遺物はないが，形態に特徴のある土壙については記述することにした。

第四号土壙（第一二五図）

本址は，第一調査区の中央部南側，Ｇ～Ｈ－８～９から確認した。

南西１ｍに第四号住居址が存在する。

平面形は，楕円形を呈する。

長軸1.70ｍ，短軸1.22ｍ，長軸方向はＮ－22°－Ｅを指向する。

壁は斜めに掘り込まれており，深さは中央最深部で20㎝である。

底面は硬く締っており，舟底状を呈する。長軸方向の両端にピットが各１個存在する。

埋没土の性状は２層に区分することができる。Ⅰは明褐色土で，ローム粒子，ロームブロックを多量に含んでいる。Ⅱは褐色土で，ローム粒子を多量に混入し，黒色土の自然流入もみられる。

出土遺物は土師器坏形土器の体部片１個で，これだけでは時期・性格ともに不明である。

第一九号土壙（第一二七図）

本址は，第一調査区の中央部南東寄り，Ｊ～Ｋ－８から確認した。

南西４ｍに第五号住居址が存在する。

本址は，楕円形状の土壙が３基，帯状に重複しているが，規模が同程度なので第一九号Ａ・Ｂ・Ｃとして調査を行った。遺物の出土したのは第一九号Ａで，平面形は，楕円形である。

長軸1.50ｍ，短軸1.05ｍ，長軸方向はＮ－90°－Ｅを指向する。

壁は斜めに掘り込まれており，深さは13㎝である。

底面は締りがなく凹凸がみられる。ほぼ中央にピット１個が存在する。

埋没土の性状は，赤味を帯びたローム粒子を多量に混入する暗褐色土の単一層である。

中央部から遺物１個が出土した。土師器坏形土器の口縁部片である。

胎土・焼成が良好で，硬質赤褐色を呈しているので，鬼高Ⅱ式に比定できると思うが，これだけでは時期・性格は不明である。

第二六号土壙（第一二八図）

本址は，第一調査区の中央部南東寄り，Ｊ～Ｋ－７から確認した。

竪穴状遺構と土壙の密集区域である。

平面形は不整形である。

長軸2.20ｍ，短軸1.90ｍ，長軸方向はＮ－10°－Ｅを指向する。

掘り方は２段階に別れるようである。第１段階は壁を斜めに掘り込んで，深さ18㎝の平坦面を形成し，第２

段階として，長軸2.20m，短軸0.46m，の規模でほぼ垂直に93cm掘り下げている。

埋没土の性状は，Ⅰが黄色砂質とローム粒子を多量に混入する褐色土，ⅡはⅠの性状に加えて小礫を混入する明褐色土である。ロームブロックの混入も多い。

掘り込みの断面形を観察すると，土壙墓のようにも見えるが，幅が狭いように思われる。

開口部幅40cm，底面幅30cm，深さ93cmという規模は，底面が「V」の字形でなくとも，充分に陥穽的な機能を果し得たものと考えられる。

本土壙は「落し穴」遺構とした方がよさそうである。

遺物の出土はなく，時期は不明である。

第六三号土壙（第一三一図）

本址は，第一調査区の北西部，G～H－14から確認した。

北側1mに第九号住居址，南西3mに第七号住居址が存在する。

平面形は不整楕円形である。

長軸3.30m，短軸2.20m，長軸方向はN－80°－Eを指向する。

掘り込みの浅い土壙で，北側のプランはかろうじて確認することができた。

壁は斜めに掘り込まれており，深さは8cmである。

底面は硬く締っており，平坦である。

埋没土の性状は，ローム粒子を多量に混入する暗褐色土の単一層であるが，東壁際に55×47cm，厚さ5cmの焼土層が埋没土の上層部に存在する。

西壁際には70×60cm，深さ20cmのピットが1個存在する。

出土遺物は24個である。

内訳は，土師器片19個，自然石5個となる。

出土状態を平面分布で観察すると，中央部より東側に偏在する傾向がみられる。

土師器片はいずれも細小片で実測資料にはならなかった。

自然石5個は，すべて焼土層の上から出土している。

本土壙の時期の特定は困難である。

第一一四号土壙（第一三六図）

本址は，第四B調査区の南西端，A′～B′－1～2から確認した。

北側1mに第四六号住居址が存在する。

平面形は円形である。長軸0.90m，短軸0.87m。

掘り込みの浅い土壙で，深さは11cmである。

底面に硬さはないが平坦である。

埋没土の性状は，黒色土がベースで，多量のローム粒子を混入する暗褐色土の単一層である。

北壁際から土師器手捏土器破損品が1個出土した。

本土壙の時期・性格は不明である。

第五〇号土壙は，形態や深さからみれば，井戸状遺構の可能性がある。

第九四号土壙は，縄文時代中期にみられる袋状（フラスコ状）土壙墓の形態に近似している。

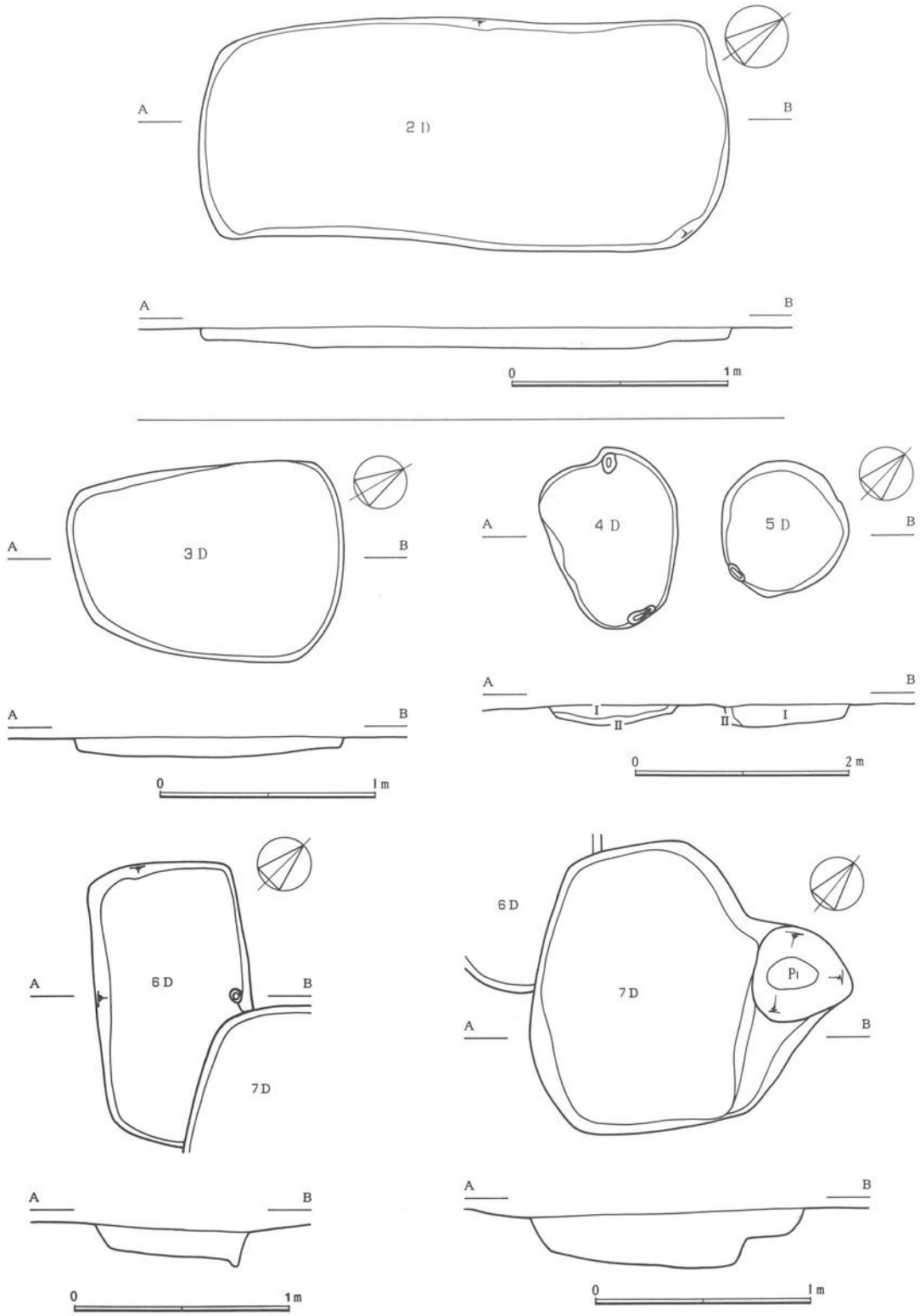
表10　　土　壙　一　覧　表

番　号	調査区	位　　置	長軸方向	平面形	規　　模		底　面	備　　考
					長軸×短軸(m)	深さ(cm)		
一	第　一	F～G-9						第1号井戸址
二	第　一	E-9	N-35°-E	隅丸長方形	2.45×1.08	9	平　坦	
三	第　一	E～F-9	N-30°-E	楕　円　形	1.26×0.90	9	舟底状	
四	第　一	G～H-8～9	N-22°-E	楕　円　形	1.70×1.22	20	舟底状	土器1　ピット2
五	第　一	G～H-8～9	-	円　　形	1.30×1.22	20	傾　斜	ピット1
六	第　一	G-7～8	N-46°-W	長　方　形	1.33×0.72	12	傾　斜	ピット1
七	第　一	G～H-7～8	N-50°-W	不　整　形	1.35×1.05	23	舟底状	ピット2
八	第　一	H-7～8	N-36°-E	隅丸長方形	1.10×0.95	21	舟底状	
九	第　一	G～H-7～8	N-55°-W	不整長方形	1.40×1.02	21	舟底状	ピット2
一〇	第　一	H-6～7	N-60°-W	隅丸長方形	1.17×0.67	13	舟底状	
一一	第　一	H～I-8	N-36°-E	不整長方形	2.00×1.39	18	平　坦	ピット3
一二	第　一	H～I-7～8	N-53°-W	隅丸長方形	1.45×1.05	22	舟底状	
一三	第　一	I～J-6～7	N-23°-E	不　整　形	1.00×0.89	23	舟底状	
一四	第　一	I～J-7～8	N-33°-E	楕　円　形	1.40×0.90	12	平　坦	
一五	第　一	J-7	N-0°	不　整　形	2.20×1.40	14	平　坦	ピット1
一六	第　一	J～K-7～8	N-30°-W	不整楕円形	1.20×0.75	13	平　坦	
一七	第　一	J～K-7～8	N-53°-E	不　整　形	1.15×0.90	15	平　坦	ピット1
一八	第　一	J～K-7～8	N-55°-E	不　整　形	1.10×1.00	3	平　坦	
一九	第　一	J～K-8	N-23°-W	楕　円　形	3.50×1.20	13	平　坦	重複
二〇	第　一	K-8	N-10°-W	楕　円　形	1.70×1.10	7	平　坦	ピット1
二一	第　一	J～K-8～9	-	円　　形	0.29×0.82	7	平　坦	
二二	第　一	J～K-9～10						第4号井戸址
二三	第　一	K～L-9～10	-	円　　形	1.19×1.19	22	舟底状	
二四	第　一	K-7～8	N-40°-E	不整楕円形	0.98×0.80	23	舟底状	ピット1
二五	第　一	K-6	N-45°-E	不整長方形	1.40×1.15	20	起　伏	
二六	第　一	J～K-7	N-10°-E	不　整　形	2.20×1.90	95	陥穽状	
二七	第　一	J～K-5～6	N-45°-E	不整楕円形	3.73×1.42	25	平　坦	ピット3
二八	第　一	J～K-4～5	N-55°-W	不整楕円形	1.10×0.93	12	平　坦	
二九	第　一	J～K-4～5	-	円　　形	0.87×0.85	60	平　坦	
三〇	第　一	L～M-7	N-37°-E	隅丸長方形	1.40×1.27	23	舟底状	重複
三一	第　一	O～P-7～8	N-46°-E	楕　円　形	1.72×0.90	10	舟底状	
三二	第　一	O～P-8～9	N-40°-E	不整楕円形	1.50×0.80	12	舟底状	
三三	第　一	L～M-7	N-37°-E	不　整　形	1.20×0.80	15	平　坦	ピット1
三四	第　一	R-9～10	N-37°-E	長　方　形	1.08×0.80	18	平　坦	
三五	第　一	S～T-10～11	N-52°-E	楕　円　形	1.27×1.05	5	舟底状	

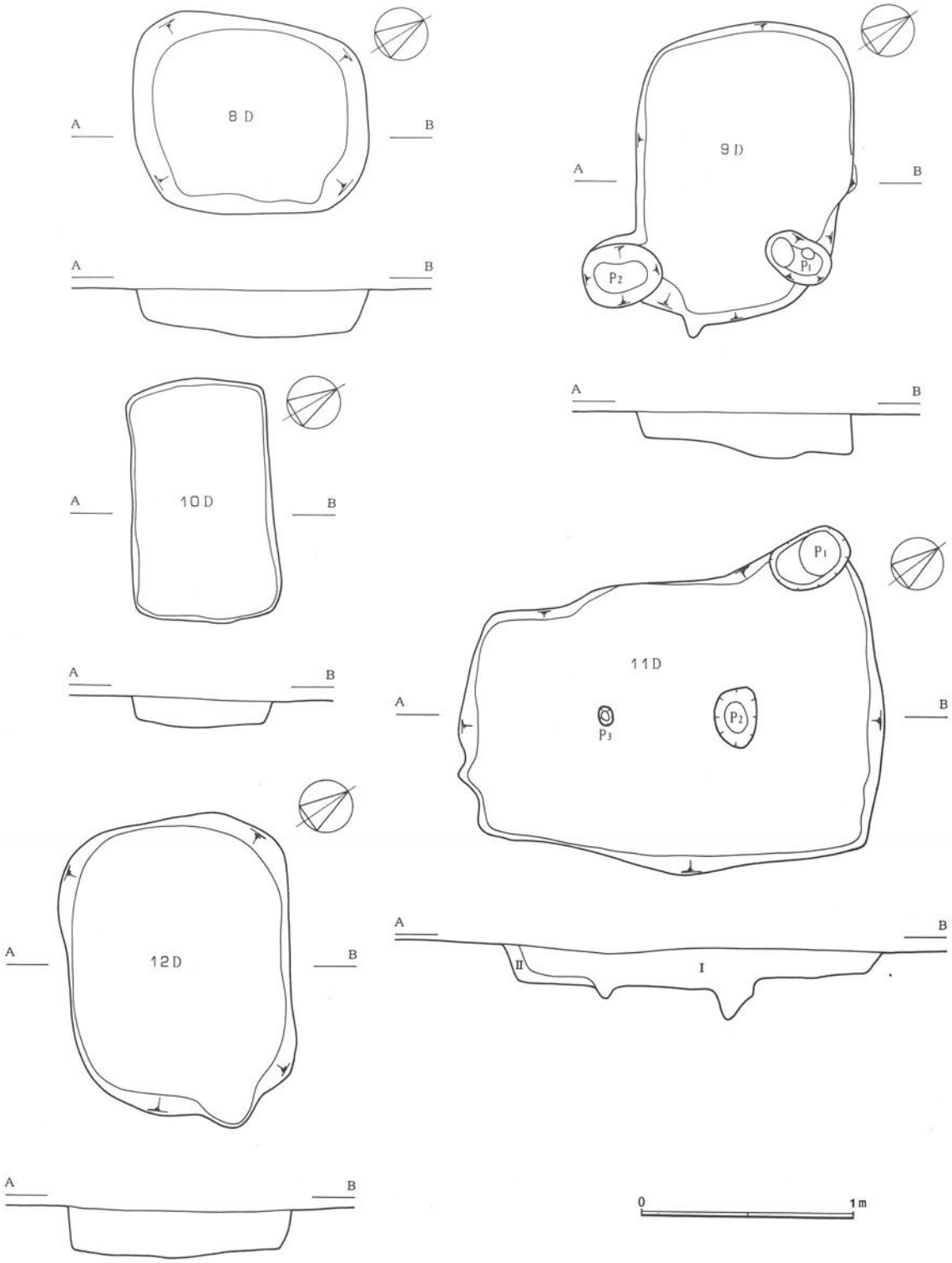
番号	調査区	位置	長軸方向	平面形	規模		底面	備考
					長軸×短軸(m)	深さ(cm)		
三六	第一	S～T-10～11	N-85°-E	不整形	1.50×1.33	17	平坦	ピット2
三七	第一	Q～R-9～10	N-37°-E	楕円形	1.70×0.93	7	平坦	
三八	第一	R-10	N-40°-E	方形	0.90×0.89	10	平坦	
三九	第一	Q～R-10～11	N-56°-E	不整長方形	0.90×0.75	8	平坦	
四〇	第一	R-10～11	N-59°-W	隅丸長方形	2.00×1.07	17	平坦	
四一	第一	Q～R-10～11	N-58°-W	不整形	2.02×1.43	22	起伏	
四二	第一	P-11～12						第7号井戸址
四三	第一	O-10～11	N-35°-W	不整長方形	1.45×1.08	13	平坦	
四四	第一	N～O-10～11	N-40°-W	隅丸長方形	1.25×1.03	15	舟底状	
四五	第一	Q-8～9	-	円形	1.10×1.08	40	平坦	
四六	第一	M～N-3～4	N-40°-E	不整楕円形	3.15×2.13	10	平坦	ピット1
四七	第一	O～P-2～3	N-12°-E	隅丸長方形	1.20×0.80	30	平坦	
四八	第一	O～P-3～4	N-85°-E	隅丸長方形	1.95×1.03	15	平坦	
四九	第一	O-5～6	N-50°-E	長方形	2.80×1.15	25	平坦	
五〇	第一	O～P-5～6	-	円形	1.55×1.55	200	水面	井戸址？
五一	第一	P～Q-9～10	N-47°-E	不整長方形	2.90×1.00	13	平坦	土器1　ピット2
五二	第一	N～O-11	N-53°-W	隅丸長方形	1.65×1.25	20	舟底状	
五三	第一	N～O-12	N-34°-E	不整長方形	1.44×1.13	32	舟底状	
五四	第一	M～N-12	N-55°-W	隅丸長方形	1.47×0.90	8	舟底状	
五五	第一	L～M-12	N-90°-W	楕円形	1.25×1.05	8	平坦	
五六	第一	L～M-11～12						第6号井戸址
五七	第一	L～M-13						第5号井戸址
五八	第一	J～K-13	N-30°-E	隅丸長方形	1.43×1.00	20	平坦	
五九	第一	J-14	N-30°-E	楕円形	1.86×1.45	12	平坦	
六〇	第一	K-13～14	N-43°-W	楕円形	1.72×0.94	8	平坦	
六一	第一	H～I-15	-	円形	1.85×1.85	50	平坦	
六二	第一	H-14～15	N-30°-E	不整形	2.55×1.90	41	舟底状	
六三	第一	G～H-14	N-80°-E	不整楕円形	3.30×2.20	8	平坦	土器19
六四	第一	B～C-13	N-52°-W	不整形	3.74×1.25	27	平坦	ピット3
六五	第二	A～B-16	N-10°-E	不整形	1.62×1.20	50	舟底状	
六六	第二	C-17	N-33°-E	不整円形	2.70×2.50	80	平坦	
六七	第二	D-14～15	N-80°-W	不整形	2.30×1.80	27	平坦	ピット1
六八	第二	E-16～17	N-25°-E	ハート形	2.25×1.30	25	起伏	
六九	第二	E～F-12～13	N-88°-E	不整円形	1.05×0.95	120	平坦	
七〇	第二	D～E-11～12	N-70°-E	不整円形	1.10×0.90	30	舟底状	
七一	第二	G～H-11	N-60°-W	不整長方形	2.00×1.50	17	平坦	

番　号	調査区	位　　置	長軸方向	平 面 形	規　　模		底　面	備　　考
					長軸×短軸(m)	深さ(cm)		
七二	第　二	F～G-9～10	N-60°-W	不整楕円形	2.77×2.30	42	舟底状	
七三	第　二	E～F-10～11	N-67°-W	楕　円　形	1.85×1.50	10	舟底状	ピット1
七四	第　二	G～H-9～10	N-50°-W	楕　円　形	1.40×1.15	20	舟底状	
七五	第　二	J～K-9	N-70°-W	楕　円　形	0.95×0.75	60	平　坦	
七六	第　二	J-6～7	-	円　　形	0.83×0.79	25	舟底状	
七七	第　二	A′-10～11	-	円　　形	0.75×0.70	60	平　坦	
七八	第　二	C′-8	N-45°-W	隅丸長方形	1.50×1.23	20	平　坦	
七九	第　二	C′-7～8	N-30°-E	隅丸長方形	1.20×0.80	20	舟底状	
八〇	第　二	E′-8	N-70°-E	不 整 円 形	1.00×0.90	27	舟底状	
八一	第　二	G′～H′-9～10	N-50°-E	不 整 円 形	1.10×1.05	23	平　坦	
八二	第　二	B-6	N-47°-E	不整楕円形	1.55×1.03	24	平　坦	
八三	第　三	G-7						第9号井戸址
八四	第　三	H～I-4～5						第11号井戸址
八五	第　三	L-4～5	-	円　　形	1.35×1.35	10	平　坦	
八六	第　三	L～M-4～5	-	円　　形	1.30×1.30	9	平　坦	
八七	第　三	N～A′-6～7	N-53°-W	不 整 円 形	1.95×1.80	22	舟底状	
八八	第　三	N～A′-2～3	N-15°-W	不整楕円形	1.40×0.95	23	平　坦	
八九	第　三	M～N-2～3	N-73°-E	不整楕円形	1.05×0.93	17	舟底状	
九〇	第　三	M～N-3	N-15°-E	不整長方形	1.27×0.93	9	平　坦	
九一	第　三	L～M-5～6	-	円　　形	1.13×1.10	23	平　坦	
九二	第　三	L-5～6	N-70°-E	不整楕円形	1.23×1.10	15	平　坦	
九三	第　三	L～M-6～7	N-18°-E	不 整 円 形	1.35×1.25	17	舟底状	ピット1
九四	第　三	J～K-4	-	円　　形	1.20×1.15	68	平　坦	袋状　底径170cm
九五	第　三	E′～F′-4～5	N-30°-W	不 整 円 形	2.10×1.80	95	長方形	
九六	第　三	E′～F′-2～3	N-0°	楕　円　形	1.18×1.06	17	舟底状	
九七	第　三	F′～G′-2～3	N-15°-W	楕　円　形	1.98×1.60	24	舟底状	
九八	第　三	G′～F′-2～3	-	円　　形	1.25×1.20	85	傾　斜	
九九	第　三	G′～H′-2～3	N-73°-E	不 整 円 形	1.25×1.23	16	舟底状	
一〇〇	第　三	G′～H′-2～3	N-18°-W	不 整 円 形	1.60×1.50	23	平　坦	
一〇一	第　三	H′～I′-2～3	-	円　　形	1.05×0.97	22	平　坦	
一〇二	第四A	A-5	-	円　　形	1.00×0.78	45	舟底状	
一〇三	第四A	B～C-1～2	N-3°-W	不 整 円 形	1.00×0.79	13	平　坦	
一〇四	第四A	D～E-3～4	N-72°-W	不整長方形	2.20×1.80	95	平　坦	
一〇五	第四A	G-2～3	N-74°-W	隅丸長方形	1.40×1.03	7	平　坦	
一〇五	第四A	G～H-2～3	N-10°-W	楕　円　形	1.30×0.90	15	平　坦	
一〇七	第四A	G～H-2～3	-	円　　形	0.87×0.85	14	平　坦	

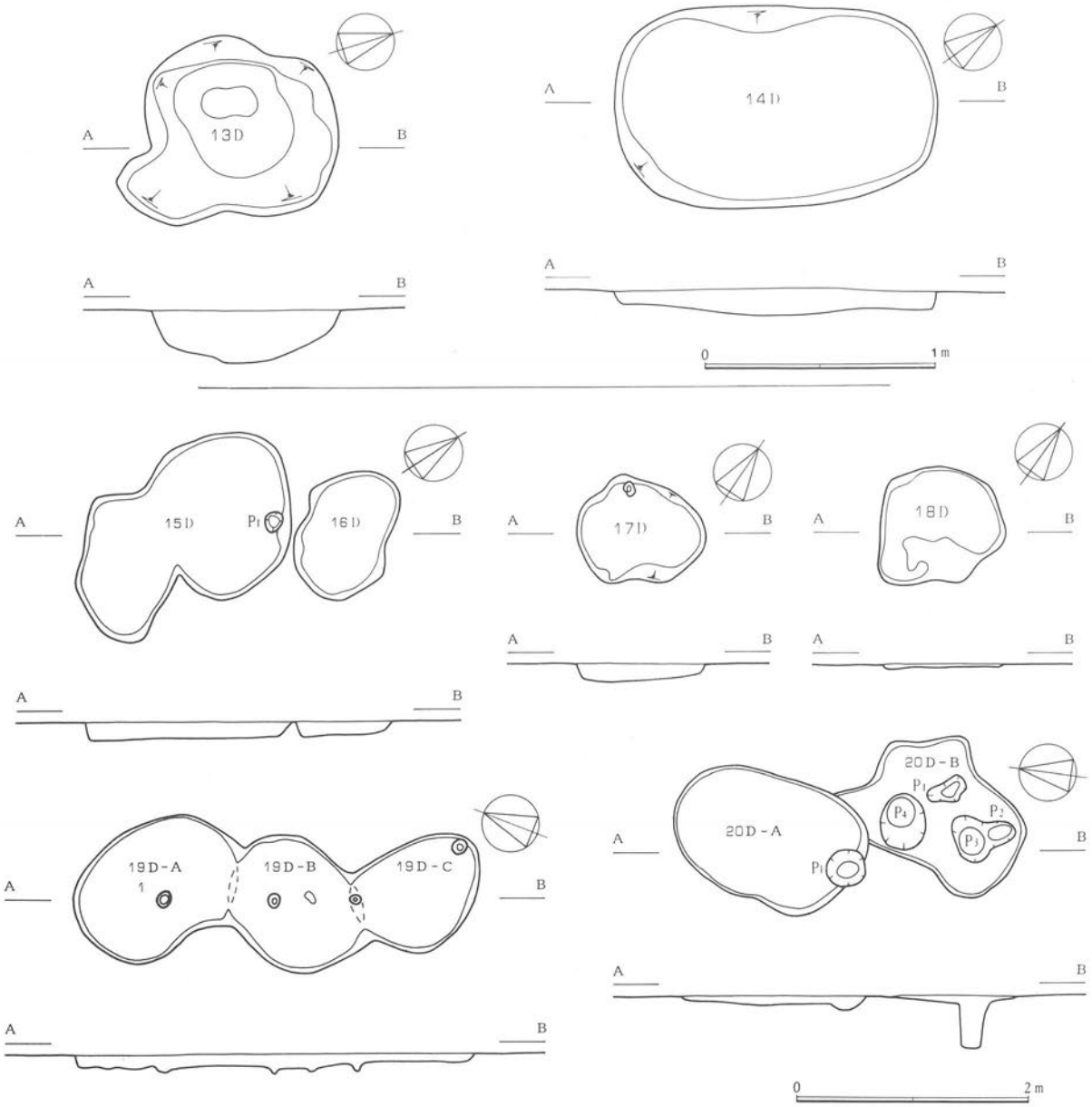
番　号	調査区	位　　置	長軸方向	平 面 形	規　　模		底　面	備　　考
					長軸×短軸(m)	深さ(cm)		
一〇八	第四A	H～I-2～3	N-7°-W	隅丸長方形	1.43×1.07	22	傾　斜	
一〇九	第四A	H～I-2～3	N-40°-W	不 整 円 形	1.05×0.92	10	平　坦	
一一〇	第四A	H-4～5	N-80°-E	長　方　形	1.27×1.00	8	起　伏	
一一一	第四A	H～I-4～5	-	円　　形	1.15×1.13	7	平　坦	
一一二	第四A	I～J-4～5	N-10°-W	不 整 円 形	1.70×1.50	13	平　坦	ピット1
一一三	第四A	J～K-3～4	-	円　　形	1.00×0.97	15	平　坦	
一一四	第四B	A′～B′-1～2	-	円　　形	0.90×0.89	11	平　坦	土器1
一一五	第四B	C′-2	-	円　　形	1.10×1.05	15	平　坦	
一一六	第四B	C′～D′-4～5	-	円　　形	1.15×1.13	13	舟底状	
一一七	第四B	C′～D′-4～5	N-30°-E	楕　円　形	3.60×1.95	25	平　坦	
一一八	第四B	D′～E′-4～5	-	円　　形	1.30×1.20	20	平　坦	
一一九	第四B	D′～E′-5	N-0°	楕　円　形	0.87×0.77	17	舟底状	
一二〇	第四B	D′～E′-3	-	円　　形	1.04×1.02	28	舟底状	
一二一	第四B	E′-2～3	N-60°-W	不 整 円 形	1.10×0.80	13	平　坦	
一二二	第四B	E′～F′-2	N-0°	不　整　形	1.05×1.00	18	平　坦	
一二三	第四B	E′～F′-2～3	N-52°-W	不整楕円形	1.70×1.10	13	起　伏	
一二四	第四B	F′-5	-	円　　形	1.03×1.00	40	平　坦	
一二五	第四B	F′～G′-4～5	N-17°-E	不整楕円形	1.90×1.35	20	舟底状	
一二六	第四B	F′～G′-4～5	-	円　　形	0.90×0.88	10	平　坦	
一二七	第四B	G′～H′-5	N-0°	不 整 円 形	1.22×1.07	11	平　坦	
一二八	第四B	G′～H′-5	N-35°-E	楕　円　形	1.38×0.98	10	平　坦	
一二九	第四B	H′～I′-4～5	N-26°-W	楕　円　形	1.35×1.17	50	舟底状	
一三〇	第四B	H′～I′-4～5	N-12°-W	楕　円　形	1.23×1.05	8	平　坦	
一三一	第四B	I′-5	-	円　　形	2.20×2.05	48	平　坦	
一三二	第四B	H′-3	-	円　　形	1.40×1.30	37	舟底状	
一三三	第四B	I′-1～2	N-28°-E	隅 丸 方 形	1.56×1.45	27	平　坦	
一三四	第四B	I′-2	N-37°-E	不整楕円形	2.55×1.20	19	起　伏	
一三六	第四B	I′-2～3	N-58°-W	不 整 方 形	1.55×1.52	12	平　坦	
一三六	第四B	I′～J′-3	N-50°-W	隅丸長方形	1.40×1.13	10	平　坦	
一三七	第四B	I′～J′-3	N-20°-E	隅丸長方形	1.50×0.96	15	平　坦	
一三八	第　五	D′～E′-3～4	-	円　　形	1.04×1.01	8	平　坦	
一三九	第　五	D～E-3	-	円　　形	1.15×1.13	17	舟底状	
一四〇	第　五	D～E-3～4	-	円　　形	1.18×1.13	13	平　坦	
一四一	第　五	D～E-3	N-36°-E	楕　円　形	0.90×0.80	12	平　坦	
一四二	第　五	G-2	N-20°-W	不 整 円 形	1.30×1.30	17	平　坦	
一四三	第　五	J～K-3～4	N-20°-E	楕　円　形	3.30×2.00	73	平　坦	



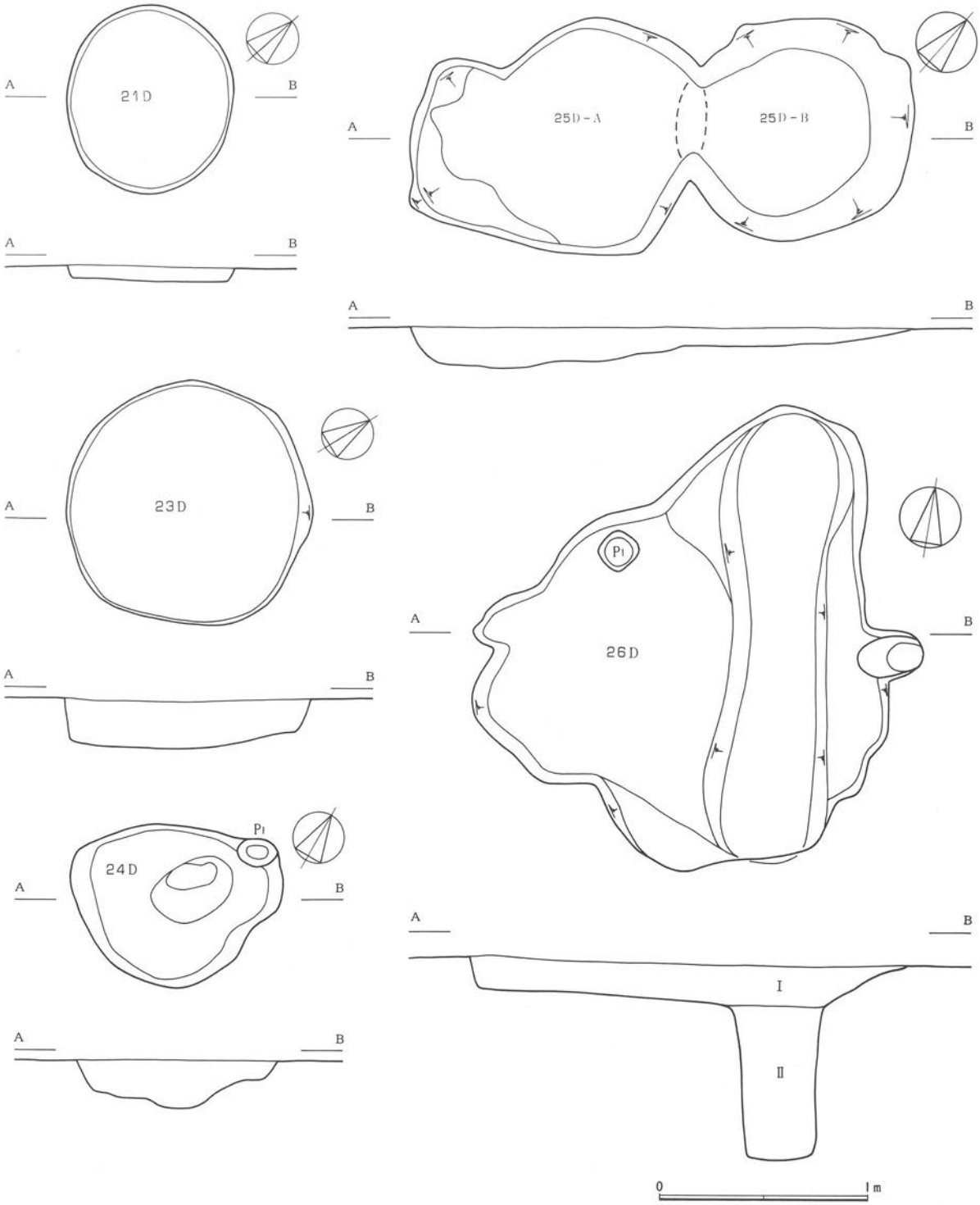
第一二五図　第二・三・四・五・六・七号土壙実測図



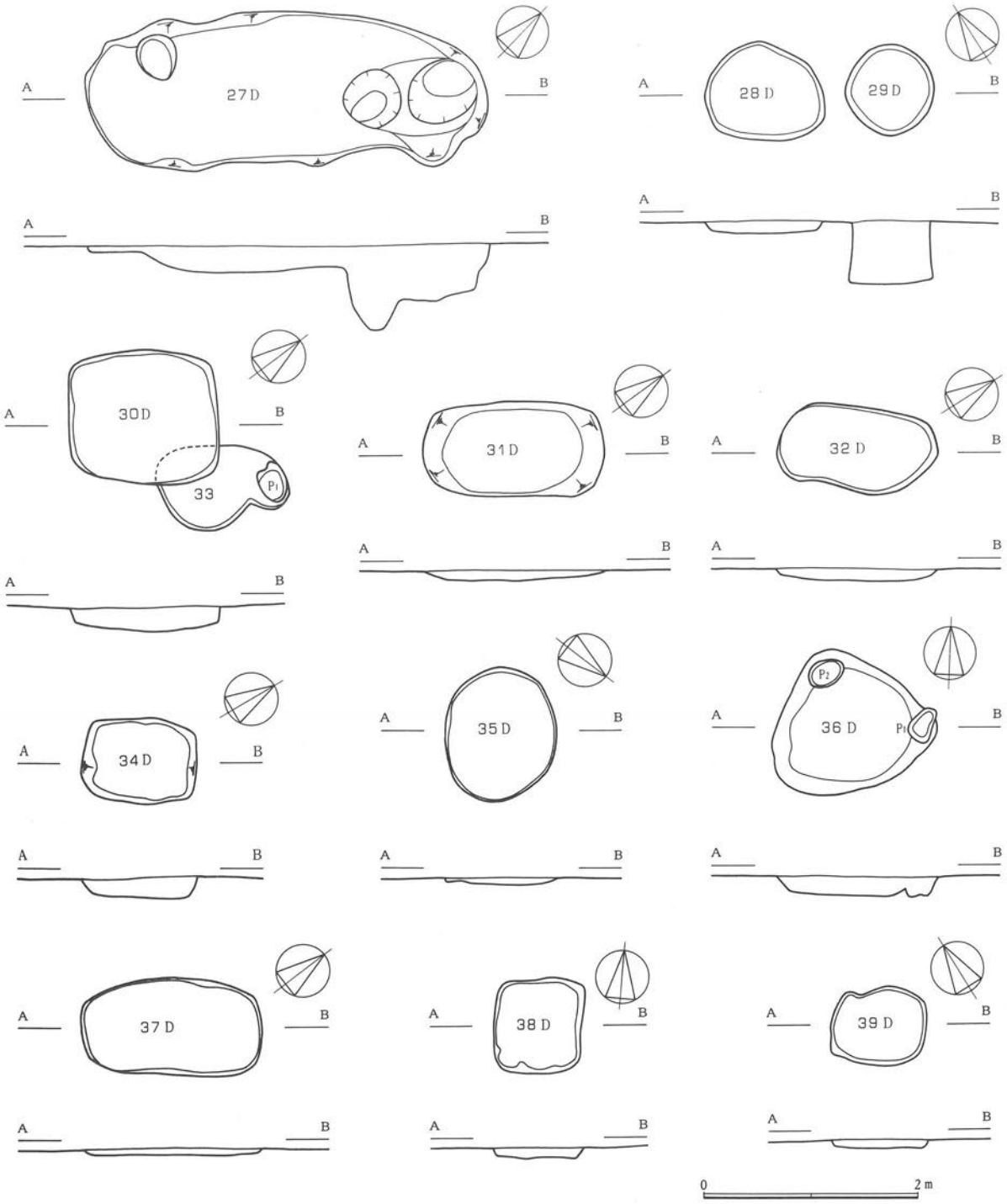
第一二六図　第八・九・一〇・一一・一二号土壙実測図



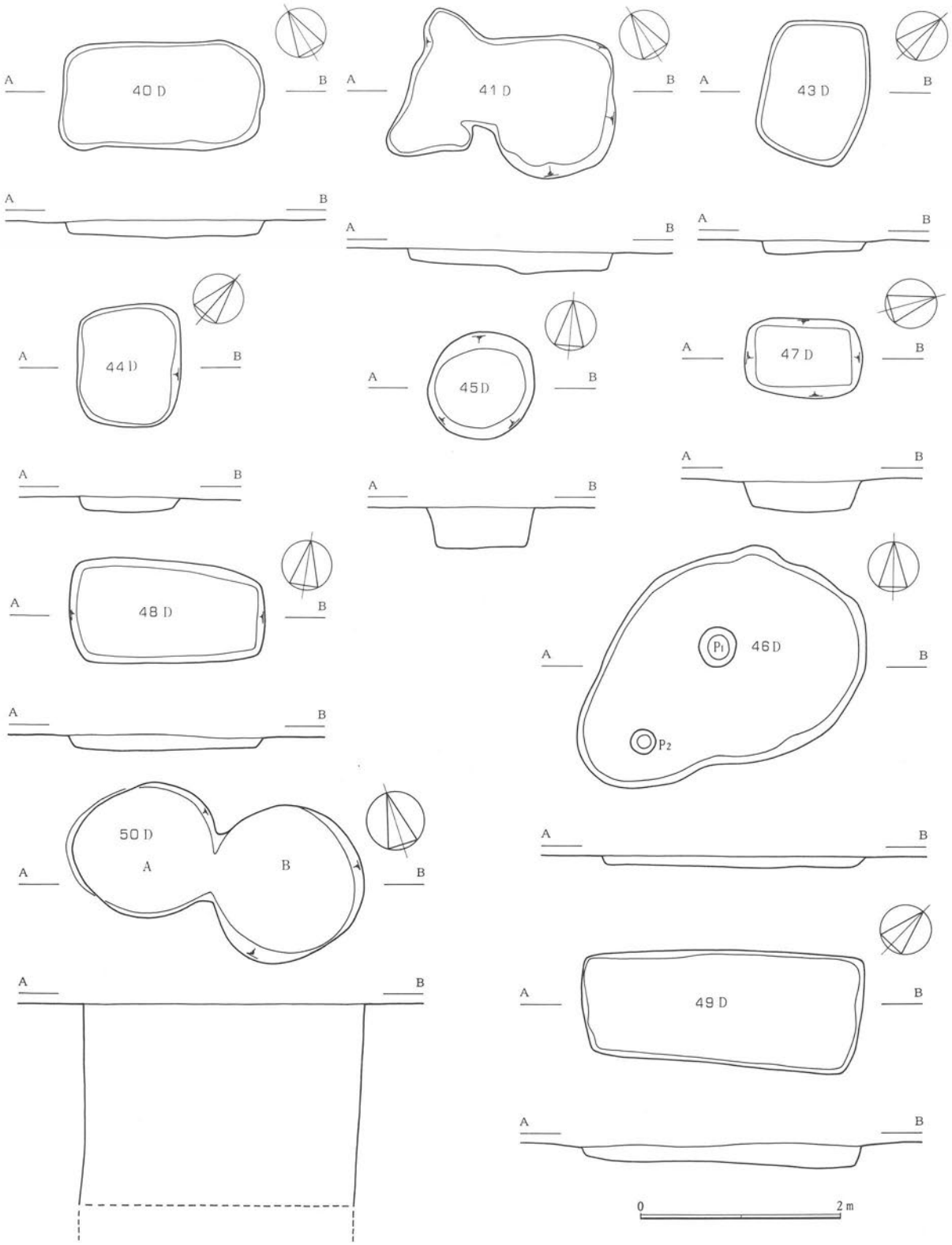
第一二七図　第一三・一四・一五・一六・一七・一八・一九・二〇号土壙実測図



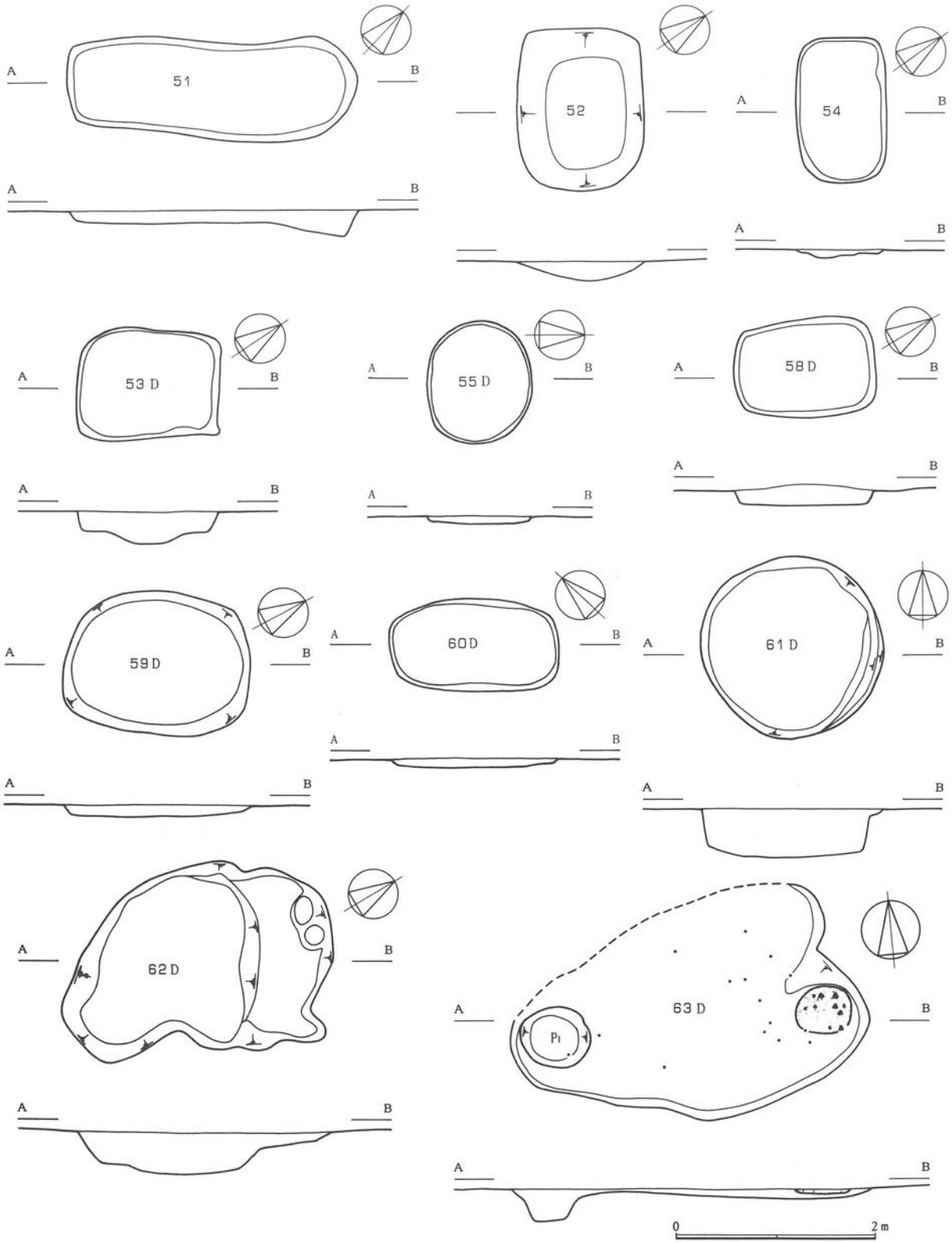
第一二八図　第二一・二三・二四・二五・二六号土壙実測図



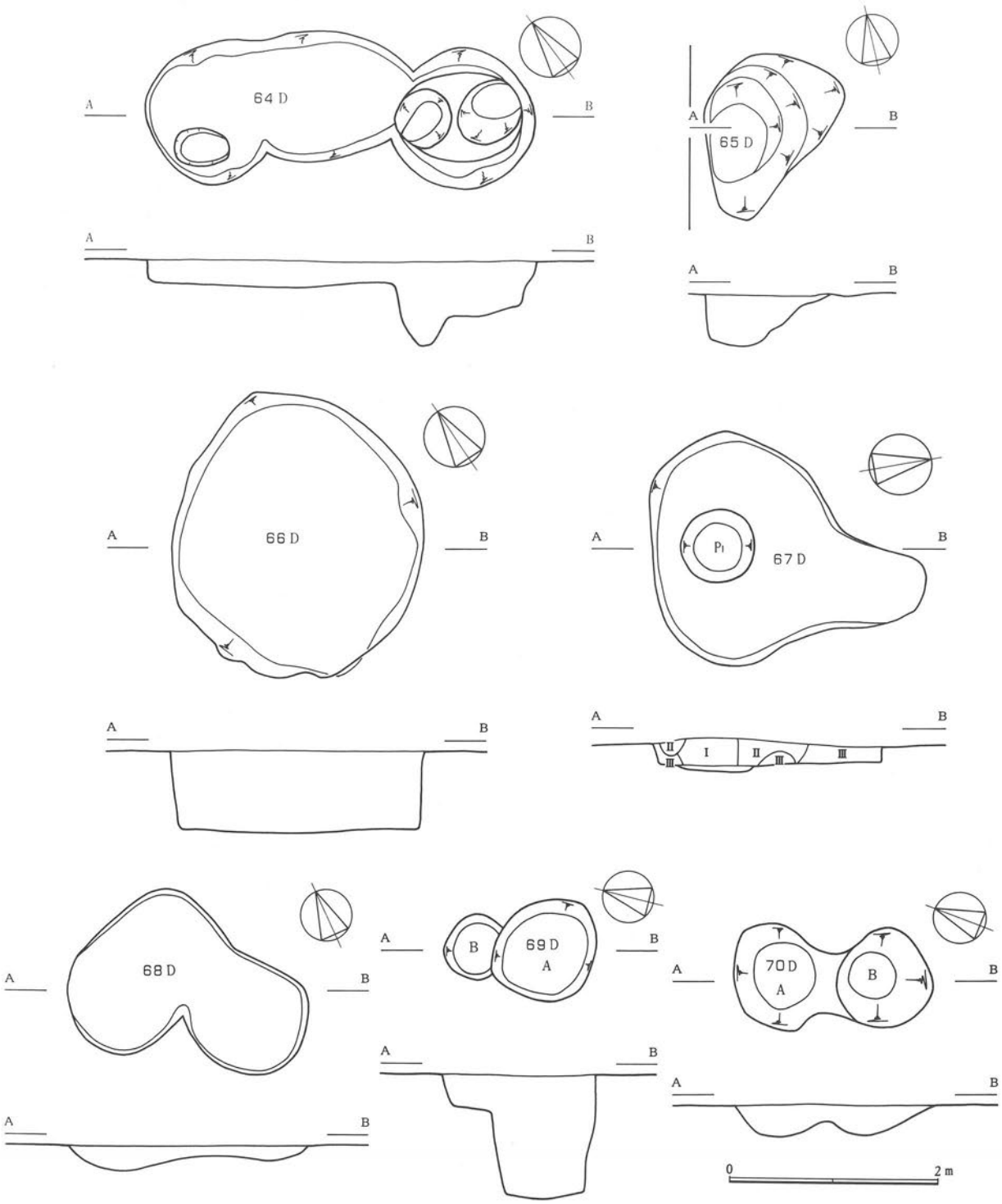
第一二九図　第二七～三九号土壙実測図



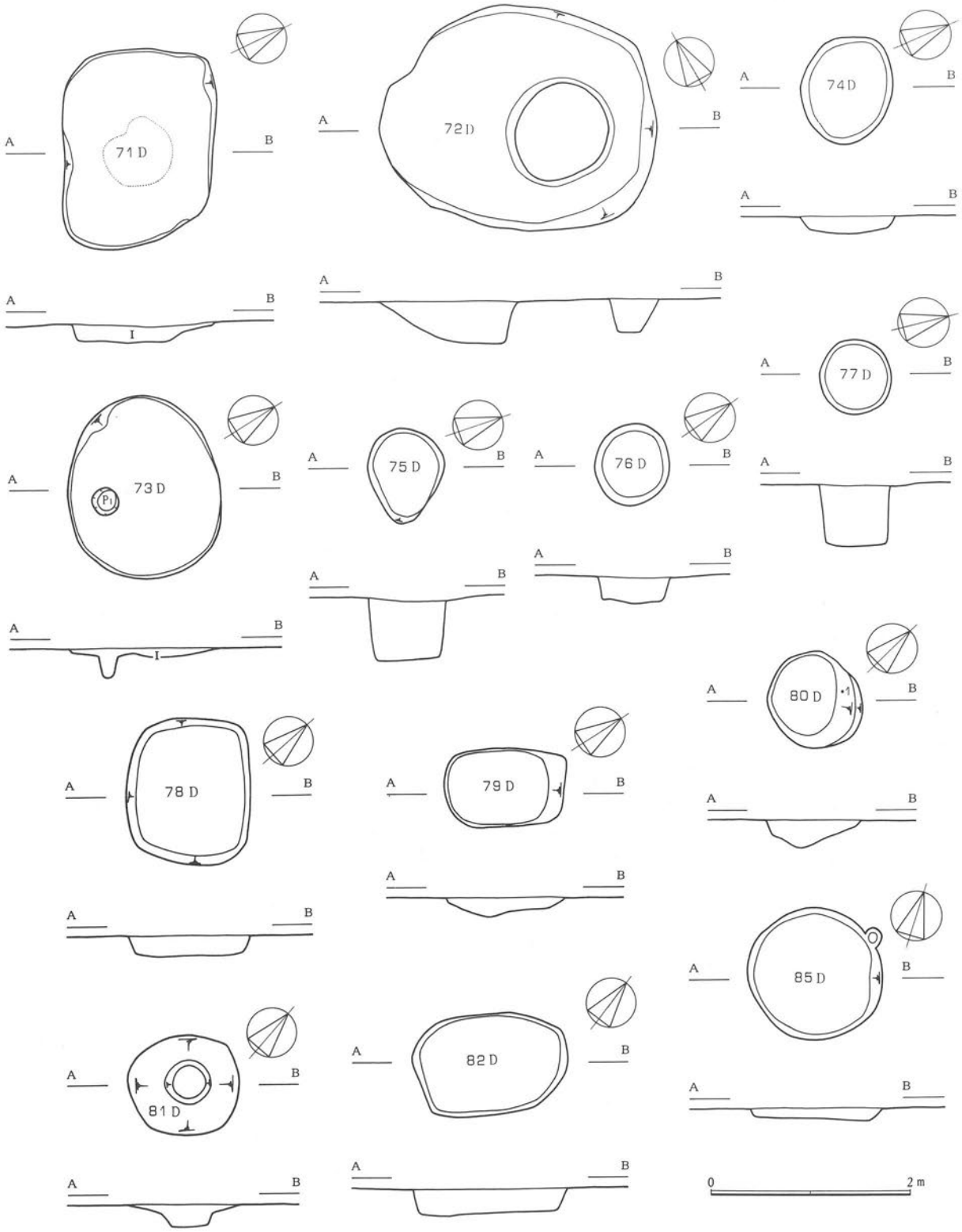
第一三〇図　第四〇・四一・四二・四三・四四・四五・四六・四七・四八・四九・五〇号土壙実測図



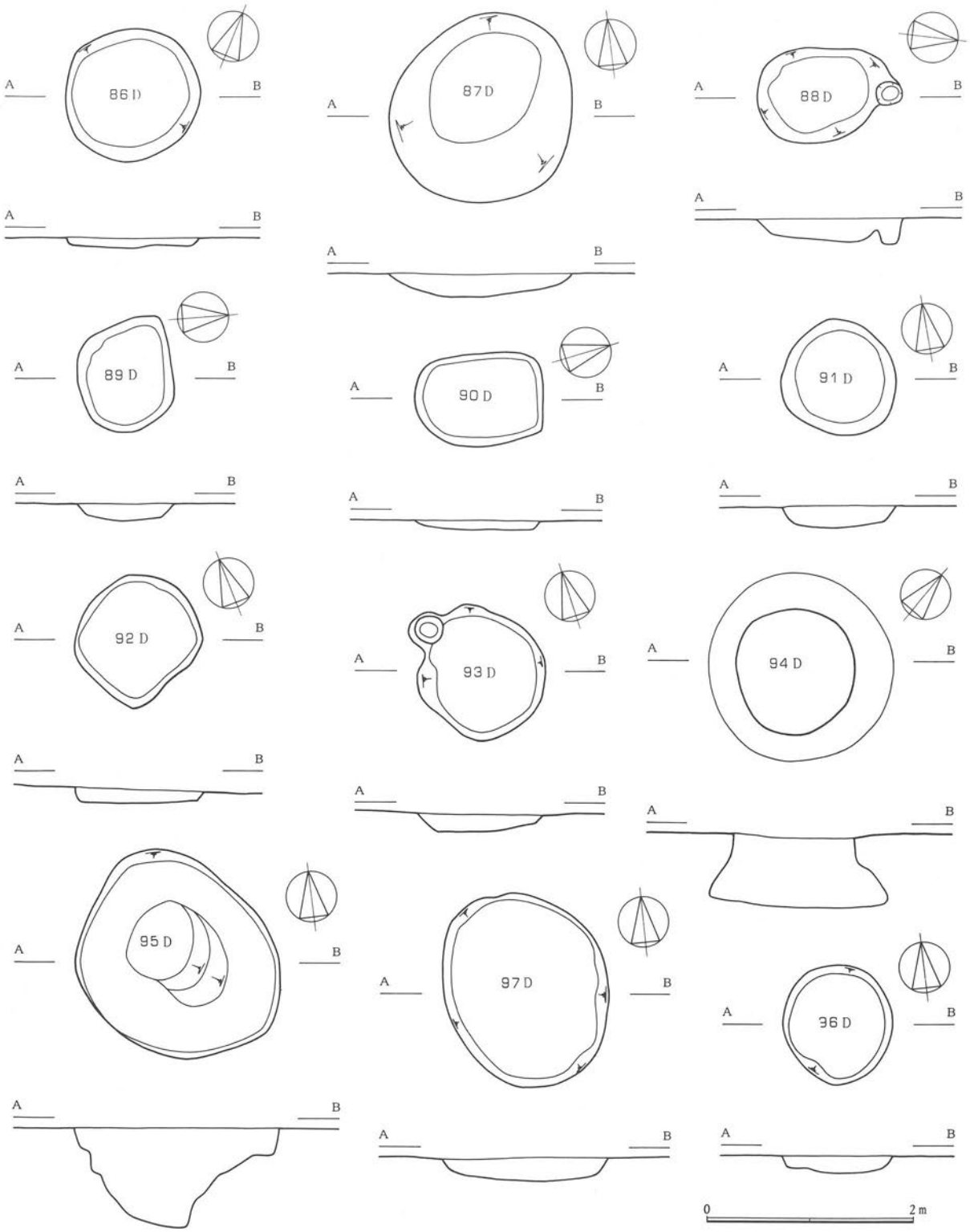
第一三一図　第五一～五五号，五八～六三号土壙実測図



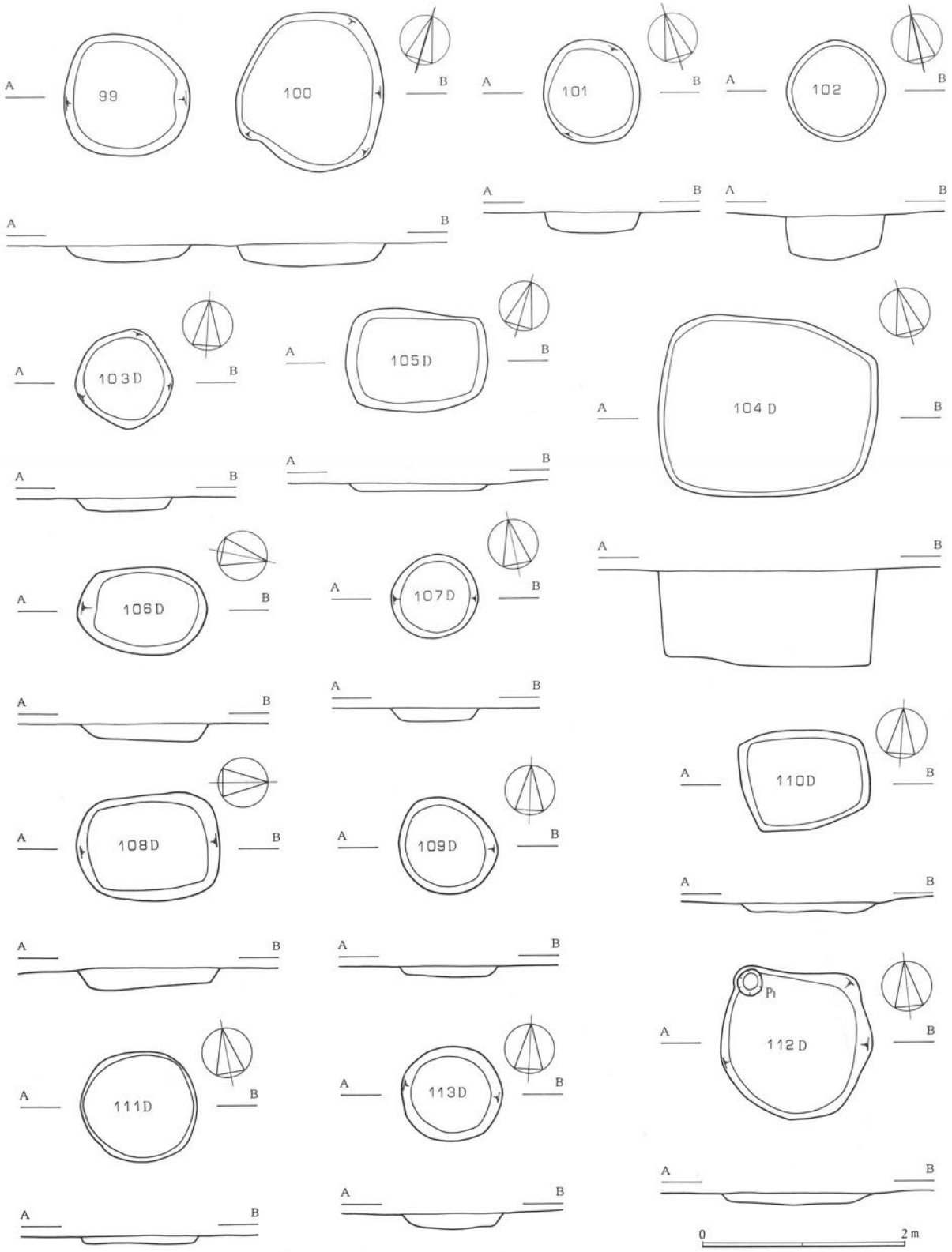
第一三二図　第六四～七〇号土壙実測図



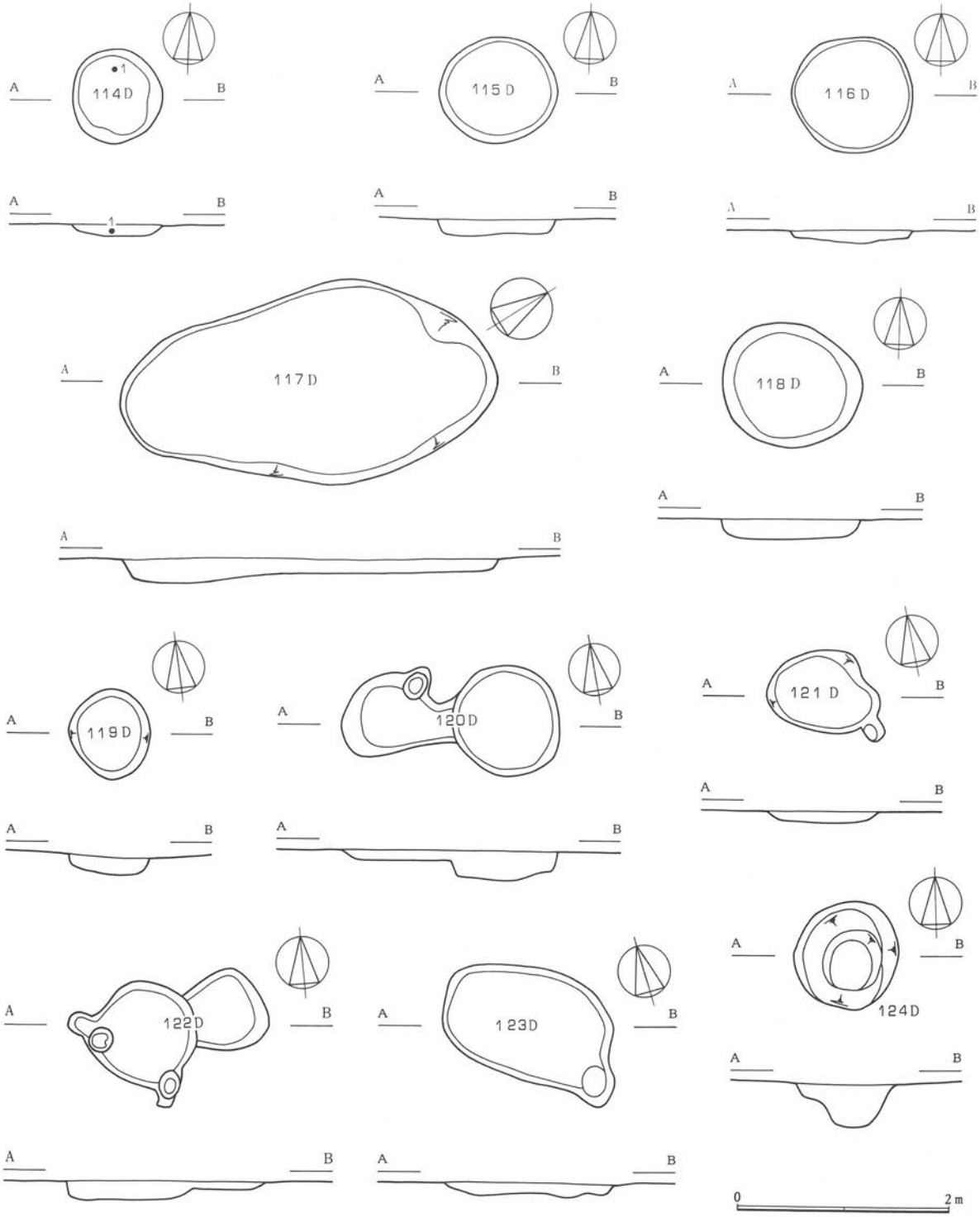
第一三三図　第七一～八二号，八五号土壙実測図



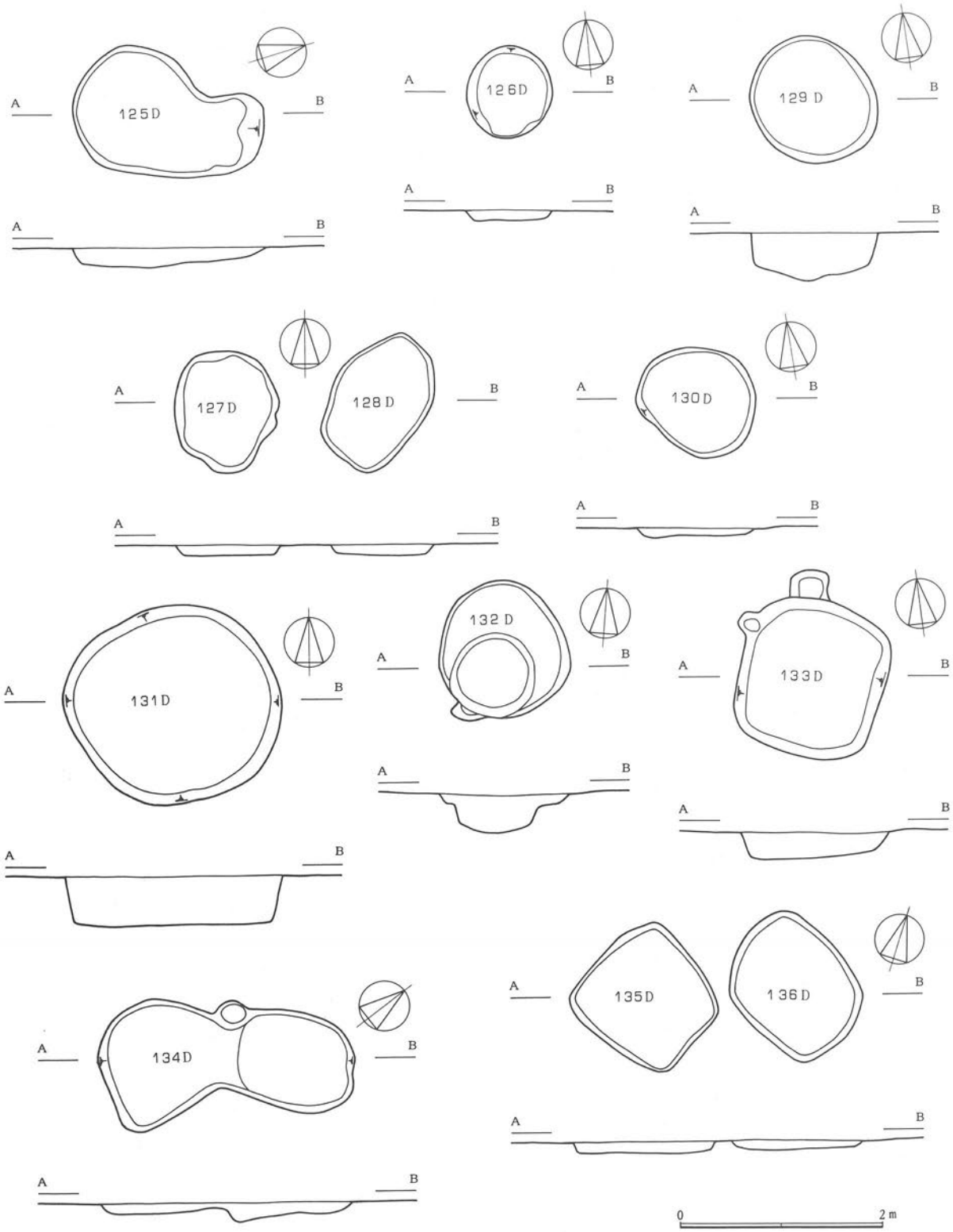
第一三四図　第八六～九七号土壙実測図



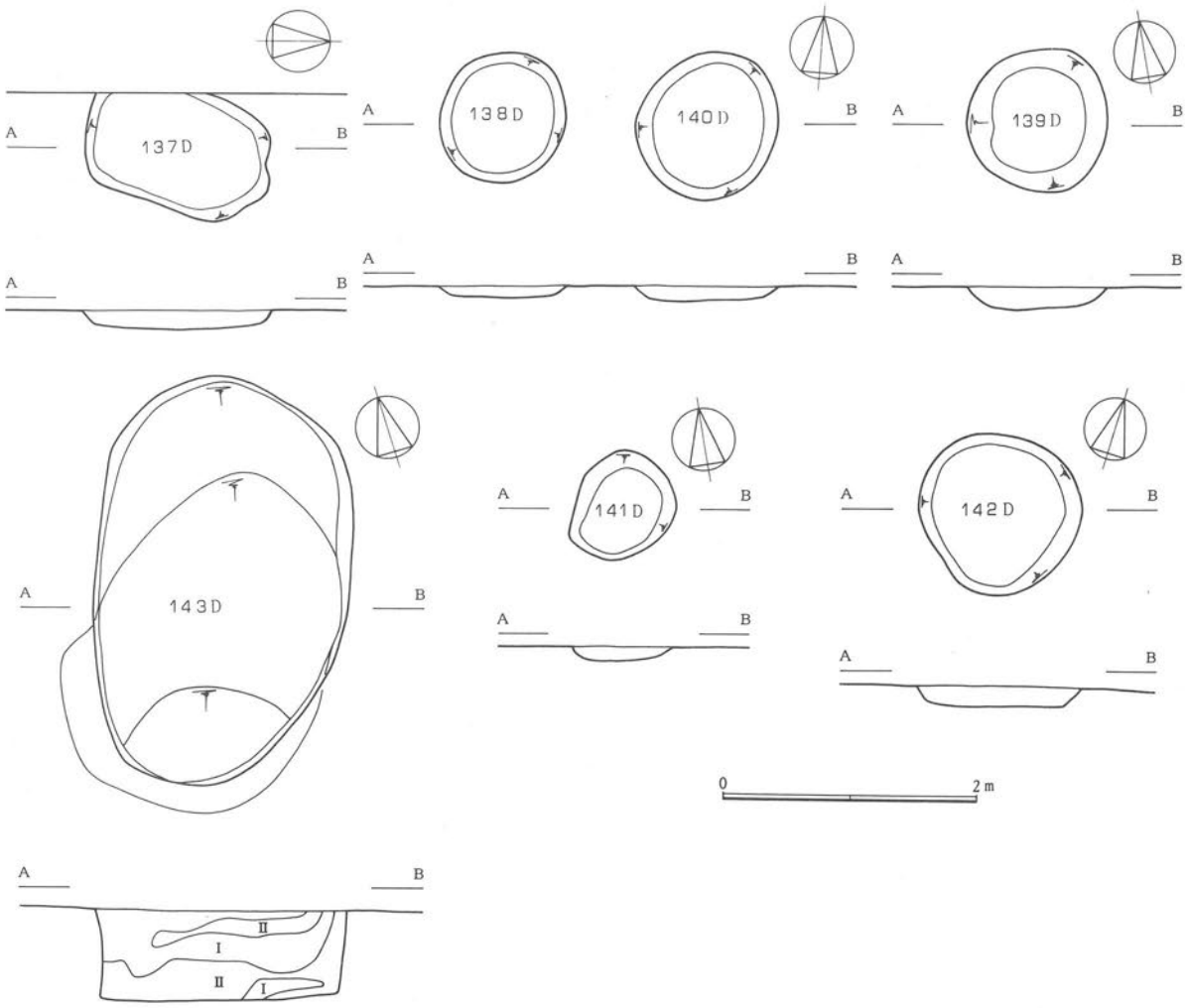
第一三五図　第九九～一一三号土壙実測図



第一三六図　第一一四～一二四号土壙実測図



第一三七図　第一二五～一三六号土壙実測図



第一三八図　第一三七～一四三号土壙実測図

第八章　土壙墓の調査

本遺跡からは150基を超える土壙が確認されている。

また，竪穴状遺構の中にも，土壙の範疇に属するであろうと思われる遺構もある。

本章では，これらの土壙の中から，墓壙の可能性のあるもの，出土遺物はないが形態からみて墓壙と考えられるものについて記述することにした。

第一号土壙墓（第一三九図）

本址は，第一調査区の中央部，H～I－9から確認した。遺存状態は良好である。

東側2mに第五号住居址，西側5mに第三号井戸址が存在する。

開口部の平面形は楕円形状，底面は撓形状を呈する。

長軸285cm，短軸110cm，長軸方向はN－17°－Eを指向する。

深さは130cmで，底面は平坦である。

埋没土は，ローム粒子を混入する暗褐色土で，底面上に2～4cmの厚さの焼土と灰層が堆積する。

出土遺物はないが，墓壙の可能性が考えられる。時期は中世以降と思われる。

第二号土壙墓（一三九図）

本址は，第一調査区の中央部，J～K－9から確認した。遺存状態は良好である。

南西5mに第五号住居址，北西2mに第四号井戸址が存在する。

開口部の平面形は楕円形状，底面形は瓢箪形を呈する。

長軸183cm，短軸95cm，長軸方向ではN－39°－Eを指向する。

深さは，北東部が50cm，南西部が68cmで，底面に凹凸はないが，セクションA側に向ってゆるやかに傾斜する。

埋没土の性状は，ローム粒子・ローム小ブロック・鹿沼粒子を混入する褐色土である。

セクションA側の底面上に，厚さ7cmの灰層が堆積する。

出土遺物はないが，灰層の存在や形態からみて，墓壙ではないかと思われる。

第三号土壙墓（第一三九図）

本址は，第一調査区の北西部，H～I－12～13から確認した。遺存状態は良好である。

北側8mに第九号住居址が存在する。

開口部の平面形は楕円形状，底面形は隅丸長方形を呈する。

長軸133cm，短軸105cm，長軸方向はN－90°－Eを指向する。

深さは62cm，底面は平坦である。底面長軸94cm，短軸40cmである。

埋没土の性状は，ローム粒子・ローム小ブロックを混入する暗褐色土である。

底面上に厚さ3～4cmの灰層が堆積する。

出土遺物はないが，形態や規模からみて小児用の墓壙ではないかと考えられる。

第四号土壙墓（第一三九図）

本址は，第二調査区の南西部，E～F－9～10から確認した。遺存状態は良好である。

北西50cmに第七三号土壙，南東４ｍに第七二号土壙が存在する。

開口部の平面形は不整形で，底面形は隅丸長方形を呈する。

開口部の長軸200cm，短軸130cm，長軸方向はＮ－128°－Ｅを指向する。

深さは70cm，底面に凹凸はないが，やや起伏がある。底面長軸160cm，短軸60cmである。

埋没土の性状は，２層に大別することができる。

上層は，ローム粒子・ローム小ブロックを混入する暗褐色土，下層は厚さ10～15cmの焼土を主体とする赤褐色土が堆積する。

出土遺物はないが，形態からみて墓壙の可能性が考えられる。

第五号土壙墓（第一三九図）

本址は，第二調査区の中央部南西寄り，Ｈ～Ｉ－９～10から確認した。遺存状態は良好である。

南東３ｍに第一八号住居址が存在する。

開口部の平面形は隅丸長方形状，底面形も隅丸長方形を呈する。

開口部の長軸270cm，短軸115cm，長軸方向はＮ－41°－Ｅを指向する。

深さは37cm，底面は平坦である。底面長軸225cm，短軸80cmである。

埋没土の性状は，ローム粒子とローム小ブロックを含む暗褐色土の単一層である。

本址も，形態からみて墓壙ではないかと思われる。

第六号土壙墓（第一三九図）

本址は，第二調査区の中央部西寄り，Ｉ－12～13から確認した。遺存状態は良好である。

東側３ｍに第一七号住居址，西側３ｍに第一三号住居址が存在する。

開口部の平面形は隅丸長方形状，底面形も隅丸長方形を呈する。

開口部の長軸155cm，短軸65cm，長軸方向はＮ－57°－Ｅを指向する。

深さは70cm，底面は平坦である。底面長軸130cm，短軸50cmである。

埋没土の性状は，ローム粒子・鹿沼粒子・ローム小ブロックを混入する暗褐色土である。

底面上に厚さ５cmの灰層が堆積する。

出土遺物はないが，形態からみて墓壙の可能性があるように思われる。

第七号土壙墓（第一四〇号）

本址は，第三調査区の西端部，Ａ～Ｂ－５～６から確認した。遺存状態は良好である。

北東５ｍに第三五号住居址，北西1.5ｍに第八二号土壙が存在する。

開口部の平面形は隅丸長方形，底面形も隅丸長方形である。

開口部の長軸250cm，短軸95cm，長軸方向はＮ－43°－Ｅを指向する。

深さは36cmで底面は平坦である。

底面の長軸は230cm，短軸は80cmである。

埋没土の性状は，ローム粒子とロームブロックの多い褐色土の単一層である。

本址も出土遺物はないが，形態からみて墓壙の可能性が考えられる。

第八号土壙墓（第一四〇図）

本址は，第四Ａ調査区の西端部，Ａ～Ｂ－３から確認した。遺存状態は良好である。

東側１ｍに第九号土壙墓，南東2.5ｍに第一〇号土壙墓が存在する。

開口部の平面形は隅丸長方形，底面形も隅丸長方形である。

開口部の長軸165㎝，短軸115㎝，長軸方向はＮ－29°－Ｅを指向する。

深さ95㎝，底面は平坦である。

底面長軸130㎝，短軸65㎝である。

埋没土の性状は３層に区分される。Ⅰはローム粒子を含む黒褐色土，Ⅱはロームブロックを多量に含む暗褐色土，Ⅲは褐色土でロームが主体である。底面上に２～６㎝の焼土と灰層が堆積する。

本址も，土壙墓の可能性が考えられる。時期は不明である。

第九号土壙墓（第一四〇図）

本址は，第四Ａ調査区の西端部，Ｂ－３から確認した。遺存状態は良好である。

西側１ｍに第八号土壙墓，北東2.5mに第一〇号土壙墓が存在する。

開口部の平面形は楕円形状，底面形は隅丸長方形状を呈する。

開口部の長軸170㎝，短軸103㎝，長軸方向はＮ－0°である。

深さは87㎝で，底面は平坦である。

埋没土の性状は，Ⅰが黒色土，Ⅱはローム粒子を多量に含む暗褐色土，Ⅲは明褐色土である。

底面上に厚さ３㎝の赤褐色土が堆積する。

本址も，土壙墓の可能性が考えられる。時期は不明である。

第一〇号土壙墓（第一四〇図）

本址は，第四Ａ調査区の西端部，Ｂ～Ｃ－３～４から確認した。遺存状態は良好である。

南西2.5ｍに第九号土壙墓，南西３ｍに第八号土壙墓が存在する。

開口部の平面形は隅丸長方形，底面形も隅丸長方形である。

開口部の長軸220㎝，短軸115㎝，長軸方向はＮ－24°－Ｅを指向する。

深さ25㎝，底面は平坦である。底面長軸195㎝，短軸95㎝である。

埋没土は，ローム粒子とロームブロックを混入する暗褐色土の単一層である。

本址も，土壙墓の可能性があるのではなかろうか。時期は不明である。

第一一号土壙墓（第一四〇図）

本址は，第四Ｂ調査区の中央部南東寄り，Ｆ′－２から確認した。遺存状態は良好である。

北東3.5ｍに第四四号住居址，北西1.5ｍに第一二二号土壙が存在する。

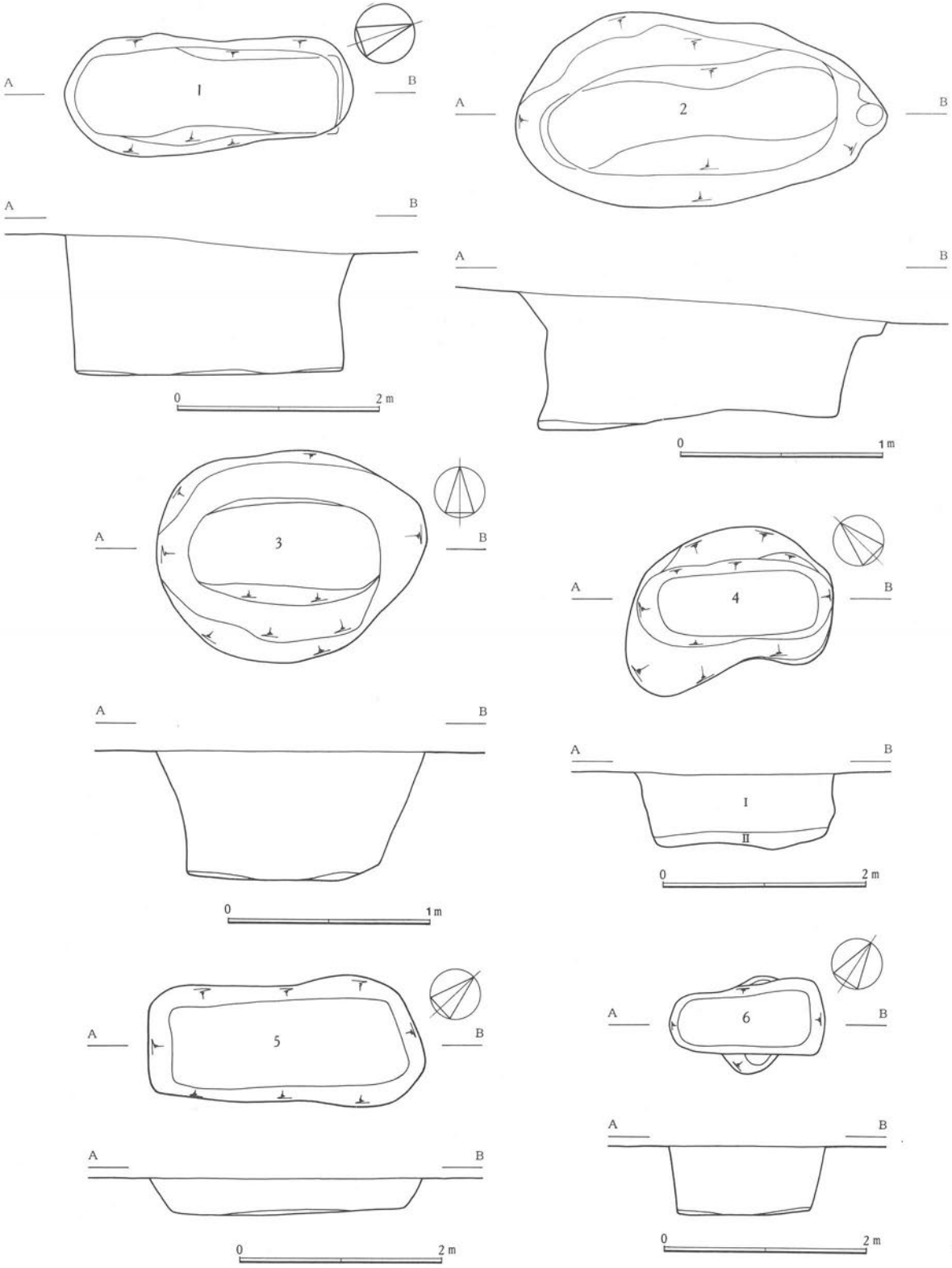
開口部の平面形は長楕円形状，底面形は不整形長方形状を呈する。北東部には張り出し部がある。

開口部の長軸350㎝，短軸117㎝，長軸方向はＮ－35°－Ｅを指向する。

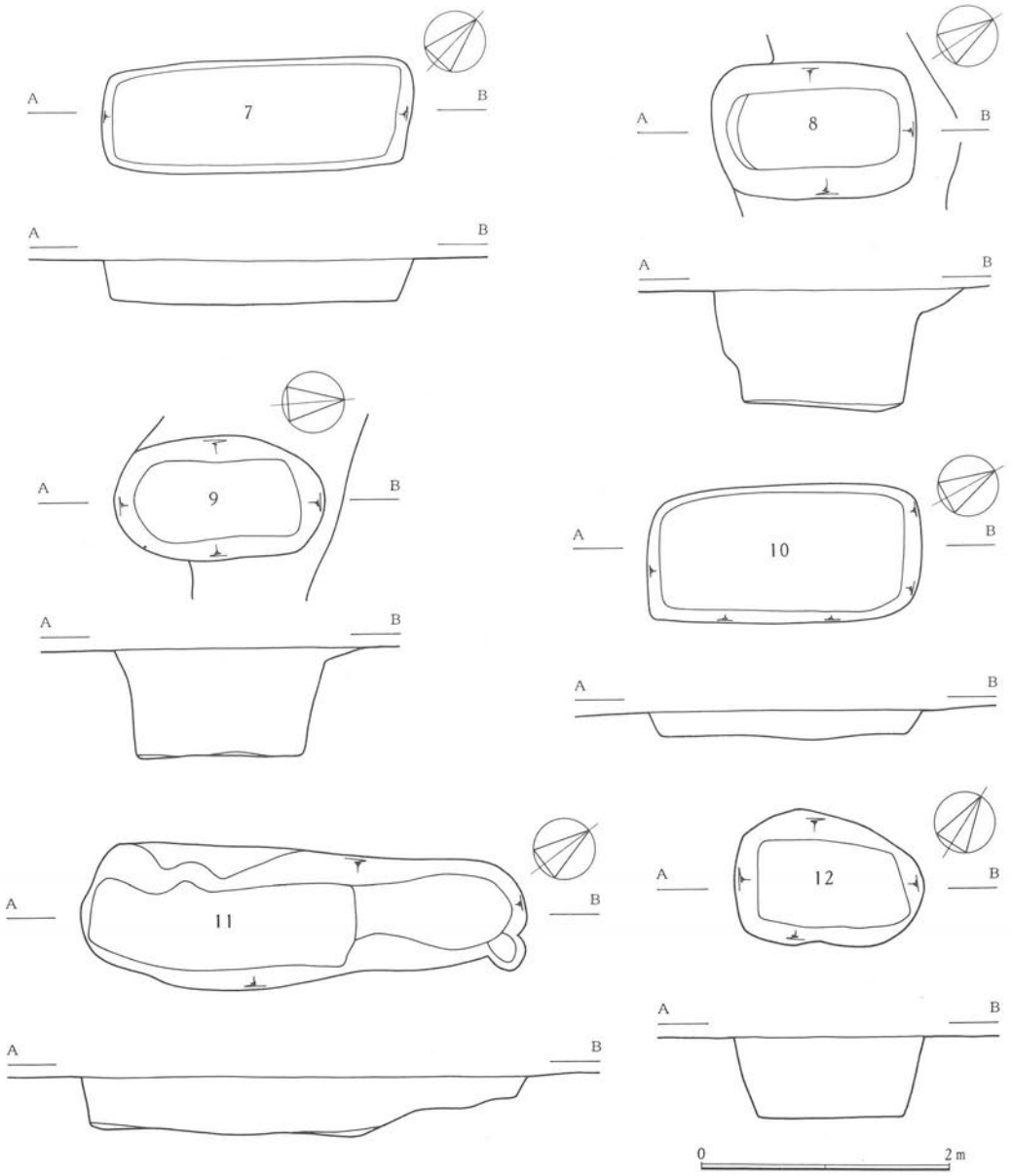
深さ45㎝，底面は平坦である。底面長軸220㎝，短軸65㎝，北東隅に深さ19㎝のピット１個がある。

埋没土は，暗褐色土の単一層で，底面上には厚さ４～５㎝の灰層が堆積する。

本址も，土壙墓の可能性があるものと考えられる。



第一三九図　第一・二・三・四・五・六号土壙墓実測図



第一四〇図　第七・八・九・一〇・一一・一二号土壙墓実測図

第一二号土壙墓（第一四〇図）

本址は，第四Ａ調査区の西端部，Ｃ～Ｄ－４～５から確認された。遺存状態は良好である。

西側１ｍに第一二号溝状遺構が走る。

開口部の平面形は不整楕円形で，底面形は不整長方形状である。

開口部の長軸155cm，短軸105cm，長軸方向はＮ－59°－Ｅを指向する。

深さ65cm，底面は平坦である。底面長軸120cm，短軸70cmである。

埋没土の性状は，ローム粒子とロームブロックを多量に混入する暗褐色土である。

底面上に厚さ５cmの焼土と灰層が堆積する。

本址も，土壙墓ではないかと考えられる。

第九章　地下式殯穸壙の調査

第一号地下式殯穸壙（第一四一図）

本址は，第一調査区の南西端部，Ｂ－10から確認した。全調査区で最も標高の高い所に位置する。

平面形は不整形を呈するが，実体は二つの主室を持つ地下式殯穸である。

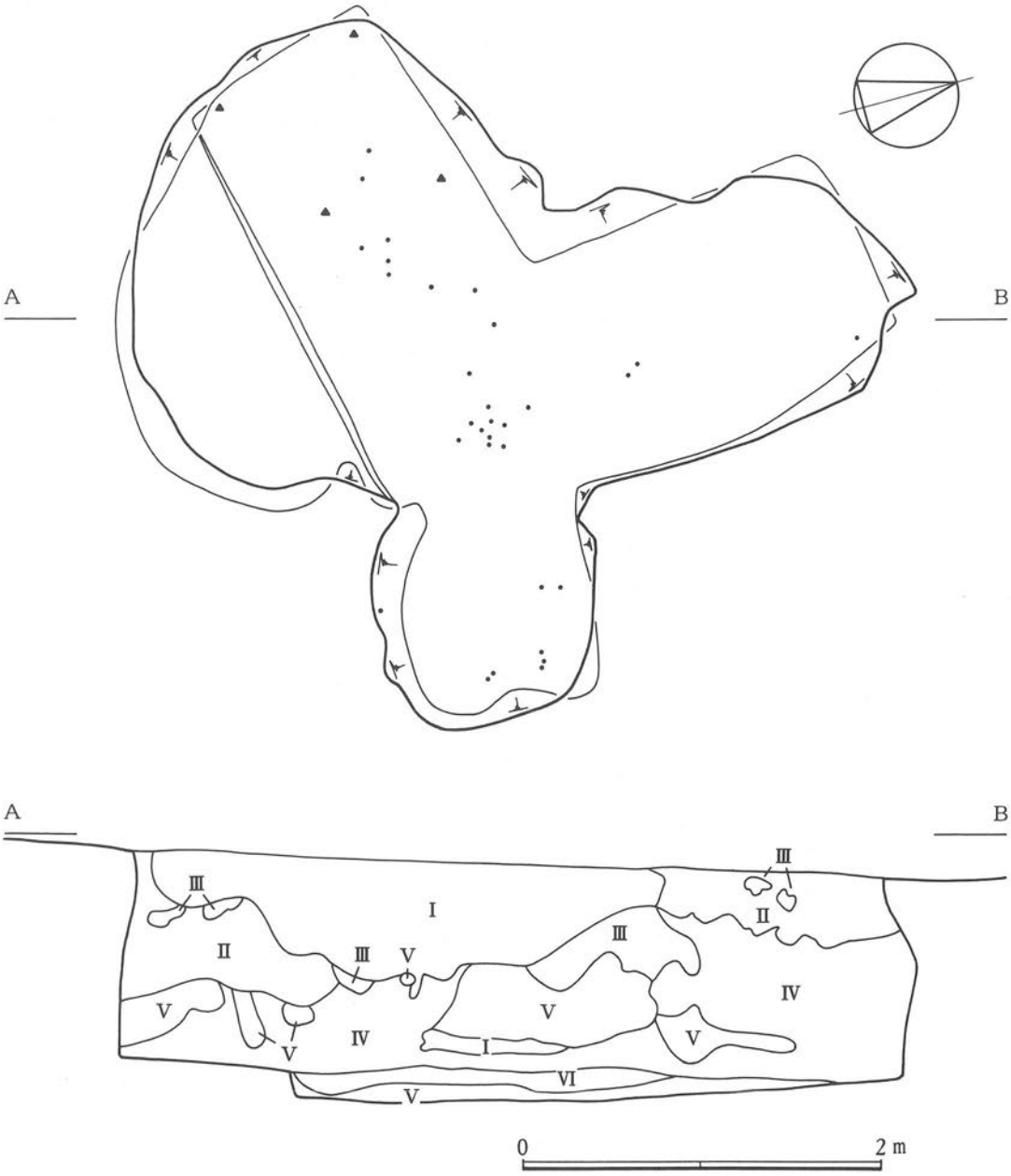
竪壙と直線状の東西方向の主軸線は4.05ｍ，短軸2.55ｍ，深さ135cm，主軸方向はＮ－107°－Ｗを指向する。

南北方向の主軸長は4.25ｍ，短軸1.60ｍ，深さ130cm，主軸方向はＮ－12°－Ｗを指向する。

床面の形状は竪壙が隅丸方形状を呈し，2.50×1.30ｍの二つの長方形が直角に形成されて，二つの主室を構成している。床面は鹿沼層に達しているが平坦で，硬く踏み固められている。

壁は床面まで垂直に掘り下げており，崩落の痕跡は全く認められない。

第一四一図　第一号地下式殯穸壙実測図，遺物出土状態図



遺物は流込みである。竪壙や床面の形状，垂直な壁面の状態などから地下式殯穸と思われる。

第二号地下式殯穸壙（第一四二図）

本址は，第一調査区の南西部，C～D－11から確認した。第一号住居址のカマド左袖部を含む北西部を破壊して構築している。本址のプランの大部分は第一号住居址と重複している。

平面形は隅丸長方形に近い不整形を呈し，西側に張り出し状の突出部がある。

主軸長は3.15m，短軸2.00m，深さ145cm，主軸方向はN－8°－Eを指向する。

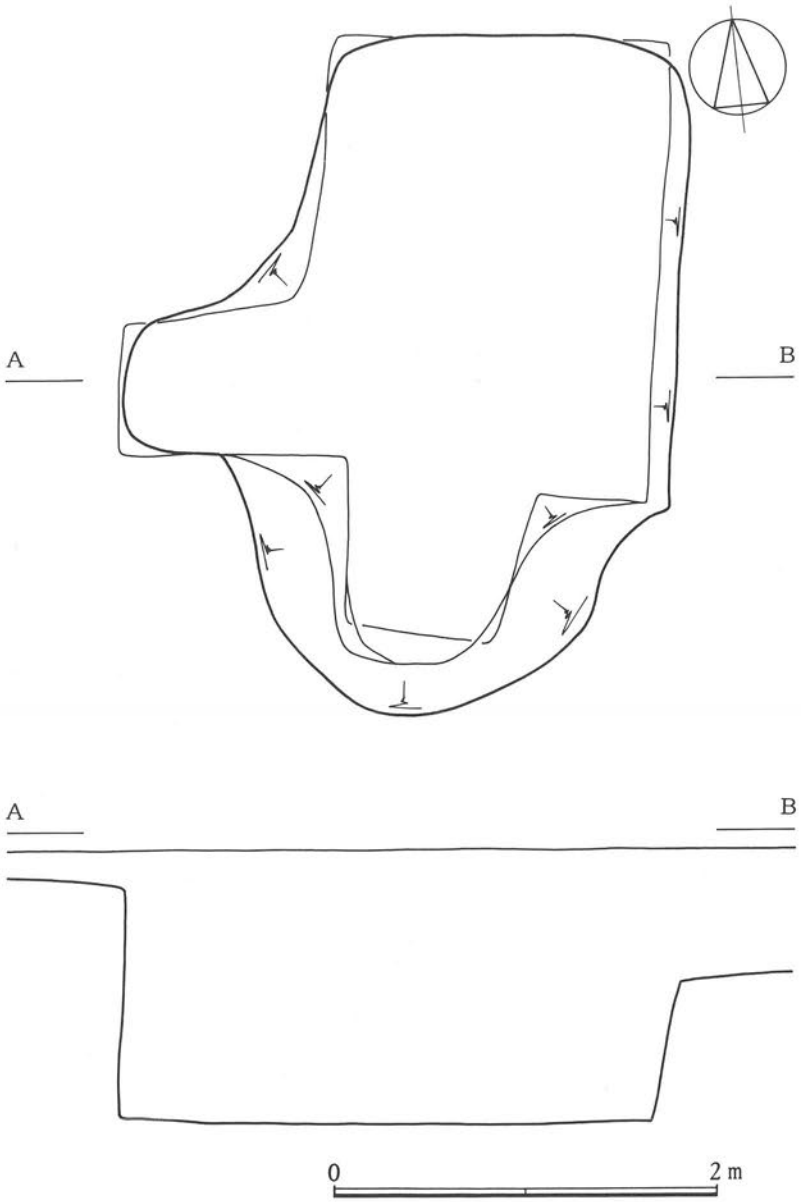
床面の形状は竪壙が方形を呈し，主室は長方形を呈する。

床面は鹿沼層に達しているが，竪壙より一段低くして主室を形成し，平坦で硬く踏み固められている。

壁は床面まで垂直に掘り下げており，崩落の痕跡は全く認められない。

本址は，遺物は出土しないが，掘り方，竪壙や床面の形状，垂直な壁面の状態などから地下式殯穸と思われる。

第一四二図　第二号地下式殯穸壙実測図



第三号地下式殯穸壙（第一四三図）

本址は，第一調査区の西南部，D～E－10から確認した。西側の第三号住居址と接している。

平面形は十字形を呈する。遺存状態は良好である。

南北方向に主軸を持ち長さ4.70m，短軸1.55m，深さ147cm，主軸方向はN－20°－Eを指向する。

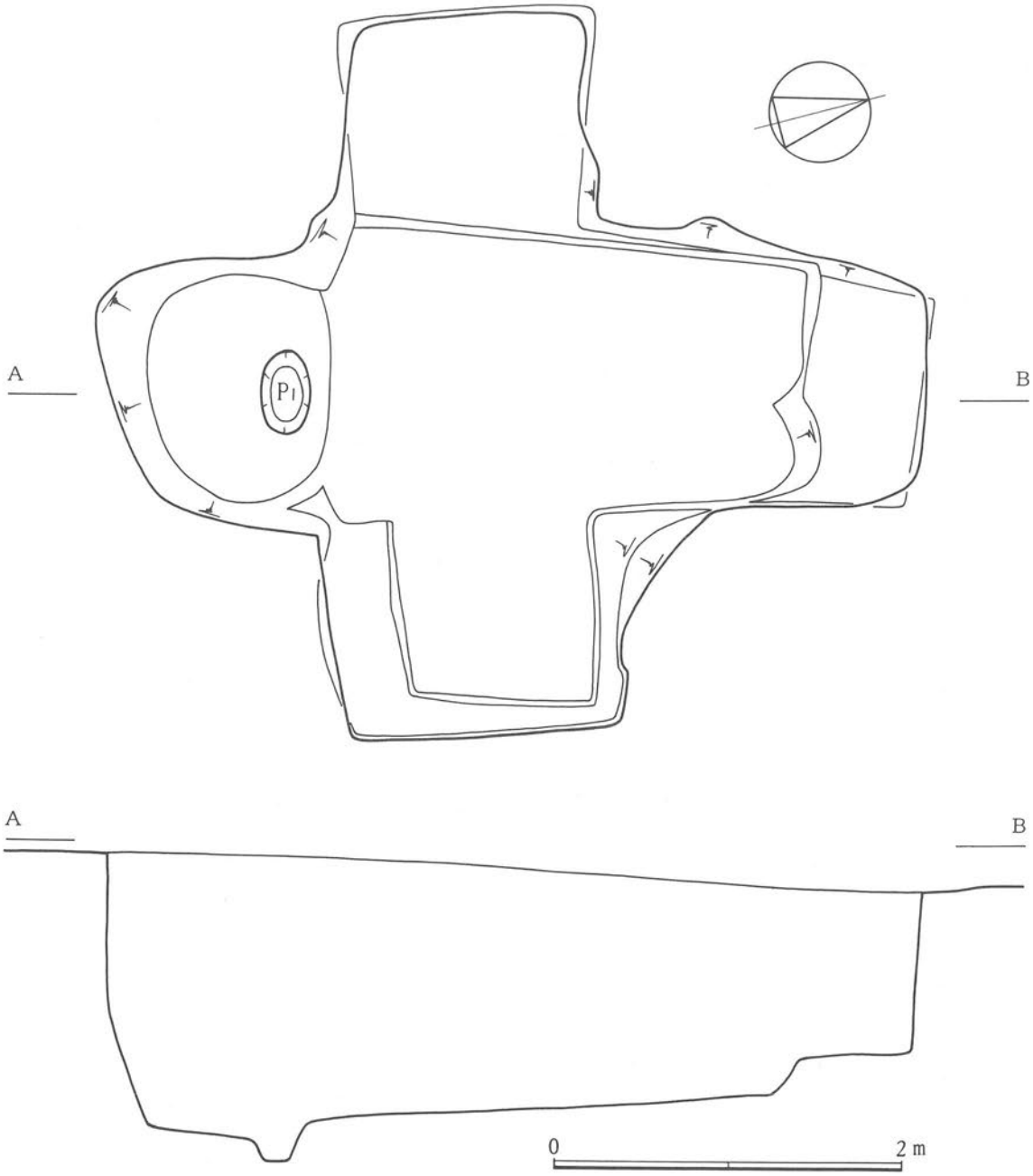
床面の形状は，竪壙が円形を呈し，主室は一段低くなって長方形を呈する。

床面は鹿沼層を掘り抜いて下部ローム層に達しているが，やや南側へ傾斜するものの，全く平坦で硬く踏み固められている。竪壙の床面にピット1個が存在する。

壁は床面まで垂直に掘り下げており，崩落の痕跡は全く認められない。

遺物は出土しないが，形状からみて地下式殯穸と考えられる。

第一四三図　第三号地下式殯穸壙実測図



第四号地下式殯穸壙（第一四四図）

本址は，第一調査区の南西部，E～F－10から確認した。平面形は不整形を呈し，遺存状態は良好である。

南北方向に主軸を持ち，長さ4.65m，短軸2.70m，深さ130cm，主軸方向はN－31°－Eを指向する。

床面の形状は，竪壙が長方形状，主室は張り出しを伴う長方形状であろう。

床面は鹿沼層に達しているが，平坦で硬く踏み固められている。

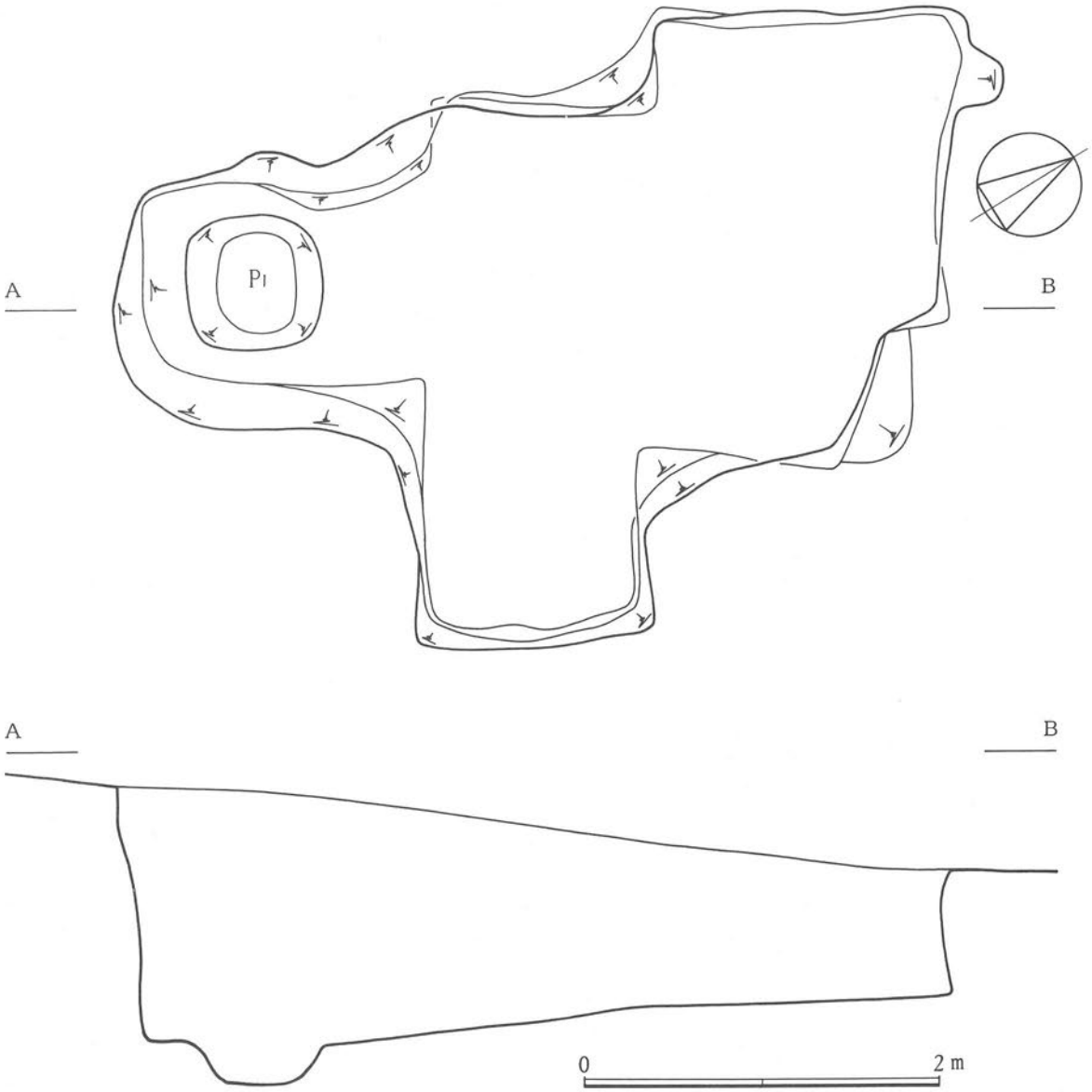
壁は床面まで垂直に掘り下げており，崩落の痕跡は認められない。

本址も遺物は出土しないが，形状からみて地下式殯穸壙であろう。

第五号地下式殯穸壙（第一二図）

本址は，第一調査区の南西部，E－13～14から確認した。第六号住居址の東壁側床面を破壊して構築されている。実測図は作成しなかったが，他の4基と形状・規模が共通しており，地下式殯穸と考えられる。

第一四四図　第四号地下式殯穸壙実測図



第一〇章　井戸址の調査

調査区全域から23基の井戸址を確認した。

地下水脈の水位が高く，大部分の井戸址は湧水が多く完掘は不可能であった。

遺跡のすぐ西方に，雨水を司る高龗神・闇龗神二神を祀る高龗神社が鎮座するが，地下水の水位の高さとかかわりがあるのかも知れない。

第一号井戸址　本址は，第一調査区の南西部，F～G－9から確認した。(第一四五図)

南側50cmに第三号住居址が存在する。

第一号土壙として調査を進めたが，途中から第一号井戸址に改めた。

開口部の平面形は，直径200cmの円形を呈する。

掘り方は，南側は確認面から90cm下位まで内側へ斜めに掘り込み，それより下位は外側へ膨らんで掘り下げている。北側は，確認面から60cm下位までほぼ垂直に掘り下げ，それより下位は外側へ膨らんで掘り下げている。

A－Bセクションで掘り方断面をみると，フラスコ状に近い形状を呈する。

確認面から160cm下位で湧水面に至り，ここで調査を中止した。調査期間中，水位が低くなることはなかった。ステッキボーリングを挿入したところ，水面下100cmに礫層のあることが判明した。

埋没土の性状は，上層から黒褐色土，ロームブロック混入の多い明褐色土，暗褐色土，鹿沼粒子・ロームブロックを多量に含み，小礫も点存する褐色土の順に埋没している。

この層序のあり方は，短時日における人為的埋戻しによるものである。

確認面下80cmの埋没土中から，内耳土器2個（破面接合復元）が出土している。

本址は，中世以降の遺構であろう。

第二号井戸址　本址は，第一調査区の南西部，F－7～8から確認した。(第八図)

第四号住居址の南西部床面を大きく破壊して掘り込んでいる。

開口部の平面形は，直径380cmの円形を呈する。

掘り方は，確認面から70cm下位まで漏斗状に掘り込み，それより下部は最大径290cmの円筒形に掘り下げている。

確認面下90cmで湧水面に達し，調査期間中，水位の上昇することはあっても低下することはなかった。

安全優先のため湧水面に達した時点で調査を中止し，ボーリングステッキを挿入してみたが，底面に届かず，測量用2mの金属ポールを挿入しても達しなかった。

第二・三・四号住居址の調査と同時進行だったので，転落防止には細心の注意をはらった。

埋没土の性状は，黒色調の強い黒褐色土の単一層で，微量のローム粒子と鹿沼粒子が存在する。

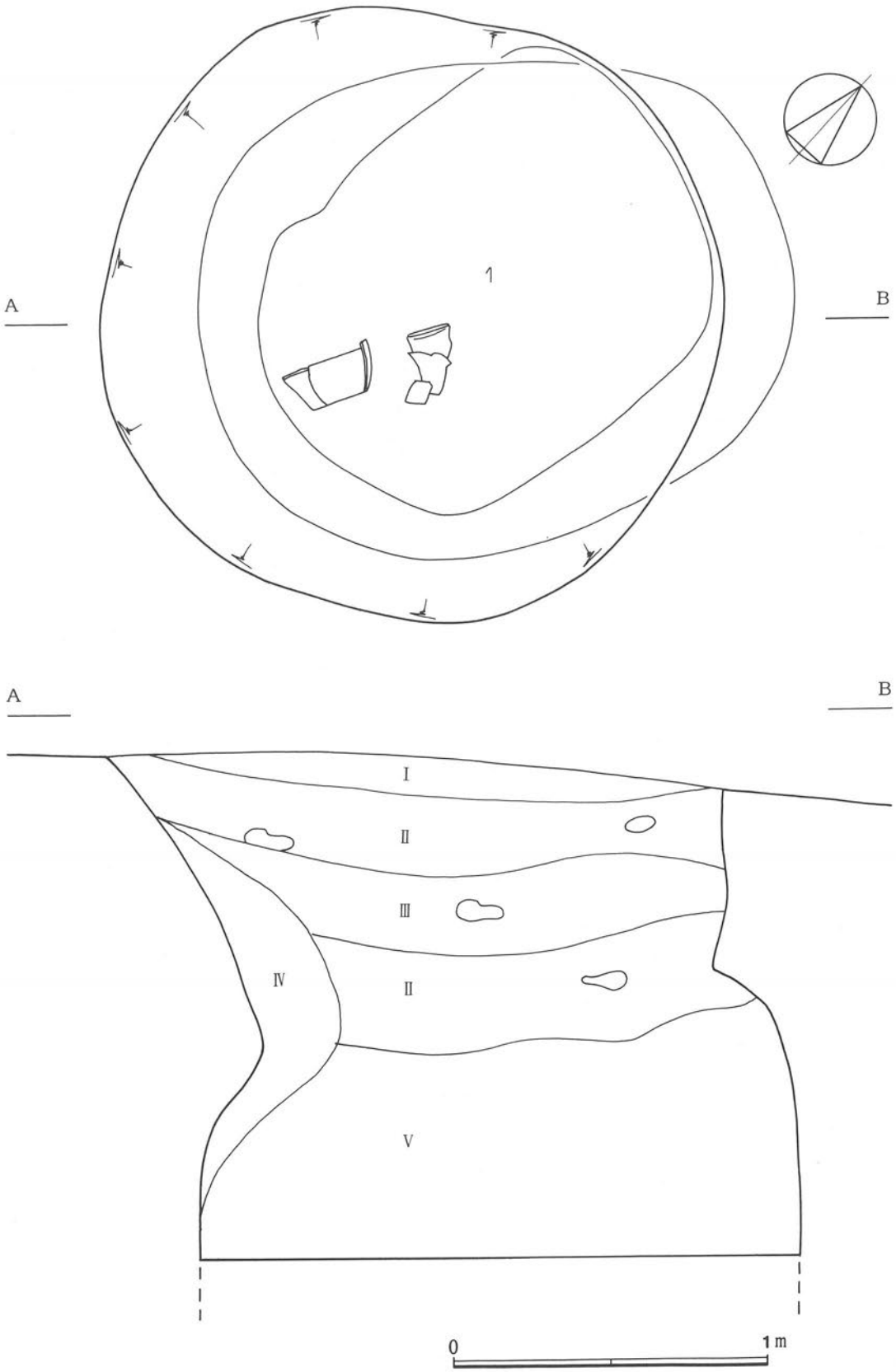
遺物の出土は，上層部東側の埋没土に第四号住居址の土師器片が紛れ込んでいた。

本址は，古墳時代の住居址を切っているので，中世以降の遺構であろう。

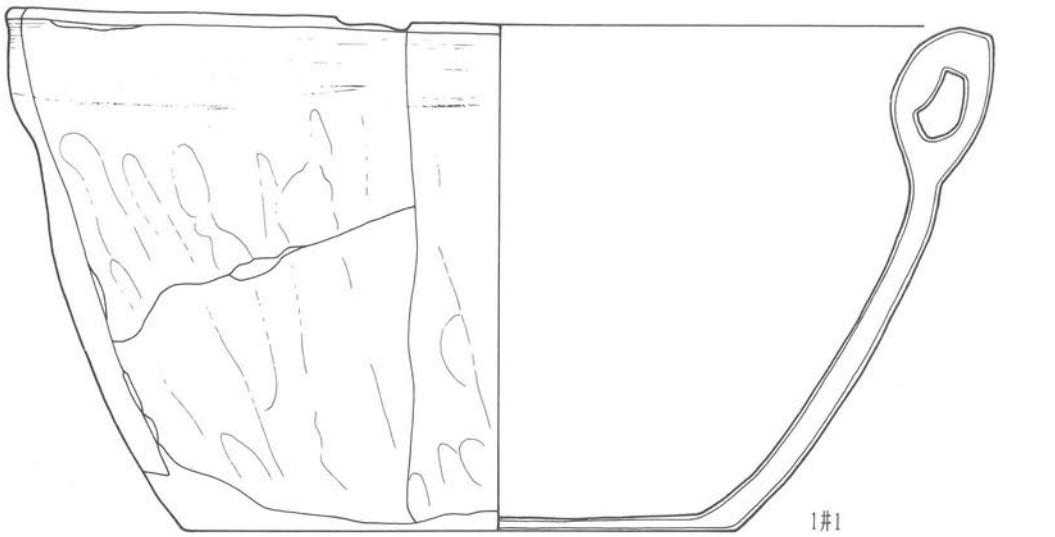
第三号井戸址　本址は，第一調査区の南西部，G～H－8～9から確認した。(第一四七図)

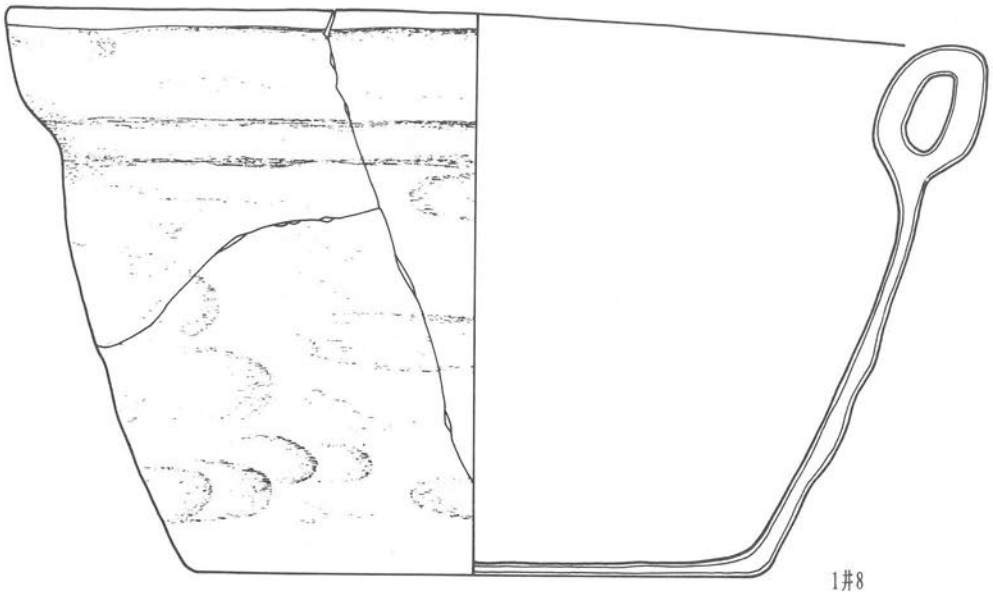
南西2mに第三号住居址が存在する。

開口部の平面形は，直径90cmの円形を呈する。



第一四五図　第一号井戸址実測図





第一四六図　第一号井戸址出土遺物実測図

掘り方は開口部から円筒形状に掘り下げ，135cm下位で湧水面になった。

この時点で調査は中止したが，底面は直径80cmの円形である。

埋没土は上層から，砂質ロームを含む暗褐色土，青白色砂質土を含む褐色土の順に埋没している。

遺物出土はない。本址の時期は不明である。

第四号井戸址　本址は，第一調査区の中央部，J～K－9～10から確認した。(第一四七)

第二二号土壙として調査を進めたが，途中から第四号井戸址に改めた。

開口部の平面形は，直径200cmの円形を呈する。

中央部に2個のピットがあり，径15～17cm，深さ43～45cmであるが，このピットの性格は不明である。

掘り方は，開口部から円筒形状に掘り込み，水面径は190cmの円形となる。

確認面下100cmで湧水面に達し，さらに100cm以上の深度があることを確認して調査を中止した。

埋没土の性状は，上層から暗褐色土，ロームブロックの混入の多い褐色土の順に埋没している。

出土遺物はない。本址の時期は不明である。

第五号井戸址　本址は，第一調査区の中央部北端，L～M－13から確認した。(第一四七図)

第五七号土壙として調査をすすめたが，途中から第五号井戸址に改めた。

開口部の平面形は，直径140cmの不整円形を呈する。

掘り方は，開口部から円筒形状に掘り込み，200cmで湧水面に達し，水面径は125cmの円形となる。

ボーリングステッキによって，水面から深度が100cm以上あることを確認して調査を中止した。

埋没土は，上層からローム粒子を混入する黒褐色土，暗褐色土，ローム混入の割合いが多い褐色土，黄色砂質土を多量に含む明褐色土の順に埋没している。

遺物の出土はない。本址の時期も不明である。

第六号井戸址　本址は，第一調査区の中央部北端，L～M－11～12から確認した。(第一四七図)

第五六号土壙として調査を進めたが，途中から第六号井戸址に改めた。

開口部の平面形は，直径185cmの不整円形である。

掘り方は，開口部より60cm下位まで漏斗状に掘り込み，それより下部は直径120cmの円筒形になって垂直に掘り下げている。

確認面下145cmで湧水面が現れ，水面径は115cmの円形である。

ボーリングステッキを挿入し，水面からの深度がさらに100cm以上あることを確認して調査を中止した。

埋没土の性状は，上層から黒褐色土，暗褐色土，黄色砂質土とロームブロックを多量に混入する褐色土の順で埋没しており，層全体に締りがなく脆弱気味である。

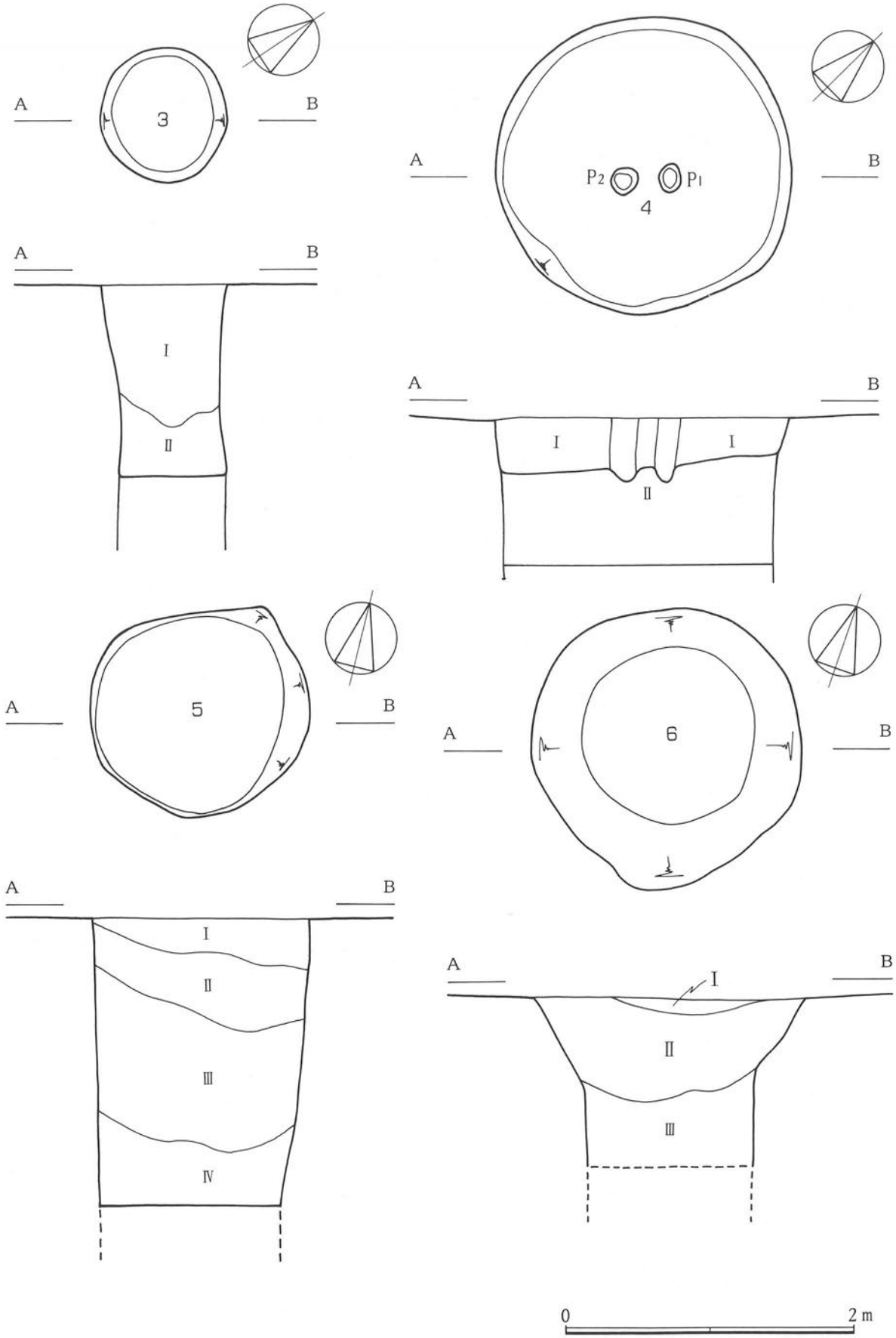
遺物の出土はない。本址の時期も不明である。

第七号井戸址　本址は，第一調査区の北東部，P－11～12から確認した。(第一四八図)

第四二号土壙として調査を進めたが，第七号井戸址に改めた。

開口部の平面形は，直径170cmの円形である。

掘り方は，開口部より75cm下位まで漏斗状に掘り込み，それより下部は直径100cmの円筒形になって垂直に



第一四七図　第三号（左上），第四号（右上），第五号（左下），第六号（右下）井戸址実測図

掘り下げている。

確認面下115cmで湧水面が現れ，水面径は95cmの円形となる。

ボーリングステッキを挿入し，水面からの深度がさらに100cm以上あることを確認して調査を中止した。

埋没土は，上層からローム粒子・ロームブロックを混入する黒褐色土，黄色砂質土・小礫まじりの褐色土の順に埋没している。壁面の崩落の痕跡はない。

出土遺物はない。本址の時期も不明である。

第八号井戸址　本址は，第二調査区の南東部，E'～F'－2～3から確認した。(第一四八図)

第三一号住居址の南壁に接している。

開口部の平面形は，直径135cmの円形を呈する。

掘り方は，開口部より160cm下位までは円筒形状に垂直に掘り込み，それより下部は外側に膨らむフラスコ状に掘り下げている。壁面には若干の崩落痕がみられる。

確認面下230cmで湧水面が現れ，水面径が175cmの円形となる。

ボーリングステッキを挿入したところ，水面下50cmに礫層の存在することが判明した。

埋没土の性状は，上層から，黒褐色土，暗褐色土，褐色土，暗褐色土，明褐色土の順に埋没している。

出土遺物はない。平安時代の住居址の壁面を一部破壊して掘削しているので，本址は，中世以降の遺構であろう。

第九号井戸址　本址は，第三調査区の北西部，G－7から確認した。(第一四八図)

第八三号土壙として調査を進めたが，途中から第九号井戸址に改めた。

東に接して第八号溝状遺構が走る。

開口部の平面形は，直径95cmの円形を呈する。

掘り方は，開口部より円筒形状に掘り込み，確認面下，100cmで湧水面が現れた。

水面径は90cmの円形である。壁面に崩落痕はない。

埋没土は，上層から，暗褐色土，褐色土の順に埋没している。

出土遺物はない。本址は，中世以降の遺構であろう。

第一〇号井戸址　本址は，第三調査区の南西部，G～H－4～5から確認した。(第一四八図)

東側1mに第八号溝状遺構が走る。

開口部の平面形は，直径230cmの円形を呈する。

掘り方は，開口部から130cm下位までは漏斗状気味に掘り込み，その下部は直径10cmの円筒形状に掘り下げている。

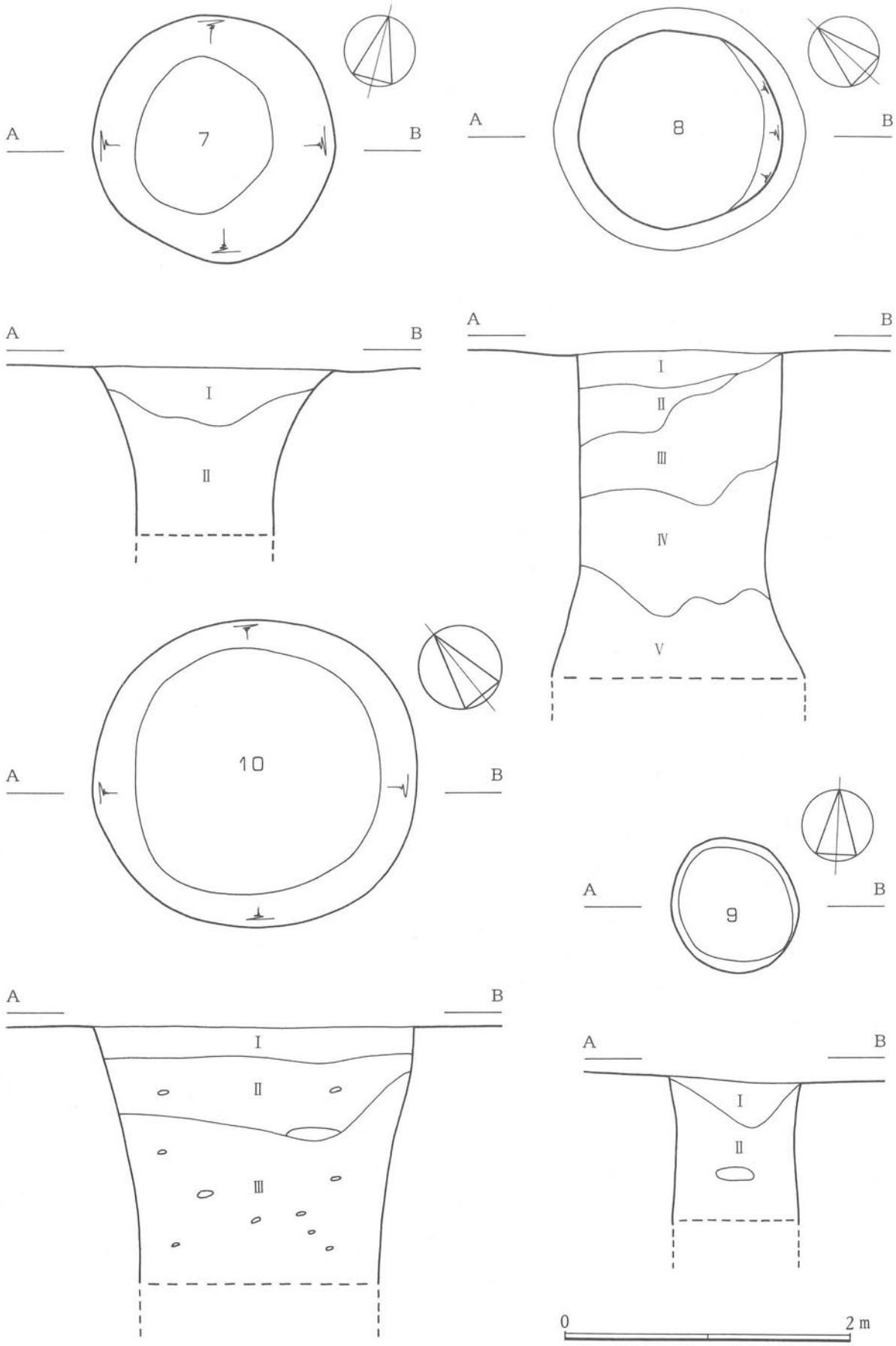
確認面下180cmに透明な滾々たる湧水面が現れ，さらに100cm以上の深度がある。

湧水面は，直径160cmの円形である。

壁面は堅固で，崩落の痕跡は全く認められない。

埋没土は，上層から，黒褐色土，ロームブロックを混入する暗褐色土，黄色砂質土・ロームブロックを多量に混入する褐色土の順に埋没している。

出土遺物はない。本址の時期は不明である。



第一四八図　第七号（左上），第八号（右上），第九号（左下），第一〇号（右下）井戸址実測図

第一一号井戸址　本址は，第三調査区の南西部，H～I－4～5から確認した。(第一四九図)

本址に接した西側を第八号溝状遺構が走る。

第八四号土壙として調査を進めたが，途中から第一一号井戸址に改めた。

開口部の平面形は，直径110cmの円形を呈する。

掘り方は，開口部から60cm下位までフラスコ状に掘り込み，その下部は円筒状に掘り下げている。

確認面下60cmで湧水面が現れ，さらに100cm以上の深度があることを確認して調査を中止した。

埋没土は，粘性のある黒色土の単一層である。

確認面下30cmの埋没土中から自然石1個が出土した。

本址の時期は不明である。

第一二号井戸址　本址は，第三調査区の中央部西寄り，J～K－5～6から確認した（第一四九図）

東南4.5mに第三六号住居址が存在する。

開口部の平面形は，直径260cmの円形を呈する。

掘り方は，確認面直下でフラスコ状となり，150cm下位で円筒状となり，そのまま掘り下げている。

確認面下170cmに湧水面が現れ，この時点で調査を中止した。

湧水面の直径は190cmの円形である。

埋没土の性状は，黒色土の中にローム粒子・黄色砂質土・粘性ロームブロック・小礫などが多量に混入する黒褐色土が充満している。

出土遺物はない。本址の時期も不明である。

第一三号井戸址　本址は，第三調査区の中央部北端，K～L－6～7から確認した（第一四九図）

真南9mに第三六号住居址が存在する。

開口部の平面形は，長径185cm，短径150cmの楕円形状を呈する。

掘り方は，漏斗状に掘り込んだ後，円筒形状に掘り下げたものと思われるが，ローム層の中間に黄色砂質土層が介在するために，その部分が崩落して断面形は複雑な形状を呈する。

確認面下140cmに湧水面が現れ，壁面崩落の危険性を回避するため，水面下の深度が100cm以上あることを確認して調査を中止した。湧水面は，直径90cmの円形である。

埋没土は，上層から，黒褐色土，暗褐色土，黄色砂質土を多量に混入する褐色土A，ローム粒子やロームブロックを多量に含む褐色土Bの順に埋没している。

出土遺物はない。本址の時期も不明である。

第一四号井戸址　本址は，第三調査区の中央部東寄り，D'－5から確認した（第一五〇図）

西側4mに第九号溝状遺構，7mに第三七号住居址が存在する。

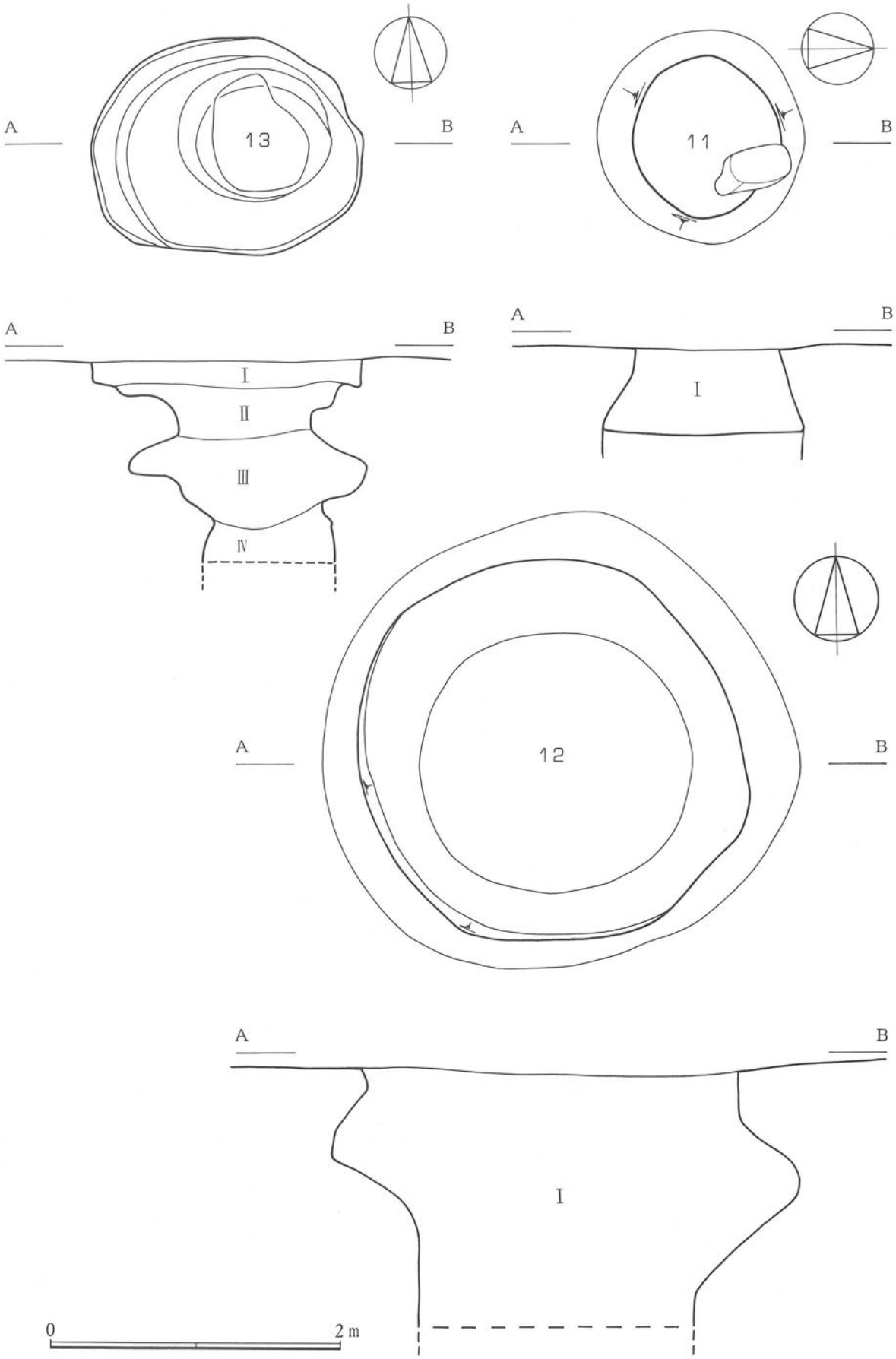
開口部の平面形は，直径250cmの不整円形を呈する。

掘り方は，ほぼ円筒形状に掘り込まれている。

確認面下150cmに湧水面が現れ，水面下さらに200cm以上の深度があることを確認して調査を中止した。

湧水面の直径は190cmの円形である。

埋没土は，上層から，黒褐色土，ローム粒子を多量に混入する褐色土の順に埋没している。



第一四九図　第一一号（右上），第一二号（下），第一三号（左上）井戸址実測図

出土遺物はない。本址の時期も不明である。

第一五号井戸址　本址は，第三調査区の北東部，F'～G'－５～６から確認した（第一五〇図）

南東7.5ｍに第四一号住居址が存在する。

開口部の平面形は，直径110cmの円形を呈する。

掘り方は，おおむね円筒形状に掘り下げて，確認面下110cmで砂混じりの礫層に達する。

この時点では湧水はなかったが，30cm下位には湧水のあることを確認した。

底面形状は，直径90cmの不整円形である。

埋没土は，ローム粒子・ロームブロック・黄色砂質土を混入する暗褐色土である。

出土遺物はない。本址の時期も不明である。

第一六号井戸址　本址は，第三調査区の中央部南東寄り，B'－３～４から確認した（第一五〇図）

東側３ｍに第九号溝状遺構，北側３ｍに第三七号住居址が存在する。

開口部の平面形は，直径100cmの円形を呈する。

掘り方は，全体としては円筒形状といえるが，断面図に示すようにすっきりとはしていない。

確認面下100cmで青白色砂質土に達する。この20cm下位が湧水面であった。

底面形状は，直径90cmの円形である。

埋没土は，上層がローム粒子を混入する暗褐色土，下層は砂質土の多い褐色土である。

出土遺物はない。本址の時期も不明である。

第一七号井戸址　本址は，第四Ａ調査区の中央部南端から確認した（第一五一図）

開口部の平面形は，直径250cmの円形を呈する。

掘り方は，ほぼ円筒形状に掘り込み，確認面下140cmに湧水面が現れた。

湧水面の形状は，直径190cmの円形である。

壁面は堅固で，崩落の痕跡は全く認められない。

水面下80cmで礫層に達することを確認して調査を中止した。

埋没土の性状は，ロームブロックの混在する粘性の強い黒褐色土の単一層である。

出土遺物はない。本址の時期も不明である。

第一八号井戸址　本址は，第四Ａ調査区の中央部北寄り，Ｆ－４～５から確認した（第一五一図）

開口部の平面形は，直径90cmの不整円形である。

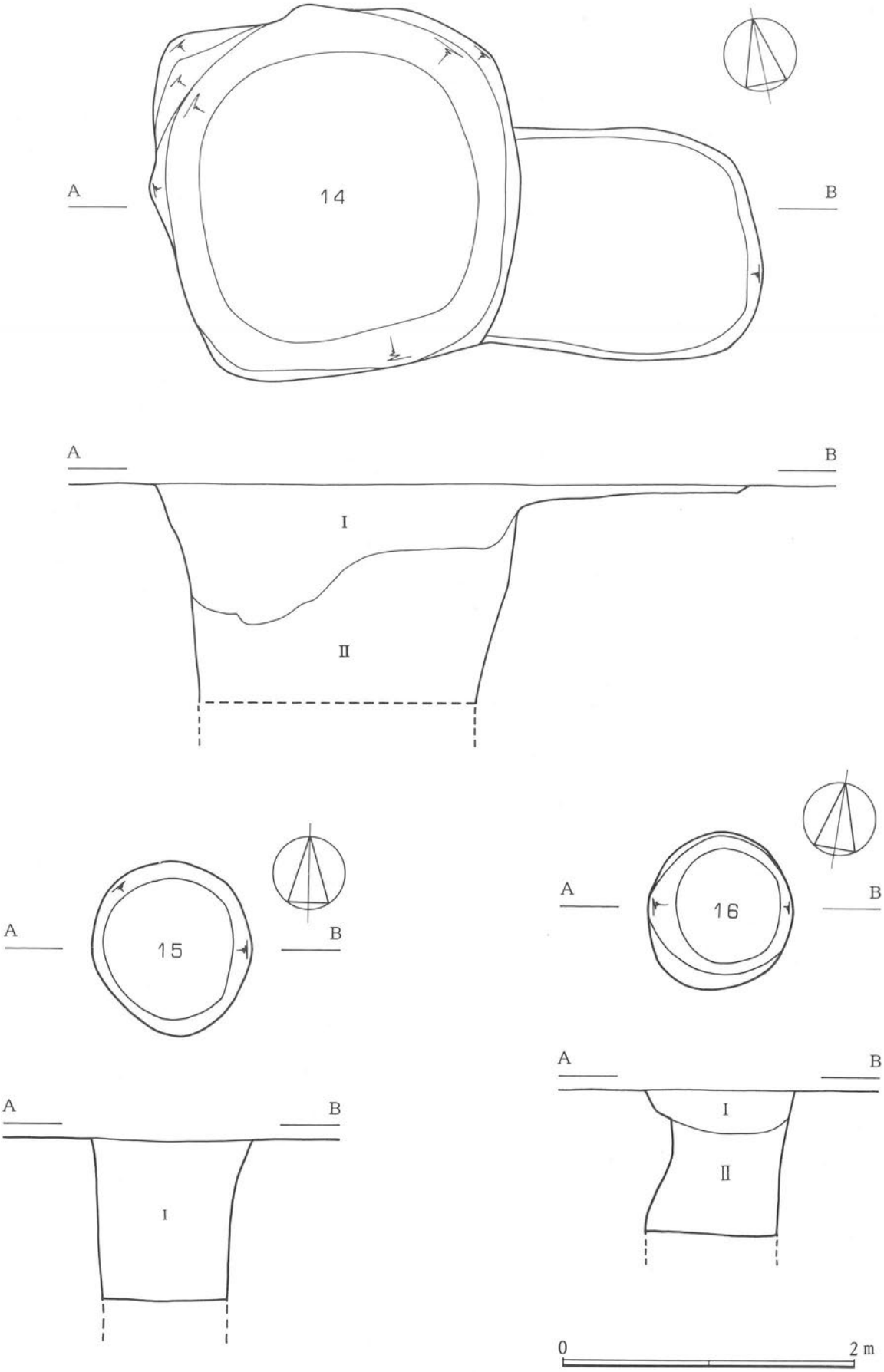
掘り方は，開口部より60cm下位までは円筒形状に掘り込み，そこより下位は大きく外側に膨らむフラスコ状になる。これは人為的な掘り込みではなく，砂質ローム層のために崩落したものである。

確認面下150cmに湧水面が現れた。

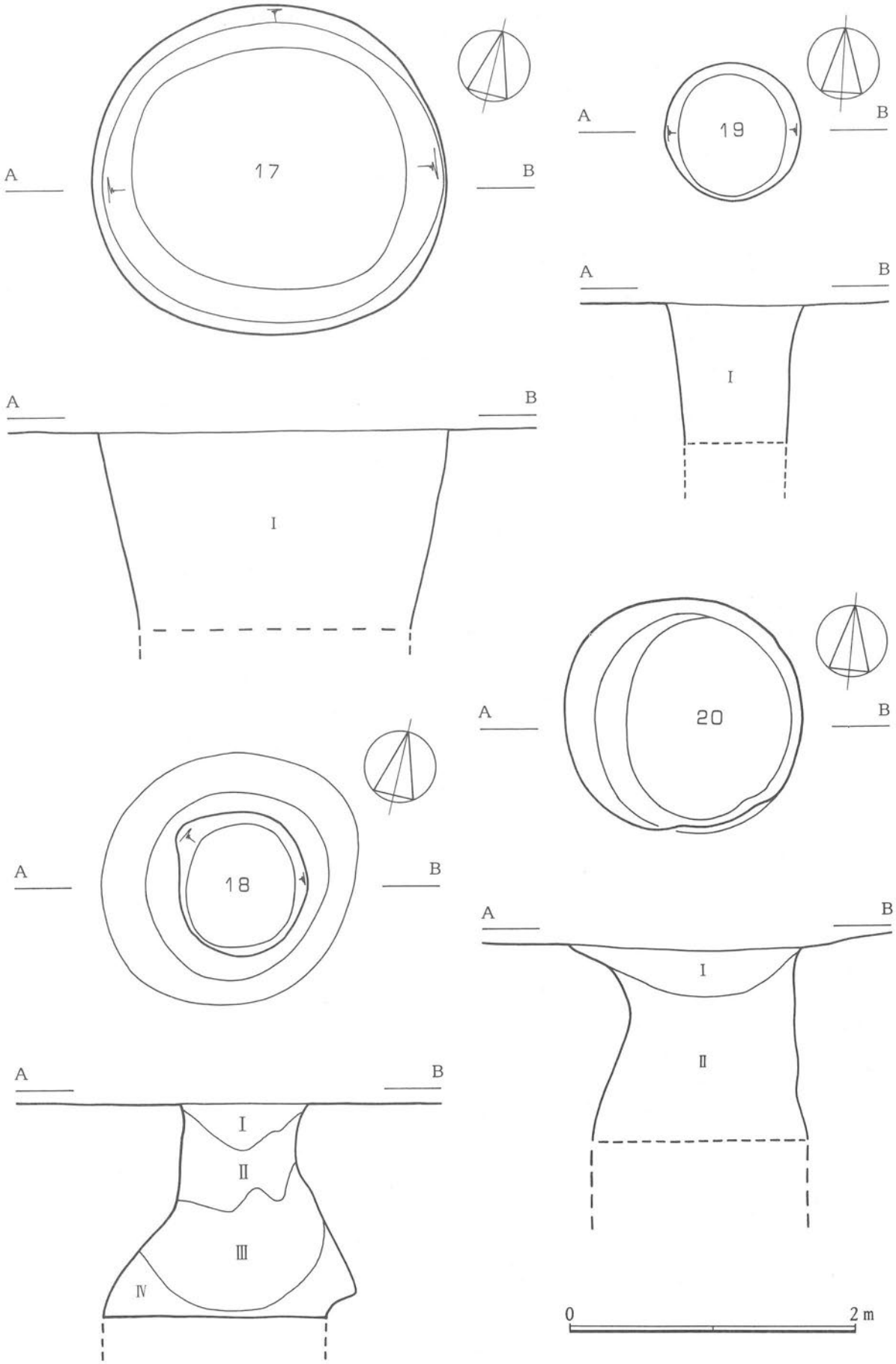
ボーリングステッキを挿入し，さらに水面下100cm以上の深度があることを確認して調査を中止した。

湧水面の形状は，直径175cmの円形で，開口部直径の２倍である。

埋没土の性状は，上層から，黒色土にローム粒子が混入する黒褐色土，ローム粒子やロームブロックの混入が多い暗褐色土，一際ローム混入の多い褐色土Ａ，黄色砂質土が主体を占める褐色土Ｂの順に埋没している。



第一五〇図　第一四号（上），第一五号（左下），第一六号（右下）井戸址実測図



第一五一図　第一七号（左上），第一八号（左下），第一九号（右上），第二〇号（右下）井戸址実測図

自然と人為と両面が考えられる層序のあり方である。

遺物は出土しない。本址の時期も不明である。

第一九号井戸址　本址は，第五調査区の西部，C～D－4～5から確認した（第一五一図）

西側2mに第四八号住居址，東側50cmに第四九号住居址が存在する。

開口部の平面形は，直径120cmの円形を呈する。

掘り方は，開口部より円筒形状に掘り下げ，確認面下100cmで湧水面が現れた。

壁面は堅牢で，崩落の形跡は全く認められない。

湧水面の形状は，直径80cmの円形である。

ボーリングステッキを挿入し，水面下さらに100cm以上の深度があることを確認して調査を中止した。

埋没土の性状は，ローム粒子・ロームブロックを混入する黒褐色土の単一層である。

遺物は出土しない。本址の時期も不明である。

第二〇号井戸址　本址は，第五調査区の中央部南寄り，H～I－2～3から確認した（第一五一図）

北側4.5mに第五〇号住居址が存在する。

開口部の平面形は，直径165cmの円形を呈する。

掘り方は，第一六号井戸址に近似する。

壁面は堅固で，崩落の痕跡は全く認められない。

確認面下135cmに湧水面が現れた。

湧水面の形状は，直径150cmの円形状である。

ボーリングステッキを挿入し，水面下さらに100cm以上の深度があることを確認して調査を中止した。

埋没土の性状は，上層がローム粒子を混入する黒褐色土，下層は，ローム粒子・ロームブロック・黄色砂質土の混入が多い褐色土である。

遺物は出土しない。本址の時期も不明である。

第二一号井戸址　本址は，第五調査区の東部，N～O－3～4から確認した（第一五二図）

開口部の平面形は，直径135cmの円形を呈する。

掘り方は，やや袋状に掘り下げ，確認面下70cmで湧水面が現れた。

壁面は堅固で，崩落の痕跡は全く認められない。

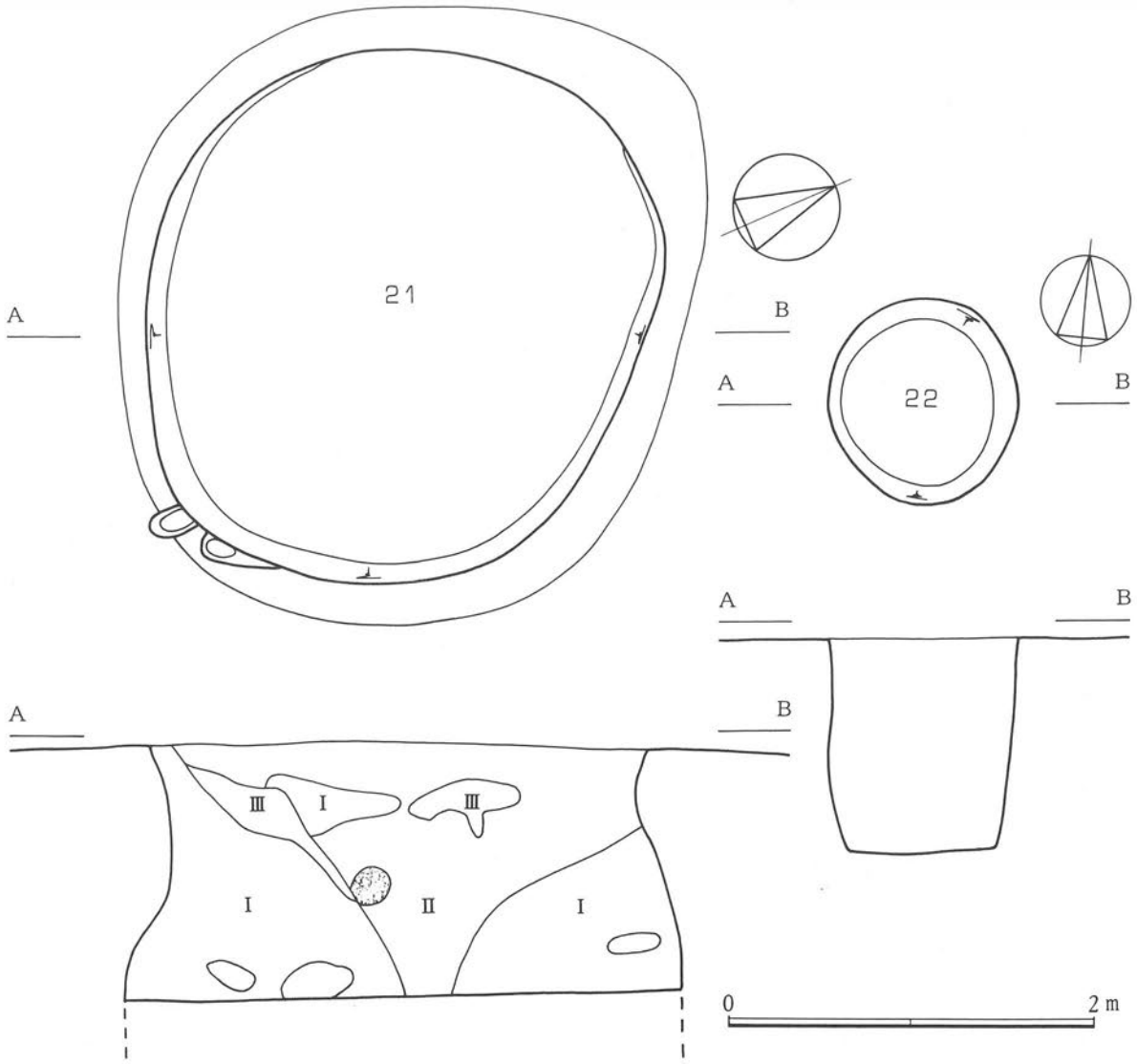
湧水面の形状は，直径155cmの不整円形である。

ボーリングステッキを挿入し，水面下さらに100cm以上の深度があることを確認して調査を中止した。

埋没土の性状は，Ⅰ　黒褐色土　黒色土がベースで，ローム中・大ブロックが湧水面直上まで散在。小礫も点在する。湿性があり締っている。Ⅱ　暗褐色土　粘土ブロック・ローム粒子が多く，炭化物粒子も少量混在する。この層には小礫の混入が多い。Ⅲ　明褐色土　ロームが主体である。

この層序の在り方は，炭化粒子や礫の混入は，短時日に人為的に埋戻されたことを物語るものである。

遺物は出土しない。本址の時期も不明である。



第一五二図　第二一号（左），第二二号（右）井戸址実測図

第二二号井戸址　本址は，第四Ｂ調査区の東部，Ｈ'～Ｉ'－３から確認した（第一五二図）

西側7.5ｍに第四四号住居址が存在する。開口部の平面形は，直径110㎝の円形を呈する。

掘り方は，開口部から円筒形状に掘り下げ，ローム層の下の礫層を20㎝掘り込んで，確認面下120㎝に湧水面が現れる。

潺々たる水量のため，120㎝という深さではあるが，この面を底面と見做すことにした。

底面の形状は，直径80㎝の円形を呈する。

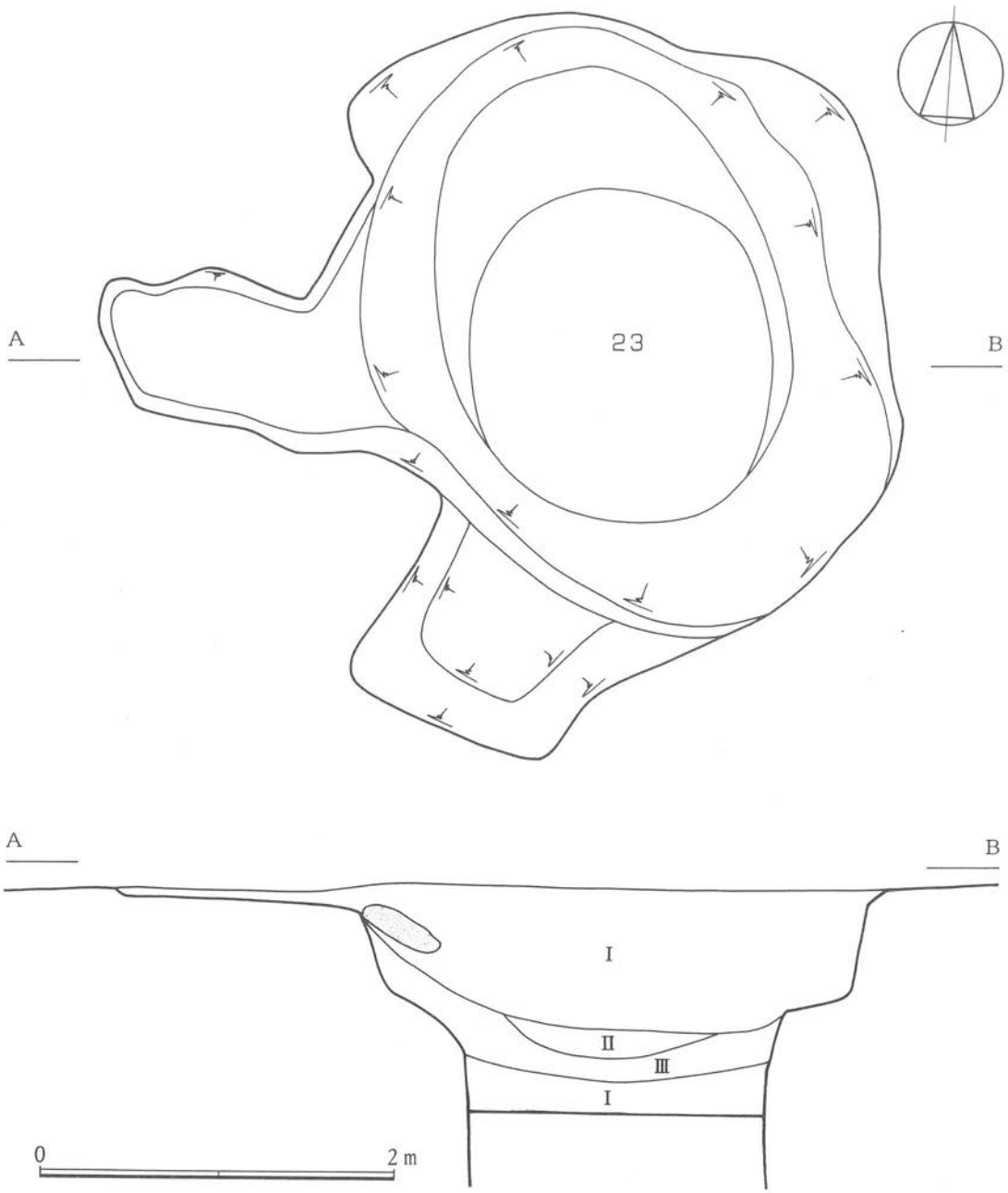
壁面は堅固で崩落の痕跡は認められない。

埋没土の性状は，ローム粒子・ロームブロック・黄色砂質土・小礫を含む暗褐色土である。

遺物は出土しない。本址の時期も不明である。

第二三号井戸址　本址は，第四Ｂ調査区の南東部，Ｈ'－２から確認した（第一五三図）

北西側７ｍに第四四号住居址が存在する。



第一五三図　第二三号井戸址実測図

開口部の平面形は，長径250㎝，短径220㎝の楕円形状を呈する。

掘り方は，確認面の下位70㎝まで漏斗状に掘り込み，これより下部は直径170㎝の円筒状で掘り下げている。

確認面下130㎝に湧水面が現れる。さらに200㎝以上の深度があることを確認した。

壁面は堅固で崩落の痕跡は全く認められない。

湧水面の形状は，直径170㎝の円形である。

埋没土の性状は，Ⅰ　暗褐色土　ローム粒子混入。Ⅱ　明褐色土　ローム主体。Ⅲ　褐色土　黄色砂質土，ローム粒子を多量に含み，小礫も点在する。最下層のⅠは，最上層のⅠよりやや黒色土の混入が多い。

この層序の在り方は，周囲の土砂の自然流入ではないことは明白である。

遺物は出土しない。本址は中世以降の遺構のように思われる。

第一一章　掘立柱建物遺構の調査

第一号掘立柱建物遺構（第一五四図）

本遺構は，第二調査区の南東部，F′～G′－7～9から確認した。

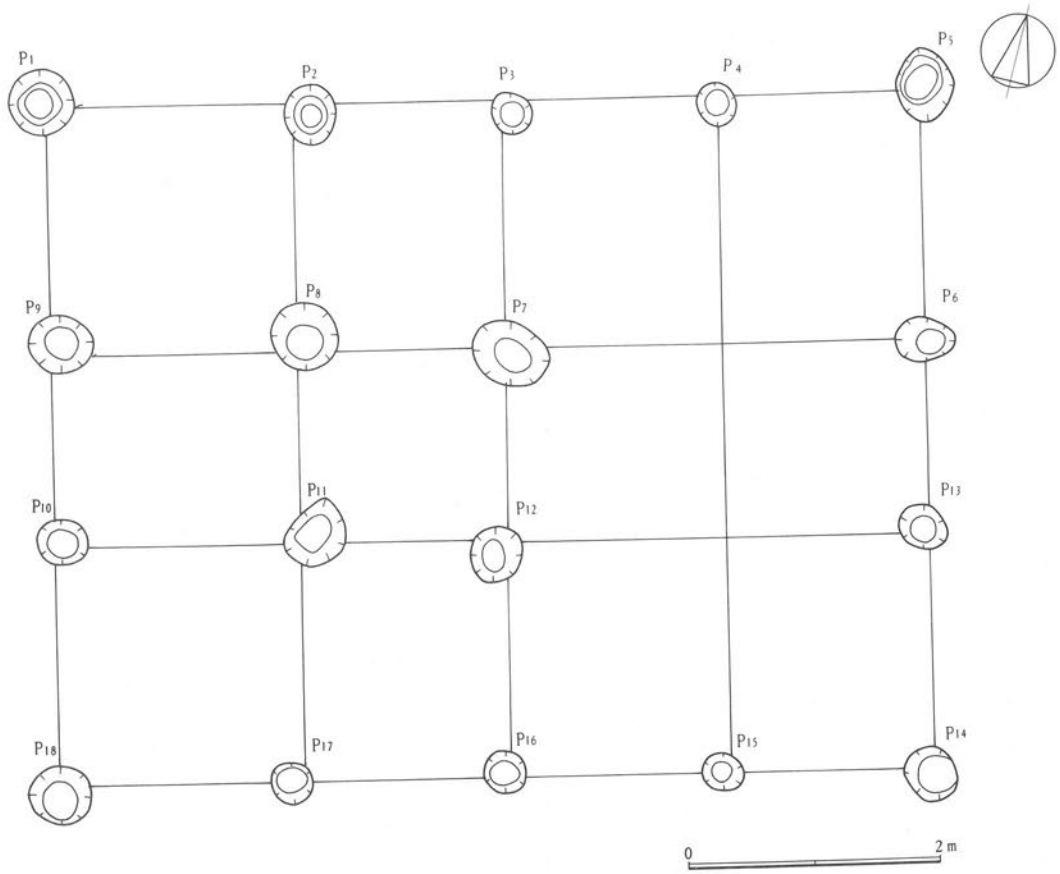
北西4mに第二九号住居址，南側15mに第三二号住居址が存在する。

平面形は，北側の長さ7.00m，南側7.00m，東側5.50m，西側5.55mを測り，長方形を呈する。

長軸方向は，N－17°－Eを指向する。出土遺物はない。

表11　第一号掘立柱遺構柱穴計測値　（単位cm）

No	径	深さ	No	径	深さ	No	径	深さ	柱穴間(縦)	長さ	柱穴間(縦)	長さ	柱穴間(横)	長さ	柱穴間(横)	長さ
P1	52×50	75	P8	55×52	22	P15	32×28	25	P1～P9	190	P7～P12	160	P1～P2	215	P10～P11	200
P2	47×42	37	P9	50×45	22	P16	35×33	44	P9～P10	160	P12～P16	175	P2～P3	160	P11～P12	145
P3	33×30	14	P10	41×35	24	P17	33×33	55	P10～P18	200	P4～P15	530	P3～P4	160	P12～P13	340
P4	35×30	28	P11	55×43	23	P18	49×46	62	P2～P8	180	P5～P6	205	P4～P5	165	P18～P17	185
P5	60×47	89	P12	45×43	19				P8～P11	155	P6～P13	150	P9～P8	195	P17～P16	170
P6	47×35	35	P13	40×35	29				P11～P17	190	P13～P14	195	P8～P7	165	P16～P15	175
P7	63×50	23	P14	44×40	68				P3～P7	190			P7～P6	330	P15～P14	170



第一五四図　第一号掘立柱建物遺構実測図

第一二章　溝状遺構の調査

本遺跡からは14条の溝状遺構を確認した。

第一号溝

本址は，第一調査区から確認した。逆「L」字状の溝である。

L～M－3の南壁から現れた溝は，北東方向に直線で50m走り，一方H～I－13～14から現れた溝は，南東方向に直線で70m走り，2条の溝はP～Q－8で直角に結ばれ，逆「L」字状の1条の溝となる。

つまり，北壁と東壁に並行した2条の溝が直角に結ばれて，全長120mの1条の溝になったことになる。

掘り方の断面形は，舟底状と逆台形状を呈し，上幅最小70cm，最大150cm，底面幅50～65cm，深さ45～55cmである。底面はおおむね平坦である。

埋没土の性状は，黒色土とローム粒子の混合土である暗褐色土で，粘性ロームブロックも混在する。

比高差4mの斜面が平坦面に移行した境の面に設けられたこの溝の性格は，排水の目的ではなく，溝の内側に存在する地下式殯穸壙や墓壙などの，墓域を画する溝のように考えられる。

北壁側の溝の埋没土中からはカワラケ（土師質土器）や，内耳土器片が多数出土しており，中世の遺構のように思われる。

第二号溝

本址は，第一調査区の東壁際から確認した。

Q－4～5からR－6～7に至る直線状の長さ12mの溝で，先端は撹乱によって切られている。

上幅60cm，底面幅30cm，掘り方の断面形は「U」字状を呈する。深さは20cmである。

出土遺物はなく，時期や性格は不明である。

第三号溝

本址は，第一調査区の北壁，P～Q－11に現れ，第二調査区に入って北東方向に曲折しながら，東壁I'～5外へ埋没する。第三一・三二・三四号住居址の東側1.2～4.1mを通過する。長さは28mである。

第二調査区では，G'～H'－2からG'～H'－3まで並走する長さ8.4mの短い溝がある。

曲折する溝の上幅は115cm，底面幅25cm，深さ20cm，掘り方断面形は舟底状を呈する。

埋没土の性状は，ローム粒子・ローム小ブロックを混入する暗褐色土である。

出土遺物はなく，時期や性格は不明である。

第四号溝

本址は，第二調査区の西壁際，B～17に現れ，東側へ「へ」の字に走りながら，第一一号住居址の北壁を破壊し，E～F－17～18に至って消滅する。長さ17.5mである。

上幅は50cm，底面幅17cm，深さは9cmである。掘り方断面形は舟底状を呈する。

埋没土の性状は，ローム粒子を多量に含む褐色土で，黄色砂質土も混在する。

出土遺物はないが，古墳時代の住居址を破壊しているので，それ以降の時期の遺構であろう。

性格は不明である。

第五号溝

本址は，第二調査区のＦ－13～14に現れ，東側へ直線状に走り，第一四号住居址の南側1.5ｍを通過し，第一五号住居址の西壁1.5ｍ手前で消滅する。長さは15ｍである。

上幅は35cm，底面幅は18cm，深さは15cmである。掘り方断面形は「U」字状を呈する。

埋没土の性状は，ローム粒子を多量に混入する暗褐色土である。

出土遺物はなく，時期や性格は不明である。

第六号溝

本址は，第二調査区の中央部，Ｉ～Ｊ－11～12に現れ，第一七号住居址の南西隅Ｙコーナーを掠めて，南東方向に直線状に走り，Ｋ－11で消滅する。長さは6.7ｍである。

上幅は110cm，底面幅は55cm，深さは28cmである。掘り方断面形は舟底状を呈する。

埋没土の性状は，ローム粒子・ローム小ブロックを混入する暗褐色土である。

出土遺物はなく，時期や性格は不明である。

第七号溝

本址は，第三調査区の中央部西寄り，Ｆ～Ｇ－４に現れ，北東方向へ直線状に走り，Ｈ－５～６で第八号溝と「X」字状に交差して，北壁際のＩ－６～７で消滅する。長さは18.5ｍである。

上幅は58cm，底面幅40cm，深さ25cmである。掘り方断面形は逆台形状を呈する。

埋没土の性状Ｉは，ローム粒子の混入が多い暗褐色土，Ⅱは，ロームがベースの褐色土である。

層中には，青白色粘土ブロックが点在する。

出土遺物はなく，時期や性格は不明である。

第八号溝

本址は，第三調査区の中央部西寄り，Ｈ－３～４に現れ，やや北西方向に向きを変えながら弧状に走り，Ｈ－５～６で第七号溝と「X」字状に交差して，北壁のＧ－７に埋没する。

その延長線上には第四Ａ調査区に第一一号溝があり，これと円弧状につながるものと判断できる。

上幅は75cm，底面幅30cm，深さは27cmである。掘り方断面形は舟底状を呈する。長さは20cmである。

埋没土の性状は，ローム粒子を多量に含む暗褐色土で，ローム小ブロックも少量点在する。

出土遺物はなく，時期や性格は不明である。

第九号溝

本址は，第三調査区の中央部東寄り，C'の南壁より現れ，第三九号住居址の北壁側を130cmの幅で破壊して，ほぼ真北に向って走り，第三八号住居址の南側１ｍを通過して北壁外へ埋没する。

その延長線上には，第四Ｂ調査区の第一〇号溝があり，さらにその延長線上には第五調査区の第一四号溝がある。この３条の溝は，直線的な１条の溝と見做すことができよう。

上幅は130cm，底面積は65cm，深さは72cmである。掘り方断面形は逆台形を呈する。長さは31ｍである。

埋没土の性状Ｉは，黒色土がベースで，ローム粒子とローム小ブロックを混入する暗褐色土，Ⅱはロームと黄色砂質土の混合土である。

出土遺物はないが，古墳時代の住居址を破壊しているので，それ以降の遺構であろう。

性格については不明である。

第一〇号溝

本址は，第四Ｂ調査区の西端部，Ｌ～Ａ'のの南壁より現れ，第四六号住居址に接して真北に向って走り，Ａ'の北壁外へ埋没する。第九号溝の延長であることは前述のとおりである。

上幅は155cm，底面幅は65cm，深さは105cmである。掘り方断面形は撓形を呈する。長さは21ｍである。

埋没土の性状は，Ⅰが小礫の散在する固く締った黒色土，Ⅱは黒色土と粘性ロームの混合土で，小礫が点在する暗褐色土，Ⅲは砂質ロームに少量の黒色土が混入する明褐色土である。

出土遺物はない。時期や性格は前述のとおりである。

第一一号溝

本址は，第四Ａ調査区の南西部，Ｅ～Ｆの南壁に現れ，北西方向に弧を描きながら走り，西壁２～３外へ埋没する。第三調査区の第八号溝と円弧状につながることは前述のとおりである。

上幅は60～80cm，底面幅は30cm，深さは25～30cmである。掘り方断面形は舟底状を呈する。長さ35cmである。

埋没土の性状は，ローム粒子を多量に混入する暗褐色土である。

出土遺物はないが，第八号溝とつないだ視野から考察すると，この円弧内には墓壙や，墓壙と思われる遺構が存在するので、古墳の周溝と同じような性格を持つ，墓域を画する溝のように考えられる。

第四四号竪穴状遺構は，階段式墓壙と考えることもできる。時期は不明である。

第一二号溝

本址は，第四Ａ調査区の北西部，Ｄ－３に現れ，調査区の北西隅に向ってほぼ直線状に走り，Ａ～Ｂの北壁外に埋没する。

上幅は北壁際までは110cm前後であるが，北壁下は350cmと広くなる。底面幅は60cm，深さは18cmである。

掘り方断面形は舟底状を呈する。長さは17ｍである。

埋没土の性状は，ローム粒子を多量に含む暗褐色土である。出土遺物はなく，時期や性格は不明である。

第一三号溝

第一二号溝の南側3.5ｍを並走する溝で，長さは12ｍである。形状・規模は第一二号溝とほぼ同様である。

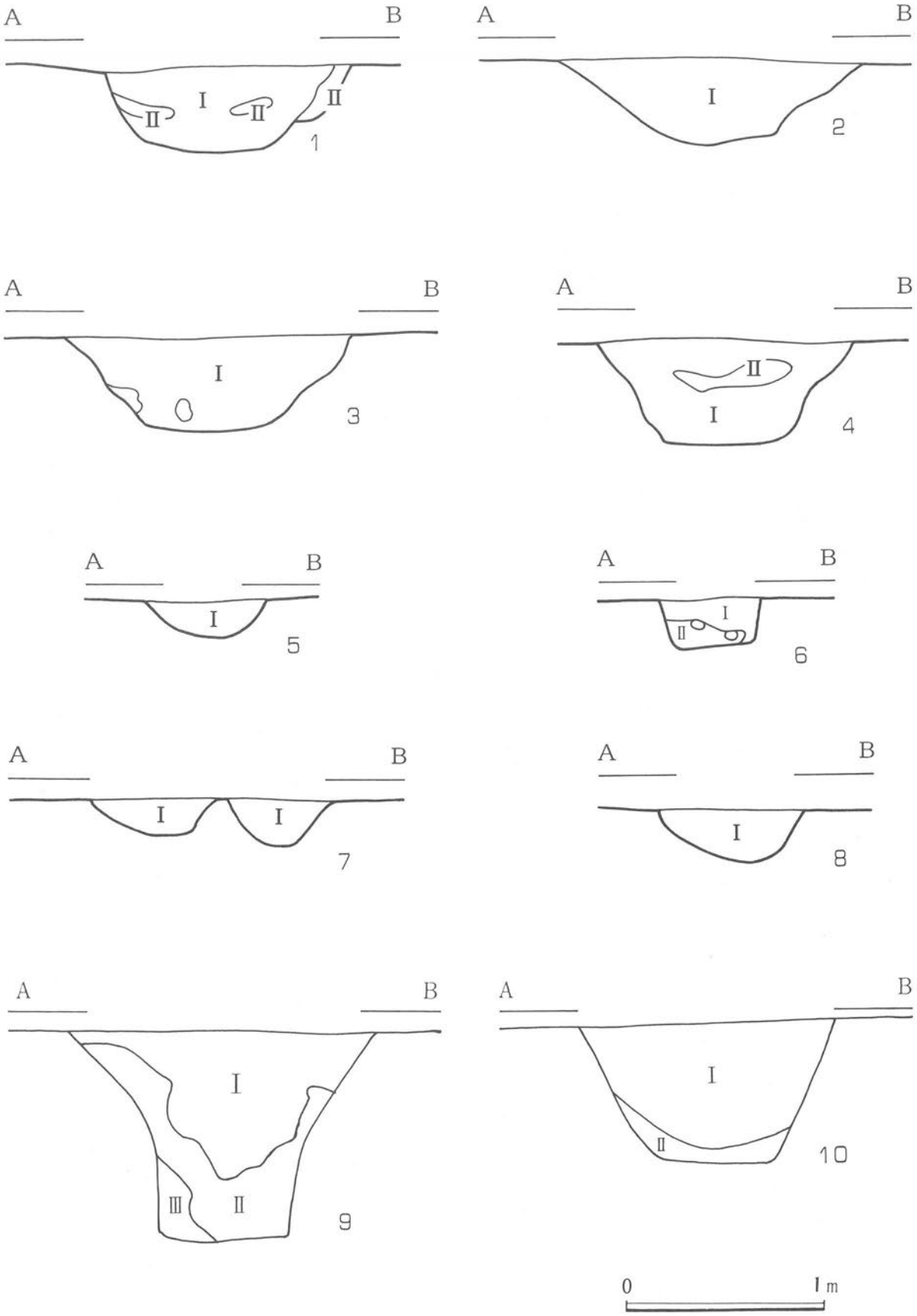
第一四号溝

本址は，第五調査区の東部，Ｍ～Ｎの南壁に現れ，北に向って直線状に走った後，北壁近くはやや北西に向を変えてＭ～Ｎの北壁外へ埋没する。第一〇号溝の延長であることは前述のとおりである。

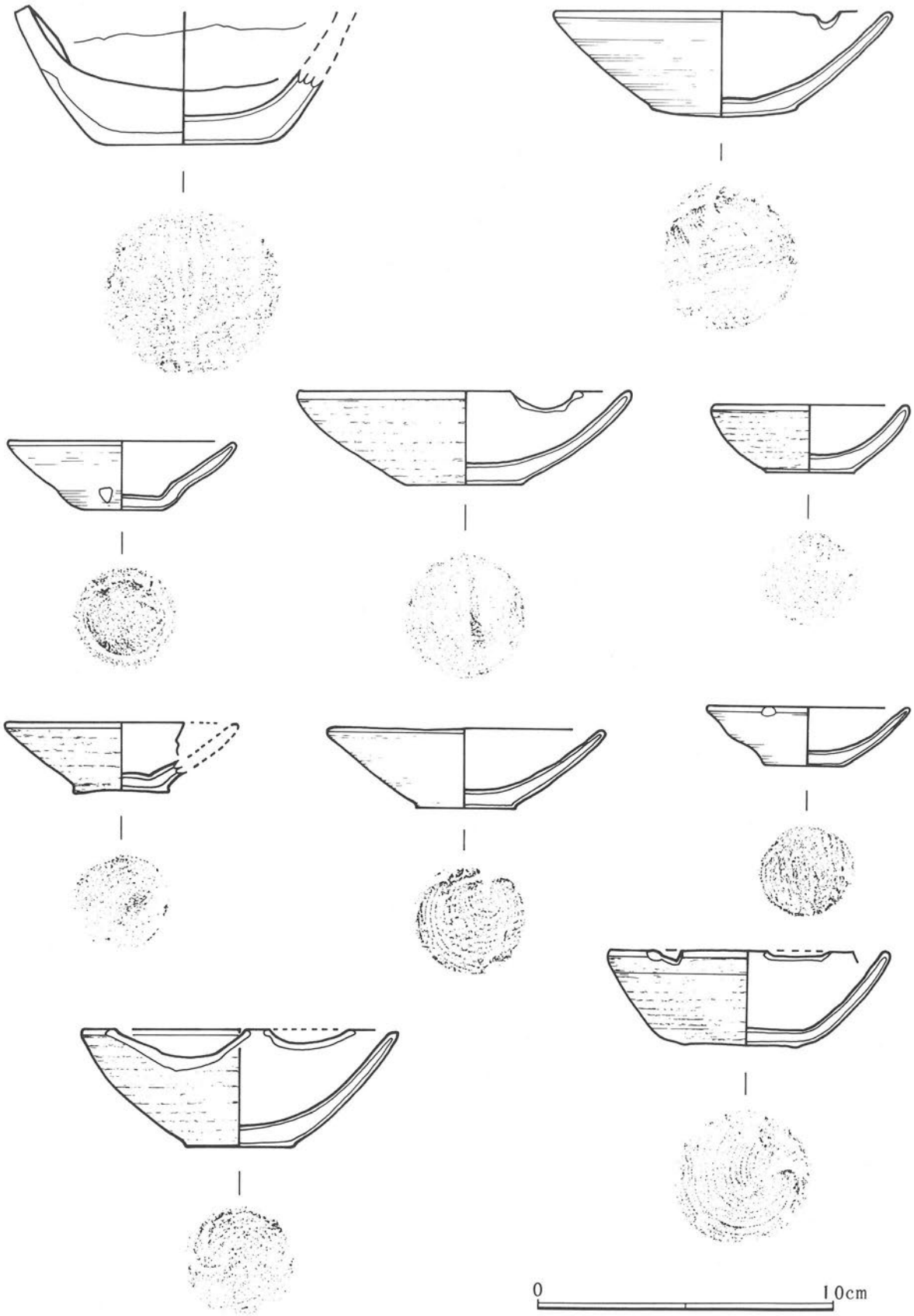
北壁側は撹乱を受けて，確認面は礫混じりの黄色砂質土であるが，溝は恰も鹿嶋市の末無川のように先端部が消えている。指呼の間に涸沼川右岸が横たわる。

上幅は140cm，底面幅50cm，深さは南壁下で70cm，北壁下はわずかに３cmである。長さは17ｍである。

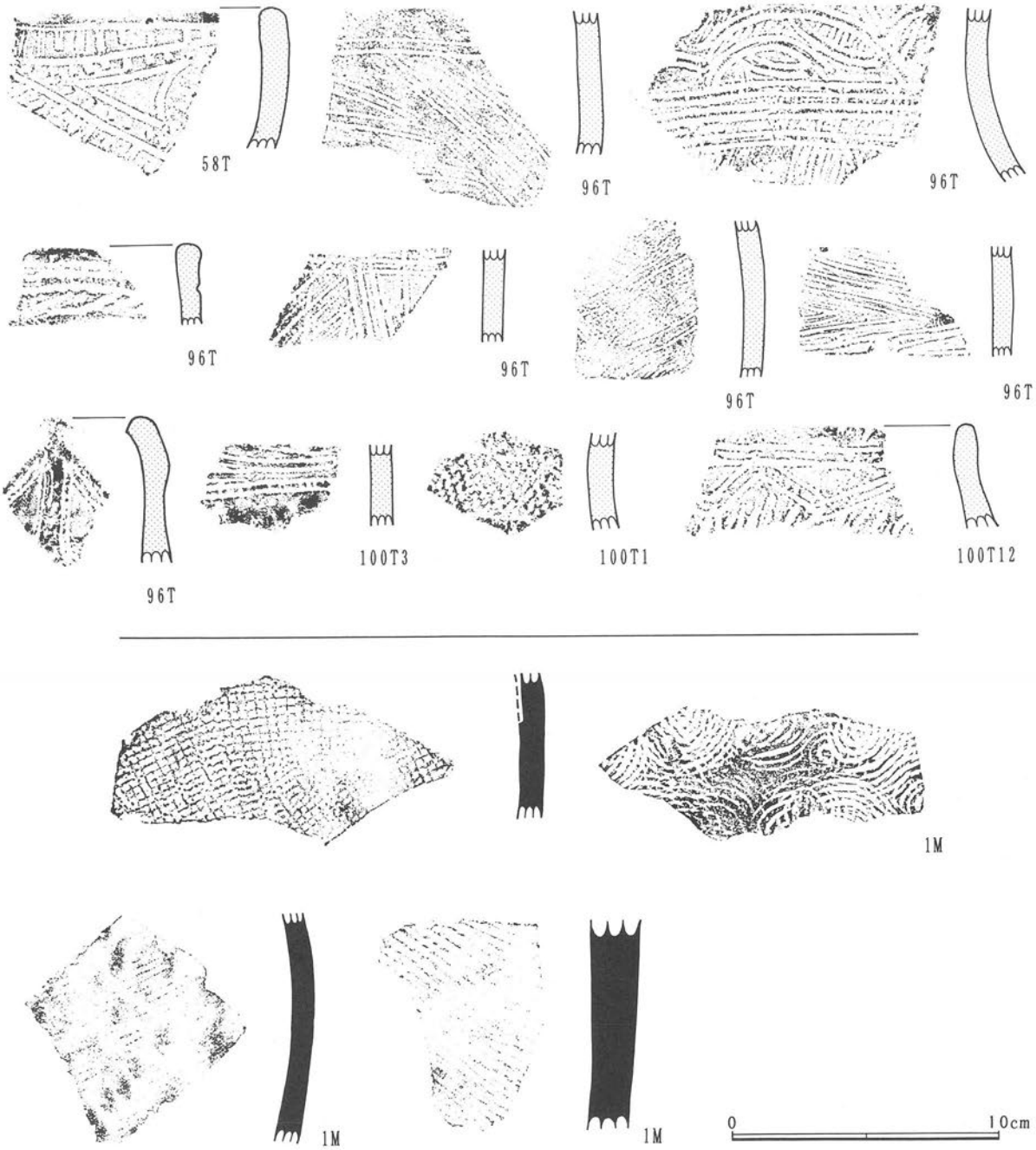
掘り方断面は舟底状を呈する。埋没土は暗褐色土の単一層である。



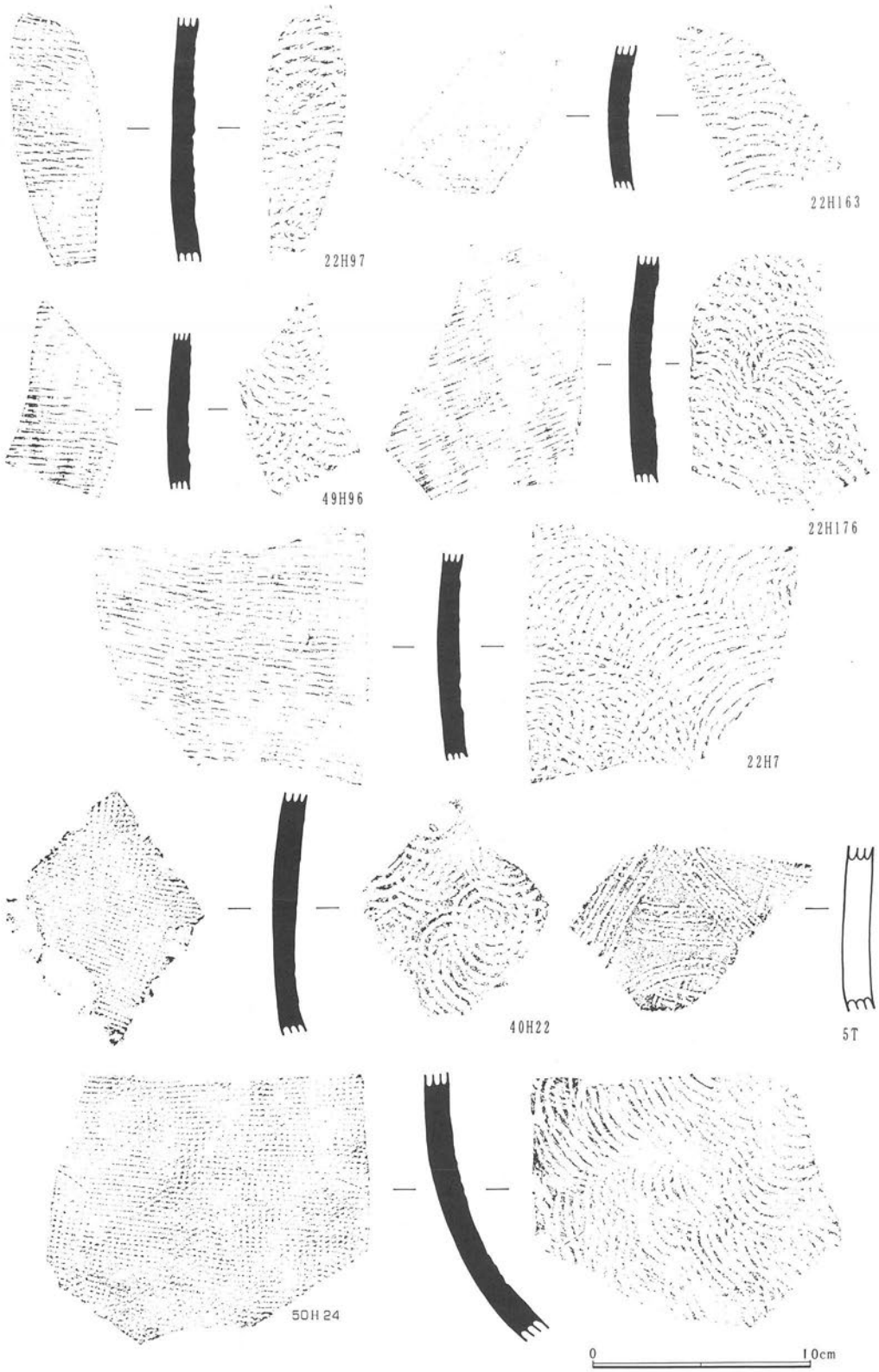
第一五五図　溝状遺構断面図



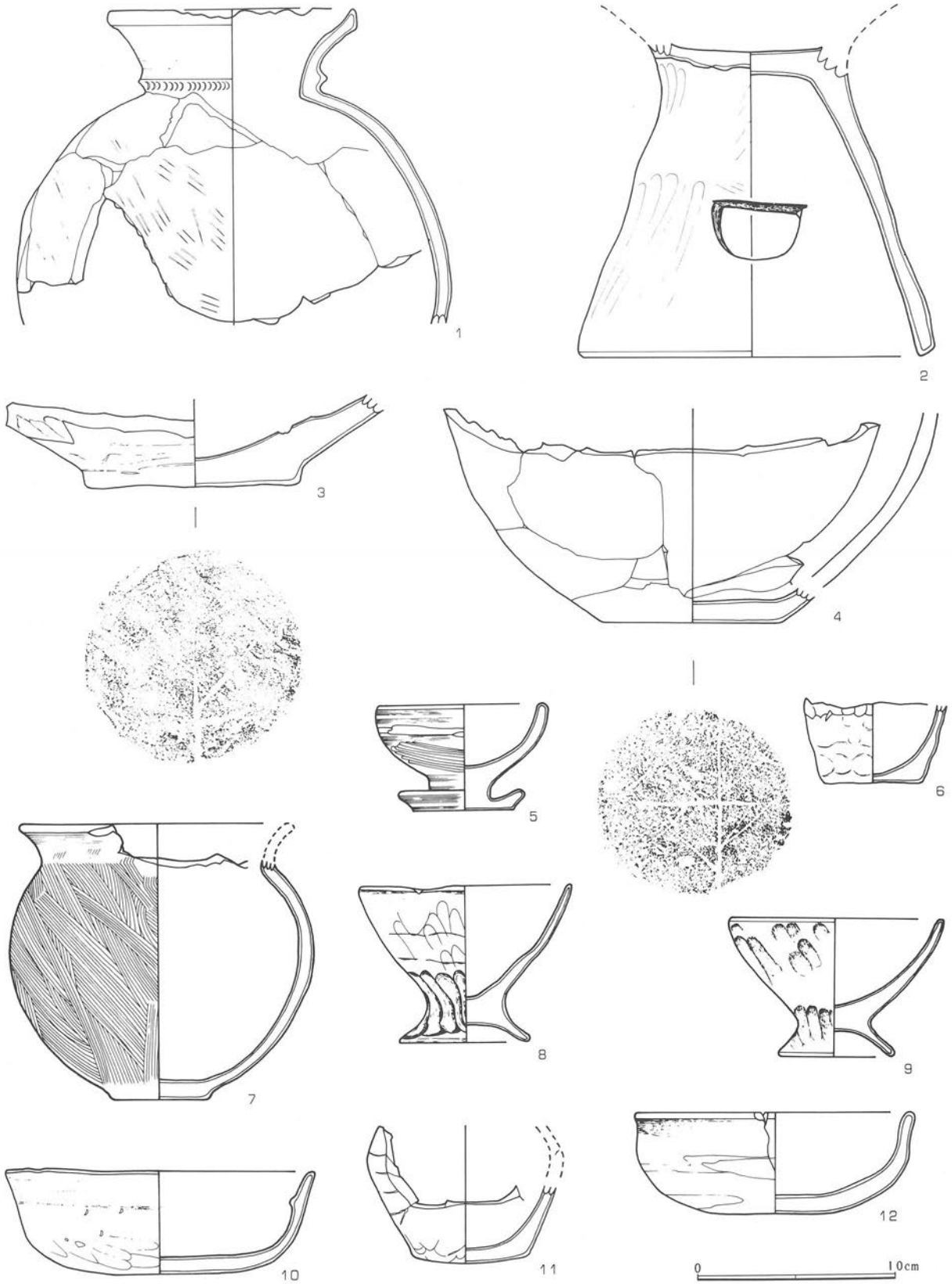
第一五六図　溝状遺構出土遺物実測図



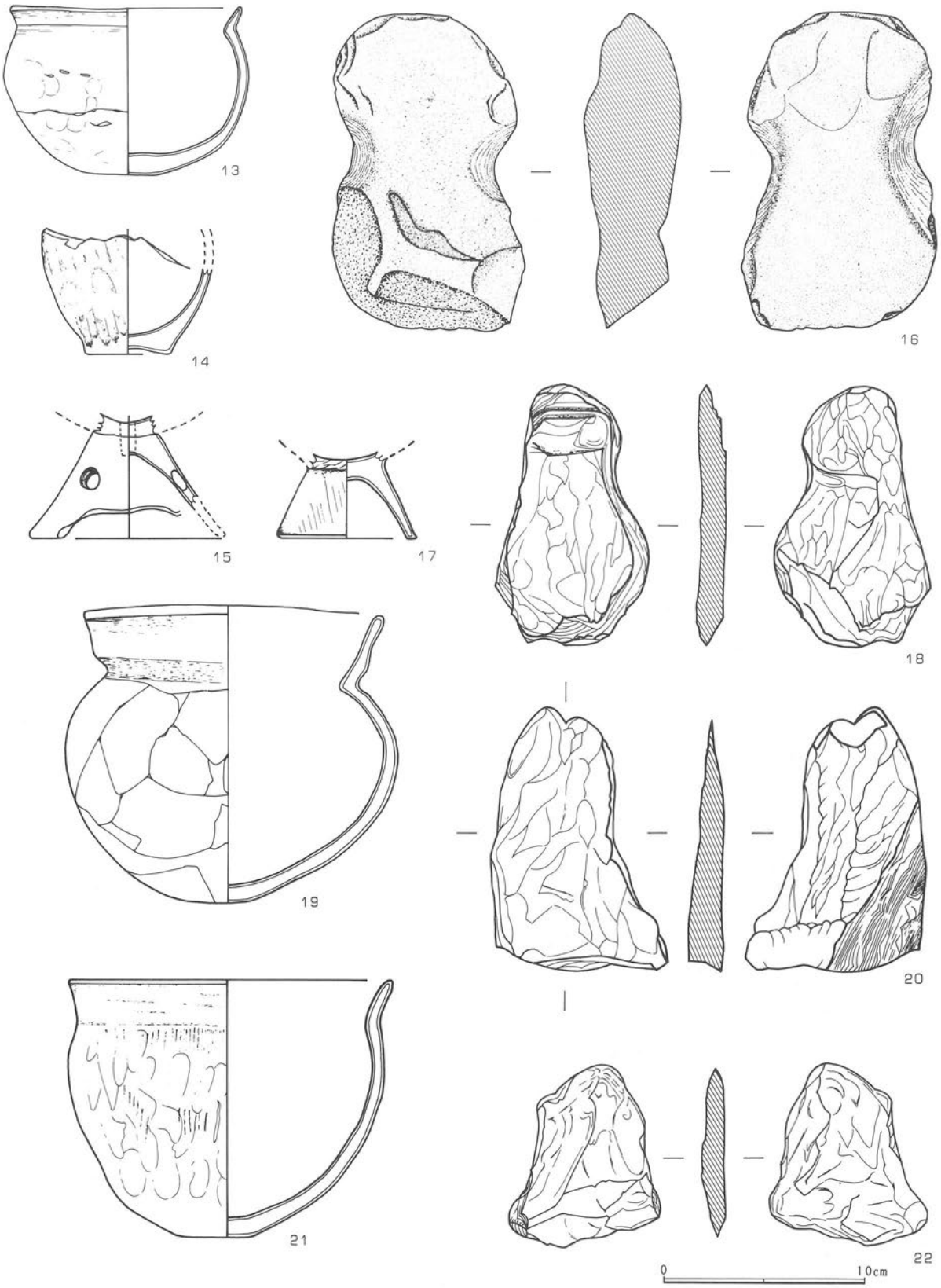
第一五七図　出土遺物拓影図（縄文土器・上段，須恵器・下段）<一>



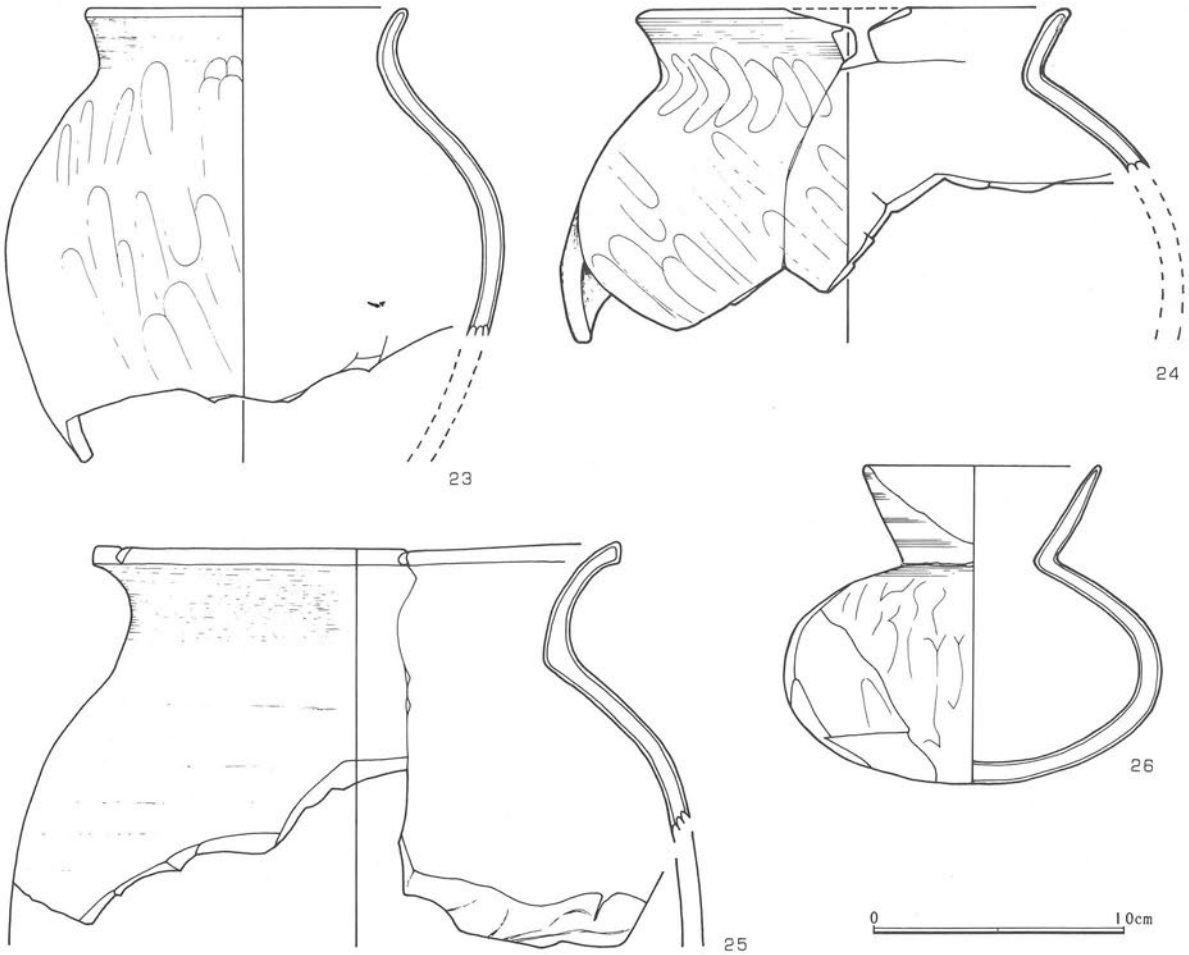
第一五八図　出土遺物拓影図（縄文土器・須恵器）＜二＞



第一五九図　遺構外出土遺物実測図（一）



第一六〇図　遺構外出土遺物実測図（二）



第一六一図　遺構外出土遺物実測図（三）

第一三章　まとめ

今回の調査で竪穴住居址は51軒を調査することができた。古墳時代45軒，平安時代６軒である。

規模はさまざまで，小は7.6㎡から大は62.5㎡に及ぶものまである。

そこで，本遺跡に限ったことではあるが，規模的に三つに分類することを試みた。

その基準は，面積30㎡以上を大規模，20㎡以上30㎡未満を中規模，20㎡以下を小規模とした。

この基準によって規模別分類をすると古墳時代では大規模20軒，中規模５軒，小規模20軒。平安時代では大規模１軒，小規模５軒となった。

これらの住居址の分布状態をみると，エリアの北西部，第二調査区に集中している。

床面は例外なく硬く踏み固められていて安定した居住空間であったことが窺える。

しかし，出土遺物が比較的少ないのは完全状態に近い引越しが行われたのであろうか。

その引越しの事実または最終的廃絶時の様相を26基のカマドの状態から推察することができる。

本遺跡のカマドで天井部やブリッジ部が破壊されずに遺存していた例は１例もなかった。

それは何故であろうか。今泉潔氏の報告を引用して本遺跡と比較を試みたい。

竪穴住居の場合，現代の引越しともっとも異なるのは，住居の廃絶に伴う「引越し」が決して次の居住者を迎えることを前提としていないということである。

カマドを調査するときは，左右の両袖・燃焼部・煙出し部を検出し，カマドの構造を把握して調査を終了する。しかしカマドは本来両袖の先端をブリッジ状につなぐ部分があってはじめて機能したものであろう。

甕と支脚を固定して使用するためには，カマドの構造上両袖をつなぐブリッジ部分が当然必要になる。

それではなぜ粘土構築のカマドの調査でこのブリッジ部分を検出できないのであろうか。

断面観察でもまずその痕跡は確認できない。つまり陥没している可能性はあまりないようである。

とすると後世の撹乱がないかぎり，住居使用の最終段階で少なくともこの部分を取り外しているのではないだろうか。

住居廃絶にともなうカマドの破壊行為があったと考えられるのである。甕や支脚を取り外していることも，この破壊行為の中に入るであろう。千葉県印旛郡の例では片袖まで欠いている。カマド内から完形の坏が出土していることから，カマド自体が後世の撹乱によって破壊されたとは考えにくいので，これもカマドの破壊行為の一種と考えてよいだろう。

カマドの廃絶状態にはこうした破壊例とともに，土器が特異な出土状況を示すことがある。

石製支脚の上に被熱を受けていない坏が重ねられていたり，土製支脚の上に坏が伏せられていたりすることである。千葉県沼南町では支脚上面に甑が横置きの状態で出土した。甑の機能から考えても本来の使用状態でないのは明らかである。

これらの土器の出土状態については，さらに綿密に検討すべき点はあるが，現時点では廃絶行為に伴って，カマドに「納められた土器」とするのがもっとも妥当であろう。

似たような例に古墳時代後期前葉の竪穴住居の場合がある。

この時期まだ前代の遺習が残り，高坏を供献容器として使用している例が非常に多い。

その高坏がしばしばカマドの中に残されている。それを支脚転用の高坏と表現するが，もし支脚転用とするなら高坏に被熱の痕跡が残らなければならない。

今泉氏が直接観察した範囲では，その痕跡を認めることはできなかったという。

カマドを単に廃絶して引越しするのではなく，カマドの継続的な使用を断絶して引越している。

それは限定した表現をするならカマド廃絶の祭祀であろう。

支脚の使用を断つことがカマドの廃絶を意味していたようである。

以上が今泉氏の論旨である。

ところが本遺跡の第四九号住居址から紛れもなく小形甕形土器の支脚転用カマドが確認された。

しかも支脚転用の小形甕形土器と煮沸用の甕形土器がセットで使用状態のままで出土している。

まことに僥倖なことであり，稀有な例といわざるを得ない。

もうひとつ特異な例として井戸址がある。

23基の井戸址を確認したが，すべて湧水面まで調査することができた。

もっとも浅い井戸址は確認面下70cm，深い井戸址で230cmで湧水面に達している。

調査は水面が現れた時点で安全を優先させるために中止したが，中には図版第三のように調査期間中満々と水を湛えて水位の下ることがなかった井戸址もある。

遺跡内の井戸址はこのように浅井戸であって，水に困ることはなさそうに思えるが，遺跡に隣接する南西には雨の神を祀る高羅神社が鎮座する。『茨城県神社誌』によると，祭神は高羅神・闇羅神で明治以前は八龍神社と尊称。明治初年高羅神社と改称した。古来雨の神として住民の信仰篤く，夏季大旱魃に氏子一同三日三夜，雨乞祈祷をして慈雨を賜ふことしばしばと云ふ。とある。

この疑問は『図説岩間の歴史』の解説で釈然とした。

それは「水は湧くけど溜まらない」という土師台地の地層によるもので，土師の台地の湿原はローム層の下から水が湧き出すけれども，灌漑用水に使用するほどの水量はないという。

高野坪にも数か所水の湧く所があるけれどもこれらも少ない水量だという。

高羅神社の北東に「みたらし」と呼ばれる湧水があるが，ここも細く流れているばかりだという。

これは土師の台地のローム層下の扁平円礫まじりの中砂，粗砂の下にある不透水層のシルト層が薄いことを意味するもので，保水性が不充分で笊池状態のため，水に悩まされていたのである。

23基（正しくは23井（せい）というのだそうだが）という井戸址の数の多さもこうした保水性の低さのためだったかもしれない。

一般の住居にはあまり関係のない石製模造品の剣形模造品・有孔円板・勾玉の出土も等閑にはできないだろう。手捏土器も同様である。

前述の高羅神社参道両側の山林内には，円墳４基からなる高羅神社古墳群が存在するが，石製模造品や手捏土器の出土は，紛れ込んだものでない限り，周辺に祭祀遺跡が存在することを示唆するものであろう。

岩間町土師の下流８kmほどの涸沼川右岸に茨城町下土師がある。昭和30年１月，その下土師の面山東遺跡から「土師神主」と記された墨書土器が出土して話題になった。

今回の調査でその墨書土器に匹敵するような遺物の出土を期待したのであったが，残念ながら成果は得られなかった。ただし，内黒坏形土器欠損品の体部外面に「上口」と墨書されたものと，高台付坏形土器の底部破片に「大」の字の刻まれた刻書土器が出土したことを特記しておきたい。

出土遺物のうち実測可能なものについては，出来得るかぎり記録したつもりである。

「土師」の考察については先学たちが発表しているので述べないが，「土師」という古典的地名が現存する以上，この地にも土師部の末裔たちが居住していたことは間違いのないことであろう。

遺跡名の「島屋敷」の由来については資料も伝承もなく，解明することはできなかった。

島屋敷遺跡発掘調査会役員名簿

会　長	小松﨑　道　雄	岩間町教育委員会教育長
副会長	岩　浪　誠一郎	岩間町文化財保護審議会会長
理　事	塙　　仲　雄	岩間町文化財保護審議会副会長
〃	打　越　千　夫	土師区長
〃	大和田　　操	浄化センター地権者会会長
〃	千　種　重　樹	調査団長・茨城県埋蔵文化財指導員
〃	斉　藤　碩　一	岩間町都市計画課長
〃	打　越　正　男	岩間町教育委員会社会教育課長
監　事	宇都宮　広　巳	岩間町総務課長
〃	持　丸　　敦	岩間町会計課長

事務局　　岩間町教育委員会社会教育課

島屋敷遺跡発掘調査に従事した人たち

千　種　重　樹　　主任調査員・調査団長
水　谷　　正　　調　査　員
飯　島　栄　子　　調　査　員
藤　井　義　秋　　田　中　道　雄　　飯　田　定　男　　香　川　武　久　　滝　田　秀三郎
古　川　　剛　　南指原　　猛　　會　澤　誠　次　　藤　井　元　子　　川　上　兼　子
打　越　和　枝　　小　沢　とし子　　川　崎　史　子　　堀　江　優　子　　高　谷　文　子
滝　本　幸　江　　中　林　民　子　　内　田　美　幸　　赤　沢　靖　子　　町　田　孝　子
鈴　木　つね子　　小　田　ゆり子　　持　丸　悦　子　　黒　沢　典　子
岩間町郷土史研究会会員　14名
調査協力者　　やまだ建設　山　田　隆　康

整理作業・報告書作成従事者
千　種　重　樹　　水　谷　　正　　飯　島　栄　子　　田　村　みどり

謝　　辞

島屋敷遺跡発掘調査の報告書を上梓するにあたり，試掘調査の当初から報告書発刊までの間，町長柴山弘氏，教育長小松﨑道雄氏をはじめ，町当局・教育委員会事務局の方々から暖かいご高配とご協力を賜ったことに対して，深甚なる感謝の意を捧げるものである。

また，炎熱きびしい流汗淋漓の盛夏の時期に，憩う日陰もない発掘調査現場で，連日終始一貫，意欲的・精力的に作業に従事して下さった作業員の方々には，あらためて敬意と謝意を表す次第である。(調査員一同)

島屋敷遺跡発掘調査参加感想文

島屋敷遺跡の発掘調査を終えて

私は５年前に岩間町に越してきました。子供の頃は，大阪府に住んでいました。小中学生の頃，近くの切り立った崖の所から，縄文式土器の破片がいくらでも出土し，時々行っては掘り出して，ダンボール一杯集めたりしていました。当時，和泉の黄金塚古墳から，邪馬台国論争の畿内説の有力な資料とされる銅鏡数枚が，すぐ近くの鳳高校地歴部の手によって発掘されたという事が話題になっていました。

後に発掘に興味を持ち，鳳高校に入学して早速，地歴部へ入部しましたが，残念なことに考古学はやっておらず，近世の歴史の方に力を入れていて，がっかりしたものでした。

その後大学，就職して30数年忘れていましたが，はからずも縁あって，町の発掘調査に参加することができ，子供の頃からの積年の夢が叶い，充実した５か月を送ることができ，感謝しております。

○　いにしえの　土師の土器掘り出し　夢ふくらまん　古代のロマン

○　土を掻き　黒々出でし家の跡　いざ　掘らんかな　胸おどらせて

○　拭えども　したたり落ちる玉の汗　ボヤキながらも　手は掘り進む

○　秋風の立ちて寂しき終わりかな　真夏の熱気　今は思い出　（香川　武久）

古代人からのメッセージ

「コツ」移植ごての先に遺物が当たる。コテを竹ベラに持ち変えて丁寧に土くれをはがします。今，目覚めたばかりの遺物。私の胸は高鳴り，先人たちが使ったであろうこの壺や甕がごそごそと昔話をしてくれます。

昔々，1500年も前にこの地で暮らしたさまざまなことを……。

平成９年４月11日，この島屋敷遺跡での発掘調査が始まりました。５区画に分けられた約14000㎡もの広大な面積を前に不安と期待がよぎります。じょ簾を持って表土をはぎ取り，そこから現れた黒々とした遺構。それは昔，人々が生活をした住居やお墓，井戸の跡なのだそうです。

住居跡の土を少しづつ取り除いていくと，そこにはさまざまな先人たちからのメッセージが潜んでいました。

壊れた甕，大事そうにカマドの側にそのままの形で置いてある大きな壺，毎日の料理に使ったであろう内側に把手のついた内耳土器，どの住居跡にも付き物のカマド。そこには家族の生活を支え，火のある豊かな営みが営々と続いていたことを，火熱を受けて硬く赤変した土の色と共に物語ってくれていました。

今回，初めて発掘調査のお手伝いをさせていただき，先生方の丁寧なご指導を頂きながら，私たち20余の仲間は，５か月の月日をかけて，照りつける猛暑の中，すべての作業をやり遂げることができました。

「本当にやってよかった」とさまざまな思い出と共に，今，深い感慨が甦ります。せめて，この素晴らしい経験を共有した仲間たちと，この地で出会った先人たちへの思い出などを永く語り継いでいけたらと思っています。　（川崎　史子）

私　の　宝　物

「いろいろな遺跡を見ていくと宇宙人との接点が見えてくる。歴史はロマンだ……」と，突飛なことを主人が言っています。

「正確に積み上げられた石のピラミッドが，どれほど高度な数学的知識を持った人達で創られたのか，ナスカの巨大な地上絵にしても，百花繚乱の議論が繰り返されている中で，太古に地球を訪れた異星人たちが，宇

宙船の着陸のために作った滑走路だったという説が，最近もっとも有力になっている」という。

遺跡をめぐってこんな論争を繰り広げられるのも，これが歴史の醍醐味なのでしょうか。

主婦の私にとって今までは，空想の世界でしかありませんでした。

しかし，この５か月間は，別世界の学校に似た雰囲気の中での仕事でした。

発掘調査を終えた今，私が経験した忘れ得ぬ興奮と感激を，脳裡に録画したテープで回顧すると，第一調査区第一号住居址は，初めて移植ごてを使い始めたところ。

第二号住居址は，石製紡錘車の完形品を見つけたところ。

第二調査区第三四号住居址は，たくさんの土器が次から次へと出土した宝庫でした。

このほかの遺構でも，内耳土器・壺形土器・甕形土器・坏形土器など，それが破片であっても，土の中にその感触を見つけたときの嬉しさは，私の宝物です。

また，整理作業でバラバラの破片が，次々に接合されて見事に復元されたときの感激，これも私の心の宝物です。

そしてもう一つ，忘れてはならない宝物，それは同じ所で汗した仲間です。

慰労の席で酒を酌み交わし，膝を叩いて笑い合ったあの仲間，年齢から言ったら大先輩なのですが，いまだに「やぁ」と声をかけたくなるような仲間は，私の大きな宝物です。

最後になりましたが，調査でお世話になった先生方に深く感謝申し上げます。　　（堀江　優子）

〔参考・引用資料及び文献〕

1 『茨城県岩間町埋蔵文化財調査台帳』　茨城県水戸教育事務所保管

2 『新編常陸國誌　上・下』　中山信名・栗田寛　　明治32年

3 『茨城県神社誌』　茨城県神社庁　　昭和48年６月

4 『日本歴史大辞典８』　河出書房新社　　昭和54年11月

5 『茨城県地名大辞典』　角川書店　　昭和58年12月

6 『茨城県史料　古墳時代』　茨城県史編さん原始古代史部会　　昭和58年９月

7 『常陸釜付祭祀遺跡』　東海村釜付遺跡調査会　　昭和61年12月

8 『茨城県遺跡地名表』　茨城県教育委員会　　昭和62年

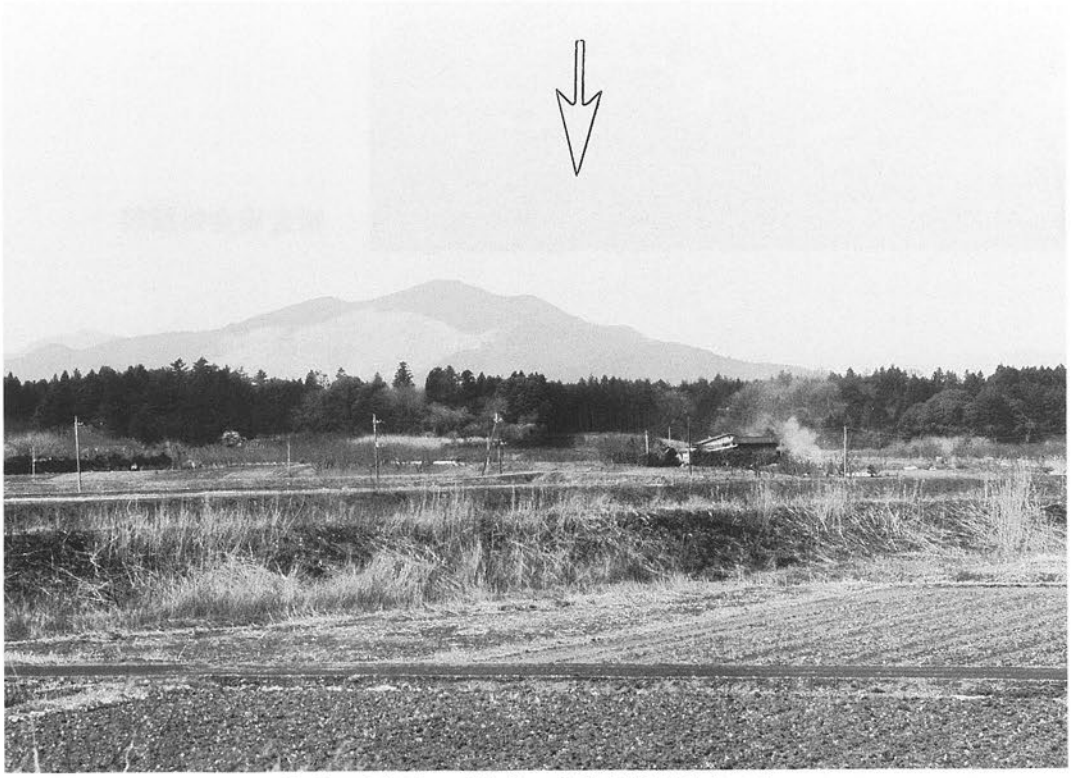
9 『竪穴住居の解体と引越し』　今泉　潔　　1989年３月

10 『図説　岩間の歴史』　岩間町史編さん資料収集委員会　　平成３年３月

11 『日本神祇由来事典』　柏書房　　1993年10月

12 『茨城町面山東遺跡』　茨城町史編さん委員会　　平成９年１月

写　真　図　版

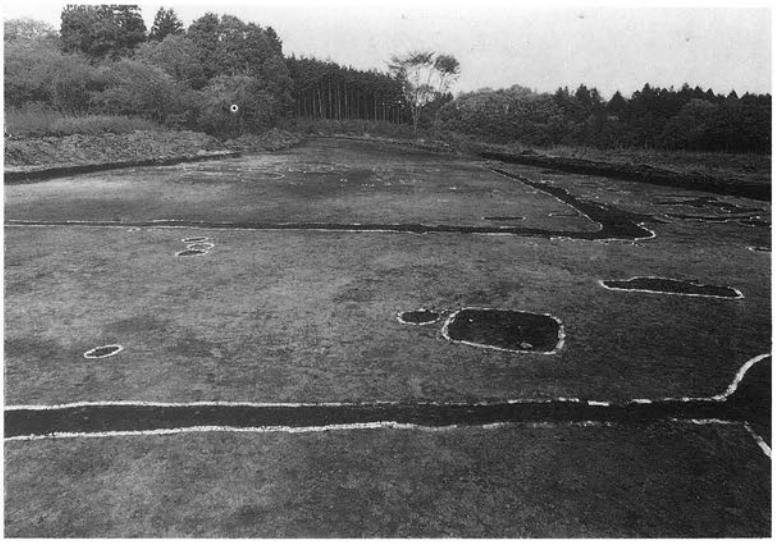


遺跡の遠景 ＜東方の涸沼川左岸より＞

図 版 第 一

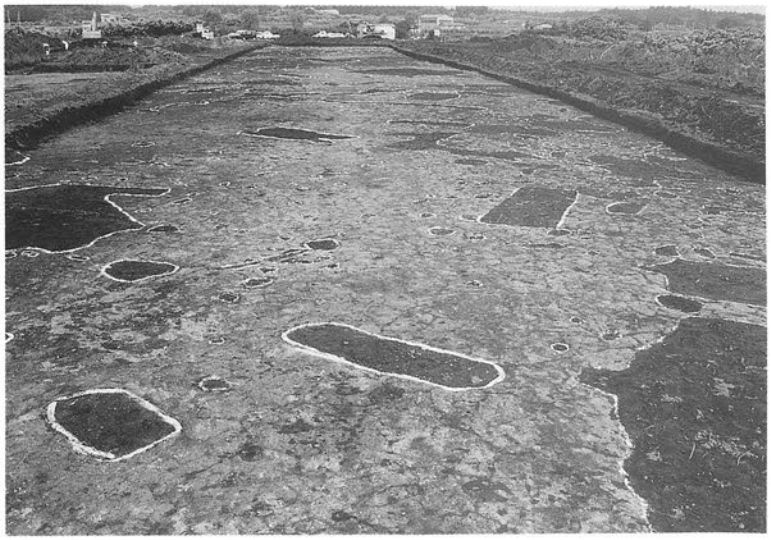
調査前の遺跡の現状

調査安全祈願祭

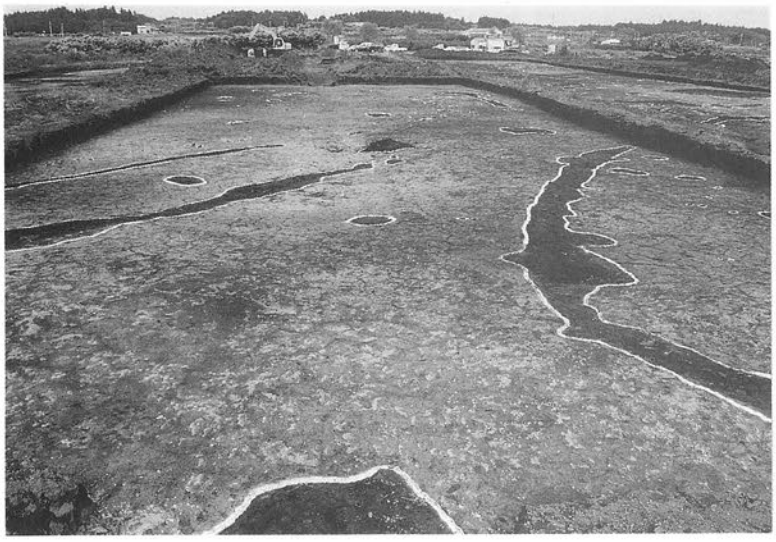


第一調査区遺構確認状況

第二調査区　遺構確認状況



第三調査区　遺構確認状況



第四調査区　遺構確認状況

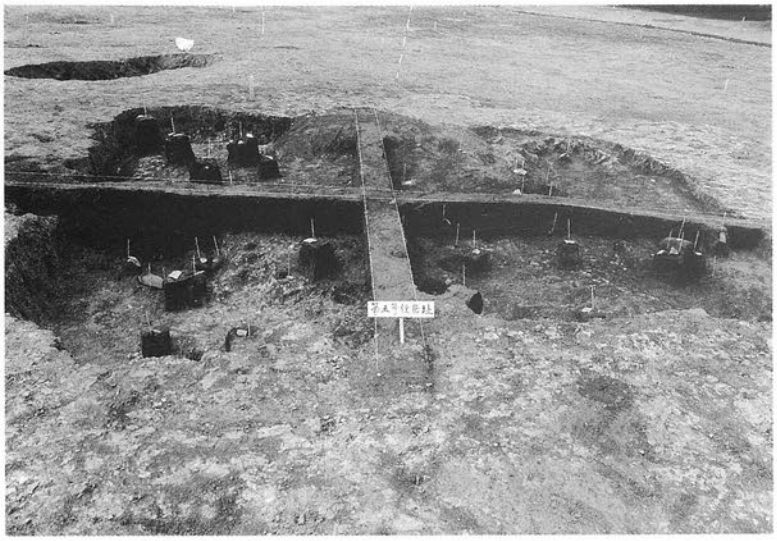
図 版 第 三

第一号住居址遺物出土状態

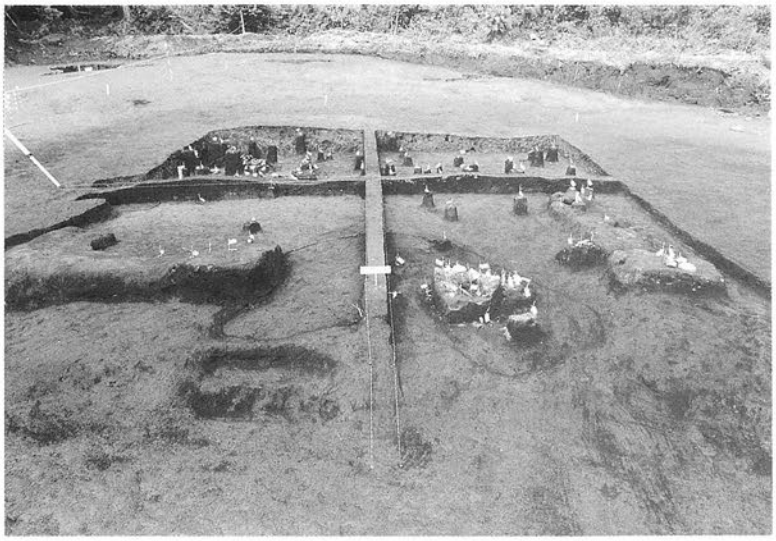
第一号住居址全景

第二・三号住居址遺物出土状態

第二・三・四号住居址全景
第二号井戸址

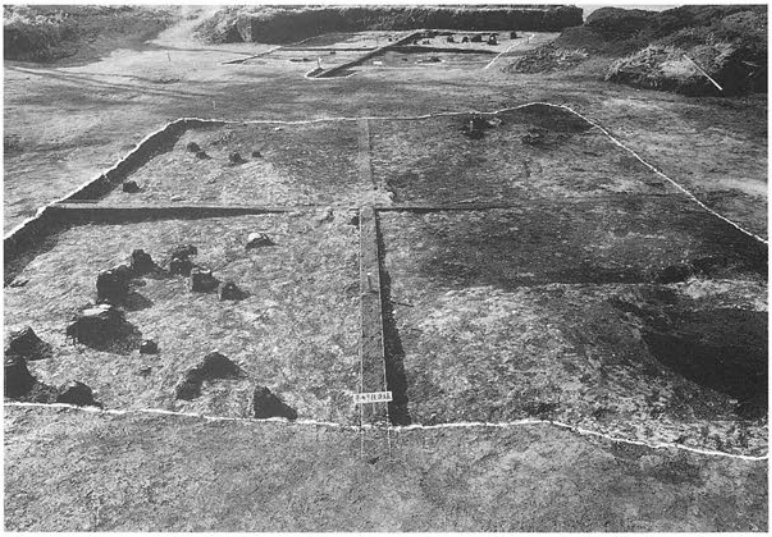


第五号住居址遺物出土状態



第六号住居址遺物出土状態

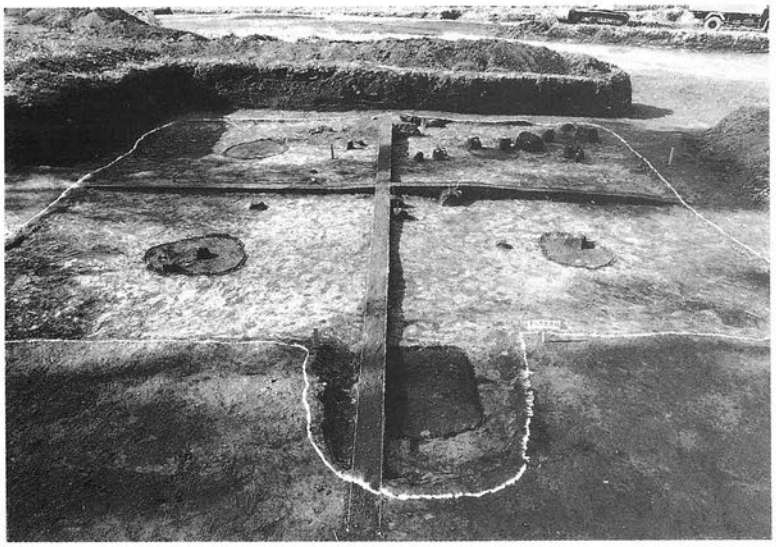
図 版 第 五



第七号住居址遺物出土状態

第七号住居址全景

第七号住居址出土遺物

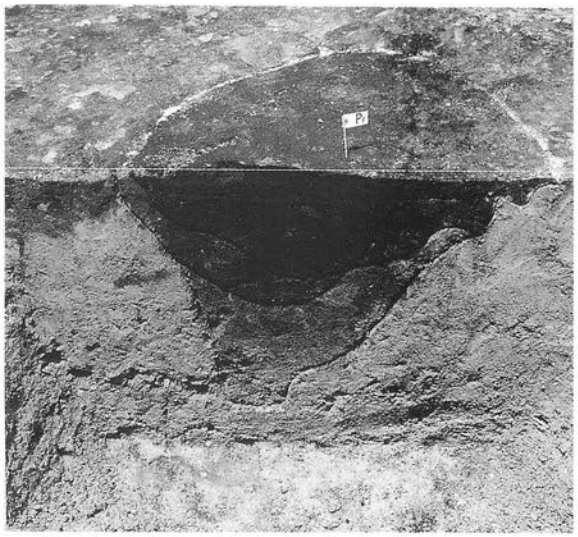


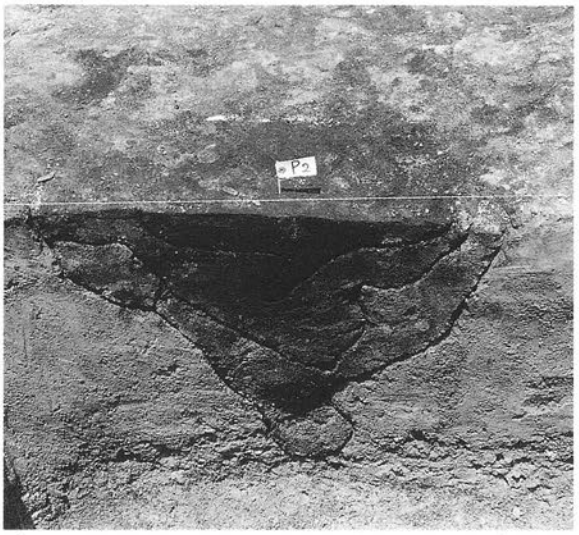
第八号住居址遺物出土状態

第八号住居址全景
柱穴半截発掘状況

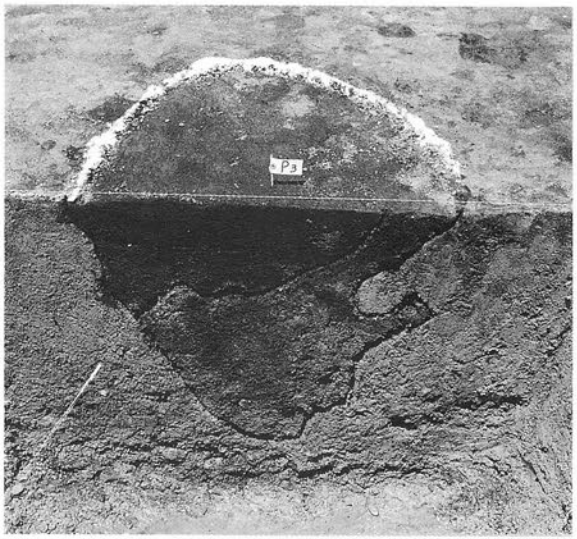
第八号住居址カマド支脚出土状態

図版第七

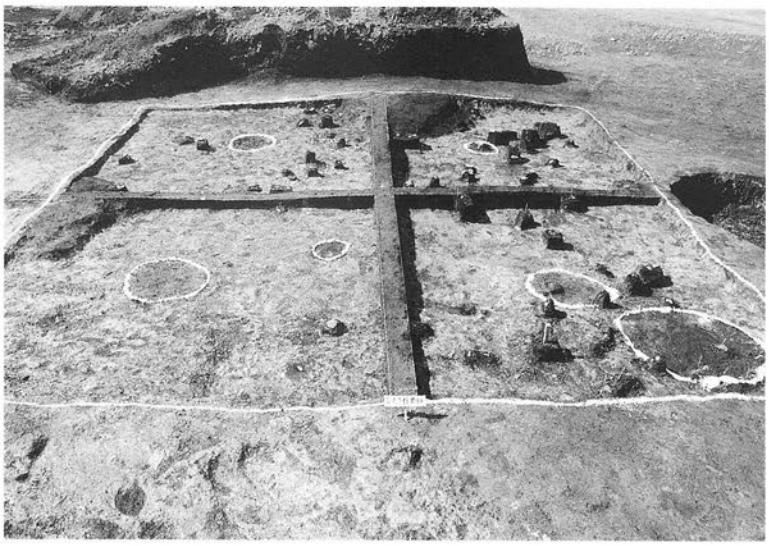




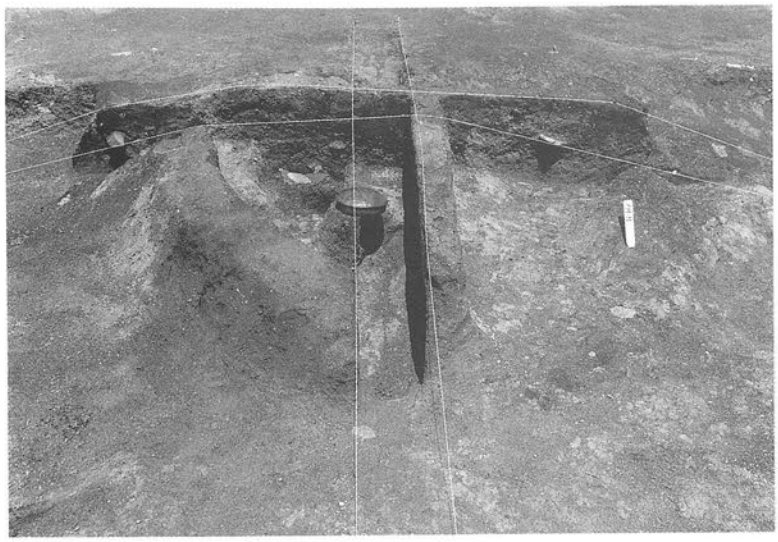
第八号住居址主柱穴半截断面（P 1・P 2）



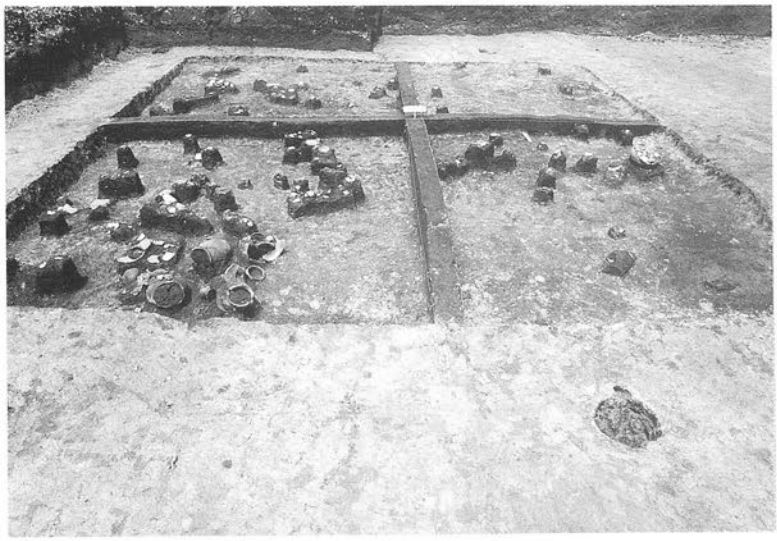
第八号住居址主柱穴半截断面（P 3・P 4）



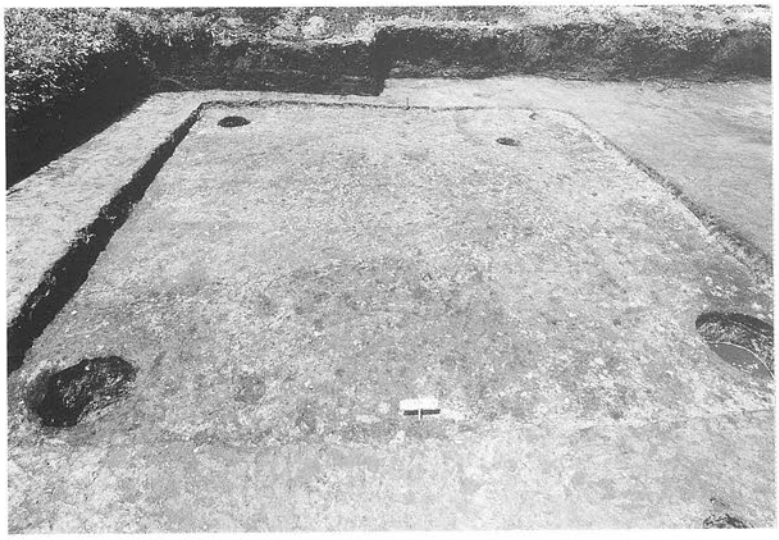
第九号住居址遺物出土状態



第九号住居址カマド内遺物出土状態



第一〇号住居址遺物出土状態

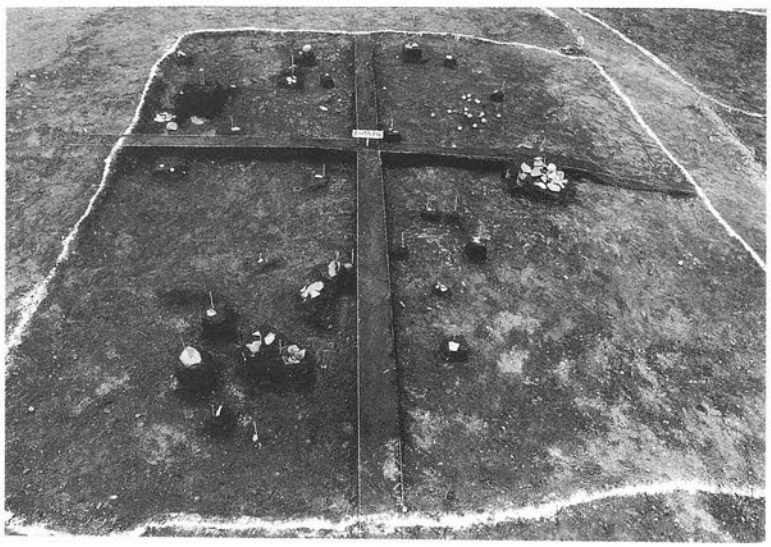


第一〇号住居址全景

図 版 第 九

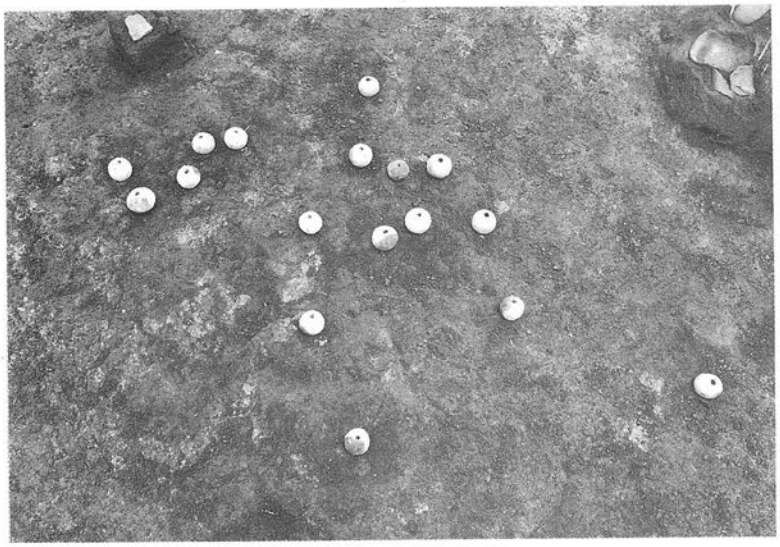
第一〇号住居址出土遺物

第一〇号住居址
石製模造品出土状態

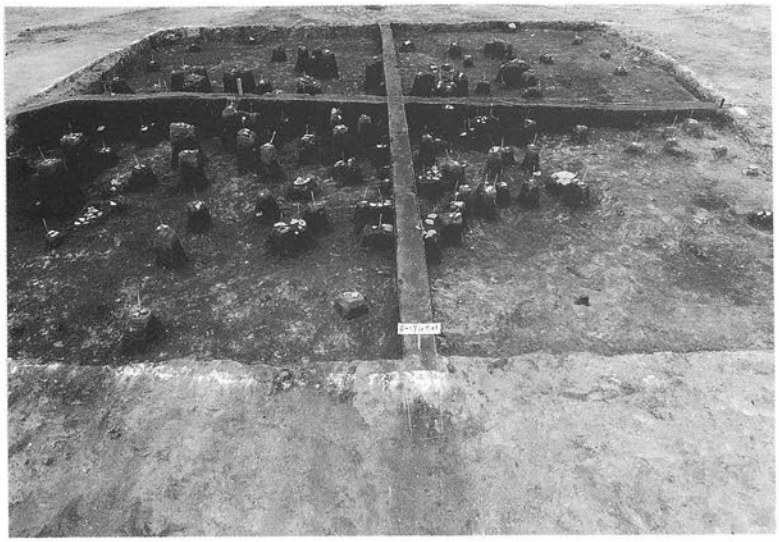


第一一号住居址遺物出土状態

第一一号住居址全景

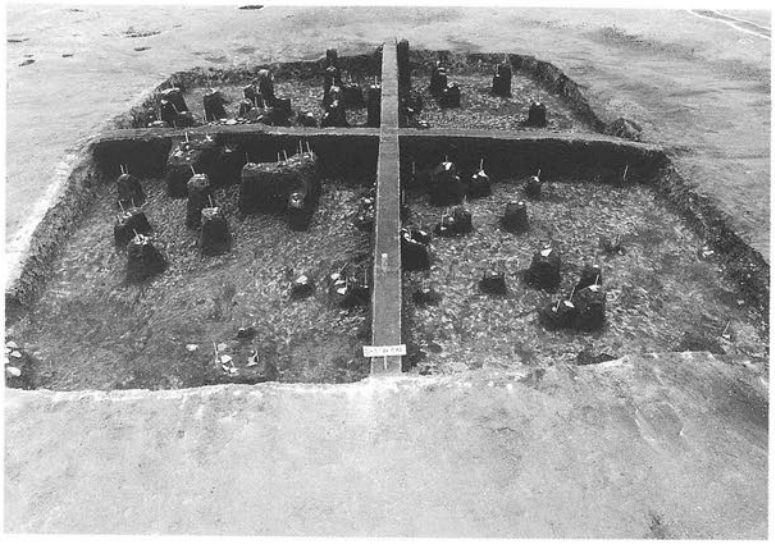


第一一号住居址
球形土錘出土状態



第一二号住居址遺物出土状態

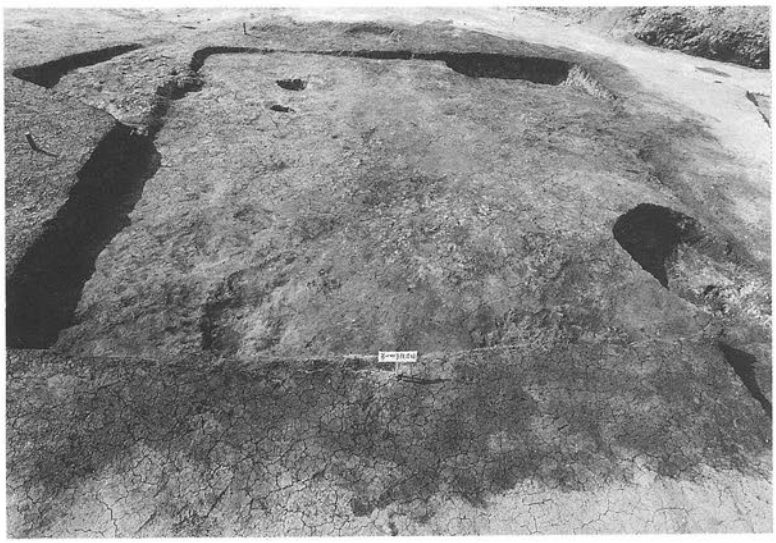
第一二号住居址全景



第一三号住居址遺物出土状態

第一三号住居址全景

第一四号住居址遺物出土状態



第一四号住居址全景

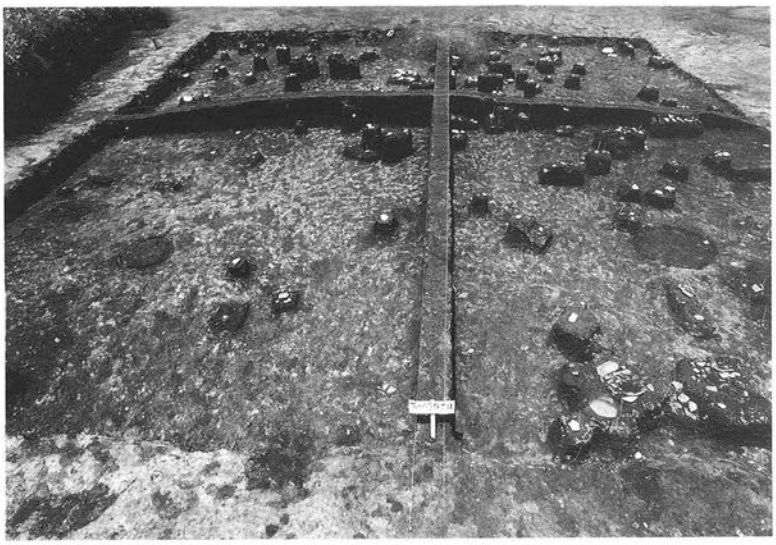
第一五号住居址遺物出土状態

第一五号住居址出土遺物

第一六号住居址遺物出土状態

第一七号住居址遺物出土状態

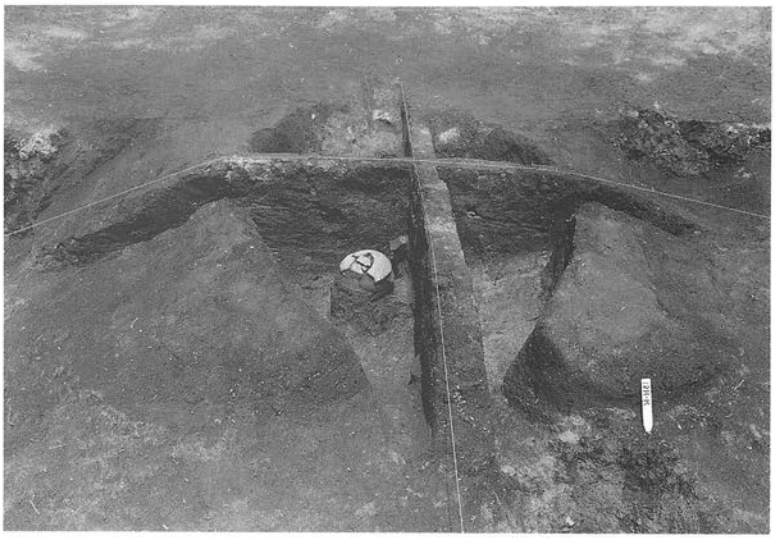
第一七号住居址全景



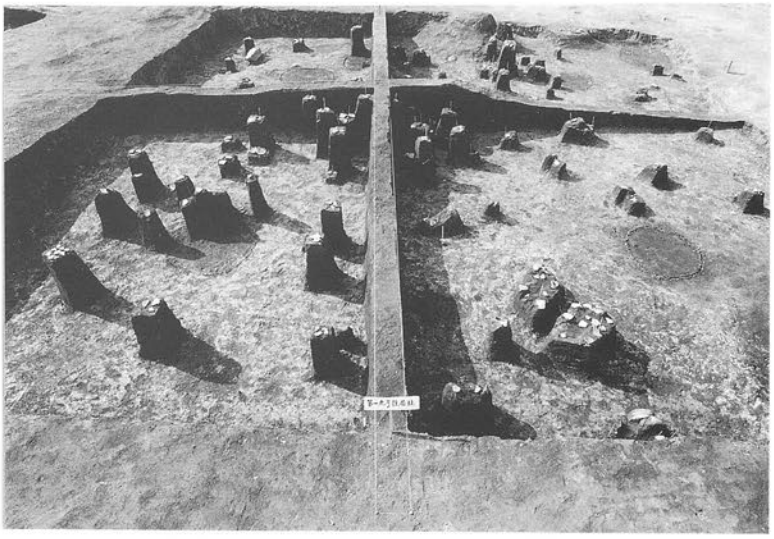
第一八号住居址遺物出土状態

第一八号住居址全景

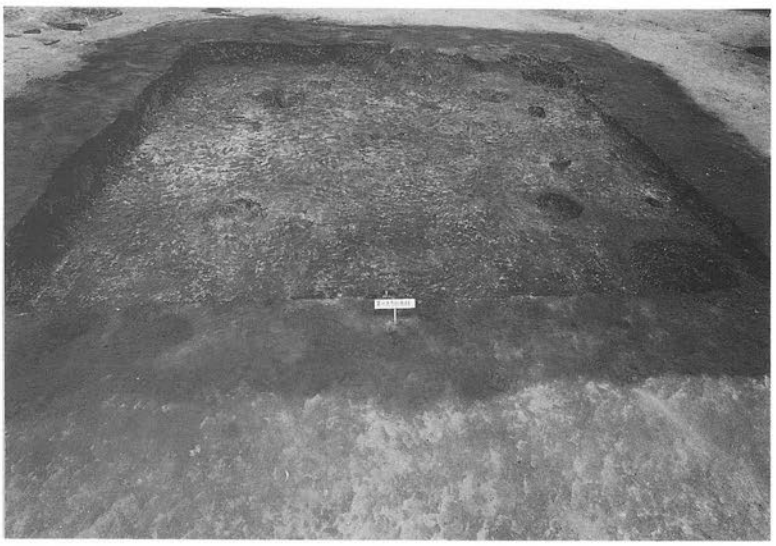
図 版 第 一五



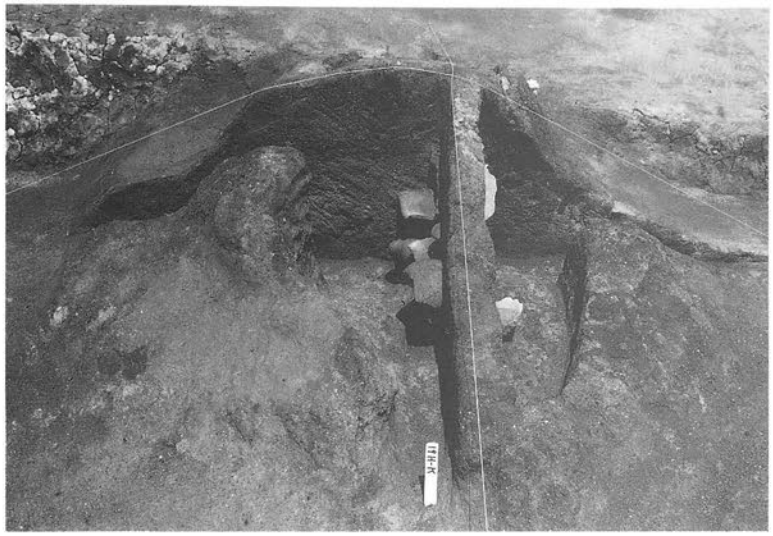
第一八号住居址カマド内遺物出土状態



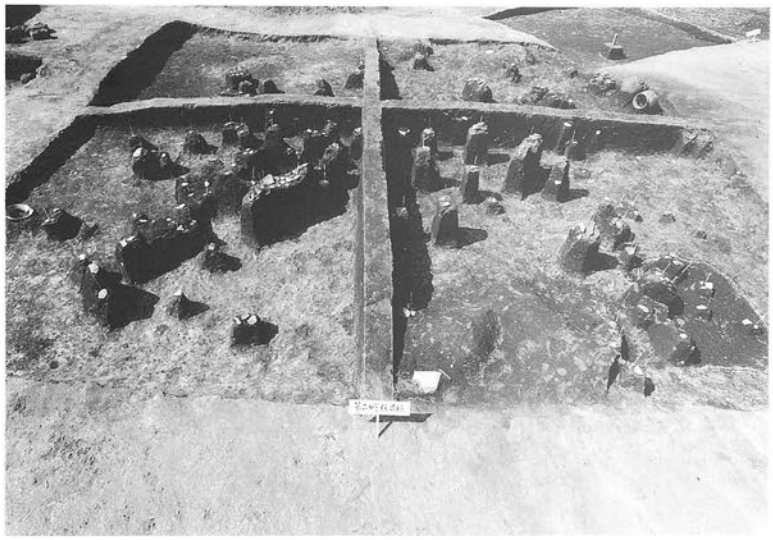
第一九号住居址遺物出土状態



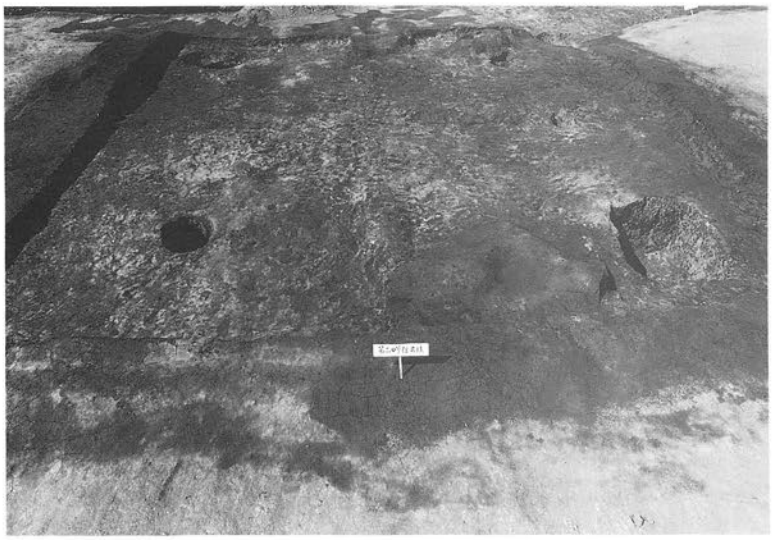
第一九号住居址全景



第一九号住居址カマド内遺物出土状態

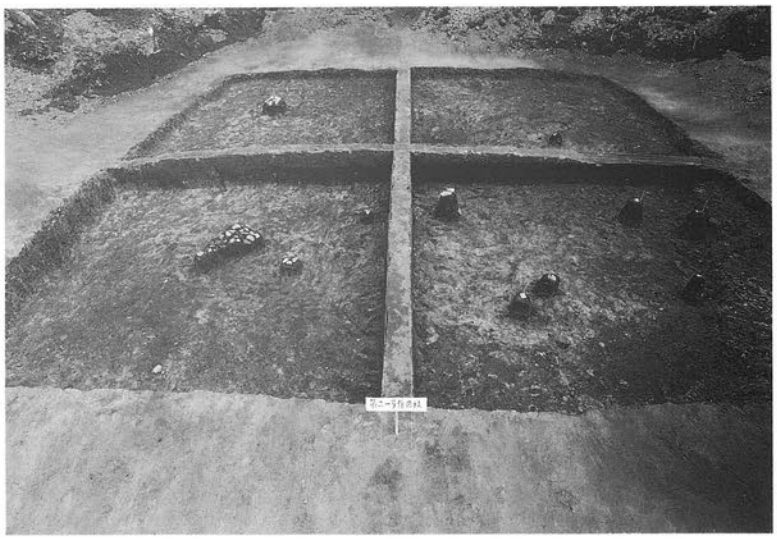


第二〇号住居址遺物出土状態



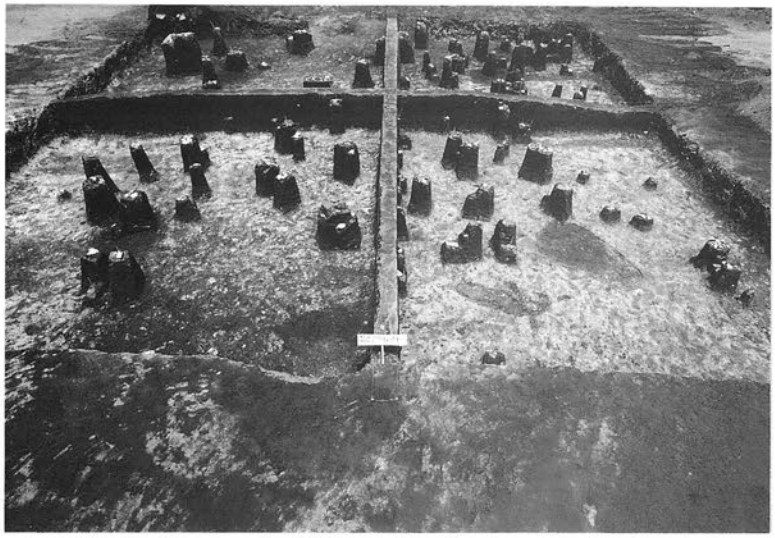
第二〇号住居址全景

第二〇号住居址出土遺物

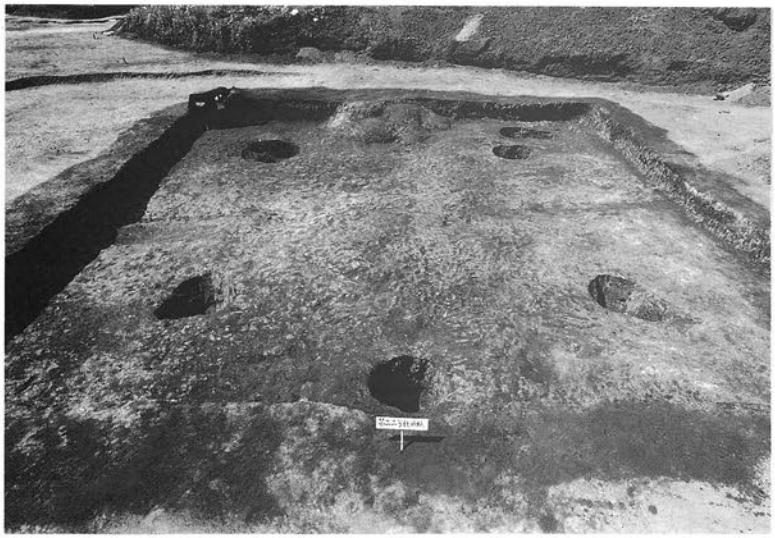


第二一号住居址遺物出土状態

第二一号住居址全景



第二二号住居址遺物出土状態



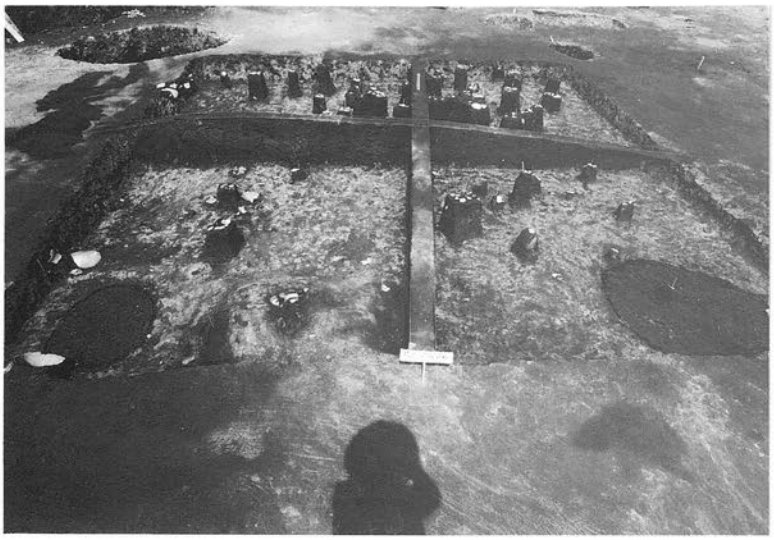
第二二号住居址全景

第二二号住居址第二号カマド
遺物出土状態

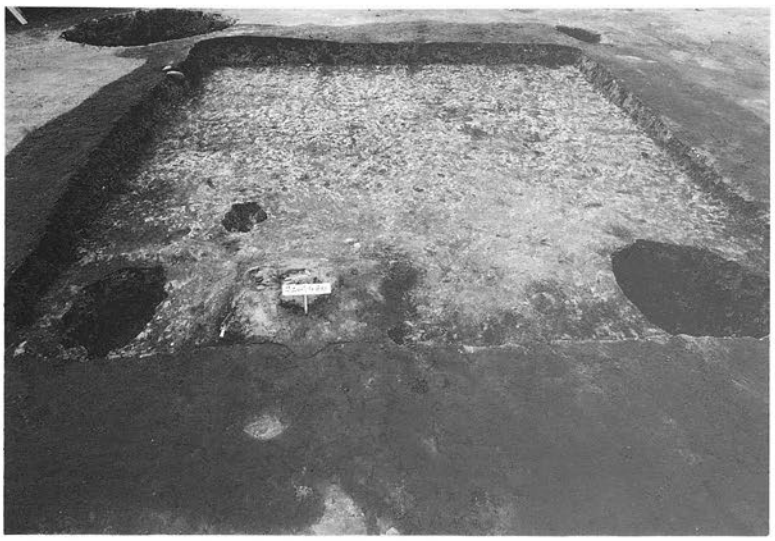
第二二号住居址第一号カマド
断面層序

第二三号住居址遺物出土状態

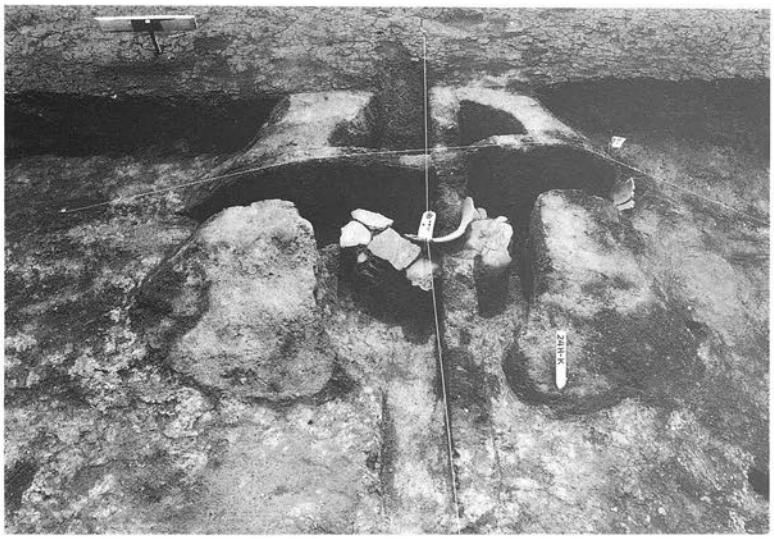
第二三号住居址全景



第二四号住居址遺物出土状態

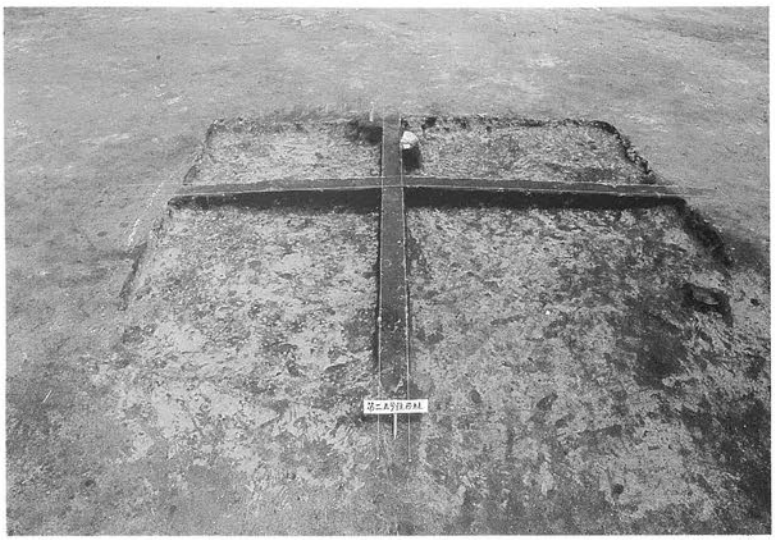


第二四号住居址全景



第二四号住居址カマド遺物出土状態

図 版 第 二一



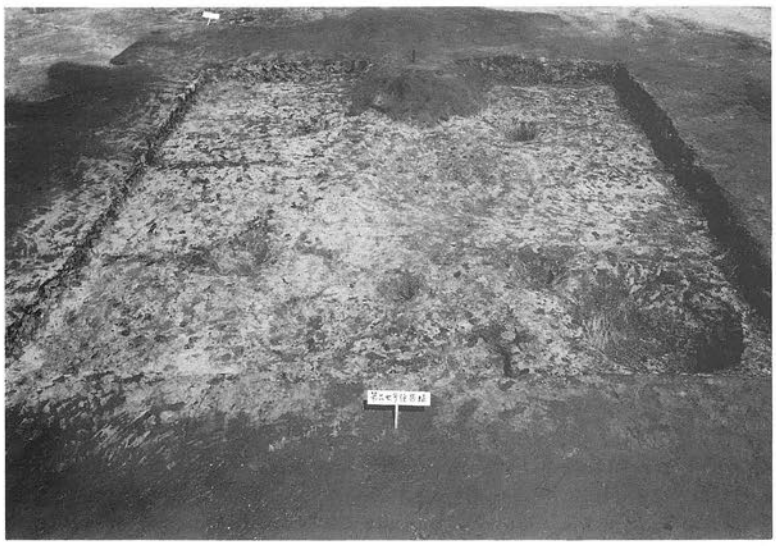
第二五号住居址遺物出土状態

第二五号住居址全景

第二六号住居址遺物出土状態

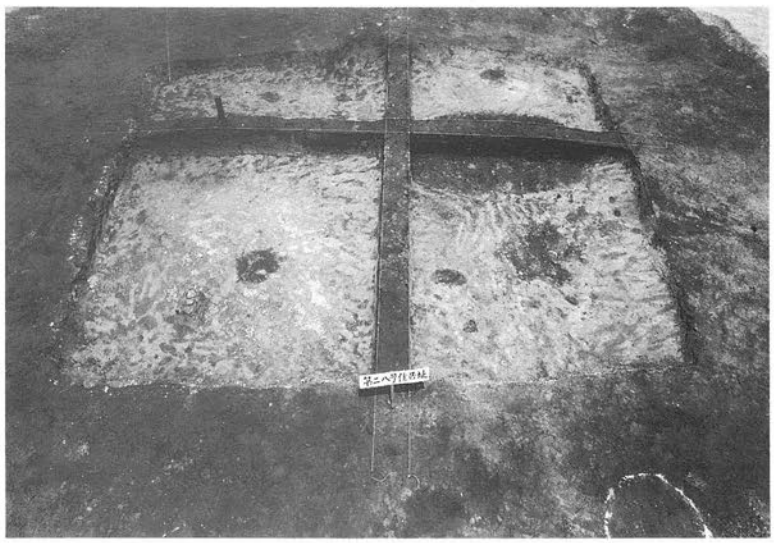
第二六号住居址全景

第二七号住居址遺物出土状態

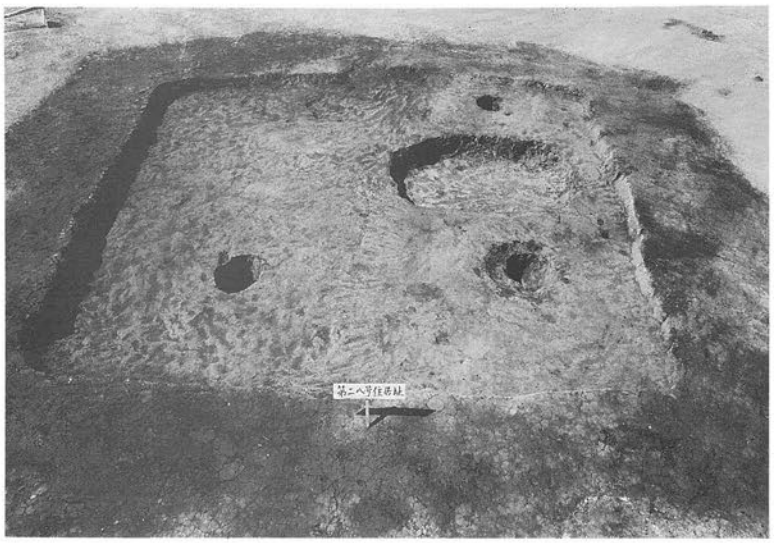


第二七号住居址全景

第二七号住居址出土遺物

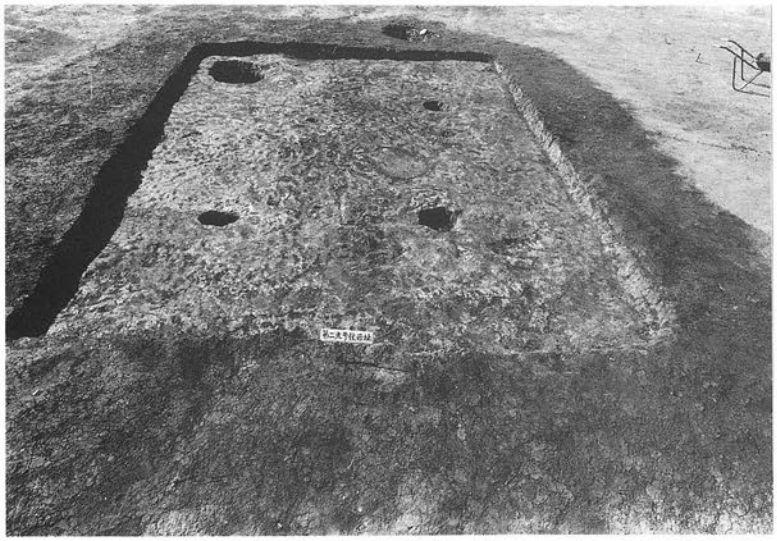


第二八号住居址遺物出土状態

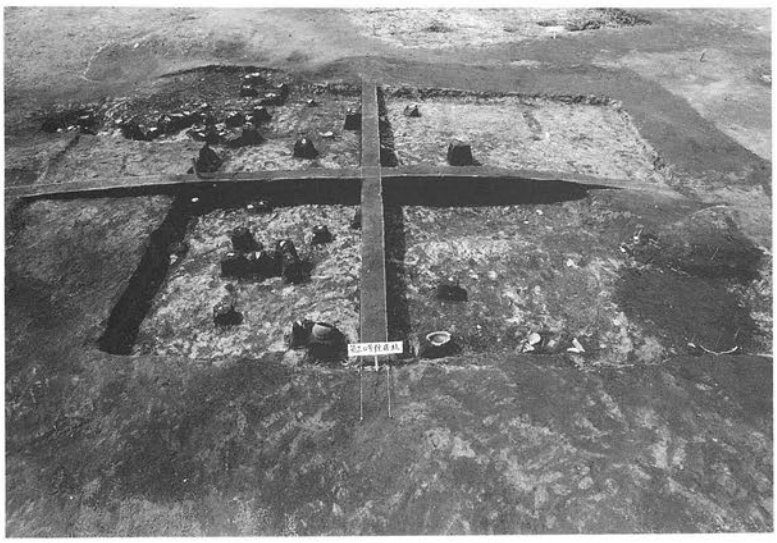


第二八号住居址全景

第二九号住居址遺物出土状態

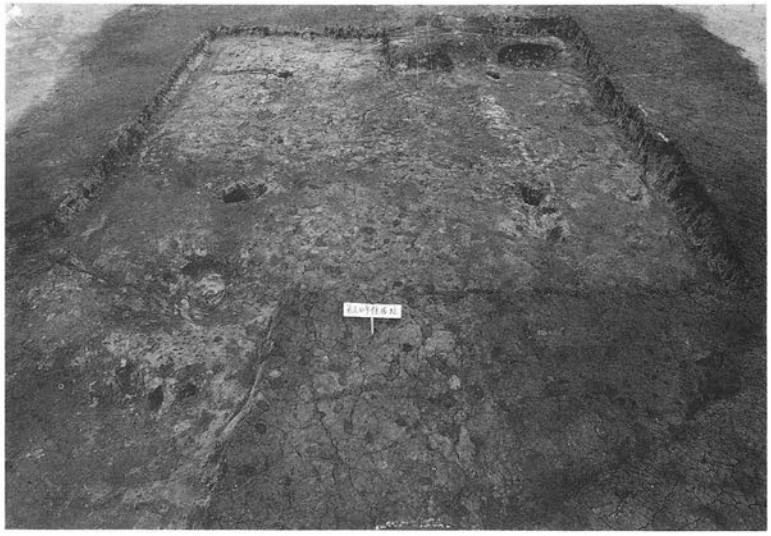


第二九号住居址全景



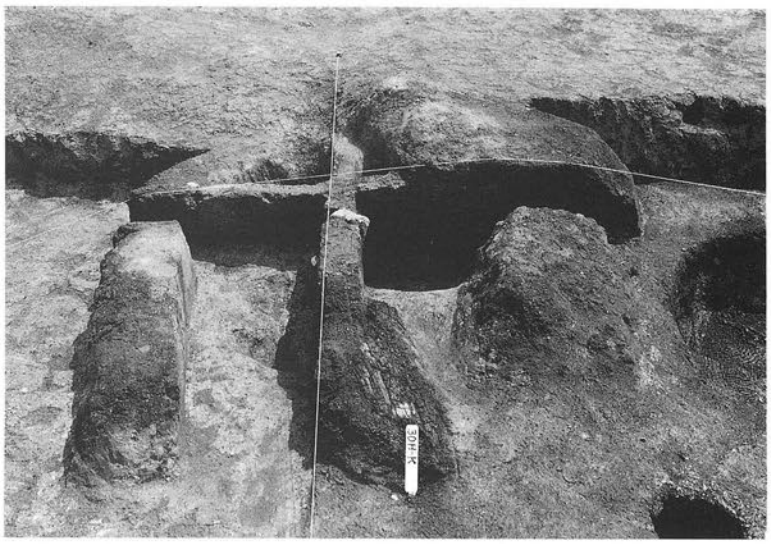
第三〇号住居址遺物出土状態

図 版 第 二五



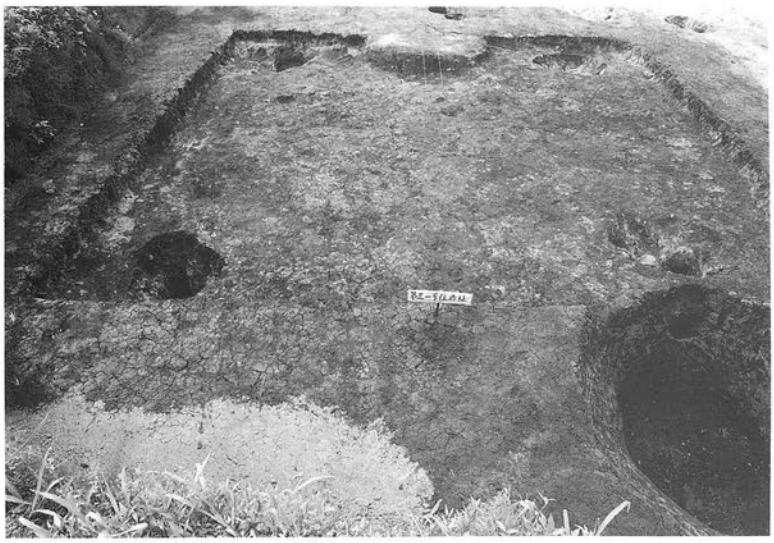
第三〇号住居址全景

第三〇号住居址出土遺物

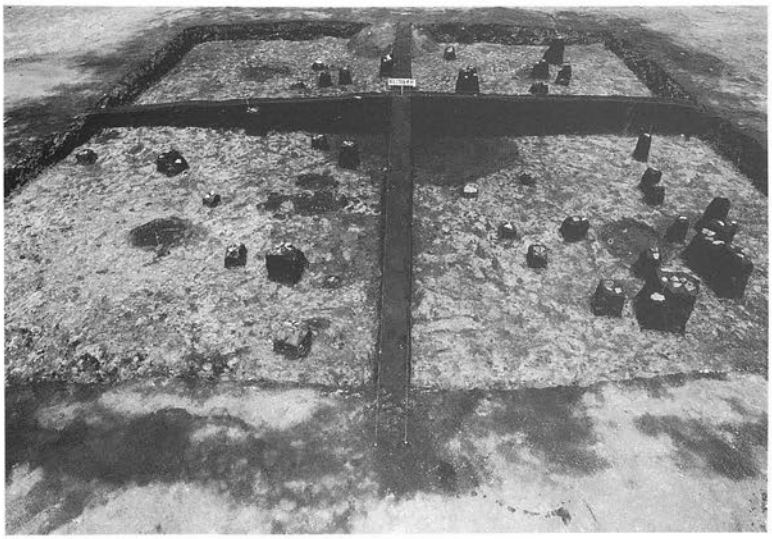


第三〇号住居址カマド遺物出土状態

第三一号住居址遺物出土状態

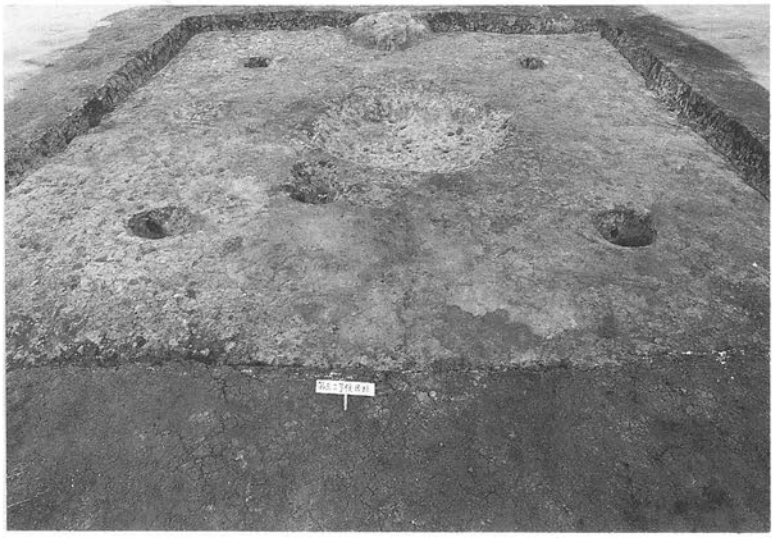


第三一号住居址全景

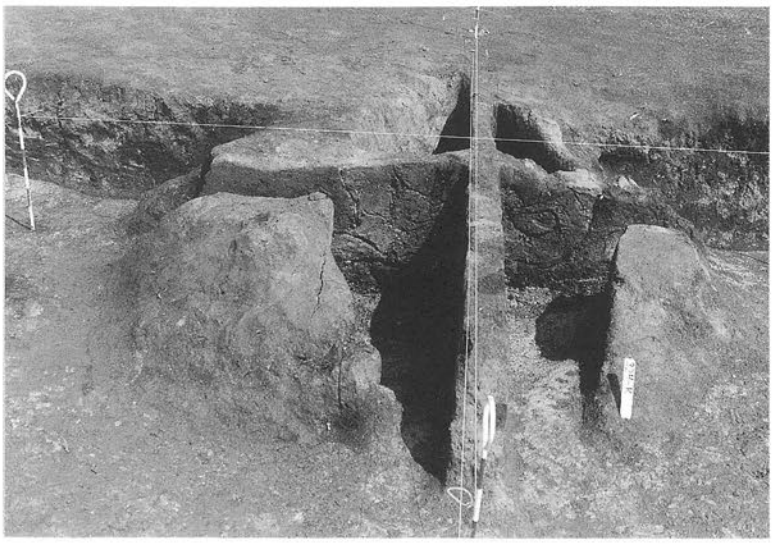


第三二号住居址遺物出土状態

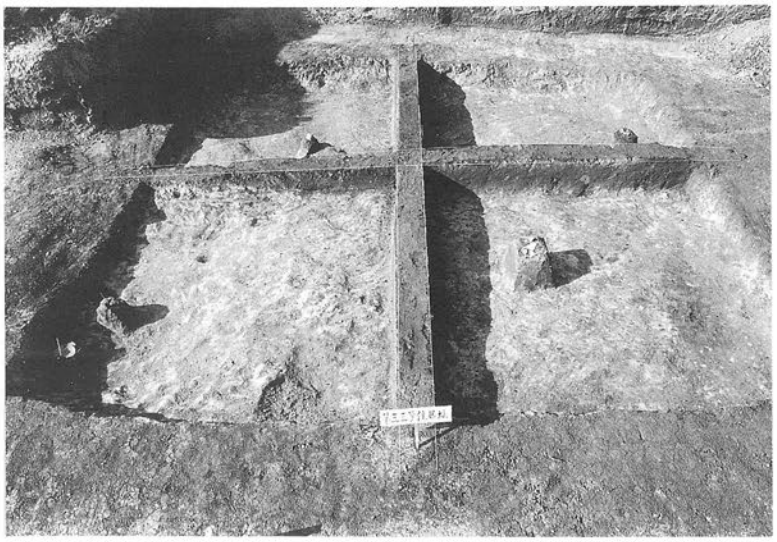
図 版 第 二七



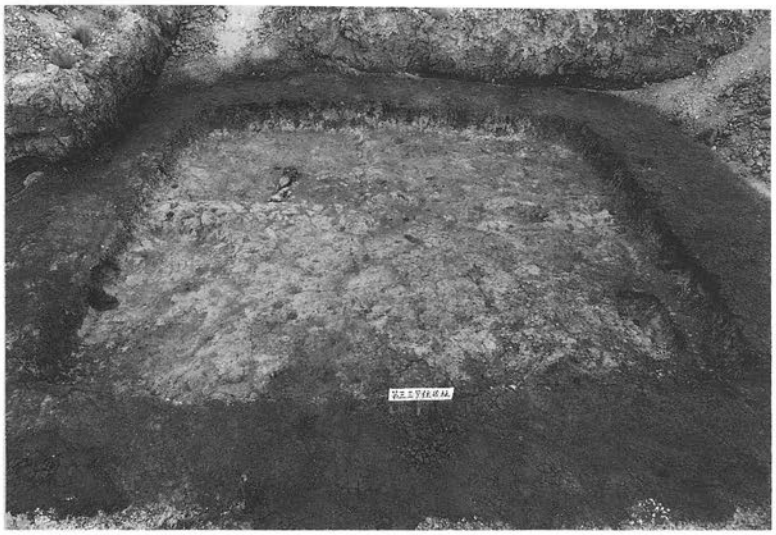
第三二号住居址全景



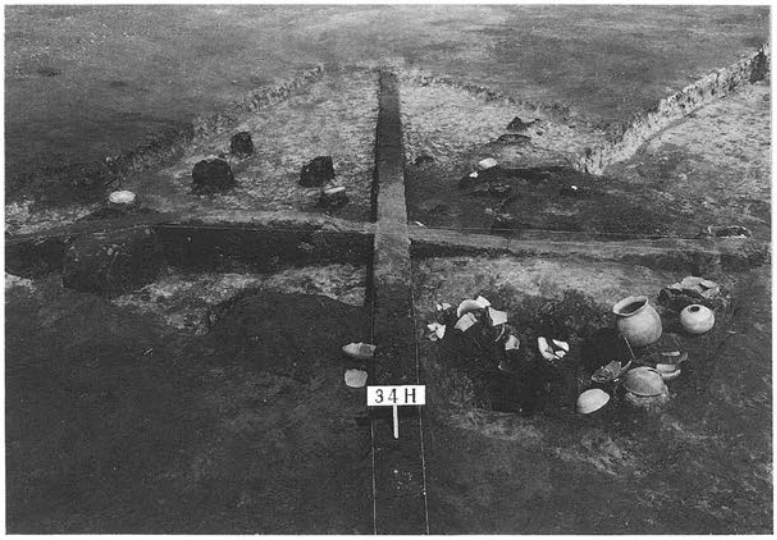
第三二号住居址カマド断面



第三三号住居址遺物出土状態



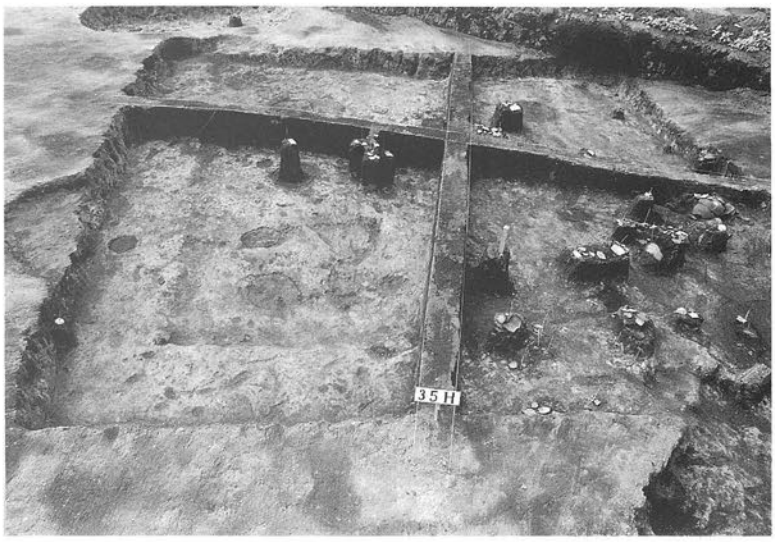
第三三号住居址全景



第三四号住居址遺物出土状態

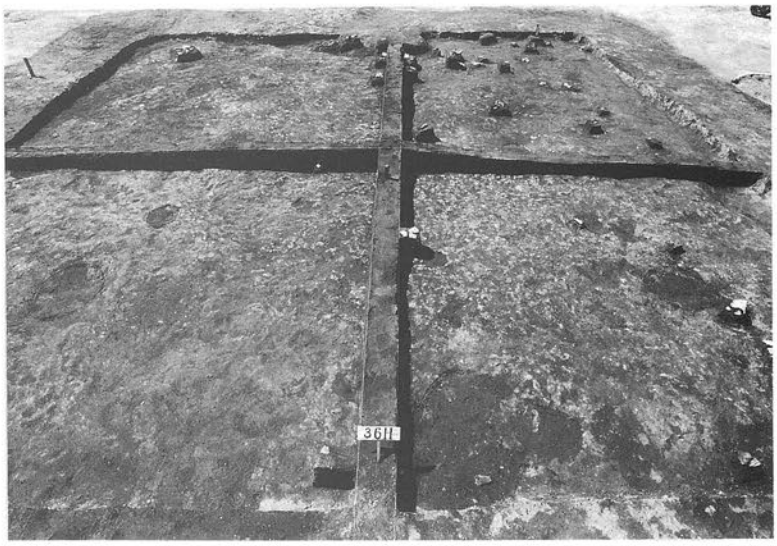
第三四号住居址出土遺物

図 版 第 二九



第三五号住居址遺物出土状態

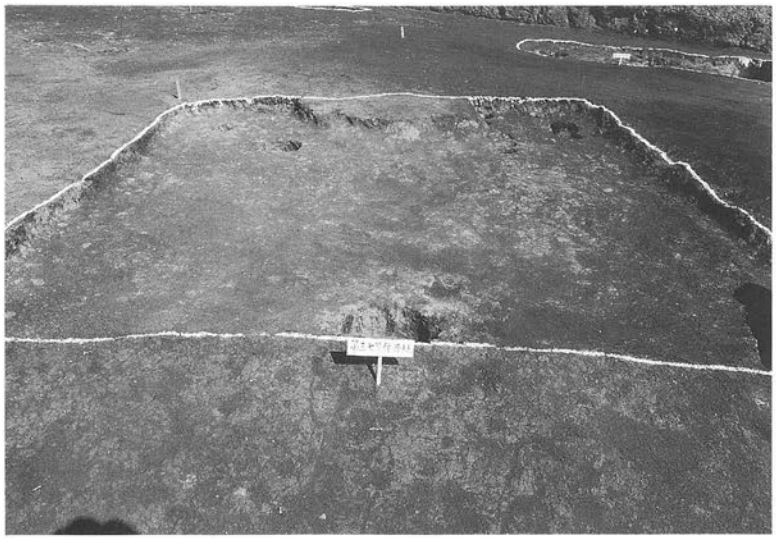
第三五号住居址全景



第三六号住居址遺物出土状態

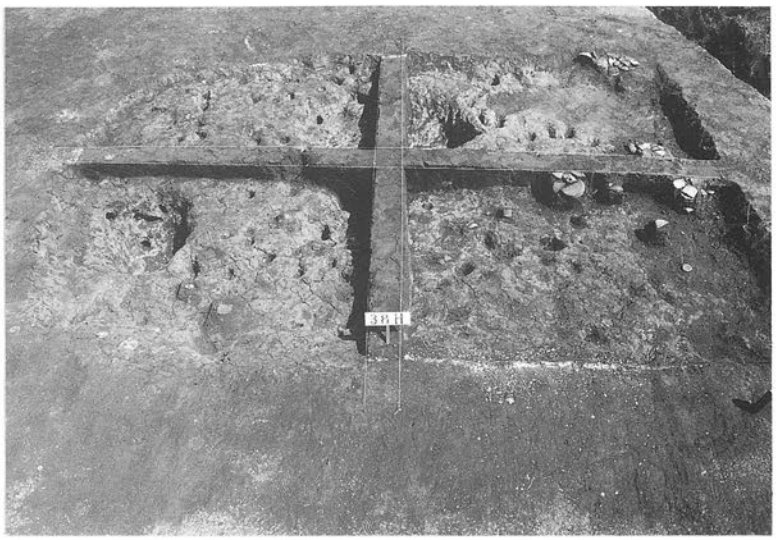
第三六号住居址全景

第三七号住居址遺物出土状態

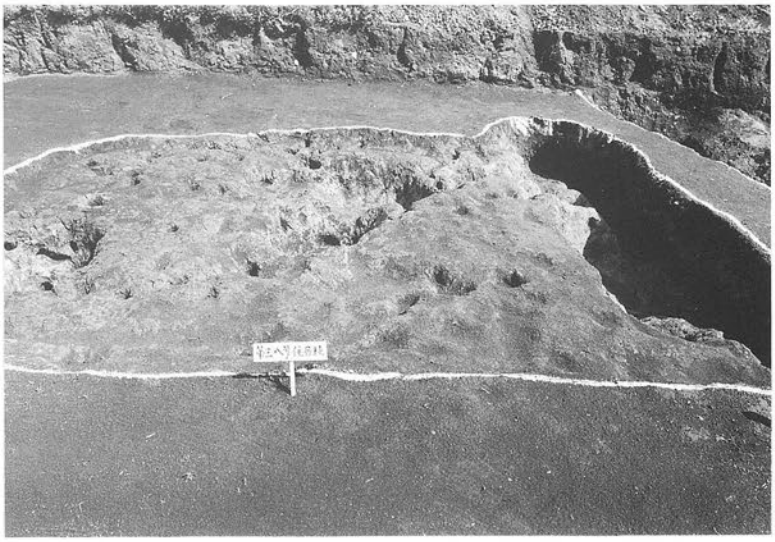


第三七号住居址全景

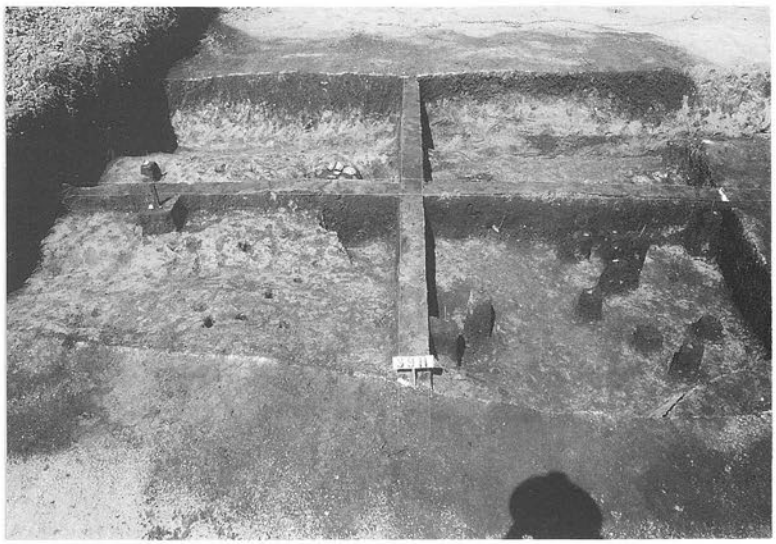
図 版 第 三一



第三八号住居址遺物出土状態

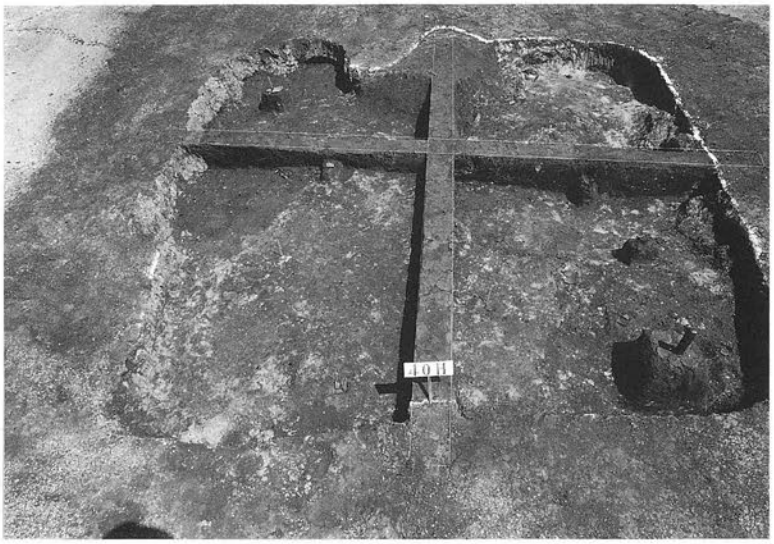


第三八号住居址全景

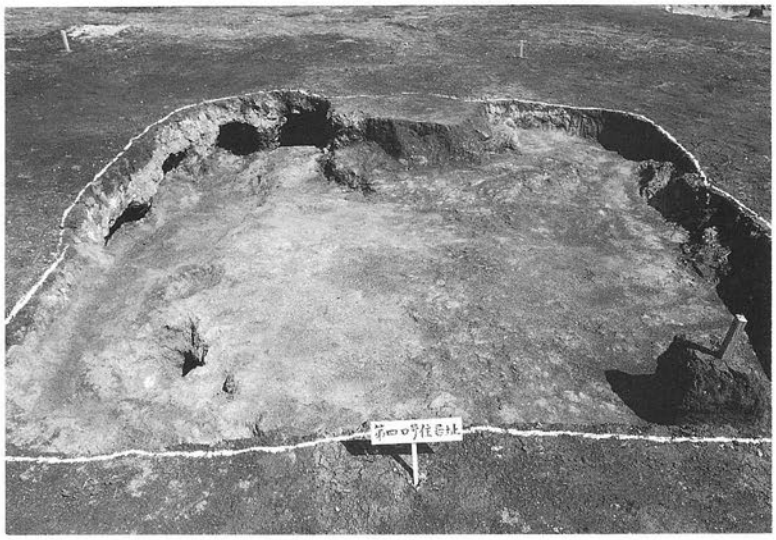


第三九号住居址遺物出土状態

第三九号住居址全景



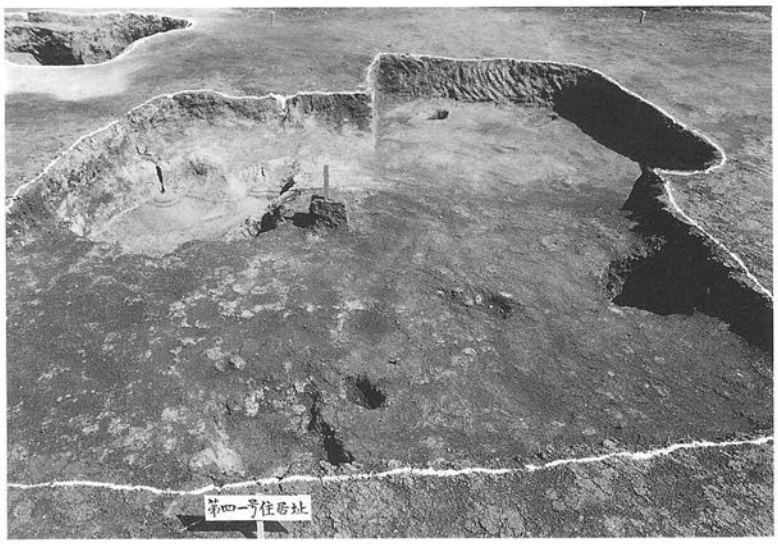
第四〇号住居址遺物出土状態



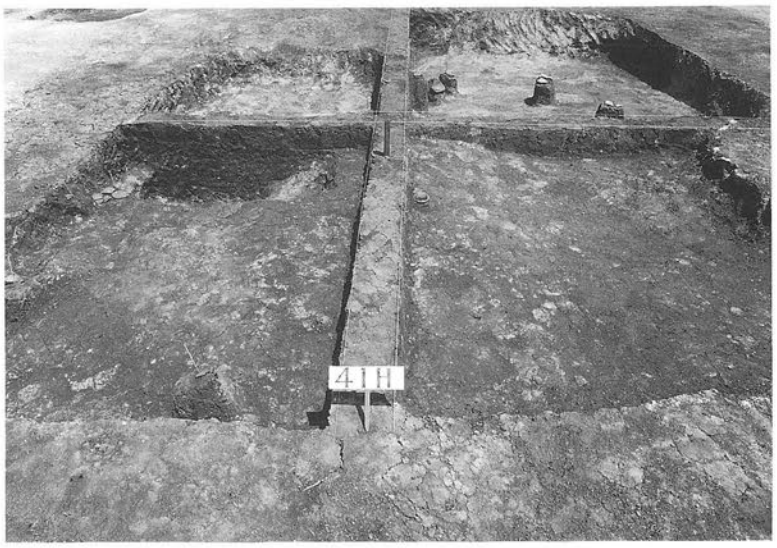
第四〇号住居址全景

図 版 第 三三

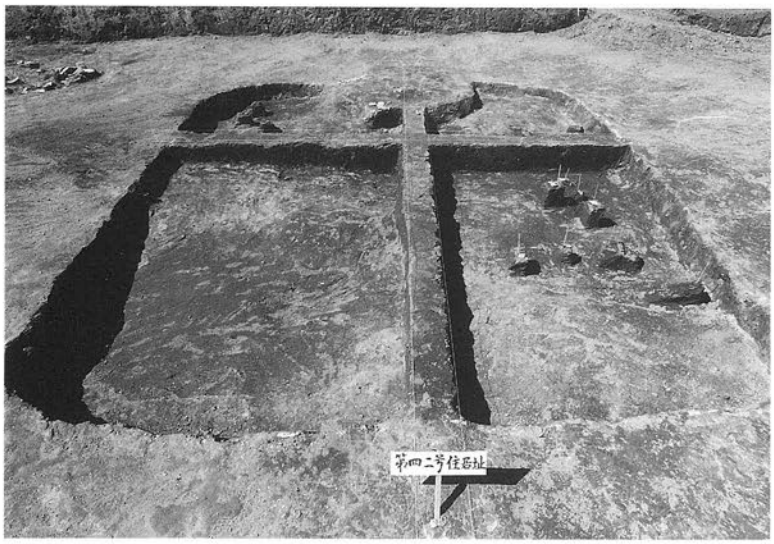
第四〇号住居址カマド遺物出土状態



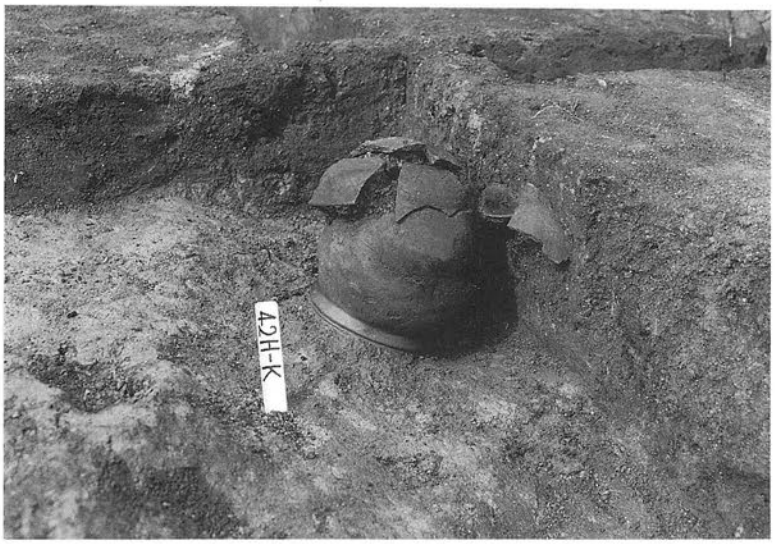
第四一号住居址全景



第四一号住居址遺物出土状態



第四二号住居址遺物出土状態



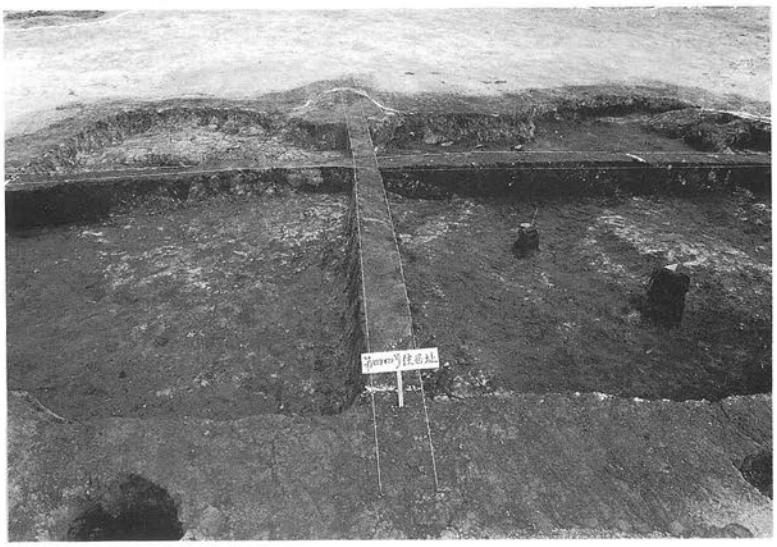
第四二号住居址カマド遺物出土状態

第四三号住居址遺物出土状態

図 版 第 三五

第四三号住居址全景

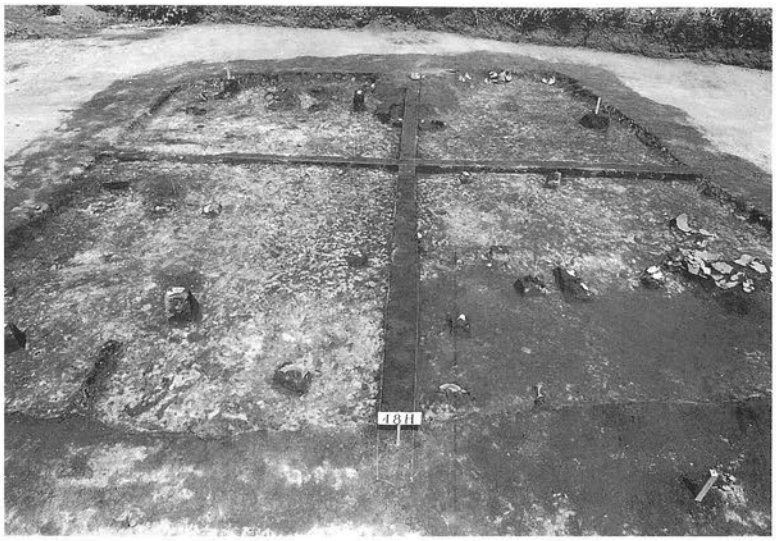
第四三号住居址カマド断面



第四四号住居址遺物出土状態

第四五号住居址遺物出土状態

第四六号(左)，第四七号(右)住居址全景



第四八号住居址遺物出土状態

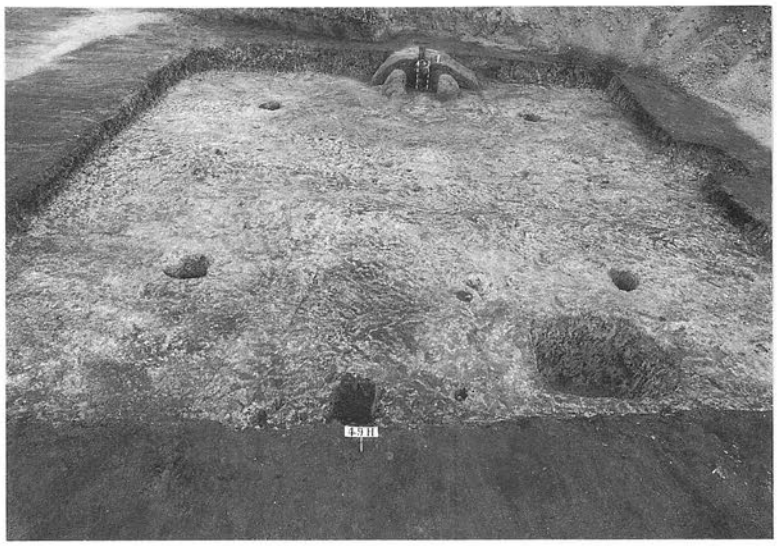
図 版 第 三七

第四八号住居址全景

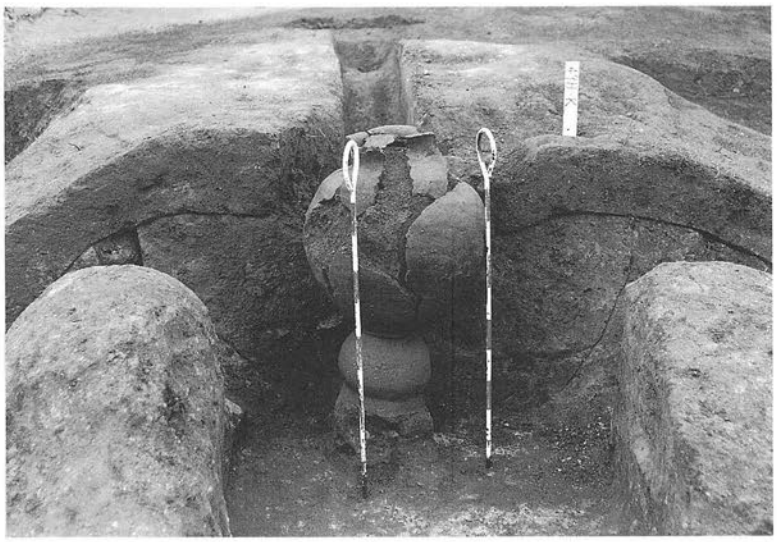
第四八号住居址出土遺物

第四八号住居址カマド遺物出土状態

第四九号住居址遺物出土状態



第四九号住居址全景



第四九号住居址　支脚転用カマド
遺物出土状態

図 版 第 三九

第四九号住居址カマド被熱袖部の状況

第五〇号住居址遺物出土状態

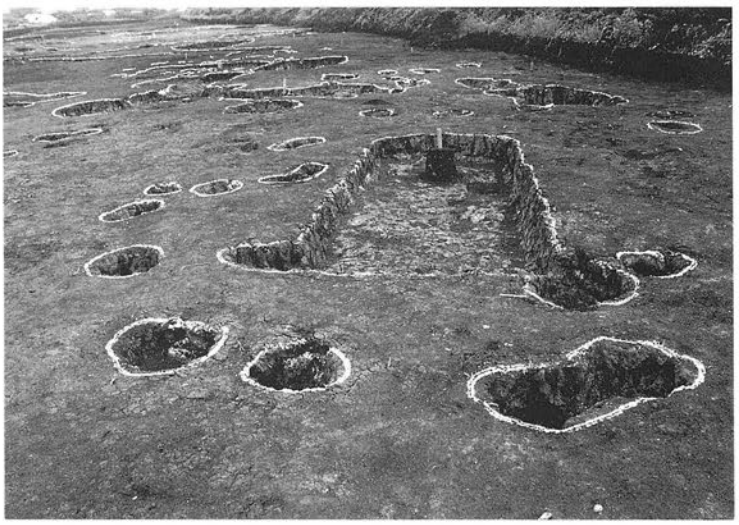
第五〇号住居址全景

第五〇号住居址附属土壙遺物出土状態

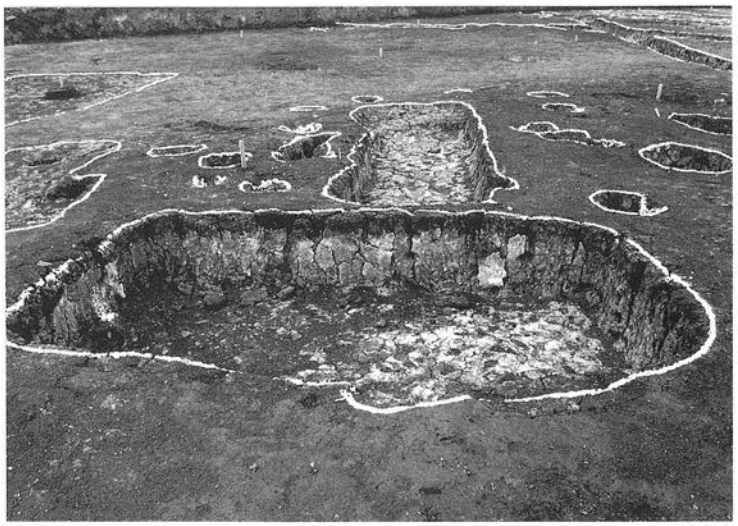
第五〇号住居址出土遺物

第五〇号住居址全景

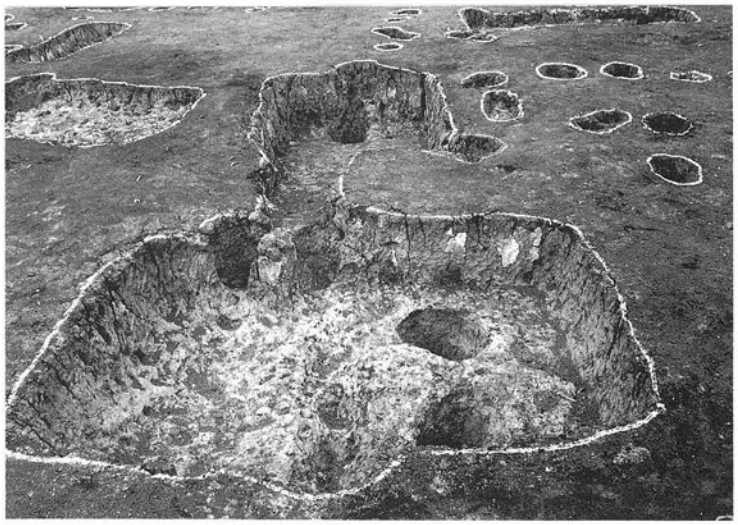
図版第四一



第四一号竪穴状遺構全景



第四六号竪穴状遺構全景



第四〇号竪穴状遺構全景

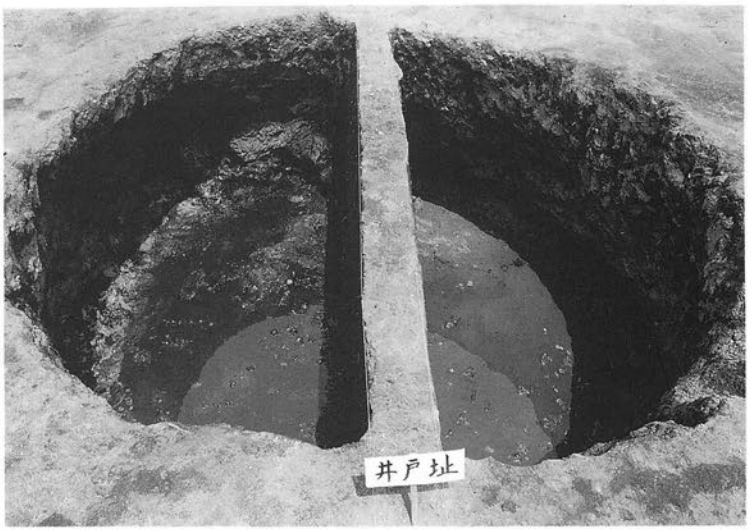
第一号地下式殯穹壙全景

第二号地下式殯穹壙全景

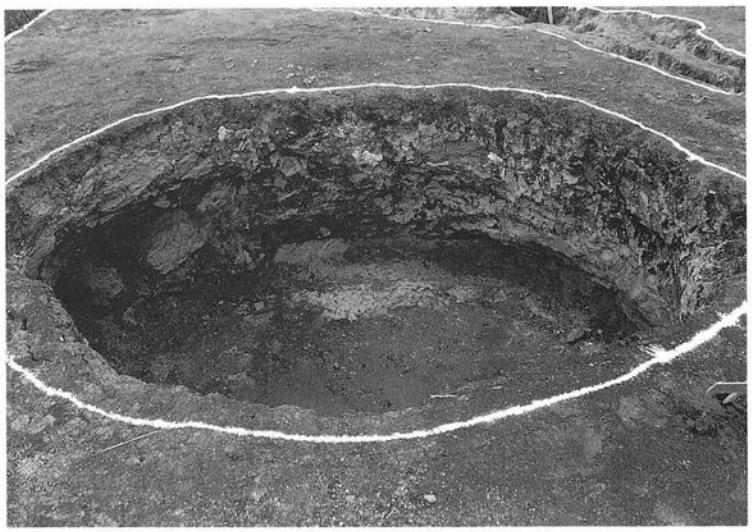
第四号地下式殯穹壙全景

図 版 第 四三

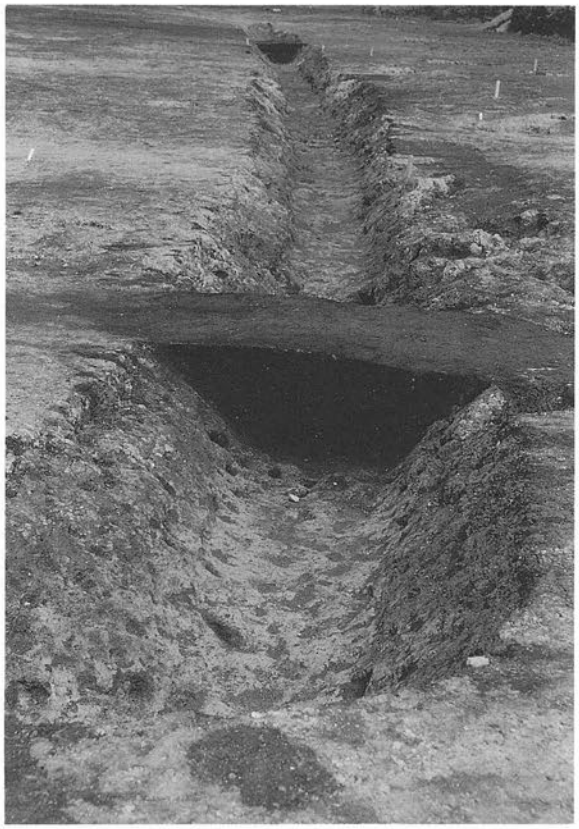
第一号井戸址全景



第五号井戸址全景



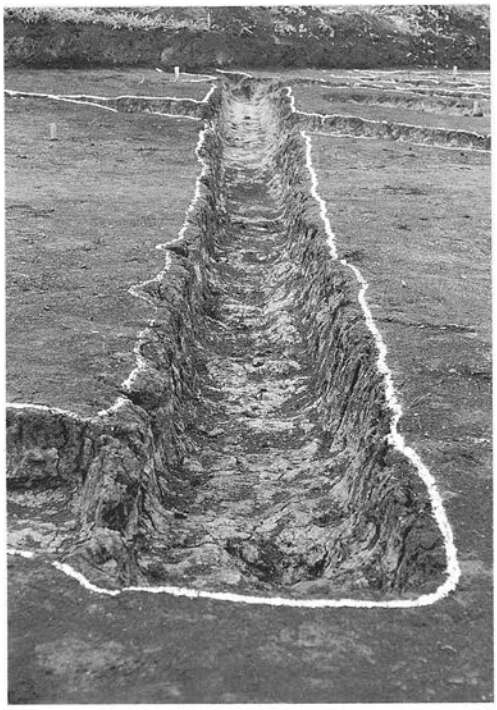
第一〇号井戸址全景



第一号溝状遺構

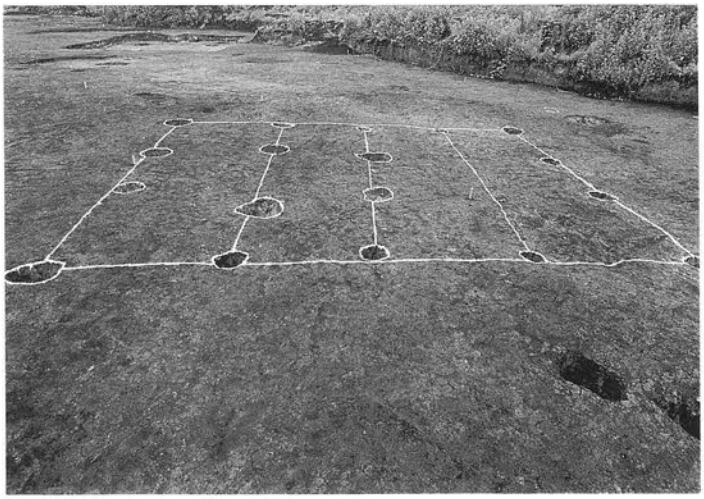
第三号溝状遺構

図 版 第 四五



第七号溝状遺構

第一〇号溝状遺構



第一号掘立柱建物遺構全景

調査風景（第一号住居址）

調査風景（第七号住居址）

調査風景（第二調査区）

図 版 第 四七

町長・議会議員・教育長一行現場見学
（第一〇号住居址）

現地説明会風景(一)

現地説明会風景(二)

1 H

8 H

6 H

1 H

6 H

6 H

7 H

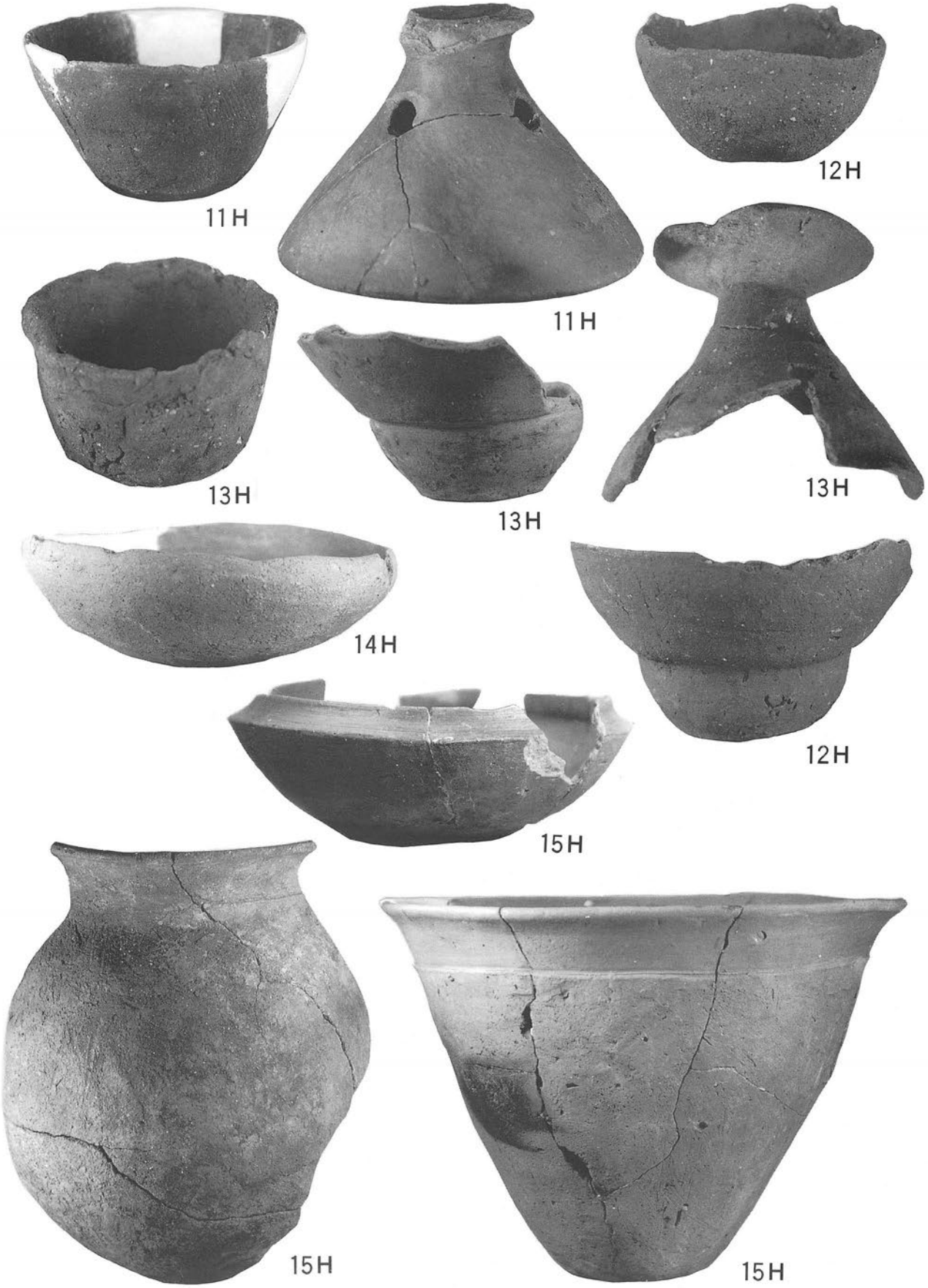
7 H

6 H

第一号～第八号住居址出土遺物

図 版 第 四九

第一〇号住居址出土遺物

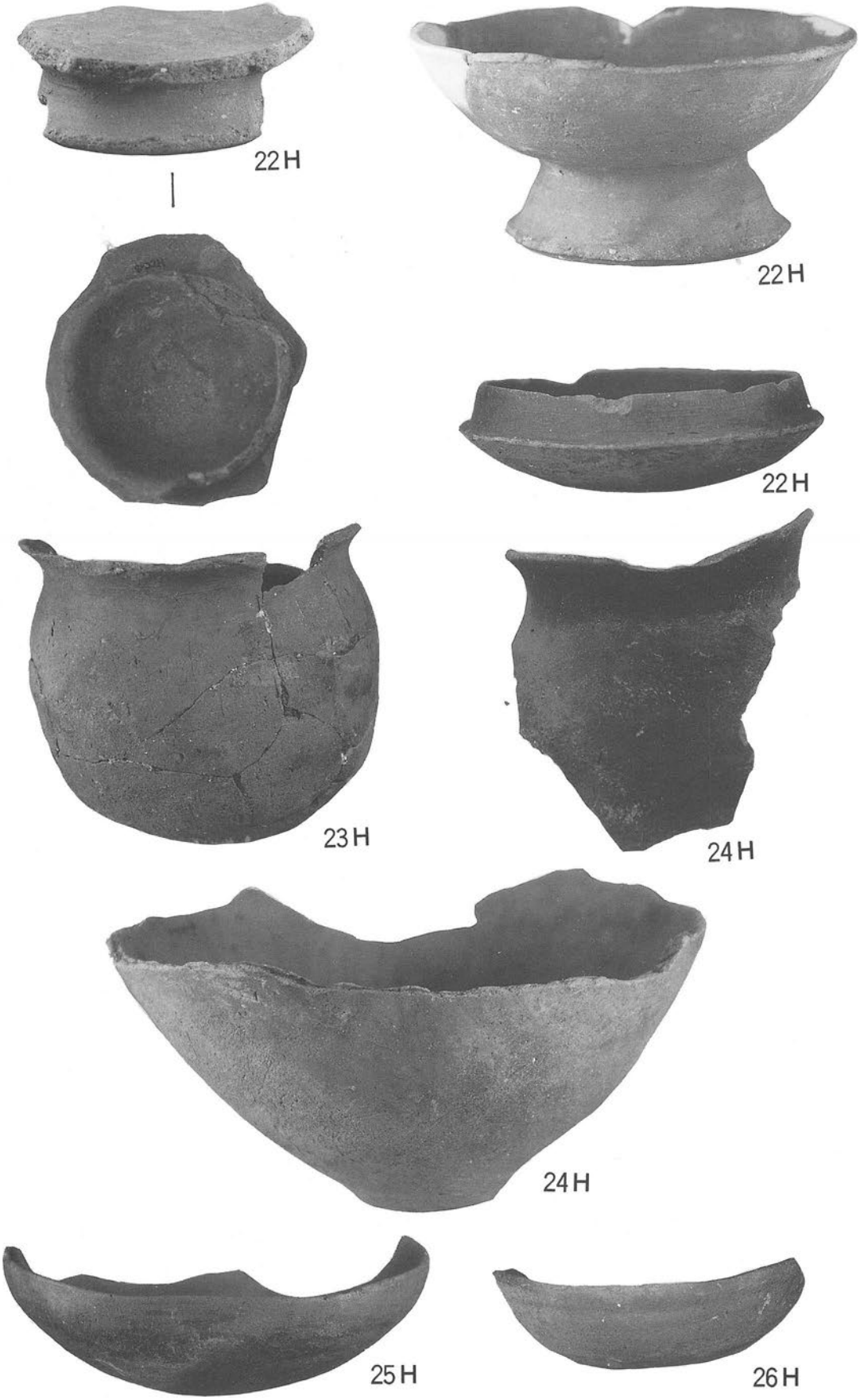


第一一号～第一五号住居址出土遺物

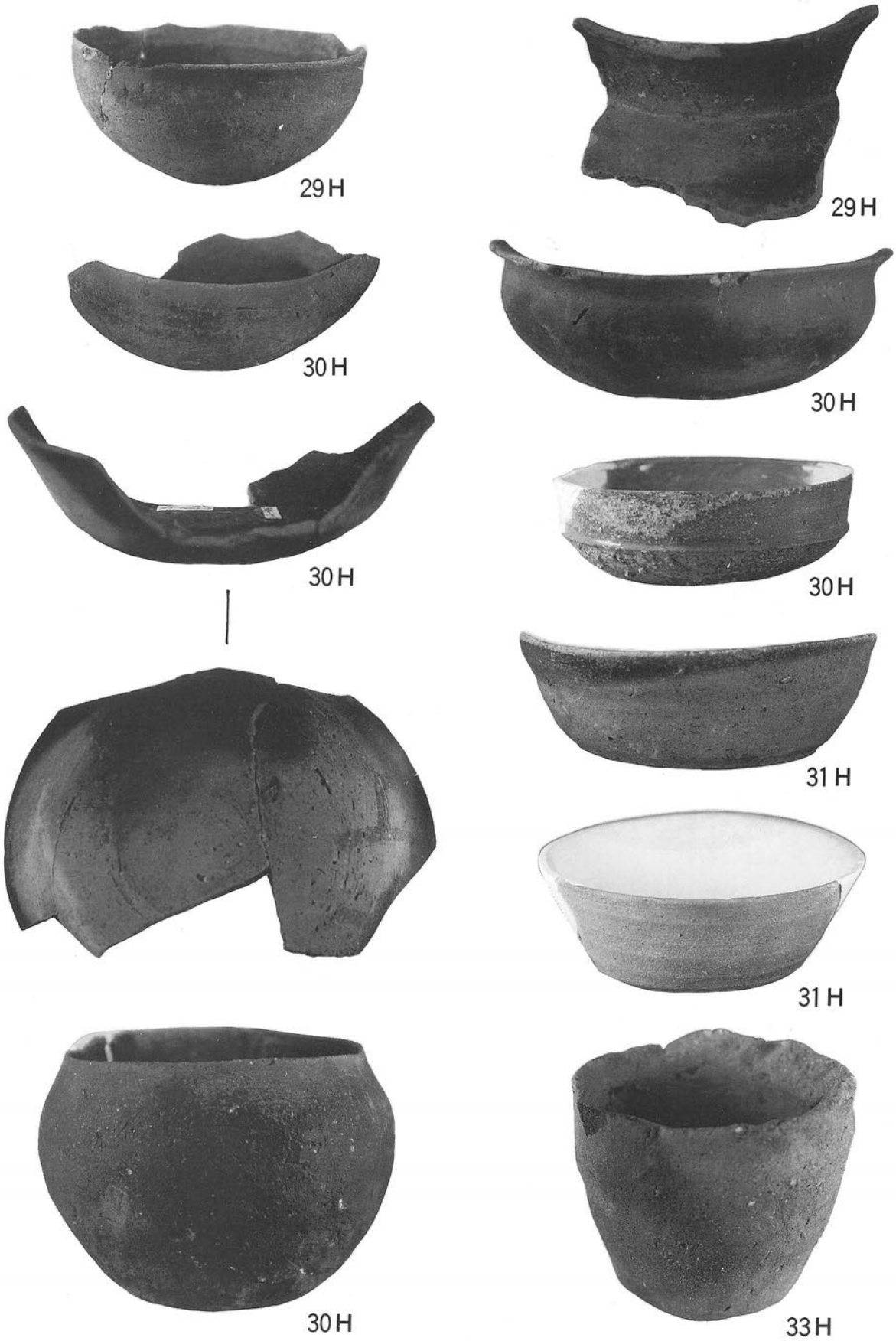
第一六号～第二〇住居址出土遺物

第二〇号住居址出土遺物

図 版 第 五三

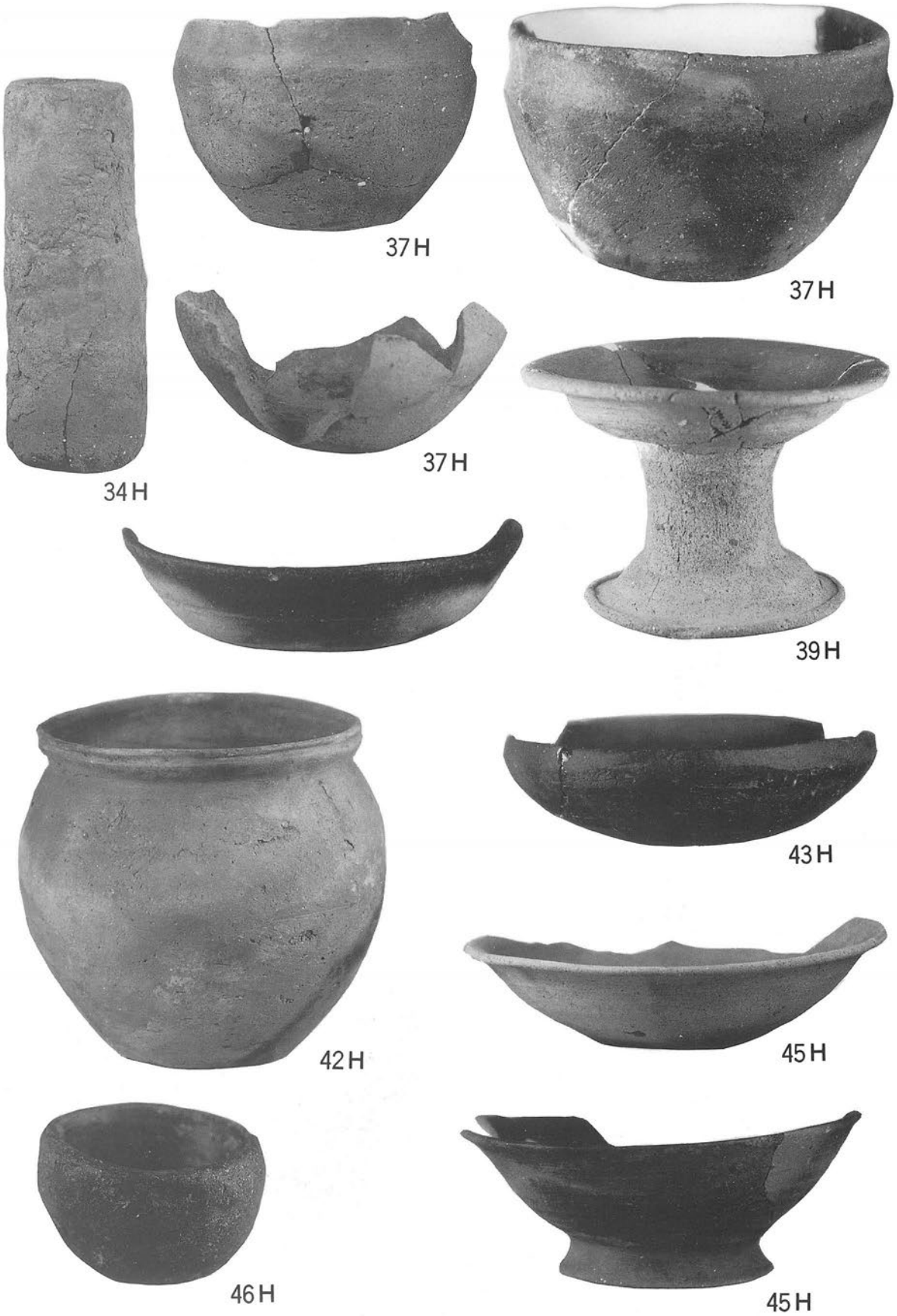


第二二号～第二六号住居址出土遺物



第二九号～第三三号住居址出土遺物

第三四号住居址出土遺物



第三六号～第四六号住居址出土遺物

第四八号住居址出土遺物

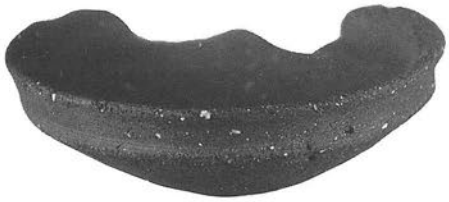
49H

49H

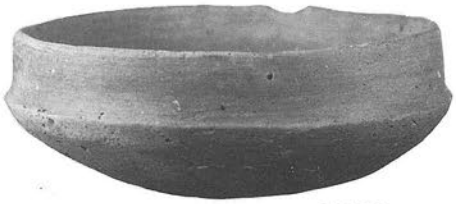
49H

49H

49H



50H



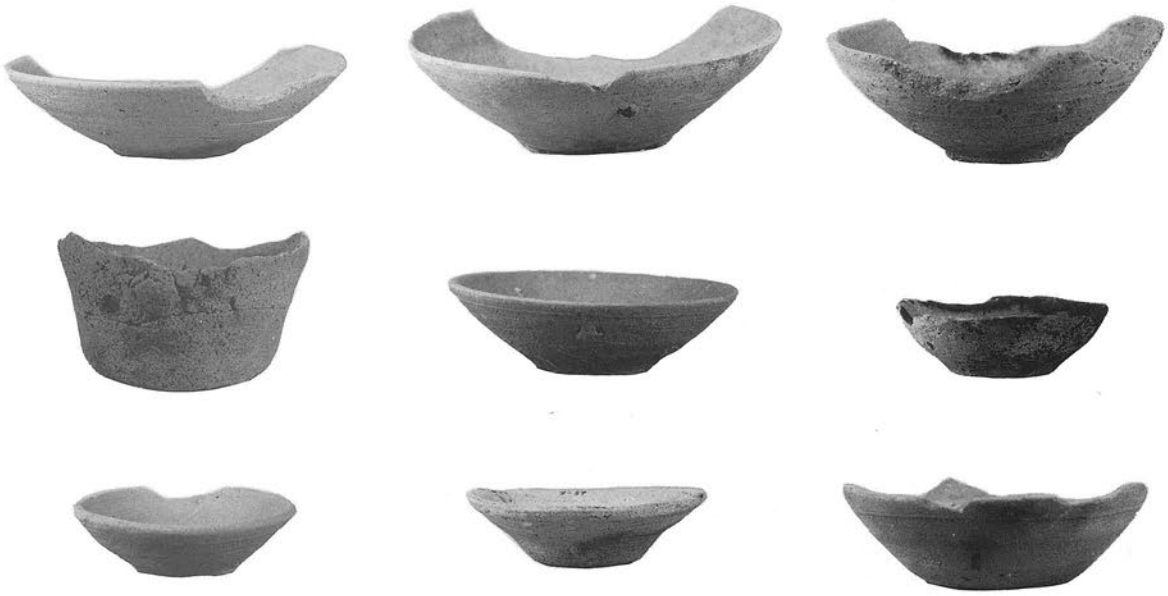
50H

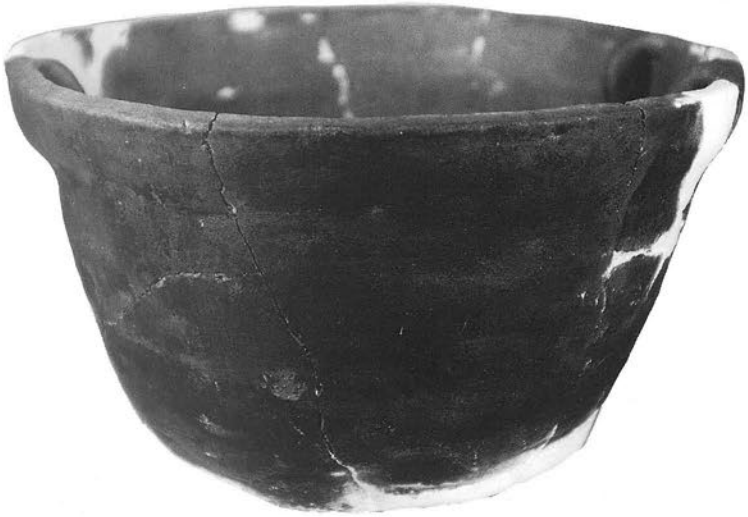
50H

50H

第四九号～第五〇号住居址出土遺物

第五〇号住居址出土遺物

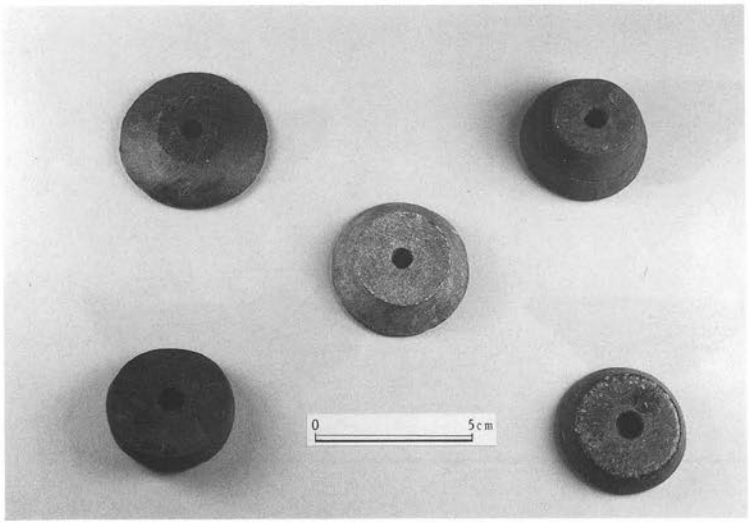




竪穴状遺構(上段)，溝状遺構(中段)，第一号井戸址(下段)出土遺物

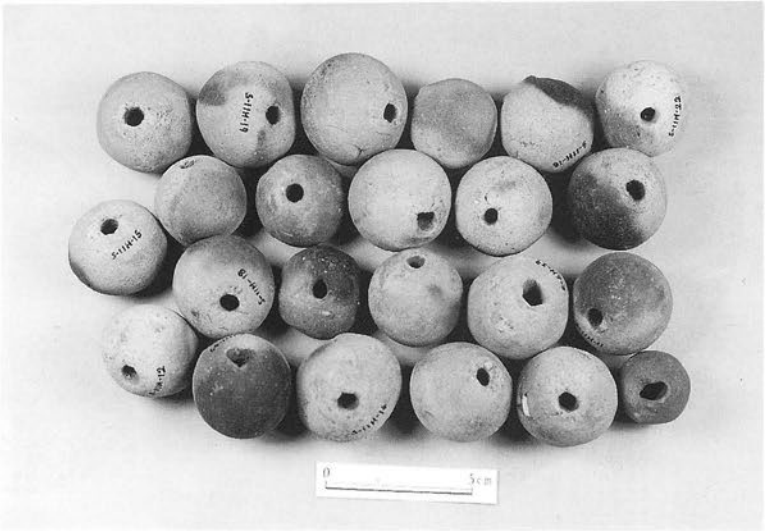
図 版 第 六一

石器，石製模造品
（石鏃・剣形品・有孔円板・勾玉）

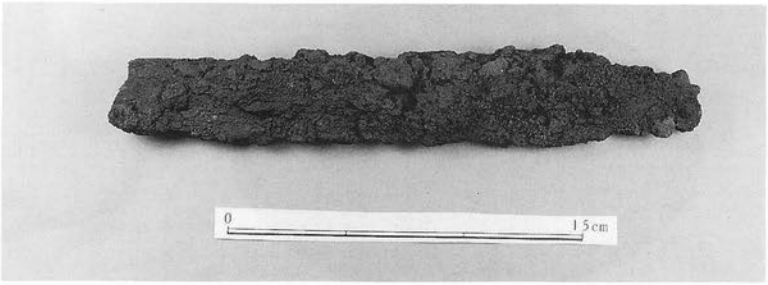


石製紡錘車

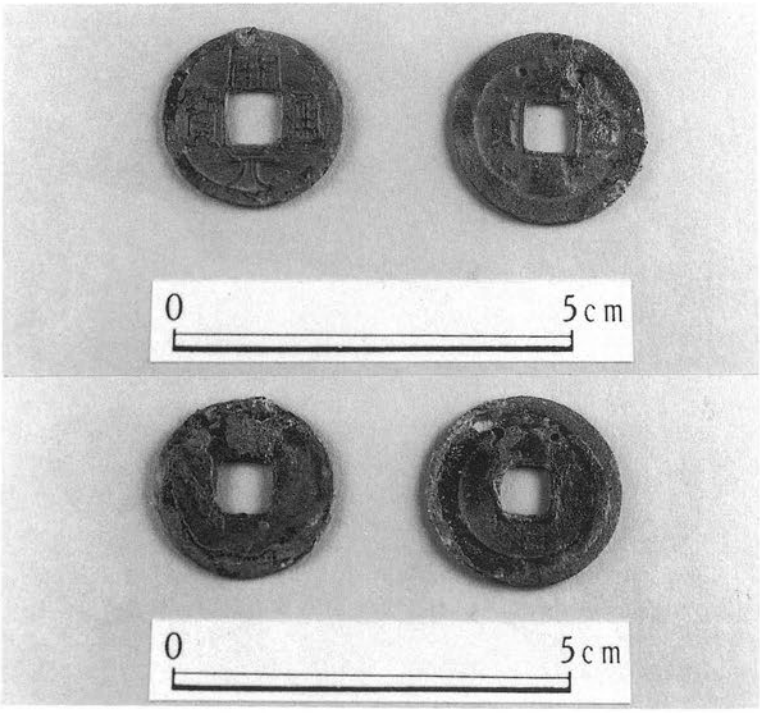
砥石



第一一号住居址出土遺物(球状土錘)



鉄製品(刀剣欠損品)



古銭(開元通宝・祥符通宝)

図 版 第六三

遺構外出土遺物

島屋敷遺跡

平成10年6月

編　集　　千　種　重　樹

発　行　　島屋敷遺跡発掘調査会

印　刷　　石崎印刷株式会社